
花束と笑顔を皇子達に。

はついで

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花束と笑顔を皇子達に。

【Nコード】

N1218Q

【作者名】

はついで

【あらすじ】

唐突で済まないが、ある朝、オレは結論に至った。

【この国を滅ぼそう。】
理由？ 方法？

まあ、そんな事は追々話したり、考えるとしてだ。
とりあえず、朝食でも摂ろうと思う。

2011年 9月 30日にて完結。

本当に、本当に、ありがとうございます。

皆様の感想・リクエスト等、何時でもお待ちしております。

尚、ベタ・厨路線から絶対に外れないが目標の作品ですので、ご都合主義等々

用量・用法を正しく守ってお読みください。

#更新情報等は全て活動報告をご覧下さい。#

朝とオレとメイドさん (序) (前書き)

あらすじ参照です。

作者、打たれ弱いです。

朝とオレとメイドさん。(序)

- 朝 -

何時もの退屈な朝だった。

どれくらい退屈なのか？

と、問われたら、そうりゃもう何もかも。

こんな日々は、今に始まったものじゃないのだけれど……。

ここに至るまでは、本当、紆余曲折あったのだ。

……いや、そこまでではないか。

まあ、それは追々話すとして。

至った結論は2つ。

・第？案：自分の国を滅ぼそう。

・第？案：諸国を旅して国を滅ぼそう。

……。

……まあ、深く突っ込むな。

そういうのも追々話すから。

「アルム様、朝食のお時間でございます。」

ベットから起き上がったオレを呼ぶメイドさん。

「ありがとう、ミラ。」

濃い赤髪ショートカットに金の瞳、ミランダはオレの乳母姉弟だ。

彼女の母がオレの乳母だった。

その縁で、彼女はそのままオレ担当のメイドになった。

「いえ、私はアルム皇子に仕えるのが仕事です。」

恭しく礼をするミランダ。

彼女は昔から生真面目だった。

無駄にオレを第一に考えようとする。

この国では、数少ない思想の持ち主だが、昔からずっと一緒に育ったオレとしては、正直寂しい。

ああ、皇子というのは、オレはこの国、ヴァンハイト皇国の第二皇子というコトで・・・

一応、名前は【アルム・デイス・ヴァンハイト】という事になっている。

ちよっと周りくどかったな。

この名前は、本人的には余り好きではないんだ。

だって父である国皇が決め、国が決めた名前なんだぜ？

【アルム】は国皇、【デイス】は皇子の冠名で男って意味。んで、【ヴァンハイト】は国名と。

一応って言った意味は、他にオレ自身が自分につけた名前があるからだ。

その名も【アルム・トウマ・デイス・ディーン】という。

国名もなく、何でこんなにややこしいかというのは、さっきの案に密接に関係してなくもない。

「ミラ、何時か一緒にご飯食べような。」

着替えを終えて部屋を出ようとしたオレは、姉としての親称で彼女の名前を呼んだ。

彼女の名を呼んで、彼女の頬にくちづけをした。

やっぱり、オレの中では彼女は大切な姉で家族だから。

そして、そのまま彼女の返事も表情も見ずにオレは部屋の外に出た。

イイオトコと祖国と神器。(前書き)

設定・説明が多いのはご勘弁下さい。

イイオトコと祖国と神器。

少し、この国の説明をしよう。

この国の起源は古い。

それ程に強大な国ではないが、その歴史の古さと歴代の皇王の善政のせいか、

貴族や臣民の信頼に厚く、その強固さ故か、大国と言われる国にも負けない力を有している。

あれだね、民は宝だね、ホント。

で、起源はというと、大戦の英雄の一人が建てた国とされている。わかり易い。

ちなみに国土の半分以上が森と山に囲まれている。

皇城は山側を背にして川沿いに位置し、森の産物と山の鉱物資源を川で輸送するせいか、

街も大抵川沿いになるのだ。

話が逸れた。

大戦の英雄ってというのは・・・あー、まあ、歴史は苦手なんだが、世界に次元の穴が空くという、まあ、そんな大騒動を起こした輩達をやっつけた戦士達を意味する。

何処までが本当かどうかっつーのは、ぶっちゃけ建国の歴史なんて何処もそんなもんだろ？

勿論、他にも同じように英雄達が建てた国やその流れを組む国もある。

それ以外の国もある。

今じゃ新興国や種族単一国家みたいなものもある。

獣人とかエルフとかの国とかね。

「アル、眠そうだな？」

「シグルド兄さん。いや、眠いってワケじゃないよ。これは第二皇子の余裕ってヤツ？」

無気力に食堂まで歩いてきたオレに声をかけてきたのは、兄のシグルドだ。

我が国の第一皇子様。

金髪蒼眼の麗しいお兄様様。

絵本物語から飛び出してきたと言われても、信じてしまうような美しさだ。

「そうか・・・私が死んだら、アルも忙しくなるんだがな。」

「ご冗談を。まだまだ父上も元気だし。それに英雄の再来と言われた兄上様に誰が危害を加えられると？」

この兄上、外見だけでなく全てにおいて完璧超人。

全国民・貴族で人気投票したら、シグルド皇子>母上(皇妃)>父上(国皇)>>>超えられない壁>>>オレ。

確定。

実際、オレの中の評価もそんな感じだから、反論は全くナイ。

寧ろ、これ以外の結果・評価が国民・貴族から出たら、誰かの作為か投票者がアホのどちらかだと思う。

「うーん、英雄の再来か・・・実感ないんだがなあ・・・。」

涼しげな顔で微笑む。

オレが女だったら、きつとこれだけで墮ちるな。

兄上のこの発言は、オレを前にしているからに他ならない。

何というか、兄上は兄上で気イ遣いなんだよね。

「実感はあるでしょうか。」

オレは兄上の腰元に下げられている剣を指さしてやった。

皇城内での帯剣は、原則許されてはいない。

警備の兵士は仕方がないけれど、物騒なモノを持ち込まれて刃傷沙汰でも起こされたら困る。

じゃあ、何故兄上は？

例外の理由は、その剣が特別だからだ。

その前に説明すると、この国の基本剣術は双剣だ。

特に皇族は。

理由は、建国の祖。

例の英雄が、双剣使いだっただからだ。

古く閉鎖的な国のせいか、そういう所だけは厳格だ。

で、我が兄上が腰にブラ下げている剣、その双剣の片方がコレ。

所謂、伝説の武器ってヤツね。

神器でも可。

ちなみにもう片方は、国王である父上が持っている。

剣を渡され、剣と契約の儀式をする事で皇位継承とするから、両方渡したら禅譲で皇位が移動しちゃう。

だから片方だけ。

じゃあ、何故英雄の再来とか呼ばれちゃってんのかと言うと、

” 剣を継承すること ” と ” 剣を使えること ” は別だってコト。

腐っても伝説の武器なんだし、使う人を選んだって別におかしい事ではない。

まあ、代々の皇王全員が剣術が得意なワケがないってのもあるけど。

” 継承できる ” ってだけでも大変なんだ。

3, 4代前の皇王は継承すら出来なかった。

でも、まあ、文治政治の手腕が凄かったし、皇族の中から継承者が再び出ないとは限らないから、

皇族廃絶とまではいかなかったらしい。

歴史があつて厳格な分、皇族が半ば神聖化されているってのもあるかな。

・・・くだらない。

「アルも儀式を受けてみれば良かったのに。」

「は？」

何をのたまわっているんだこの兄は？

期待を込めた眼差しで見るのヤメい。

「冗談にも程がありますよ、兄上？」

説明するのもダルい。

確かに選ばれる気も、継承する気もなかったから、資格選者の儀も

出なかった。

「二人共選ばれたらどうするんですか？国を二つに割るとでも？」

内乱でも起こすつもりか？

確かに朝、国を滅ぼそう案は出したが、そんな国の滅ぼし方は嫌だぞ、オレは。

「ふむ。北と南で二分か・・・共同統治でもいいな。」

ちよつとマジで考え始めちゃってるよ。

あゝ、ダメだ、この人。

軍事的にも政治的にも手腕があつて、カリスマがあつても弟であるオレに甘過ぎる。

「オレ以外の前で、そんな事を言わないで下さいよ？」

それに儀式は誰が何を言っても受けません。恥かきたくないです。

「

弟用の思考回路のみ欠陥品なんだわ、コレ。

「なんでだ？」

「何でつて・・・それは前者に対してですが？それとも後者？」

「前者はわかる。私はアルムには甘いとよく言われるからな。」

言われてコレかいッ！！

「後者は何でだ？確かに二人選ばれたとしても、現状は私が第三段階の継承者なんだし、

アルムが”使える人間”じゃなきゃ、皇位の移動はない。

恥をかくと言つても、選ばれないとは限らないだろう？」

「あゝ、”使える人間”がいる以上、選ばれもしませんよ。」

神器を継ぐつて意味、本当に理解しているのかも妖しくなってきた・・・。

「双剣なんだから、二人”使える人間”がいても。」

「それじゃあ、双剣つて言わないでしょうに。」

神器と祖皇に対する敬意はないのか、兄上よ。

「はあ・・・もうさっさか朝議に行つて下さい。オレは朝食を摂りに行きますから。」

兄上は政治の経験を積む為に、現在は王に四六時中ついて勉強している。

「そんな時間か？アルと話していると楽しくて時間が過ぎるのを忘れるな。」

ああ、そう言えばアル、皇室執務長官が話があると聞いていたぞ。

「え……。」

言うだけ言って、兄上は颯爽と去って行った。

その後ろ姿だけでも無駄に格好いい。

だが、その爽やかさとは反対にオレは最大に落ち込んだ朝食が待っていた……。

イイオトコと祖国と神器。(後書き)

皆さんの生温かい目が、書くエネルギー。

憂いと愛と重さ。(ミランダ視点)(前書き)

長さがバラバラなのは、ご勘弁。

憂いと愛と重さ。(ミランダ視点)

彼が私の頬にくちづけをして去ってから、私は数秒間固まっていた。

彼の・・・その、あ、愛情表現というのは、とても嬉しい。

・・・すっごく嬉しい。

たった一人の弟。

その弟が姉として扱ってくれるのは、既に家族がない私にとっては嬉しい。

でも、彼はもうこの国の第二皇子で、私はその侍女なのだ。

「アル・・・。」

それでも私は、彼が私を二人きりの時だけ呼んでくれる親称。

子供からの親称で、私も彼を呼びたいという衝動に駆られる。

彼が、相変わらず”ミラ”と二人の時は呼んでくれるという事実。

それだけでも幸せだと考えなければいけないハズなのに。

「嫌なオンナ・・・。」

それでも、昔と身分が違ってしまっただとしても、子供の頃の時のように傍にいたい。

何も報われなくても、弟を。

大切なアルを愛したい。

小さな頃、私は本当に弟として彼が好きだった。

彼もきつと、姉として私を好いてくれていたに違いない・・・と、思う。

四六時中、私の傍を離れない彼を見て、乳母だった母が、

『これじゃあ、どちらが乳母かわからないわね。』

そう笑っていたくらいだったから。

仲の良い姉弟と誰もが私達を見て思ってくれていた。

でも、その彼が病に倒れ、それが死に至る可能性があると思った時、私は無理矢理に気づかされた。

身を引き裂かれるような想いと共に。
私が彼をどれだけ【愛して】いるか。

「アル……。」

声に出して呟いてみる。

鼓動が高鳴る。

彼は今、ここにいないというのに……。

「ああ……アル……。」

私は自分の身体を抱きしめた。

今の彼は、この国の第二皇子だ。

でも、私は知っている。

彼が、本当はこの国では望まれる方が少ない存在だと言う事を。
でなければ、彼付きの侍女が私だけなんて事は有り得ない。

「アル……私の皇子……。」

妄想だとわかっていても、口に出すだけで身体が震えた。

心だけでなく身体も、自分は皇子のモノになってしまっていて、
彼以外は受け付けないだろうという自覚。

それだけが、脳裏に焼き付く。

「……アル……愛してる……。」

彼が先程まで横たわっていたベットに手を伸ばす。

少し、温かい……。

これが彼の熱だ……彼の温もりなんだ。

どんだん、自分の身体と頭がふわふわしてくる。

全てが彼に支配されていくような錯覚。

そう……この温かいと思える距離に……私はいたい。

縁談と計画と我が儘。(前書き)

初投稿一日目のアクセスをチェックしたのだけれど・・・どれくらいが概ね良好な線なのかわからない・・・。

縁談と計画と我が儘

朝食を摂った後に例の長官とやらに部屋に帰る途中の廊下で

見事に捕まったのだが、彼の話は予想通り過ぎてオレは辟易とした。

「ですから！」

「却下。嫁などイラン。第二皇子の血はお終い。」

兄上の血が絶えそうな心配がない限り、例外はナシ。」

大体、皇室行事や吉凶を占う役人が、皇太子でもないオレに持つ

てくる用件なんで、

たかが知れている。

当然、オレにとってロクなコトじゃない。

「しかし、それでは私達も安心出来ませぬ。」

意外としつこいな。

この押し問答も10分以上が経過している。

「心配をしてくれるのは感謝しよう。」

だが、嫁はとらんと以前から言っておるであらう？」

別段、婚姻自体が嫌なワケじゃない。

内容が確定で政略結婚なのが嫌なんだ。

「皇子は何時もそう申されますが、こちらとしても一方的にそのよ
うな事を仰られても。」

その心は如何に？と、勘ぐってしまいます。」

何時もなら、全力で逃走するんだが・・・彼は、オレに心を砕い
てくれる数少ない人間だ。

こうしつこくされると邪険にしづらい。

「女を政治の道具にはしたくはない。皇侯貴族としては、些か甘く
て愚かな事だが、

まだ見ぬ彼女等の想い、心を殺してまで婚姻しようとは思わんの
だ！」

兄上の嫁になる者は、男子を産む産まないに関わらず、

皇妃になるのだから慎重にその相手を選ばなければならない。対して、オレは（兄上の）保険的存在以外は、全く重要じゃない。つまり、さして重要ではないが、政略的に必要な相手を選ばれる。そんなもの、こっちから願ひ下げだ。

オレは、例え後宮を作るような事があつたとしても、相手は自分で選ぶか、

相手が望まない限り嫌だ。

おう、皇族のクセに我が儘という誹りなら、いくらでも受けてやるう。

もうそんなモン既に気にならん。

「何とお優しい。確かに甘いかも知れませんが、この私めは愚かだとは、

断じて思いませぬぞ！」

なか、無駄に目がうるうるしてるんだが、長官。

「ですが、ですが、そのお優しさをお持ちの皇子だからこそ、私はお相手を選んで欲しいのです。」

「何？」

今の長官はオレが産まれる少し前に任官した。

キヤリアとか大貴族というワケではなく、叩き上げの役人だ。

その公正明大さと誠実さは、オレも買っている。

だから、なるべく大人しく話を聞いているんだ。

オレは、こうまで言う彼の言葉の裏が何となく読めた。

だが、悪い。

・・・オレはこれから、彼の事を利用する。

「ミランダ！ミランダはいるか！」

自室に歩を進めながら、彼女の名を叫ぶ。

「ここに！御用でございましょうか？」

呼んで1分もしないうちに彼女はオレの前に膝まづく。

本当は、彼女を傅かせるのも好きじゃないんだが。

「今週中にこの城から出る！」

「は？」

「へ？」

ミランダと長官が素晴らしく間の抜けた返事をする。意外と面白い。

「居城を皇領地の外れ、森側の州の城へ移す。

私の荷物のまとめと、従者・侍女の選出を君に任せる。

君が信用でき、かつ希望する者を頼む。

料理は城にいる・・・何と言ったかな、料理長の3番弟子の・・・彼に頼む。」

言うだけ言っつて、くるりと長官の方に向く。

「これなら問題はないだろう？確かに国を割る危険性のある第二皇子など無用だ。

婚姻を結んで、子供が生まれでもしたら、私共々バカな貴族共の御輿に乗せられるかも知れぬしな。

わざわざ、そんな危険を冒してまで私に嫁を奨めんでも良い。」
「どんどんと孤立化していく第二皇子に気を利かせようとしただけなんだ。

それはありがたい。

「なに、嫁がいなくともミランダのような出来た侍女や部下がいれば、寂しいなどという事はない。

変な気遣いをさせて済まなかつたな。」

「こんな風に城を出る口実に利用した事も。」

「長官、近衛兵隊の隊長は、先の剣術指南役のおじじを引っ張り出してくれ。」

近衛隊は左遷と同じになるからな、希望者がいたり・・・そうだな、森方面の出身者がいたら、

ミランダに教えてくれ。新兵だろうと、例え一人もいなくても構わん。

責めはせんよ。」

国の安定とオレの身の安全・家族という形とを天秤にかけようと

してくれた。

それは例え、お節介でも嬉しかった。

「・・・わかりました。ですが、向こうに行つて、皇位と関係なくなつたという前提で、

婚姻相手をお探し致します。勿論、全ての方を私、自らお会いして吟味致しますし、

何より本人の意思を尊重致します。

そうですね、相手の事をよく知るといふ期間を設ける事も前提条件に付けますかな。」

言うだけ言いやがった。

反論しようがねえじゃねえか。

伊達に叩き上げで、長官歴20年近くはないな。

仕方なく、オレは頷いてひらひらと長官に手を振つた。

もう正直、精神的に皇子みたいな偉そうな口調で話すのもダルい。

長官は恭しく礼をして、去つていった。

「ふう・・・あ、ミラ?」

オレは傳いたままの彼女の肩を掴んで立たせる。

「はい。」

「ミラは・・・どうする? さっきも言ったけど、希望制にするつもり。」

付いて来てくれる?」

無理強いはしない。

絶対したくない。

「喜んでお供致します。」

そう言つて彼女は微笑む。

「ありがとう。」

オレはまた彼女の頬にくちづけた。

皇子と狂乱と魔の剣。(前書き)

暗い話は、あと2回程度です。ご勘弁を。

皇子と狂乱と魔の剣。

「正直、少し楽にはなつたよな。」

長官には悪い事をしたが。

自室に帰り、一人になってどっかりと椅子に座る。

脚はテーブルの上に投げ出した。

行儀？

知らん。

とりあえず、このままの姿勢で脳内計算だ。

メイドはミランダを入れて、10〜15人・・・いや、10人いれば充分。

料理人は1人。

オレが指定した人間が来れば、他は現地で雇おう。

近衛兵は5人いればいいや。

先の剣術指南役はアホみたいに強いし。

オレのお気に入りだ。

まず双剣使いじゃないのがいい。

この閉鎖的な伝統と格式ばつかアホみたく重んじる中で、

そういう輩がいるのが、オレ的には評価が高い。

彼は長剣使いで、技巧派。

・・・実はオレの剣の師匠だ。

双剣なんざ、型程度しか覚えてない。

使えないワケじゃないけれど。

彼とは大っぴらに稽古は受けられないから、こっそりとしていた。

それくらいこの国で双剣使いじゃないというのは、排他的な目で見られる。

まあ、きつと今回のオレの指名も、誰にもついて来てもらえないダメ皇子が泣きついて、

引退したジジイを無理矢理連れて行って、余生を過ごさせてやろう。

くらいしか周りも思うまい。

この方向性でオレもお願したい。

「しかし、本当、皇族に向いてないのな、オレ。」

ちよっぴり切なくなりながらも、立ち上がって窓辺を横切る。

ふと視界に入る空はとても綺麗だった。

部屋の隅にある騎士像。

オレの趣味じゃないぞ？

大体、ベッドがある部屋の隅にそんなのあつたら、夜怖いじゃないか。

「皇族の御用達剣術は型程度しか使えないわ、実は長剣使いだわ。」

ゆっくりと騎士像が下げている長剣を鞘から抜く。

ま、こんなので誤魔化せるくらいに周りがオレに興味ないんだから、いいとするか。

両刃の長剣。

黒い刀身が日の光を浴びて、鈍く光る。

「しかも、国を壊すかも知れない。狂乱の皇子とか歴史に記されそうだな。」

全てはこの剣から始まった。

この事は、ミランダにも話していない。

いや、話せない。

話すとしたら、きっと彼女と永遠に別れる事を決意した時。

剣の名前は”ディーン”の剣”

本当の名前は知らない。

魔剣だ。

この剣に出会ったのは、オレが死に至ると言われていた病から、奇跡的に回復してから数年後。

宝物庫に入った時の事だ。

何で宝物庫に入ったって？

オレは歴史は苦手だが、歴史書とか書物を読むのは好きなんだよ。

何時も通り、カビ臭い宝物庫の書棚を漁ろうと探検していた時に
皇家の双剣が飾ってあった台座から見つけた鍵で、開いた扉の先に
あった。

ああ、ちなみに宝物庫の扉という扉、鍵穴という鍵穴に突っ込みま
くって確かめたのよ。

黒い剣は片刃の長剣で、刀身から一本の線が柄付近まで入っている。
刃の根元と柄の間は、丸い円のようになっていて、まるで満月みた
いだった。

長剣をマジマジと見るのも初めて、しかも黒い。

ビビリまくりながらも、どうしても手に取ってみたかった。

ああ、どうせ、アホで緊張感のないガキだったよ。

この剣を手を取った時、オレは全てを知り、そして一晩中泣いた。
泣いて、泣いて、泣きまくった後・・・

オレはこの国の全てを憎んだ。

覚悟と魂と高潔さ。

九死に一生を得た事と、剣を手にした事。

一体どちらが先なんだろうと、オレは思った。

いや、病にかかった方が時間的には先なんだろうけれど。

【ディーンの剣】

オレの名前の一部になったソイツは、伝説の武器だった。

何度も言うが、神器でも可。

大好きだった歴史書に記されていた英雄は、記される事すら無かった1人がいた。

先の大戦で開いた次元の穴は、外からではもう閉められないくらい広がっていて、

それを閉じる為には2つの選択肢があっただ。

1つは、今、英雄達が所持している武器・神器を使う方法。

穴の中に投げ込んで、その力を解放する。

勿論、穴は次元の穴なので武器・神器も失うし、強大な力同士の間
つかり合いだ。

自分達にも危険が及ぶ。

2つ目は、誰かが入って、中から閉じる。

勿論、ソイツは次元の彼方に飛ばされ、永遠に彷徨う。

帰ってもこられない。

戦士達は一瞬沈黙した。

残された時間は少ない。

誰もがそう思ったからの一瞬だけの沈黙。

そして誰かが突然、ディーンを背中から斬りつけたんだ。

斬られたディーンを足蹴にして、次元の穴に放り込む。

生贄以外の何者でもない。

今でもソイツの顔を忘れない・・・ディーンを斬りつけた男。金髪蒼眼の・・・”ヴァンハイト”を！

それが、英雄ヴァンハイトの正体。

我が国の祖皇。

オレの中にある忌まわしき血と同じモノ。

握った剣から流れ込んできた映像は、そこまで。

でも、仲間に裏切られたとしても、ディーンは世界の穴を中から閉ざした。

そうでなきゃ、世界は救えてないハズだからな。

きっとそれすらも計算に入れていたのだろう・・・ディーンならそれでも穴を閉じると。

これがただの幻の類なら、それでもいい。

だが、どうしてもオレにはそれが幻や妖の類には、思えるハズもなくて・・・。

気づくとオレの手の中であつた剣は、最初見た形から今の両刃の長剣に変化していた。

ただ、刀身は黒いままだつたが。

残った最後の力だったのだろうと、今にしてみればそう思う。

だが、疑問は更に湧いて来た。

次々と。

この剣も、力をほとんど失いかけたとはいえ、伝説の武器には違くない。

という事は、他の伝説の武器、この国にもある双剣のように持つ者を選ぶハズ。

なのにオレを選んだ。

オレに握られる事を・・・。

裏切り者の”ヴァンハイトの血”を引くオレを。

何故？

「アホみたく調べまくったっけな・・・それこそ狂ったように。」

辿りついた1つの憶測。

ここまで来れば、もうわかるだろう？

”トウマ”だ。

オレの名前の一部、”トウマ”

彼は、オレへの生贄だった。

死に至る病を回復させる為のね。

どうやら、どうやらこの国は未だに世界の穴に関する研究をしていないらしい。

そうだよな。

もし何かの拍子にディーンが生還してきたら。

そういう疑心暗鬼にかかっても仕方ない。

築き上げたモノが全て台無しになるんだから。

流石に穴を開けたり、閉めたりという再現はどんなに研究を重ねても不可能だった。

不可能だったんだけど・・・この研究は一定の基準までクリアされてきた。

”魂”だ。

魂だけを召喚する方法を確立させた。

もう説明は充分だろう？

オレを救う為にオレの魂の資質に近い魂を何処からか召喚して、オレに注ぎ込んだ。

その魂の名が”トウマ”という名前だったらしい。

らしいというのは、召喚した術師は召喚の代償に死亡。

計画に関わった者も、研究者自身も死んだり、行方不明になっていたから、

何とか日記のようなものを見つけて、読んだだけだ。

リスクが大き過ぎて、研究自体はこの段階までで中止になっていた。魂以外は召喚できず、使った人間は一つの魂に対して複数人死亡。

しかも、魂を定着させる者同士の相性が一致しない限り効果を発揮出来ない。

どう考えても使いモノにならんし、ディーンも見つからなかったんだらう。

父上が止めさせたのかも知れない。

まあ、研究の本来の目的は、誰も知らないだらうからな。

初代の時代から、膨大な時間が過ぎてるし。

もしかしたらディーンは生きて違う世界に辿り着き、”トウマ”という子孫がいたのかも知れない。

だからその魂の部分が共鳴して、オレは剣に選ばれたのカモ。

逆に剣が、選ぶべき魂を呼んだのもかも知れない。

この辺りが有力。

有力ってだけで、確実じゃない。

他の説としては、何処かで直系ではないにしろディーンの家の子孫が血筋が入っているのか……。

どちらにしろ”ヴァンハイト”という名が、人の命や魂を踏みにじた。

そういう事だ。

で、今朝の案に戻る。

国を滅ぼそうと思った理由。

他には、まあ、この国の在り様だな。

どう考えても間違ってるというか、排他的過ぎる。

双剣使いじゃなきゃ、実力があっても出世は出来ないとか。（元近衛隊長は例外中の例外）

エルフや獣人のような他人種に対する差別とか。

選民思想も甚だしい。

ただ、悪いのはそういう考えに凝り固まった皇侯貴族だけであって、民は関係ないから……

無血路線ではいきたい。

既に血からして自分は聖人君主ではないから、無血ってのは甘いとは思っけれど。

皇制廃止程度でもいい。

この血が国を治めるよりはマシだ。

「・・・兄上と戦う事になるのかな・・・。」

【ヴァンハイトの双剣】と【ディーンの剣】のぶつかり合い。
時を越えた復讐だな。

「ま、完全に使いこなせてないんだけど。」

オレが手に取る前の状態が、本来の姿のハズだから、今は仮の形
なんだろう。

「・・・あの時・・・本当に狂っちゃえば良かったな・・・。」

覚悟と魂と高潔さ。(後書き)

次から予約掲載という機能を使ってみようと思ったり思わなかったり。
意外と試行錯誤です、はい。

気品と奉仕と愛情。(ミランダ視点)

私が報告の為に部屋に戻った時、何度と部屋の扉を叩いても返事がなかったため、

一声かけてからそのまま中に入る。

窓辺に佇む彼。

その手には、珍しく長剣が握られていました。

彼が武器類を持つ事自体、見る機会はありません。

それにこの部屋には、何処にも刀剣の類は備え付けてはいない。

あるのは、部屋の隅に置かれた騎士像が携えている物のみ。

私はそれを鞘から抜く事が出来るのを初めて知りました。

掃除はちゃんとしてはいますよ？

「アルム様。」

「なんだい？」

彼は振り向きはしなかったが、返事があったので、私は話を続ける事にしました。

「先程の件ですが、現在、侍女は私を含め6名程、料理人はご指名の者も含め3名、

同じく近衛兵も3名。隊長の任も了承を頂きました。」

淡々と報告。

仕事は仕事で、きっちりしなければ。

そうでなければ、彼の迷惑になる。

私のミスが、彼の立場を悪くする事があってはならない。

そうでなければ、私は彼の傍にはいられない。

「予想以下だったわ、人徳ないねえ、オレ。」

くすくすと笑う声。

酷く自嘲的な。

「そんな事はありません！私は、私は、何処までもと！」

「ねえ、ミラ？」

優しく私の名を呼んで、彼が振り返った時、

一振りの刃が私の首のすぐ真横に。

「オレが死んでくれと言ったら、どうする？」

彼は・・・私の愛する彼は、どんな答えを望んでいるのだろうか？

どう言えば・・・伝わるのだろうか？

今更、こんな事をしなくても・・・。

「・・・貴方が、それで私を永遠に忘れないと言ったのでしたら、喜んで。」

一瞬間の間後、彼は刃を引いた。

泣きそうな表情が、夕日の中に落ち込む。

「それじゃあ、ミラ。君の全てが欲しいと・・・君を抱かせてって・・・言ったら？」

本当に今更ですね。

わざわざ口に出さなくても良いのに。

でも、私は口に、声に出そう。

彼が、そう望んでいるのなら。

「勿論、喜んで。」

答えて、今度は私から彼の頬にくちづけた。

「ありがとう・・・いつも。」

にっこりと微笑む彼。

彼に笑顔を作る事が出来た。

それだけでも私の心は、打ち震えるのでした。

偶因と鳥籠と十人十色 【前】（前書き）

今回は長くなったので前・後と分けました。
新キャラ紹介です。

偶因と鳥籠と十人十色。【前】

我ながら何と短絡的で幼稚な事をしたんだろう……。ドタバタとのたうち回った後、とりあえず寝た。

翌日の昼過ぎくらい迄。

いや、1人でだよ？

オレ、どんだけ我が儘プーよ。

そんな風にして、オレはミランダを抱きたくないし、傷つけたくない。

軽んじていい存在ではないんだ。

彼女には、どうやっても幸せになって欲しい。

特にオレはこんなにも濁っていて、汚くて、狂いかけなのに。

オレの中で今、穢れていない部分なんて魂の中のトウマの部分だけだ。

「そう簡単に抱けないよね……。」

自分の目に映る手がまるで汚物や血に塗れてるみたいだ。

なのに、彼女に甘えてしまう始末。

本当に短絡的で幼稚だ。

「アルム様、少々、お時間宜しいですか？」

扉を叩く音。

声はミランダだとすぐわかった。

流石に姉弟のように育ったんだ、間違っワケがない。

「いいよ、何？」

実は、兄上の声の方が間違い易い。

こんな事を兄上に言ったら、ショックで一日頭のネジが外れてしまっただろう。

「失礼致します。先日の件の候補の者をお連れ致しました。」

「早ッ。」

まさか、昨日一日と今日の半日、合わせて一日半で、そこまで進

むとは思わなかった。

「主の命に迅速かつ、的確にお応えするのは当然の事ですから。では、入って下さい。」

ミランダに案内され、そろそろと人が入って来る。

メイド服姿が3人。

料理人も兵士も同じ人数。

合わせて9人だ。

昨日言っていた数より更に少ない。

自分の人徳の無さ加減に本当、泣きそう。

確かに表舞台には、全くと言っていいほど出ないようにしてたからな。

人気どころか、実は知名度も低いんじゃないかね？

「悪いね。個々の仕事もあつただろうに。」

ただ、どうしても直接会って話してからが良くてね。」

そう言うと、9人は9人とも略式的に礼をする。

こういうのはイマイチ苦手だ。

「とりあえず、侍女達から自己紹介をしてくれ。」

「は、はい、私はミリイと申します。」

オレンジに近い明るい茶髪の少女が一礼をする。

背はオレよりかなり小さい。

というか、ここにいる誰よりも小さい。

まさか、獣人とか亜人じゃないよな？

「大丈夫、そんなに畏まらないで。」

「はひっ！」

逆効果だった。

小さい彼女は、直立不動で固まってしまった。

一呼吸遅れて、ばいんつと胸が揺れる。

作りは小さいクセにそこだけは大きい。

本当に獣人とか亜人（例えばホビット）じゃないよな？

何か、兎耳とかが似合いそう。

「ミリイはどうしてついて来る気になったんだ？」

とりあえず、これだけは全員に聞こうと決めていた質問だ。

「いえ、あの、その・・・。」

言葉を濁して、途端にしゅんとなる。

「気にしないで言ってみ？」

「あ・・・クビになるよりはマシかな・・・と。」

「クビ？」

「あの、私、失敗ばかりで・・・。」

ああ、仕事の習熟度が低いのか。

確かにオレは今、誰の手だろうと借りたいくらいだ。

仕事の習熟度なんざ、そのうち上がる。

「うーん、それだけで決心しちゃっていいの？」

多分、滅多にというか、こつちに帰ってこられないよ？

「大丈夫です、私、皇都の生まれじゃないから、特に拘りはありません。」

碧色の瞳がうるうるしている。

まるで、オレがイジメみたいじゃないか・・・。

「そうか。じゃ、頑張ってもらおうよ。そばかす可愛いね。」

彼女の鼻をちよんと押してやる。

彼女はぼかんとしているが、面白いから良し。

「はい、次。」

「ホリンと申します。」

紫の髪に褐色の肌で金眼。

オマケにとんがり耳。

どっからどう見てもダークエルフだ。

エルフが人間社会、特に皇族に仕えるなんて聞いた事がない。

基本的に独立独歩で、この国より排他的な風習だからな。

それにこの国は、そういう人種には差別的だというのは既出。

「ホリンは、森のエルフの集落の出か？」

国土の森林面積が多いこの国は確かにエルフの集落がいくつかある。

「はい。だから寧ろ、そつちのが慣れてるし仕事も楽そうだから。」

この言葉に周りの皆は目を剥いているが、こついつのもオレは嫌いじゃないぞ。

多種多様な性格があつて然り。

更には多種多様な種族がいて然り。

生まれどつこつは、誰も選べん。

「正直だな、ホリン。悪くないぞ。ただ他の偉そうなヤツには、

そんな感じにすると大変な事になるから気をつけてな。」

「はい。」

元気良く手を挙げられた。

うん、ダークエルフの侍女がいるなんてオレぐらいだろうな。

まさに異端的な立場のオレに相應しい。

「しかし・・・ホリンの肌は綺麗だな。ダークエルフを初めて間近で見たよ。」

「これから何時でも見れますよ。」

腕をまくつてブンブンと振つて見せているホリン。

明るいのはイイコトだ。

何より志望理由が明白でいい。

「うむ、次。」

「シルビアと申します。」

今度は長身のお姉さんだ。

・・・オレの基準な。

お姉さんとしておいてやれ。

女性に年齢を聞く男は死んでも良し。

それくらい気持ちを持つべきだ。

正直、さっきのホリンだつてダークエルフ。

外見年齢と通常年齢は人間にあてはまらない。
怖くて聞けるかっ！

で、オレの基準というのは、ミランダと同じくらい。
・・・いや、ごめん、ミランダより年上って感じ。

金色のロングの髪に藍色の瞳。

ぱつと見、いいところのお嬢さん。

美人だ。

着る服がメイド服じゃなくて、貴族の服と間違ったんじゃないか？
と、思うくらい。

都会育ちなんだろうか？

なら、田舎は厳しいのでは？

「シルビアもあんな森に囲まれた田舎で大丈夫か？」

「はい、元々都会は好きではないので。遠い田舎で長閑には、
望むとこですう。」

・・・何というおっとり感。

「どうかなさいましたかあ？」

「いえいえ、お願いします。」

「はい。」

につこりと微笑んで、じいじとオレの目を見詰める。

「何？」

にこにこしているのだが、何か、その、見詰める目が怖い。

「私は何も褒めてくださらないのですか？」

いや、怖いって・・・。

「あ、いや、お姉さんですね。」

意味不明な言葉を口走ってしまった。

というか、褒め言葉ですら無い。

「はい。お姉さんですから、沢山頼ってくださいね。」

ぱんつと自分の胸を叩くシルビア。

その胸も何というか・・・お姉さんだった。

寧ろ、魔王。

つか、さっきの意味不明の言葉で良かったんだ……。深いのか浅いのかわからからんぞ、この人。

「料理人のクリス、レーダ、ホビイです。」

次に挨拶したのが、例のお気に入りの料理人だ。紺のショーツに同色の瞳。

白の料理服が胸の緩やかな曲線を描いている。

「て、クリスは女だったんだ……。全く気付かなかった。その一言で眉をしかめられた。」

「何か問題でも？」

「いや、クリスは素材選び、生かし方が素晴らしいからな。

向こうの森の幸の料理、期待している。

男とか女とか一々面倒だ。料理人は美味しい料理を作ってくぞ。」

何度も言うが、オレは能力があつて相手が望むなら、人種とか性別とかは全く気にしない。

というか、気にしたつて仕方ない。

選べねえもん。

選べるんだつたら、オレが真つ先に”ヴァンハイト”以外の人間を選びたい。

「今回はたつてのご指名を過大なる評価を頂き……。」

考えが目の前から逸れたら、クリスが口上を述べ始めた。

「あー、堅いのは無し。城内での命、任せたぞ。」

クリス、レーダ、ホビイ。」

「……はっ。……」

大袈裟じゃない。

コイツ等が毒なんぞ盛つたら、”あつ”という間に。”なんだから。”

ちなみにレーダは黒髪を後ろに回した、糸目の細身の男。

ホビイは小犬みたいな瞳のいかにも人の良さそうな大柄の男だった。

偶因と鳥籠と十人十色。【後】

最後に近衛兵だ。

皇族警護の兵だが、実際オレを害そうなどという人間は少ない。

国内の最有力は、兄上と親しい貴族なんだが・・・

その、基本、弟スキーな兄上なので、皇位争い相手になりそうなオレでも害そうという動きはない。

例え兄上派の貴族が独断専行したとしても、まず兄上がその貴族を切り捨てる。

よって実は一番有り得ない。

ある意味、それはそれで国の安定という側面から見たら困る気もするが。

兄上に反発する貴族は、当然オレを担ぐのが一番手っ取り早いからこれまた有り得ない。

寧ろ、一番少数派の独立・中立派の可能性があるという始末。

まさかこんなトコでオレの不人気っぷりが役立つとは思わなかった。

これは旅に出る時に楽でいいかも知れない。

つまり、近衛兵は基本的に必要ないんだ。

向ここの州を治める役人とかのが、まだ危ない。

「近衛兵に志願したレイアです。」

「ザツシユッフス。」

「ヨアヒムと申します。」

レイアは薄紫の髪にスミレ色の瞳。

髪の毛をまとめて後頭部でお団子にしている。

梳いたら結構長いんじゃないか、アレ。

ザツシユは細身で筋肉があまりあるようには見えない。

これで近衛兵なら、意外とスピードで戦う型なんじゃないのかな。短く刈り上げた金の髪が立っていて、芝生のような。

人懐っこい笑みを浮かべている。

ヨアヒムは正統な騎士って感じ。

茶色い髪に鋭い瞳。

だけど、何処となく気品というのが感じられる。

「レイアはいいね、長剣使い？双剣は？」

レイアは腰から剣を一振りしか下げていない。

何度も言うけれど、この国は双剣術が正統。

それ以外は、一つの例外を除いて異端・邪道。

ましてや男社会の兵士で女性というのは、不利。

だが、その勢いをオレは買う。

「双剣より長剣のが好きで、得意なので下げているのですから、見ての通りです。」

うっわ、すげえ睨まれた。

傷つけたかな？

「ザツシユは双剣か。」

「はい、あ、田舎は森の都市ですから左遷に異存はないっす。」

聞かれる前に言われた・・・まあ、楽で良いが。

睨まれてレイアに聞くのを忘れてたが、彼女は何となくわかる。

女で長剣使いなんだ、精々オレの所で箔が付くといいな。

「ヨアヒムは・・・。」

あれ？

・・・オレ、コイツ見たことあるな。

誰かに紹介された事も・・・。

記憶を辿って、溜め息を一つ。

「あー、君は来なくていいや。叔父上に宜しく。」

ヨアヒムの叔父は貴族だ。

しかも独立派の。

兄上の派閥なら監視役という意味で、お兄様連絡網として使うのもアリかも知れんが、

少数派のヤツを懐に入れてあらぬ疑いをかけられても嫌だ。

少人数の移動だし、泳がせて情報を掴むとか器用な事はオレには出

来んし、

そこまで気を回す余裕は（手数的にも）ない。

「向こう行っても大人しく余生を過ごすだけだから、気にするなどでも言っておいてくれ。」

建前上はな。

おーおー、睨んでる睨んでる。

今にもブチギレて襲ってきそうなの。

オレを呪い殺しそうな形相だわ。

まあ、それはそれで公に彼の叔父上殿を断罪するいい切っ掛けになるからいいけれど。

恨むなら、面が割れている人材を寄こした叔父上を恨めよー。

オレはそういう貴族の傀儡になりたくないから、頑張って顔覚えてんだぞー。

影の努力の勝利だな。

「ミランダ、あとでお仕置きね。」

「……はい。」

って、何で彼女は顔を赤らめてモジモジしてるのかね？

”お仕置き”って何を考えてるの？

「あの、アルム様？」

「ん？」

口を開いたのはレイアだ。

「私達の隊長がいないようなのですが。」

ああ、そうか、レイアの目的はそれが。

「ああ、あのジジィね。大丈夫大丈夫。」

「はあ？」

何が？と突っ込みを眼差しで表現してくるレイア。

「あのジジィの行動パターンは、もう理解してるから。」

タイミング的にはそろそろなんだよな。

「ぶうるらあああああーッ！」

来た！

「どりゃあッ！」

雄叫びと共にドアが開かれ、飛び込んできた物体に向かって、オレは全身全霊をかけて渾身の飛び蹴りを浴びせる。

物体はそのまま花瓶が乗っている台に激突して、花瓶の割れる盛大な音が鳴り響く。

「いい加減、もうそういうのヤメロ、ヒゲオヤジ。」

「何を言うておる！若！何時如何なる時に何があるかもわからぬのですゾ！」

むくりと起き上がった塊。

ツルツパゲの頭に口髭と顎髭が一体となった毛むくじゃらな大男。

「それと、所構わず修行の場にするのは別の話だ！」

頭に乗った花と被った水を拭いながら、大男は笑う。

「レイア、このハゲジジイが前剣術指南役にして隊長のバルドだ。」

もう指差してやる。

「若は相変わらず不真面目だのオ。」

「オレが真面目になる方が困る輩のが、この国には多いの！」

一応、これでもオレを気にかけているので、嬉しいには嬉しいのだが、

如何せんこの人も兄上とある意味で同じ方向性というか、

人としての方向性が間違っているというか……。

レイアも呆然としている。

「君もこのジジイに付いて修行すれば、一段階は強くなれるのを保証するけど、

性格まで似ないようにね。折角、美人なんだから。」

そう言えば、レイアも美人の部類だ。

男も。

レーダもザツシユも顔は悪くはないし、大柄のホビイも人が良さそうな顔していて愛嬌がある。

さっき出て行ったヨアヒムだって、整った顔をしていた。

どうした、ミランダ。

顔基準で選んだか？

「と、まあ・・・各自準備を頼む。レイアとザツシュは馬の手配を。クリス達3人は食料の一切と保存食の作成・確保。

ミリイ・ホリン・シルビアは、クリス達の手伝いをしながら旅装品の細かい物の用意を

ミランダと一緒にしてくれ。」

人徳がないと嘆いてた割りには、マトモそうな（少なくとも顔は）メンバーが揃って良かった。

「ワシは？」

バルドが自分を指差す。

「ジジイは自分用の酒と少しでも使えそうな剣を用意してくれ。

オレのと、ザツシュの双剣。レイアは自前の良い剣だが、

ザツシュのは一般兵の支給品だから。

あと侍女達の護身用のも一応。」

「フム。若はどっちで？」

白々しくさらりと聞いてきやがったよ、このジジイ。

つまり、双剣か長剣か。

大っぴらには聞けんけどな。

「オマエに頼んでいる時点で察しろ、タコ頭。」

全員笑いを堪えている。

ホリンなんか、肩までぶるぶると震えてるし。

ツボだったらしい”タコ頭”

「という事で、解散！」

オレの号令後、そろそろと部屋の外へ出て行く9人

9人という事は、1人残ってて、つまりミランダが残っているんだが・・・。

「ミラ、どうしたの？」

「あの、お仕置きは？」

顔を赤らめ、瞳を潤ませたままの姿勢で、モジモジしているミランダがそこに居た。

敬虔と微熱とお仕置き。(ミランダ視点)

『ミランダ、あとでお仕置きね。』

「はい。」

お仕置き。

確かに彼はそう言った。

私が連れてきた部下候補の1人が、貴族派。

それも、彼にとっては問題となりうる派の人間だったらしい。

直系ならば、私も気付いたかも知れませんが、所詮は第二皇子付きの侍女。

そこまでの人脈を網羅しているわけではないのです。

彼はすぐにその男を追い返した。

大丈夫。

私もその男の顔を覚えました。

次からは完全に敵と認識致します。

その他の人間は、特にさしたる問題が無かったようで安心しました。

私はこれでも彼の好みは把握しているつもりで、その自負もあります。

ミリイは仕事に関しては今ひとつですが、愛らしく明るい性格で頑張り屋。

案の定、早速からかわれています。

胸も大きい。

基本的に彼も男なので、すべからく好きであろうかと思えます。

ホリンは、この国では差別的に扱われやすいダークエルフですが、ざつくばらんな正直さは評価に値します。

まさか、人種的な点が気に入ると思いませんでしたが、これも彼の心の大きさなのでしょう。

その褐色の肌の美しさを褒めていました。

シルビアはとても清楚で可憐。

私より年上ですが、この城の侍女の中では、一番の巨乳です。サイズは私よりも確実に上。

当然、彼も気に入るはずです。

料理長は元々が彼のお気に入りですし、その部下も愛嬌があります。

近衛兵のレイアも職務に対する勤勉さと、女性であり長剣使いであるという奇抜さが、いたくお気に入りのおようです。

ザッシュは素朴で従順。

また命令のみで動くのではなく、自分で考え迅速かつ的確に物事に対応する能力があります。

ほぼ全員、彼に気に入ってもらえたのだけれど……。

【お仕置き】

そう、お仕置き。

私は、彼からお仕置きを受けるらしいのです。

愛しい彼からのお仕置き。

一体、どんな事をされしまうのだろう……。

いえ、どんな事でもいいの。

私は何でも受け入れる。

だって、愛しい彼から与えられるモノですもの。

彼が、私の為だけにくれるモノ。

そう考えるだけで、身体が喜びに震えてしまう。

例え、それが罰という形のモノでも。

罰。

その罰だって、私に与えられるのは彼だけ。

世界でたった1人だけ。

どんなことでも、殴られ叩かれようと痛みと熱が私に与えられるのです。

昨夜なんて、『抱かせて』と言ってくださいましたし、

もしかしたら、本当にめちゃくちゃに蹂躪されてしまうかも。

ああ……身体が熱い。

私が動けなくなるまで、どうぞお仕置きして下さい。
私の愛しいご主人様。

この身体は貴方のモノです。

勿論、心も。

思う存分征服して下さい。

「という事で、解散！」

解散・・・とうとう、この時がっ！

あとは私がお仕置きされるだけ・・・。

もう体の熱と疼きが止まりません。

「ミラ、どうしたの？」

心配そうに見詰める彼。

「あの、お仕置きは？」

彼は呆れ果てたように私を見詰めるだけでした・・・。

交縁と準備と大荷物。

人数が少ないのが準備期間を短くさせた。

手数も少ないが、用意するべき物も少なくなるからな。

そんなこんなでほとんど事後承諾的にコトを進め、兄上を激しく落ち込ませ、父上を怒らせ、母上は笑いながら父上を黙らせた。

流石は皇妃。

兄上の（オレのでもあるぞ）母だけあって無駄にオレの味方だ。

普段から、”母上を一番愛する息子”の称号だけは死守してきた甲斐があつた。

途中、何回かミランダの動きというか、頭のネジがおかしくなりかけたが。

愛しの姉なので、弟として優しく見て見ぬフリをすることにした。

あとはタコジジイの酒が大変な量になって、皆の大ヒンシュクを買ったり。

限度とか加減とかをこの人は知らないらしい。

できる加減と言えば、”いい加減”くらいだろう。

途中、旅装品の試着時にはレイアから熱い視線を浴びてしまった。皇族が双剣じゃなくて、長剣をさしてんだからそりゃそうだ。

これはオレが悪い。

城門を出て城下町を抜けるまでは、少なくとも双剣を下げておこうと思う。

ザツシユ用の双剣もあるしな。

別に双剣を使えないワケじゃないけれど、やっぱり習熟度の問題がね。

旅の用意の時間のうちオレが一番時間を割いたのが会話。

オレについて来てくれる8人との対話だ。

勿論、ジジイは除外。

タコと人間は会話ができるはずもないからなつ。

特に一番大変だったのは、クリスの相手だ。

彼女はオレの味の好み、好物、嫌いな物、好きな料理法・料理名、ともかく事細かに聞いてきた。

最後の方は、もう文書回答後に質問を受け付けるという流れで。

クリスは特に野菜料理が得意で、レーダは魚料理。

ホビイはなんとデザート作りと飾り包丁細工が得意らしい。

大柄な男が、目の前で自分の親指大の根菜の花を作るを見せられたんだが、オレは絶句した。

いい仕事するじゃねえか。

ともかくクリスは自分の仕事に関しては、一切の手抜きはしない完璧主義らしい。

ミリイ・ホリン・シルビアのメイド三人娘。

まとめて”ミホシ組”はミリイが失敗、ホリンが突っ込み、シルビアがフォロー。

そんな流れが出来ていて、随分と打ち解けたらしい。

三人の中で、一番話したのはホリンだ。

彼女は正直に突っ込んでくるので、話が早くていい。

これから向かう城の周りにあるエルフの森の出身なのも大きい。

多少古い内容だが、情報集にはちょうど良かった。

そのエルフの森の男女比率は、女性体の方が多く部族の戦士もその割合を投影している。

族長は男性で、子供は娘が3人。

次の族長は娘3人の誰かか、その夫になる予定だそうだ。

部族の気質は手放して友好的ではなく、閉鎖的。

排他的という程ではないが、刺激しない方が得策らしい。

「それにしてもホリンの褐色の肌は綺麗だ。」

初対面の時にも言ったが、もう一度言ったら笑いながら

「何時でも触っていいよー。」

と、軽く返された。

曰く。

『差別するクセに下品に触ってくるスケベ貴族よりは、皇子は何億倍もマシ。』

だそうな。

誰だよ、そんなコトするヤツは……。

と、思ったが、スケベなのは男は皆そうなんだよ。

オレだって彼女の肌が綺麗だから、触りたいと公言している1人なワケだし。

だが、彼女の的にはそれでもマシだと言う。

「皇子は物珍しさとかじゃなくて、ちゃんと褒めてくれてるのがわかるし。」

それが一番の理由らしい。

気前いいな。

「綺麗なモノを綺麗と言って何が悪い。」

胸を張って言い切ってやったら、大爆笑された。

オレ、これでも皇子……。

ミリイはミリイで一日最大3回くらいの失敗する。

失敗のうちの何回かはオレも被害を被ったが、彼女は彼女で頑張っている。

その証拠に一度やらかした失敗は、その日はもう同じ失敗はしない。まあ……翌日はその限りではないんだが。

頑張りを見てると責める気も失せるし、周りも明るくなるのでいいかとも思う。

ピコピコ動く小ささも可愛い。

胸はピコピコというより、ぽよんぽよんと動いているが。

いや、オレ、ソコマデエロイワケじゃないヨ。

胸よりお気に入りなのが、彼女のそばかす顔だ。

愛嬌があって、事あるごとに鼻を押ししたりしたくなる。

寧ろ、押ス、摘ム。

彼女のには微妙らしいので、失敗することに押ししたり摘んだりして

やる事にした。

お陰で今じゃ、一日一回は確実に押し放題だ。

(基本的には) 隠居する皇子に巻き込まれたのを貧乏クジと思っ
ないのもいい。

動機が動機だけに。

あと、失敗の内容も取り返しのつかないモノは実は皆無なんだわ。

一番の問題はシルビア。

彼女は・・・その、優秀なんだが・・・優秀過ぎるんだ。

例えば喉が渴いたなと思う。

誰かに頼むかなと呼ぼうとすると、彼女が飲み物と呼ぶ前に持って
来る。

確かに優秀な家令は、言わなくても仕事をするものとはいえ、そ
こまでオレの読み易い生活パターンじゃないハズ。

だが彼女は先回りして仕事をする。

それも半端じゃない先読みで。

(心が読めるんじゃないだろうか?)

「読めませんよ、心なんて。」

というやり取りがあったりと。

思っている事を的確に見抜いたり(?)する。

本当は解り易い性格しているのだろうか、オレ。

今度から念力で呼んでみようかと密かに思うくらいだ。

優秀さを発揮する一方で、時折よくわからん言動もする。

「という事で、次から”シルビィ”とお呼びくださいな。」

「はい?」

前振りナシ。

且つ突発的に発生。

「ミランダさんもお姉さんで愛称呼びなんですから、私もお姉さ
んなので愛称でお呼び下さいませ。」

.....

二人きりの時以外は、ミランダを親称呼びした記憶は全くないんだ

が？

何故知っているんだ？

しっかし初対面の時からこんなような事言ってたな、彼女。

「じゃあ、シルビィ？」

「はい。たまに”お姉さん”というのを付けて下さって結構ですよ。」

ナンダコレ。

もう付き合っつのすら面倒になってきたぞ……。

「はいはい、シルビィお姉ちゃん。」

「はあくい。いいですう。”ちゃん”というのがステキですう。」

ちなみにうつかりこのやり取りを聞いてしまったミランダは、一日中使い物にならなかった。

時折、『私のアルがあ……。』とか『お姉ちゃん……。交代……。』とか、

ブツブツ呟いていたり、もう何が何だが……。

ただザツシュー1人だけが淡々と仕事をこなしてくれていたのが唯一の救いだっただ。

三角と馬車と窒息。

気付くとあつという間に5日近くが過ぎてしまった。

それでも当初の一週間という期限にはなんとか。

今日はようやく出発だ。

三頭立て馬車1台・二頭立て馬車1台・近衛兵用の馬1頭・荷物積載の空馬1頭

本当は三頭立て馬車なんていらなかったんだが、皇族の乗る馬車だと言つ事で、最低三頭立てにしると言われてしまった。

こつという非合理的なのも嫌いなんだよ、この国。

1台目の馬車にミランダ・ホリン・シルビア・オレ。

2台目の馬車に料理人組のクリス・レーダ・ホビイ・ミリイ。

この面子になったのは、ホビイが大柄なのとミリイがちつこいとの兼ね合い。

御者はレイアとザツシュが務める。

バルドは近衛兵用の馬で単騎。

空馬はあとでこつそりオレが乗ろうと画策。

だって三頭立てにしたんだし、皇子が馬車に乗らないのはダメって言っただもん。

本当はメイドと一緒に詰めて乗るなんてのもダメなんだぜ。

どうして、こつオレをイラつかせるようなしきたりばっかなんだ？

騒がれたりするのも面倒だし、早朝秘密裏に出発を決行した。

まるで逃げるようだわ。

「窮屈で済まないね。」

女性率はそんなに高くないハズのパーティーなのに、現在男1人だし。

オレの隣を完全死守状態のミランダ。

向かいにホリン、その横にシルビアだ。

最近ミランダの接近距離は、鬼気迫るモノを感じるのはオレだけか？

「アルム様は、何でも正直な方ですよねー。」

ホリンがオレの言葉に対して笑う。

「ド真ん中をブチ抜く正直さは、君に負けれると思うよ。」

「あはは、う〜ん、偉そうじゃないというか、飾らないというか。うまく表現出来ないというような顔をする。」

「皇都出たから言うけどさ、位とか皇族って生まれてたらそうだったっただけで、オレの努力とかで手にしたワケじゃないしさ。ホリン達の外見と同じだよ。みんな美人なのは生まれた時からだろ？あ、肌の手入れと化粧は努力か。」

「もー、アルム様は美人、美人って連発し過ぎですよー。」
いや、本当にお世辞じゃなくて美人なんだって皆。

ここにいる皆は、路線が違って単純な比較こそ出来ないが美人だ。

「アルム様は、お優しくて正直でいらっしやいますから〜。」
全く噛み合っていないよ、シルビア。

「私を”お姉ちゃん”って呼んでくださるくらい素直な方なんです
よお〜。」

ライ。

次の瞬間、オレの右腕に痛みが・・・。

「いだっ、痛いっ、ミランダ、右腕痛い、いたっ、食い込んで、あうっ。」

ミランダが全力でオレの腕を掴んでる。

いや、握り潰している。

ギリギリと締まってんだよ！

「ミラッ！！」

思いつきり彼女の耳元で叫ぶ。

「はいっ！！あ、す、すみませんっ、アルム様ッ！！」

今度は必死にオレの腕をさすり始めた。

何なんだよ、一体。

「実際問題。アルム様はどちらが好きとか、いーとか思ってるんで

す？」

ド真ん中。

豪速球。

そして破壊王の称号をやるう、ホリン。

ミランダのすぎる様な瞳とシルビアの期待に満ちた目が、オレに向けられる。

「・・・ここで、実はホリンが一番好きだ！とか言ってみたら、面白いか？」

ホリンを睨む。

「あはっ、それは嬉しいので構わないですけど、面白さ的には低いですねー。」

大体、ミランダは理解出来るぞ。

なんたつて、オレが生まれてから今迄ずっとオレのお姉さんなんだからな。

けれど、シルビアのこの期待は何だ？

オレ、彼女と出会って一週間弱なんだぜ？

「アルム様。時間はこの際、愛には関係ないんですよ。」

いや、だから心読まないですよ。

「愛ですよ。」

いやいや。

「そもそも、何故にシルビイはそんなにお姉さんを強調するのよ？」

オレの主張は正しいハズだ。

・・・正しいよな？

「お姉さんじゃないと、私とミランダさんみたいなの”年増”は殿方に捨てられてしまいます。」

「捨て・・・られ・・・る・・・。」

ミランダの声が震える。

同時に手も。

何て事を・・・。

ほらあ、オレを見る目が私は捨てられるんですか？と言わんばかり

にウルウルと訴えてる。

「いや、シルビィ、極端じゃない？」

「捨て・・・捨て・・・られ・・・ら・・・。」

ミランダが横でブツブツ呟き始める。

目の焦点が少し合っていない感じ。

「いいえ。殿方は私達みたいなものより、若くてピチピチが好物なんですよ。私達は干物一步手前です。」

「ピチピチ・・・干物・・・。」

ミランダの顔色が心なしか、さつきより青くなっている気がする。ちよつと怖い。

「あのさ、シルビィ？別にお姉さんという括りがなくてもシルビィは素敵だよ？スタイルもいいし、仕事振りも優秀だし、別に年齢とかで嫌いになつたりしない。」

横にいるミランダの手を握る。

「と、言う事をきちんと言うてくださる所が、私がアルム様を好きな理由です。これからもっと知れば、もっと好きになるかも知れません。」

につこりとホリンを始め、オレ達3人に微笑みかける。

「だから、今は”お姉さん”で好感度と親密度上昇期間中なんです。」

あ？

計算ですか？

本気ですか？

「本気ですよ。」

だから心読まないで・・・。

「ズルイ。何かズルイ。」

聞いていたホリンが静かに口を開く。

「何かイヤ！同じアルム様の侍女なんだから、公平に愛せーっ！」
ホリンがオレの膝の上めがけて飛んでくる。

本当に飛んで、こう身体ごと。

「基準がおかしいだろっ！」

怪我したら危ないので、必死に抱きとめる。

「アルム様はダークエルフでも偏見持たないし、差別もしない人なんだから、愛情も差別しないで公平に下さいつてコトだよ！」

「あらあら、まあまあ。」

原因を作った張本人のシルビアは、完全に傍観を決め込んでやがる。

「愛情を安売りして、バラ撒き過ぎるのも問題だろ。」

「そこは気前良く、ね！」

ね！じゃないっ。

ケラケラと笑っているホリン。

コイツ何処まで本気なんだ？

「アルム様……。」

横のミランダがようやく立ち直ったみたいだ。

良かった。

「……あの後、私に寵愛を下さらなかったのは、私の身体が興味を持つに値しなかったからなのですね……？」

だああああーッ！！

かろうじて聞き取れた言葉は、物凄く自嘲的なものだった。

抱くとか、抱かないの話……まだ覚えてたのか……。

オレ的にはもう思考の彼方どころか、抹消したい恥ずかしい台詞なんだが。

「ミラ。君はオレの大切な家族だ。」

仕方なくミランダの肩を抱く。

膝の上で横になってしがみ付いているホリンが邪魔だが、この際仕方ない。

つか、オマエは陸揚げされた魚か！

でも、ホリンを投げ出すワケにはいかない。

寧ろ、その方が五月蠅くなりそうだ。

「あらあら、器の大きい愛ですね、アルム様。3人同時だなんて

」。

「シルビアは絶対に楽しんでるな。でも、嫌いになれないけれど。」

「楽しいですよ。沢山、愛して下さいね。」

何時もの間のびした声じゃないのが気になる。

でもね、心読まないで・・・そして、これ以上かき回さないで。

終始、馬車の中はこんな感じだった。

お陰で夕暮れの夜営の時には、心身ともにぐったりしてしまった。

オレの疲労度を見たミリィは、オレ達の馬車の中での出来事を知らないで、

首を傾げるばかりだった。

静けさと瞳と乱れ髪。 (前書き)

他作品、【いつか君の名を喚んで】もよろしくお願いいたします。
向こうと同じで、こっちも投稿日(24時間以内)のユニーク一定
水準以下で打ち切り縛りにしようかと・・・。
基本的に更新等は活動報告に記載しています。

静けさと瞳と乱れ髪。

馬車を止め馬に水と干草を与えた後、夜営用の天幕を3つ張った。食事と暖の準備も同時並行だ。

馬車の中で寝るのもアリだったが、結局全員天幕で寝る事にした。天幕の一つはオレ専用との事だったが、流石に旅行中の夜営にそんな我が儘ブーはどうよ？

と、主張したら周りの人間に一笑にふされてしまった。

だから、これでもオレ皇子……。

仕方なく譲歩するしかなく。

オレとミランダとレイアで1つ。

レーダ・ホビイ・ザツシュ・バルドで1つ。

ミホシ組（絶対呼び方定着させてやる）とクリスで1つ。

こういう割り振りになった。

男女分けが当然なんだが、ミランダが馬車内で半壊してしまったので、仕方なくオレと一緒にだ。

警備に関して譲れないとレイアも一緒。

まあ、ザツシュと交代で不寝番するらしいからいいが。

個人的には、オレも男組に入ってアレコレ話したかったんだがなあ。馬車でもぼつんだったし。

クリスは香草をふんだんに使った料理を用意してくれた。

この香草、あの大男のホビイが街道の林に入ってももの20分程度で採取してきた。

新たな才能を見せつけられた形になったワケだが、ホビイ恐るべし。メシを食べて明日の予定を確認したら、やる事がなくなってしまうた。

。本当は『明日の馬車の組み替えを！』と高らかに叫びたいのだが……。

天幕の割り振りであんだけ言ったうえにそれはどうよ？と思ったの

で自重。

明日もシルビアとホリンに振り回されるのは確定だ、コンチクショウ。

それを考えると目からしょっぱい液体が滲み出てきそう。

結局、ザツシユが火の番をすることになって、皆は早々に天幕に引き上げた。

勿論、オレも。

「アルム様、お寒くはありませんか？もっとくつついて下さって結構ですよ？ささっ、ぎゅぎゅっ。」

少し息を荒くしてすり寄って来るミランダが怖かったが、これ以上で過保護っぷりが溢れ出しても困るので多少くつついた。それで随分と気を良くしたらしい。

ただオマエがくつつきたかったただけだろ！とか言っちなよ？これでも色々と限界なんだ、今日。

主に精神的に。

それに天幕に入る人数が少ないと逆に寒かったりするし。

しかし・・・ミランダと一緒に寝るのは何年振りだろう・・・。

「あ、レイア？タコ・・・じゃなかった、バルドがいるから大抵のコトは大丈夫だから無理はしないような。」

「お気遣いは無用です。」

オレに背を向けお団子頭を結び直す為に解きながら、ぼっさりとオレの主張を跳ね返す。

やっぱり髪を解いてみると異様に長かった。

長いその髪を櫛に通しながら、また再び編み込んでいくワケだ。ふむ。

「レイアの髪は、いい色合いで綺麗だな。」

ぼつりと洩らした言葉に突然レイアが振り向く。

「何をっ?!」

心無しか照れているのか、顔が赤い。

「いや、昔から好きだった花の色と同じで綺麗だなと。任務中はお団子頭だからちよつと勿体無いね。」

肌の美しさはホリンが一番だと思う。

スタイルは圧倒的にシルビアが一番だし、愛らしさではミリィが一番。

髪はダントツでレイアだな。

クリスは格好良くて料理の腕は抜群だし。

やっぱり素晴らしい女性揃いだな、ヲイ。

「・・・そうですね。」

レイアは淡々と髪を小さな束に分けて結っていく。

慣れているせいか、その動きは澁みない。

「あの？」

ふとレイアが髪に視線を向けたままで話かけてきた。

良かった・・・無言は気まづかったから。

ミランダ？

オレにすり寄ったまま、とつくに幸せそうに寝てるよ。

やっぱりくつついて一緒に寝たかっただけみたい。

「何だい？」

ミランダの寝顔に微笑みながら、レイアに返事だけはする。

「その・・・あの・・・何故、長剣なのですか？」

物凄く、ホント物凄く遠慮がちに聞いて来るレイア。

”皇族は伝統と格式に則り、すべからく双剣を嗜むべし。尚且つ、

諸貴族・諸兵士もこれを奨励すべし。” だもんな、基本。

あ、だからバルドは例外ね。

規格外の強さだから、アレ。

双剣うんたらの規則で排除して違う国に行かれて敵対までされた日にゃ、たまったモンじゃない。

とかいうのが先々代が登用した理由だとかなんとか。

いや、有り得そうで何とも言い難い。

判断的には確実に正解だと思うが。

「それはレイアだつてそうだろう？」

だからオレも気になつてる。

「そうですが、それとこれとは……。」

「同じだよ。断言は出来ないけれど、同じなんだと思う。」

オレの場合は、大半は反抗心と鬱屈だけど。

三つ編みの束を何本か作つて、お団子状に巻いていく。

もうそろそろ礼のお団子が完成だ。

「女性だけでも目立つのに長剣使い。そりゃ今まで浮いてただろ？」

同じ皇族なのに長剣使い。

オレの場合は隠してたから、知っているのは母上とバルドだけだが、母上に何故知られたのが、最大の謎である……バルドも話していないつて言うし。

聞いても素で『母の愛。』の一言で終りそうだ。

いや、終るな。

「女性なのはレイア、君が悪いワケじゃない。それは事実として受けなきゃいけない。受け入れたうえで生きていかなきゃね。」

お団子頭を作り直したレイアの肩に手を置く。

「あ……。」

「譲れないモノや決意の為に長剣を選んだ。そこに意味があるなら、それを誇りと言うなら歓迎するよ。」

それだけが証明だと言うなら。

「自分らしくある為ならば否定しない。オレには出来ないから。この任務を足がかりにでもすればいい。ちょっと寂しいけどね。」

何だろう？

何だかんだいって、ミホシ組も料理人組もザツシユもレイアもオレのお気に入りになつてんだよな。

人間として、実際オレより遙かに素晴らしい。

「アルム様……。」

肩に置いたオレの手をレイアがそつと握り返してくる。

「レイア……。」

髪を結び直し、振り返ったレイアと目が合い見詰め合う。
外はとても静かで・・・。
静かで・・・。

静けさと瞳と乱れ髪。(後書き)

他人に偏見を持たない皇子。

彼は、それがどれだけ凄い事が気づけない点においてアホだと思
う、今日この頃。

好きと嫌いとは姦しな。(三ミリ視点)(前書き)

まだ現状、読んでくださる方がいる雰囲気・・・何時までいけるのやら。

とこころで、おんにゃのこ視点って必要ですかね？(苦笑)

好きと嫌いどっちだ。(三リイ視点)

「馬車の中で何話してたんですか？」

最近ノケモノにされている気がしていた私は、ホリンさんとシルビアさんに喰らいついた。

「馬車の中ですかあ？」

きよとんとしている二人。

誤魔化そうとしたって、騙されないんだからっ。

「あはっ、んとね、アルム様がミランダさんとシルビアさんのどっちが好きなのかって話してたんだよっ。」

ホリンさんが夜着に着替え終わって答えてくれた。

薄い夜着にうつすらと褐色の肌が透けていて、綺麗な身体の線が出てる。

私と違って、物凄く引き締まってる・・・羨ましい・・・。

確か、彼女の肌はアルム様もお気に入りだった。

「はい」。私の愛情がどのくらい届いているかの確認です。」

おっとりとしたシルビアさんの夜着の布地は、胸のところまでで今にもこぼれ出てきそう。

すっごくドキドキする・・・私も女なのに。

「えっ？シルビアさんって皇子が好きなんですか?!」

「いけませんかあ？」

首を傾げるシルビアさん。

「いくらなんでも、侍女と皇子じゃ・・・。」

「アルム様はそんなの気にしないって。」

確かに皇子は優しく、ホリンさんの言う通りなんだけど。

「それにしたって・・・。」

「あらあら、愛に国境も種族も性別も関係ありませんわ。」

・・・性別はどうかと思う。

「そ、そんなに好きなんですか？」

「最初は違いましたけどお、お話していくうちにとても素敵な方だと思ってきました。」

シルビアさんはうっとりしてる。

見ていると鼓動が早まるのは何故？

「皇子というか皇族らしくないよね、アルム様。貴族みたく偉そうじゃないし。」

あははと笑うホリンさん。

「まあ、ちよつとエツチだけど、男ならあのくらいはしょーがないつしょ。」

時折、目線がそんな感じだけど・・・。

「愛の器が大きいだけです。」

何処まで大らかなんだろうシルビアさん。

「確かに器が大きいか、ドアホかどっちかだね。」

「ドアホってホリンさん・・・でも、ヴァンハイトの第二皇子つて余り噂聞きませんよね？皇太子様のお話は聞きますけど・・・。」

身の回りは今迄ミランダさんが一手に引き受けて指示をしてたから、侍女仲間でもほとんど話を聞いた事がないし。

「色々あって、目立たないようにしてるのですねえ、きつと。お兄様にも気を遣って。」

「そうなのかな？」

「だから今回たく居城を移されるのですねえ。私達がお寂しくならないようにお助けしませんと。」

「お助け？」

「はい。朝から晩から一晩中お助けです。」

一晩中・・・？

皇子とシルビアさんが？

「だっ、だだだ、ダメですよ！」

一晩中って！

「ダメ、ですかあ？」

「だ、ダメです！そんな侍女と皇子が、ひ、ひ、一晩なんて。」

「ミリイ、顔真つ赤だよ？まあ、貴族相手に夜伽とかったのは、よくある話じゃん？」

さらりと……。

「よ、よ、よ、夜伽って?!」

「命令されたら、逆らうワケにいかないしねえ？」

そ、そ、そ、そ、そなのっ?!

そういうものなのっ?!

「私は別に構いませんよ。アルム様なら優しくしてくれそうですし。」

「あ、確かにそーカモ。アルム様、相手がダークエルフでも差別しないし、一晩中肌とか褒めてくれそーだわ。」

「ホリンさんまで!」

「あら、ミリイちゃんも一緒よ?」

私も?

私が皇子と?!

ひ、一晩中……。

顔が熱くてクラクラしてきた。

「なーんてね。アルム様がそんなコトするワケないじゃん。したとしても断れば、それでお終い。」

クスクスと笑い出すホリンさん。

笑い事じゃないって!

「そうですね。無理強いはしませんわねえ。」

ど、どこまでが冗談なの?!

「でも、お願いされたら考えてしまいますわ。」

シルビアさんが困ったとばかりに腕を胸の下で組んだ。胸が盛り上がって、何か凄いコトに。

「あはは、そだね。私も少し考えちゃうかなあ。」

ホリンさんまで賛同する。

「私は……困っちゃう……。」

皇子は優しい。

失敗しても今までの上司のようにには怒らない。

次、気をつけると言う。

食器を割っても、まず怪我がないかを聞いてくる。

大丈夫だと答えると、私の鼻を摘んだり押ししたりして去って行く。

このそばかすだってそうだ。

周りに散々からかわれてきたコレだって、皇子は初対面の時『可愛
いね。』と言ってくれた。

「嫌いじゃないケド……。」

総合するとそんな感じ。

あれ？

嫌いな要素が何一つない……？

「では、好きになるように明日はアルム様と同じ馬車に乗ってみ
ましょ。」

ぼんつと手を叩くシルビアさん。

「お？名案。好き嫌いは別としても仕える相手なんだから、よく
知るのはいいいカモね。はい、決定！」

パチパチパチと拍手をするホリンさん。

私の意志は何処に？

「ザアツシュツ！火を消せ！困まれてる……！」

闇夜に誰かの叫び声が響き渡った。

好きと嫌いと姦した。(ミリィ視点)(後書き)

次回！初戦闘パート【前】へ！

次回があるかどうかはわからないですけど(トオイメ)

戦慄と闇夜と血の薫り。【前】（前書き）

需要あんのか？この話・・・？

せめて第一部完！とか言って終わりたい。

戦慄と闇夜と血の薫り。【前】

握ってきたレイアの手が暖かい。

彼女の手の平が当たっている部分が少しザラザラする。きつと剣ダコだ。

彼女の手が柔らかくないのは多少残念だが、理由が理由なので尊敬や贅辞の念の方が強い。

無言でオレを見詰めるレイアにオレはにっこりと微笑む。やはりレイアは努力家なのだ。

そういうのが部下にいるのが嬉しい。

心無しか、彼女の顔も微笑んでいるようにも見える。

静かな夜。

静か？

・・・何だろ？

何時もの夜と何が違うんだ？

外で横に人がいて・・・微かに音がして・・・聞き慣れない音。

（視界の隅？）

荷物の方だ・・・布に包まれた荷物。

確か・・・また聞こえる・・・金属音みたいな。

剣？

布に包まれている荷物の中身には剣もある。

”ディーン”の剣”が・・・鳴っている？

「レイア。」

オレはレイアの肩に乗せた手を彼女の手ごとそこから下ろす。

彼女は少し残念そうな顔をしているけれど・・・。

それよりも・・・全く腑抜けるにも程があるぞ、オレ。

「ザアツシュツ！火を消せ！囲まれてる！！」

大声を上げた瞬間レイアの瞳はたちまち鋭さを増し、彼女はその場に立ち上がる。

オレも自分の剣を取り、横に寝ていたミランダを蹴り起こす。緊急時だ仕方ない！

先に天幕を出たレイアの後をすぐに追う。

既に剣は抜き身だ。

勿論、バルドに用意させた長剣。

自分の身を護る為にディーンの手は使えない。使いたくない。

”ディーンを傷つけた血筋を守る”事なんかには。

ただの道具だと言われればそれでお終いだ、オレにとってアレはディーン之魂。

彼の高潔さそのもののような気がして……。

「レイア伏せろ！」

天幕から出た瞬間、彼女の襟を掴んで無理矢理伏せさせるとすぐさま矢の風斬り音が聞こえてきた。

「ハッ！」

バルドが林に飛び込む音が聞こえる。

流石に反応が圧倒的にオレより早い。

「バルド！左回りだ！」

すぐさまバルドに指示を出す。

「ザッシュ！ミホシ達を！レイア、君はミランダと料理人達を。」

「しかし……。」

「行け！馬は守らんでもいい！」

レイアの背中を叩いて、オレは林へとなるべく低い姿勢で走りこむ。

さっきの指示でバルドは夜営地を中心に左回りで動く。

本当はオレは右回りで動いてすぐに合流するべきだが、こっちの手数が少ない。

諦めてオレも左回りで走り出す。

矢の音のした方向へ直線的な動きをしないように進む。

すぐさま視界に入る射手。

ソイツはオレを確認すると弓を引き絞る構えに入ろうとする。オレは諦めた。

自分が無傷でいる事をじゃない、相手が無傷でいる事をだ。

ためらう事なく矢を引き絞ろうとする手を手首から斬り落とす。

反射的に弓を捨てて斬られた手を押さえる相手の反対側の手も返す刃で叩き斬る。

人の命を奪おうとしたんだ、命を取られないだけマシと思って欲しいけど。

本当にオレは甘い。

そのまま歩みを止めず、木を盾にして左回りを続行。

次のヤツはつがえる弓矢を距離的にも早さ的にも防げなかった。

全力で剣を相手の肩口に投げつけ、突き刺さった剣目掛けて飛び掛る。

もんどり打ってあちこちにぶつけたけれど、痛みは今は無視だ。

そのまま剣の柄をすぐさま掴んで、剣で肩を抉るようにして引き抜く。

傷口も大きくなるし、これなら痛みでオレをどこころするどころじゃないだろう。

引き抜いた刃をソイツの顔にあて、横風に払った。

「目があっ！」

声は男のようだった。

男は顔を斬られて血が溢れ出したであろう目を押さえて、悶えのた打ち回る。

残酷かも知れないが、戦力を無力化させるなんて相手より少人数のオレ達には、こういう風にするか命を絶つしかないんだよ。

話し合いというのは戦いが始まる前のもののが基本で、向こうから一方的に攻撃されたら自分達を護るしか手段はないんだ。

「次……。」

ごろごろと悶えている男の腹を強く蹴り飛ばし、黙らせてからオレは更に進む。

大分、月明かりに目が慣れてきた。元々、オレは夜目が利く方だ。

剣を手にした人影が視界に入ってくる。

向こうもオレを認識したようだ。

（双剣？）

一瞬、何か腑に落ちないモノがあったが、とりあえず一時放置。人影へと突き進む。

コイツの相手は少し手こずった。

何たって双剣だ。

片手だけに気をつけていても無意味なのは当然。

手こずる程度が”少し”なのは、双剣使いの動きと型なんて今迄飽きる程見てきたって点が大きい。

結局、双剣の片方を叩き落した時点で勝負は圧倒的だった。

この暗闇と打ち合いじゃ、一度落とした武器なんざ拾えるワケがないから。

とりあえず、コイツは逃げられない程度に両足を斬りつけた。

色々と聞きたい事もあるし。

「ふう。」

息をすぐに整えて進まないと……。

「はあっ！」

後ろからの気配に吸っていた息を吐き出して剣を振るう。

刃と刃の激突に火花が散る。

（何て重い打ち込みだ！）

手が痺れる……やべえ！

戦慄と闇夜と血の薫り。【前】（後書き）

戦闘パートになんとかこぎつけましたが、前編です。
皇子最大のピンチ！で引きです（爆死）

戦慄と闇夜と血の薫り。【後】

「つて、若か。」

頭の上から落ちてきた声は聞き慣れたバルドの声だった。

「危ねえ・・・勘弁してくれ。近衛隊長に護衛対象が背中からバツサリって冗談にもならん。」

どうやら左回りで、背中側から追いつかれてしまったらしい。

「そんなもんだだの暗殺だぞ、暗殺。オレを暗殺してどうするよ。」
本当に笑えない。

オレの間抜け伝説とかつてのを作ろうというなら別だが。
寧ろ、華々しい記事の一つになるだろう。

「しかし、若も気配の察し方が巧くなってきたのオ。」

本当はディーンの剣のお陰だけだな。

普段なら気づいたが、あの時はレイアに神経が行ってたから・・・
・・・不覚。

しかし、何でディーンの前は鳴ったんだろう？

今迄あんな事無かったのに・・・。

「それはいいとして、コイツ等どうするかな・・・？」

両足を斬られて身動き出来ない男を見下ろす。

「とりあえずは連れて行って事情を・・・若ッ！」

バルドの声で反射的に身を低く構える。

矢の風斬り音。

トスツと乾いた音を立てて、それは突き刺さる。

バルドでもオレでもなく。

眼下にいた男にだ。

「・・・お見事。」

見事に即死。

見事に口封じだ。

首を締め合った後、オレとバルドは皆の所に歩いて行った。

口封じをした以上、もう敵はいないだろう。
その気配もない。

「納得いかないな。アイツ等、山賊か刺客だろ？可能性的に。」

「若の立場からすると、刺客の線は薄い気もしますがの。」

「そうなんだよ。」

前にも説明したけれど、兄上の派閥の貴族達は一枚岩だし（兄上の人徳万歳）。

オレを担ごうとする貴族は論外だし。

反皇族派とかの類だったら、どう考えてもオレより兄上優先だろ？

刺客になるようなヤツ自体が少ない。

だってねえ？

他の皇族に比べて、殺して得られる益が極端に少ないんだもんオレの命。

敵にも人気がないオレ。

良い事なんだけどね、うん。

「じゃあ、何でアイツ等は仲間を口封じみたいな殺し方するんだ？」

別に末端の部下なら殺さなくてもいいだろ？

殺さなきゃいけない理由でもあるのか？

「山賊だってアジトの場所が割れるのは困るでしょう？」

「だったらアジトを引き払った方が早くて確実だろ？オレ達が生きている時点です。」

オレは剣についてるだろう血糊を振り落とす。

「生存者がいる時点で、明日には兵士達に搜索されるのは目に見えてるし、時間稼ぎする必要もない。」

「だって今すぐオレ達で強襲！という人数すらいないってんだからな。」

相手だってそれをわかっているハズ。

「・・・それに殺されたヤツは双剣使いだっただ。」

山賊なら斧とか長剣とか細剣使ってもいいんだぜ？

皇族でも皇国兵士でも何でもないんだし。

わざわざ双剣なんて不合理的過ぎやしないか？

「では、若は刺客路線と見ていると？」

首を捻るバルド。

「という考えも持っていないんじゃないかってハナシ。少なくとも独立的な貴族派閥はいないワケじゃないんだし。」

ヨアヒムの叔父みたいいな・・・ん？アレが刺客の親玉という可能性もあるのか。

「それもあからさま過ぎるなあ・・・。」

「心当たりでも？」

ふと向こうから人影・・・あゝ、レイアかな、うん。が駆けて来る。

「そのいちっ！」

走って来るレイアだけでなく周りに聞こえる大声で叫んでみる。

もしかしたら、奴等の一味が聞いているかも知れない。

「ただの山賊っ！そのにっ！貴族派刺客！」

人影はオレの無事を確認したらしく、その速度を上げて走ってきた。

「アルム様、ご無事でしたか！」

人影〓レイアはその勢いのまま、オレに抱きつく。

彼女を抱き返し・・・。

「そのさん。」

オレはバルドとレイアにかろうじて聞こえるくらいの小声に音を絞る。

「オレに向こうに行かれたら困る、来てもらいたくない奴等。」

最後のその声にレイアは驚き、バルドは剣呑な目を光らす。

「うむ。何というか、城を出たらワシのよく知っている”冴えた若”に戻ってきましたな。」

バルドと一緒に稽古していた頃の目でオレを見る。

ああ・・・声に出したら余計にぐったりしてきた。

オレ、隠居する為に向こうに行く設定なんだぜ？

周りにもそういう風に言っ出て発してきてるんだぜ？
確かに基本的にだけでもさ。

結局、その日は天幕の距離と数を絞って近衛兵＋1人。
不寝番で交代しながら過ごす事にした。

ちなみにオレの身体中をミランダを押し退けてチェックし始めたレ
イアが、幾つかの切り傷を見つけて大騒ぎした。

んで、激しく説教された。

主に自重しろと。

戦慄と闇夜と血の薫り。【後】（後書き）

ノーブラン皇子に何やらキナ臭い展開に・・・。
そして、書いてる方もノーブラン（爆死）

即効性と言葉と女心。 (前書き)

投稿予定は活動報告にてお知らせしています。
またお気に入り登録感謝です。

即効性と言葉と女心。

翌朝。

とりたてて何も無い普通の朝だった。

昨夜は、なんだったというくらいに。

でも、そんなオレの感想も出発までだった。

何が起きたのかわからないのだが、馬車内の面子が変わっている。

一台目は、オレ・ミランダ・ミリイ・レイア

御者だったレイアの代わりを務めたのは、何とホビイだった。

”動物に愛される男”ホビイ。

つか、本当に彼は料理人なの？

抜けたホビイとミリイのいた二台目の馬車にホリンとシルビアが移動。

昨夜、ちよつと、ほんのちよつと切り傷を作ったのが、レイアの近衛兵としての何かを刺激したのか？

彼女はオレの横の席を譲らなかつた。

オレとしては任務に忠実なのはいいが、そんなに意気込まなくてもと思う。

怪我をしてしまったのも事実だし、ばつちりと説教をされたもので強く出られないでいた。

ちなみにミランダは、オレの向かいの席で恨めしそうに見てる。

何でだ？

ミリイはミリイで、さっきからこっちをチラチラと見ては、目が合う度に慌てて目を逸らすを繰り返してる。

こっちも何でだ？

「レイア、昨夜は悪かつたからもう少し離れて。あとミリイ、何か言いたい事があつたら言つてごらん？」

もつどのみち言わなきゃならないなら、さっさと言つて楽になりたい。

「え、あ、あのっ、レイアさんも皇子の口ト好きなんですか？」

「私がつ?!」「もって何だっ!もって!」「やっぱりレイアさんも敵?!」

順番にレイア、オレ、ミランダ。

てか、ミランダよ、何だ?その認識は。

「ひっ?!」

あー、あー、怯えとる怯えとる。

じゃなくて。

「ミリイ?何でそういう結論に至ったか言ってみ?大丈夫、怒らな
いから。」

理由をな、聞かないとどうにも反応しづらいなだわ、ウチの女性
達は。

こんな時、ホリンの真っ直ぐな物言いは楽だと思う。

・・・こんな時だけな。

「き、昨日の夜、ホリンさんとシルビアさんと話してて・・・。」
脱力。

「話してて?」

どうせ口クナ事じゃないという前提。

「シルビアさんはシルビアさんで、『二人の愛は育むものです。』

とか言うし、ホリンさんも『アルム様ならきちんと愛してくれそう
だ。』って・・・。」

「ホリンさんと・・・シルビアさんも敵・・・。」

ミランダが何やら変なのは放置だ。

「では何故、私か!」

レイアがミリイに喰ってかかかか。

そっだよ、レイアの名前は今のミリイの話に出てこなかったしな。

「え?え?だって、今のレイアさん、二人が皇子の話をしている時
と同じような表情してたから・・・。」

「なっ?!」

ん?

んん？

意味が良くわからんぞ？

ともかくミリイは二人にからかわれたんだな、昨日。

「わ、私は、そんな、ただアルム様が心配でだな。昨夜のような事もあつたし。」

「でも、レイアさんも皇子に夜伽とか頼まれたら、二人みたく断らないんですよ？」

「よ、よっ、よっ……。」

レイアが顔を真っ赤にして口をパクパクさせている。

「つて、マテ、マテ。まるでオレが夜伽を命令した事があるみたいな言い方じゃないか。オレは欠片も言つた事ないぞ！」

「本当じゃないんですか!？」

ミランダがオレの眼前にまで迫ってくる。

「断じてない。」

大体なんだ、夜伽つて。

そんなのを命令する時点で、メイドの人格を何だと思っている。

オレはそこまで皇侯貴族の特権意識に凝り固まってないぞ。

後宮を作るとしても、相手は自分で選ぶと公言しているくらいだからな。

「だから、レイアさんも同じくらい好きなのかなつて。」

「だから”の接続詞が何処から繋がっているのか、皆目見当もつかん。」

全てが妄想状態で。

「私は！アルム様の事は何とも思つてはいない！」

ちよつと痛い。

刺さつたよ、うん。

「あ、いや、その、どうでもいいという事ではなくてですね、アルム様は私の使命の中で護るべき方で……。」

レイアの声が尻すばみになっていく。

「きちんとした忠節をもって、その……。」

大慌てで取り繕うのだが、逆にその様が痛い。

「やっぱり・・・敵・・・。」

ミランダがぼつりと呟く。

オレの姉は、何が何でも弟の一番になりたいらしい事は理解した。十分に理解させられました。

「レイア、大丈夫。わかっているから。ミリイも二人にからかわれたんだよ。向こうに着いたら不用意な事は言わないようにね。」
なるべく、やんわり。

ミリイは失敗が多いせい、強く言つと際限なく落ち込むから。普段は明るくてとっても可愛らしい頑張り屋さんなんだが。レイアは想像通り堅物だし。

「はい。・・・でも、皇子はどうなんです？」

「どうって？」

「皇子はどう想ってるのですか？」

静寂。

一瞬で馬車内が静寂に包まれた。

何、この既視感。

ゴクリ。と、誰かが何かを飲み込む音がやけに大きく響く。

「ええと、誰を？」

「みんなです。ミランダさん、シルビアさん、ホリンさん、レイアさん・・・あと私も。」

クリス以外の女性陣全員をどう思ってるか・・・か。

ところで、3人の視線が物凄く熱いんだが・・・熱いというより鬼気迫るものが・・・。

「それは・・・。」

「・・・それは?!」「」

うう・・・。

何だよ、この拷問。

洗いざらいブチ撒けるか。

やだなあ・・・女性に軽蔑とかされたりする結末。

「ミラは乳母姉弟だったから、オレにとっての初めての家族だと思ってる。皇族なんて忙しくて家族と認識しづらいからな。」
滅多に会った記憶もない。

「だから居ないと困るし、落ち着かない。色々と助けてももらっているし。」

「感謝・・・居ないと困る・・・。」

表情をぱつと明るくするミランダ。

「普通ですね。」

「普通?!」

すぐにミライに一気に叩き落された。

段々とホリンに似てきたか？

「ジルビイは掴み所が無いけど、優秀過ぎるし、服が侍女服ってだけで貴族みたいだし、美人だし、女性から見ても魅力的だろ?」

「確かにそうですね。ドキドキします。こぼれそうだし。」

「こぼれそうだよな・・・。」

破壊力は魔王クラス。

何処がともう言わんぞ。

「ホリンはダークエルフだってだけで、大変だっと思うんだ。森から出て人間社会で仕事してさ。」

森が出る事ですら、一大決心だったんだろ。

「性格はともかく、腐らずに今まで生きてきたんだ。凄いと思う。」

それにオレはダークエルフは嫌いじゃない。寧ろ、綺麗で大好きだよ。」

そう言えばディーンの剣も黒かったな。

無意識だったが、黒色好きなのか?オレ。

「レイアもホリンと同じだな。女で長剣。国の兵士になるのだった大変だ。どんなに優秀でも正当に評価されないかも知れない。そんな場所だしな。」

言つて吐き気がする。

そんな環境を作った張本人の血筋なのだから。

「それでも頑張っている。この仕事が上に行く為の手段になるなら、大歓迎だ。第一、そんな女性が素晴らしくないワケがない。」

ちよつと生真面目なのがアレだが、誠実な事は良い事だ。人間としてな。

「ミリイは・・・そうだな、明るくて前向きなのがいい。見てるとほっとする。とっても可愛いよ。そう言えば、一番抱き心地良さそうだな。」

笑いながら、何時もみたいにミリイの鼻を摘まんでやる。
ん？

随分と皆静かだな。

「何だ？何か変な事言ったか？聞かれた通りに正直に思ってた事を答えたんだが？ヲイ、どうした？」

ミランダは相変わらずブツブツ言ってるし、レイアは俯いて表情が見えない。

ミリイは顔を赤らめながら、エへへと笑っている。

何がいけなかったんだろう・・・女心は難しいものだと良く耳にするが、本当に難しいと実感した。

今した。

佇まいと交錯と勘違い。(レイア ミリイ視点)(前書き)

今回は短くて済みません。

ところで、本当におんにゃによこ視点って必要ですか？

つか、女は(人によるけれど)こんな簡単に男に惚れたりしないで
すよ、ええ。

佇まいと交錯と勘違い。(レイア ミリイ視点)

『そんな女性が素晴らしくないワケがない。』

その方は私をそう評した。

今迄、女性として扱われる時は見下される事ばかりだった。

どんなに訓練しても、評価された事はない。

手合わせして勝ったとしても、女だから手を抜いてやったのだ、長剣使いなんて邪道と戦っても意味がないのだ。

正直、うんざりしていた。

この仕事だって、先の剣術指南役の存在が大きい。

双剣が正道のこの国で、唯一の例外が復職すると聞いたからだ。

まさか自分が仕える方、しかも皇族が長剣使いだという事実は心底驚いた。

しかし、同時に嬉しかった。

自分が認められた気がして。

昨夜だって、長剣使いを使う事が誇りや決意ならば歓迎すると仰って下さった。

まさしくその通りだったから。

そして、彼は更に言葉を続けた。

否定などしない、と。

我が主は、私の全てをお認め下さっているのだ。

女性としての私も、髪が綺麗だと褒めて下さった。

勿論、騎士としての私も。

それはつまり私の全て。

あの時に肩に置かれた手の温かさを思い出して、胸が熱くなる。

私は私の全てを捧げて、女として騎士として仕えるべき主。

アルム様を見つけたのかも知れない。

いや、アルム様が本当の私を見つけ出して下さったのだ。

そう思ったら胸どころか身体中、顔まで熱くなってまともに顔を見

せられなくなってしまうた。

『一番抱き心地良さそうだな。』
抱くつて・・・夜伽ですか？！

と、言うとかホリンさんやレイアさん、ミランダさん、シルビアさん。
ん。

そういう人達より？！

だって、皆、胸が凄く大きいし、抜群の身体つきだし・・・。

私なんて、ちんちくりんのソバカス娘なのに！

あんなに美人揃いの人達の中で・・・。

私が・・・一番・・・。

て、それって皇子って私を抱きたいって事なのかな？

こんなコトを言うなんて、そうなんだよね？

嫌いじゃないんだよね？

どうしよう・・・本当に頼まれたら。

迫られたりしちゃったら。

あー！！

胸がドキドキするよー。

今すぐにもジタバタと暴れたい気分。

でも！でも！

よく考えてみたら、クビ寸前の私を拾ってくれて・・・。

未だに失敗だつてしまくつてるのに、怒らない。

勿論、クビにだつてされてない。

・・・大恩人だよね・・・。

皇子が望むなら、その、恩返しって、意味で・・・いいかな？

私、他に返せるようなモノ持ってないし。

皇子が私の身体でいいって言うなら、ね？

でも、想像しちゃったりしたら・・・。

「エへへ・・・。」

顔が熱いや。

知見と暗雲と城下町。

何だ？

この異様な馬車内の熱は？

誰も何も喋らないし。

さっきまでの弾んだ（？）会話はどうした？！

誰か何か言ってくれ。

「そろそろ、城下町前の街道に入るっスよ。」

「良くやった、ザツシュ！」

最早、神業だ。

今程にキサマのあえて空気を見ずに行動する能力に感謝した事はナイ！

ザツシュは淡々ときちんと仕事をこなす様はスバラシイ。

勤勉は良点だ。

「いや、これも仕事っスから。」

その我、閑せず的などころもまたイイ！

「で、どうよ、大外の町の状況は？」

馬車の御者窓越しに聞いてみる。

”大外の町”というのは、城下町の更に外側の外縁部にある町並みの事だ。

「どうにもこうにもっス。速度を落としますから、窓から直接見て下さいっス。」

そうだな、自分の目で見た方が早くていいか。

「なんじゃこりゃ……。」

街道に面した町の店らしき場には、人通りはまばらだった。

宿らしき建物の前には、呼び込みの姿すら見えない。

「あー。もうこの先、嫌な予感しかしないよ、レイア。やっぱりアレっばい。」

オレは横で俯いていたレイアを手招きして、馬車の窓から外の様

子を見せる。

「・・・その3ですか？」

「かなあ・・・でも、それだと露骨過ぎないか？」

隠す工夫とか襲撃の幼稚さとか。

「確かに粗末な気もしますが、そもそも成功していたら私達はこの光景を見ていない訳で・・・。」

ああ、そうか、そうだよな。

確かにあの場でオレが死んでたら、この光景を見る事はない。
にしたって・・・だ。

「だったら、失敗した時の事を考慮したり、隠蔽工作をだなあ？」

いや、でも、もしかして・・・。

「意外と舐められているのかと。」

それしか考えられないよなあ。

まあ、オレ、ダメ皇子としての定評があるからなあ。

まさか、ここまでその噂が浸透しているとは・・・。

「有り得るのかなあ・・・でもさ、ここまでくると、犯人は意外と絞れないか？」

聞き返して何だけれど、答えを聞きたくない。

ヤだ。

耳を塞ぎたい。

「まだ可能性の段階です。」

レイアの答えが優しいんだか、優しくないんだか。

「とにかく、レイア、ザツシュ、気をつけるよ。」

二人は戦闘要員だからな。

気をつけるよ。と言ったが、昨晚の襲撃も淡々と仕事をこなしたザツシュは、刺客（仮）を2人程退けている。

意外と武闘派かつ技巧派。

「そう言えば、ザツシュ？」

「なんスか？」

「君はこの地の出身だったね？ちよつと厳しい状況っぽいのはオレ

達も同じなんだけれど・・・。」

家族だもんな。

大事にしなきゃ。

「何とか暇を見つけて帰れるようにするから。家族とか知り合いとか気になるだろうけれど、少しだけ我慢して。」

本当に能無しなオレが上司で申し訳ない。

「もしかしたら、人手が必要になるかも知れないから。」

悔しいが、味方に分類される人間が、現状少な過ぎる。

これから増えるとは限らないのだ。

ザツシユ達も味方で居続けてくれるか判らない。

裏切り者の血だからな・・・誰に裏切られたとしても当然だよな。

でも、裏切るよりは裏切られる方が、断然マシ。

特に自分が信じた人間にならね。

「大丈夫っす。ウチの家族はそんなヤワじゃないっす。」

ザツシユは御者席で笑っていた。

白い歯が健康的で眩しいぜ。

「アルム様、何時迄そうしているおつもりですか？」

「へ？」

ミランダに言われて気付いた。

馬車の窓から外の景色を見る為にレイアの肩を抱き、彼女の息がかりそうな至近距離で密着していた。

「すっ、すみません！」

そそくさと離れるレイア。

うっん、可愛い。

「可愛いな。」

「え？」

ヤベ、声に出た。

「しかし、いいのかね。こんなイイオンナとイイオトコの部下に囲まれてて。オレ、廃嫡状態覚悟なのにさー。」

レイアへの言葉を誤魔化しつつ。

でも、皇族制が無くなれば確定だしな。

再び顔を赤らめる3人の反応を見たザツシユは、無駄に爽やかに笑っていた。

ぐぬぬ。

こうして城下町を抜けて州府を通り過ぎ、半日以上かけて目的地に着いた頃にはもう夕暮れ迫っていた。

罅迫り合いと面会と戦端。【前】（前書き）

今回は、ちょっとぴり長いので分けてみました。
ご了承を。

罅迫り合いと面会と戦端。【前】

居城とか向こうの城とか言っていたが、正確には城というより砦だ。

元々、都市を切り開く目的と交通の要所として作られたモノで、その外見は無骨。

そして居住性はそんなに良くない。

政務を行う行政も、もつと城下町に近い場所に建物を新造した。

防衛という面もあるせいか町より少し外れて、どちらかと言うとエルフの住む森の方が近いくらいだ。

ただそういった目的もあるので、その位置どりは湖などを挟んだりと・・・まあ、軍事的に堅牢。

ずっと昔からこの砦は存在していたらしく、皇族も一時期ここで政治を行っていた事もある。

そんな理由から、この地は天領。

所謂、皇族の所有する直轄地となっている。

ここでの収入が皇族の資金になるワケだ。

そして、直接この地の采配を振るえない王に代わり、太守を任命して治めさせている。

州名は【リツヒニドス】

治めさせていると言っても、この地は森林からの資源（森の大半はエルフの集落が治めている）。

天領が所有する田畑の管理。

そして、住民からの税金の管理が主な仕事で、あとはそれに関わる治水・開墾等の付託事業がほとんどだ。

長々と説明したが、「つまりは”田舎”というコト。

ちなみに砦の名前は【緑碧城】

森と湖に囲まれて建造されているからね。

安直とか言っな・・・そういう先祖を持ったオレがへこむ。

城は四方を掘と物見を兼ねた尖塔に囲まれていて、無駄に頑丈、無駄に無骨。

ただ、流石に皇族専用という名目があるせいか内装はきちんとして
いる。

後年、使い勝手と居住性の向上に心血が注がれていた跡が多々見受けられた。

「さてと。部屋割りだけけれど、まずはオレの部屋を決めてそこに荷物を全部運び込もう。」

無駄に部屋数も多いし。

「使わない部屋は基本的に放置の方向性。この少人数で全機能を取り戻そうとか思わない。」

別に豪遊しに来たわけでもないし。

城の中には、数人の管理人のような人間がいて、一応それなりの体裁は既に整っていた。

寝る場所も何も問題なさそうだし、手分けしてやればすぐに落ち着いた時間が過ごせるだろう。

オレ用の部屋はもといた城の部屋より小さかったが、前がどちらかと言えば広過ぎたんだと思う。

質素儉約・・・というか、贅沢な暮らしというものがイマイチ想像出来ないオレとしては充分。

だって、いくら良い政治をしたって税金だよ？
金を回すのと無駄遣いは違うよな？

不満があるとしたら、寝台のデカさだった。

4人くらいは同時に寝られるんじゃないのか？ってくらい。
デカイ寝台ってのは、わかってもらえないと思うが寒いんだよ！

寝台に入った時の布の冷たさはゲンナリする。

何処その国では、寝所だけを温める係の者がいるとかいないとか・・・
それはどうかと思うが。

管理人達に手伝ってもらって、荷物をえっちらおっちら運び込む。
勿論、オレも手伝ったぞ。

管理人達は驚いていたがな。

手伝っている間にも周囲の人間との会話や観察は怠らないようにした。

どうやら、皆、皇都から来たのではなく全員地元出身だそうだ。

しかも、よくよく聞いてみるとこの町の治安はそれ程良くないというような雰囲気と言動。

税も高いし、労役も多いらしい。

はつきりとは言ってはくれなかったが。

そりゃ、まあ、このままここでオレが政治したら、上奏しているよ
うなもんだしな。

批判して罰せられたら、たまったもんじゃない。

生計の成り立たない人間は、命を賭けてエルフの森に入ったりするらしい。

・・・何か、予想通りのキナ臭さにかっかりだ。

第一、税率は高くする必要はこの都市にはないし、働きたいヤツは天領の田畑で・・・。

あー、もう、そういうのを考えるのすら嫌なのに。

「しかし、だ。太守とやらは挨拶に来ないのかな。こういう展開は真っ先に飛んで来ると思ってたんだが。」

「ご機嫌伺いくらいは来るだろう？」

「いや、逆に無視を決め込むのもアリか・・・。」

舐められたら終わりってヤツな。

こういう面子とかがあるから、外交って無駄に時間がかかったり、
こんがらがったりするんだよな。

辟易としている間にも仕事は進み、オレは料理人達を厨房に行かせた。

とりあえずは腹ごしらえかな、と。

現状のおさらいもしないとな。

もし、役人が好き放題しているなら、皇族が来ると困る。

これは確定だ。

だつてここは天領。

オレがここに隠居するつてコトは下手したら、委讓していたこの領地をオレが治めるつて事になりかねないからな。

そんなつもりは皆無なんだが。

問題は、もしそつだとしたら一体何処迄がつてことなんだよ。

まさか役人全部が不正とかに関わつてゐるつてコトはないだらう？

知らない奴とか、不満ながらも渋々従わざるを得ないとか……。

そつという様々な理由と流れがあるワケで。

その見極めとかいふのつて……すげえ面倒。

かと言つて、全部血祭りに上げるとかいふ暴君つぷりは論外。

「ぐうわああくあくあつと。」

思わず奇声を上げてしまつたじゃないか。

ぶつちやけた話。

こついう余計な状況を構築している輩を誰か何とかして欲しい。

オレは関わりたくない。

やりたい事をやりたいように画策しようとしただけなのに。

まあ、人を治める人間として優秀なのを採用しておきたいが。

「アルム様、お客様です。州府の太守様がいらつしやいました。」

来た……。

現状、最有力候補。

オレ、まだ食事してないつてのに……。

罅迫り合いと面会と戦端。【中】（前書き）

ごめんなさい、説明部分・新キャラが多かったなので、3つ分けです。
許してください（トオイメ）

罅迫り合いと面会と戦端。【中】

「失礼致します。」

扉から入ってくる二人の男。

先頭は、金の髪を後ろにねめつけた男だ。

にんまりとした表情に太った体。

身なりは一見落ち着いた感じに見えるが、随所に金糸・銀糸の縁取りがなされている。

さり気なく服に金を使っています。とさり気なさ皆無に主張している。

その後ろにいる男は、灰黒色の髪を同じく後ろにまわしてまとめてはいるが、穏やかな表情をしている。

ただ痩せ細っているせいか、眼光が鋭く感じられるのが残念。

うーん・・・どちらも悪人に見えると言えば見えるし、見えないと言えれば見えない。

可能性を考えると、未だに確証が無く山賊説も捨て切れない。

でも・・・口封じの様に殺されていった双剣使いを思い出すと・・・なあ。

決め打ちは良くないんだが、例えば山賊の場合は治安維持の兵は出す事になるが、オレには被害はない。

皇族派・反皇族派だったら、完璧超人かつ弟大好きの上上が手を打つ。

というか、オレがここでこれ以上目立たなければいいので、これも現状は大した問題はない。

やっぱり備えるという意味では、直接に牙の届くコイツ等・・・入って来た二人の男。

太った方はホリンを見て目を見開き、そして眉をしかめる。

あ、もう、コイツ嫌い。

大嫌い。

「これはアルム皇子様におかれては、ご機嫌麗しゅう。」
「ご機嫌ナナメだ。」

全部オマエのせいだ。

「苦しゅうない、硬くならんで良い。」

「ははっ、申し遅れました。私、この州府の太守をしています、スクラトニーと申します。これは副太守の……。」

「カーライルと申します。」

一言だけ喋ったカーライルは、意外と前に出てこないな。
「うむ。」

とりあえずは、馬鹿皇子風に横柄に横槌を打ってやる。

「して、アルム様……今後の直轄領の処遇は……？」

スクラトニーは汗だくだ。

必死に汗を拭っている様は面白いが……。

というか、堪え性のないヤツだな。

もう本題に入るのか？

そんなに叩かれたり、突っ込まれたら困っちゃったりするのかな？

「現状は特に変わらない。貴君に任せよう。」

ん？

心無しかカーライルが、こつちを睨んでる様な……。

不満か？

スクラトニーは安堵して、汗を拭き拭きしているが？

「誠心誠意務めさせて頂きます。」

拝礼をするスクラトニー。

ちよぴり気になる。

そんなカーライルに再び目を合わせてみた。

うん……真っ直ぐオレを見たまま視線を逸らさない。

いい度胸じゃねえの。

オレは彼を見詰めたままゆっくりと頷いた。

意味は、敵なら額面通りに受け取れ、味方なら期待しろ。

正直、今のオレじゃ敵味方は判別出来ないからな。

こうやって明言せずに頷いておけば、カーライルの心の中の希望をそのまま投影して受け取る。

人間て言葉を濁しながら肯定的な雰囲気を出しておく、良い方に受けとる傾向があるんだよな。

心理学の初歩だ。

あ、でも、コイツ賢そうだからなあ・・・ちと、不安。

まあ、こうしておけば何らかの行動をしてくれる可能性が高まる。

「疲れた、少し休ませい。貴君も忙しいだろう、業務に戻りたまえ。私に気を遣う事はない。」

「は？おおっ、これは気がつきませんで。では、歓迎の宴はまた後日という事で。な？な？カーライル。」

「そうですね、閣下。何分、アルム皇子は道中”色々あって”お疲れでしょうから。」

色々あつて？

ああ、色々あつたぞ。

よく知っているな。

「ふむ、そうだな。アルム皇子様に何があつては大変だ。私達は退出しよう。本当に気が回らん者でしてな。」

「大事ない。」

何かあつて欲しいんじゃないかと勘ぐつてもいいか？

「では。アルム皇子、”重ね重ね”失礼致しました。」

カーライルの言葉の後、二人はそのままそそくさと部屋を出て行く。

「重ね重ね・・・ね。何をかな？」

二人を見送つた後、思わず口から出る。

「おっと・・・。」

一番大切な事を忘れてる所だった。

オレは部屋の端に控えていたメイド達の方へ歩み寄る。

正直、スクラトニーはやっぱり好きになれんタイプだ。

理由は単純。

オレはホリンの前に立ち、彼女を抱き締めた。

「気にすんなよ、ホリン？オレには君が必要だからな。」

アイツのホリンを見る目が許せない。

嫌いになる理由はそれで充分だ。

我が儘か？

コレは皇子の我が儘か？

「あ、アルム様！？いや、その、大丈夫ですよ。あんなの慣れてますから。」

「慣れなくていい！そんなの慣れる必要なんてないんだ。慣れてしまう方がおかしいんだ、間違ってる。だから慣れなくていい。」

「・・・アルム様。」

何がいけない？

人間社会にいる事か？

存在すら罰なのか？

だってそうだろう？

彼女はスクラトニーの横に立っていただけなんだから。

「よし！今後の予定を決めるぞ！」

何か、オレ、俄然あの太守サマをぎゃふんと言わせたくなってきた。

勿論、敵味方関係なく。

最早、オレの中では敵だが。

オレはホリンの肩を抱いたまま、皆の前に向き直った。

罅迫り合いと面会と戦端。【後】

「バルド、オマエ帰レ。」

「若?!」

「ま、そういう反応するよな。」

「話を聞け。そうだな、兄上に無事着いたという報告の手紙を届ける。」という事にして”おけ。”

後半の言葉にニヤリと笑うバルド。

流石、長年一緒にいるのは伊達じゃない。

「一筆書くからな。兄上から返事を貰ってきてくれ。遠くの城で暮らして心細いしな。」

笑い返すオレ。

「弟は兄上からの便りを心待ちにしていると、な。」
「嘘じゃない。」

手紙の返事は欲しいぞ、今回ののは。

「委細承知。」

一番危険度が高いからな、最大戦力を使うしかあるまい。

「ザツシュ、君は実家に帰りたまえ。優しい皇子は暇をやるう。積もる話もあるだろう?今の太守が来てから色々あっただろうしな。」

「了解っス。」今の太守になってからの暮らしぶり”でも聞いて来るっス。皇子は本当に優しいっスね。”

的確な返事をして、につこりと微笑む。

流石、デキる男。

「オマエもイイトコだぞ。」

オレはそんなザツシュに笑いかけた。

「ミラ、シルビィ、ミリィ。オマエ達は当面一人で動くな。動く時は最低二人一組で。それ以外の日中は必ずオレの部屋の外の扉で待機。」

何もそこまでして危険に踏み込む必要もないしな。

部下を傷つけるだけの上司なんて、無能だというのは理解してる。三人はしっかりと頷いた。

「あの？私は？」

「あ、私もー。」

名前の呼ばれなかったレイアとホリンが聞き返してくる。

「ホリンとレイアは今夜から、交代でオレと褥を共にしろ。」

「はいいつ?!」

「夜伽!?!」

まあ・・・そうなるよな。

「ホリンは目立つからね。スクラトニーのあの反応からして”ダークエルフの魔性に取り憑かれたアホ皇子”とでも思ってくれるだろう。」

好都合だ。

「ついでにエルフの森との関係性を匂わす為に普段から一緒にいるのがいい。偏見を利用してはるようで気が引けるんだが・・・。」

苦肉なんだよ。

オレ、本当に無能の上司ギリギリだからさ。

ただ噂を短期間で広める為には、派手な方がいい。

「大丈夫って言ったじゃーん。アルム様には私が必要なんでしょー？私、頑張っちゃうから。」

腕まくりをしてみせるホリン。

頑張るって何をだろ？

まあ、理解が得られて良かった。

「私はどのような理由があるんです!?!」

今度はレイアがオレに喰ってかかってくる。

「ん？レイアを抱いてみたいから。」

「なっ?!」

おーおー、口をパクパクさせて面白いの〜。

「という性的欲求は置いといて。”近衛兵に扮装させてまで連れてきたかった寵愛の女”という設定ね。」

意外とオレ演出家に向いてるのかな？

「動きやすくなる迄、しばらくは伏兵という位置だ。真つ先に疑われるだろうから、相手は直接的な手段は取ってこないと思うけど。」
「何やらバルドが期待に満ち溢れた目で、楽しそうにオレをやがるのを横目で見つつ。」

ダメ皇子に期待し過ぎだつーの。

「この方が愛欲に溺れるダメ皇子っぷりが出るでしょ？これで引き籠って噂流せば、油断を誘えるかも知れない。」

動き易くなる分にはいくらでもなつて欲しい。

「と、言うワケでミラ、シルビイ、ミリイ。上手く噂を流してな。クリスマス達にも言っておいてくれ。」

浸透するかな。

これが向こうに伝わるといいな。

伝わったら、不本意だが向こうの誰かの手の者が入り込んでる証拠にもなる。

「バルドとザツシユは速さが命だ。こっちは手数が圧倒的に少ないんだからな。」

頷く二人。

「アルム様あゝ。取っ替え引っ替えついでに三人目は如何ですか？」

「だああつ。」

一気に力が抜けたよ、シルビアさん！

「あの、二人を選んだ理由もしつかり聞いてたでしょう？別に本当に夜伽とかつてワケじゃないんだから、二人で充分です。」

相変わらず突発的だよ、この人。

「え？そーなの？」

「それは本当ですか？アルム様」

ホリンは意外だと言わんばかりの表情で、レイアは真剣な表情で聞き返してきた。

「一体全体、どうすれば納得するんだ？というか、オレを何だと思

ってるんだ？いくら二人が魅力的でもそこまではしなあ・・・いよ。

「アルム様、今の間は何ですか？」

さっきまで黙って聞いていたミランダが静かに呟く。

「仕方ないだろ？ミラを始め、皆魅力的なんだから。」

ミランダを始めつてのが重要。

弟の一番の座は、絶対に誰にも譲れないって人だからな。

「まっ、止められなかったら、仕方ないよね。ね？レイアさん？」

ホリンがうんうんと頷きながら、レイアに同意を求めめる。

本当にどうしたんだ、ホリンよ。

今迄の話をきちんと聞いていたのか？

「え！？あ、はあ・・・確かに”若気の至り”という言葉もありますが・・・。」

それで話は全て済んで納得する事なのかレイアよ。

至ったらダメだろ、倫理的に。

「あーもー！掻き回さない！はい、各自動く！って、ザツシユもういねえじゃんよ。」

空気は読むが、空気は見ない男、ザツシユ。

本当に我関せずだなあ。

仕事をきっちりこなす男だからいいか、うん。

罅迫り合いと面会と戦端。【後】（後書き）

激しく当初の目的と思惑からズレて行く皇子。
果たして、その結末や如何に？！ってコトで……。

諦観と鍛錬と董色。(前書き)

どころで、R15って何処まで？(苦笑)

一応、他の方の作品を見て、なんとなく把握してはいるけれど。。。

諦観と鍛錬と董色。

当分、暇だ。

今は寝間着のような楽な格好になっていた。やらなければならぬ事があるんだけど。

ここに来る迄何度も思った事・・・”人手が足りん。”
こんな事ならもう少し、ほんの少しだけ目立っておけば良かった。そうすれば多少の人脈が出来たのに。

「今更言っても遅いか・・・。」

次に何かあったと時の為にか友人や部下を増やせるといいなあ・・・。

なんて思う反面、自分の血の卑しさに気が引ける。

確かにね、面倒ではあるんだよ。

あの”社交界”とかいうヤツ。

あ、一応、礼儀とか踊りとかは一通り習得はしているからな、腐っても皇子だし。

つか苦手なんだよ。

香水と化粧の混合した下品な香りに、人間を値踏みするような目線。古今東西の自慢話の羅列。

思い出しただけで胸ヤケが・・・。

勿論、全員がそうじゃないんだがな。

ちゃんと自領を治めると共に貴族の義務を果たしている人も勿論いる。

そういう人達の社交界での会話は、高尚なモノが多い。

政治にまつわる話や交易にまつわる情報交換とか・・・まあ、色々。政治とはあまり関係のないご婦人方でさえもマトモでな。

つまり、そういう家の人間ともっと仲良くだなあ・・・今更、遅いね、うん。

お陰で割いた戦力の二人が戻らない限り、次の行動に出られやしな

バルドとザッシュ

い。

動くどころか、全員の身の安全の確保するのでギリギリ。

時間と距離的にも先に帰るのは、ザッシュだってわかっているんだが……。

「ん？」

オレは自分が無意識にディーンの剣の柄を握っている事に気がついていた。

何かクセなんだよな、昔からの。

不安になったり、考え込んだりすると、昔からコイツの柄を握っている。

トウマの魂のせいかな？

「そうだと……いいな。」

他人のだけれど、まだ魂に綺麗な部分があるってコトだろ？

しかし、最近はこの癖出てなかったんだけど。

それだけ色々とあつたってコトか……。

「ふう……。」

目を閉じて溜め息をついた後、オレは剣を鞘から抜き放つ。

黒い両刃の長剣。

「どう見ても両刃だよなあ……。」

以前は片刃だったのに。

オレの身体に合わせて形を……変えてなんかくれないよなあ。

第一、伝説の武器だぜ？ 神器だぜ？ 偉いんだぜ？

何でオマエ如きに合わせて形を変えねばならんだ！ とか言いそうじゃん？

いや、想像だけど。

大体使用者に合わせて変形するなら、兄上と父上の持っている双剣の形が違っててもいいだろ？

それ以前の使い手だって、何処かに何らかの資料が残っていてもおかしくはない。

ディーンやトウマの事を抹消したとしても、自国の歴史の偉業くら

いは残すだろ・・・って、なんだか萎えてきた。

「フッ！」

剣を振るう。

流石に上着を脱がないと汗とかで、面倒な事になりそうだったので
実行。

「ハッ！」

そして剣を上段から一振り。

そのまま下段から切り上げ、肩口まで剣を引いてからの突き。
くるっと反対を向いて同じ事を繰り返し続ける。

右手で一定回数やれば、次は左手で。

何十回、何百回と繰り返し返し、構えを上・中・正・下段、そして逆手
の順に繰り返し続ける。

バルドに昔習った基本中の基本の動作の練習だ。

こんなんで強くなるのかと聞いたら、バルドに大笑いされたっけ。

『強くはなれませんな。でも、心と身体が動きます。実践で動けな
くなったら死にますからな。』

要は構えは構えでも心構えの練習。

得物に慣れるという意味もあるけれど、練習したという自信は大事
だな、うん。

新兵級の訓練だが、何故か一番好きなんだよな。

一人で黙々と・・・。

悲しい事に今迄何千・何万回してきても、このディーンの剣はオレ
の手に馴染んだ気がしない。

それでも何も考えなくなるといっつか、無心になれるこの訓練が好き
だった。

そして、今もただ馬鹿みたいにオレは剣を振り続けた。

「アルム様？」

「ん？」

何か今、剣を振る以外の音が・・・聞こえたな。

「ああ、ようやく反応して頂けた。何度もお呼びしたんですが済み

「ません、鍛錬中に。」

「いや、いい・・・よ。」

声の主、レイアに返事をしようとしたんだが・・・。

「あ・・・。」

「あの、何か？」

オレの微妙な反応に何か粗相をしたのかと恐縮し始めるレイア。

「いや。」

レイアは悪くないんだ。

いや、レイアが悪いのか？

彼女は例の特徴的なお団子頭を解いて、長い髪は後ろに回し紐で一つに束ねている。

夜着を身につけている。

手にはこの部屋に来るまで羽織っていたであろう、コゲ茶の外套のような物を持っていた。

夜着は膝上・・・かなり膝上な丈のスミレ色をした小袖だ。

襟や袖の縁取りが薄い桃色で、同色の帯を腹部辺りでしている。

何と言うか・・・太ももはかなりキワドイ生え方をしているし、胸は谷間が・・・。

ちなみに外套を持っていない方の手には彼女の愛剣を携えていた。

夜伽に来たのか、護衛に来たのかよくわからん設定だ。

二つ合わせたら、”誘惑して剣でバツサリ暗殺計画”という感じで、何人かは納得するだろう。

得物見えてるけど・・・。

「そ、その格好は？」

「夜着ですか？」

何の問題か？と言わんばかりなレイア。

「普段は何時もそんな感じなの？」

「はい。完全休養日の時は。この方が動き易いですし、それに一応・・・ちよ、”寵愛の女”という事でしたので一番派手な物を・・・。

「

派手ではないぞ・・・色合いは薄いし。

彼女の長くて綺麗なスミレ色の髪と同色で、上品な色だ。派手ではなく、大胆が正しい表現。

「人選、間違えたかな・・・。」

「え？」

「あ、いや、何でも。」

本人は本人で色々と考えてきてくれたんだよな、うん。

「私より、アルム様の格好の方が・・・。」

「あ。」

顔を赤らめるレイア。

「そっぴやオレ、上半身裸じゃん！」

「いやん。」

と、間抜けな事を言っておいてから、近くに脱いだ上着を手に取り。

「あ、いけません。汗を拭かないとお体に触ります。」

慌てて手近にある手拭いを掴み、駆け寄ってくる。

「お拭き致します。」

「あ、いいよ、自分でやるから。」

オレは基本的に身の回りの事は自分でする方だ。

特に着替え・風呂・食事は誰にも手を出させない。

とにかくそういう貴族的な習慣が気に入らないんだ。

「お背中だつて、ご自分では出来ませんかしょう？」

「う・・・確かに背中はその方が楽だ。」

「・・・頼んでいい？」

「はいっ。」

確かに身の回りの事はちゃんとやるよ？楽はしない。

でもな、面倒は嫌なんだよ。

別に全身拭かれるワケじゃないしさ、そこまで汗をダラダラとかいたワケでもないし。

これが全身とかだったら、全力で断るぞ。

女性にやられるのは何より恥ずかしいし・・・あ、男性にやられるのは論外な。

韜晦と接触と呪文。(レイア視点)(前書き)

正直、おんにゃのご視点を読まなくても話がわかる展開にしなきゃいけないんだろうな、と思いつつ……。

韜晦と接触と呪文。(レイア視点)

「先の夜襲の時の身のこなしでわかっていましたが、意外とアルム様は武闘派なんですね。」

私は彼の身体を拭きながら口にした。

彼の筋肉は無駄が少ない。

剣を振り続ける事でのみつくしなやかな筋肉。

「武闘派？そういうのはバルドみたいなヤツを言っただよ。」

そう言えば、手にもかなりの剣ダコがあったのを思い出した。

彼の手。

あの夜、私の肩に置かれた……。

「レイア？」

「はいっ?!」

いけない、これでは何の為に背中に回ったのかわからない。

「手が止まってるんだけど。」

「す、すみません。」

私は身体を拭くのを再開した。

彼の背中を拭こうと思ったのは、確かに身体を心配してというのもあったのだが……。

その、耐えられなくて……。

彼の視線に。

自分でもどうかしていると思っっている。

この夜着を自分で選んだのだから。

持っている夜着の中で、一番派手で大胆な物だ。

皇都に居た頃は、一回も着たことなどなかった。

例え完全休養の日でも。

こんなのを着る意義も理由も無かったから。

そんな夜着を彼の前に、自ら進んで着ているという事実。

「レイア？」

「はい！今度は何でしょう？」

手は止まっていなかったはずだ。

「ごめんね・・・着いて早々、こんな目に合わせて・・・。」
彼はこちらを見ずに言う。

一瞬、何を謝罪されているのか理解に苦しむ。

第一、自分より身分が（しかも遙かに）上の人間が、下の人間に謝罪するなどというのは珍しい現象だ。

身分が上に行けば行く程、それは顕著になる。

作戦とは言え、こんな事をさせている事への謝罪だろうか？

「・・・そんなにこの格好、変ですか？似合いませんか？」

そんなに下品だったのだろうか？

少しいたたまれなくなる。

「ううん、綺麗だよ。それに任務中には見られなかった綺麗な髪も存分に見られるしね。」

彼は背中を拭き終えた私に向き直る。

私は彼にそのまま手拭いを渡した。

あまりの至近距離にまともに彼を直視出来ない。

「でも・・・。」

「でも？」

「ちよつと本気で抱きたくなりそう。」

う・・・。

「そ、それは！？」

反則だ！無理だ！

顔が驚く程に熱い。

きつと真っ赤になっている。

何とみつともない！

し、しかも、私はこれから彼と一緒に寝るといふのに！

「あう・・・。」

身体がカクカクと微かに震えているのが判る。

何なのだ、この仕打ちは！

「あ、アルム様、身体を拭くのに邪魔でしょう。剣をお預かり致します！」

彼の至近距離から、さっさと離れて建て直しを計らねば。

彼の剣を預かって……。

「いや、これは！」

- バチイツ！ -

「いつ！」

剣を取ろうと触れようとした手に痺れるような衝撃が走る。

「レイア！」

持っていた剣を寝台に置き、彼が慌てて私の手を掴んだ。

「大丈夫かっ?!」

握ったてを擦ってくる彼。

「だ、大丈夫です。」

「そうか……。」

すまなさそうにする彼の瞳が所在なさ気に揺れる。

「本当に大丈夫です。」

もう一度彼にその言葉を……いや、彼が納得して安心するまで

何度でも。

「大丈夫です。大丈夫、大丈夫、大丈夫。」

私はそう何でも繰り返しながら彼の手を。

心配そうに私の手を撫で続けている彼の手にそっとくちづけをした。

「レイア？」

「アルム様は何も悪くはありませんよ。」

呪文のように何度でも。

名乗りと乾坤と誓い。

頭が真っ白になる。

まさか、こんな事になるとは思わなかった。

今迄、ただの一度もディーンの剣を誰にも握らせた事なんてなかったから。

「本当にごめん……。」

自分の手が微かに震えているのがわかった。

不注意とはいえ、信頼する部下を傷つけたんだ……オレは。

「アルム様は心配し過ぎですよ。」

再びレイアはオレの手の甲にくちづけする。

そんなに心配し過ぎだろうか？

心配する相手なんて出来た事なかったしな。

「そうかな？レイア達は今やオレの大切な人達だから、これが普通だと思っっているんだけど。」

「過保護ですね。」

手を握ったまま。

「今迄、ミランダ以外に誰も居なかったからね……。」

生まれた瞬間から兄上と母上とその乳母（ミランダの母）以外の誰も喜ばなかった。

弟が出来た事を素直に喜んだ兄上。

実際に腹を痛めた母上。

それ以外に喜んだ人間は皆、”皇位を継ぐ予備”が出来たという者達。

その他大勢は、ロクな事にならないと思う者や姫だったらもつと有効に使えたのと思う者。

それを感じながら過ごしていたのも、オレがディーンの剣と出会う迄の話だ。

結局、残ったのはミランダだけ。

彼女だけだった。

「そうですか……。」

「うん。やっぱり何処かで味方が欲しかったのかも……。」

そのミランダにですら話せていない事がある。

オレはなんて卑怯者なんだろう。

改めて実感する。

「まあ、好き好んで味方になろうとする人間なんて皆無なのは理解しているんだけど。」

彼女を寝台の端に座らせ、放り出したままだった剣を取る。

くると回して剣は鞘の中に。

「それは？」

「ん？ああ、そういえばコレに触れたのはオレ以外でレイアが初めてだな。ミランダすら触らせた事ないし。」

ただレイアには悪いが判った事がある。

やはりレイアの剣は”持つ人間を選んでいる”。

伝説の神器の特性、それは未だに矢われてはいないという事。

「初めて……しかし、私には触れたただけであのようになったのに……。」

レイアは思案顔をしている。

レイアの剣のようなモノは、世界にそう何個もあるわけじゃない。

オレはいつその事、コレが何なのかを言ってしまうたい衝動に駆られる。

今なら。

何処かで、心の何処かでそう思っている自分。

けれども神器が……オレにとってはその”枷”が何時誰かを危険な目に合わせるかわからない。

「アルム様？」

考え込んでいたオレの顔を心配そうに、だけど真剣に覗き込むレイア。

「あ、ごめん、何？」

「また謝るのですか？」

レイアはクスクスと笑っている。

何か、彼女のこんな笑顔を見たの初めてじゃないか？

「仕方ない御仁ですね。」

ひとしきり笑った後、彼女は自分の剣の柄をオレに向けて差し出す。

「レイア？」

「はい、コレ、持って下さい。」

有無を言わず、自分の剣をオレに握らせて……。

「今宵より、何時、如何なる時も我が君より離れず、我が魂すらも我が君へ還すを誓う。」

オレは跪く彼女に戸惑った。

彼女が言おうとしている言葉の内容が、どういふ重みを持っているか知っているから。

「例え、如何なる者の敵となろうとも、我が心に一切の揺らぎ無し。」

口上が終る。

誓いの口上。

主を得て、尽くすという臣下・騎士の誓い。

オレは……何と返せばいいのだろう……。

誓いを立てられた者は、それに答えなければならぬ。

基本的な口上の返答はオレも知っている……が、とても口には出さない。

だってそれは本当に彼女を縛って、オレと共に業を背負わせる事になる。

先程とは違った……いや、同種の震えが走る。

ああ……これは”恐怖”なのかも知れない。
だから。

だからオレは……。

「如何なる時も、己の信念と正義のみに従え。己が心と魂の声によ

つてのみが、常に汝を汝たらしめん。」

基本的な口上と全く違う言葉を紡ぐオレを見上げるレイア。
ごめんな……。

オレは確かに味方が欲しいと言った。

でも、オレは決して正義でも善でもない。

何時の間にか彼女が敵に回ってもいいと、不思議に思えるようになっ
っているオレがいる。

彼女は何処までも誠実だから。

きっとオレが間違えた行動を取った時、止める事だろう……どんな
手段を使っても。

想いを込めた口上を返し、彼女の剣を抜いて彼女の肩にあてた。

誓いはこれでお終い。

剣を納め、彼女を立たせる。

「いいの？」

思わず口をついた問い。

「結局、私をきちんと評価して下さったのは、アルム様だけです。
ならば私の居場所はここだという事なのでしょう。」

そう言つと彼女はまた笑った。

「そうか……でもさ、先に死ぬのも一緒に死ぬのもダメだよ。」

剣を渡すと彼女を抱きしめる。

オレは騎士を人間として扱いたい。

魂までオレに仕える事になつてもだ。

「それが我が主の望みというならば。」

レイアがオレを抱き返す。

「ありがとう。」

オレ達は互いに抱きしめあつたまま、寝台に倒れ込んだ。

名乗りと乾坤と誓い。(後書き)

ようやく皇子はミランダ以外の味方を得ました。しかし、皇子にとつての味方というのは、言葉通りの意味とは違うようです。何だ？この鈍感でツンデレなカンジは・・・。

日田と予感と騎士。【前】（前書き）

また前・後です。

本当にすみませんね、読みにくくて。

日出と予感と騎士。【前】

「ん……。」

朝か。

身体が痛い？

おかしいな、寝台でちゃんと寝たのに。

目の前にはレイアの顔と……。彼女の剣……。

「ああ、コレが原因か。」

そりゃ痛いさ、硬いもの。

おっと言い忘れたが、エロイ事はしてないぞ、断じて。

それでも誰かと抱き合って睡眠を取るとか、無かったな。恐くて。

「あはは。」

それがどうだ？

目の前に剣があっても寝ていられるオレ。

全くヌルくて嫌になっちまう。

それでも、隣で寝ている”オレだけの騎士”の顔を見ると嬉しい。本当に現金で困ったもんだ。

「前代未聞だよな、同情で騎士になってもらうとか……。」

誇りも高潔さも何もあつたもんじゃない。

「同情で魂の誓いなんてしませんよ。」

レイアの臉がぱっちり開く。

「寝たフリか？」

「たまたまです。」

そうだな。

レイアはそういう人間じゃない。

それに疑ったらキリがない。

ならば、全てを預けてしまえ。

その方が楽だ。

最後にどんな目にオレが会おうとも、うんうん、健全だ。

レイアの騎士の誓いに対するオレの誓い。

「言ってみただけだよ、レイアはそんな人間じゃないしな。」

「本当にそう思ってますか？」

オレの頬に手をのばしてくるレイア、その手を取るオレ。

「勿論。」

「同情なんかじゃありません。ここはもう私の居場所です。」

レイアはそのままオレに顔を近づけ、唇を塞ぐ。

「んむうつ……。」

「ん！？ ちよっ！！！」

唇同士が重なり合った後、思わず顔を引いた。

「何か？粗相でも？」

いや、臣下が主の唇を奪うのも大問題も大問題なんだが……。

「レイア、今……？」

「これが正しい男女の営みの第一歩だと……。」

誰だ、教えたヤツ、出て来い。

今すぐに。

じゃあ、何か？

レイアの中には、唇と唇を重ねるのは、全部舌を絡めてくるのか？

「……二人きりの時以外、ソレ、ナシね。」

強く出られないのは、アレだ、きつところっていうのって男に拒否権
つてないんだよ……そうに違いない。

「それは弁えておりますよ、今だけです。」

本当にこれで良かったんだらうか？

胸が痛い。

「はぁ……これからどうするかな……。」

「そうですね、アルム様が私とホリンを取っ替え引っ替え睦まじく
して対策を立てつつ、しかないですね。」

……いや、オレはどちらかと言えば、レイアとの関係をもって意
味で言っただつもりだったんだが……。

落ち着け、オレ。

切り替えは大事だ。

「気になる事は幾つもあるんだ。黒幕が”アレ”前提としてね。」

「例えば？」

興味津々に乗り出して来るのはいいが、近いつて。

何か、ザツシユといいレイアといい、バルドが言っていたみたいにオレの考え方が面白くて仕方がないらしい。

そんな気がしてならないんだよ。

「馬車から見たる？民から搾り取った金は何処に行ってる？」

何処かに使い道がないと、集めたつてしかたないと思う。

「何かの為に消費しているなら、何処へ？」

単純な疑問だろ？」

”ヤツ”は典型的な成金つぽいが、服以外はそんなにド派手じゃなかった。

装飾品もじゃらじゃら付けてるワケじゃない。

奥方はどうかかわからないが・・・つか、アイツの家族構成も調べないとな。

「私服を肥やす為なら、手元に残してあるのでは？」

一理ある。

「うん、だとしたら貯めて、その後は？何時かは使うだろ？何に使う？中央政権に戻らない限り、ここじゃ使い道すら見つけ難いだろ？」

ド田舎だしな。

オレはこういう田舎は、大好きな方だけけれど。

「その中央に戻る為にとか。」

意外とレイアも頭回るんだよな、將軍の才があるのかも知れない。

「賄賂・・・か。中央の貴族達に。でも、そんな力のある貴族は、基本的に兄上寄りばつかだぞ？」

兄上寄り？

「兄上が大黒幕だったら、すつげえ面白いなあ・・・。」

そんな事しなくてもいざ国皇にはなれるんだから、有り得ないのはわかってるけれどねっ。

「はあ。国内に流れていたら、経済的にも社交界的にも噂が流れてわかる気もしますけれどね。」

「にやにやと妄想を膨らませまくってたオレに呆れるレイア。わかってるよー。」

でも、これはこれで、面白いんだもん。

「国外？他国への賂金とかって、そこまでする大物の悪党には見えないけどなあ。」

「どちらかというと、小金貯めこんでる小悪党。」

悪党的には部下のが有り得そうなくらいだし。

「やっぱり大悪党には、兄上くらい完璧超人じゃないと。」

妄想万歳。

「他に金銭を流すとしたら、単純に商人くらいでしょうか？」

「商い、投資か。堅いね。そういえば、金系とか銀系って何処の特産だろ？ここかな？」

曖昧な記憶だが、金系・銀系はこの特産品じゃなかったと思う。

悪かったな、自治領の特産なんて完全に把握する程、内政に興味は・・・なくはないけれど。

自治領の正確な配置・面積・特産品なんて、商人以外は機密にスレスレだし。

「ザッシュかホリンにお聞きになっては如何でしょう？」

確かに。

大体、オレ、この城の周辺の配置だって、曖昧なんだから・・・？

日出と予感と騎士。【後】

「なあ、レイア？」

「はい？」

「ところで、オレ、今すつごい嫌な予感がしてるんだが・・・聞く？」

正直、口に出したくない事を思いついてしまった。

ああ、興味津々状態のレイアは案の定、頷いてるし。

「この州でさ、商売するには行商人が相手だよな？基本的には。」

「当然そうなりますね。」

「・・・一番近くにいてさ、行商人より何時でも商売できる相手って・・・居ると思うんだが？」

「居るんですか？！そんな相手？！」

認識の違いだと思っただ、多分。

「まさかの”ダークエルフ”が商売相手って線ない？」

目を見開くレイア。

「ダークエルフですか？閉鎖的だと聞いていますが？」

うん。

でも、でもだ。

ヤツのホリンを見た時の反応をオレは思い出していた。

「ヤツの視線は、ダークエルフ差別じゃなくて、何故ダークエルフがオレ側にいるんだろっつていう疑いの視線だったりして・・・。」

先入観よりも可能性重視の発想。

人間はダークエルフを下に見て差別しているという先入観と、一番近くてバレにくい商売相手という可能性。

「収収を物納方式にして、換金せずに物々交換というのなら、直接取引も出来なくはないかも知れません。」

だよ。

さて、可能性のみというだが、レイアの賛同は得られた。

ただね、何か余計に手間がかかりそうな気がして、すっごい嫌な予感に直結。

何度も何度も声を大にして言いたいが、面倒はイヤ。

ダークエルフに偏見がないならいいが・・・でも、ホリンを睨んだのは許せん。

彼女だつて本当は、傷ついたはずだ。

彼女はダークエルフではあるが、その前にホリンという存在であるべきだから。

よく知りもせずに一括りにされてたまるか。

「今晚、ホリンに聞いてみるか・・・」

下手するとダークエルフの森に直行。てな、展開になりそうて余計に萎える。

閉鎖的なんだろう？溜め息しか出てこないぞ。

「どした？」

ふとレイアがこつちをじっと見詰めている。

「ホリンにも私と同じ事以上をするのですか？」

「え？？」

この流れは何でしょうかね？

「ホリンはアルム様への夜伽に抵抗がないようでしたから。」

ああ。

馬車内でも、この城内でも、そんな様なコトを言っではいたな。

「アルム様も彼女の身体を気に入っているようでしたし。」

身体？

身体じゃなくて、肌な。

一言も身体と言った記憶はないぞ。

「やはり、私は可愛げも魅力もないのでしょうか？身体も筋肉質ですし、生傷も耐えないですから・・・。」

しゅんと小さくなってしまっレイア。

「いや、そ、そんなコトは・・・。」

つか、近いんだって。

もぞもぞとしているレイアの胸元が少しはだけて……あの、何と言うのですか、山頂が見えそうできて……。

いや、オレにはその登山はちよつと無謀というか……じゃなくて！
「魂の誓いは身体を捧げたも同様です。」

足を絡めるな足を！

「れ、レイアって意外に情熱的なんだな。」

こ、これ以上はどうにも無理。

彼女の気持ちや好意は嬉しい。

信頼も心地好い。

恥らいも好ましい。

今度はオレから彼女の唇を塞いだ。

罰なら、全部終わった時に受けるさ。

それなら、少しは許してくれるだろ？

「何か……ゾクゾクしますね。」

唇を離れたオレに頬を赤らめながら、笑いかける。

無邪気な子供の悪戯をした後みたいだ。

「アルム様、朝食のご用意が……。」

「あ。」「あつ……。」

そこには目を見開いたまま、硬直姿勢になったミランダが……。

細かく状況を説明して欲しいか？

ほぼ零距离に顔を近づけている二人の男女

レイアの足は、オレに押し掛かるように足に絡まり開いている。

勿論、例のヤバイくらいの丈の夜着。

そんなコトをしたら、必然的に付け根部分もある程度は出ているだろう。

胸元は、あと少しで登頂成功くらいまでの露出。

今のオレ達を見て、どんな妄想しても甘んじて受け入れるしかないというか、言い訳が何も思いつかん。

「はぁーあ……。」

これで今日一日、確実にミランダは使いモノにならん事に自業自

得とはいえ、目眩がしてきたのだった。

抜目と食事とご褒美。

ズバリ、視線が痛い。

そして、沈黙が痛い。

既に壊れたミランダの様子と上機嫌なレイアの様子から、何か起きたのだらうと空気が明確に表している。

空気はそのままその場にいる他者に向かっていくワケで。

「何で皆、こんなに静かなのか・・・かな？」

朝食を食べ終わって、食堂で休んでいる今でさえ誰一人発言しない。

普段は・・・前の城にいた時は、常に一人で、周りにはミランダしか居なかった。

こんな静かな食事は、当たり前ですらあったんだが・・・今は寂しいと感じる。

「弱ったなア・・・。」

精神的にも少し脆くなったみたいだ。

「大丈夫ですよ、アルム様、私はちゃんとお傍にいますから。」

オレの呟きに、「オレだけの騎士」になったレイアがすぐさま反応する。

昨日の夜から、彼女はことあるごとにオレに”大丈夫”と言ってくる。

自分の弱さに嘆いたつもりだったが、レイアにはちよつとズレた風にと取られたらしい。

それにしてもレイアの積極さは、意外だった。

ちなみに今も、さり気なくオレの肩に手を触れてから、離れて行った。

積極的というより、情熱的？

「わ、私もすっかりとお仕えいたしますっ！」

慌ててミランダが追従する。

この展開、朝から一体何度目だろう・・・。

「ん？」

ホリンが何でか、にっこりと微笑んでいる。

何が楽しいんだ？

「ホリン？どうかした？」

「今日は私の番だなーって。」

楽しげに述べたホリンの一言に、ミランダとレイアがピクリとする。

何だ？

「まあ、そうだけど、それがそうかしたか？」

「もー、アルム様だったらー。だって”あのレイアさん”が一晩でこーなんだよ？」

朝からにこにこしていたレイアをホリンがびしつと指差す。

失礼だぞ、ホリン。

”あの”が何をさしているのかは、何となくは理解できるが。

「私、今日、一晩でどれだけ価値観変わっちゃうんだろーなって。」

きゅっと、その場で赤らめた顔を手で押さえる。

「にゅっ?!」

奇声と共に肩が震えてるミランダが見える。

「きゅと明日の朝日が、これまでと違うモノに見えたりするよね！
ね！」

力説されても・・・。

「確かに、価値観というか、朝日が違ったモノに見えた気はします。」

レイアが真面目にホリンに答えを返す。

真面目なのは、美点だよ、美点なんだが・・・。

「やっぱり！そうなんだ！」

「何と言いますか、生まれ変わった気分、ですか。」

「うっわーっ！うっわーっ！」

絶叫してはしゃぐホリンに、したり顔をして赤面しまくるレイア。

つか、オレは無視かい。
オレも当事者なんだが。

「やっぱり、”経験者”の言葉は違うね！」

「け、経験者……。」

「あの、ミラ？ホリンは何か勘違いしているだけだね……。」

小刻みにガタガタ震えだしたミランダを何とか宥めようと思った。

「ええ、”一生に一度”の事ですから。」

「一生に……一度……。」

ライ。

レイア、何だよ、それは。

突っ込みを入れようとしたオレだったんだが、マテよ？

……。

……確かに一生に一度だけだわ、”騎士の誓い”は。

基本、主の生涯に渡ってずっと仕えるものだからな。

って、勘違いじゃないか！しかも、ミランダとホリンの両者共！

場合によっては、レイアも。

いや、ミランダとホリンの考えてるのは、共通であって……。

あー、もー、余計にこんがらがるな、もう！

「ホリン、いい加減にしろ！レイアもいちいち真面目に返さなくて

いい！」

何だか、ノリが軽いんだよな、真剣さというか、緊張感に欠ける
というか。

「あ、そうだ。レイア、シルビー、ちよっと頼まれてくれないか？」

ミランダは使い物にならないから除外。

最近、自覚があるんだが、自分は変な点で完璧主義かも知れない。

面倒ごとが嫌いで、不真面目なクセに。

「何也と。」「何でしょう。」

やる気満点とのほほんとした二つの返事。

「お金を渡すから、レイアとホリン用に宝飾品を一つずつ買って来て。」

「えっ!」「どういう意味ですか?」

「どうもごうも、設定は忠実に。」
「そういふ設定だったろ?」

馬鹿皇子に貢がせた宝飾品とか、つけてても不思議じゃないだろ?

「二人共、解り易い所に着けておけよ?馬鹿皇子の貢ぎ物なんだから。」

しつかりと前面に出さないとな。

「その代わり、決着ついたらあげるから。」

「いいの?!」

真っ先に食いつくホリン。

「別にオレは宝飾品には興味ないし。」

だって、腹の足しにもならないし、どうにも実用性が低い物には興味湧かない。

綺麗だとは思っけれど。

「迷惑料かな。」

「あはは、気にしないでいーのに。」

「私は生涯を誓った身ですし……。」

二人共遠慮はしているが、嬉しそうだ。

「あらあら、羨ましいですねえ。」

シルビアは二人の様子にクスクス笑っている。

「あー、多めに渡すから、シルビィ、ミラ、ミリィの分も買っておいで。ただ優先は二人の分な。」

不公平は良くない。

皆、貧乏くじの中、オレについて来てくれたんだから。

「呼びました?」

給仕をしていたミリィが、ぼよんぼよんと……いや……すまん、ととととどこつちに歩いて来る。

「皆にご褒美の話だよ。直接は行かせてあげられないけれど、皆、相談して決めるといい。」

「え?ええっ!?!いい、いいんですか?!」

「大袈裟な。あ、クリス用には、何か違うものを宜しく。料理人は髪も短いし、宝飾品は無用って人多いから。」

「承りましたあ〜。」

「了解しました。」

「あ、男共には酒でも……。」

酒と言えば……。

「……酒をバルドの部屋から失敬して振舞え。適度に。」

使えるモノは有効に使わないとな。

うん、バルドの教えだ。

忠実に師の教えを守るオレ、何て素晴らしい教え子なんだ、うんうん。

「本当は、オレが直接行って、皆の分を選んで渡したいんだが……仕方ないか。」

何たって現在の主役、渦中の人の一人だからな。

当然、監視されているの前提だ。

やれやれ、溜め息が出るぜ。

熱殺と牽制と林檎。

しかしだ。

何時、何処で見られたり、聞かれたりしているのかわからないのは、精神的に滅入る。

朝食を終えて、ぷらんぷらんしながら自室に戻る今でも、独り言すら出来ないこの現状。

自室や食堂は、基本的には大丈夫みたいだったが……。

「困ったもんだ。」

「何をお困りで？」

後ろから声をかけられ振り返る。

殺気は感じなかったから、案外あっさり放置していたんだが。

「確か、カーライルだったな、副官の。」

「お覚え頂き光栄です。」

ぴっちり髪を後ろに回し束ねた男。

相変わらず、きちつとしてやがるな。

「このような所に何をしに……。」

オレは一瞬、監視かと思ったが、カーライルの後ろには数人の男達がいた。

もし、コイツが味方なら、単独で動くにも監視がついている可能性もある。

「何しにも何も、特に町の機能がない城に来ておるのだから、私に用だな。」

少しでも情報を引き出したいのが本音。

しかし、敵か味方かわからない人間と話すのは、ダルい。

何がダルいって、この偉そうな言葉遣いがダルい。

「お察しの通りです。」

涼しい顔しやがって。

「先日の宴の件で参りました。」

あ、ああ、そんなのあつたな。

「ふむ。その件だが、私は宴は好まん。その様な心遣いは無用と伝えてくれ。」

嘘はついてないしな、顔にも出ないだろう。

我慢して、情報収集に勤しんだり、敵意を削ぐ為には必要だったのは、重々承知している。

でもなあ。

「自分と致しましては、太守様の意向通りにして頂きたく存じます。

」

何かさ、コイツ、本当、人を試してんのか何なのか知らんが、無礼ギリギリなんだよな。

ここで、オレが太守の言いなりになるのか否かって事だろう？
面倒だな。

「太守の面子も大事なのはわかっておる。が、君の上司であろう？
長年の付き合いで何とかしたまえ。」

嫌味をたっぷり乗せてみた。ってただのイジメだよな、コレ。

「そう言えば、来る途中の馬車内で、城下外縁の町を見たのだが・

」

ピクッと動いた。ような気がする。

後ろの男達も。

「財政でも逼迫しておるのか？ならば宴の費用など勿体ないと思わんか？」

ちよっぴり喰いついたかな？

心無しか、後ろの男達が睨んでいる気がする。

「民の税は、国や皇族によってのみ消費されるにあたわず、正しく
民に還元するも大事。であろう？」

貴族なんぞ（一部を除き）滅んでしまえ。

「仰せの通りで御座います。」

うーん、表情に出ないなあ、相手にしてつまらないぞ、カーラ
イル君。

「ならば、どうにか出来るであろう？優秀な副官のようだからな。」
優秀だからといって、使いこなせるかは別の話だが。
寧ろ、優秀過ぎると逆に大変なんだよな。

「自分が優秀ですか？」

訝しげに聞き返すカーライル。

一度しか会ってないし、何かわかるのだと言いたげ。

「優秀だからこうして動いているのだろう？そうだな、君は痩せ過ぎだ。少し太るといいぞ。幸いこの料理は美味いしな。」

痩せてるから眼光が鋭く見えて恐いんだよ。

「はあ。」

少し呆れたらしい。

「特に果物類が非常に美味で驚いた。」

「そうでしょう。ここの特産は農作物ですから、特に林檎は。」

切り替えが意外と早いですなあ。

そか、農作物が特産か。

はい、金系・銀系が特産品説消えた！。

「ほう、森も近いしな。確かに林檎は美味だった。」

「森には人は入りませんので、森で獲れた物ではありませんが、かく言う自分も林檎は好物です。」

ふ〜ん、そうだね、森にはエルフがいるからね。

君は、オレがホリンを従えてたの見ているし、人は入らないよねえ、普通なら。

しかし、意外と小市民的な感覚だな、彼は。

「ほう、何かいい食べ方とか知っているか？試してみたい。」

「参考になるとは思えませんが、自分は素材状態のまま下から齧って食します。」

齧る方向が決まってるのかよ、変な食べ方。

いや、待てよ。

この地の特産なんだから、意外とそういう食べ方が通で良いのかも知れない。

「試してみよう。ふむ、林檎ならば君も持ち歩いて食べれば身体に良いかも知れぬな。これから色々と忙しくなるだろう?」

と、含みをたっぷりと含ませてみたりして。

「こうして、私の所に来たりと、私絡みの厄介事は増えるばかりであるうからな。」

「皇子のお心遣い感謝致します。」

略式の礼をとすぐさま取るカーライル、本当に切り替え早いなあ、コイツ。

「皇子もこちらにいらっしやってから、色々と大変でしょう。御自愛下さいませ。」

何が色々とかは言ってくれないよなあ。

ム力つくなあ、コイツ。

「慣れぬ環境だからな。空気も入れ替えたりせねばならん。」

何処のとは言わないでみた。

「それが良いでしょう。長年の澱んだ空気は耐え難いモノですから。」

カーライルも何処のとは言わない。

オレ、何というかこういう婉曲的?な言い方って大嫌いなうえに、ほら、例の偉い人言葉だから、疲労の蓄積が。

「それでは、自分はこれで。長々と引き止めてしまい申し訳ありませんでした。」

「構わん。」

会話を切つてさっさと去っていく。

うん．．．味方っぽい度合いは高まった気もしなくはないが。すると、後ろの二人は監視という事になるんだよなあ。

一言も声を出さないのが余計気になるし。

段々と、自分でやらないで、全部を兄上に丸投げすれば良かったな。なんて、ちよっぴり後悔。

仕方ない。

自分の管轄と思ひ込むとしよう。

じゃないとやってられん。

「その前に少し身体を動かすか……。」

昨日のようにディーンの剣を振りたくなった。

法と虚飾と薬指。(前書き)

。 ? 章みたく20話前後で終わらせようと思っているのだけれど・・・
もう半分使ってしまった・・・(汗)

法と虚飾と薬指。

で、結果。

汗はかくわ、余計にイライラするわで、現在に至る。

「兄上は凄いやなあ。」

あんな有象無象とか、優秀な人間を使うのは勇気がいる。

清濁併せ呑む勇気ってヤツか。

「兄上の場合完璧超人だから、カーライルでも優秀とかって思わないんだろうな・・・。」

危うく兄上の弟馬鹿っぷりだけを思い出して、優秀さを忘れるところだった。

「人間的でなく、皇族としての器と資質があからさまに違うものな。」

わかりきった事なだけけれど、口に出して言うと、余計に情けなくなるな。

「あらあら、皇太子様とは面識ありませんが、アルム様も負けてはいませんかよ？」

この間延びた声も、唐突さも慣れてきたかな。

果たして、慣れていいものかは置いておいて。

「シルビイ、ノックくらいしてくれない？」

金の髪を靡かせたシルビアが、そこには居た。

「はい」。アルム様の溜め息が緊急事態を告げていましたもので。

何だかな。

反省の色ナシ。

「緊急事態ね。なら、仕方ないね。」

もはや、オレの心がきつと読める（だろう）彼女に何を言っても無駄な気がしてきた。

「皇太子様のお話は良く聞きますけど、そこまで凄いやな方なのか？」

ていまいち分かりませんわ〜。」

シルビアは常に微笑んでいるよな。

「そう？噂が出るくらい有名な時点で、オレより上じゃない？」

「あら〜、噂が出るだけなら、悪い人も同じですよ〜？」

ああ、まあ、確かにな。

「私にとってはアルム様の方が、実際に会ったら凄かったですよ〜。」

「それはどういう意味で？」

ダメ人間っぷりが、とか言われたら泣く。

「貴方だけの長剣の女騎士。」

一つ。と言わんばかりに人差し指が天井に向く。

「ぐ。」

「ダークエルフの侍女兼愛妾。」

「いや、愛妾じゃないって……。」

設定だけだろうが。

ああっ、人差し指の次に中指が天井につ？！

「長剣の元剣術指南役の近衛隊長。」

「それも入るのっ？！」

規格外中の規格外ではある。

はい、次は薬指ですね。

「そして、黒い長剣使いの皇子。」

「シルビィ……それは……。」

「はい〜、好きな殿方の事は何でも知りたいのですう。そういうものなんですよお〜。」

「そういうモノなんですか？」

「そういうモノなのですう。」

何とも……別にいいけどね……黒い剣つていう奇異な外見以外は、（周りの人間的には）何もなし。

「ん〜。」

四本の指を天井に向けたまま、首を傾げるシルビア。

次の発言が恐いんだよ、この溜めわ。

「今度は如何致しました？」

何でオレ、敬語？

「キリが良くないので、五つ目は如何でしょう？」

「五つ目？」

四つ目迄がアレなので、少々不安。

「そうですねえ、金髪の愛人とか如何ですかあ？」

「ブツ。」

その展開で来るか。

「あのさ、一応、前回みたく聞いてはみるけれど、その心は？」

「年上女はダメですかあ？」

いやいやいやいや、それを否定したら、お姉ちゃんの実在意義が確実に崩壊してしまいますヨ。

「ん、レイアさんは騎士、ミランダさんはお姉ちゃん……。」

今度は指が順々に折られていく。

「ホリンさんは愛妾で、ミリィちゃんも『抱き心地はいい』と言っていましたでしょう？」

言った記憶、確かにアリマス。

「私だけが扱い低いですう。」

あ、ご不満だっただけね。

「はい、ご不満ですう。」

また読まれたよ……。

「と、いうのは置いておきまして。」

置いていいんだ。

「アルム様の心の広さは、皇太子様でも敵わないと思いますよ。」

「節操がないとかつて言わない？ソレ。」

何か脱力するんだよな、何時も。

良い意味でも悪い意味でも。

「人を受け入れるには、自分の色々な面が試されるんです。」

ちよぴり真面目な口調で、でも笑みを崩さずに。

「それは日々の言動であつたり、自分の与り知らぬ所であつたり。」

「日々の言動も、自分のいないところでの噂も、同じで見た通りだよ？オレの評価は。」

面倒事が嫌いで、後ろ向きで、誰からも一切の期待をされていない皇子。

「んふふ」。アルム様自身が知らない所で、皆、照らされてるのですう。」

シルビアがオレに唐突に抱きついてくる。

うわっ、何か魔王に攻撃されてるオレ！

この弾力スゲエ！

違う生き物みたいだ。

「じゃなくて、近いつてシルビィ！」

この破壊力は想像以上だ。

「いつか・・・私にも光をくださいますか？」

酷く小さな声で、とても切なさそうに、何時もと違う口調で・・・

「シルビィ？」

痛そうな声だった。

「ご命令通り、お買い物して参りました。」

お釣りが入っている皮袋をオレに渡して、離れるシルビア。

「ありがとう。」

「いえいえ。」

何時もの笑顔だ。

「そう言えばシルビアは何を買ったの？」

「これですう。」

「ごそごそと胸元の合わせ開けていき、胸から何かを取り出す。

あー、谷間が・・・何というか落ちたら二度と這い上がってこられないカンジ。滑落死？

「指輪？」

革紐に通された指輪を見せ付けられる。

「そんなのでいいの？」

渡された皮袋のお釣りからして、もつと良い物も買えたはずだ。

「充分ですよ。」

「遠慮しなくていいのに・・・無駄遣いとか怒られないよ？」

無駄遣いだとおれが怒られる事はあつたとしてもな。

「してませんよ、これが欲しかったんです。」

宝石も何もついていない指輪は、多分、銀製。

刻印とかもなく、彫銀の跡もない、非常に単純な銀の輪。

どれだけ欲ないんだろ・・・沢山あつても困るけどさ。

「はあ・・・ダメだよ、シルビイ。」

「？」

おれは彼女の指輪の革紐を解いて、指輪を見る。

やっぱり、何の変哲もない普通の銀の輪だ。

「指輪はちゃんと指にしなきゃ。ね？」

手にした指輪を彼女の薬指に通してやった。

さっき、ぴんつと天井に向いていた薬指だ。

白くて綺麗な指、そこに銀の輪がはまる。

「あ・・・。」

「どうしたのシルビイ？」

彼女の指が微かに震えている。

「いえ、何でも・・・。」

じつと指輪を見詰めるシルビアは、何故だかとても小さく見える

「シルビイ、大丈夫だよ。」

自分でもよく意味もわからず呟いた。

昨日、誰かにも言われたな。

「ちゃんと、シルビイの居場所もあるよ。」

ずっと思っていた。

レイアもホリンもミリイも・・・本当は居場所がなかったんじゃないかって・・・。

話してみたら、何となくだけと思った。

「じゃなきゃ、こんな貧乏くじを握り締めてオレの所には来なかったんじゃないかって。」

「だから、大丈夫。」

遠慮しなくても、対抗しなくても、お姉さんにならなくても。

「シルビイはシルビイ。だろ？」

ホリンにもレイアにも言った。

結局、どんなになっても自分は一人で一つの存在だ。

小さい時分まではオレもそうだった。

オレは”一人になっても、一つの存在”にはもうなれないけれど。

それは魂の本質の問題だから、専門外として。

言葉を聞いていたシルビイは、そのままくるとオレに背を向けてしまった。

「シルビイ？」

機嫌を損ねたかな？

「やっぱり、アルム様は凄いなと思いますよ。では報告は以上という事で。」

背を向けたまま彼女はそう言うと、オレの部屋から出て行った。

拝受と首輪とご主人様。(前書き)

少し休みたくなりにけり(苦笑)

拝受と首輪とご主人様。

一日、朝からすったもんだの騒動があり、カーライルの嫌味(?)合戦も潜り抜けた。

その後、剣を振って鍛錬し、心身ともにくったりとした頃にシルビアとの一悶着あったと。

我ながら、休む暇すら無く。

暇は鍛錬に割り振ったとも言っが。

「で、ホリンは何を買って来てもらったんだ？」

怒濤の展開の中、夕食を終え、今や夜。

待望の就寝時間だ。

待望といっても、エロい事を期待しているワケではなく、言わなきやいけない事があるから。

「ん？ちゃんと身に着けてますから、今見せますよー。」

昨夜のレイアと同じ外套で部屋に入って来たホリンが、上機嫌で答える。

余程、良い物でも頼んだのだろうか？

「じゃーんっ！」

「ぐはあっ！」

上着を脱いでお披露目。

どころじゃないって！

「オマエもその格好はなんだ!？」

「なんだって・・・だって、アルム様、私の肌を褒めてくれたしいー。」

ホリンは、頭からすっぽり被るタイプの一繋ぎの服を着ていた。膝上の辺りで裾がひらひらとしている。

しかも・・・すっけすけ・・・。

流石に上下は下着を着けていたが・・・というのがはっきり分かるくらい透けている。

他は薄い紫に彩られて透けた黒い肌が、全身堪能できる仕様。

「だからって、オマエも大胆過ぎるだろ！」

「そーですか？肌褒められたし、そこが”寵愛される点”という設定なんですよ！」

「だからってなあ……。」

年頃（？）の女性がそではどうだろう？

「てゆーか、”も”って何ですか？あ、まさかレイアさんと被っちゃいました？」

「近いが、被ってない。寧ろ、ホリンのが過激。」

「よし！勝ったー！」

喜んだり勝負したりする観点が違うだろう……違うよな？

「本当は迷ったんで、良かった良かった。」

「……迷ってそれか。」

「ええ、流石にどーかなあって、下着をつけるかどうか。」

「そつちかよっ！」

突っ込む所だ。

確実にここは突っ込んでいい所だ。

「私は別にどつちでも良かったんだけど、レイアさんに止められちゃって。」

良くやったレイア。

「こつというのは”足並み”をそろえないと妾の順列問題？とかゆーのになるからって。」

待てレイアよ。

いや、待たなくていい。

足並みを揃えずに今すぐ中止しろ。

「で、肝心の……。」

彼女の体の上下に視線を動かして見てみると、首の所に彼女の肌より黒い輪がついている。

「黒に黒か……。」

「通でしょ？」

留め具らしき位置に硬貨程の紅玉がついていて黒い色に映える。

「首輪の方が、ご主人様に飼われてるーってカンジが出てていいでしょう?」

か、飼われてるって・・・あのなあ。

「寧ろ、ダメ皇子じゃなくて、鬼畜皇子の間違いなんじゃ・・・。」

「私は気に入ってますよー。うー、寒い寒いつ。」

外套を放り投げて、ぴよんつと寝台の布団に潜り込む。

寒いなら、その格好やめりゃいいのに。

「気に入ってるなら、いいか。」

「はい、ありがとーございましたー。」

満面の笑みで言われちゃな。

勝てないよな、うん。

「ところでアルム様?」

ホリンが急に真剣な表情になる。

珍しいっちゃあ、珍しい。

「何だ?」

「昨夜はレイアさんとどんなコトしたんですかー?」

ホリンが興味津々とばかりに近づいてくる。

「は?」

「お堅いレイアさんが、あんな風になるんだから、きっと物凄いですよねっ!」

「恐らく赤面しているんだろっが、夜に黒い肌だからわかりにくい。」

「ええと・・・。」

何だろっ、この瞳は・・・。

「えっとな濃厚な愛され方はいーんですけどお、あの一、私、初めて

なんで、最初は優しくがいーかなあと・・・。」

何を真剣になるかと思えば。

初めてなら真剣になるのも仕方ない事か。

「っつて、違ーっ!」

「はい?」

「はい?」

突然の絶叫にきよとんとなるホリン。

「昨夜は、オレに騎士の誓いをしただけなの！」

だけと言っても、それは魂の誓いだから、ある意味で心身ともにオレのモノになったに等しいんだが、全く同じではない。

「それだけえ？」

「それだけ。あとはこれからの話・・・で、ホリン？」

危うく本題を忘れる所だった。

「何です？」

オレは彼女の手を握った。

シルビアやレイアの時の事もあったから、これ以上彼女を不安にさせたくはない。

「もしかしたら、エルフの森に行く必要性が出てくるかも知れない。」

だから何だと言われたらそれまでだが、一応な。

「森に？」

「うん、行くだけ。争いになるような事は全力で避けるから。」

まだ可能性だし、そうだったとしてもダークエルフとの交易は、オレ的には悪い事だとは思ってはいない。

「必要なんですよね？」

表情はわからないが、彼女の握る手の強さで気持ちはわかる。

「場合によってはね。どうしても。」

「なら、仕方ないですねー。ちゃあんと私も連れてって下さいよ？案内しちやいますから。」

彼女はにつこりと微笑んでいた。

「無理強いはしないからね。」

彼女の手を握っていない方の手で、髪を撫でた。

思っていた以上にさらさらしている。

「大丈夫ですって。私のご主人様はアルム様なんですからね。」

そう言っただけで彼女は、自分の首輪をオレに見せつける。

「そうだね、きちんと飼ってあげなきゃね。」

もう一度、彼女の髪を撫でる。

「もー、アルム様だったらあ、そのテでレイアさんも落としたんでしょー？」

笑いながら、くすぐったそうにオレに撫でられるホリン。

「も”ってなんだよ、”も”って。」

さっきの会話を真似てみた。

「あはは、被ったってコトですよー。」

意図を理解したのか、こんな風に返してオレの胸にすり寄ってくる。

この町のこの場所にあつて、ホリンもきつと不安定なんだ。

オレはそれをしっかりと認識しなければいけないんだ。

「大丈夫。ホリンがオレから離れていかない限りは。」

いずれ嫌でも離れる事になるとしても。

オレは、それ以上の言葉を続けなかった。

ただホリンのするままに。

「ダメですよ、私は飼われてるんだから、自分から離れられないんですよ。」

すり寄った胸元からオレを見上げた彼女は、オレの顔に自分の顔を近づける。

「ご主人様が捨てない限りは、です。」

そう言つて、オレの唇をぺろりと舐める。

「ね？」

悪戯っぽく笑った彼女は、出会ってからの何時もの彼女だった。

オレはそれならソレでいいと思いつつながら、ゆっくりと眠りに落ちていった。

勿論、彼女を抱きしめて。

日向と黒肌と悪戯。

「今日は驚かないんだから……。」

意識の遠くの方でそんな眩きが聞こえた。

色々とぼやけた頭の中と身体だけれど、この声は知っている。

オレが何処にいても、何をしていても認識出来る様な声は一つしかない。

「落ち着いて……アルム様、朝食の準備がつ、あぁっ！」

何やら変な呻き声が……。

「んぬう……朝か……。」

その割には視界が暗いんだよな。というか黒い？

「ううむ。」

「あんっ。」

身動きしてみると、頭上から何やら艶かしい声が……。

声の正体は考えるまでもない。

それくらいには、意識がはつきりしていた。

「ホリンッ！」

オレは飛び起きた。

だって、オレが黒いと思っていたのは彼女の肌で、彼女の着ていた夜着は胸の上まで捲れてて……。

うん、胸の辺りにオレが……かぶりついていた……様にミランダには見えたらしい。

「あ、あの、ホリン？」

「アルム様あゝ、急に離れたら寒い〜。」

ぐいっと引き寄せられる。

寒いんだったら、最初からそんな格好するなよ。

「待て、ホリン、朝だ。起きろ。」

「んー、もうですか……。」

眩しそうにうつすらと瞳が開く。

「やっぱり寒い・・・アルム様、夜みたく温かいのしてえ!。」

寝台の上で悶え始めるホリン。

あのさ、オレ、寝相悪いのかな?

誰かと寝るといふ事ってないから。

今度、ミランダに聞いてみよう。

「て、ミラ?。」

ふと思い出した名前と存在を確認すると、扉の前で停止していた。何か、瞳が潤んでいるのは気のせい?

「あ、温かいのって・・・何ですか?。」

訴えかけるように聞いてくる。

「何も無い!何も!。」

あまりの怖さに首を横に振りまくる。

「あー、黒い肌だと、アトが見えないなあ、ザンネン。」

何のアトだ!何の!

「ホーリーニーツ!。」

「ん?何ですか?。」

「温かくなる・・・アトが残る事・・・。」

もう、この展開嫌だよ・・・。

飽きてこないか?

いや、飽きるとか言う問題じゃないし。

「あーっ、もう、オレは朝食に行くぞ。」

付き合いきれん。

何でこう、巻き込まれるんだ?

全然事態も良くならないし。

「あ、ミラは髪飾りにしたのか。」

寝台から降りて、着替えを始めたオレの視界に木彫りの髪飾りが目に入る。

ちなみにミランダは、オレの着替えは手伝わないぞ。

オレの嫌がる事は、例え職務放棄になろうともやらないからな。

「シルビアといい、ミラといい、もっと良い物を買っても別に構わ

ないのに。」

その金も国庫の金ではなるけれど……ミランダ達くらいにはいいかなと思う。

国庫と言っても、皇族のお金はこの直轄地の田畑収入だから、完全な税金とは全く違うんだけれど。

「私にはこれで充分です。」

「そうなの？そりゃあ、似合ってはいるけれど……。」

「本当ですかっ?!」

「うん。とても綺麗だよ、ミラ。」

オレは彼女の頭を撫でた。

彼女に触れる事が久しぶりな気がする。

どうやらも彼女も同じ事を考えているのか、少し驚いた表情をしたまま、されるがままになっている。

一番の味方だもんな。

オレ達の間には忠誠を超える絆がある。

少なくともオレはそう思いたい。

「ありがとうございます。」

「ミラが喜んでくれるなら、何でもするよ。」

今までの放置っぷりを少し反省。

「いいなあ、ミランダさん。純愛ってカンジで。」

その光景を眺めていたホリンが間の抜けた声を上げる。

「わ、私より、ホリンさんの方が……。」

語尾がどんどん小さくなって良く聞き取れなかったな。

「私は純愛じゃないもんねえ。ご主人様の愛奴隷だもん。」

「あ……い、ドレイ？」

「うん、ほらあ、アルム様に飼われてるの。」

何時の間にか羽織っていた外套を捲って、例の首輪を見せる。

それを見て、首輪の意味を理解（勘違い）したミランダがオレを見る。

「あれは、彼女が自分で頼んだヤツで、オレは関係ないよ。」

ここに来てから、言い訳とか説明ばかりだな。

本当は、こんな事に時間を費やしている暇はないはずなんだが。かと言って、邪魔なヤツを叩くというのも本来あった目的からかけ離れてはいるというのもある。

「あ、ずるうい。昨日は飼ってくえつるって言ったのにい。」

アレはモノの例えなんだが・・・。

「確かに、オレは皆を気に入ってるからな。」

ミランダの肩に手を置く。

「誰一人、”オレからは”手放したくないな。我ながら欲張りだ。」

「あはは。いーんじやないですか？誰だって欲はあるんですから。」

本当にいいんだろうか・・・？

胸が痛い。

こつこつこの偽善者っていうんだよな、きつと。

「そうか。でも、ちよつと肉欲的過ぎないか？」

二日間の夜を思い出して苦笑。

「あら、肉欲的って言うなら、腰が抜けるくらいしてくださいな。」

「

けらけらと笑うホリン。

ミランダはこの言葉に絶句しているようだったが、この言葉で誤解は多少解けたようだ。

「レイアさんと一緒に泣いちゃいますよーだつ。」

うう・・・一本取られた気がしましたよ、ええ。

まるで自分が男としてダメだと烙印を押された気分。

「はあ・・・メシ食おう。」

朝からぐったりと、オレは食堂に向かった。

普請と指示と愛想。(前書き)

前話でご褒美に指輪を買っていたシルビアさんが、腕輪を買った事
になっている謎現象を指輪に改訂。(爆死)

普請と指示と愛想。

気力は萎えた状態のままの朝食だったが、周りに居た皆の表情は明るかった。

昨日買った品が、皆に配られていたからだと思う。

ミランダの髪飾り、ホリンの首輪に続いて、昨日まで身に付けていなかった装飾品で飾られていた。

シルビアは例の指輪をさりげなくしていたし、ミリイは丸い耳飾が耳たぶについていた。

驚いた事にレイアは、深紅の首輪をしていた。

ホリンとは色違いのものだ。

誰だ、こんなの買ってきたのは。

が、昨日、買いに行かせたのはレイアとシルビアだ。

ホリンは自分で頼んだとしても、レイアはレイアで自分で見て買ってきた事になる。

何と言って良いのやら。

「皆、似合っているけれど、もっといいのにすれば良かったのに。」

全員、宝石のような石がついているようだが、小さいものばかりだ。

何だか申し訳ない。

「あら、大事なのはアルム様が下さったという事実なのですよ。」

シルビアの言葉に皆が頷く。

「普通、主が何の前触れもなく宝飾品を下賜するなど聞いた事ありません。」

と、レイア。

「そうです！すごい感激ですっつー！」

これはミリイ。

興奮し過ぎ。

「うーん……そうか……。あ、ザツシュの分を忘れてたな、ど

うしょう?」

「家族に会う機会をくれただけで充分っスよ。」

「でも、それは普通、誰でも故郷に帰ったら家族に会いたいだ…
ん?」

今の独特の口調は…?」

「ザッシュ!」

相変わらず、空気を読んでも見ない気ゼロの男がそこに居た。

「只今戻りましたっス。」

爽やかな笑顔でオレに近づいて来る。

「朝食はとったか?ホレっ!」

手近にあつた林檎を投げる。

「あ、どもっス。」

受け取った林檎を自分の袖で拭ってから、下から齧る。

あ、やっぱそう食べるんだ。

なるほど、地元出身者。

オレは彼の咀嚼の間をぬって話しかける事にした。

「んで、家族は大丈夫だったのか?」

その声におかしそうに笑い声をあげる。

「何だよ?」

「自分の頼み事の報告より、部下の家族の事を先に聞くからっスよ。」

何を言ってるんだコイツは?

「どっちも大事な使命だろ?」

オレは両方言ったんだしな。

「そういうアルム様だから、皆、味方なんス。」

にっこり笑う爽やか野郎の言葉に皆が微笑んでいる。

「よく、わからんけど…ザッシュが言っただから、そうなのか。」

「はい、そうなんス。」

ザッシュは林檎を食べ終わると、そのままオレの傍に跪く。

「で、頼まれ事のもう一つの方っス。」

真剣な彼の表情にオレは辺りを見回す。

察してくれたのか、レイアが食堂の出入り口付近へ行って、外を確認している。

彼女は、そのままその場に立って外を見てくれているようだ。

「で？」

先を促す。

「現在の太守になってから、税率は約1・5倍。6割に到達してるっス。払えない者は労役の上乗せっス。」

高いとは聞いてはいたが、破格だ。

通常、どんなに高くても4割が限界だ。

「町から逃げ出す者が続出するな……。」

住民が逃げ出せば、町が廃れる。

税を払う人間が減るのだから、税収も下がってしまうのではないか？

「それが……区画ごとの連座制にしているようで……。」

「アホか……。」

つまり、区画の誰かが逃げたら、その分の税が区画内の誰かに上乗せされると。

「んで、労役つてのは？」

「それが天領の田畑労働と治水・開墾事業でこき使われてるっス。」

何だ？

この変に頭が回る感じは？

「税率の2、3割分と公共事業の人件費分丸儲けか……。」

と、なるとその行き先がやはり重要になってくる。

「ザツシュ、徴税は物納か？」

「基本物納っス。」

「はあ……。」

嫌だ、嫌だ。

思わず天を仰ぐ。

「民の反乱や上奏の兆しはあるか？」

コトが大きくなると、オレでもキツイ。

第一、この地でオレに委譲されてるような権利は無い。しかも、人徳皆無。

「中には。そうすべきだという者もいるみたいっすけど……。」
ニヤリと笑うザツシュ。

「けど、何だ？」

ロクな事を言わないな、コレは。

「ウチの周りの人間には早々と改善されるから、早まらないように周囲に言うようにと伝えておいたっす。」

何だかな、コイツは。

「上司使いが荒いぞ？」

溜め息が止まらないな、こりゃ。

溜め息の中に少し楽しくなっちゃうものが混ざってしまっじゃないか。

「またまたご謙遜を。」

「オマエもこき使ってやるからな？」

「了解っす。」

乗りかかった船というか、背水というか。

「レイア、州府の兵力を調べて来てくれ。出来れば配置と交代時間を。」

「はっ！」

「ザツシュ、オマエは物納された荷の行方と金の流れだ。」

「あいつス。」

人手欲しいな。

割り振る度にへこむ。

「ミランダ。君はホリンとオレ用の武具・防具を用意してくれ。」

「ホリンさんのもの、ですか？」

困惑した表情のミランダ。

「頼む。」

一瞬、首を傾げたが、すぐに頷いた。

「シルビアは、カーライルに会って皇子が蜜月を楽しみたいから、明日一日、他の管理人を下がらせるようにと言ってきてくれ。」

頼むよ、カーライルの旦那。

「内容が内容だけに、他言無用とな。」

「はいですう。」

他は・・・？

「ミリイ、後で書き出した物を市で買ってきてくれ。ホリンはこれからオレと地図の睨めっこだ。」

行きたくないけど、行くか・・・。

本当、面倒だな。

「以上を夕食迄にやってくれ。それとレイア・ホリン。」

「？」

命令したはずの二人を更に呼びとめる。

「今夜は二人で寢所に来てくれ。」

「二人ですか？」

訝しげなレイア。

「今度はまとめてー？もーご主人様ったら、お・さ・か・ん・」

楽しげなホリン。（絶対ワザと。）

「まあ、一度に二人もですかあ？次は是非、私とミランダさんのお姉さん組でお願い致しますねえ。」

ヲチをつけないと気が済まないのだろうか・・・シルビアさんね。

平叙と慣性と温度。(前書き)

あと四話じゃ、確実に終わらない・・・？章より長くなる事が確定しました。

平叙と慣性と温度。

最近、考え事が増えまくった気がする……。何時も一人の時は、何もする事がないから、多々あったけれど、今は違う。

考えている内容に何人も人が介在する。

顔を見ぬ誰かでも、一括りの名詞でまとめられる人間だけでない。個々の顔が浮かぶ、そんな距離の人達がオレの考えを乱す。

「で、イラついたり、不安定になると誰か居るんだよなあ。」

振り返ってみるとミリイがいた。

「あの、買出しの品を聞きに……。」

「ちよつと待つてな。」

オレは手近にあつた筆を取り、紙に書き出していく。勿論、それがどういったものかという説明文を書いて。

「ミリイ、一人だけで大丈夫か？」

人選ちよつと失敗。

お金落したりしないかな？

「大丈夫です！皆さん頑張ってるみたいだし。」

そうだった、ミリイは一番の頑張り屋さんだった。

「あ、あのつ、アルム様？」

「何だい？」

「アルム様は、今、ご不安なんですか？」

何だ？

「い、いや、先程……。」

「あー、言ったな、そんなコト。」

ミリイはすごく心配そうな顔で見詰めてくる。

何？

そんなに参ってるように見える？

「んー、ちよつとな。ほら、人の上に立つてき、下の人間全部の

人生を左右するって事だろ？」

上に立つつもりなんて、元々なかったのだから。

「責任ですか？」

ぎゅっと両の拳を握る様が可愛い。

「それにさ、誰にだって不安になる事なんてあるだろ？ないって奴は少ない。」

今迄だって、こんな事から逃げてばかりだったんだし。

出逢った運命は、自分の存在意義を打ち砕くのなんて、簡単だったし。

「そうですね・・・あ！私、いい方法を思いつきました！」

ミリイがとてととと走ってくる。

おおっ、とてとてが上半身で、ぽよんぽよんに変換。

これが”慣性の法則”・・・いや、違ったか。

見事なぽよんぽよんを眺めていると、それがどんどん近づいてきて・・・

ぽふっ。

そんな音がして、顔面に。

意外と沈む？埋まる？

今朝のホリンより柔らかいな・・・と、思ったら、頭に腕が回ってきて、ぽんぽんと肩口辺りを優しく叩かれる。

「小さい頃、私のお姉さんが泣いている私にしてくれたんです。」「言つとまたぽんぽん。」

心地良いが、少し息苦しい。

んで、温かい。

心音は精神安定の効果があるというのは知っていたが。実感。すげえ、驚き。

「どうです？」

身体を離して、自分の胸元辺りのオレを見下ろしてくるミリイ。

「ん・・・何だろ・・・どうしてミリイ達は、こんなにオレに優しいんだろ？文句言わないし。」

どう見てもこき使ってるよな？

流れて的に酷い展開だよな？

対してミリイは赤面する。

「わわっ、気づかないんですか？」

何が？

首を傾げるオレに対して、ミリイは赤面する。

「気づくも何も・・・何で？」

「あう・・・じゃ、じゃあ、私の胸に聞いてください！」

そう叫ぶと、思いつ切り彼女の胸に顔面を押し付けられた。

新手の拷問？

先程よりも早い心音。

ふと、生きているって事は、こういう事なんだな。とか、アホな事が頭に浮かぶ。

温かさがそれを補完して・・・。

昨日のホリンも、一昨日のレイアも、ミランダも同じ事を思ったんだらうか？

オレに触れて思ってくれたんだらうか？

そうだとすると、自分が生きているという事が少し嬉しいかも知れない。

ほんの少しだけだけれど・・・。

「わかりました？」

顔を真つ赤にしたミリイが聞いてくる。

息が少し荒い・・・て、オレもか。

「少しだけ・・・あと、これを発見したミリイのお姉さんが凄いて事も。」

オレは素直にそう思った。

「エへへ。」

この照れ方、馬車の中でも見たな、癖か？

「とりあえず、この紙に書いた物を買ってきてね。薬屋と石屋と雑貨屋に辺りに行けば、きつとあるから。」

だと思う。

ミリイでも大丈夫・・・多分。

人選的に残っていたのがミリイだけだから、苦肉の策ではあるけれど。

常に苦肉の策だけどなっ！

もう慣れてきたよ。

料理人達は、他の人間からの情報収集の役目もあるしな。

彼等は食事を取る人間のほとんどに会うし。

「じゃ、行ってきます。」

「気をつけて。」

「はい！」

言ったそばから、入れ違いに部屋に来たホリンと激突しそうになっていたのは、見なかった事にした。

「ご主人様ー。あなたのホリンが参りましたよんつ。」

茶目つ気たつぷりに言いやがって、可愛いじゃねえか、コンチクシヨウ。

「はいはい。」

オレは流し気味にあしらいながら、机いっばいにこの城周辺の地図を広げた。

結局、エルフの森に行くことにしたからだ。

まあ、ザツシユに頼んだ事の報告次第では行かなくて済むが、明日を行動日にした以上、今のうちにある程度決めておかねば。

「森の集落の位置と進入経路を決めておくよ？」

本音としては、彼女を置いて行きたかった。

故郷を捨てるという事情は、きつと大変なモノに違いない。

オレだって悩んだしな。

それなのに彼女は、自ら案内を買って出たんだ、信じないでどうする。

「本当に、いいのかい？」

オレはこれを最後だと決め、彼女にもう一度聞いた。

「ご主人様の為になるなら、やりますよんつ。」

座っていたオレの膝の上に乗る。

「……これくらいは今回は許してやるつ。」

「わかった、じゃあまず位置取りからだ。」

オレは彼女の胸に下辺りを抱えるようにしながら、話を続けた。

「はい。」

平叙と慣性と温度。(後書き)

次回、前・後編になります。

報告と明道と指針。【前】（前書き）

一話にするには長くて、前後にするには短い・・・ダメだ、自分。別作品【いつ君】も宜しくです。

報告と明道と指針。【前】

エルフの森は四つの集落に分かれているそうだ。

そのそれぞれを現族長・長女・次女が治め、更に族長の母が治める特別区がある。

この城から一番近いのは、娘達の集落だ。

奥の森に単独で忍び込んで行くのは、至難のワザらしい。

よって、接触するのは娘達。

特に次女の集落が堅いらしい。

何故？とホリンに聞いたところ。

『次女のサアラ様が一族内で、一番人間に友好的だからです。』
だそうだ。

話している間にシルビアが帰還し、了承の旨を伝えられ、次にミラ
ンダが帰還した。

彼女の用意した防具は、行き先が初めての森という事もあって、軽
装用のモノばかり。

勿論、ホリン用の短剣と弓矢も購入してあった。

流石、よい判断です。

「あとは・・・ミリイとザツシュとレイアか・・・。」

夕食までにと強気の発言をしたはいいが、レイアはとつもかくザ
ツシュの仕事内容は厳しいな。

エルフの森からの帰還後までを期限にしても良かったんだが・・・。
余りの人手の少なさと、人材の優秀っぷりに思わず強気発言をして
しまった。

大体、こんなのオレの仕事じゃないんだからねっ！

「ふう・・・思わず、現実逃避しちゃったい。」

明日はオレがしっかりしないと、ホリンの命の危険性があるんだ、
気を抜かないようにしないと。

正直、”生殺与奪の権利”という言葉が、頭からチラついて離れな

い。

周りの皇侯貴族はよくこんなの振りかざしたり出来るな・・・はあ、ヤダヤダ。

「アルム様。」

そのうちにレイアが帰還した。

「どうだった？」

「交代の時間まではわかりませんが、兵員と配置はバッチリです。」
ほら、優秀だろ？

優秀な彼女が、今まで一兵卒で埋もれているってんだから、我が国の人物評価制度はどうなってるのかね、全く。

「アトで兄上に告げ口したろ。」

「は？」

「いや、レイア、何でもないよ。それじゃあ、兵員数の割り当てと配置を図にして、五人分作っておいてくれ。」

バルドの分が間に合うかは別として。

「レイア、ザツシュ、ミランダには、一両日中に頭に入れておいてもらうからね。」

大丈夫、大丈夫、優秀だから皆。

きっと、覚えるのが一番遅いのはオレ。

あ、ますます現実逃避したくなってきたわ。

「さて、ザツシュは別としても、ミリイが遅いのは怖いなあ・・・。」

「ひつじょおゝに心配だつ！」

信じてないワケではないが、その・・・迷子とか・・・お金を落としておるおるとか・・・。

考え出したら、キリの無いくらい不安要素が出るわ、出るわ。

「シルビア、ミランダ、ちょっと半時程、様子を見に町へ出てくれる？」

「うう・・・人手不足のハズなのに・・・。」

バルドがいない、ダークエルフのホリンは外をうるつけない。

料理人達は、調理場から離れられない。

・・・ぐぬぬ。

絶対に、この先、人員不足で事に当たるなんて事はしないからな！

「ん？つか、そもそもこんな事をやる予定自体無かったんだよな？」

あれ？

「意外と、オレ、頑張れてる方？」

「いやはや、何というか、そこがアルム様らしいっすよ。」

パチパチと拍手でもしそうな笑顔のザツシュがそこにはいた。

「だから、こんな事になってるのになー。」

にこやかにホリンも笑っている。

「何だ、ソレ？」

確かに発端は些細な事だったが・・・。

「結局、なんだかんだで、こうなった確実の要因は君達なんだけれど？」

まあ、だから何だと言われたら、そこまでなんだけれどね。

選んだのは自分だしな。

「愛ですネ。」

「愛っスね。」

ここらこら、何時の間に共通な反応を起こせるようになったんだ、二人共。

「んで、帰ってきたという事は収穫はあったのかい？」

ザツシュの帰還は、予想以上に早かった。

ザツシュならば出来ないとは思わなかったが、これは余にもだ。

別に無理だったのならば、それはそれでいいとは思っていたし、もう少し時間を与えてもいいくらいだったんだが・・・。

報告と明道と指針。【後】

「それがですね・・・。」

キヨロキヨロと辺りを見回す。

そんな事をしなくても、とつくに人払いはしてある。

ザツシユくらいの使用手なら、ある程度の気配も読めるハズ。つまり、非常にわざとらしい動きだ。

「いくつかの荷物が、この城に運び込まれてるようっす。」

「はい？」

予想外の結果。

まさかの場所だ。

「州府じゃなくて、この城か？」

物資があるとしたら、目の届き易い州府の方だと思ったんだが・・・。

思い当たる節は、そう言われてみればある。

カーライルと彼に付き従っていた男達、オレの所にすぐに来た太守。長年使われていないカタチの空き家に突如住人が来たら・・・。

見られたくないモノが、実はそこにあるとしたら。

「頭が頭痛になりそうだ・・・。」

頭痛が痛いでも可。

かといつて、総動員で家捜しするべきかどうかなのが、余計に。

「余程、すぐには動かせない量だったのか・・・だからの夜襲か？」

この城に来る前の夜襲。

殺せたら良し、殺せなくても時間が稼げれば良し。

捨て駒として扱いきるといふ冷酷さがあれば。

「それは微妙っすね。」

「どうしてただ？」

「移動が既に済んでいるなら、人手がいるっす。それに監視する必要もないっす。」

確かに。

後者は特に。

「必然的に人目に触れるか……。」
人目につきたくないから、移動させるのであって、人目についたらそもそもその意味がない。

「最近、死体上がるような事件もないっすからねえ。」

ああ、動かす人間自身もそれを見る事になるよな。

なかには、口封じが必要になるかも知れない。

「ブツを押さえても、証拠にはならないか……今回は放置かな。」

「それと州府は州府で、この城の倍近い物量の出入りがあったみたいっす。」

と、すると、州府に物や金を入れ、代金（物）を出し、州府と城に入れた……か。

「何を入れているとかは？」

「流石にそこまでは……何なら探してみるっすか？」

「既に無い可能性もある。取引相手からの推測は？」

基本、薬を服屋で買うヤツはいない。

買う相手から推測可能なら、楽でいい。

「三分の一は行商人相手っす。扱う品は手広いので、何をとはわからないっす。」

スツキリしないなあ……。

金額だつて少額じゃない。

貴金属類ならまだしも、かさ張るモノつて……。

「あの？」

聞くに徹していたホリンが手を挙げて主張する。

「何だ？」

「残り三分の二は？」

「ん？ そうだ、残りは？」

「あ、何か人を雇って何かするのに使ってるみたいっす。」
人？

さつき目立つから人を使つてはいないんじゃないかって事に話が落ち着かなかつたか？

「それが、その人間達の行き先つてのがっスね……。」「言葉を濁すザツシュ。」

ああ、嫌だ。

聞きたくない展開なんだな？

そうなんだな？

椅子に踏ん反り返つて報告聞いて、『良きに計らえ。』とか、言うだけの身分つてどんなに楽なんだらうね？

「ホリン、さつきの話、詰めるよ。ザツシュ、その人間が進入する経路を調べて教える。」「

ザツシュの言葉の続きを聞く前に、先に指示を出した。

ふう……。結局、エルフの森には行く事になるのか……。

真心と問答と悶絶。

ザツシュとの話を詰めた後、夕食を取った。
エルフの森へは、オレとホリンの二人で行く。

人手の件もあるが、人数が多くなると相手にも周りにも警戒される。
明日一日、オレの部屋にはザツシュとレイアとミランダがオレの代わりになる手はずになっている。

「て、コトでいいかな？レイア。」

夜、寝る前の段階になって、話を通してなかったレイアに最後の確認を取る。

「些か不本意ですが、効率的に考えて致し方ないという事にしておきます。」

彼女のには、主を護る剣と盾である自分が、一緒に行けないのは、やはり不満らしい。

「済まないね、君はオレだけの騎士なのに。」

「その言い方はズルいです。」

むうと頬を膨らませるレイアをちよっぴり可愛いと不謹慎に思いながら。

「目標は次女姫の治める集落での情報収集だから、大丈夫だよ。」

ホリンは今、明日の装備品の最終点検をしている。

勿論、オレもだ。

「なあ、ホリン、本当に大丈夫か？」

以前ので最後にしようと思っていた質問を女々しくもしてしまっ。

「まあ、本っ当に過保護だなア。ご主人様は。」

レイアもいるというのに、苦笑しながらオレをご主人様と呼ぶ。

「過保護か？そんなに？」

基準がわからん。

「過保護も過保護ですよ、ねー、レイアさん？」

「そうですね。ホリンさんともかく、私は騎士ですからね。戦い

も仕える内容のうちではあるのですが……。」

別に差別しているつもりは、ないんだが……。」

「なんて言うか、基準というか、加減がわからないんだよ。」

本音。

うん、これは本音。

今迄、持っていないかったモノが突然、目の前にあるんだから。

例えば、”リンゴ”と言って、想像する言葉が”赤い”だとするだろ？

でも、”赤い”って言葉に対して、それがどういうものかわからない。

その意味に該当・関連する情報が何も無い。

中身がわからなければ、結びつかないし、思いつきもしない。

恐怖とまではいかないけれど……ああ、哲学的で頭痛くなるな。

「今迄、そういう過保護って言われる様な対象なんてなかったんだから。」

「ミランダさんは？」

まるで、それをずっと聞きたかったみたいだな。

二人共、少し身を乗り出している。

「ん〜、空気かな。」

「はい？」

「いるのが当然。」

「ひどっ。」

これもまた表現が難しいんだよな。

「ミランダにとってはさ、オレが皇子なのは関係ないんだよ、きつと。」

つまりは、そうなんだろうと思う。

「しかも、オレがアルムなのも関係ないんだ。」

オレの言葉に二人が目を合わせ首を傾げる。

「ただ横にいる男の子。んで、横にいる女の子。」

いい線いっていると思う。

出だしはこれだったと思う。

「在ればいい。居ればいい。ただそれだけなんだよ、互いに。」
独占欲とか強そうな響きだが、根源はそこだ。

「まず、居る事。そこから始まり。そつから色々付随するんだよ。」

何となく通じているだろうか？

「そりゃ、たまに欲とかは出るかも知れないけれど、それは感情を持って生きてる限り当然だろ？」

「だから、それをどうにか一言で説明しようとする」と“空気”なんですね？」

「絆とかそついうのを無視しても、”空気”だから、居なきゃ成立しないってイミ？」

やっぱり、二人は頭の回転が速いなあ。

普段から変に茶化したり、かき混ぜないでこうあつて欲しいカモ。ん？理解が早いから、その上でかき混ぜてんのか？

ともかくオレが疲れない程度にして欲しいと思う。

「だから、過保護と言われるような対象かどうか聞かれると、正直微妙。」

感謝してないワケではない。

今では歪んでいると自覚があるオレでも、幼い頃に彼女が居なかつたら今程度では済まないだろう。

きつと、一番最初の”孤独”という壁で人生に玉砕している。

「それに気づいた時から居たから、今の二人みたいに自分で”選んだ”ワケじゃないし。」

赤面する二人。

ミランダは選びはしたさ。

でも、それは”別れない事”を選んだというのが正しい。

「そつか、んじゃ、いーか。」

何がいいんだ？

「ご自身で選んで頂けた”第一号”ですね、私は。」

一人しかいないんだから、第一号も何もオレの”筆頭騎士”ですね。

一人で筆頭騎士というかどうかは知らんけど。

「何だ？二人共急に。」

「ん、過保護は愛情の一端と考えるコトにただけ。」

「それが、一番わかり易い”独占欲”ですかね。」

いや、何か、二人共、急に目が輝いてますヨ？

確かに、手離したくなくなっではいるけれど。

何だろね、この感覚。

ただ……。

「間違っているとは、言い切れないなあ。」

大きく外れているワケじゃないと思う。

「もー、素直なんだからっ！そんなご主人様にご褒美だー。」

勢い良く着ていた外套を脱ぎ捨てるホリン。

外套の下には、昨夜とほぼ同じ夜着が……。

「って、ホリン、上！」

「刺激度を上げてみたあっ！」

大声に大声で返された……。

昨日と同じ夜着なのだが、今のホリンはその綺麗な桃色の山頂が……。

「では、私も。」

冷静にオレの横で、自分の外套を脱ぎ始めるレイア。

反応が淡白過ぎる！

レイアの夜着も昨日と同じ形で……。

「じゃないし！レイア、お腹……冷えるよ……。」

じゃないわっ！

昨日と同じと思われたレイアの夜着は、桃色の帯があつた腹部の部分から、白い肌と臍が見えていた。

上下に分かれた仕様。

「うっわー、レイアさん大胆！」

オマエが言うなよ、オマエが。

「主の望むような奉仕をするのが、私の務めですから。」
断じて違う。

そして、オレは望んでもいないし、命令もしていない。

「あ、あのなあ……。」

脱力した。

脱力しましたよ、ええ。

「折角、一緒の夜なんだから、いーじゃーん。」

「ふ、不束者ですが……。」

オレが脱力しているのをよそに、さつさかと寝台へ上る二人。

「アルム様が私達を選んだんだよー？大切にしてくんないと」

「逃がさないですよ。」

ああ……過保護すぎる愛情と独占欲って、こういう事なのね……。

道と傾向と対策。

翌日、朝食と道中の食料を運ん来たミランダが、更に壊れたのもう説明しなくていいよな？

食事を終えて、ミランダが買ってきた装備に身を包む。

身体を計ってもいないのにオレの身体にぴったりなのは、ミランダの仕事だからだろう、流石。

左のみの肩当・胸当がある軽装用の上半身鎧に、剣帯がついた腰当。この国用の標準装備のせいか、剣帯が両腰にあるのが邪魔でイラつくがな。

そして、一番困っていたのはコレだ。

「剣・・・ね。」

眼下にある二振りの長剣。

「どうかしましたか？」

ホリンの着付けを見ていたレイアが、声をかけてくる。

「いや・・・。」

言葉を濁したオレの視線の先を見て、得心したようだ。

「私の経験上、迷うなら両方取るか両方取らないかですが、後者は在り得ないので、何故迷うのか理由を考えると良いですよ。」

忠告ありがとう。

迷っている理由か・・・。

どちらも剣である事には代わりはないんだが。

オレは一振りの剣を腰に下げた。

黒い長剣、デインの剣を

「護る為の剣なものな、君は。」

小さく呟いた。

ホリンにも言ったが、戦いに行く為じゃないんだ。

抜く可能性は、限りなく低くいきたい。

その想いを込めて選んだ。

「ホリンの準備はどうだい？」

「あとちょっとー、この服動きにくくて。」

ホリンはオレと同じような胸当てと腰当てをしているが、中の服のせいで窮屈そうだ。

短剣と使って、腹部の辺りの服を切り裂いて取り除いてた。

「こうなるんだったら、上は下着から直接つけければ良かった・・・」

それぞれで、鎧が擦れて痛くなる気がしてくるが。

あ、人間と肌の質が実は違うのか？

オレは昨夜のホリンの痴態・・・いや、肢体を思い出してしまった。肌にはデキモノ一つどころか、荒れた所もなかったな。

やっぱり肌質が違うのかも。

「おしつ、できたー。」

両腰に短剣と細剣、背に弓矢といういでたちのホリン。

勿論、へソ出し。

「お腹壊すなヨ？」

「あはは、過保護。」

「うっさい。」

過保護が、完全にからかいの言葉として定着してしまったじゃないか。

実感は、未だに全く無いんだけれどね。

「それじゃあ、ザツシュ、レイア、後は頼んだよ？」

残された二人には、影武者をやらしてもらっただけけど、丸一日暇な時間なんざ、与えはしない。

効率重視。

「きちんと説明書き通りにやるっス。」

ザツシュが見せた説明書きは、オレが昨晚書いたものだ。

内容は昨日のミリィ（やっぱり迷子だった）の買ってきたものの使い方。

結構、簡単というかきちんと説明書き通りにやれば、単純作業なの

で大丈夫だと思う。

「一応、細心の注意を払ってな？」

同じ手順で作った見本品は、一つだけオレの革箱に入れて、腰に下げている。

まあ、きつとこれも使うような事はないだろう。

そう願いたい。

ちなみに、作り方は例の宝物庫で読んだ書物で学んだものだ。

例のつてのは、デインの剣を見つけた宝物庫な。

「えと、何が出来るんですか？」

自分の買って来たモノがどう使われるのか、興味津々といった顔のミリイ。

そういえば、何を作るのか彼女には言っていなかったな。

「出来てからのお楽しみ。」

完成したモノを兄上の見ている前で、昔使って見せたのを思い出した。

「きつとびっくりするよ。」

確か、呆れ果てた口調で。

『最低、あと20年は使わない方がいいな。』

と、あっさり却下されたとだけ今は、言っておこう。

「じゃ、行ってくるよ。」

人手も惜しいが、時間も惜しいんだ。

何せ今日、一日で往復しなきゃなんないんだからな。

無性と森と食事。

森に足を踏み入れるのは、夜の方がいいと当初は思っていた。周りの町の者にも見られる可能性も低く、森でも見つかりにくい。定番のように思っていた。

「エルフは夜目が利きますよ、夜でもバッチリ。」
「そういうホリンの一声で、出発時間を繰り上げた。」

町の人間にオレの姿を見られたとしても、それが皇子だと結びつかないだろうし、ホリンは外套を羽織って肌さえ見られなければいい。エルフが夜目が利くというのならば、森の中で不利なのはオレだけという事になる。

ならば、さっさと行って、さっさと帰って、時間の節約をした方が断然いい。

「しかし、平坦な道と違って、走るのにコツがいるな。」
森の中は、樹木の根なので、予想以上に不規則な凹凸がある。ちよつとでも気を抜くと転びそうになった。

「充分、早いですよ。」
ひよいひよいと下を見ずに走るホリンの動きは、とてもしなやかだ。

オレは下に気を配れば、眼前の枝に激突しそうになったり、その枝に気を配れば、足を取られそうになる。
不様だ。

剣で枝を払おうかと思っただが、集中する箇所が剣の分増えるのと、速度が遅くなる事に気づいてヤメた。
樹木にもディーンの剣にも悪いしな。

「訓練不足だつて事だけは、理解した。」
体力の消費量は、普通に走る時の倍はあるだろうなと冷静に分析する。

「そうですかねえ？」

大体にして普段やる事のないダメ皇子なんだから、時間はたっぷりあったのに。
情けない。

「仕方ないだろ、城の部屋からほとんど出られないんだから。」
と、言い訳。

はい、言い訳です、どう見ても。

「んじゃ、ちよっと休憩しましょ。」

立ち止まり、食料袋を漁るホリン。

この速度も早かった。

全然、息が切れてないじゃんよ。

「ご主人様も食べますか？」

うん・・・腹は減ってはいるが、食べてすぐに走れるかが問題。

「あとどれくらい走る事になりそう？」

もう一時間以上はゆうに走っている。

残りの距離も気になるが、食べて吐くなんてのだけは嫌だ。
格好悪過ぎる以前の問題。

「この速度なら、半時もあるば。」

あ、残りの方が少ない。

「んじゃ、食べるかな。」

「はいっ。」

ホリンが林檎を一つ投げてよこす。

特産品ですよ、特産品。

「美味しいよな、ここの林檎。」

「そーですね。」

ホリンが林檎を齧る。

あれ？

「なあ、ホリン？」

「ふぁんれふか？」

「飲み込んでからでいいって。」

口に頬張ったまま喋られてもわからん。

「林檎つて下から齧るんじゃないの？この地域では。」

「なんですか、ソレ？」

「いや、だから下から・・・。」

オレの質問の意図がわかってないらしい。

通じていない。

「苺でしょ？その食べ方。」

苺？

今度はオレがその意図がわからない。

「だって、林檎は種のある芯側から順に蜜が溜まるんだから。」

だから？

「外側は何処もほとんど味は同じですよ？苺は茎元と先端は甘味が違うケド。」

あ、苺は確かそんな理屈があつたな。

「で、じゃあ、この地域では別にそんな食べ方は・・・しない？」

ああ。

癪に障るな。

アトで覚えておけよ。

オレの中からフツフツと怒りが湧き上がる。

「さつさと食って移動開始するか。」

イライラしながらもオレは、林檎に齧り付いた。

無性と森と食事。(後書き)

ごめんなさい、どんどんご都合主義です。

明断と激怒と黒姫。【前】（前書き）

別に前後にしなくても良かったのですが、まあ、森はひとつなぎといっしょです。

明断と激怒と黒姫。【前】

イライラしたせいか、意外と緊張がほぐれて身体が動くようになった。

いや、慣れかな？

”林檎効果”とでも呼ぶか？

「慣れてきましたね？」

「多少は。」

単純に慣れただけだな。

野山を走り回るなんて、全然した事ないもんな。

もし、この州が平和になって、森にも来られるくらいになったら、鍛錬する事にしよう。

「もうそろそろですよ。」

「意外と頑張れたな。」

良かった、ホリンの前で潰れるような事にならなくて。

「?! ホリン止まれ！」

今、一瞬、耳障りの悪い音がした。

絶対にした！

「わっ！」

ホリンの足元に一本の矢が突き刺さる。

「動くな！オマエ達は既に囲まれている！」

森の中に声がこだまする。

姿は見えないが、確かに気配はある。

恐らく弓矢を打ってきた方向であろう、右隣のホリンの右前。

オレの前方辺りにも。

後に誰かがいる気配はないが・・・木の上辺りにも気配がするな。

「姿を見せずに囲まれてるも何もないだろ？せめて気配くらい出せよ。説得力ないぜ。」

わざとらしく言ってみせるも、答えが返ってこない。

やっぱりハツタリだったか。

「そうやって騙すのがエルフのやり方で礼儀ってんなら、いいけどな。」

エルフに偏見なんて全くないうえに、身近にいるのがホリンだけだから、余計にエルフがどんなものか理解出来てないんだよな。

一応、ホリンとザツシユから軽く説明は受けたが。

はあ・・・ラチがあかない。

「仕方ないなあ。オレ、エルフがそんなに警戒心が強いとは思わなかったよ。」

流石、世界で一番有名な引き籠り。

オレは腰に挿したデイーンの剣に心の中でごめんと謝ってから、眼前に放り投げた。

「アルム様?!」

まあ、そりゃあ、ホリンさんだって驚きますね。

「おい、これでオレは丸腰だぞー。これで出てこられっかー?」

こんな所で足踏みしている暇はない。

「ホリン、君も武装を解いて。なるべくギリギリで取れる距離に置くんのだ。」

後半は小さな声で呟いた。

渋々、武装を解除するホリン。

「これならいいだろ?」

オレの声が森にこだまする。

「人間風情が我等の森に何の用だ?」

オレの前方から二つの影が現われる。

一人は女性、一人は男性だ。

「ちよつと話相手が欲しくてな。」

首を竦めるオレに怪訝な顔する金髪・金眼のダークエルフの女性。

当然、黒い肌だ。

鎧に隠されてはいるが、その女性としての肉感的な線は美しく、色彩の配色は神々しくもある。

「人間がダークエルフを話し相手だと？はっ！」
閉鎖的というより、排他的逆ギレ？

見下されているのは、ありありとわかる。
まるで、何処かの国の貴族みたいだわ。

何処とは言いたくないけれど。

「そう言われてもなあ……。」

オレは隣にいるホリンを見る。

ほぼ毎日話してるぞ？

「む？オマエは同胞か？」

多少は驚きはするか……。

「我等の同胞が、人間を森に引き入れるなぞ！」

何か、イラッと来るぞ。

さっきの林檎のせいじゃないよな？

「あ、あの私は……。」

「言い訳無用！下等な人間如きの味方などしおって、一族の面汚しが！」

心臓の音が聞こえる。

多分、オレの鼓動。

なあ、ホリンは何か悪いコトをしたのか？

いや、悪い事をしたのかも知れないが、何も聞かずに一方的に他者を切り捨てるのは正しいのか？

この扱いは正しいのか？

「誇りすらも捨て去って、人間社会の世俗に塗れた愚か者が。コイツ等を連行しろ！」

いきなり連行って、犯罪者扱いか？

誇り？何だソレ？

ああ、鼓動がウルサイな。

周りの雑音も……。

なあ、何で目の前のこの女は、同族のホリンをこんなに見下してんだ？

ホリンは何であんな辛そうな瞳をしてるんだ？

”オレのホリン”は何で・・・なあ？

誰か・・・誰か教えるよ。

「うわっ！」

誰か・・・誰か・・・。

「答えてみるよ！」

宙を舞う黒剣。

剣に触れようとして、思わぬ衝撃を受け蹲る男。

そっだ、ソレは”オレだけの剣”なんだから。

オレ以外の者が持つ事は許さない！

「フッ！」

剣を取って、蹲る男を蹴り飛ばす。

「違う！」

オレは叫んでいた。

ブツ飛ばしたいヤツは、コイツじゃない！目の前の女だ！

剣を鞘から抜き、女の剣を弾き飛ばし、それでも勢いは止まらず身体ごとぶつかって樹の幹に叩きつけた。

「一族の面汚しだ？愚か者だあ？」

雑音がウルサイ。

「ホリンはな、安穏な世界を出て差別だらけの人間社会で必死に生きてきたんだ・・・引き籠ってるだけで年食ってるオマエ等とは違う！」

オマエは喋るな黙れ。

一方的に決め付けて言い放ったのはそっちだ。

今度はオレに喋らせる。

「下等な人間だ？じゃあ、下等な人間にこんな目に合わされてるオマエは、さぞかし偉くて高貴なんだろうな？あ？」

生まれは誰にも選べないんだよ！

選べんなら、誰もが幸せを願う。

苦しまない道を選ぶ。

「くっ……。」

「下等な人間以下になるのが屈辱か？なら……。」

オレは剣を振りかぶる。

剣を握る手が熱くて痛い。

きつと火傷しているんだ。

わかってるよ……わかったから……。

「アルム様ッ！」

ホリンまで、そんな声を上げて……過保護だろ？

オレは剣を眼下に倒れている女の首筋スレスレに突き降ろした。

明断と激怒と黒姫。【前】（後書き）

そろそろ疲れてきました・・・そんな作者に皆様の愛の手を・・・
いや、合マいの手でも可

明断と激怒と黒姫。【後】（ホリン視点）

目の前で起きた現象に私は目を疑った。
今迄、彼が、私のご主人様が、あんなに怒りをあらわにした事はなかった。

あんなにも激しく。
でも……。

「アルム様ッ！」

振りかぶられた”片刃の剣”

それだけはいけない！

やっちゃダメだよ！

「大丈夫だよ、ホリン……。」

さつきとは違う優しい声。

ゆっくりと突きたてた剣を抜く。

そこには一滴の血もついてはいなかった。

「ちよっと頭に血が昇っちゃった。」

笑顔。

ゆっくりとこっちに歩いて来る。

「ああ、そうそう、高貴なエルフさんとやら。」

背中にいる同胞に向ける声は、未だに怖い。

「そんなに自分達が上で、周りが下ってんなら、試しに身内を調べてみなよ。」

声には、棘があつて怖いけれど、私を引き寄せる手は、物凄く温かくて優しいの。

何でだろう……。

「きつと、自分達の欲望や醜さが人間と変わらないってわかるよ。特に物流を重点的になっ。」

「何？どういう事だ！」

相手からの呻きに近い声が返ってきて、ほっとする。

良かった。

「ご主人様が、”あの方”の命を奪うような事にならないで。

「調べりゃわかるよ。」

「そっか、コレを伝えるのが目的だったんだ。」

「待て！」

「いゝやだっ」

ゴソゴソと腰についた革箱を漁ったご主人様は、球体の何かを後ろに向かって放り投げた。

「ホリン！全力疾走！」

投げた途端に走り出したご主人様が、左手で私の手を思い切り引っ張る。

痛いって！

何とか駆け出した私の後ろで、爆音と突風が！

「止まらない！走る！」

手を引かれるまま、私は無我夢中で走った。

かなりの距離だったと思う。

追ってくる気配は無い。

「な、何ですか?!アレ?!」

「ん?」

の、ノンキな声で！

「さっき投げたヤツです！」

「ああ、爆発する粉で作った球。」

あっさりと答えられた。

「そ、そんなの何時作ったんです?!」

「え?昨日。ほら、ミリイのお使い。」

そう言えば、ミリイさんがお買い物に行つて、みんなの想像通りに迷子になっていた気が……。

「て、私、そんなの聞いた事ないですよー!」

「うん、オレも最近までそういうのがある事さえ忘れてた。」

「わ、わすれ……。」

そんな画期的な発明品を忘れるなんて……。

「ロクな使われ方しないだろうし、兄上に時代を先取りし過ぎて使えないって言われたからさ、当時。」

先取りも何も……。

「頑張った割りには、評価されなかったんで、すっかりと勉強した事実自体を忘れてた。」

役に立たない勉強なんて大嫌いだと、ブツブツ言うご主人様は可愛いケド。

何か、この人は本当に色々な意味ですんごいんだと思った。

「ごめんな……ホリン……。」

ん？

「ホリンの居場所は、オレが必ず作るから。」

あ……。

「反省ですか？」

そっか、私、帰る故郷なくなっちゃったんだ。

「んー。」

でも、なんだろ？

そんなに苦しくない。辛くない。

「まっ、いつかあ。」

「へ？」

あはは、面白い顔。

でもね……。

「何かすつきりした気がする。私、中途半端だったんだなあ。」

故郷に対しても、人間社会に対しても。

「でも、ま、今はご主人様がいてくれるしい。」

すり寄っちゃえっ。

「いてくれるんだよね？」

「うん？まあ……ね。」

「あんな怖いご主人様は嫌だよ？」

本当に怖かった。

でも、原因が私に対する言葉だったからってのは、ちょっと嬉しい。
「ちゃあんと飼ってねっ。」

「あはは。」

反応がかーわいつ。

ご主人様のアルム様は、皇子様じゃないよね。
何かアルム様はアルム様ってカンジ。

「あ、そっか。」

「どした？」

前に言っていた事って、こういう事なのかな？

「なんでもなーい。それよりご主人様って強いんだね。見たコトない剣で圧倒的だったもん。」

「大人気なかったデス。」

しゅんとしてるご主人様もかーいいいなあ。

「”片刃の長剣”で、第一王女のラミア様を軽く倒しちゃうんだもん。」

「はいいいいいいーッ?!」

あ、固まっちゃった・・・。

これはこれで、面白くてまた可愛いカモっ。

明断と激怒と黒姫。【後】（ホリン視点）（後書き）

何だよタイトルと思ったヤツ、正座（苦笑）
このタイトルは引つ張りませぜw

猛省と右手と傷。

「はああああ。」

今迄生きてきて、一番長い溜め息を更新中。

「気が抜けるっス。」

顔に黒い粉をつけながら、ザツシユが笑う。

オレとホリン、二人共へろへろになって帰ってきて、ようやく着替えて休憩出来たところだ。

「ザツシユ。」

「何スか？」

「殴つてもいい？いいよな？」

「また突拍子もなく……。」

苦笑いで一蹴された。

オマエの不用意というか、用意周到な言葉が発端だとわかってか？
わかってるよな？

やっぱり殴つていいか？

「まさか、ダークエルフのお姫様と戦う事になるとはなあ……。」

大体、アレがお姫様か？在り得ないだろ。

美人なのは認めるが。

「いや、ホリンのが断然いいな、うん。」

「ふえ？」

帰ってきて緊張が解けたのだろうか？ヤケに眠そつだ。

て、君は、オレの寝台で何時もぐっすりと寝てるだろうが。

「今のトコ、オレが見たエルフの中では、ホリンが一番だなんてハナシ。」

「もー、女性は他に一人しか見てないじゃないですかっ！てゆーか、ダークエルフの中だけなんですか？」

あ、拗ねた。

「しかしだ……。」

こんなことを言いながらも頭は回転させなければならぬのが辛い。

「姫の心証を悪くしたのは、いいとして。」

「いいんスか?!」

何で驚くんのだ?

「んー、長姫が人に対して排他的なのは元々だからな。大事なのは彼女が身内を調べてくれるか否かだよ。」

せめて、当初の目論見通りに確約が取れたら良かったのだが、多分、人間と約束する事自体しないよな、アレじゃあ。

「調べなかった場合は、如何するのですか?」

レイアが口を開く。

「問題はそこだけだね。調べて何かあっても、向こうは人間嫌いだから。」

そこは、自分達だけで何らかの行動は起こすだろう。

オレ達に知らせなくてもいい。

調べた結果何もないならば、それはそれで……。

「その場合を考えて、やっぱり家捜しかなあ。」

効率を重視して探さないと時間が嵩むな。

他にも考えたい事があるつてのに……。

「証拠を掴んでその後は?しらばつくれられたら、どうなさるのですか?」

レイアの突っ込みももつともだ。

「うーん、この城にも州府の城にも物資の搬入の痕跡があれば、言い逃れしても、何処かに不正があったという疑いは残る。」

流石に、以降の悪事はやり難くなるだろう。

そこまで辿り着いたら、最悪、皇子の強権でも揮うかな……無いケド。

「そこは何とかするよ。んじゃ、ザツシュ、州府と城の見取り図の入手宜しく。」

「はいい?!」

さらりと頼んだつもりだったが、ダメだったか……。

「だから、見取り図。効率的な家捜しには必要だろ？」

「……無茶振りにも程がないっスか？」

見取り図って最重要機密だからな。

発覚したら、即刻死罪くらいかあ、うん。

「ああ、大丈夫、大丈夫。ザツシユなら出来る、出来る。多分。」

寧ろ、ヤレ。ぐらいの高圧さで笑顔。

「殺生な……。」

「最悪、どちらか片方でいいよ。」

オレは左手をひらひらとザツシユに振る。

「はあ……じゃあ、顔と手を洗ったら行ってくるっス。」

がっくりと肩を落とし、部屋からとぼとぼと退出するザツシユ。

「レイア、頼んだ物はどう？」

オレがレイア達に頼んだのは、例の爆裂球の作製だ。

手数で攻められた時の最終手段だ。

これなら、面に対応出来る。

「言われた通りに作って、30個程。」

「まあ、上出来かな。」

ミリイに頼んで、燃料用の木炭、肥料用の硝石粉、食品加工用の

硫黄、等々を混ぜたものだ。

比率はヒミツ。

オレの努力の結晶だし、下手に使われたら困るからな。

だから、材料の買出しと加工する人間を分けた。

買出した側は比率を知らないし、加工する側は材料を知らない。

情報交換しないようにミランダには監視してもらってたし。

というか、多分、ミリイ材料覚えてないと思う。

迷子で発見して貰った時、半泣きで混乱状態一歩手前だったし。

「レイアもホリンも身体洗っておいで。」

頑張った分、労わないとな。

「シルビイ。この球を厨房で保管してもらって。乾燥した所で、火

「気敵禁ね。」

「はい。」

「厨房なら、誰かに見つかったとしても幾らでも誤魔化しようがある。」

「それが終わったら、君も湯浴みしてくるといいよ。ミラも一緒に。」

「あれ？アルム様は、一緒に入らないの？」

「分別は持った方がいいぞ、ホリンよ。」

「はいはい、オレはいいから、さっさと行った行った。」

「オレは会話を打ち切ると、もう一つの思考に入った。」

考えていたのは、ホリンの言葉。

『“片刃の長剣”で、第一王女のラミア様を軽く倒しちゃうんだもん。』

”片刃の長剣”

確かに彼女はそう言った。

「デイーンの剣は、”オレが手にしてから両刃の長剣”だ。」

それ以来、片刃の形状になった事は無い。

ただの一度も。

「何かの条件があるのか？」

しかし、オレが殺意に近い怒りを覚えて剣を振るった時は、明らかに拒絶の反応を示した。

「それなのに剣は、以前の片刃の状態に戻った……。」

微妙に矛盾していなくもないような……。

つまり、オレには使いこなせないって事なのかな？

最初から使いこなせるとも、使いこなそうとも思っていないけれど。

ただあれは……。

「ん？どうしたミラ？」

ふとミランダが一人で部屋内に佇んでいるのに気づいた。

どうやら、風呂には行かなかつたらしい。

どうも、ミランダに対しては甘くなるんだよ、オレ。

なまじ一緒に居過ぎで、裏切る事はないと思っっているせいか、気配を感じても無意識下で警戒対象から外れてしまう。

ミランダになら、裏切られても、殺されても仕方ないとは思っているのも確かだ。

一番オレに時間を費やして、一番人生を無駄にしているのは、ミランダだから。

「なあに？」

返事をしない彼女に再び問いかける。

昔のミランダは、よくこんな風に押し黙る事があったのをオレは覚えてる。

必ず大事な事を言う直前の時だ。

「アル」・・・手を出して・・・。

何年振りだろう・・・その呼び方。

「ん？手？はい。」

オレは左手を彼女に向けた。

無駄だと思うけど。

「・・・反対。」

うう・・・見詰める目が痛い。

やっぱり無駄だった。

恐る恐る右手を彼女に差し出した。

「・・・どうして、何時も我慢するの？」

火傷で真っ赤になった手の平。

ところどころ皮膚が裂けて血が滲んでいる。

「我慢？あんまりした事ないけど？」

我慢じゃないが、怠けたり、ダラけてばかりで、我慢てあんまりしないんだよな。

たいていの事は、納得したり諦めたり出来てしまうし。

「毎日毎日、我慢して、自分を削って・・・。」

”大事な姉さん”はそう言うと、オレの手の治療を無言で始めた。

約束と左手と絆。(ミランタ視点)(前書き)

正直、疲れてきた(ヲイヲイ)

約束と左手と絆。(ミランダ視点)

帰って来てから、何か変でした。

何時も彼を見る度に不安になる時が、必ずあります。

この城に来てから、その不安に感じる時が日増しに増えていって・
。

彼は常に自分を演じている。

何時も誰かの為に・・・そんな錯覚さえ覚えるくらいに。

「アル」・・・手を出して・・・。」

何時もの動きではない違和感。

彼は帰城してから、一度も右手を開いてはいない。

そして、何も言わない。

私は、我慢できなくなつて、彼を、愛すべき弟の名を呼んだ。

「・・・どうして、何時も我慢するの？」

肉が裂けた手。

所々、火傷にもなっている。

傷跡が残らないと願わずにはいられない。

どうして何時も彼だけが、こんな目に合わなければならぬのだら
う。

好きで、その道に生まれたワケではないのに。

「我慢？あんまりした事ないけど？」

それが我慢でなくて、何が我慢だと言つのだらう？

「毎日毎日、我慢して、自分を削つて・・・。」

こんな事ばかりしていたら、何時か彼が壊れてしまう・・・大切
な彼が・・・。

もしかしたら、もう既に・・・少しずつ・・・。

「なんでだろうね・・・。」

ぼつりと呟いた。

「自分でも不思議なんだ・・・今迄、皇子としてのオレをちゃんと

必要としてくれた人はいなかった。」

選ぶ事の出来なかった自由。

「アルムとしての自分も、ミラ以外は必要としてくれなかった。」
それは私が貴方を愛しているから。

「でもね、今は、何時も誰かが見ている。それは、ちょっと昔とは違う視線なんだ。」

目の前の自分の剣を見詰めている彼。

「オレは普通とはちよっと違った処に生まれてしまったけれど、何て言うのかな、少しはマシになった気がするんだ。」

「だからって怪我をしていいという事にはならないでしょう?」

誰かの為に、彼だけが傷ついていいという理由にはならない。

「あはは、うん、そうだね。ごめん。」

されるがままに手に包帯を巻きつけている様が痛々しくて、私は泣きそうになる。

「でもさ、ちよっとだけ・・・たまに踏ん張ってみようかなって思っっちゃうんだ。」

「踏ん張る?」

「何も期待されていないオレだけど、手に届く範囲くらいはさ・・・。」

「どうして彼はこんなにも優しく出来るのだろう?」

今迄、周りの人間が見向きもせず、まとも扱おうとすらしなかったのに。

どうして、優しく人を信じようと思えるのだろうか?

「だから、我慢してないし、こんな傷は何とも思わないよ。」

「思いなさい!」

彼の顔を見られなくなつて、俯いた。

どうせ、顔を上げてても、涙で滲んで何も見る事は出来ないから。

「それじゃあ、ダメなの! いい? アル? 確かにアルは立派。でも、それじゃ、何にもならないのよ?」

包帯で包まれた手を優しく撫でる。

「大切なモノが傷つくのは嫌かも知れない。でも、貴方を大切に想っている人間は、貴方が傷つくのも嫌なの！」

彼はわかっていない。

”自分の価値”を。

「責任を持たなきゃと思うのはわかる。でも、それを一人で全部背負い込むのは別。苦しかったら剣だつて捨てていいのよ？」

元々、彼は剣を握って戦うなんて向いていない。

彼は優しすぎるから、きつといつか、自分が斬り伏せた血と魂の重みに耐えられない。

壊れてしまつてからでは遅いのだ。

「・・・ごめん、ミラ。」

「謝ってもらいたくて言ってるわけじゃないの！」
理解している。

きつと彼は、ここで謝つたとしても、悪いと思つたとしても、自分の身を削る事を惜しまないだろう。

その時がくれば、そうしてしまう。

予言に近いくらい理解しているつもり。

「ねえ、ミラ・・・やっぱりオレは、どうしようもないダメ皇子なんだね。」

それは彼が人間や自分の弱さを知っているから。

それは悪い事じゃない。

包帯を巻いていない方の手で、私の手を優しく包み込んでいるのがその証拠。

「知らない、そんなコト。」

「ミラ？」

私は涙に濡れたままの顔を上げて、彼に微笑む。

「だって、貴方は”私の弟のアル”だもの。」

もし、彼が本当に壊れてしまう日が来るとしたら・・・。

私は、ずっと彼の傍に居続けて、その日を見届けよう。

そして、最後の最後迄、私の愛を、全てを捧げよう。

「今日は・・・ミラと一緒に寝ようかな・・・。」
「彼は何時でも私の太陽だから。」

約束と左手と絆。(ミランダ視点)(後書き)

たまには、ミランダにマトモな愛を・・・(苦笑)

憂患と捜査と声。【前】（前書き）

例の事情で、前・後で詰めて行きたいと思います（ヲイ）

憂患と捜査と声。【前】

その日はあつという間に眠りに落ちていった。

何がいけなかつたんだろうと、一日を振り返りながら。

ミランダにとっては、オレがどうなったとしても、幸せにならない限り許してもらえないんだろうなと思う。

それでも、デインの剣とトウマの魂を持って生きていこうと決めていたオレにとって、全てを投げ出す事なんて考えられなかつた。ただ・・・ミランダの大事な弟でいたいという甘い考えのオレもいる。

今までは”弟”でいることしかオレの居場所はなかつた。

でも、今はそれだけじゃない・・・。

そういう意味では難しい事なのだろうな。

「しかし、驚きだ。」

翌朝、目が覚めてから大いに悩む事になった。

夜は、ミランダと一緒に眠りについたから、問題はなかつたが・・・。

今日は当然、皆とまた顔を合わせる。

右手の包帯をどう誤魔化そうかと。

とりあえず、包帯を変えるでもなんでも、一度包帯を取らねばと思つて、一人で格闘していたトコロ。

「まさか、一晩で傷が消えてるとは・・・。」

包帯を外していくうちに痛みも引きつりもないのをいぶかしんでいたら、傷がすっかり消えていた。

一晩で治る程度の傷では勿論ないので、消えたと表現。

身体には、軽い筋肉痛がしていたから、別段に回復力が上がったとか、特殊能力が付与されたわけでもないだろう。

「ワイワイ・・・ただの罰かよ。」

オレは呆れた瞳を剣に向ける。

今のオレの立場をわからせる為だけにあんな事をしたというのだからか？

という事は、昨日のオレの手の怪我と、剣を持つとしたレイアやダークエルフに与えられた衝撃とは別モノだという事だろうか？

「勘弁してくれよ・・・昨日のは、悪かったと思っっているからさ・・・」

朝から脱力した。

お陰で、傷を皆に対してどう誤魔化して隠し通そうという問題は消えたが。

包帯を外し、着替えてまだ寝台で静かな寝息を立てているミランダを振り返る。

彼女の美しい頬に口付けをしてから、食堂に向かった。

ミランダには、本当に心配をかけまくったから、もう少し寝かしておこうと思う。

もう朝食の時間よりは、昼食の時間の方が近いんだけどな。

誰も起こしに来なかったのは、皆それなりに気を遣ってくれたのだろう。

その証拠に食堂に訪れた時、全員の姿があった。

しかも、ひよっこりザツシュもいた。

早いなあ、仕事早い・・・早過ぎるなあ・・・

「ほい。順番に報告があれば聞くよ。」

何とか欠伸を堪えながら。

「では。昨日引き上げていた管理人達ですが、気を利かせたつもりなのか、本日も州府に待機させておくそうです。」

レイアが進み出て、報告する。

「活動がバれていないという風に取りたいけれど、その逆も有り得なくもないな。気を抜かないようにしないとな。」

監視の役目も管理人達にあるとするならば、引き上げ続けるのは非常に不自然だしな。

噂が伝わって警戒を解いてきたのか、逆に人手を集めているのか。

しかし、これは幸い。
存分に家捜し出来る。

「アルム様、例の物はきちんと厨房に隠してきましたわ。ちゃあんと火気・湿気厳禁も言付けておきました。」

「ありがとう。」

ミランダは、相変わらず微笑んでいて、癒されるな。

さてと、残るは……。

「ザツシユクウくん？」

ニヤリとここで笑うオレは意地が悪いと思う。

「うぐつ。ちゃんとやってきたっス。実物は無理なので、写しだけで……それも皆の分だけで精一杯っス。」

一瞬怯んだ割りには、きっちり仕事してきたな。

そうだよな、うんうん。

これくらいしてもらわないとな。

「さてと、どれどれ……。」

食堂の机に見取り図……というより、部屋の位置取りのような図を広げた。

「皆も見てください。あ、ミリイ、シルビイ、ホリンも。」

「私達もですか？」

「うん、大事な事だから。」

呼ばれた事自体に驚いたミリイだったが、本当にコレは大事な事だからさ。

「皆、一度行ったとか、見た事のある部屋で、特に棚や収納領域の無かった部屋を指摘してくれ。」

効率重視なのは当然の事だけれど、あるかどうかもわからないモノを探すんだから、面倒だとは思う。

何やら、和気藹々と各部屋の中で特段怪しくないだろう部屋が埋まっっていく。

「意外と埋まったな。」

物見の塔と厨房（地層階）以外は、ほぼ埋まった感じた。

「塔は仕方ないな。一階以外の場所と一階を比較しても隠し部屋を作るような面積も稼ぎ出してないか……。」

何を運び込んでいたのかわかれば、保存に適した場所も判明しやすいのに。

などと、ボヤいていても仕方ない。

どうせ、バルドが戻るまでは表立って動くつもりはないから。

「他に怪しいとしたら、一階部分の床と壁だな。」

隠し部屋、通路があるとしたら、そうだな。

「隠し扉があると?」

レイアが問い返してくる。

「よく考えてごらん? ザツシュが言った様にここは皆だった。皇族も住んでいた。逃走用の隠し通路か何かがあってもおかしくはない。」

昔から偉い人間は、好き放題やるクセに臆病で、生にしがみつく傾向が高い。

ま、命を大事にするのは、悪い事じゃないけどね。

「ザツシュとレイアは、四つの物見の塔を調べてくれ。何も無い地階も地下道とかがないかをね。」

「了解っす。」「わかりました。」

「シルビイはオレと一緒に。ミリイとホリンは、厨房と地階部分を探すよ?」

「はいはい。」「わわかりました。」「頑張ります。」

「オレ達は残っている部屋を探すから。それと隠し扉や部屋を見つけても勝手に入らないコト。いいね? じゃ、行くぞ。」

オレは食事代わりに林檎を二つ手に取って食堂を出た。

憂患と捜査と声。【前】（後書き）

正直な話、無駄に小さな伏線ばかりちりばめても、読んでるうちに皆忘れちゃうよね、反省。

憂患と捜査と声。【後】(前書き)

息切れ感もありますね・・・いや、本当。

【憂患と捜査と声。】 【後】

「言っただされば、皮くらいお剥きしましたのに。」
「ん？」

昼食代わりに齧ろうとしていた林檎を見て、シルビアが声をかける。

「ああ、そうだね。ありがとう、シルビィ。」

彼女の気遣いにお礼を言って、林檎を齧る。

下から。

「うふふ。面白い食べ方ですね。」

「オレだけのとっておきの食べ方だ。」

思いつ切り胸を張ってみた。

ああ、ちなみに下から齧っても、特別に美味く感じるとかないからな。

真似しても意味ないぞ。

「私も次に食べる時は〜やってみますわ〜。」

にっこりと微笑むシルビアの表情はやっぱり癒される。

何度見ても飽きる事はない。

「シルビィはホント、綺麗だな。」

「恥ずかしいです〜。」

それでも、彼女は微笑みを止めない。

「シルビィには、オレの横でずっと笑っていて欲しいな……。」

「アルム様……。」

ちよっぴり困った顔をするシルビアだったが、すぐに微笑みをまた作る。

オレはその様子に思わず赤面してしまった。

「さ、さて、さっさと探すかな。」

シルビアと一緒に来たのは、以前の夜から何となく気になっていたからだ。

勿論、部屋の探索はするぞ？

大体、20部屋程度かな。

少ないと言っても、部屋の壁という壁に張り付いて探す様は、非常に滑稽である。

というか、間抜け。

地層階はこれに加えて床もだ。

「ん？床に這いつくばる侍女……。」

……言ってみただけだ。

変な妄想……もとい、想像はしていない。

人間ってね、意外と理性強いもんなんだよ？

まあ、完璧ではないから、人は法を己の枷として作ったんだが……。

ちなみに2階以上は床を調べる理由が完全になくなったのは、一階の部屋の天井が皆、同じ高さだったから。

もし高さが違って天井が低い部屋があれば、その上の階の床に収納領域がある可能性がある。

それが無かったから、床を調べる必要性がなかった。

きちんと床の厚みの計算も合っていたしな。

お陰で、シルビアがお尻を振りながら床に……いや、ごめん、悪かった。

「アルム様、昼間からえっちなのはいけませんよ。」

やっぱり心読んでるよな、うん。

「我慢出来なくなったらきちんと雰囲気を作って言ってくださいねえ。」

いや、それは違っただろう。

などと会話をかわしながら、二人で次々と部屋を漁る。

「これは……。」

「寸法ぴったりのので、いただいてしまいましたよるか？」

幾つ目かの部屋に入って見つけたのは、オレの部屋にもあった騎士の鎧像だ。

「寸法合うか？」

どう見てもオレの身体よりデカイ。

「いえいえ、部品がです。これ、多分、元々違う鎧同士の継ぎ接ぎみたいですから。」

そう言われてみれば、胴体部が足や腕に比べて一回りは大きい。最初は、馬上用の鎧かと思ったが。

よく見ると表面も細かい傷が沢山あるのを、塗装して無理矢理に傷を隠蔽したようだった。

「では、失礼して。」

手早く解体。

「右手の籠手が一番いいものみたいですよ。」

シルビアが自信満々で差し出して来るのだが、それはどう見ても鎧の部品の中で一番古くてボロく見える。

大丈夫かなあ……。

「大丈夫ですよ。」

また読まれたし。

「他に合いそうなのは……。」

膝下の足と甲の部分に左手の籠手の部分を装着。

「お、確かに悪くない。」

この城にあるんだから、オレ、使ってもいいよな？

いいよね？

使っちゃうぜ？

残った部品は……すまん、あとで何処かに片付けるから。

他にも何か使えるモノはないかなあと、主旨の違ったウキウキ感で他の部屋も漁ってみたが、そうそうあるワケもなく……。

大抵が飾るの専用の美術品であったり、槍やら斧やらで、オレが求めていたようなモノは無かった。

短剣とか投擲用の剣とか欲しかったんだけどなあ。

「しかし、内装無駄だな。」

上の階から、シルビアと順々に降りて行ったが、何の収穫もない。

ここまでが調子良く行き過ぎたからなあ、世の中そんなに甘くないよね、そりゃ。

うまく行かない方が多い、多いのはわかっているけれど・・・わかっていたんだけどなあ。

「アルム様！」

「ん？ミラ？」

あ・・・起こすの忘れてたな。
まじい・・・。

「あ、ミラ、その気持ち良さそうに眠っていたから、起こすのも悪いかなあ〜って・・・。」

ヤバい、どう誤魔化そう。

相手はミランダだぞ？大抵の嘘ならバレる。
自信あるゾ。

昨日の出来事を見れば、一目瞭然くらいに。

「それはそれで・・・じゃなくて！一大事です！」

一大事？

「何か見つかったのか？！」

意外と世の中うまく行っちゃったりしてる？

「違います！表に！表に傷だらけのダークエルフが！！！」

血相を変えているミランダを前にして、オレの脳裏に昨日の出来事が浮かぶ。

こりゃ、最悪の展開か？

こういうのは流れっていうもんがあって、一度傾くと元に戻したり逆転するの大変なんだよな。

「ミラ、そのエルフをオレの部屋に。シルビィ、ザツシュとレイアを呼び戻して外の警備に。その後、厨房で病人食を。」

オレは階段を駆け下りながら、二人に指示を出す。

「ミリィ！怪我人だ！薬を持ってきて！！ホリン！今すぐにオレの部屋に！」

力の限り一階に向かって叫ぶ。

遠くで微かに二人の返事が聞こえたのを確認すると、自室へと踵を返す。

頭の中では、考えうる限りで最悪の事態を想定して予測。対処法に考えを巡らす。

今、一番最悪な展開は人とエルフの間の紛争だ。

これは皇子としても出張らなければならない。

ただ、昨日の事もあるのにエルフがわざわざこの城に来たのが、引つかる。

政治に関しての事は、州府に行くはずだ。

単に傷の具合から、近い城の方に来たのか・・・それとも・・・。

「オレがここにいるからか？」

いや、昨日、オレは名乗ってはいないハズ。

ん？ホリンがオレの名前を呼んでいたんじゃないか？

「あ・・・。」

オレは、自分の考えに自分の頭を小突いた。

それでも足りなかったので、壁に頭をぶつけてみた。

痛い・・・。

「そうじゃないだろ、オレ。」

今はもつと大事な事がある。

何を考えていたんだオレは。

この考え方はオレという人間の考え方じゃない。

為政者の考え方だ。

しかも、自分達に利を得る為だけの。

「何でこうなんだ？オレは。」

今、一番大事なコト、それは・・・。

「傷ついたエルフの安否の方が、断然大事じゃないか・・・アホらし。」

オレは一切考えるのをやめて、エルフがオレの寝台に薬や食事と共に運ばれてくるのを待った。

もし、エルフが話せる状態ならば聞けばいいし、ダメなら誰か人を

遣らせればいい。

それからでも遅くない。目の前の命の対処を疎かになんて、愚の骨頂だ。

願わくば、”彼女”の怪我が浅いものでありますように。

オレはとにかく、まずそれを想った。

擁護と傷心と願ひ。【前】(前書き)

またとか言わないで・・・。

擁護と傷心と願い。【前】

ダークエルフの持つ情報内に城に住む皇子の名がアルムだというのがあつてコト。

そこまでは思考してしまった。

「やっかいだな。」

情報ダダ漏れで、情報戦完敗してるわ。

困りモノだ。

「ま、今更か。」

どんなに頭を回転させた所で、無理なものは無理と割り切るしかない。

すると、ドタバタと人が駆ける足音がして、人を抱えたレイアが寝台に件のエルフを寝台に乗せ、ミリイが手当てを始める。

「レイア、どうだ？」

「軽い火傷と裸足で駆けてきたのか、足に大小の切り傷があります。」

「

火傷？

焼き討ちじゃないだろうな？

冷や汗が出てきそうになる。

「どんな火傷だ？」

「背中に円形状ですね。」

円形？

火矢ならそんな傷にならないよな。

冷静に考えたら、森で焼き討ちとか火を使った攻撃なんて浅薄過ぎる。

「あゝ、ホリン、ホリン？」

さつきとは違う冷や汗が・・・出てるな、もうコレは。

レイアの後から部屋に入ってきたホリンを手招き、手招き。

「あのさ、エルフって炎術使いつている？」

この世界の大気中には、目に見えない細分化された粒がある。その粒を媒介にして、様々な現象を引き起こすという事が、実は可能なのだ。

ただ何故か媒介にして使う事の出来る人間は少ない。

使用条件が血であったり、言語体系であったり、他の触媒、或いはその組み合わせの場合があるんだが……。

何でこんな詳しいかというのと、いや皇子って国書読み放題なんだよね。

例の宝物庫の本も全部読んだし。

「規模を別としたら、何人かはいますけれど……数えられるくらいに少人数ですね。」

「厄介な。」

他に読んだ本によると、現在の大気中の粒の残量は、例の次元の穴を開ける為に大半が使用されてしまっていて、限りなく少ない。

ここにきて、大半の人間はその技術(?)を放棄したんだが……。「用心はしないとな。」

仮説の一つは、炎術での攻撃。

仮説のもう一つは、他の兵器だ。

オレの爆裂球のような発明。

全く、兵器を進化させる情熱なんざ、何の得にもならんのだよ。

効率良く人を殺せる技術を競ったり、自慢したりなんざ、逆に非生産的だ。

何故、それがわからないんだろう？

「レイア、外の警備をザツシュと一緒に頼む。」

さてはて、流れがキナ臭さを増したな。

大炎上する前に何とかしないといけないか？

「……て、気力がもつかな。」

絶対に体力よりも先に気力が尽きる自信がある。

「アルム様、手当て終わりましたよ。」

さしあたって、情報収集か……。

ミリイに呼ばれ、寝台に近づく。

「ミリイ、ありがとう。」

普段、自爆して自分で治療しているせいか、怪我の手当て等は上手いんだよ、彼女。

しかも完璧で、失敗無し。

・・・あー、そこに至るまでにどれだけ失敗したかは、聞いてあげないのが紳士の対応だ。

しかし、あのコワイイ女と対面すると思うと萎えるなど考えていた。考えていたんだが・・・。

「誰？コレ？」

思い込みは良くないよな。

オレの予想は見事に裏切られた。

もつとも、これは思い込んでいたオレが悪い。

眼下に横たわっていたのは、予想していたエルフの第一王女ではなく、ホリンより幼く、ミリイより小さな女の子だった。

「ええと・・・。」

ホリンが苦笑いして言葉を濁す。

何だ？

嫌な予感。

「仕方がない。気がついたら教えてくれるかい？それまではホリンが面倒見てくれ。」

この時点で、ホリンに問い詰めたりする事も出来る。

でもま、そんなのは”まだ”どうでもいいか。

目の前にいるのは怪我人の幼い女の子だ。

それで、とりあえずはいい。

予想をつけたりも出来はするけれど。

「それじゃあ、オレ達はもとの仕事に戻るか・・・。」

オレは部屋にあったティーンの剣と、昨日まで着ていた鎧を掴み部屋を出た。

多分、準備が必要だろう。

この後の。

「ミラ、厨房に預けていたモノを取って来て。」

総力戦。

一瞬、その言葉が頭を過ぎった。

「あと、レイアとザツシュに制圧戦の対人用装備をとるように伝えてくれ。」

こう彼女に告げたオレは、先程見てきた部屋内に飾られてある防具を再確認しに行った。

オレもすっかりした対人用の装備をしなければならぬからだ。

擁護と傷心と願い。【中】（前書き）

ごめんなさい、中編です。

森に行くまでをひとまとめにしてみました。

擁護と傷心と願い。【中】

「ここは？」

目の前の少女が声を発したのは、一刻も経つかどうかといった頃だった。

「皇族の住む城の中だよ。大丈夫、君に危害を加えるつもりはないから。」

言っておいて、自分が完全装備をしていた事に気がついた。

最近、抜けていると思わないか？

骨董の鎧から剥ぎ取った黒の籠手と具足を着け、左腕部には三角形の小盾を取り付けている。

胸部・腰部も完全に覆われた銀色の金属鎧。

これは別の部屋にあった鎧から無理矢理剥ぎ取った。

お陰で元々持っていた鎧の留め具を流用するハメにはなったが、とにかく彼女の見ている前で、ディーンの剣を手を取れない距離に立てかける。

「背中を火傷しているみたいだから、なるべく横を向いておくんだよ？あ、お腹空いてない？」

きちんと聞き取って把握出来るように、なるべくゆっくりと滑舌よく。

「お腹……。」

小さな呟き。

オレは籠手を盾ごと外し、近くの皿を取る。

「冷めちゃったけど、ごめんね。」

一掬い、少女に飲ませる。

丁度、ホリンが席を外していて、その間だけこの子を見ていたのだが、どうしようか？

ホリンを呼ぼうか迷っているのだが、どちらかというとなべられる時に食べさせて休ませる方を優先した方がいい気がする。

何回か掬って飲ませ続け、あっという間に一皿完食した。

「良かった、口に合って。もう少し休むといいよ。起きる頃にはホリン・・・あー、ウチのダークエルフがいるから。」

どうせ、十中八、九は行って戦闘になるんだろ？

オレとしては、あんな失礼千萬な一族どうでもいいんだが・・・ほら、ホリンは優しいからな、うん。

故郷を捨てたとは言え、同胞を見捨てるって出来ると思うか？

「はぁ・・・ん？」

溜め息について立ち上がったオレの裾を少女が掴んでいる。

金髪・金眼。

当然に黒い肌。

幼さを前面に出した大きく丸い瞳に桃色をした小さな唇。

そして、とてもあどけない顔つき。

「大丈夫。ここは安全だから。」

今のトコロは。

心の中でそう続ける。

それでも彼女は、オレを見詰めたまま手を離さない。

離す気配もない。

オレは仕方なく、彼女の手を取り両手で一際優しく包んだ。

「オレもここにいるから。誰も居なくならないから。」

諦めて再び席に着き、少女の頭を撫でると、そのまま瞳を閉じて少女はすぐに寝息を立て始めた。

しかし、寝てもオレの手はがっしりと握られたまま。

「いやはや、どうしたもんかね。」

身動きが取れなくなったオレは、仕方なく思考を巡らす事に時間を費やす事にした。

把握するべきは、現状だが・・・多分、コレは最悪に近い。

州府側から何の行動もないのは、良い事なのか悪い事なのか。

とりにかく、事はまだ森の中だけの出来事で済んでいるワケだ。

内乱にしろ何にしろ、きつと出だしの小規模の間なら、何とか出来

る可能性はある。

エルフの集落は四つに分かれているという事実から、武力による蜂起や襲撃は、全ての集落で同時に起こさなければならぬ。

オレだったら、そうする。

後は、迅速に要人を確保をし、内乱ならば政権を奪取。

これを逆順処理で潰していけるのかと問われれば、唸るしかない。

「第一段階は、要人の確保か。」

オレは頭にラミア姫の強気な顔を思い浮かべる。

・・・乗り気になれん。

助けても、逆に怒られそうだ。

幸い、各集落ごとの連絡に時差があるのならば、こちらは各集落ごとを奇襲して、要人だけ確保すればいい。

「何で、こんなコトをオレが考えなきゃいけないんだろ・・・。」

オレはオレの外の出来事に無関心でいたのに・・・。

「一体、どうしたいんだよ・・・。」

気だるくなりながら、オレは寝台の端に頭から突っ伏した。

思考停止 休憩。

「なあ、ディーン、トウマ・・・オレの手の届く範囲って、広くな
いんだよ・・・。」

なんたって、自他共に世間も認めるダメ皇子だしな。

しばらくの間、自分の情けなさにがっかりし続けていた。

でも・・・でもさ・・・。

「きつと今、オレが居なくなったら、確実に誰かが困るよ・・・。」

「我ながら発想の飛躍が著しい。」

「じゃあ、死んだら・・・誰か泣いてくれるかな・・・。」

一番短絡的で簡単な方法。

でも、死んだとしてもトウマとディーンには、平謝りなのは変わらないか。

結局、どっちつかずだな、オレ。

目の前の静かな寝息を立てる少女をぼんやりと眺める。

こうやって……。

「誰かが安らかに眠れる日を願って、ディーンは戦ったのかな。」

きつとそうなんだろうというのが、オレの中のディーン像だ。

じゃなきゃ、あんな状態で次元の穴を閉ざそうとするか？

寝汗ではりついた少女の髪をなんとなく払う。

「アルム様……。」

ホリンだ。

振り向いて確認しなくてもわかる。

「ねえ、ホリン？」

オレは彼女を見ずに先に言葉にするコトにした。

顔を見たら、きつとこれからの会話に文句の一つでも出そうだったから。

「ホリン、君はどうしたい？他の誰でもなく君自身はどうしたい？」

オレは自分自身の事ですら、何も決められない時期があった。

何を選ぶうとしても、ディーンやトウマの事が頭に浮かぶ。

今だって、実は一時棚上げにしようとしている。

ミランダが捨ててもいい、逃げてもいいって言ってくれた時、少し心が軽くなった気がした。

何てヤツなんだろうな、オレは。

「オレは、今ではホリンを大切に想っているよ。だから、正直に言ってみて？」

ホリンの言葉を待つ。

きつとその答えは、オレの予想通りだとわかっていても、文句を言いたくても。

「私は……故郷を捨てて……。」

捨てて、オレ達の所へ来てくれたホリン。

「アルム様にずつとついて行くこうって……。」
うん、ありがとう。

「本当は嫌なんです。私にとってはアルム様が、ご主人様で一番。それでいいはずなのに。」
充分だ。

こんなオレには、勿体無さ過ぎる言葉だ。

「でも、お願いします・・・もし、助けを求めてくるのなら・・・」

「うん、いいよ。」

「え？」

「だから、わかったよ。ホリンの望むようにする。」

文句は言いたいけれど、でもその反面オレは安心しているんだ。自分が信じてみようと思った人が、そういう風に考えられる人だという事に。

「あ、ありがとうございます・・・。」

結局は自己満足の一言に尽きる。

ホリンの笑顔が見たい、嫌われたくない。
不純かつ、偽善的だ。

それでも・・・眼下の少女の寝顔を見れば、それも悪くないと思えるのは何故なんだろう？

擁護と傷心と願い。【中】（後書き）

冷静に考えたのですけれど・・・キャラの暴走っぷりが激しくて、
戦闘とか少ない気、しません？

擁護と傷心と願い。【後】

少女が運び込まれてから、結構時間が経った。

いや、正確にはそんな経ってないんだが、現状は”作戦は一刻を争う！”と叫びたくなるワケで。

その感覚からいくと、結構な時間・・・と、表現したくなる頃に少女は目覚めた。

「お目覚めかな？」

オレは少女に声をかける。

「んー、本当は名前とか色々聞きたいんだけど、急いでるから手短かに聞くよ？」

体力的な事もあるしな。

オレの言葉に少女が頷く。

「相手の規模、各集落の被害状況・・・あと、ラミア姫とか王族が無事か、捕らえられているならその所在。」

礼儀がなっていないのは、充分に理解している。

でも、もっと少女を休ませてやりたいし、人手が足りないのに時間も足りないんじゃない、更に困る。

「人間とエルフが20人くらい・・・私の集落に。」

やっとの事で声が出る。

か弱いけれど、可愛い声だ。

「君の集落？」

四つのうち、どれだ？

「ラミア姉様は、私を逃す為に捕まって・・・。」

「そうか、ラミア姫、君の姉さんは・・・。」

ん？マテ。

「ね、姉さん？ラミアが？」

今、この口、そう言ったよな？

確かに髪と瞳の金色は、ラミア姫と同じだけれど。

「アルム様、その方が第二王女のサアラ姫です。」

そりゃ、姉って時点で、三だろぅが二だろぅが王女だろぅよ！

ここに運ばれてきた時のホリンの様子から、偉い人の子ってのは何となく察しがついていたけれど。

しかし、姉に似ずに温和そうな子だねえ・・・人間に友好的だといふのも頷ける。

姉妹なんて言われないとオレ達人間にはわからないカモ。

「ミラ、厨房から取ってきたモノを全員に分配して。」

ホリンの頼みじゃなきゃ、逃げていたな。

オレには関係ないって。

「ザツシュ、レイア。バルドが帰還したら、州府に行つてスクラトニーを拘束しろ。」

オレの読みでは、そろそろバルドが帰還するだろぅ。

バルドが間に合えば、州府規模の人数なんざ、雑作もない。

そうなんだよ、そういうヤツなのよ。

完全装備で突っ込ませたら、某国の対騎馬装備の槍騎士団とか某国の重装歩兵師団とか、そういう人達じゃないと止められないと思う。

あくまでも”師団”単位な。

アレ、もはや人を超え獣を超えを地で行く人だから。

規格外だろ？

規格外なんだよ、コレが。

「バルドが帰還せず、明日の夜になつてもオレが帰つてこなかったら、情報を集め直して対策を立てろ。」

ザツシュは、重装用の胸部鎧と軽装用下半身鎧を組み合わせ、両籠手に小盾を取り付けたいでたちだ。

双剣使いが基本のこの国では、両腕部に丸型ないし三角型の盾を取り付けるのが、戦闘用の姿。

両手を空ける為と、小回りを効かせる為にそれをする。

だから、この国の兵士は盾を手で持つような事はしない。

長剣使いのレイアですら、左腕に三角盾を固定している。

まあ、彼女の場合は、左腕部全体を覆う大盾だったが。しかも、鎧も全身鎧だ。

速度で戦う双剣使いのザツシュとは、戦い方の組み立てが根本的から違うのだろう。

これが二人の対人装備らしい。

「ミラ、後の事は頼むよ。」

20人規模か・・・ホリンが5人くらい倒してくれるとありがたいんだがなあ。

「おっと、サアラ姫、もう一つ質問。襲ってきたヤツの中で、術使いは何人くらいいた？」

「術使い？」

首を傾げるサアラ姫。

背中からやられているから、もしかしたら姿を見ていないのか？事情がわからないんだな。

戦力の把握が完全に出来ないとか、すつげえ不安。

まあ・・・最低1人、最大20人と思っておけば、間違はない。

泣けてはくるけれど・・・。

「そっか、ありがとう。じゃあ、ゆつくりと休んでね。」

「私も・・・行きます。」

へ？今、何と？

「サアラ様?!」

うん、そこは驚くトコロで合ってるよね、ホリン。

「関係のない方をエルフの揉め事に巻き込んだのですから、私もエルフの姫として行かねば・・・。」

健気だなあ・・・本当に”アレ”と血、繋がってるの？

「あー、関係なくはないんだ、コレが。ウチのホリンの頼みだからオレは行くの。」

人間もいるしな。

ややこしい大義名分なんてのは、オレは大嫌い。

「それにね。」

ぺつちとサアラ姫のオデコを叩く。

軽くだぞ？

「子供は黙って、大人に護られてなさい。サアラ、いいね？わかった？」

幼かった皇子には、そう言ってくれる人間は皆無に近かった。

じゃあ、この幼い姫は？

そう思うと、何やら沸々とこみ上げてくるものがある。

ああ、これは怒りってヤツだな。

いいだろう、この怒りはブツける先があるしな。

うん、健全に（？）発散してこようという前向きさ（？）が出てきたぞ。

「でも……。」

しゅんとなるサアラ姫の様が可愛らしい。

やっぱり、血が繋がってないんじゃないの？

この可愛さを見ると、悪戯心が湧きそうです、はい。

「んじゃ、これはサアラからの依頼というコトで、見事達成した暁にはご褒美を貰う事にしよう。」

うむ、我ながら、無理矢理過ぎる程の話題の転換。

「ご褒美ですか？」

「うんうん。そうだねえ、一緒にお風呂とか、一緒に寝るとか、何でもいいや。」

悪戯心が爆発して、思わず言ってしまった。

大体、事が事だけにサアラ姫に拒否権なんて無いよな、コレ。緊張感皆無の発言だし。

うわ、オレ、空気読めてねえっ！

ほら、顔面真っ赤で硬直しちゃっているし！

「よし！行くぞ、ホリン！」

ああ、そうさっ！この空気にいたたまれなくなったのさっ！自分で作ったのにだよ！悪かったな！

「あっ……。」

声を発するサアラ姫の返事を待たずにオレは、森に向かう為に走り出した。

擁護と傷心と願い。【後】（後書き）

次回！3話連続エルフの森での戦闘編！

・・・また前・中・後とかやらかすのだろうか、私。

乱撃と森と爆音。

完全装備で森の中という初体験中。

最近、本当に初体験ばかりだな。

「ホリン、優先順位を確認するよ？」

順位なんざつけるのは、間違っではいるんだが、明確にしておけないと行動に隙が出たりする。

死に直結するような要因は、少ない方がいいに決まっているだろ？

「一番は自分の命。」

当然だ。

別にオレ達は英雄ではないし、そんなものになろうとしているワケじゃない。

真剣に頷くホリン。

「二番目は、ラミア姫の身柄の確保ないし・・・生死の確認。」

まだ生きているとは限らない。

しかし、困った事に、きちんと生死を確認しないとややこしい事になるのが、王族ってヤツだ。

それはエルフも人間と変わらないだろう。

「三番目は、他のエルフ達の安否。これは姫を助け出せさえすれば何とでもなるから。」

そして、最後はオレだけの使命。

出来れば奴等の撃退。

まあ、出来なくても最低一人捕縛できたら、可。上等。

確認の会話を終えると、簡単な合図を決めてサアラの集落付近へ。妙に明るいな。

何かが燃えている匂いがする。

「あ・・・。」

ホリンが微かな声を上げて、指をさす方向をオレは見た。

集落の中心で男達が酒盛りを始めているんだ。

彼等が囲んでいるのは、木を積み上げて作った大きな火。

・・・人が緊張して近づいているのに、大いに楽しみやがって。頭の中で人数を数えて、見張りに行っているだろう人数を試算。ああ、姫と人質にも見張りが付いているんだらうな。

先に姫の死や位置を調べるか、それともここにいるヤツ等を何とかするかを選択肢。

十人以上の人数をどうやって？

完膚無きまでにはいかないだろうが、出来なくは無い。

オレは自分の後左腰辺りの箱に触れる。

例の爆裂球が左右に二個ずつ、計四個。

同じ物がホリンの腰にも同数。

多過ぎる気もするが、ミランダを始め周りの人間が、（ほぼ）強制的かつ、優先的にオレに持たせたんだ。

これを全て使って動けば、少なくとも混乱は起きる。

というか、何人かは戦力にならなくなるだろう。

面で攻撃が可能なのだから、大人数が固まっている今が好機かも知れない。

オレは指でホリンの腰とオレの腰をさす。

そのまま爆裂球を出すと、オレにならってホリンが同じ行動をする。

次は二本指を揃えて、火の中心へ。

すると、ホリンは頷いて親指を立てた。

さつき決めた合図だ。

最後に四本の指で、進行方向を指示してオレ達は左右別の方向に走り出す。

直後、爆発音が鳴り響く。

「早いっての！」

オレは思わず耳を塞ぎそうになる。

そう言えば、この合図で時間を定めるのを忘れてた。

抜けてるよ、ああ、抜けてるさ！

「このヤロツ！」

オレは四つの爆裂球を次々に全て投げ、耳を塞ぎながら走る。一つくらいは残しておきたい気分だが、仕方ない。

身体が震えるような衝撃の後、オレは集落の中へ身を躍らせる。

左腰に下げたディーンの剣ではなく、腰の後ろに回された普通の長剣を抜き放って。

ここからは躊躇わず、迅速に判断と行動する事をしっかりと胸に刻んで。

理非と救出と咆哮。【前】（ラミア視点）（前書き）

祝！通産50話・・・とか言いたいんですが、全然話が進んでない現状、ダラダラ書いているという称号にしかならないですよ・・・
すんません。

理非と救出と咆哮。【前】（ラミア視点）

あれから何時間経ったのだろう。

この小屋に連れて来られて両手を拘束され、腰は小屋の中の柱に縛りつけられてから。

妹は無事にあの人間の城へと辿り着けただろうか？

私の小さい頃にそっくりだけれど、私より可愛く可憐な華のような妹。

「サアラ……。」

あれだけ嫌っていた人間の所へ逃した、私の大切な妹の名を呟く。他人の為だけに怒りを顕にした人間の男。

”アルム”とか言っていただろうか？

あの男ならば、何故だか妹を傷つける様な真似はしなかった。

「畜生、他の奴等はいいいな。俺達は見張りなんて、どんだ貧乏クジだ。」

少なくとも、目の前にいる人間達よりは、何倍もマシな方だ。

そう思う。

「まあ、そう言っなって考えようによっちゃ、こっちのが美味しいかもよお？」

下卑た笑みを浮かべながら、私の身体を嘗め回すように見る長髪の男。

やはり、人は下劣だ。

「成る程。」

髪を剃った丸頭の男が、腰にある双剣の片方を抜く。

「楽しいのは、こっちでもできるってワケか。」

じりじりと私に近づく二人。

今程に自分の身が女だという事実嫌悪を覚える事は無い。

しかし、この男達が向かう先が妹ではなかった事だけが、私の心の唯一の救いではある。

「へへっ、ご開帳。」

男の剣が私の胸元の服を引き裂き、服の中が露わになる。空気に触れる肌が、ひんやりと感じた。

「くっ。」

「何だ？まあ、いいや。その顔もソソるぜえ。」

「おい、早く次へいけよ。」

「そう焦んなって。」

私は男達を睨み続けた。

声など上げて堪るか。

例え犯され殺されようとも、心だけは絶対に屈しない。

男の剣が、私の下半身へと狙いを定めているのがわかる。

「サアラ……。」

私はもう一度だけ、最後に妹の名を微かに口に出して呼んだ。

振り下ろされる剣、突然の爆音。

剣は私の股下の間に突き刺さった。

「な、何だ?!」

「敵襲か?!」

敵襲？

一体誰が？

私は考えを放棄し、咄嗟に息を大きく吸い込んだ。

「誰か!!私はこちらだッ!!」

叫んだ瞬間に男の張り手が顔を襲つ。

じんわりと口の中で血の味が広がる。

「このアマあ!」

床に突き刺さった剣を抜き、胸も下半身も露出した私にもう一度張り手が飛んで……。

「うるああああーッ!」

雄叫びと共に何かが、転がり込んできた。

すぐさまむくりと起き上がる”人影”は、私の姿を一瞥し、男達を見るとニタリと笑つ。

先程の私を見ていた男達とは全く別の、背筋がゾクリと凍るような
笑み。

そこに含まれているのは、明確な殺意にまで昇華された怒り。

「わかってるよなあ・・・？」

人影はぼつりと眩くと、一瞬で二人の男達に詰め寄って行く。

この突進力と速度は、私でも止めきれずに吹き飛ばされた苦い出来
事をその時、私は思い出していた。

理非と救出と咆哮。【後】(前書き)

ひな祭りか・・・(イミフ)

理非と救出と咆哮。【後】

「誰か！！私はここだッ！！」
今、聞こえた。

確かにそう聞こえた。

何処だ？！

「焦るな、落ち着け。」

二度目の爆発音。

どうやらホリンは、いくつかに分けて爆裂球を投げているらしい。
これならきつと時間稼ぎになるはずだ。

だったら動きまくって、仕事をするのはオレだな。

「このアマあ！」

聞こえた！はつきりと！

オレは後先を考えずに、声の聞こえた扉に体当たりしていた。

「うるああああーッ！」

絶叫しながら扉ごと小屋の中に転がり込み、すぐさま立ち上がる。

構えながら、現状確認と把握。

全てバルドに条件反射の域にまで叩き込まれた。

何年も繰り返す。

人間男、双剣、敵2

それと・・・両手を拘束され、肌も露わになった女性が一人。

その姿は扇情的・被虐的で美しかったが・・・黒い肌の頬が赤く腫れて、唇には血が滲んでいる。

「わかつてるよなあ・・・？」

オレは自分を抑える気をなくした。

あっさり放棄だ。

殺意？

そんなもの隠す必要があるのか？

目の前にいるのは敵だ！

オレはすぐさま相手に詰め寄る。

「戦場なんて卑怯でも先に一撃ブチ込めば、勝ちつてなもんで。死んだ相手は何も言えませんや。」

昔、誰かに言われた言葉だ。

だから、最初の一撃に全てを出し切れ。

そう教わった。

「ッ。」

短く息を吐き、剣を拾い上げる男の腕に自分の得物を振り下ろす。男の剣が、床に腕ごと突き刺さるのを感じながら、次の一撃へ。

「やるからには、自分もやられる覚悟があんだよなアッ！」

切り返す刃は男にあっさり避けられるのと同時に、視界の隅と気配で動くモノを感知する。

腕がついたままの剣を咄嗟に拾い、動くモノめがけて乱暴に全力で投擲。

「ギヤッ。」

短い悲鳴が上がって、仰向けに倒れるもう一人の男。

刺さった剣が墓標のようにも見えた。

「このオツ！」

視線を後に一瞬だけ向けた隙に、片腕になった男が切り込んで来るのを何とか剣で受け止める。

意外と力あんじゃねえかよっ。

剣からギシギシと嫌な音が鳴る。

マズい。

オレは仕方なく剣を引いたが、男がすぐさま次の斬撃を繰り出す。

「クソ！」

回避する選択肢を取ったオレの肩口に激痛が走る。

「ぐっ、るあぁーッ！」

よりによって、盾と鎧の隙間を剣が掠めていきやがった。

痛みを声により忘却しながら、行動しきって体勢が伸びきった男を睨む。

回避しただ分、オレにはまだ行動の余裕が残っていた。
全力で、男の膝頭を蹴り飛ばす。

オレは今回は完全装備。

勿論、足にも金属製の具足を着けている。

そんな足でオレに全力で蹴られた男の膝は、あらぬ方向に曲がっていた。

腕が伸びきった状態で膝の骨も折られ、体勢すらも崩した男に容赦なく剣を突き立てる。

「あ……。」

二人の男が倒れた部屋で、息を整えながらオレはようやく冷静になつていく。

冷静になつて、気づいた。

尋問する為には、殺しては何の意味も無い事に……。

思わず頭を抱えたくはなつた。

ちなみに、敵が動かなくなるまで気を抜かずに倒しきれ。というのもバルドの教えた。

幼かったオレになんて事を教えてんだ、バルド。

「じゃねえや。」

オレは慌てながらも大急ぎで（意外と難しい）自分の胸と腰の鎧を外して、少女の前を置くと彼女の拘束を解いた。

勿論、なるべく彼女を見ないようにして。

「とりあえず、鎧を着てくれ。年頃の女性なんだから。」

そう言つと彼女に背を向け、死んだ男達の武器を手元に回収する。

彼女から視線を外した時に、この武器使つて背中からばっさりとか冗談でも笑えないしな。

「オマエ、意外と紳士的なんだな。」

ん？

上から目線のこの声は……。

「あ、アンタ、ラミア姫か。」

「なっ?!」

うん、この際、誰とか関係無かったんだよね。

酷い事をしている男達と、酷い事をされている女性。

取捨選択する以前の問題だろ？男なら。

「肩は・・・大丈夫だな、剣に毒を塗られている形跡もナシっと。」

血は肩口から流れて、服の下の腕を通っていて気持ち悪いが、幸い筋肉や骨まで達してはいなかった。

勿論、ちゃんと動く。

動かすと当然、痛みが走るが。

「もういいぞ。」

「あ、うん。はい。」

オレはくりりと振り向くと彼女に双剣の片方を渡す。

「悪いけど、全員を救える戦力は無い。残りの同胞が囚われている場所はわかるか？」

戦力もだが、恐らく時間が足りない。

さつき四回目の爆発音が聞こえたばかりだ。

「オマエは礼を言う暇も与えないのか？」

「あ？知らん。作戦の優先順位を守っているだけだ。アンタの確保の次は、出来れば人質の救出つてな。」

少し興奮しているせいか、言葉使いが荒くなるのは、勘弁な。

大体、オレはホリンと、ちよっぴりだがサアラ姫の為に来ただけで・・・。

「あ、サアラ姫は無事。」

多少の怪我はあるがとは言わなかった。

一応、（信じてないが）姉妹だしな心配させ過ぎるのは、今は良くない。

「そうか。」

「さつさと質問に答えて。他の集落は無事？この集落の残りの人達は何処？」

サアラ姫に聞いた質問と同じ事を繰り返す。

「あと敵の規模と術使いの人数。」

「・・・本当に事務的だな。」

「緊急事態なの！」

緊張感足りないんじゃないのか？

お姫様って、みんなこうなのか？

理非と救出と咆哮。【後】（後書き）

誰か気力を下さい。

もう言い訳しまくりたいよー（泣）

類火と天秤と剣閃。(前書き)

PVとかお気に入りとか数字見て、滅入ったら負けと気がついた。
(今更)

類火と天秤と剣閃。

「この集落の同胞は、ほとんどが逃げ延びたはずだ。」
「ラミア姫に言わせるところらしい。」

何でもオレに言われた事を調べようとして、一番人間側の立ち位置に近い妹の集落についた矢先にこんな事に。

集落の人間を逃して、各集落に援助を求めさせたワケだ。

「で、自分は捕まったと・・・。」

間抜け。

心の中で呟く。

「仕方ないだろう?」

「大体、逃げたエルフを誰も追わなかった時点で、気づけよ。」

「何がだ?」

説明するの面倒。

「あのね、ヤツ等の目的はオマエなの!第一、人間が一瞬でエルフの個体認識が出来ると思うか?」

互いに歩み寄る事もしないから、交流だつてないんだぞ?

普段、見る機会も少ない。

だから、ラミア姫はオレの言葉にきよとんとした表情をしている。

「ずっと近くにいるならまだしも、外見的特徴以外で人間は判別できないよ。大方、派手に目立って指揮したんだろ?」

「そういうものなのか?」

コイツ、アホだ。

「うん、わかるのは、ラミア姫美人、サアラちゃん可愛い。とか、そんなくらい。」

まさか、大つぴらに名乗ったりしたんじゃないだろうな?

「最初から、サアラちゃんとか探している素振りあったらどう?」

一番若いし、力がないのが人質として適しているからな。

「む?そうだな、そんな感じはした。」

オレは溜め息を尽きながら、ラミア姫と一緒にホリンに合流すべく走り出していた。

「しかし、人間から見て私は美人か。」

ぼつりと呟くラミア姫。

緊張感のない発言にオレは、確信した。

コイツ、絶対に中身はアホだ。

「でも、好感度はホリンが一番、二番はサアラちゃん、アンタはドヘ。」

相手すんの疲れる。

「そんなにあの女がいいのか？何故だ？個体識別はつきにくいとも言っていたくせに。」

何故とききましたか・・・。

「彼女は故郷を捨てたのに、同胞は見捨てられなかった。」

こつこつというのが、本当の意味での誇りとか優しさだと思っただ。

「しかも、あんな暴言を吐いたアンタまで助けて欲しいと頼んだ。

サアラちゃんの姿を見てそう言った。」

それはとても尊いモノで・・・。

「命の尊厳というのは、種族の垣根無くかくあるべきだ。」

だから、オレは今ここにいます。

困った事に、オレはそこまでやる必要がないか思っているんだが、余程の偽善者なんだろうな。

「きつと、姫の妹も同じような事を思って、考えて、そうしたいんだろうよ。」

何故か、サアラ姫の一途さは、偽善的でなく心地良い。

「アルム様！」

「ホリン！」

こちらに向かって走って来るホリンが見える。

その後ろから一人の男が、彼女を追いかけているのも見える。

「チッ！」

オレはホリンに向かって走る速度をあげ、すれ違つと男と向かい

合う。

「人のモノに手を出すなつての！」

相手の剣を盾で受け止め、男の視界をそのまま遮り男の死角から剣を突く。

これぞ、ヴァンハイトの正しい対人装備の使い方。

盾は相手の剣を受け止めるだけにあらず。

だって、剣でも相手の剣は止められるんだからな。

「撤収！」

男の身体がグラついて、傾くのを見てから踵を返し全速力。

「ホリン、一旦城まで戻る！」

他の集落が安全だとは限らない。

城の方が幾分かマシだ・・・気休め程度だろうとも。

「ラミア姫もそうしてもらおう。」

走る速度を落とさずに言葉を告げた。

「致し方ない。」

・・・何かカチンと来る言い方だな。

こういう性格なんだと理解するしかないか。

「あのなあ・・・ラミア！危ない！」

何故そう感じた？

咄嗟にラミアを突き飛ばすと、彼女のいた場所に小さな火球が激突し、燃え上がる。

「炎術使い。」

出会いたくなつた相手だ。

火球の飛んできたであろう方向をすぐさま確認する。

「アルム様、あそこの木の上に！」

ホリンの方が早かった。

夜目が利くといい、エルフの視力は人間よりも格段に上なのかも知れない。

しかし、距離を取られたか・・・厄介な。

ホリンがすぐさま、弓に矢をつがえる。

届くか？

彼女の腕前はわからないし、術使いと戦った事すらなかったから、オレに知識がない。

一回の術にどれくらいの間がかかって、最大射程はどれ程なのか。少なくとも射程は、木の上からオレ達に届く範囲以上ではある。

だが、頭の中でホリンの矢は間に合わないと言われ、警告を発する。

”腕、一本なら安い”

閃いた言葉はソレ。

もっと正確に言うと”腕一本と引き替えが、ホリンの命なら安い。”
何でその言葉が閃いたのかはわからなかった。

けれど、オレは彼女とソイツの間に入って盾を構え、剣を抜いたんだ。

迫り来る火球に向かって”片刃の黒剣”を。

類火と天秤と剣閃。(後書き)

他の作者様のお話と比べるのも超えられない壁を眺めると同意義と
気づいた(笑)

黎明と和議と年の功。

確かにそれは”片刃”だった。

炎の球に向かつて振り下ろした剣。

オレの視界の片隅で、それはあの時に見た片刃の形になっていた。

剣が火球に激突して、二つに切り下ろした感触と炎がオレの腕を包む。

盾で身体は庇ってはみたが、計算通りなら右腕は黒く炭化している事だろう。

仕方ないか……。

あとでバルドに切り落としてもらおう。

バルドなら巧く切り落とせる。

これから不便になるな。

「あ、アルム様?!」

ホリンの声。

「気にすんなホリン。片腕くらいホリンの命に比べたら、痛くもか

ゆくも……?」

本当に痛くも痒くもないぞ?!

右腕を慌てて見ると、傷一つない。

何の変化も……?

「両刃に戻ってやがる……。」

見間違いだっただろうか?

デイーンの剣は、両刃に戻っていた。

「どうなったんだ?」

首を傾げようとした瞬間、どさりと重い音がして術使いの男が落下してくる。

胸には矢が一本突き立っていて、即死だろう。

即死でなかったとしても、木の上から落ちて背中を打ったんだ、間違いない重体。

「長く生きると、ほんに色んなモノを見るのう。」
落ちた男を跨ぐようにして、年の頃は40代くらいの女性が現われる。

まあ、人で言うのだ。

だって、そこにいたのはダークエルフの女性で……。

「お婆様！こんな危険な場所にまでのこのこと！」

責めるような口調をしたラミア姫の頭を、オレは思わず拳骨で叩く。

「ッ！何をする！」

「助けてもらった第一声がソレか！まず、ありがとうございました。だ！」

コイツ、どこまで自己中心的なんだ？

「ほう。」

お婆様と呼ばれた女性が呟く。

て、お婆様って事は……あれだよな、祖母って意味だよな？
何、この若さ。

「それにな年寄りには敬え！生き抜いてきた分、オレ達より確実に敬うに値する。」

世の中口クでもない大人や年寄りは多いが、敬うべき先駆者達は沢山いる。

それにこの人は、少なくとも危険な場所に来て、オレ達をこうして助けてくれたんだ。

感謝と尊敬に値する。

「本当に色んなモノが見られるものじゃの。」

ラミア姫と同じ、金髪・金眼の熟女が笑う。

緩やかな波形に垂れた金髪、妖艶な笑みに、今までオレの周りにいた女性達以上に抜群の体形。

ラミア姫の祖母と言っても、やっぱりダークエルフ。

外見はどう考えても、オレの母上と同年齢くらいにしか見えない。

正直な話、年齢を聞くのは怖い。

「ええと、助けて頂きありがとうございます。あと、同じ人間として今回はまことに申し訳ありません。」

オレは素直に頭を下げた。
皇族？皇子？

そんな使えない肩書きなんぞ、土の中に埋めてしまえ。

これ以上、人間に悪い印象を与えてどうする。

と、いうか、謝るべき時に頭を下げられん人間の価値なんぞ、ロクなもんじゃない。

「良い良い。人間も色々、エルフも色々。」

お？意外と理解があたりで。

ラミア姫、妹のみならず、祖母とも血が繋がってないんじゃないか？

「他の集落の方は？」

「襲われたのは、サアラの集落だけじゃ。今、配下の者が制圧しておる。」

んじゃ、大丈夫みたいだな。

「あの、もし良ければ一人だけ証人用にリツヒニドスの砦の方に送って頂く事は可能ですか？」

先程の自分の間抜けっぷりを大披露だ。

「妾の集落の配下で良ければ、兵も貸そう。」

へ？

何だ？この太っ腹ぶりは……。

怪しい。

ついつい勘ぐる。

だつて考えてもみる？

何の権力も人徳もなく（ほぼ）無名の初対面の皇子に無条件で力を貸すなんて……。

あ、無条件とは言つてはいないな。

「条件は？」

「ふむ。用心深いのか？」

ニヤリと不敵に笑うお婆様。

腹の探りあいをしたところでオレみたいな小僧じゃ、圧倒的経験値が上のこの人に手玉に取られるよな。

「そうだの。配下とはいええ、人間にダークエルフが従うとなると、問題がある。」

言っている事はごもつとも。

「つまり、ラミアを連れて行けと？」

指揮をするのが同種族ならいいんだろ？

特に問題はないな。

「頭がいいのはいいが、話は最後まで聞くもんじゃないの。ラミアは確かに孫じゃが、この直情娘に配下の指揮を任せるのはちと、な。」

「お婆様！」

冷静な判断ではありませんね、ええ。

「つまり、そなたが同胞になれば良い。」

「はひ？」

は？

またまた、聞き間違いしたんだよね、オレは今。

「誰が？」

「お主が婿になれば良いのだ。」

「誰と？」

「孫娘なら、誰でも良いぞ？」

「何て適当な！」

思わず声に出してしまったじゃないか！

「ラミアか、サアラか。」

いやいやいやいや！

サアラ姫は幼過ぎ！

・・・十二、三歳くらいだろ？彼女。

エルフのしきたりがどうだが知らないが、オレの国では成人年齢でも婚姻年齢にも達していない。

で、コトは・・・自動的に選択肢は・・・。

思わずラミア姫を見てしまった。

露骨に眼を逸らされたよ。

ま、普通はこんな反応になるよな。

「勿論、そこなホリンでも良いぞ?」

「ほへ?」

二発目の間拔な声と反応。

「あ……。」

それまで沈黙を守っていたホリンが、小さな声を上げる。

「知らなんだか? 混血とは言え、ホリンも妾の孫娘ぞ?」

知らんよ。聞いてないし。聞く必要ないし。

ラミア姫も驚いた表情をしているってコトは、知らなかったんだろ
うなあ。

ホリンは俯いてしまったし……うむ。

「まあ、よおわからんが、いいや。」

為政者としては間違っただろうなあ。

でも、ほら、オレ、ダメ皇子だし。

「今回だって、ホリンの優しさとサアラちゃんの勇氣に感銘を受け
て来ただけだし。そもそも予定になかった事だ。」

この行動の解釈の仕方なんて人それぞれだろ?

歴史と同じで、そんなものはいくらだって捻じ曲げられるモノ。

そうだろ、デイン?

「それに、相手の心を見殺してまで、そんな力いらねえね。」

故にヴァンハイトの血は呪われている。

直系のオレが滅んでしまえと願う程に。

「んじゃ、ま、失礼してホリン、帰るよ。」

「は、はいっ!」

嬉しそうに反応するホリン。

「アルムとやら?」

「まだ何か?」

「今しがた、報告があった。同胞の何人かが、人間の太守達に唆さ
れたとな。」

一番必要だった情報だ。

さあ、次で決着をつけよう。

「ありがとうございます。では、後始末はこちらで。」

「うむ。というワケでラミア、数名付ける。行くが良い。」

「はい。」

何だよ、このオレに有無を言わせない強行は。

「何、サアラを迎えに行くついでじゃ。」

年の功か・・・喰えないババアだ。

オレを試したつもりかね？

試したって何も出てこないってのに。

呆れながらも、オレは城に向けて彼女の前から走り去った。

「フンツ、耄碌ジジイもぼっくり逝った割りには、面白い血を残したじゃないか。デーン様の黒曜の蹟剣使いとはね。」

黎明と和議と年の功。(後書き)

この終盤で新キャラ登場とかをカメラしてみるてすつ。

意外とラミア姫を書くのが面白い・・・何故だ？バカだからか？！

漏出と抱擁と居心地。

「アルム様。」

「何？」

城へ向けて走る最中にホリンが話しかけてくる。

とてもすまなそうな表情しちやっつて、まあ。

「あの、私……。」

「気にするな。」

オレにとつてなんの問題も無い。

「前にも言つたろ？ホリンはホリンだ。」

想像は出来るけれどな。

”純血じゃない王族”ってコトだろ？

嫌な立場だ。

オレの立場ですら、こうなんだしな。

「今は、さつさと帰って全部解決して……そうだな……。」

元来の目的の一つに戻ろうじゃないか。

「メシをたらふく食って、風呂に入って、ぐっすりと寝よう。」

しばらくは皆と隠居生活を楽しもう。

「あはは。じゃ、一緒にお風呂入って、一緒に寝ましようね。」

ようやく笑ってくれたか……。

彼女はここに来て、本当に良く頑張ったと思う。

彼女だけじゃない。

皆を褒めてやりたい……だから、オレも働かないとな。

「随分と仲が良いんだな？」

後ろから追いついてきたのはラミア姫だ。

彼女の背後からは、数人のエルフが付き従っている。

「そうだなあ、ラミア姫もホリンとまでは言わないが、サアラちゃんくらいに素直だと仲良くなれるかもね。」

「嫌味か？」

ジロリと睨んでくる。

つか、コイツは人を睨むのが見るって事なのか？

「うんにゃ、サアラちゃんはちゃあんと自分の立場を理解して、自重してくれたから。だから現状が最悪にはならなかった。」

上に立つ者としての優先順位を守って行動した結果だ。責務と言い換えてもいい。

「アレは、私の自慢の妹だ。」

そこは素直なんだな、どうした？

「私と違って、誰からも愛される……。」

話がズれているような……。

「あのなあ……。」

コイツ、本当にバカなのか？

ああ、バカなんだな。

「そういうコトを言ってるじゃねえ！」

何だ、エルフって極端から極端に走る種族の事だったのか？

「素直に相手を認めたり、受け入れたり、自分の立場を自覚しろって言ってるの！」

ダメ皇子だつてダメ皇子なりに、必死で今やってんだよ、オレは。

そりゃあ、周囲の期待なんて皆無だけどき、やれる人間が他にいないのなら、やるしかないだろう？

「何が……。」

「そうだろ？最初から相手がこうだと決めつけて拒絶してんのは、オマエだけだ。」

違いはソコなんだよ。

「誰もかれも否定したら、誰も認めないし信じない。サアラちゃんが誰からも愛されるのは、彼女が周りの存在を認めて愛してるからだ。」

「じゃなきゃ、オレの城まで裸足で走って来られるかってんだ。」

「オレはホリンの過去を聞かない。そんなのはどうでもいいから、

だからホリンは今のホリンでいい。」

それ以外の何の意味がある？

それ以外の何が必要だ？

「アンタも同じだ。別にオレがアンタが醜いとも愛せないと思っていない。後ろにいる人達もだ。だから、オマエに付いて来ている。」

オレはチラリと後ろを走るエルフ達を見る。

一様にオレの怒鳴り声に驚いていたが、確かめると皆、しっかりと頷いていた。

大体、このダークエルフの血筋（？）は美人なんだよ。

「そ、それは……。」

「結局、受け入れられるか否かだ。仲良く見えているのであれば、成立しているってコト。……だよな？」

オレは最終的な確認をホリンに任せる。

人間のオレより、まだ同族のホリンからの方が説得力あるだろう。

「そーですね。ラミア様、アルム様の腕の中は居心地良いですよ。」

「

ソコハカトナク微妙ナ表現デス。

振らなきや良かったか？

「そうか……。」

ただ一言、そう呟くとラミア姫は黙り込んでしまった。

「ま、お婆様とやらが言っていた結婚を断ったのが、多少惜しいと思うくらいにはね、ラミア姫もホリンも美人だと思うよ。」

「え？」「あはっ」「

だが悪いがオレは後宮だろうが、嫁だろうが、きちんと自分で選ぶ派だと言っただろ？

あ、ちなみに我が国は、一夫多妻制も可だ。

何でもそついう国皇がその昔にいたらしく、その際にそついう事が出来る決まりにしたらしいが。

オレは多人数を平等な愛で包むなんて、そんな器用な真似が出来ないから無理。

絶対、無理。

「しかし、スクラトニーもヤキが回ったな。下策過ぎるし、お粗末。」

思わずヤツの小悪党っぷりに苦笑する。

「そうなんですか？」

無邪気にホリンが聞き返してくる。

「オレだったら、奇襲は全ての集落を同時に。且つ、要人の捕獲を優先して、人質にする。」

以前も考えた策だ。

「下劣なっ！」

例え話だろうに。

「んで、税率は一割だけ上げて、天領以外の領地をこっそり開墾して、少しずつ税収をチヨロまかす。」

大々的にやると反感や密告を喰らうしな。

「で、ダメ皇子は手駒にする。あー、その為には邪魔な副官を謀殺して……。」

ああ、そうか。

「どうしました？」

「副官の人徳があるのか、スクラトニーの人徳がないのか、反抗は少ないけれど、手駒になるような人材も少なかったんだな。」

「どうやら人員不足で苦しんでいるのは、オレもヤツも同じらしいな。」

そして質の悪いのだけがヤツの手駒になり、質の良いのだけがオレの部下になった結果がコレか。

「ならば、急ぐとするか。」

流石に二往復目だとコツが掴めて速度が出せてきている。

「帰還後にザツシユ達に合流。迎合する民・役人達と共にリツヒニドスの大掃除だ。」

どうか、黒幕カーライル説、兄上説ではありませんように。

心の中でそう呟いて、一人苦笑した。

”アイツ”の顔を思い出しながら。

和協と進撃と城内戦 (前書き)

ようやっと、ここまで来ましたねえ・・・ (トオイメ)

和協と進撃と城内戦

「ミランダ！」

帰城するなり、オレは大声で叫んだ。

「アルム様！」

相変わらず、オレの呼ぶ声に対しては素早く反応が返ってきた。彼女に服を！着替えさせ次第、サアラ姫に会わせてやってくれ。なにやら嫌な予感がする。

「ザツシュとレイアが！」

「どうした？」

「バルド様にご帰還されました。」

どばつと出る冷や汗。

ちよっぴり遅かったか？

「どれくらい時間が経ってる？」

「まだ半刻も・・・。」

「ちっ。ラミア姫、早く鎧返せ。いや、いい。」

身に着けている時間が勿体ない。

「ミランダ、ホリン、町を回って大声で触れ回れ。」

本当はこういう手を使うのも好きではないんだが・・・非戦闘員でも、監視の目にはなる。

「首都から来た役人が、太守を更迭する為に州府に乗り込んで、戦闘になっっているってな。」

オレは腰に回していた剣の剣帯を確認する。

鎧が無くて、少し不安定になっていたからだ。

「悪い、ラミア姫、この城にいてくれ。私兵達も姫だけを守れ。」

「オマエは何処へ？」

「仕方ないだろ、オレはこの国は大嫌いな事だらけだが、この国に住む者は嫌いになれん。」

ホリンがそうだったように。

偉そうにふんぞり返っているだけの貴族や官僚は、嫌いだがな。好き嫌いがはっきりしていると云ってくれ。

後発とはいえ、幸いな事に厩舎にはまだ馬があるハズだ。

「帰ったら、大宴会だ。大量に食って飲んで騒ぐぞ！」

オレはそうミランダ達に向かって叫ぶと、厩舎に全力で走る。すると併走してくる影が。

「ラミア姫？」

「一つ、聞き忘れた。嫌いになれん者の中には、私も・・・私達も入っているのか？」

コイツは・・・本気でアホだ。

そろそろ確定してもいいよな？

「そんな事を聞いてくるヤツを嫌いになれると思うか？」

オレは馬に飛び乗り、彼女に向かって手を伸ばした。

「飛ばすぞ！」

馬には悪いが、現状州府まで最速で辿り着きたい。

「あとでサアラに会ったら、オマエにもう一つ聞きたい事がある。」

「ん？何だって？」

「・・・あとでいい。」

馬の蹄の音でイマイチはつきり聞き取れんが、今は州府に着くのが先だ。

喋ってる舌噛みそうだし。

州府の門まで、この速度なら半刻。

合わせて一刻近くの遅れだ。

無言で走り続けて、州府の大門が見えて・・・こない。

つか、大門が無い。

というか、門ごと碎けて倒れている。

「何だ？何が起きたんだ？」

「・・・巨大な”クマ”が暴れたんだろうよ！」

オレは通常なら馬で進入しない中庭を駆け抜け、州府内の中央、

吹き抜けの廊下で馬を降りた。

「誰ぞいるか！我が名はアルム・デイス・ヴァンハイト！」
何か久しぶりに名前を全部名乗ったな。

両親には悪いが・・・自分で名乗った割りには違和感がある。

「アルム様？」

「アルム様だと！」

ぞろぞろと出て来る人、人、人。

「皆の者、無事か？」

「はい！カーライル様がアルム様が動くまで待てと。」
流石、カーライル。

オレの行動が読まれているのは、全然悔しくない。
悔しくないぞ、本当だ。

「良し。カーライルは？」

「アルム様の部下という方と太守室へ。」

率先して行く意気も良し。

死んでたら、大爆笑して盛大な葬式をあげてやろう・・・国費で。

「皆の者、指示を与える！」

皆が息を呑んだ音がした。

オレ的にも結構、重圧。

「不忠義者のスクラトニーの一族の拘束と逃亡しない様に街道の閉鎖。」

やるからには徹底的にだ。

「町の者が押し寄せてくるが、監視と街道封鎖を協力させる。それとダークエルフとは協定を結んだ。間違っても攻撃するな！」

「おい、協定は・・・。」

「黙ってる。」

実際は協定を結んでいないのだから、不服を言おうとしたラミアア姫を制す。

これも計算のウチだ。

腹黒いと罵りたければ罵ればいい。

役人の中からは、少なからず驚きと感嘆の声が上がる。

そつだろつな、引き籠り一族と協定を結ぶなんて、土台無理で今まで誰も成し得ようとすらしなかつたんだからな。

だからこそ、皆、オレの声を聞く。

「皆には苦勞をかけた。だが！皆の我が国への忠誠心こそ、我が皇族の誇り！」

我ながらよくもまあ、ぼんぼんと・・・。

「汝等の為に私は、力を尽くす事を誓おう！」

大喝采と共に皆、一斉に州府の外へ出て指示された事を実行しに行く。

何人かの武装した人間は、オレの前に進み出て跪く。

「たいしたもんだよ。」

ラミア姫は完全に呆れている。

オレだつて恥ずかしいんだよ！

やらなくていいなら、やりたかなかつたよ！

「色々と反論したいが、一つ。オレは第二皇子だ、それを忘れんなよ？」

「ん？だから何だ？」

「こついつのはオレの仕事じゃないし、ガラじゃないの！本当は！」
いや、本当に。

もう今すぐ城に帰つて、布団にくるまってしくしく泣きたいくらい
恥ずかしかつた。

「行くぞ！」

オレは太守の部屋があるという上階へと駆け出した。

「レイア！ザツシュ！バルド！」

無用心ではあるが、先行している三人の名を叫びながら。

道のりは楽。

三人の名前を呼ばなくてもいいくらい。

倒れたり、絶命している人間の姿を見ればわかる。

鎧の隙間を縫つて、手数で確実に戦力を奪われているのがザツシュ

を相手にしたヤツ等。

腕一本とか、首とかそういうのをぱっさり斬られているのが、長剣を使っているレイアを相手にしたヤツ等。

判り易い。

ん？

バルドを相手にしたヤツ等？

武器破壊をくらって、骨ごと断ち切られて、一発で絶命しているヤツ等。

・・・もう逆に憐れに思えてくる・・・本当に運が無かったとしか言いようが・・・。

和協と進撃と城内戦 (後書き)

次回！前後編2話にて？章完結！

これにともなつて活動報告(タイトル:念願の!)にて、次回作・
続編等のリクエスト受け付け中です。(ヲイ)

みなさまのコメントよろ (爆死)

乎古止点と本番と皇子の裁き。【前】

「アルム様！」

罅迫り合いをしている二つの影を見つけて、立ち止まる。

「レイア！」

オレはすぐさま剣を抜き、レイアと剣を合わせているもう一方の影を蹴り飛ばす。

すると一緒に来ていた兵士達がすかさず剣を突き立てた。

「戦場は一对一じゃないから、気を抜くなよっと！」

言ったそばから、レイアの後ろに剣が。

それを受け止めた瞬間、再び引き連れていた兵士が、横合いから剣を突き刺す。

訓練された兵との集団戦つてのはこんなもんだ。

しかも、皆、オレを補佐して尚且つ傷一つつけはしないとまでに士気が高い。

「他の皆は？」

肩で息をしているレイアを気遣いながら、聞く。

彼女の鎧は、返り血で所々赤黒く変色していた。

「ザツシユはカーライル様と太守室へ。バルド様は敵を掃討すべく単独で……。」

流石、”巨大熊”

死んでたら、同じように大爆笑してやろう。

つまりは殿はレイアだったようだ。

「わかった。レイアは地階へ下がれ。退き時だ。」

レイアの完全装備はそこそこ重量があるので、疲労が早い。

「しかし！」

「見誤るな！」

「……はい。」

死んだら笑わないからな、泣くぞ。

「言つたる？誓いの時。」

彼女はオレより先に死んではいけない、死なせないし、そんなのは許さない。

「申し訳ありません。」

「いいよ、あーあ、美人が台無しだ。」

オレは彼女の肌についての血糊を拭う。

冗談だからな？

こんな事で、損なわれるワケないだろ？

「じゃ、また後でな。」

短くそう言つて、オレは更に上を目指す。

「オマエの部下は女ばかりだな。」

悪かつたな。

大体、連れて来た人間で三人以外はミランダの人選だ。

オレだつて、女性をこき使いたくないんだよ。

「大丈夫だ。残りは男と・・・。」

「と？」

「・・・巨大熊だな。」

熊にも迷惑か、バルドと同列じゃ。

すまん、クマ。

各階ごとに兵士を割り振りながら、上階を目指し続ける。

戦力が分散してくが、上下階からの挟撃なんて御免だからな。

結局、そうやって人手を割くとオレとラミア姫だけになっちまった。

本当、反スクラトニー派の人数が多くて良かったよ。

当然、予想通りに手数が足りないしな。

ふと、目の前の部屋から勢いよく人が転がり出て来た。

「カーライル？」

多分、そうだ。

きつちりと後ろに回していた髪は何房かが額にこぼれ、汗にまみれてはいたが。

オレは慌てて、疲労困憊の様子 of 彼に向かって駆け出そうとした。

「アルム様！伏せて！」

駆け寄ろうとするオレをその場に留めるように、しゃがみこんだまま手で手を伸ばして叫ぶ。

伏せるしかないだろう！

見るとカーライルもごろごろとその場から転がりながら伏せる。

「うわっ！」

扉の横の壁が砕け、炎が溢れる。

「熱ッ。」

炎が治まった壁の穴から転がり出てきたのは、片足に火がついた状態のザツシユだ。

オレは、今度こそ彼に駆け寄り、火が燃え移っていた足を手で叩く。手に着けていた籠手があれば、多少の熱は耐えられる。

「一体、何が？」

「皇国近衛兵のなんと脆弱な！」

質問の言葉をザツシユに吐いた直後に、部屋の中からスクラトニ―が現われた。

ヤツの腕には、一抱え程の筒が。

先程の状況をかながみて、アレはあの筒からか・・・オレはじりじりとザツシユの腰の革箱に手を伸ばす。

確認すべき事があるからだ。

誘爆してなければ・・・。

そしてザツシユの性格からして、ギリギリまで使わないはずだ。

果たして、それはオレの予想通りか否か。

「それが荷で作らせた物か？」

ニヤリと笑いながら、ヤツに問う。

「これはこれは皇子様。貴方も運の悪い方で。」

他者を見下す目。

やっぱり、人間でもエルフでも変わらないな。

「どうだろうなあ？確かに運が悪くはあるが、最悪ではないんだよな、コレが。」

オレは本気でそう思っている。

「これはまた強がりな。」

強がり・・・なのかな？

ああ、そうかもな。

でも、その嘘でもいい強がりしてくれる相手が身近にいる限り、こうなんだろうなあ・・・。

矛盾してら。

「そっちこそ、大した玩具だな、ソレ。見世物小屋でも開くつもりか？」

オレは後ろにいるラミアだけに見えるように、指を床に向かって指す。

「皇子様にはこの画期的な発明が解って頂けないらしい。いいでしょう、これの素晴らしさをお見せしましょう！」

スクラトニーが大筒をこちらに向けると、オレがザツシユの腰から取り出した爆裂球を投げるのは同時だった。

炎の渦が爆発の風と一緒に廊下に荒れ狂う中、オレはザツシユの上に覆いかぶさってそれに耐える。

背中に感じる熱風。

しかし、本当にさっきの攻撃で誘爆してなくて良かったな。

「ななッ！」

激突する衝撃の反動で、ひっくり返っていたスクラトニーは傍で倒れているカーライルに見向きもせず逃げ出していた。

立ち直りの早い小悪党だな。

ん？小悪党だから立ち直りが早いのか？

「あんな発明が画期的だったら、オレのもそうなるじゃないか、アホらし。」

こんなの一つで胸を張るなんて、ちょっと神経おかしいんじゃないの？

「まあ、凄い発明ではあるっすよ？」

「人殺しの道具に使ってる時点で、既に口クなもんじゃない。」

「岩盤の破壊工事に役立ちそうですか？」

「ザツシュだけでなくカーライルも立ち直ったようで、的確な助言を述べる。」

可哀想に、髪がボサボサだ。

「成る程、そつちの方が建設的な意見だ。カーライル、スクラトニ―が逃げた先には何がある？」

「屋上広間しかありませんか？」

つまりが、次が最後の最後か。

「ラミア、大丈夫か？」

ザツシュとカーライルがぱつと見無事なのを確認して、後ろのラミア姫に声をかける。

「ああ、少し耳がキーンとするがな……。」

耳、尖がってデカイもんなエルフ。

「どうした？」

「いや……私もあの男のように、ホリンやオマエを見ていたと思うとな……。」

苦々しい表情。

どうやら、少しわかってもらえたようだ。

「じゃあ、自分だけの世界で他者を見下してばかりいた人間の末路をしっかりと見ておくといい。」

結局、他者を省みない者は、きつと誰からも省みられる事はないんだと思う。

ここに来て、オレが学んだ事でもある。

「皆、ヤツが次にブツ放した後に飛びかかれ。アレは恐らく連射出来る代物じゃない。」

「何故そうだと？」

カーライルは冷静だなあ。

「部屋から出てきた時、オレに向けて撃った時の二つを見てそう考えた。」

簡単な推理だ。

「砲身が熱に耐えられるかどうかもあるが、連射出来るなら最初の時にザツシュ、次の時にカーライルに向けて撃てた。」

無駄にオレの会話に付き合ったり、カーライルを無視して逃げる事なんてしない。

その時に確実に二人を黒コゲに出来た。

敵の戦力は削れる時に最大限まで削っておくべきなのだ。

「原理まで憶測するのは、どうかと思うが。弾を装填したような動作がなかったから、炎術の原理を代理で行うというのが……。」

堅いんだよな。

それなら連射が出来ないのは、周囲の媒介物質を急激に使用するから。

一時的に媒介物質の量が薄くなるんだという説が成り立つ。

ま、憶測。

「まあ、オレならそうするって話だ。中にはそう見せかけるようにして”連射が切り札”というのもある。ヤツはそういう細工する人間か？」

オレの先入観と憶測はこんな感じなんだが、もしかしたら頭だけはキれるのかも知れない。

先入観って本当に怖いよな。

「基本的に見たままです。例外は金銭に関わる事ぐらいで……。」
金策としての税に関しては、確かに頭回るな。

「たとえ連射出来たとしても、行動には必ず予備動作や息継ぎでの隙があるはずだ。」

ラミアが言う。

まあ、達人ではない限りはそうだな。

達人になればなる程、その一瞬の隙を減らしてくる。

同じ達人でも巨大熊はそんなもの吹き飛ばす圧倒的さはあるが、アレは例外。

「何にせよ、次が最後だ。一発さえ止められれば、或いはかわせれば勝ちだ。」

平古止点と本番と皇子の裁き。【後】（前書き）

はい、これで？章完結です。

長々とお付き合いくださってありがとうございます。

乎古止点と本番と皇子の裁き。【後】

相手がスクラトニーの様なヤツで良かったと思う。

じゃなきゃ、オレのこんな穴だらけの推論や予測だけで、こうまであっさり進むワケないよな。

カーライルの下準備が良かったのもある。

彼自身が直接手を下さなかったのは、彼の立場の問題であり正解だ。下位の者が上位の者にするそれは、ただの反乱。

それに対して、上位の者が下位の者にするそれは、命令や権限の行使でしかない。

この二つには、明確過ぎる程の差異がある。

兎角、それが皇政なら尚更だ。

「全く、オレは狼の群れの中に迷い込んだ羊だな、こりゃ。」

それでも自分で判断して動いたんだから、今迄にない事だ。

この規模なんだから、そりゃそうか。

「よろしいですか？」

屋上への入口。

入った瞬間に黒コゲにならないのを祈る。

「ザツシュは左、ラミアは右な。」

オレが一番危険な正面に行く。

それくらいしてもいいだろう？

「行くぞ！」

オレを先頭に屋上へと繰り出す。

「消し炭になってしまえ！」

意外とスクラトニーは冷静だった。

これだけ追い込まれて、逃げ場がなくても持っている武器が有利だと思っただからだろうか。

炎の柱が真っ直ぐオレに迫ってくるのを、慌ててラミア姫が走って行った右側に転がって避ける。

「アルム！」

初めてオレの名を呼んだラミア姫が伸ばす手を掴み、すぐさま体勢を直して立ち上がって走り出すのを再開する。

「今だ?!」

誰もがそう思った。

これで凌ぎきった。

そう思っていた。

「二本目だと?!」

スクラトニーの余裕。

彼の背から二本目の大筒が。

屋上に逃げたのは、二本目を取りに行く為に……。

くそっ！炎術の原理じゃないのか！

「くそったれッ！」

オレは、何故か当然のように行動を選んで抜いていた。

頭の何処かで。

つまり、それはエルフの森での事は”必要だからやらせた予行演習

”だったんだろうと。

だから、きつと今度も出来ると。

スクラトニーの大筒のぼつかり開いた穴。

それがオレとラミア姫を見詰めている。

「アルム！」

「若ッ！」

意識の何処か片隅で、アホクマの叫び声が聞こえた。

「一発目よりも小さな」ただの火球”がオレに向かってくる。

エルフの森と大差ない。

それが何故か安心に繋がる。

憶測した原理もそう間違っていないのだという事もそれを助長した。

振りかぶる右手。

きつとこの腕の先は、”黒い片刃の長剣”になっているはずだ。

力任せに、この一撃で全部を変えてみせる。

それぐらいの勢いで。

ーッ！

「アルム様！」

気づくとオレは剣先を床につけたまま、カーライルに抱き留められていた。

どうなつたのかは解らないが、オレは生きている・・・それは事実だ。

見ればスクラトニーは腕をザツシユに極められて、組み伏せられていた。

「若ッ！何て無茶を！」

ドスドスと地面を踏みしめてクマ・・・バルドが歩いて来る。

「やらなきやなんない状態だったろ？それにバルドだって同じような事しただろ？」

バルドだったら、誰かを庇って全身を焼かれながらも、相手を斬り伏せている事だろう。

師匠がやるなら、弟子もやらないとな。

「それより例のモノは？」

耳鳴りがする頭を押さえ、バルドに聞き返す。

「御座いますよ。”兄上からのお返事”が。」

懐から取り出した紙を奪い取り、カーライルの手を払いのけスクラトニーに歩み寄る。

「リツヒニドス太守、スクラトニー。この州の人事権及び最終決定

権は、このアルムに移譲された。これは勅命だ。」

オレはバルドから奪い取った紙切れ、兄上と父上の連名の勅命状を突きつける。

「人事権を行使する。現時点を以て現太守を更迭。太守の座は空位、カーライルを副太守兼太守代理とする！」

返事が恋しい弟の気持ちを理解してくる兄上を持って、本当に良かった。

ま、スクラトニー自身がホ口を出さないで隠し通せば、こんな一方的に更迭出来なかつただけだな。

「カーライル。税率を一定期間変動制にし備蓄食料を配給しろ。天領の開墾・治水作業を公共事業にし、働き手の民に手当てを出せ。」
言える今の地位のうちに言えるだけ言っておくことにしよう。

「また作物の苗を行商人から購入して、民に貸し付ける。返却猶予期間は二年以上だ。出来るよな？」

出来ないとは言わせない。

出来ないなら、今度はオマエをクビにするだけだ。

今のオレにはソレが出来るといふ脅迫にも似た圧力。

「仰せのままに。」

カーライルは、跪いて最敬礼をとる。

「スクラトニーの一族の処罰はどう致しましょう？」

彼は、それすらもオレに委ねてきた。

一番難しい問題だな。

ぶつちやけ、一方的な更迭ではあるから、そこまで重い刑を科せられないんだよな。

だから、さつきもオレが一番危険になるだろう正面を選んだんで・
・最悪、反逆罪とか適用出来るし。

けどなあ・・・他の領地の太守は貴族の場合が多いから。

皇族と貴族の関係がこじれても困る。

そうだなあ・・・。

「財産は全て没収、州の金庫に入れる。一族はこのリツヒニドスカ

ら追放。張本人のスクラトニーは……。」

カーライルが試すような目で見ている気がする。対応が遅れたのは、国の責任だしなあ。

刑を重く出来ないのが齒がゆい……というか、怒りが込みあげてくる。

カーライルの視線が全てを物語っているよな……この国の腐りっぷりを。

「……ふむ。スクラトニーは森へと追放とする。」

我ながら名案だぞ、これは。

「森に……ですか？」

意図が計りかねるといった様子のカーライル。

「うむ。このリツヒニドスからも同様に追放とする。」

この州から森に追放すると、地理的にこの州を通らずに森から出るのは、非常に大変な労力を要する。

何たって、城は砦として使っていたくらいだ。

いわゆる森は、その砦の天然の要害を形作る一部だ。

「それからは好きにするがいい。逃げるもよし、獣の餌になるもよし。」

ちらりとラミア姫を見る。

「ダークエルフに捕まるも良し、か？」

楽しそうにニヤリと微笑み返しながら、呟く。

そんなラミア姫の様子に得心がいったとばかりに頷くカーライル。

「寛大だろ？あ、きちんと背後関係等は、調べてけよ？ザツシュ。」

「自分っすか？」

「あー、明後日付けで、オレの近衛兵の任を解き、リツヒニドス警備隊長に任命する。現隊長は統括官としてカーライル付きとする。」

「最後まで人使い荒いっすね。でも、明後日？」

「宴会に付き合え。」

そう言つとザツシュは、白い歯を見せて笑った。

「若？」

「どうしたバルド？」

屋上から外を見て、バルドが指をさす。

「あれを……。」

土煙の中に旗が翻る。

双剣を掲げた白い獅子の旗。

「どう見ても、兄上の第一近衛師団だな……。」

「どう見ても先頭にいらっしやるのは、シグルド皇子ですなあ。」

兄上の返事は待ち遠しかったが、兄上自身が待ち遠しかったワケではなかったんだが……。

この国平和みたいだなあ。

大丈夫か？

何だか目眩してきたよ……って……。

「あら……？」

景色がぐんにやりと歪む。

「ヤバっ……。」

しかりと言い終わらないうちに膝からすとんと力が抜ける。

糸の切れた操り人形のように。

真後ろに身体が傾いた。

「アルムッ……！」

ラミア姫の悲鳴のような叫び声の後、オレは視界が真っ暗闇になつて、意識が完全に途切れた。

平古止点と本番と皇子の裁き。【後】（後書き）

次回、改革をしたリッヒニドスと意識を失くした皇子のその後のお話。

エピソードタイムに突入します。

んで、結局どうなった？ ～エピソード？～【エルフ三人娘と、】（前書き）

？章完結の50音タイトル最後の【ん】です。
気楽にエピソードをどうぞ。

んで、結局どうなった？　〜エピローグ？〜　【エルフ三人娘と、】

ベットの上で瞳を開くと、何時も彼女が居た。

朦朧とする意識の中で、毎日泣きそうな顔で自分を見ていた幼い少女。

自分が死んだら、彼女はどうなるのだろうか？

死に瀕して思った事は、死への恐怖ではなく、そんな事だった。

だから・・・自分は何時も手を力の限り伸ばして、万感の想いを込めて、ミラの頭の上に置いて言うんだ・・・。

「大丈夫だよ・・・。」

そうすると、そう・・・オレが意識を取り戻して、まだ生きているという事実には微笑むんだ・・・。

「アルム・・・さ・・・ま？アルム様！」

「ぐえつ。」

飛び乗ってきた少女の重みに、全身が軋んで悲鳴を上げる。

お陰で、意識がはつきりと覚醒した。

目の前にいるのは、大事な幼馴染ではなく。

金髪・金眼、そして黒い肌の少女。

「さ、サアラ姫?!」

オレ、気づくの遅ッ!

「はい！」

元気良く笑顔で返事をするサアラ姫。

何というか、笑顔が眩しい。

「怪我は大丈夫？」

「それは私の言葉です！お身体は大丈夫ですか？」

今迄、出逢った女性の中で、一番高い鈴のような透明感のある声。身体・・・？

「ああ、そう言えば、ブツ倒れたんだっけ・・・。」

サアラ姫がいるって事は、ここは・・・砦の方の城か。

寝ているのは、最近すっかり慣れたオレの寝台だ。

「そうだ。咄嗟に私が受け止めたから、頭や身体は打ってないハズだ。」

寝台の横で腕を組んだまま、壁に寄りかかかってオレを見下ろすラミア姫。

純白の絹の服の裾をひらめかせ、腰も同じく純白の帯で結んである。

「全く軟弱な・・・何だ？」

硬直したまま無反応なオレを不審に思ったのか、言葉を止める。

「・・・オレって、あの純白の服の中身の”大事な部分だけ”見てんだよな・・・。」

「あ、いや、そういう格好していると、本当にお姫様みたいで綺麗だな。」

「な、なっ、何を・・・。」

「うん、綺麗だ。鎧姿も凛々しくていいが、そっちの方がもっといいな。」

純白が見事に相まって、彼女の黒い肌を引き立てている。

女は化ける。

たまには、ミランダ達も着飾ってあげさせたくなるな。

下を向いて（多分）赤くなって照れているラミア姫をまじまじと眺める。

「そう言えば、サアラ姫もお揃いなのか、似合ってるよ。」

「あ・・・ありがとうございます、えと、その、”姫”はいいです。」

「ふむ。」

では、何と呼べば・・・。

助けを求める様にラミア姫に視線を流す。

「わ、私を見るな！アルムの好きに呼んだらいいだろう！」

「ラミア、そんなに怒らんでも・・・。」

何時の間に互いに呼び捨てになっただろう・・・緊迫してたから、その辺の記憶が曖昧だ。

謎。

「お姉様ともそんなに親しいのですから、私も同じようにというのは・・・ダメですか？」

「そ、そんな瞳をうるうるされても・・・ね？」

「だ、だから、私を見るな！サアラ、私は別にアルムと親しいというワケではない！」

「でも、呼び捨てにして、如何にも親しげーってカンジしてますよ？」

会話にニコニコと割り込んで来たのは、ホリンだ。

「ホリン、何やら楽しそうだな？」

もう、こっちはどう反応したらいいのか、起き抜けで全く頭が働かないというのに。

「はい。ご主人様が姫様達と仲良くしているのが、嬉しいんです。君も一応はその姫とやらだるうに・・・とは、突っ込めないがなっ。」

「仲良く見える？」

「はい！あ・・・でも、仲良いというより仲違い前？」

「何だそりゃ。」

ホリンは時たま(?)よくわからん言動をする。

「ご主人様、お身体の加減はいかがですか？」

「うん、頭はぼーっとするけれど、身体はすっきり。あ、サアラ姫の火傷は？」

「ラミア姫を助ける時に負った傷は、しっかりと手当がされていてもう出血も止まっていた。」

そのままオレはサアラ姫の方へ視線をくるりと下げる。

「・・・。」

「あ、あのサアラ姫？え、えと何故無言サノデシヨウ？」

「これにも無反応？」

「呼び方。」

オレを睨みつけながら、囁いて来るのはラミア姫だ。

つて、えー。

「……んと、サアラ？」

「はい、怪我はお姉様が連れてきてくださった治療士に手当てしてもらいました。」

さっきの無反応がなんだったのってくらいの満面の笑顔で答えられた……。

扱いが簡単なのか、難しいのか、年頃の女の子はわからん。

……ごめんなさい、年頃じゃなくてもわからないデス、女心。

「そうですか。じゃ、約束通り行きましょーか！」

何処へ？

そう言い出す前にそそくさと服を脱ぎ肌着姿になるホリン。
はて？

「ほら、ご主人様ー行きますよー、お・フ・ロ・ 一緒に入るって約束したでしょ。」

ええと、約束？

そんな会話は……。

「マテ。会話はしたが、約束をした記憶はないぞー！」

「あれ？」

首を傾げるホリンに、うんうんと頷いているラミア姫。

あ、ラミア姫もその会話の時にいたな。

つか、この部屋で服を脱ぐ必要性はあったのか？

「そうです！一緒に風呂の約束をしたのは私です！」

「へ？」「は？」「何ッ？！」

両の拳を握り締めて、胸の前でぶんぶんつと振りながらサアラ姫が主張してらっしゃる。

ちなみに順にオレ、ホリン、ラミア姫の反応な。

「でで、ですから！今日、一緒にお風呂に入って、一緒に寝るのは私なんですっっ！」

「ナンデ？」

只今、記憶を高速逆再生中。

「ああ、そう言えば、ほら、ご主人様、依頼報酬ですよ。」
ぽんつと手を叩いてホリンが発言する。

「依頼……？」

あ。

城を出る前にそんな話した。

シマシタヨ。

「いや、あのね、サアラ、あれは、その物の弾みというか、例えつてヤツでね……。」

「約束ですっつ！」

赤面しながらも、鼻息荒く力を込めて主張された。

やっぱり、エルフって極端から極端に走る種族？

仕方がないな。

「なあ……ラミア。姉として妹を止めてくれ……。」

丸投げ。

流石に姉の言葉なら、聞く耳を持つだろう。

「……いつその事、四人で入るのはどうだ？」

……あ？

とつとつ沸いたか？脳が。

「オマエはアホかッ！」

女性を大声で怒鳴るのはどうかと思うが、この際仕方がない。

「ちよつど、その話をしようと思っていたところだ。」

「話？」

「馬上で言っただろう、サアラに会った時にアルムに聞きたい事がある。」

あると。」

ふむ。

何か回想してばっかだな、オレ。

「だから何だ？」

「聞きたい事はそれだったんでな。」

「話がわかるように言え。」

「ホリンと私とサアラ。選ぶとしたら誰を選ぶ？身体・容姿も選考

の基準になりそうだしな。」

「は？何に？」

「嫁にだ。」

・・・嫁は嫁でも空気読め。

くそう、自分でもよくわからなくなってきたぞ。

「お婆様が言っていただろう？三人のうち誰かを嫁にどうか？と。」

一人きよとんとしていたサアラ姫が、その言葉に息を呑む。

「と、というか、その話は断っただろう。」

「断ったとて、誰を選ぶのか、女としては一応気にはなる。そう、気になる。気になるだろう？」

周りの二人に力強く同意を求めると、同じ様に二人が力強く頷く。

・・・あー、逃げられんか、コレは？

「選ぶも何も、そんなの元々選択肢がないだろう。」

「ん？」

「相手の気持ちを無視した婚姻は出来ない。」

これはちゃんと森でも言った。

「例えするとしてもホリンは既にオレのモノだし、サアラは幼過ぎて、そもそもオレの国の成人年齢にも婚姻年齢にも達していない。」

「きちんと理由付けをしないと、ラミア姫は納得しないタチだからな。」

消去法なのが失礼だと思うが。

「つ、つ、つまりは私と言うコトだな！！」

妹の次はラミア姫が鼻息を荒くする。

全く何を聞いていたんだ？

「一番最初に言った前提条件をきちんと聞いていたか？
やれやれだ。」

「あ、あのっ！アルムお兄様の国での婚姻年齢は、いくつなのでしょっつ？」

サアラちゃん、何時の間にやら”お兄様”がついてら。

謎その2。

ちよっぴり似てるじゃないか、この姉妹。

血が繋がっていないとかいう見識を改めてやろう。

「ん、ウチは女性は十七才からだったかな、確か。」

「あら、それなら私は大丈夫です。」

「そうだろ、そうだろ、その十二、三才の幼さじゃ・・・」

「って、なあにいいいいーツツ!!」

馬鹿なっ！いい、今なんて?!

「で、ですから、私は人間年齢では、十七才を超えています。」

さ、さ、さ、詐欺だっ!

「ご主人様、”純血のエルフ”は人間と同じ速度では年は取りませんよ?外見で判断はダメです。」

ホリンが固まっているオレに苦笑しながら告げる。

オマエ、どっちの味方だ。

「じゃ、じゃあ、ラミアは・・・?」

実は物凄い年上だったり?!

「どのみち年上の女房は、我が一族では良い事とされて歓迎される。」

「

「えと・・・つ、つまり・・・。」

「年齢的には、望めば誰とでも結婚出来るという事だな。」

低身長で体型も幼い少女と、勝気で背の高い豊満な女性と、猫を彷彿とさせる可愛い女性を前にして、オレは完全に固まった。

んで、結局どうなった？ ～エピソード？～ 「エルフ三人娘と、」 (後書き)

衝撃の身体は子供、中身は大人！

流石はエピソード(意味不明)

んで、結局どうなった？ ～エピソード～【州府官吏二人と、】（前書き）

今後のお知らせは、活動報告に。

んで、結局どうなった？　〜エピソード〜　【州府官吏二人と、】

「生命の神秘を見たな。」

混乱に染まりながら、何とか興奮する二人の姫を宥め、後をホリ
ンに任せてきた。

今は、何処かと言うとだ。

「風呂つていいよなあ・・・考え出した人間の叡智を尊敬するわ。」
勿論、一人での入浴だ。

彼女達と一緒に入ったら、とれる疲れもとれない。
しかし・・・。

「アレでオレと年齢がたいして変わらないって言われてもなあ。エ
ルフって凄いな。」

「人間の三倍以上長生きする方もいるらしいっす。」

「ふーん。で、何の用？」
もう驚かなくなったな。

人間は慣れる生き物だ。

良くも悪くも。

気だるげに湯船の横の床に、しゃがみ込んでいるザッシュ。

「いや、最後に背中でも流しにと思つて来たっす。」

殊勝なコトで。

「カーライルも一緒にか？」

ザッシュの後ろには、カーライルも立っていた。

「自分は民を代表して感謝の意を。」

風呂場でか？

意外と茶目つ気あるんだな。

ま、そつだよな。

「別に感謝される様なコトをオレはしていない。」

そもそもあんなヤツを太守に任命した国も悪い。

「それにオレは”オマエ達の一族”の思惑通りに動いただけだよ。」

んだよ？

全く反応ないのもム力つくな。

「驚きもしないってワケね……。」

やっぱりザツシユを殴っておけば良かったな。

「多少は驚いてますが、どの辺りでお気づきになりました？」

そんな嘘つぽく聞き返してくるなよ、恥ずかしいだろうが。

「まあ、色々と憶測と意思つきで動いた割には、うまくコトが運び過ぎたからな。」

しいて言えば……。

「”林檎”の時かな。」

「林檎？」「あ。」

ザツシユは解ったか。

「オマエ達二人の林檎の食べ方が一緒に、特徴的だったもんでな、もしかと思った。」

危うく食べ方を本気で真似そうになっただろう？

シルビアの前で食べてみせたけど、やっぱり味の感じ方も何も変わらなかったぜ。

「だから、ザツシユに思いつ切り無茶な指示を出してみた。」

州府の金と物流の状態、城の見取り図。

そんなの本来なら、一兵卒が一晩とかで集められるワケないだろ、いくら優秀だといっても。

「もつとも、カーライルが味方かどうか判らなかつたから、途中までザツシユもそのつもりで動かしてはいたけど。」

基本的にカーライルと会わないとこなせなさそうな大きな仕事以外は、常に誰かと一緒に組ませてたし。

「流石です。最初は皇子が来ると聞いて、好機と思いましたが……。」

「皇子は皇子でも、使えない方の無名の第二皇子で、がっかりしたと。」

期待外れも期待外れだよな。

オレがカーライルでもがっかりするわ。

政治にも武にも色事にも、噂すら聞かない第二皇子だもんなあ。

「充分にご聡明なので、人の噂や情報は案外あてにならないものと学ばさせられました。」

苦笑するカーライル。

あ、笑うとやっぱりザツシュに似ているな。

だから笑いもしないで、無表情に徹してたのか？

「何処かだよ。穴だらけの言動で周りを振り回して、お膳立てがあとアレだぞ？」

危険を冒さず、兄上からの書状が来るのを待つて突きつけて、あとはカーライルに繋ぐという手段もあったワケだ。

それはカーライルが味方だという事が判明してるのが前提条件だけれど。

「いえ。スクラトニー拘束後のご采配は見事でした。あれは皇子だけのご判断ですから。」

「うん……。」

最後には半ば試すように振って来たクセに。

「あ、商人への関税も、一時的に引き下げろよ？」

「もう手配しております。」

「ほら、カーライルでも出来た事だろ？オレが優秀なワケでもなんでもない。」

部下が優秀だったら、どうとでもなる事だ。

「自分は何年もの経験と自負があります。」

再び表情を引き締めるカーライル。

「そうか。太守同然のカーライルと武官の警備隊長のザツシュ。もしスクラトニーのような事をしたら、どうなるか肝に銘じておけよ。」

「どうなるのかは、もう二人には見せたからな。」

文武両方をほぼ掌握出来る地位を同じ一族につけたって事は、そういう危険性もあるって事だ。

この二人に限ってそんな心配は無いだろうが、人は欲に弱い存在。オレだって、今がそうだし。

何時、欲望の限りを尽くすコトやらねえ。

「誠心誠意、アルム皇子の名に恥じぬよう務めさせて頂きます。」
恭しく礼をする。

そこまでご大層な名前じゃないぞ？オレの名前なんて。

「忘れるトコロだった。今回、州府の騒乱を治めたのは、兄上指揮の近衛師団だからな？」

そっちの方が、きつと都合がいいだろうと思った。

「アルム様は、それでいいんすか？」

ザツシユは納得がいかないみたいだが、オレは彼の問いにしっかりと首を縦に動かす。

オレは別に周りに認められたりする為に動いていたわけじゃない。オレは信用に足る人間なんかでもない。

「アルム様らしいと言えば、らしいっすね。」

首を竦めて苦笑するザツシユ。

でも、カーライルとザツシユはオレが何をしたか知っている。

オレの部下達も、ダークエルフの皆も。

そして、州府のあの場にいた役人達も。

だからさ、オレはダメ皇子のままでもいいんだ。

「んじゃ、背中、流してもらおうかな。」

オレは逆上せそうになっていた湯船の中から上がる。

「了解っす。」

そう言って二人は、白い歯を見せて同じように笑った。

んで、結局どうなった？　〜エピソード〜【州府官吏二人と、】（後書き）

ちなみに、ザッシュとカーライルは従兄弟同士という設定ダス。

んで、結局どうなった？ ～エピソード～ 【皇子と・・・】 (前書き)

お疲れ様です。

これで全41話に渡った第?章は完結です。

それでは、最後のお話をどうぞ。

んで、結局どうなった？　〜エピソード？　〜【皇子と・・・】

「と、言うワケで！」

片手に杯を握り、周りを見渡す。

本当に面倒な事ばかりだったな。

新たにどんどんと知り合えた人達が、オレの視界に入ってくる。

「今日は無礼講！食べ放題、飲み放題だ！乾杯！」

高々と杯を掲げる。

皆の乾杯の声が辺りに響く。

こんな大人数での楽しい食事は初めてだ。

初めてづくしの日々でもあったな。

「兄上？」

ふと、あからさまに不機嫌な兄上が目に入った。

「どうしました？」

「・・・納得がいかない。」

「はい？」

珍しく暗いな。

「何故、これが私の手柄なのか。私はアルの邪魔をってしまったのだらうか？」

何？

弟の手柄にならず、自分の手柄になったのが不満なのか？

「事実でしょう？兄上の名の入った書状と近衛師団が州府に入って、リッヒニドスが安定したんだから。」

民も大歓声で受け入れていたし。

ミランダ達には、誰が戦闘の端を切ったのかまでは言わせていない。オレが州府に入って戦闘していたのを知っている人間は、州府の役人達とダークエルフ達だ。

しかも、全員が高い信頼関係の下で、それぞれがカーライルとラミア姫の統率がとれている。

これなら、二人に今回の事の口裏を合わせた効果は高いだろう。

「しかし、アルが正当に評価されないというのは……。」

「元々、評価自体が皆無だったじゃないですか、気にしませんよ。」
今更、手の平返されて評価されても信じないっての。

「ミリイ、しっかり食べてるか?」

兄上に手を振って別れ、次はミリイに声をかける。

「はい!目移りしちゃうくらいです!食べ過ぎて太っちゃいそう。」
幸せそうだな。

うん、こういうのいいな……。

「そつか。じゃんじゃん食べる。ミリイは頑張ったんだからな、食べる権利がある。」

「はい!」

胸をばるんつと震わせ、肉に齧りつく様は非常に健康的で良い。

「レイア、大丈夫か?」

顔をほんのり赤らめ、ふらついているレイアが視界に入る。

「すみません、ちょっと飲み過ぎました……。」

面目ないと言わんばかりに笑う。

「ん?いいじゃないか、今日くらい。オレが許す。」
偉そうに言ってみた。

まあ、いいじゃないか、レイアはオレの騎士なんだから……。

「ねえ、レイア?」

「何でしょう?」

オレはアホだな。

「これからオレの騎士でいてくれるかな?」

「勿論です。」

オレがレイアを裏切るのが先か、レイアがオレを見限るのが先か……。

考えただけでも胃が痛くなりそう。

「今日はしっかり英気を養ってくれよな。」

「はい。」

次は誰に声をかけようかなあ。

「アルム様、お疲れではないですか？」

見知った顔を探そうとしたら、先にミランダに声をかけられた。

「ん、大丈夫だよ。もう何もやる事ないからね。ゆっくり休むさ。」

”成したい事”はあるけどな。

「ミラはどう？楽しんでる？」

「楽しみたいのですが、アルム様が心配で……。」

探してたワケか。

「ありがとう。でも、今は楽しんで。オレは何処にも行かないから。」

彼女の肩に手を置く。

「はい。」

視界にはダークエルフ三人娘が入っている。

ホリンと多少打ち解けたみたいだな。

「……あれ？ミラ、シルビアは？」

ダークエルフ同じくらい外見で目立つシルビアが、何処にも見当たらない気がする。

「シルビアさんですか？私は見ていませんが……。」

こういう時にいない人間というのは、とても心配になって気になる。

何故だか無性に。

「探して参りましょうか？」

。オレの反応にそう提案してくれるのは、非常に嬉しいのだが……。

「いや、いい。ミラ、ちょっとオレの杯持ってきてくれるかな？」

ミランダに持っていた杯を渡すと、シルビアを探しに大広間を出た。

「シルビイの行きそうな所か……。」

基本、厨房くらいしか思いつかないが、多分違っだろう。

一人になりたいなら、他の場所に行くし。

部屋かな？

「でも、どうしたって、人は一人で生きていくのは辛いんだよな。」
オレが多分、そうだったから。

とりあえず、部屋に行ってみる事にしたが、気配すら無かった。
順々に部屋を回る。

そういえば、前にシルビアと一緒に上の階の部屋を回った事があったな。

「シルビィ？」

そして、ようやくと彼女を見つけた。

「それが欲しいのか？」

オレの部屋で……。

彼女は剣を見詰めていたんだ。

”デインの剣”を。

「アルム様……。」

全く、なんて顔してんだか……。

ここに来てからも、ほとんど笑顔を崩さなかったシルビア。

「私は……。」

「いいよ、あげる。」

自分でもバカだと思っさ。

「確かにとても大切なモノだけねど……やっぱりシルビィ達も大切なんだよ、オレ。」

泣き出しそうな表情のままのシルビア。

「シルビィは、オレにとても良くしてくれた。」

それは誰の目から見ても間違いない。

「例えそれが”本当のシルビア”でなくても、ましてや本当は”シルビア”という人間が存在しないモノ”だとしても……。」

うん、多分、それがオレの真実だ。

オレは今、皆の事をようやくだけど、受け入れられるの力も知れないと思ってきてるんだ。

何時か、オレがどういいう存在か知られたとしても……。

第一、“物”か”人”だったら、きつと”人”を選ぶよな？
デインだって、トウマだって。

「シルビイと一緒にいた時間は、とても楽しかったよ。」
だから……。

「それが君の幸福に繋がるといふのなら、いいよ。オレは何も聞かないし、見なかった事にする。」

デインの剣は、オレ以外では持てない可能性は高い。
でも、他に”持つ事の出来る存在がない”という理由にはならぬ
いしな。

もしかしたら。

そう思っているオレの目の前で、シルビアはゆっくりと剣に手を伸ばす。

指が触れるか触れないかの距離で走る小さな光。

「くうつ。」

小さく指に走る痛みで顔を歪めた後、彼女はその剣を握った。

「シルビイ……。」

思わず声に出した彼女の名前。

何時も浮かべていた笑みが消えただけで、彼女がいなくなったみたいだ……。

彼女の手の甲には、赤紫色の紋様が怪しく輝いている。

それで無理矢理に拒絶反応を抑えているのだろうか？

だとしたら、それはとてつもなく高度な技術だ。

つまり、それだけの力のある者が介在しているに違いないという証明。

「アルム様……。」

オレは彼女の声に、精一杯微笑んだ。

何時も彼女がしてくれたように。

あとは彼女がここを去って……それで……。

「あれ……。」

どうしよう……オレ……泣きそうだ……。

彼女と出会って、日数も経っていない。

”本当の彼女”が何かもわからないのに。
何だよ、ソレ。

悔しいな、もあ……。

「シルビィ……オレはこれから特にこの城でやりたい事はないんだ。だから……。」

やっぱりオレは、どうしようもなくガキなんだな、トウマ、ディーン。

「オレは絶対に君を捜し出してみせるよ。」

負けず嫌いかな、それとも。

「アルム様！」

涙を流しながら、オレに飛びついてくるシルビア。

オレは彼女を力一杯、それこそ痛いくらいに抱き締めた。

「待っています！」本当の私”を見つけてくれる事を！」

彼女がそれを望んでくれているのが嬉しかった。

オレの手に銀色の指輪を握らせ、オレの唇に彼女の唇を押し付けてくる。

「国境の?!」

シルビアがその声を発した瞬間、彼女の身体全体が透けていく。

「砂漠のがくつ……。」

彼女の声が消えるように小さく……次に姿が……。

「シルビィ！必ず捕まえてみせるッ！」

オレは力の限りそう叫んで、そしてシルビアの姿は消えた。

剣と共に。

まるで幻のように。

「違うな。オレは何を戯けた事を。」

そんなワケないだろう！

彼女の温もり、微笑み、涙、唇の感触。

全部覚えてる。

彼女の存在の否定は、オレの手の中にある”ソレ”が許さない。

「いいだろう・・・やってやるうじやないか・・・。」
誰の挑戦でも受けるつもりは全くないが、売られた喧嘩は勝つて
ヤル。

「誰かの勝手な都合で引き離されてたまるか！」

んで、結局どうなった？ ～エピソード～【皇子と・・・】（後書き）

果たして、皇子は剣とシルビアを取り戻せるのか？！

というコトで、次章への含みを持たせたまま、終了です。

次章以降、続編があるのかは皆様のお声次第という方向性で・・・。

と、いうコトで、通産全60話のお付き合い、ありがとうございました。

??章のチラシ裏。(前書き)

すみません。お茶濁しです。

まだ体調等が色々思わしくないので、続編を書こうか悩んでいるところですよ。

??章のチラシ裏。

↳ 主要な登場人物

・アルム・デイス・ヴァンハイト

いわずと知れたこのお話の主人公・・・だと思っ皇子様。

ヴァンハイト皇国の第二皇子で、歴代の一族の中で、数人しか現われていない黒髪・黒眼の持ち主。

約18歳前後。

ちよっぴり平均値より背が小さい。

幼い頃、城の地下室に封じてあった”ディーン”という人間が使っていた黒の長剣を手にした事により、

自分の国の歴史や英雄と呼ばれていた一族の血が、ディーンを裏切った事によって成立している事を知る。

お陰で、ある日、自国の皇制を失くそうと決心してしまう事から、このお話は始まる。

また幼い頃に死にかけた際に”トウマ”という他者の魂を糧に生き延びたという事実が、彼の罪悪感に拍車をかけた。

この罪悪感と第二皇子という複雑な地位から、些か後ろ向きな人間と取られがちだが本人は至って前向き。

自分の皇族としての血が憎むべきモノであるという前提があるせいか、貴族主義には反対だがそれ以外に関しては激しく寛容で優しい。だが、一度自分が敵と認識した者に対しての攻撃性は容赦がない。

そのせいか逆ギレ皇子として作者の周りから揶揄されるが、作者は『逆ギレor成敗！をしない皇子は主人公じゃねえ！』と更に逆ギレる始末。

己の目標の為ならば、努力を惜しまない性格でもある。

それもこれも一重に、第一皇子が完璧なものと、それに対する自分への周りの扱いの悪さのせい。

別段、兄を恨むべくでもなく、本人も自分が優秀な人間ではないという劣等感に近いものを持っているからこそ、そういう人格になつたとも言える。

バルドに剣を習ったり、地下の書庫で勉強したりと意外と勤勉。更に手先が器用で、何かをいじったり作ったりするのが好き。

作中では、火薬を配合し爆裂球を作るといった発明家的な事もしていて、頭の回転も多少速いようだ。

ちなみに神器である双剣に一度も触れた事がなく、ディーンディーンの剣を持ってからは触れようとも思わなくなってしまった。

作中では、どんどんと自分の信用出来る人間や信用してくれる人間との出会いを経て、何かを見出せるようになってきている。

一応、本作は彼の成長譚でもある・・・ハズハズ(マテ)

名前は某RPGの方ではなく、某SLGから取ったので間違えないように(なんじゃそりゃ)

・シグルド・デイス・ヴァンハイト

完璧超人ことアルムの兄の皇太子。

祖皇であるヴァンハイトの生まれ変わりと表される程にそっくりで、

金髪・蒼眼。

これぞ、ザ・皇子なんじゃそりゃと言わんばかりの風貌。

問題があるとすれば弟に対してベタ甘で、弟に関する事になると世間の風評や常識なんぞ、何処へやら。

正直、アルムが『兄上、皇位継承捨てて、オレを皇王にしてください。』とか『この国を滅ぼしてください。』と、言えば、この物語が終

るんじゃないか?と実しやかに囁かれる始末。

彼が、こんなにも弟にベタ甘になったのはアルムの幼い頃の病気のせいで、アルムが兄に近づかなくなったのも病気による衝撃的事実の発覚という何とも悪循環を生み出す展開に。

皇位継承者であるが、アルムの天敵(?)である双剣の継承者。

また本編のヲチ的な部分も掻つ攫う点から、ギャグにもシリアスにも対応出来る点も完璧超人。

名前は美形の完璧皇子様で伝説の武器持ちなら”シグルド”だろう。
・・とか思ったらしい。(謎)

・バルド・グランツ

ヴァンハイトの前近衛隊総隊長であり、双剣が基本剣術の中で唯一”長剣”で最高位についた男。

元はヴァンハイトの外から来た人間だったが、その余りの強さに他国に渡すくらいならと、”グランツ”という貴族姓を与えて登用したという噂がある。

デイーンの剣が長剣で彼が長剣使いだった事と、彼が国で一番強いという理由でアルムは彼を自分の剣術の師匠にする。

のだが、最近はその手解きが余りにも実戦重視というよりも偏重である事を知り、ちよっぴり後悔気味。

頭はツルツパゲだがもみ上げ・顎・口と髭だらけなのと、その体躯からアルムには”巨大熊”と呼ばれている。

どうやら頭はハゲているのではなく、自分で剃っているそうなのが・・・この辺は謎。

強さが激し過ぎるせいで本編ではあまり出番が出て来なかったり、出てもギャグ要員になってしまうのはお約束。

一応、この物語のキーマンになる予定・・・だと思つ。

ちなみに”グランツ”の名前は、某アメフトマッチョ(もしくはアゴ割れマッチョ)から取った。

元ネタがわかる人は、お友達になりましょう腐女子来々歓迎(ヲイ)

・ミランダ

アルムの乳母の娘で、アルムとは乳母姉弟となる女性。
一言で”幼馴染み”

乳母である母が死去し身寄りがなくなった事と、彼女自身が優秀だった事でそのままアルムの侍女として仕える事になった。
基本的には冷静沈着だが、アルムの女性関係の事となると簡単に取り乱したり、混乱したりする。

それだけならばいいが、そのまま妄想の世界に入ったりヤンデレモードに入ったりする困った姉。

曰く、『頭の良い人間特有の頭の悪さを発揮するタイプ。』

彼女がアルムへの恋心に気づいたのは、アルムが病にかかり死に瀕した時である。

だが、その頃にはもう身分の違いが分かる程の分別はついており、その恋心を隠そうとはしていたのだが、アルムがリッツヒンドスに移ってからは、姉としても女性としてもアルムを愛している事を隠そうとはしていない。

アルムの方かというと、過去のトラウマから好意はあっても全て受け入れるとまではいかないようだ。

互いの幼い頃の呼び方は『ミラ』『アル』だったが、作中では彼女は一度しか呼んでいない。

いい加減、作者としてはギャグキャラより、ちゃんとした恋愛をさせてあげたいと常々思っているが、いかんせん何故かアルム君の寛容さと器のデカさのせいで、次々と女性キャラがくっついてくる始末。

おかしいなあ、どう見ても彼女はヒロインなのに・・・ヒロインだよねえ？（爆笑）

・ミライ

本編ロリ巨乳成分担当（嘘）

アルムの侍女三人娘の一人。

相当のおつちよこちよい体質。

彼について来る理由も”失敗の連続のせいでクビにされるよりはマシだから”だった。

だがアルムの生来の寛容さから、今はこっちの方が良かったと思っている。

基本的におつちよこちよいで失敗しているが、不器用というワケではないし学習能力が低いわけでもない。

その証拠は作中では、

1．同じ失敗は、その日にはもう二度とやらない。

2．怪我の連続のせいか、手当がうまく薬に詳しい。

という点に表れている。

ただ、同時に街で迷子になりかけるというちよっぴり方向音痴な点も見せている。

失敗しても落ち込まず、何処までも前向きで努力家な性格。

家族構成は不明だが、作中では”姉”がいるという事を話している。名前は”ミリイ・チルダー”から取ったワケではなく、コンビ名のように、トリオ名があった方が覚えやすくていいだろう、侍女三人娘で。

と、考えていった時にアルムの国の双剣が、双星剣と呼ばれる事もあるというところから、美しい星 美星Ⅱミホシトリオとなって決まった。

・ホリン

本編の異種族成分担当（コレ本当）

アルムの侍女三人娘の一人。

設定ではダークエルフという種族名は無かったのだが、貴族主義的思想からくる人種差別と

『ハーレムモノは多種多様な女性がいるのが普通やる！』という作者の書き分けの能力の限界という

身も蓋もない演出の為にダークエルフという種族設定を追加して登場つかまつったキャラ。

お色気ギャグキャラかと思いきや、本編では純血のダークエルフではなく人間とのハーフで王族という、人間世界でも差別され、ダークエルフの世界でも差別されるといふ暗い過去のあるキャラ。

差別を色濃く書くと、暗くなるのであるべくライトに演出しているが、それもひとえに彼女の前向きと明るい性格からであろう。

差別されるくらいなら、こっちから捨ててやらあくらいの潔さと、明るいお色気で男女共に人気のあるキャラ。

森の民らしく、弓の腕前はアルムより上。(アルムが弓矢を扱った事がほとんどないから)

・シルビア

本編の魔乳お姉さんヤメレ成分担当

アルムの侍女三人娘の一人。

お姉さんキャラはミランダがいたのだが、それよりも更に年上のお姉さんキャラが欲しくて作ったキャラ。

どれくらい年上なのかと言うと、ごによごによ(自主規制)

ボンキュッボンな刺激的ボディと間延びしたおっとり感で、貴方のハートを鷲掴み!

などという浅はかな位置づけと、ハーレムモノは多種多様な・・・以下、略な設定の女性。

アルム曰く『胸もお姉さん。』というか魔王。『らしい。』

ギャグパートでは、そのお姉さんっぷりでオトナな(?)会話をアルムとしていたり、アルムの心を読んでいるのではないかという能力を発揮しているが、時にシリアスになったり意味深な発言をし続けていた。

そのせいか、ついには最後の最後でアルムのもとからディーンの剣を持ち去っていったが・・・。

果たして、彼女の背後には何があったのだろうか？

いっぱい登場しているのに何故が目立たなかったのは何故？ホント謎。

お陰で、最後はあんな『うええっ』な展開に（注：本当に友人はそう言いながら読んでいた。）

恐らく現在、最もヒロインの座に近い女性（苦笑）

・ザッシュ

本編の唯一マトモな双剣使いにして、リツヒニドス出身のアルムの近衛隊士。

あんまり破格なキャラや女性だけ出してもどうかと思って、きちんとした双剣使いに。

特段なんの特徴もなく、ギャグも戦闘も出来るキャラが欲しかった。ただ、それだけじゃ何の印象も残らないので、『っす。』が口癖の体育会系（兵士だしね）に。

リツヒニドス太守スクラトニーの副官であるカーライルの従兄弟で、アルムの行動や今後の対策をカーライルと一緒に練っていたのだが、そんな事をしなくてもアルムは自身の価値観とホリン達の願いによって、リツヒニドスを良い方向へと解放する。

本編の最後にはアルムの近衛隊士の任を解かれ、リツヒニドスの警備隊長となった。

リンゴが大好物で、下から齧るのが幼い頃からの癖。

本編の戦闘では速さを生かし手数を以て、確実に優位性をたもつスタイルで戦っている事が判明している。

・レイア

戦闘担当が男しかいなく、女性の戦闘担当はやっぱり必須だと思っただけのキャラ。

ちょっとした差別があるという設定のヴァンハイトで双剣使い以外は邪道とされる中、長剣の腕の実力で上を目指そうとしている兵士。その点を気に入られて、アルムに近衛隊士に任命される。

当初は、これを足がかりにすぐに首都に戻って昇進しようと思っていたが、アルムの価値観や、同じ長剣使いとしての戦い方を見るうちに彼の騎士として仕える事を決心する。

曰く、『騎士という名のプロポーズ』である。

レイア自身は女性として好意があるのかどうかはわからないが、求められるのならばそれは嬉しい事で受け入れようと思ってはいるらしい。

本編の戦闘では全身鎧の左腕に大盾をマウントして防御力を堅め、そこからの確に相手を打ち倒すスタイルを取っている。

名前は、某継母から（ライ）

・ラミア

ダークエルフの第一王女にして、ダークエルフ血が繋がってないんじゃないか？王女姉妹の姉。

人間を下等な種族と位置付け、排他的な態度を取っている。

差別は人間社会だけにあらずという演出がしたくて、そういうキャラになったのだが、初登場の余りの理不尽っぷりに人気は物凄く低かった。

アルムとの出会いを経て、人間も全部が全部悪いヤツではないという事を知り、またアルムに微かな恋心を持つようになる。

だが最初の人間への先入観があるせいか、素直になれないツンデレな状態に。

すると何故か人気が急上昇した。

作者にとっては、もう何が何だかある意味一番謎な存在である。

作中後半、アルムはちょっぴり似ている姉妹と認識を改めている。

・サアラ

ダークエルフの第二王女にして、ダークエルフ血が繋がってないんじゃないか？王女姉妹の妹。

人間に対して少なからず蔑視の風潮がある中で、エルフにも色々な性格があるように人間も同じだと主張。

人間に比較的友好的な思想を持つ幼い少女。

幼い少女と思いきや、本編の一番最後に実は17歳以上（人間年齢換算）という事が発覚。

見た目は子供、中身は大人な某名探偵のような様相に。

しかし、これは単純に人間の時間軸で見たら、そのような状態に見えるという事であり、エルフの世界では外見通りの12、3歳と同じ扱いである。

当然のように本編内では精神年齢はそれほど高くないように見受けられる。

作中後半、アルムはちよっぴり似ている姉妹と認識を改めている。

・お婆様

ダークエルフの先代の王にして、姉妹の祖母。

勿論、ホリンの祖母でもある。

名前が出ていないのは、設定されていないワケではなくある重要な理由が隠れている。

寿命が長いダークエルフの中では最古参なのだが、外見年齢では40代前後でアルムの母と同じか、それ以上に若く見える。

妖艶なお婆様。

年の割りには、お茶目でシャレのわかる人。

何やら、アルムの持つ剣を知っているような雰囲気があったのだが・・・。

本編のキーキャラの一人である事は間違いない。

↳その他の登場人物↳

・料理人三人組

料理長のクリス・料理人のホビー&レーダ

きちんと最初は設定があつたのだが、段々とモブキャラになり、？章では全く出番が無くなってしまった可哀想な三人組。

男装の麗人風のクリスは、男性だけの料理の世界で差別を受けるかと思いきや、

男に見える外見で着々と地位を上っていった半面、女として扱われず貧乳に悩んでいるという設定だったり、

大柄でマルチな才能に溢れたホビーは、そのギャップから色々とアラムを驚かせたり活躍したりする予定だったし、

レーダも実は暗い過去を持っていたりする設定もあつたのに。

何でこんな事になつた・・・はい、作者の書き分けの能力の限界です(ヲイ)

気力が尽きたと言います。

まあ、出てない以上、何時でも出せると思ったのもありますけれど。

・スクラトニー

リツヒニドス太守。

今回の悪玉(小悪党)

リツヒニドスに圧政を敷き私腹を肥し続け、その金で裕福な暮らしと兵器を作っていた。

金に意地汚い性格と差別主義で、部下からの人気も薄い。

お陰で、自分の手勢を金で雇わねばならず、それが結果として彼の首を締めた。

結果としてカーライルとアルムの二人でという形による革命で、その任を更迭される。

更迭後は、全ての財産を没収されダークエルフの森へと放逐された。本編では描かれなかったが、きっとダークエルフに捕まりそれ相応の罰を受ける事になったのだろう。

・カーライル

リッヒニドス太守スクラトニーの副官。

オールバツクの知的な文官。

非常に不健康な外見をしており敵か味方かわからないのにも関わらず、アルムにまで心配される始末。

リッヒニドスに皇子が来る事を知り、密かにリッヒニドスの改革を成そうとしていた人物。

違う意味で？章の黒幕。

だが野心や野望があるワケではなく、その真意は民の為の善政を敷く為だった。

リッヒニドスに来たのが、皇子は皇子でも第二皇子であるアルムだったのに失望していたが、結果的にそれが功を奏し、リッヒニドスの改革に成功する。

その原動力にもなったアルムに一目置いていて一応は彼の意見を取り入れて善政を敷いている。

ザツシユの従兄弟で、当然好物はリンゴ。

食べ方の癖も下から齧る方式である。

・ヴァンハイト皇国

英雄ヴァンハイトが双星剣を携え興した国。

主人公（だと思う）アルム皇子の出身国である。

国の気候・地理として参考にしたのは、”マケドニア共和国”

アルム皇子が作中で居を移すことになった国の南西にある旧首都”

リツヒニドス”は、このマケドニア共和国の南西にあるオフリドという都市を参考としている。

このリツヒニドスという地名のみ、実際のオフリドの旧名でもある。勿論、劇中のように森と山に囲まれた都市で、観光名所になっている。

リツヒニドスには存在しないが、オフリド湖は必見（苦笑）

・クロアート帝国

英雄クロアートが天斧槍を携え興した国。

ヴァンハイトと違い、現在は直系の人間ではなくクロアートのイトコの血筋が継承している。

作中では、アルムが”バルドを止められるのは、某国の重装歩兵団くらいだ。”というような発言をしていたが、国の主力部隊が重装機甲師団なのは、この国。

領地の北に獣人や亜人種の住む自治領のようなモノが点在しており、この国は古くからこの種族との共存を図っている。

地理的な位置は、ヴァンハイトの北西。

例の参考とした地理的位置にすると、ボスニアとモンテネグロを合わせた領土。

名前もボスニアの旧名からもじっている。

・セルブ王国

英雄セルブが流細剣を携えて興した国。

完全貴族主義の下に今も直系の男子によってのみの統治が続いている。

位置は、ヴァンハイトの北西。

前述したクロアートよりも更に北に位置している。

このクロアートとセルブの国境付近には、獣人や亜人の集落があり、その領土の処置を巡ってクロアート帝国との緊張状態にある。領土が海に面していて、近海に獣人の治めている島国がある。地理的な位置にするとクロアチア辺りだと思われる（ライ）

・セイブラム法皇国

王錫を象徴に掲げる宗教国家。

唯一、直系の人間が治めていない国。

英雄だったセイブラムには子供はおらず、一族の血も薄まっている。薄まると言っても多岐に渡り分散して本家のない分家状態だけで、王錫に選ばれない人間がいないワケではない。

厳しい戒律の中で修行を経て、一定の地位につき王錫に選ばれた人間が国を治める代表となる。

宗教国家だが地球にある宗教と違い、偶像崇拜や神という存在を崇めるモノではなく。

王錫を象徴とする、思想国家に近い。

政治は合議制に近く、国の代表を選ぶ選出方法から解る通り最も発達した法体制ある国家と言われている。

地理的な位置は、ヴァンハイトの北。

丁度、前述してきた国々に囲まれるような位置に当たる。

というワケで必然的にセルビア辺りが近いだろうか。

ちなみに国名のセイブラムは、ようやく完結して映画化した某漫画のキャラから（ライ）

その他の神器と国（未設定）

・地樹槍

行方の知れない神器の一つ。

理由は血族に依らない継承が行われている為。

一応、現在はヴァンハイトの北東にある鎖国した国家体型を持つ場所にあるらしいのだが・・・。

作者的には、持ち主の設定として二つ程考えている。

ちなみにアルムが作中で言っていた、バルドを止められる云々に拳がっていた槍兵騎士団があるのは、

この神器のある国の兵団にしようと思っていた。

??章のチラシ裏。(後書き)

ごめんなさい。

今はこれが精一杯。

小さな白い花一輪というところですかね。(ライ)

序。(前書き)

以前のよう更新出来るかわかりませんが、新章突入です。

序。

「世界は広いよなあ……。」
思わず黄昏てみたり。

あれからリツヒニドスの治安が安定して、政治の混乱を治めるのに半月近くの時を要した。

いや、寧ろ半月程度しかかからなかったという方が正しいな。
カーライルの手腕は流石だった。

それでも半月近くかかったのは、オレの我が儘のせいだ。
リツヒニドスの州法にある制度を導入する為に。

その制度とは”地位や生まれに由らない人材登用制度”だ。

一定以上の地位にはつけないという条件はあるが、このオレの我が儘はカーライルとその部下達の圧倒的な支持によって、施行の準備作業を行う事が決まった。

きつと首都の貴族の中には大反対をする者もいるだろうが……。

オレ、皇王の勅命書を以て任命権と最終決定権を一時的とはいえ委譲されてるもんね。

さっさかと裁決しちまったい。

ぐははっ！職権濫用だ！

どうだ、参ったか！

これで表立った反対は、皇族への反意アリと見なされる。

これくらいしたっていいだろう？

で、その後、オレはどうしたかというところ……。

「空は青くて広い。大地は大きく果てがないかのよう。」

只今、絶賛皇子廃業中。

現在は砂漠のド真ん中は、馬の上。

誰だ？

今、島流しとか言った輩は。

こうなったのには、そりゃあそりゃあ深いワケがある。

ここに至る前もそりゃ、すったもんだがあつたが、こつなつたのに
もすったもんだがあつたんだ。

序。(後書き)

さあ、皇子は新たな舞台へ。

気が尽きないように皆様のご協力、コメントを宜しくお願いします。

A w a k e ! 皇子は絶対立ち止まらない。【前】（前書き）

初っ端から分けてすみません。

しばらくは体力が無いので、いくつかに分けて短くなりそうです。

A w a k e ! 皇子は絶対立ち止まらない。【前】

剣を失った。

同じくらいに大切になろうとしている人も。

翌朝。

目が覚めた時、流石に夢だったら良かったのには思わなかった。

それは首に下げられた銀の指輪のせいだ。

折角、今日からぼけーっと出来ると思ったら、コレだ。

結局、休む事なく脳みそを使うハメになる。

手元にいる人材のウチ、連れて行けるのはレイアとミランダくらい。

「まあ・・・こんな事になるとは思ってたしな。」

この台詞もここに来てから何回目だ？

そろそろ学習能力とか働かないものかね、オレ。

ミリイは戦闘に向かないし、ザツシユは任を解いてしまったし、バ

ルドは当分、治安維持の為にリツヒニドスに残さなければならぬ。

「泣けてくるよな。」

涙なんか出る暇なんざ、勿体無いくらいだが。

着替えながら、人徳について哲学的考察をしてやろうかと思つくら

いではある。

ホリンにはここでゆっくりとエルフと人間の両方の架け橋になって

もらいたいし・・・。

ミランダは何をしても、戦闘に向かなかろうがオレについて来るん

だろうな。

ここまでくると、消去法が憎らしい！

「アルム様、朝食はどうなさいますか？」

悶えそつになっっているうちにミランダが来て、この城に来てから

何時もの会話を始める。

「あ、ミラ、朝食後で構わないから、カーライルに地図を借りられるように手配してくれないか？」

「地図ですか？」

「この国の・・・あー、なるべく、国境辺りを詳しく書いてあるヤツ。」

「今回もやるしかないんだがら、やるよ、オレは。」

「結局、シルビアが何故？という事ばかりが頭に浮かぶんだからな。」

「そう言えば、ミラ、シルビアは自主志願か？」

「オレに背を向けて去ろうとするミランダに声をかける。」

「はい、そうですが、何か？」

「いや、いい。」

「まあ、普通に考えたらそうだよな。」

「狙っていたのが剣で、彼女の反応を見る限り誰かに強制的にやらされていているという事までは確定だろう。」

「あれが芝居だったら、オレを誘き出す作戦にはなるが・・・。」

「そもそも、だったらもつとオレを普段から誘惑なり何なりするだろうし、第一へっぽこの第二ダメ皇子を陥落したとるで利がない。」

「ぶっちゃけ、黒幕が誰とか、動機とかは、この際はどうでもいい。」

「要は、シルビアを見つけて奪い返す。」

「手段は選ばない。」

「アルム様！」

「ん？」

「えと・・・今、朝食に呼ばれて、食べに来て・・・。」

「あれ？」

「お疲れですか？」

「ミリイが心配そうに、オレの顔を覗き込む。」

「目の前のなだらかな山が高いなあ・・・。」

「って、何？」

「シルビアさんが、いないようなんですけれど？」

「う・・・。」

「いきなりマズい展開。」

「あ、ちよつと用事を頼んでな。ザツシュの部下達と遠出をしてい

る。」

「そうですか・・・ザッシュさんもシルビアさんもいないと寂しいですね。」

だな。

実感はオレにもある。

よし、撫でてやるうじやないか！

「ふえっ。」

「大丈夫、すぐに皆、顔を出すさ。」

そう思わないと・・・。

「アルム様？」

「今度は何？」

次に声をかけてきたのはホリンだ。

「お客様がお見えです。」

「客？」

誰だ？

兄上か？

兄上なら仕方ないな。

しばらく会えなかった分、兄上の弟バカは変な反動が発生して、オマケに利子まで付いていた。

思い出して、露骨に変な顔をしてしまったじゃないか。

「誰を想像しとるのかの？」

この言い回しは・・・。

「ええと・・・この声はホリン達のお婆様の・・・。」

あれ？

名前聞いた記憶が無い。

「名乗っておらんだの？まあ、よい。」姉様”とでも呼ぶが良いぞ。

「

姉様つて・・・しかも、その格好は何ですか？」

彼女は、ホリンと同じ型の侍女服に身を包んでいた。

「なに、皇子はダークエルフの侍女がいると皆知っておるでな。こ

の方が早くここに来やすいと思ってこうしたのだ。」

何てお茶目な。

外見年齢30代後半〜40代前半にしか見えない彼女は、何というか”匂い立つ熟女”

正直、その侍女姿を含めて食中りを起しそうだ。

「しかし、久しく来てなかったが、懐かしいの。」

元は皆だった城の内装を懐かしそうに眺める。

「ダークエルフがこの皆に来た事があるとは……。」
意外だった。

「ふむ。」エルリオット”の時代にな。」

エルリオット？

何処かで聞いた名前……。

「アルム様の曾祖父にあらせられるお方です。」

ミランダがささずオレに囁く。

「”文治の星皇”……。」

「左様。」

3代前の皇王。

皇家の歴史の中で、”ヴァンハイトの双剣”を持ってなかった皇王の一人。

というか……彼女、本当に一体何歳なんだ？

「今、失礼な事を考えたな？」

ぎくつ。

「ちなみにこつそり皇座の左に座らせてもらった事もあるぞ。」

「え。」「えっ?!」「ええっ?!」

その場にいたオレ、ホリン、ミランダは目が点になるくらいに驚いた。

ミリイはその意味を理解してなかったようで、オレ達の反応に驚いたという様子。

これは、本当に衝撃的な事実だ。

知っているか？

皇王の左に座する者の名つてのは”皇后”って言つんだぞ？

しかも、側室じゃなくて、正室。

「茶目つ気のあるというか、人を小馬鹿にするというか、とにかく面白いヤツでの。」

うつふつふと、艶のある唇をペロリと舐めながら笑う。

「いやいや、限度があるでしょ、ブツ飛び過ぎだったの。」

ん？何だ？この皆の視線は？

何で、皆はオレを見てるんだ？

あ、しかもホリンのお婆様まで。

「なんなのさ？」

「いや、お主がそう言つのかと・・・な。」

何で？

「何というか、アルム様のひーじいちゃんってカンジがするよね。」

どつという意味だよ、ホリン。

「」自覚ないのでですか？」

ミランダまで呆れたような眼差しで。

「確か、外見はオレと同じ髪と瞳の色なのは知っているし、双剣に選ばれないのも同じだけれど・・・。」

有り余る程の文治の才は、オレにはないしなあ。

「わかつていない所までもが、じゃな。だからこそ、思い出してわざわざ来たんじゃない。」

楽しげに会話を続けられたっ？！

一体、みんな何だつて言うんだよ。

「お主にいくつか話したい事と渡したいモノがあるのだ。」

ホリンに何やら指示をして取りに行かせてるみたいだが・・・。

「ところで、皇子は”予言”とやらを信じるかの？」

今度は何？予言だつて？

「未来に何が起ころうと、乗り越えられるもは全力で乗り越えるし、無理なモノはどうやってても無理だからなあ。」

信じるか否かと言われても困る。

予言が現実になるのが、対策を講じる時間が多いか少ないか、あるかないかの差でしかない。

大きい差だといえば大きいけれど。

「確かに。予言はそれに加え、時として曖昧で解釈の仕方に大きな幅があるの。」

「そりゃあ、”明日、何かが起こる”とか予言されたら、そりゃそうだと思うよな。って、これは極端な例だが。」

「エルリオットの死の間際にした予言はな、”太陽は再び昇り、月は欠けてもまた満ちる”じゃったな。」

漠然過ぎる。

「ちなみに何に関しての予言ですか？」

「さあな。本人は十分に満足して安心して逝っちまったよ。」

「そうだよな・・・長く生きられるって事は、それだけ色んな死を看取るって事だもんな。」

「親しき人も、愛しき人も。」

「切なくて悲し過ぎる・・・。」

「こら、何故お主がそんな泣きそうな顔をする。全くそういう所も無駄にエルリオットに似おって。」

「え？似てる？」

「んなバカな。」

「そんなに似てます？」

「堪らず聞き返してしまっただ・・・。」

「似てるよ、何もかも。予言すらもな。」

「え？」

「オレの”予言”」

「それは？」

「の、前に。お主、エルフの森に対してはどういった政治姿勢を示すつもりじゃ？」

「きつと、まず聞きたかっただろう質問が、彼女の口から発せられた。」

A w a k e ! 皇子は絶対立ち止まらない。【中】（前書き）

誰かお友達になって下さい（トオイメ）

A w a k e ! 皇子は絶対立ち止まらない。【中】

「どうと言われても、オレの政治的権力なんて、ほとんど皆無ですよ？」

人事と最終決定権はあっても、皆に反対されまくったら何も出来ない。

微妙過ぎる権利だ。

他の人間だったら、自分の力が及ぶ様に、自分に近しい人間をいくらでも高い地位につけようとするんだが。

そんな本来の政治が立ち行かなくなるよな人事なんてするつもりはない。

というか、そこまでオレに近しい存在なんて、この州にはいない。

カーライルだつてオレに友好的だが、オレ寄りではない。

彼もオレも”民寄り”という共通項で、均衡を取っているだけだ。

「たいした事も出来ないですよ？」

「随分と、過小評価じゃの。そこはエルリオットには似なかつたか。

いや、似なくて正解じゃ。」

オレのひいじい様は、一体どんな人だったのでしょつかねえ・・・。

「では、そういう権限があつたとするならば、どうする？」

そんな仮定の話されてもなあ。

「んー、どうとも。」

「どうとも？」

まだ説明しろということか？

意外と面倒だな。

「何もしない。引き籠りたいなら、引き籠つてればいい。それで滅びようが、オレの知った事じゃないし、勝手にしてる。」

「アルム様？」

革の大きな袋を下げたホリンが、驚きの声を上げる。

だって、そうだろ？

わざわざ、しかも強制的に引き摺り出してどうする？

「ただ、人間社会に出ようとか、働きたい住みたいというのなら止めない。人手はいるし、天領の田畑や公共事業と働き口はある。」

逆に言えば、出てきたいというのも止めはしない。

「この州に限ってなら、優秀な人間は官吏として雇ってもいい。ただ優遇は一切しない。」

こういう時に使える人事権ではあるがな。

まあ、カーライルと相談して、試験制度なりを用意して施行しなければならぬが、可能だろう。

但し、政治の中枢を担う地位にはつく事は出来ないと思う。

人種差別の強いこの国では、ダメ皇子の力を奮ってもこれが限界。

オレ的には、逆に習慣や価値観が違うエルフがいる方が、役立つ瞬間が絶対あると思うんだが。

「ああ、勿論、住むなら納税して欲しいな。」

うん、大事。

とは言え、現在のリツヒニドスは低税率期間推進中ですが。

「何というか、厳しいの？」

「本当にそう思ってます？」

「愛情と甘やかすのは、全くの別物だからの？」

と、何故か視線は、ホリンやミランダ達を見るのは一体……。

「ついでに、ウチの不出来な孫を雇ってくれんかの？」

「孫？ホリンは既に侍女の仕事をしますけれど？」

「……そういう人を小馬鹿にした誤魔化し方まで奴に似ると、何やら一発小突きたくなるわい。」

あははは……。

目が本気ですよ？

「ラミアとサアラの事じゃ。お主の侍女でも何でも……ほれ、花嫁修業でもな。」

その話、まだ続いていたのか？

「断りましたよね？」

面倒この上無い、そんな話。

「お主が断つても、孫娘がその気なら止められんじやる？」

「はい？」

何か、今、それはそれは衝撃的な発言が……。

「それにダークエルフを妻に……正室とは言わんが、しておけば政治的にも他者より優位になれるぞ？」

……だから、ソレ、政略結婚と何が違うんだ？

相手の気持ちは伴わない政略的な婚姻は嫌だ。

ただでさえ、第二皇子は冷遇されているというのに。

しかし、この悪戯ツ子にしか見えない年配のお婆様は、相手の気持ちがこちらを向いていれば、屁でもないという事らしい。

「第一、そんな理由なら、それこそ相手に失礼だ。」

「律儀な奴じゃな。仕方ない……わらわにしておくか？婚姻相手。」

「

「はあつ?!」「お婆様!」「ええええーっ!」「何をっ?!」

その他、様々な驚きの声上がる。当然だ。

「わらわなら、そういうのに慣れておる。心配せんでも大丈夫じゃ、生殖機能も衰えておらんから世継ぎも産めるぞ？」

いやいやいや。

後半の話もすつげえ驚きではあるけれどさっ!

女体の神秘をブツチギリで通り越して、生命の神秘再びだけど!!

「な、な、な、何を血迷ったコトを!」

「だ、だ、だ、ダメです!お婆様!」

柱の影から、二つの人影が転がり出てくる。

「ラミアにサアラ……帰ったんじゃ……。」

何なんだ、この一族。

「まあ、世継ぎは作らないから別として。」

怪訝な顔されても、この腐った血を残すつもりはない。

「エルフをお嫁さんにはしたくないかな……。」

オレの発言にラミアとサアラの表情が曇る。

ホリンは、オレにはそれなりの理由があるとわかってくれているし、目の前の爆弾発言の女王は、理由を言い出すまで待つてくれている。「だって、そうだろ？結婚してもどうやったって、オレの方が先に死ぬんだよ？」

サアラを見て、ザツシユの言葉を聞いて、そして今、目の前の女性の話を聞いて思ったんだ。

ようやっと真実味というか、実感が出てきた。彼女達とオレの時間の流れは、余りにも違う。

「全く、余計なトコまで似おつて、女の振り方も一緒か！芸が無さ過ぎるわ！エルリオットの血筋は！」

その割りには、少し嬉しそうにかっか笑う。

「何か・・・今迄で、一、二を争う爆弾発言だったような・・・。」
思わずミランダを見るが、彼女も変な汗をかいている。

「罪作りな血じゃな。」

そんなのは、とっくに理解している。

今の意味とは違うけれど。

「ちよくちよく一緒に過ごしに来るくらい構わんじやろ？」

あつさり流しやがって、重大な話じゃなかったのかよ・・・。

「そうでもせんと、あの頑固な孫娘共が納得すると思つか？わらわの孫じゃぞ？」

オレの耳元で囁く女性のその例えは、もはや脅迫に近いのではないかとも思う。

「そういう問題なんですか？」

「まあ、当面はな。」

どんな悪企みだよ、ソレ。

「「お婆様！」」

オレ達の急接近に叫ぶ二人の声が聞こえるのも何その、涼しい顔で離れる。

「ホリン、荷物を。」

「あ、はい。」

持ってきた革袋をホリンから受け取る。

「贈り物だ。」

そう言っていると彼女は革袋に無造作に手を突っ込み、中から出てきたのは。

「盾？」

「こっちは……右腕用じゃの。」

「右手用？」

すると、もう一つ袋の中から小盾が出てくる。

つまりは、そっちが左腕用という事になる。

「お主の籠手に合うモノで、最も上等で適したモノを用意してやった。」

渡された小盾は、お世辞にも上等だとは言えない程に見た目はボロい。

だが、重さは異様に軽くて薄いのには驚く。

しかし、感触的にはそつとうの硬度の高さが窺える。

何やら、須らく特別製の予感。

「使う時は、左右を間違える事のないようにな。」

「ん？刻印がしてあるな……”エメト”？」

盾を縁取るように刻んである模様の一部に字のような刻印。

「よく読めたな。今の世では何処の国でも使われていない言語を。」

あれ？

何で、今、オレ読めたんだろう？

見た事もない記号の羅列なのに。

「……トウマか？」

思わず口からこぼれ出てしまって、慌てて口を閉ざす。

「まあ、よい。この盾にはそういうきちんとした決まりごとで効果を発するもの。間違えぬようにな。」

ああ……やっぱりいわく付きなんだな。

呪い殺されたりしないか？

ディーンの剣のような最上級の神器を使っていたせいか、この他
こういう物に対する危機感薄いんだよな。
困ったもんだ。

「他にも良いモノが見つかったら、届けてやろう。」
「……まさか、次も侍女服で現われるつもりなんだろうか？」

現われ方まで不安にさせるとは、流石、ホリンのお婆様。
不安に思っているオレにもう一つの盾を押し付ける。

「こっちは”マヴェット”か。」

それを読めるといふ事実には、もう驚かない。

持つ者を選ぶ剣のように、使える資格のある者には読めるとか、そ
ういふ事なのかも知れないしな。

「そうそう、お主に対する予言じゃがな。」

あ、忘れてなかったんだ。

「太陽が輝き例え見えずとも、月は常にそこにある。」

なんだそりゃ……確かに曖昧だわ。

「共通点は太陽と月か。死の間際で安心して逝ったとなると、その
先に起きる出来事に共通項があるのか？」

二つ名がつくような偉大な星皇様と、同じ単語つてのが今二つピ
ンと来ない。

「問題は、太陽と月が全く同じモノを指しているか否か。」

各々にとつての象徴される太陽と月で、全く別モノを指している
可能性だつてある。

「意外に冷静に頭が回るの。考え過ぎても身体に毒じゃ。とりあえ
ず、今日から孫娘達を頼むぞ。」

「あ、はい……つて、ええーッ!!」

危ねえ、考えているうちに言われて、そのまま流しそうだった。
「何じゃ？ 気にいらんか？」

祖母の手前、大人しくやり取りを聞いていた二人の姫の視線が、
痛い程に刺さつて……どうしると……。

確かにザッシユとシルビアが抜けたから、武官が出来るラミアと侍

女にサアラというのは、役割分担的には問題はないが、悩む。

第一、オレは多分、そんなに長くここにはいられない。シルビアを・・・彼女を探しに行かないと。

「・・・期間限定なら。」

最大限の譲歩だ。

「お兄様っ！」

サアラが抱きついてくる。

うくん・・・咄嗟に受け止めたはいいが、どう反応したら良いのやら。

見た目は幼女、中身は大人ときたもんだ。

扱いが更に難しく・・・違う意味で同じように扱いが難しい姉もいたりするしな。

「よろしく頼む。」

何で睨むんだよ。

「はぁ・・・ああ。」

酷く疲れた。

「それと、さっきの台詞じゃがな。」

つか、まだ帰ってなかったのか。

どの台詞だろ？

「どちらが先に死ぬなどと気にしとるんじゃない、一緒になる為にお主と一緒に死んでやるぞ、女というモノはな。」

ニヤリと笑う様は、非常に悪どい。

大体、オレに女心が理解出来るワケがないだろ。

それに関しては、諸手を上げて完全降伏だ。

「そういうものですか・・・。」

「うむ。それと・・・。」

まだあるんですか・・・。

「お主は知つとるかもわからんが、ホリンは混血じゃから、老化の速度は人間とそう大差ないぞ。」

あ。

「ふふっ、障害が一つ消えて、ホリンが一步有利かの？まあ、障害がある方が燃え上がる事もあるしの。」

楽しそうに（不吉な）言葉を残して、今度こそ彼女は去っていた。とりあえず、次はもっとマトモな用件で来て欲しい。

・・・というか、せめてマトモな格好で来て欲しい・・・。

A w a k e ! 皇子は絶対立ち止まらない。【中】（後書き）

何か、お婆様すげえ・・・自分で書いておいてなんだが。

ようやっと、リッヒニドスが旧皇族の城だったという伏線を使った

（苦笑）

A w a k e ! 皇子は絶対立ち止まらない。【後】

「 ” 国境 ” 、 ” 砂漠 ” 、 ” がく ” …… ああ、最後は、がくなんちやらだよな。 」

カーライルやエルフの森との関係の話し合いの中でも、他に考える事はシルビアの顔だ。

しかも、今回はスクラトニーの時のようにはいかない。

シルビアの消え方、アレが ” 術 ” だとしたら。

剣の拒絶の抑え込み、アレも ” 術 ” だとしたら。

黒幕はそんな強大な力を持っている。

そして……。

『 待っています…… ” 本当の私 ” を見つけて下さい。 』

彼女の言葉。

あれが彼女の本心だとしたら、一人の人間を本人の意思とは別にあらる程度は拘束する力も持っている事になる。

「 それでも取り戻してヤル。 」

諦めるのが得策。

そうなんだろうな、きつと。

けれど、何だろうな……多分、もうシルビアは ” オレ ” という存在 ” の何割かは持っているだろうと思う。

「 欲しいのは、力と情報。 」

相手はディーンの剣と術の力を少なくとも持っているんだ。

それに近い格の武器が欲しい。

出来れば、協力者も。

人手の無さは実感しまくったものな、このリッヒニドスで。とりあえず、国境付近の地図を眺めてみたものの。

「 この国の国境とは限らないんだよな。 」

範囲が広すぎる。

次の砂漠だが、この砂漠という地形。

あるにはある。

実に多数の国に跨って……。

このヴァンハイトから北の国境線付近は、ほとんど全て砂漠と言っ
てもいい。

ううむ。

シルビアは最後、何て言おうとしたのか。

「が、が、がく、がく、がく……がう……。」

これで身体とか震えてたりしたら、危ない薬を飲んだ皇子と思わ
れるな。

人海戦術は相変わらず取れないし。

「本気で出奔を考えるか？」

思わず苦笑い。

デインの剣も無く、皇子の肩書きもない、ただのアルム。

その響きだけで、急に心細くなるから不思議だな。

反面、好きな事をやり放題出来るという……何だろうな、コレ。
例えると、人間は飛べずに地を歩かなければならないを”不自由”
と仮定して。

翼を得て解き放たれた状態を”自由”と仮定すると……逆に選択
肢が多すぎて、余計に不自由に感じるといふ……うん、そんな。
イマイチ、理解してもらえないか。

「と、言っても最終的にはいらなくなる肩書きなんだから……
さっさとヤメちゃおっかな、皇子。」

座っていた椅子の前脚を上げて、プランプラン。

考えが全く前に進んでいない。

珍しいなあ……勢いも出ないなんて。

皇子辞めたら、誰かついて来てくれるかな……。

「んあーっ！もう、わからん！わからんもんはわからん！」

叫んでも何もわからないのだけは、わかるな。

「何がわからないんだ？アル。」

来たよ、無駄な美声。

「また来たんですか、兄上？」

金髪・蒼眼。

ヴァンハイトの血を体現した容姿。

「アルがまた面白そうな事をしでかしてくれるんじゃないかと、期待してな。」

爽やかに微笑む様はザツシユのそれを圧倒的に上回り、美しさすら感じさせる。

この笑みには慣れ・・・免疫が必要だ。

「はいはい。どうせ、オレのやる事なんざ、兄上からしたら子供の遊びか、悪戯の範疇でしょうよ。」

椅子の前脚を上げたまま、両手を上げる。

コレ、高等技らしい。

昔、バルドに体幹を鍛えられまくられたからな。

エルフの森でグラつきはしたが、転倒しなかったのはコレのお陰だと思う。

「意外性と実用的かつ効率主義なのは良い事だ。だから現地の役人には支持されているだろう？」

褒められたのか？

いや、まさか。

この人が単に甘いだけだな。

オレが病に倒れて過保護になったのは、ミランダだけじゃなく兄上もだったから。

「ま、オレがダメ皇子という貴族達の評価より、貴族姓を持たない民達の方が大事なもの。」

目下、全ての手柄は兄上とカーライルにそっくりそのまま渡したから、オレの評価も支持率も低いままなんだよね。

「全く。アルの事を知りもしない貴族達の評価など取るに足らないだろう？」

流石、弟馬鹿。

きつと、そういう貴族は兄上の視界にすら入ってないんじゃないだ

ろうか？

それもそれで問題な気もする。

「今回だって、アルが自ら先頭に立って、私は一口も嘔ませてもらえなかったし……。」

あ、それが本音。

何だソレ。

それでも貴族達の言う、”シグルド皇太子の劣化代替品”という立場は果たせた。

ちなみにコレは兄上には”禁句”な。

それにエルフの森の民の一部はある程度を理解を示してくれた、同じように城にいたカーライルの部下達も。

それで充分過ぎる程だ。

「何より、以前見せてもらったつきり放棄していた”爆発する粉”を実用化させたとか。」

あ……。

全力で目線を逸らすオレ。

「スクラトニーが大金を注ぎ込んで作らせた兵器と同程度だと聞いた。それを大分前から編み出したアルは、やは凄い。」

ぐっ……スクラトニーの兵器はバルドに壊させたし、他の者にも口止めしたのに！

誰だ！喋ったヤツ！今すぐ出て来いっ！！

「ア、アレハ、記憶カラ抹消サセテ下サイ……。」

出来れば永遠に。

「人殺しの道具にもなるもんなので……。」

「ふむ。」

兄上はあっさりとな得したようだ。

いいんだろうか、こんなにも弟の言う事を丸呑みで。

「次は、私も仲間に入れてくれるか？今度は何だ？」

兄上はうきうき気分で、オレが広げたままにしていた地図を覗き込む。

「今度は国境付近の砂漠地帯周辺に興味があるのか？」

ああ、無駄に子供みたいに瞳をキラキラさせてっ！

「アル、どうやら今回は、私も一枚噛めそうだぞ？というか、正しくはアルが一枚噛むかな。」

兄上の情報網は広い。

砂漠地帯で何やらあるのか？

しかも、兄上が出張りそうな問題が。

でも、それって・・・。

「兄上の”双刃の白獅子近衛師団”が出張るより、オレのが適任てロクな事じゃないような・・・。」

兄上の直属の近衛騎士団、例の双剣を掲げた白獅子の旗の一団の事な。

あれは、選りすぐりの部隊だ。

「アルの好きな様にしても良い事案で、且つ面白さはアル好み。どうだ？」

くそう・・・楽しそうだなあ・・・何を期待してるんだ？兄上は「詳しいハナシを才願イシマス。」

こうして、砂漠に向かって旅立つハメになったワケである。

Blade！ 皇子は得物を探す。【前】（前書き）

？・？ 章の展開の間延びを少しでも抑えられるといいなあと、
詰め
気味を・・・無理か・・・。

Blade！ 皇子は得物を探す。【前】

「しっかし、この砂漠のド真ん中に都市があるのが驚き。
国境のど真ん中にある砂漠。」

正確には砂漠があつたから国境になつたんだが。

ほら、誰も国境付近が砂漠なら侵攻しづらいだろ？

もし、侵攻してもこんな砂漠を得ても何の利益もない。

軍隊が駐留するのだから、莫大な費用がかかる。

お陰でこの地は、ほぼ中立状態で国境にして棚上げてワケ。

ここだけに限らず、大抵の国境線は火山地帯だったり氷原だったりする。

「オアシスがあるからなんですって。」

キヨロキヨロと周囲を見回しながら、興奮気味な声をもって報告してきたのはミリイだ。

今回の旅は、ミリイを連れて行く事にした。

勿論、これにもそれ程には深くはないが理由がある。

いや、あるんだって、本当。

「あんまりキヨロキヨロして街ではぐれるなよ？売られちゃうからな。」

「ひゃいっ！」

ちよっぴり驚かせただけで、この反応だもんな。

少し先が思いやられる。

オレの目的にとっては、ミリイは足手まといに近いんだが、兄上の好きにしてもいいという言葉の揚げ足をとっての犯行。

「おっちゃん、少し見てもいいかい？」

「おっつ、見るのはタダだ。」

流石、商人。

この街は、交易の中継地点としてオアシスの横に造られた街だ。
ここなら、砂漠を半分だけ越えただけで商品を卸せる。

まあ、中卸しの街だな。

砂漠を全部越える費用と中卸して安く売るとの天秤にかけた結果がコレ。

・・・まあ、もう一つ栄えている理由があるんだが・・・。

「坊主も”例のアレ”に行くクチかい？」

愛想の良いオヤジがオレに気さくに話しかける。

この街は、活気があっていいなあ。

リツヒニドスもこうなって欲しいものだ。

オレが覗いた店には、所狭しと武器類が並んでいる。

「まあね。入ったらこう買いい物にもちよくちよく来られないから、買い溜めしておこうかなと。予備とか。」

ディーンの剣が無くなってから、別の武器を手取る気もなく、オレの元には一本の長剣しか残っていなかった。

剣は手入れさえきちんとしていればそうそうダメになるものでもないが、流石に神器と比べれば摩耗する。

「成程なあ。得物は何だい？」

得物・・・。

深く考えてなかった。

この際、得意ではなかったりする物にも手を出してみようか？
何しろ、今は自由だ。

「とりあえず、双剣をまずは。」

「お？”ヴァンハイト”の出身かい？」

このやりとり、絶対後々何度もやって飽きるな。

「まあね。」

「何かクセとか拘りはあるかい？左右対称とか非対称とか。」
勉強しているな。

意外と細かいところの対応が可能らしい。

「対称・非対称問わないよ。比重差もある程度なら大丈夫だから。」

刀身は1キュビト以内におさまるなら、左右の差があっても大丈夫。

「

実はオレ、右利きのハズなんだけれど左手の方が筋力があって、純粋な力だけなら左の方が強い。

だから、差があっても大丈夫と言えば大丈夫。

両手剣や槍に至っては左手主体で使った方が楽という、器用なんだが不器用なんだかわからん仕様。

「・・・お客様、製法や原料に拘りはあるかの？」

オレが店のオヤジの質問に何気無く答えると、奥から白い髭をたくわえた老人が出てくる。

「オヤジ！またそうやって突然に！すみません、お客さん、このオヤジはこうなもんで。」

不躰な質問を発した老人の事で、オレにしきりに謝る店主。

「・・・個人的には鑄造じゃなくて、鍛造で。原料は・・・値段次第だな。だが、銅の割合が低い方がいい。」

簡単に言つと、鑄造は金属を溶かして型に流し込む製法。

対して、鍛造は熱した金属を叩いて形にする製法。

「お客様。」

問われた事にちゃんと返答したオレに対して、鋭い眼光で睨む老人。

「私共はこれでも、お客様方に合う盟友をお渡しして信頼を得てまいりました。それが私共、武器を扱う商人の誇りです。」

何やら口調が・・・怒っていらっしやる？

「ですから、そのように不誠実に嘘をつかれては、こちらもお客様に合った本当の友をお渡し出来ません。」

「あのなあ、オヤジ。」

「お前は黙ってなさい。この方の剣は、私が責任を持って選ぶ。」

持っていた杖をビシッと自分の息子に突きつけると、クワッと目を見開く。

怖いっての。

その迫力に負けたのか、濟まなそうな目線をオレに向けてくる店主。声を出さずに唇を大きく動かして作ったカタチは『ヤ・ス・ク・ス・

ル・カ・ラ。』

・・・生け贄か？オレは。

「いや、確かにオレが悪かった。実はとある事情で愛剣を失ってね。半ば呆然自失状態でこの街に入ったんだ。」

話さない事と嘘は別だよな、うん。

「何と！それは御心中察せなくて申し訳ない。して、剣の損傷具合は？」

急に優しくなったな。

そりゃ、剣を戦う者の友と位置づけて売っているくらいだもんね。

「それが・・・奪われてな。実はこの旅のもう一つの目的がソレを探すというものでもある。笑うか？だが、物心付いて10年は使っていたんでな。」

言葉に出すと、今頃になって涙が溢れそうになった。

「アルム様・・・。」

じつと成り行きを見ていたミリィが声をかけてくる。

いやだなあ、最近、涙脆いや。

Blade！ 皇子は得物を探す。【後】

結果として、オレの様子を見た前店主のご老体が俄然に張り切つてしまったという。

「しかし、益々けしからん！最近は何れも剣を芸術品のように扱い過ぎくらいかんのじゃ！」

大丈夫かな？

ポツクリ逝つたりしないかな？

「武器の美とは、計算尽くされた実用性を突き詰めた事による洗練だという事を理解できぬとは……。」

どうしよう……何処で止めに入ろう……。

「そもそも、完全なる美とは、武器と使い手が合わさる事で成立し完成するのじゃ！」

「奥が深いんですね。」

「おうおう、お嬢さん、若いのにそれが解るとは感心、感心。」

ミリイ……変な合いの手はいらんで。

仕方なく盛り上がる（？）二人を横目で見つつ、店内の剣を見る。

一応、双剣は必ず買わなくちゃいけない、あとは長剣を予備を含めて二振り・三振りは欲しい。

エルフの森や城での戦闘で思ったが、長剣を二振り腰にさして時に双剣のような扱いを視野に入れた形が一番しっくりくる気がする。

双剣は双剣、長剣は長剣で別々に考える必要も特になんじやないだろうか、オレの場合は。

バルドには一通り仕込まれたしな。

何だかんだ言っても、オレも”ヴァンハイト”だよな。

この血から逃げられるものでもない。

手頃の握り易そうな剣を持つては、戻しを繰り返す。

「お客様、これを。」

ふと、ミリイとの会話を終えた老人がオレに一本の木の棒を渡す。

「お客様、本当は双剣より長剣程度の長さの方が得意なのでしょう？」

この老人、流石。

「これを持って構えてみて下さい。」

老人に促されるままに構えを取る。

流派とか良く知らないんだよな。

きつとバルドに聞いたら、”バルド流”とか答えられそうだし、答えられてもイヤだ。

「ほお。」

人に見られて、木の棒を剣に見立てて振るとか・・・何やら幼い子供みたいだな。

「お客様、盾はお使いになりますかな？」

「一応。円盾を。」

質問はこれだけだった。

老人は店内をうろつろと一周し、オレの所に戻ってくると三振りの長剣を広げる。

「この辺りがオススメですが、説明致しますか？」

首を振って、一本一本を抜いて握る。

どれも多少のクセがある代物だが、成程、それはオレのクセと合っていて短所というような部分が相殺される。

これが、さっき言っていた”武器の美”の一端なワケか。

形的にはディーンの剣に近い印象のモノが多い。

特に一振りだけ刀身が細く、片刃状態のディーンの剣に近いが両刃という剣もあった。

イトコ突いてきやがるよ、全く。

「この細いのと、少し反りが強めのその剣を頂けるかな？あと下取りもやってる？」

細剣より幅広く長剣より細い刀身の剣と、長剣の長さで双剣のよくな少し反りがある二品を選ぶ。

モノの良さで二振りあれば十分に感じるし、今持っている剣はこの

二振りに比べて圧倒的に劣る。

オレは、下取りに出す剣を背負っていた荷物から、老主人に渡す。

「そうですね、これですと・・・こんな感じで・・・。」

オレの手の平に指で書かれる値段。

「つて、御老体、いいのか？」

老人が示した金額は相場にして、中級の剣一本半分の値段。

この二振りなら、合わせて三本分の代金を最低限取られてもおかしくない。

というか、それくらいは余裕で取られると思っていた。

つまりは、下取りの金額も剣の金額も破格値。

「剣だけは、行く者の所に行くもんで、こればかりはワシ等には止められん。」

老人は下取りの剣をさっさと店の奥にしまうとそう答えた。

「それに・・・。」

「それに？」

「昔、若い時分にな、同じ様に剣を買いに来た少年がおつての。」

「ワイワイ、急に遠い目に・・・。」

「似とるんじゃないよ、構えが。お客様の方が少し前傾姿勢で速さ重視な印象があるが。」

「・・・まさか・・・まさかじゃないだろうな・・・。」

「彼も”ヴァンハイト”に行くと言っておったからな。コレも縁じやて。」

どう考えても・・・あのクマな気がします。

オレは色んな意味で、師弟揃ってかけてしまった迷惑を返すつもりも含めて、他にも短剣や投擲用の短剣を買った。

だって、そうでもしないと気が済まないだろ？こりゃ。

偏頭痛のようなものに悩まされながら、代金を支払うと紙キレを老人に渡された。

「これは？」

「少し値が張るが、特殊なモノを売っている店への地図じゃ。そし

て、これが紹介状。」

地図と一枚の紹介状。

「双剣と、もう一本くらい長剣。運が良ければ盾も揃うハズじゃ・・・
ちと、店主がアレじゃが。」

アレって何だよ？

アレとかそういう抽象的なのをヤメて欲しい。

だが、正直ここまでの至れり尽くせり。

これはもう行くしかないじゃないか！と叫びそうになる程。

「ありがとうございます。この街にいる間は、手入れもここにしますから。」

もう常連になるしかないよな。

あの師匠の分も。

感謝に感謝を重ねて、店を後にする。

「面白かったですね！」

「そ、そお？」

何が面白かったんだろう、ミリイは。

「剣の構えをしていたアルム様、格好良かったです！」

あれ？

オレが剣を振るうのって・・・ミリイ見た事なかったっけ？

あれ？あれれ？

・・・ないのか。

「そうか・・・ありがとう。」

複雑な気分だけれどな。

「あー！何だか、人だかりが出来てますよ！行ってみましょう！」

「って、お、おい！」

ダメだ完全に興奮しきってる。

・・・仕方ないか・・・一般人がこんな遠出するような事ってない
もんな。

ヤレヤレだ。

Connect! 皇子はその手を離さない。【前】

オレを引つ張っていた手を離し、最後には人だかりに突撃しだしたミリイを尻目に人だかりの一人に声をかけた。

「何があるんです?」

「んー、何でも、賭けの決闘だか何だか。」

決闘?

穏やかじゃないな。

つか、見物人の証言がはつきりしなから、イマイチよくわからないが。

「決闘って・・・この街じゃよくあるんですか?」

「ないない。だから、人だかりが出来んだろ?」

・・・そうだね、うん、ごもつとも。

オレは仕方なく先行したミリイを探しながら、人ごみを掻き分けだつ、あだつ、足踏まれたし。

「全くミリイは後先考えずに・・・ホリンに似てきたんじゃないか?」

オレはようやく人ごみの前列にいたミリイを見つけて、襟首を掴む。

「アルム様・・・。」

オレを振り返って、困った表情をするミリイ。

何だ?

見ると、二人の男女が互いに向かい合っている。

その真ん中には、中年のオヤジと薄汚れた服を着た少女。

・・・流れがわからん。

「なんですか?コレ?」

思わず横にいた見物人に聞く。

「ん?ああ、役売りに女がつかつかかって、その女に男がつかつかつたらしいぜ。」

役売り・・・ああ、奴隷売りか。

ちなみにヴァンハイトじゃ、人身売買は違法だ。しかる人権と最低限賃金を保障している。

まあ、労働者斡旋という形に変化して、この役売りという商売が現れ始めたんだよな。

奴隷も逃げて役所に訴えるなんて、本当に命がけだから、やる奴もいない。

形骸化された法になってきている。

「しまった・・・。」

リッヒニドスで定義を定めて厳罰化するのを失念していた。

これは早急にカーライルに相談しなくては。

「んで、突っかかったのは？」

「女の子の余りの扱いに怒った娘に対して、男が何か言い出したのよ。」

今度は違うおばさんが、教えてくれた。

「アルム様・・・。」

うん・・・。

悩んでいる間に金の量ある髪を腰下まで伸ばし束ねた女性が、自分の得物を持ち出す。

長い杖のような棒の先についた斧。

「槍斧使い・・・。」

相性悪いなあ。

そうこうしているうちに藍色の髪を肩口まで切り揃えた男も、自分の得物の細剣を持ち出す。

力と速さの対決か。

ていうかアイツ等、馬鹿か？

両者共、剣（一人は斧だが）を抜くという事の意味をわかっていない。

死んだら、全部お終いなのに。

ふと、ミリイがオレの服の裾を掴む。

「はあ・・・ミリイ、約束した事を覚えてる？」

「・・・はい。」

その割りには、”アルム”という名前を連呼していたような。

”次から”ちゃんと守るんだよ？”

守る約束には、こういつた事には首を突っ込まないってのが含まれていたんだがなあ・・・。

オレ、甘いのかなあ、もう。

自分の荷物をミリイに預け、まさに激突しようとしていた二人の間に一枚の金貨を指で弾き入れた。

二人の間で、くるくると回転しながら落ちてく金貨。

強制的に視界に入れられたソレに思わず反応してしまう二人をよそに、オレは得意の瞬間加速で一氣に間合いを詰める。

二人の中央辺りの距離に立つ中年オヤジの前のだ。

そして、四人がきつちり反応してオレを見つめる中、有無を言わず金貨三枚をオヤジに突きつける。

「コレで、そのコを買おう。足りるな？」

呆気にとられた後、全力で首をぶんぶん縦に振るオヤジに金貨を渡し、少女にオレが羽織っていた外套をかける。

思ってた以上に細い。

完全にやつれきっている。

確かに扱いが悪かったんだろうな。

きつとオレがこの子を買った金貨三枚は、あのオヤジにしたら破格値だったんだろうな。

ま、命の幾つか分得したならいいか。

第一、額を度外視したら、既に武器屋で一回得しているしなあ。

「はい、皆さん！三人目の大馬鹿が登場して大損こいて、今日も世界は平和という方向で、お話は終わりってコトで！」

一瞬で静まる観衆。

「・・・ダメだった・・・かな？」

「いよっ！平和を愛する男！」

誰かの声は何処からかあがる。

「あはは、財布の中身大丈夫かいつ？」

また声が。

「ウチの店なら安くしとくよー！」

「酒一杯ならおごってやらあつ。」

口々にあがる声。

何だかんだで、陽気だなこの街の人は。

どうやら観衆は、流血沙汰による事態の終結は望んでいなかったらしい。

ちよつと汚い気はするが、ミリイの心配の二つは消せた。

オレ的には、今のところはこれで満足。

Connect! 皇子はその手を離さない。【前】(後書き)

皇子は”平和を愛する男”の称号を得た。(某RPG風に)

Connect! 皇子はその手を離さない。【中】(前書き)

私信：十夜ちゃん、お誕生日おめでとう。
愛しているよ

Connect! 皇子はその手を離さない。【中】

「立てるかい？」

余りに痩せ細った少女を見ると泣けてくる。

これが好き放題やって、特権意識に凝り固まった者達が生み出したモノだと思つと……。

ひいては全て皇族たるオレの責任だ。

「ごめんな……。」

思わず口をついて出た言葉は、誰に向かって言ったんだらう？

「後で、替えの服をあげるから、今は我慢してね。」

無言でオレを見つめる少女。

理解してるよね？

まさか、言語能力が低いとか……何処まで教育を受けているんだらうか？

「ミリイ。」

少女の扱いに困って、思わず呼んでしまった。

観衆は既に大半が解散している。

「行く所が増えたから急ぐよ。」

この子の服と、剣と、宿か。

面倒事は回避したかったんだがな。

「待て。」「待ちたまえ。」

だから、回避したいんだってば。

わざと無視というか、視線すら合わせないようにしてたのに。

「はぁ……。」

聞こえないくらいの小さな溜め息をついて、仕方なく二人の男女を見る。

二人共、水をさされたせいか面白くなさそうにしているのはありありと理解出来た。

「何か？」

とりあえずは反応してみよう。

「何故、邪魔をした？」「何故、あの子を買った？」

二人の質問は全く違った。

前者が男の方で、後者が女の方だ。

どうやら、二人は別々の理由で面白くないらしい。

「えっと・・・どちらの質問から先に答えればいいのか・・・。」

このまま曖昧に誤魔化したい。

「何故、事情も知らずに大金を出してあの娘を買った？」

女の方が身を乗り出して強調する。

その手からは、槍斧は離されていない。

「うん、知らないな。君達の事情をオレが知らないように、オレの

事情も君達は知らないだろう？公平だ。」

屁理屈で煙に巻けるといいなあ、なんて。

「それに大金というが、人の命が金貨三枚は大金か？」命”だぞ？」

でもさ、後者は違うよな？

オレは間違っていない。

それが少しカチンときてる。

「君は・・・観衆から聞いたが、彼女の扱いに怒ったのだろうか？怒

りを覚えるなら、君が買えば良かった。」

そついう手段だってあつたはずだ。

「それを大金と思って君は買わなかったのか？だが、オレは買った。

」

「それは！」

「懐事情もあるだろう。あの役売りを豊かにするのが嫌だったかも

知れない。でもそれは手段に過ぎない。結果、彼女はオレのモノだ。

」

やべえ、今のオレ、悪役っぽくない？

「もしオレが役売り以上の悪人だったら、君はその大金を渋ったが

為に、手段を選んだ為に結果は彼女は救えなかった。」

残酷だが事実だ。

いや、決闘に巻き込まれるのは嫌だったけれど、彼女を買った事には後悔は全然ないよ？

ミリイの頼みでもあったし。

「オレを偽善と貶したければ、貶せばいい。何せ、オレには自覚あるしね。ただ決闘している時点で既に間違っているとは思うが。」

はい、会話終了。

意外と素直に聞いたな。

「ええと、何故、邪魔しただっけ？邪魔しないよ、どうぞ？勝手に決闘やってどっちか死ねば？もしくは相討ちで両方でもいいよ。」

オレは二人から少し距離を取る。

「何？」

ギロリとオレを睨む。

「だって、二人共抜いたんだから、覚悟の上でしょ？そんなくらい。」

だからコイツ等は馬鹿だったんだ。

こんな事が出来るのは人を殺した事のない人間くらいだよ。

「誰にも迷惑のかららない所で、さっさとやって死ねば？決闘なんてそもそも見世物じゃないし。」

命ってそんな事で消費されるべきもんじゃないよな？

オレだって、人を殺しているけれど自分が殺して当然とは思っていない。

奪えば奪う程、いつか自分もそうなるって思っている。

怪我だつてしまくつたし、倒れたしな。

しかもつい最近。

「中断したのは悪いと思ってる。すまない。お詫びにその金貨あげるから、死んだ方の葬式代に使ってくれ。墓標がないのは寂しいからな。」

オレは言うだけ言って、反論がないのを確かめるとさっさとその場を去ろうとした。

「待て！」

まだ何かあんのかよ・・・萎える。

「私の名はアイシャだ！せめて名を！名を名乗れ！」
えー。

それで解放してもらえるのなら・・・いいか。

「オレの名前は”トウマ”だ。」

オレはそう彼女に告げて、その場を今度こそ後にした。

Connect! 皇子はその手を離さない。【中】（後書き）

皆様、活動報告でもコメント受け付け中です、はい、お気軽に。
実は、こっそり違う話を練習書きしてみたりしてます、あはは。

Connect! 皇子はその手を離さない。【後】

「なんとかなつて良かったですねー、アルム様。」

オレは無言で（手加減した）拳骨を彼女の頭に落としていた。

「あうう〜。」

「約束。」

「すびばせん、”トウマ”さん。」
偽名。

オレは今回、偽名で行動する事になった。

そこで思いついたのが、この名前。

ちよつと風変わりな感じがするが、”トーマ”という名が多い国もあるのです。”トウマ”は少し訛っている程度にとられるくらいだ。

「あ、素直にトウマって名乗る必要なかった……。」

本当、肝心な時に又ける。

もつと冷静でいるようにしなくては。

さっきの二人の事を言えないな。

「ん？」

見ると少女が首を傾げている。

「今、オレはね、本当の名前を名乗れないんだ。だから、トウマって呼んでね？」

すると首を横に振る少女。

「何がダメなんだろうっ？」

「さあ？」

意味が掴みかねん。

「う〜ん……そうだ、君の名前は？」

無反応。

「無いの？」

首を横に振る。

まだるっこしいな。

「じゃ、何て名前？教えてくれないかな？」

すると少し考えた後、唐突にオレの手を取ろうとする。

「ん？どした？」

腕を引つ張るなつて、何をしたいんだ？

名前を聞いただけで……？

そういえば、彼女……一度も声を発していない。

「もしかして……喋れない……のか？」

コクリとようやく首を縦に振る。

金貨三枚で大喜びだった役売りのオヤジ、扱いに怒った女。

つまりは、そういう意味だったワケか。

「生まれた時から？」

あ、違うんだ。

「困りましたね、トウマさん。」

今度はちゃんと呼べたな。

「そう？」

意思疎通は確かにしにくいが。

「ねえ、声は出さなくていいから、自分の名前を口を大きく動かして

みて。」

また少し考えて、ゆっくりと口を動かし始める。

「ソ？あ、違う。オだ！うんうん、で？イ？ミ……りね。んで・

・・エ。」

「オリエちゃん？」

コクリ。

「やった。オリエね。んじゃ、これから服を買いに行くからね。可

愛いの沢山買おう！うひょあーいつ。」

オリエを抱き上げて、全速力で駆け出す。

持ち上げた瞬間の彼女の軽さと、肉よりも骨の感触ばかりがオレの

腕に伝わるのに、齒を食いしばって耐えた。

じゃないと泣くか、叫ぶかしてしまいそうだったから。

「待ってくださいよー!!」

後ろでミリイの声が聞こえて、オレはその場でくるくると回転してみる。

畜生・・・軽いぜ、軽過ぎるんだよ！

「オリエ、今日から、オレがお兄ちゃんだからな。いや、お父様でもいいぞ」

わけわかんないのは、理解してるから。

してるけど、オレは他にどうしたらいいんだよ、全く。

とにかく今は服屋に駆け込む。

それしかない。

「・・・ミリイ、下着選んであげて。」

くそう・・・のつけから挫かれた。

だつてなあ・・・買った少女に、自分好みの下着を着せるとか・・・。

ダメ皇子から、ダメ人間とか外道人間に格上げ(?)されそうだし。服屋に入って、ミリイが下着・肌着を選んでいるうちにオレは服を選ぶ。

正直、勢いに任せて、『この棚、ここからここまで全部。』とか言ってしまうそうになったが、そこは気力で耐える。

普段着を六着、作業着二着、運動着二着、夜会や宴会用も三着買った。ちやうぜ。

あと夜着な。

ウチの侍女みたいなの着られても困るからな。

女の子だから、絹とかの買っちゃえ。

ミリイの分も普段着と夜着を・・・これ、胸入るかな。

なんだかんだで、二十着近くを買って、支払いを・・・。

「お？」

目の前に金貨が二枚。

「服代と、トウマさんのお金。」

その代わりに支払いのお金を出しているのは、さっきの決闘女だった。

「なんだ、お金持つてるんじゃない。」
自分でも嫌味だと思ったださ。

「先程は申し訳ありませんでしたわ。私、頭に血が上ってしまっ
て。」

口調を聞いて、ちよっぴりげんなり・・・本当に血が上ったら、
頭悪くなる人間だったらしい。

オレはてつきりラミア姫寄りの性格の方なのかと・・・。

「いや、いいよ。オレも恥かかせただろうしな。だから、このお金
はいらないよ。」

当然だ。

元オレのお金はいいとして、服代はいらん。

そんな義理もない。

「しかし、せめて何かお詫びに。」

オリエの後姿をちらりと見ながら言われてもな。

ぐぬぬ・・・このテの人間は、誇り高くて我侭もだったり頑固だっ
たりするから、アレなんだよな。

なかなか引いてくれないんだ。

「ふむう・・・じゃ、こうしよう。」

オレは服代を金貨一枚で支払い、釣りを貰う。

「んで、オレが渡したこの金貨で、君の服を見繕わせてもらって、
君の服を買おう。」

二人分の服代と一人分の服代じゃ、圧倒的に釣りの差が出るが
そこを問わないってのが大人つてもんだろ？

「そちらが、それで宜しいのでしたら。」

良かった、この妥協点で折れてくれて。

オレは早速、彼女の服を見繕わせてもらう事にした。

Connect! 皇子はその手を離さない。【後】(後書き)

今度は、本当に中身も幼女な新キャラ、オリエちゃんの登場です。

まあ、無言キャラの表現というのは、死ぬ程大変ですが。

果たして、皇子は罪悪感以外のモノを彼女に抱けるのでしょうかね

(苦笑)

Discover! 皇子は衝撃にただ苦笑する。【前】

意外と楽しいという事を発見してしまった・・・。

やっぱり以前思った、皆を着飾らせてあげたいという気持ちが強くなったよ。

ちなみに二人分、しかも一人分は丸ごと一式にかかった費用と決闘女一人分の費用では、かなりの差があった。当然、お釣りは全て彼女に。

「さてと、さつさと次へ行くか。」

いい加減、荷物が重くなってきた。

「オリエは、入浴してから着替えようね。もうちょいガマンだ。」

彼女の髪は薄汚れていて、一刻も早く洗い流してやりたいのが本音なんだが、あと一軒だけ。

折角紹介してもらった好意も無駄にしたくない。

「君はどうする？あー、オレ等はこの街のちょっと特殊な武器屋に行くんだが。」

「特殊な、ですか？」

首を傾げられてもな。

「想像なんだが、多分、銘入り製とか・・・いわゆる付きとか・・・いわゆる付きとか・・・。」

想像だよ、あくまでも想像。

ともかく少しでもデイーンの剣に対抗出来る武器を探さないと。

「あの、既に二振り、それも素晴らしいモノをお下げのようですが・・・？」

ああ、そうなんだよ、コレも中々の業物なんだが・・・。自信がない。

多分、何合も打ち合えないと思っている。

それくらい、相手の力量差を無視した切れ味なんだよ。

「十分もつかな、一振り。」

「え？」

「いや、何でもないよ。色々と準備したくてな。」

「一緒に行っても？」

「構わないよ。」

そうとなつたら、さつさと行かないと。

地図を見ながら、テクテクと・・・あー・・・どンドン本通りから離れて行く。

「ミリイ、オリエ、離れるなよ。」

多少の警戒を込めながら進んで行くと、確かに武具屋らしき佇まいっぽいボロ小屋が。

「うん、妖しさが想像通り過ぎて、逆にしつくるくるわ。」

そこそこに小奇麗にしているが、いかんせん小屋自体がボロいせいか効果が薄い。

だが、何だろう？

子供心の何かをくすぐる佇まい。

ちよつとウキウキ。

「ちわー。武具屋の御老体からの紹介で来ましたー。」

何の躊躇いもなくずかずかと足を踏み入れる？

「あん？客うー？しかも、おジジの紹介？二重三重に珍しいねこりや。」

中から出て来たのは、真紅の下着姿の女性。

赤い髪をバツサリと短く切り揃えていて、身長はオレより高い。

というか、この中の誰よりも・・・いや、平均的な男性の身長よりも高い。

「はい、これ紹介状。」

後ろの三人が固まる中で、彼女に紹介状を渡す。

「アンタ、この格好に驚かないんだね？」

女性の裸体や下着姿は、何回見たかなあ・・・この期間。

どちらかというと、今は目の前にあるであろう宝箱へのワクワク感のが高い。

「お姉さんが美人ですっごいってのはわかるんですけど、何とかガキなんで、好みの武器を見つけれられる期待感が……。」

「あつはつはつ、正直だね。確かにここは武器屋だもんな。」

豪快に笑う女性は美しいというより、格好良い。
ふと視線を後ろに移すとミリイが、一振りの剣を手を伸ばそうとしていた。

「ミリイ、それはダメだ！」

「ひっ！」

思わず大声を狭い店内で出していた。

でも、何か……。

「大声出してごめん……でも、何かその剣は嫌なカンジがする。」
デインの剣を握っていたせいも、こういうモノに対する勘が鋭くなっているみたいだ。

アレは神器だからなあ、格が違う。

「ほお、おジジが紹介状を書くワケだ。ここはオジジと私が集めたモノを置いてあるんだ。」

ニヤリと笑いながら説明を始める。

「昔の時代に術をかけたものや、呪いだ何だと敬遠されたものもあるから気をつけな。」

そりゃあ、おいそれとは売れない特殊なもんだ。

店内をぐるりと見回す。

勘は鋭いからダメなのはわかるが、感知能力は無いからなあ。

そっとうのが得意な人達もいるけど。

「うん……。」

何だろう？

色々とも見ても違うんだよなあ。

デインの剣級とまでは期待してないけれど、オレに合いそうなのがぱつと見で見つからない。

これはオレが悪いんだらうか？

「どうしたんだい？」

興味深そうに聞いてくる女店主。

「手にとる勇気が湧かないかい？」

「いや、今迄使っていた愛剣のようにしくりきそうな感じがしなくてね。」

全然使いこなせてなかったけどね。

「ふうん。余程、凄い剣が魔剣だったんだね。」

魔剣だったのかね、アレは。

「ま、長く使うもんなら、じっくりと納得いくまで選ばないかね。」

「ですよ。ん？どした？」

ふとミリイの傍にいたオリエが、オレの横にいる。

ああ、そうだ喋れないんだから、しゃがんで目と口を見ないとな。

「って、何？何？」

しゃがもうとしたオレの袖を引っ張る。

なんだろう？

「一緒に来てもらいたそうですわ。」

オレ様子を見て、そう告げる。

「そうなのか？」

コクリと頷くオリエに、オレは従うことにした。

Discover! 皇子は衝撃にただ苦笑する。【後】

一体、何処へ？

て、まあ、そんな広い店内でもないが。

「ん？ん？」

数歩、進んですぐに立ち止まる。

何だろう？オレ未っ子だからな、下に妹とかいれば多少はわかるんだが。

「何を見せたかったんだ？」

オレは今度こそしゃがんで、オリエの目線の先に合わせようとする。

「どれ？」

じいっと数本の剣を見つめたままのオリエ。

「これ？」

首を横へ。

「じゃ、これ？・・・も、違う。」

指をさす折絵に対してアレコレ聞きながら。

手間はかかるが仕方ない。

これをひっくるめてオリエだしな。

「あ、コレ？」

ようやくオリエが首を縦に動かして、一振りの剣に辿り着く。

単純な造りの長剣。

全体的に刀身の幅は、普通の長剣よりやや細い。

年代が古いのか、鈍い銀色をした金属でかなりくすんでいる。

柄は細い長方形の単調なモノで、左右は完全な線対称の形。

剣全体が一本の金属の棒のような鑄造型だ。

「コレ、格好いい？似合う？」

剣と試しに腰にあててオリエに見せると、こっくりと頷いて軽い拍手をも頂けた。

「おし、じゃあ、まずコレだ。」

「そんなに簡単に決めちゃっていいんですか？」

驚き半分、呆れ半分でミリィに苦笑される。

「オリエの女の勘を信じようじゃないか。折角、オレの為に選んでくれたんだしなー？」

オリエに同意を求めるとコクコクと何度も頷く。

「本当に可愛いなあ、オリエは。」

ダメだ。

もうオレ、ベタ惚れ。

舞い上がってます、はい。

一応、オリエの選んだ剣は、手に取るとしっかりと馴染んだには確認したよ、勿論。

「お？」

再びオリエが袖を引っ張る。

「今度はなんだ？」

まだ気になるモノがあるんだろうか？

「コレって……。」

次にオリエが示したのは、緩やかな湾曲の線を描く刀身の剣が、一対。

「オレに……コレ？」

思わずオリエに聞き返す。

だって、オレ、彼女の前で一度も双剣を買ったとか、使うとか行っていないよな？

言っていない。

じっと彼女の瞳を見る。

「オリエは、オレに似合うと思ったの？」

首を傾げるオリエ。

彼女自身もよくわかっていないという事だろうか？

「とりあえず、コレがいいと思ったんだね？」

彼女が頷くのを確認すると、オレは意を決してその剣を買う事に

した。

「えっと、お姉さん！コレ、明日の朝までに使える様に来る？」

振り向いて女店主に声をかけると、視界一杯に下着姿のお尻が……。

「ん？何だって？どうした？」

「いえいえ、素敵なモノが視界に入ったもんで……。」

「ははーん、なかなかどうして珍しいね。アタシの尻に欲情してくれるなんてさ。」

「よ、欲情って……。」

ニカッと笑う白い歯が眩しい。

「こんな筋肉質の大女の尻見たって、つまらないだろ？」

確かに大きいな。

お尻がじゃないぞ？

平均より体格は大きいし、筋肉もついてて引き締まってる。でも、それが格好良いんだけれどな。

「それはそれで格好良くて魅力的かと。」

オレの端的な評価は、そんな感じ。

「物好きだねえ。抱いてみるかい？」

ああ……女性は皆、時に狩人になるってコレか。

「それはそれで興味がそそられはするけど……。」

「ダメです！トウマ様！ミランダさんやレイアさんやホリンさん、シルビアさんにだって言いつけちゃいますよ！」

ミリイ、それ反則。

「ラミアさんや、サアラちゃんにも言っちゃうんだから！」

何故、その二人まで……。

名前をトウマと言えただけマシか。

「意外とお盛んなんじゃないか。」

「違います。姉が二名と従者二名と、妹と馬鹿一名です。」

誰が何処に分類されるかは、想像に任せろ。

「何だい、そりゃ。んで、お願いするとそこに入れるのかい？」

苦笑しながら、女店主はミリイに問う。

「入れません！」

爆笑された。

「とりあえず、コレなんだけれど、明日の朝までに頼めるかい？」
話を打ち切つて、元々の話題に強制的に戻す。

「ん？ああ、大丈夫だよ。」

それから代金の交渉をして前払いを済ませ、オススメの宿を女店主に聞き、部屋を取った。

一部屋で済まそうと思っていたが、予定外にオリエが入った為に二部屋を取る事に変更。

しかし、思った以上に散財したな。

「兄上の用意したお金だけだ。」

・・・大概、オレも酷い弟だよな。

D i s c o v e r ! 皇子は衝撃にただ苦笑する。【後】（後書き）

作者、意外とこの女店主（名前はまた後に）好きです（苦笑）
それもかなり。

E a g e r ! 皇子は意外に気に入られる。【前】（前書き）

毎年、エイプリルフールは嘘を何つこうと考えているうちに終わります。

これはこれで平和なんじゃないか？

E a g e r ! 皇子は意外に気に入られる。【前】

ミリイはオリエの入浴に付き合う為にすぐさま部屋を出て行った。
・・・と。

「で、何故、君もいるの？」

予定外がもう一つ。

例の決闘女がオレの部屋にいる。

「二人用の部屋を二部屋と聞いたもので。」

・・・つまり、何だ？

もしかしなくても、一緒に泊まる気か？

「却下。出て行け。」

「女性にお優しいのか、冷たいのか、不思議なお方ですわね。」

「面倒が嫌いなだけ。」

大体、何で一人でいたんだ？

「そういえば、従者はどうした？君”も”行くんだろ？」

恐らく、彼女の目的地はオレと同じだ。

「やはり、トウマさんも行かれるんですね？」

そんなにやんわりと微笑まれてもな。

「ああ、だから、悪いがあまり君に関わりたくない。従者達の所へ
帰れ。」

冷静に、冷静に。

「何故ですの？」

彼女、本当にあの武器を振り回そうとしていた人間と同一人物？
「貴族のお嬢様が、平民出身のオレと一緒にいるとね、問題がある
の。」

今回のオレの設定だ。

オレは貴族に仕えるようになったばかりの従者級に近い平民。
だから、皇族名もない。

一応、完全な平民だと怪しまれるので、貴族名はあるにはあるが。

「問題ですか？」

「問題だね。貴族達にも平民出の者達にも目をつけられる。目立つのは困るんでね。」

目立つたら、捻じ伏せてやるとかいう発想はない。

労力も使うしな。

動き易い状態でいたいし。

「オレはね、目的があるんだ。」

ちよつと傷ついたような表情をされたので、仕方なく言い方を変える事にする。

「君たちとは違った目的。貴族として決められた将来の目標とかではなく、絶対に、何をしてでも成し遂げなきゃいけない目的。」

それしか持つてないからとも言うが。

「手段は選んでられないと？」

さっきの決闘に割り込んだ時の話をしているのだろうか？

「そうだね。選ぶ余裕が無いというのが正しいかな、今回ののは。」
いてもたつてもいられなくて、よりによって兄上の提案なんかに乗っちゃったんだもんなあ……。

「……なら、私を、私の貴族としての地位を利用なさつて下さつて構いません。」

「断ル。」

即答。

「まず一つは、君にそこまで言われる筋合いが無い。もう一つは、そんな利用の仕方はお断りだ。」

彼女は完全なる他人で、そして恐らく善人だ。

いくらなんでも、オレにだって良心はある。

「矛盾してらっしゃいませんか？」

「オレは正直、善人とは言えないし強くもない。だから、そこまでの責任を他人にまで持てないだけだ。」

本当、常に初めてだらけでいっぱいいっぱいなんだから。

「そうです……。」

「・・・まあ、目的地が一緒なら、今晚くらいはいて構わないよ。」
「本当ですか?!」

オレ、やっぱり甘いのかなあ。

「問題は、どう部屋を割るか・・・。」

信用度をかんがみるに、オレとお嬢様が同部屋が一番いいんだが、
・年頃を考えると、オレとオリエか。

「それは後で決めるか。」

寢台に適当に座ると、買ってきた二振りの剣を取る。

剣を鞘から抜いて、自分の腕が水平になるように片手で持ち、そのままの姿勢で止まる。

今度は、それを逆の手で。

「何をなさってますの?」

「重さに慣れる作業と、どっちの腕を主体に剣を振るうかを考え中。
どっちも今日買ったばかりだから。」

身体に覚えさせて、考えて修正しなきゃ。

細身の方の剣が少し軽いな、当然か。

それでも細身の方の剣は、デイーンの剣と大差ない重量だ。

御老体の見る目はやっぱり凄かったと、改めて感謝だ。

細い剣は突きを主体に盾との併用を考えるのが有効だろう。

もう一方は、リツヒニドスで使ってた下取りに出した剣と同じくらいの重量。

でも、少し反りがあるから斬撃はこつちだな。

二振りの重さの誤差は少ない。

「流石。」

剣を鞘に納め、今度は剣帯の点検をする。

「よし、これで大丈夫かな。」

「細かく確認なさるのね。」

不思議そうな目でオレを見る。

そんなに不思議か?

「君の得物と違って、距離が取れたり速度を帳消しに出来たりしな

いから。」

重くないし。

「斬撃の角度まで気にする？相手と刃の入射角度とか。」

「・・・しませんわね。」

だよね。

ぶつちやけ、全身鎧に盾持ちが相手だったら鋭利な刃物より、大質量に任せて激突させた方が確実に損傷を与えられる。

「その分、微調整が必要だし、特性の把握は必要なの。」

「勉強になりますわ。」

「と、ミリイとオリエが戻ってきたな。」

「？」

「心配がする。」

「私にはなんとも・・・。」

ふむ。

もうすぐ足音がはっきりと・・・。

E a g e r ! 皇子は意外に気に入られる。【前】（後書き）

ま、新キャラはあと3、4人くらいですかねえ……。

Eager! 皇子は意外に気に入られる。【中】

「か……」

”か”なんだよ、なんです。

「か、可愛いっ!」

オレは思わず目の前にいた美少女を抱き上げた。相変わらず軽いままだけれど。

純白に黒の編み上げで縁取られた絹の服を着たお姫様。そんな姿のオリエにオレは完全に心臓を打ち抜かれた。なんなら、ずっきゅーんとかどきゅーんっという音をつけてもいい。

肌は白く頬はこけていたが、風呂上りのせいかほんおりと赤味がかっている。

薄汚れていて黒っぽかった髪の色もわかった。

灰色に近い銀の髪だ。

栄養が足りなかつたせい、髪の間には白髪が目立つ。髪型も適当に刃物で切られたのか、段違いでぼさぼさだったけれども。

「うん、可愛いぞ、オリエ。」

これから、何回も言ってるからな。

「これから美味しいもん沢山食べて、ミリイに髪を切り揃えてもらってもっと可愛くなるうな!」

オレ、絶対に親バカになるな。

・・・訂正、”バカ親”だな、うん。

既に初期の自覚症状アリだ。

髪と同じ色の銀色に近い灰色の瞳がオレを見つめる。

何か、オレの偽善っぷりを責められてる感じで苦しい。

弁解のしようがないけれど、例え直接責められたとしても。

「とりあえず、オレはちょっと荷物整理があるから、三人で先に食べさせて。」

そう促して女性陣を部屋から出した後、オレは寝台にうつ伏せで倒れた。

倒れて……。

そして、久々に泣いた。

デイーンの事を思い出して、トウマを思い出して。

そして、シルビアとオリエの事を思い出して。

ただただ涙が溢れた。

そうやってしばらくじっとしていたら、お腹が鳴る。

「こんな時でも結局、腹は減るんだよね……。」

まあ、明日からは好きな食事も摂れないだろうからな。

明日から、オレはとある施設に入る。

砂漠地帯のこの地を通るのは、商人と旅人だけ。

政治の空白地になりかねない国境線という、到底有り得ない状況。

この状況を回避する為に、多数の国家間共同で施設を作るに至ったのだ。

多数の国家間といったが、ほとんどが神器を継承し続けている通称

”英雄国家”だ。

勿論、ヴァンハイトも例外じゃない。

そこに兄上に頼まれて入ると、そういうワケだ。

流石に他国との関係を考慮して、大っぴらに拒否出来なかったらしい。

嫌だな、こういう大人の事情みたいなの。

ちなみに主導国家は永世中立とかいうアホな思想を掲げ、祈りを習慣づけているような国家なのでイマイチ信用したくないんだがな。

兄上には、兄上なりの思惑があるのはアリアリだ。

とりあえず、建前上は地位的差別（平民と貴族）とか教育の適切さを見て来いという事らしいが。

まー、楽しそうに『潜入捜査だ。』と微笑まれては致し方ない。

あんまり、邪険に出来ないのが弟の立場というモノだ。そうしておけ。

オレはもう深く考えたくない。

平民出身でも貴族の推薦があれば入れる施設だから、今回は設定上はオレも平民出身というコトで。

今回は受けた理由も様々ある。

面白そうだというのは、ちょっぴりあるのも否めないが。

教育が受けられるのが良い。

ミリイにさ、ちゃんとした教育を受けさせてやりたかったんだ。

他は皆、きちんと一定以上の教育を受けていたから余計に。

何でも一人の推薦者につき、二人の従者までは許可されているらしく、従者も教育を受けられるらしい。

「で、貴族のボンボンの面倒を見ると。」

オレの頭の中では偉そうな貴族のお坊ちゃんと、それを取り巻く腰巾着な二人の従者の図。

「あー、ヤダヤダ。」

それでも、ここに来る事を決心した最大の理由。

”国境” ”砂漠” ”がく”

教育を受ける場所、”学舎”とか”学者”とか”学園”とかだったら？

でなけりゃ、オレはこんな面倒なコトになるとわかっている兄上の頼みなんか受けない。

絶対に。

二人目の従者にレイアやミランダを選ばなかったのは、優秀過ぎるのと年齢の問題だったのは、ナイシヨの話だ。

「今頃、すげえ怒ってんだろうなあ・・・。」

残してきたミランダとレイアの怒ったような困った顔が浮かぶ。

済まない事をした。

ああ、ダークエルフは施設に入る対象外な。

さっさと情報を集めて帰ろう。

シルビアがここにいると限らないだろうし。

そうしたら、皆にオリエを紹介して、また一からシルビアを探し出そう。

「あ、オリエにも教育受けさせられるかな？」

従者が二人までという規則だったから、彼女をそのまま連れて来たんだが……。

問題は彼女の現段階の教育状況だ。

あとでオリエに聞いてみよう。

読み書きと初歩の計算が出来れば、何とかなるだろうし……。

「て、あれ？オレは何を勉強しに行けばいいんだ？」

文学・天文・政治・経済・法律令・算学……あれ？

ほとんど、城でやったんじゃない？

歴史もディーンの手に入れてから、勉強しまくったし……弱いのは……。

「地理とそれ以外の専門学だけじゃん。」

しかも、専門学って、農学、建築学、考古学くらい……。

深く考えるのは、向こうの講義科目を見てからにすればいいか。

「はい？」

ふいに扉が叩かれる音。

「トウマ様？遅いから食べ終わっちゃいましたよ？取り分けて貰いましたから、持ってきました。」

ミリイの声だ。

「あ、ごめん。入っていいよ。」

扉を開けて入ってきたミリイとオリエのお揃いの夜着姿に、オレは再び奇声をあげて二人が可愛いを連発するのだった。

E a g e r ! 皇子は意外に気に入られる。【後】

問題がありまくりの一日だったが、残るべくして残った最後の問題。

”部屋割り”だ。

ミリイと今日会ったばかりの（オリエは別）アレと一緒にという躊躇わられて……。

仕方なく、ミリイ・オリエという組み合わせに。

「なあ？オレ、君の従者に無礼討ちにされない？」

思わず、今晚のお隣さんに聞いてみた。

「大丈夫ですわ。私、貴族位高くないですし。それに当家は傍流ですわ。」

この説明がさらりと出来る時点で、問題の主旨は理解はしているようだな。

「貴族位が低くても、他国のお嬢様には変わりないんだがな。」

貴族は貴族。

他国なのは、彼女の得物を見ればわかる。

どう考えても”ヴァンハイト以外の国”の貴族だ。

あー、正確にはヴァンハイトの皇子と他国の貴族の子女の構図なんだが。

……て、こっちのがマズイよな、外交的な意味で。

「ゾットするな。」

「何か？」

「い、いや……そつ、そ、そう綺麗だなんて。」

何だソレ。

自分で自分に突っ込んでしまった。

今の彼女は、例の部屋でオレが選んだ最高級の絹の夜着を着ている。

……言っておくが、透けたりとかしてないからな。

全身を覆っているからな。

「うふふ。お世辞が上手ですわ。」

「別に取り入ろうと思ってないからな。でも、その髪は美しいと思うよ。」

彼女には悪いが、レイアの綺麗な髪を思い出す。

「あら、トウマさんもそう思います？家族にも言われるんですよ。」
よし、何とかきつちり誤魔化せた。

「ああ、思うよ。それと明日から”トウマさん”はやめてくれよ？
そっちはお貴族様なんだから。」

平民って何時もこんな事を考えてんのかな？

能力別登用制度の導入をカーライルに提案して良かった。

アイツも何処か実力主義だったしな。

いずれは、どんな地位にでもなれるように出来ないか。

「あら、ダメなんですか？」

ワザとだろ、この女。

「少なくとも位が上なので呼び捨て・・・いや、もう面倒だから声
かけなくていいです。」

大体、武器さえ持たなければ、美人でお嬢様なんだから絶対目立
つ。

寧ろ、貴族の男性陣の不況を買う。

下手したら、何人かのさなきやなんなくなりそう。

「でも、折角お知り合いになれたのだし・・・。」

やりにくい、この人。

「大丈夫。美人なんだから、貴族様の殿方が放っておきませんよ。」

男が美人に弱いのは、世の常だ。

「どうぞ、貴族同士で仲良くしてくださいな。」

オレは彼女に向かって首を竦めてみせた。

「それではつまらないですわ。」

つまるところまらないの問題じゃない。

こちららこの先の安穩な生活がかかってるんだ！

「そういう問題じゃない。」

コイツはデカイ子供か。

全く、貴族ってヤツは・・・って、オレが言うのもなんだかな。すっかりしょげてしまった彼女の姿・形は、今はいない者達を思い出させる。

やっぱり、オレは甘いんだな・・・。

甘過ぎるから、失う事になるんだな・・・もつと慎重に冷静にならなきゃいけないハズなのに。

「・・・誰も見てない二人の時ならいいよ。声かけても。」
言ってしまった・・・。

まあ、多分、そんなような状況になる事は皆無だろうからいいか。

「本当ですか?!」

「あ、うん。でも、なんか、オレに拘り過ぎてない?なんで?」

ちよっぴりね、うざったい気もするのよ。

「考えた方が違う方と一緒にいる方が、自分の為になりそうなのと・・・純粹に興味ですわ。」

やべえ・・・純粹に気に入られた?!

「ち、ちなみに更にお聞きしますが、何がご興味を引かれたのデシヨウカ?」

今後の参考にさせて頂きたいデス。

「最初は長剣使いかと思っていたら、二振り腰にさしていますし・・・。」

唇に指をあてて言葉を続ける。

「双剣まで買い求めていらしたし、盾や鎧まで見ていらしたから。」

・・・まあ、買った品物的には、重装機甲歩兵に近いよな。

「あ。。。」
「・・・槍斧とか戦斧とか使う国の騎士団で・・・重装兵じゃね?」

て、コトは・・・。

「何やら色々と通ずるものがありそうなので。」

いやいやいや、オレはバルドも認める剣の軽さなんで!

重装とかしたら、動けない事受け合いなんで!

「全然戦法すら違うと思ひマス・・・。」
いや、本当。

「という建前もありつつ、トウマさんというお人柄自体に興味津々
だったりしますわ。」

ぱんっ、と笑顔で手をたたかれてもオレ的にどう反応したらいい
のやら。

「後悔しても知らないですからね。」
ぐったりだ。

。明日からこれよりも更に大変だと思つと、先が思いやられるな・・・

Feel! 皇子の手が掴みたいモノ。

「ちわー。」

底抜けに明るい声を出してみた。

段々と下がってきた気分が嫌になってきたから。

「お、来たかい。」

朝早めにも関わらず、しっかりとした反応。

例の施設に行く前に調整を頼んだ武器を取りに来ていた。

「朝からまた刺激的な……。」

今朝もやっぱり彼女は下着姿だった。

「アンタだって、今日は間違えてるじゃないか。」

「あー、もうそれは突っ込まないで。」

今のオレは正装なのである。

ああ、勿論、皇子としての正装ではない。

「それ以上言われると、立ち直れないから。」

「そうかい？ふうん、双剣の白獅子ねえ……。」

ああ……あう……一番聞きたくない事を……。

一応、ヴァンハイトからの推薦という事で施設に入るので、国の何処かに属さなければならなくなった。

それを見越して、兄上が用意していたのがコレ。

”双剣を掲げし白き獅子”の姿の紋章が入った服。

”兄上の近衛第一師団所属の証”……勘弁しろ。

本当に。

まさか、これが本当はやりたかっただけじゃないだろうな？

ヴァンハイトの兵士の何割の人間が、この服に憧れてると思ってんだあの兄上は。

「本当にヤメて……今すぐにも脱ぎたいくらいなんだから……。」

肩もがっくりと落ちるさ、そりゃ。

「ま、”アレ”に行く人間は基本的にワケありか、優秀かのどつちかだから驚かないケドねえ。」

ニヤリと笑う。

「とにかくだ。出来てます?」

「勿論。」

そう言つて、銀色に光る長剣を投げってくる。

「ほつ。」

鞘と柄を掴み、即座に抜き放つ。

空気を切る音がするほど円形の軌跡を描きながら、柄の端に指をかけるりと回し納剣。

「へえ。」

「少し、手元を重くしてくれるか?」

驚いた。

意外に軽く、硬質。

しかも何だ?この外見は?

買った時は、もつとずつとくすんだ銀色だったぞ?

「ん?磨いたら、そんな感じになったのさ。」

訝しげなオレの表情を見て、すぐさま答えをくれた。

「どうやら、銅と鉄の比率がえらく低いらしい。」

「それで軽いのか。何が使われているんだ?銀か?それにしても硬い。」

銀は細工物に使われるくらいで、本来は硬質なものではない。

「銀と銅と白金かな。」

「ライライ。そんなモノをあんな値段でいいのか?」

どう考えても素材の時点で高価だ。

大体、鋼だけでも高価だつていうのに、そんなもので剣を造ろうとすらしないぞ、普通。

「剣との出会いなんて運命だよ、女と同じ。」

「ディーンの手もか?」

「実感してるよ、そんなの。」

「ん？」

聞こえなくて良かった。

「簡素な形も多分計算上の事なんだろうな。」

ぱつと見て、鑄造に見えるから、型も硬度を上げるのに一役買ってるんだろう。

「次はこつちだね。」

双剣の柄を手に取り、鞘を残して抜く。

両手で交互に円を描き、空中で左右を持ち替える。

どちらの剣が、どちらの手により馴染むか。

それを確かめて納剣すべく柄を彼女に向ける。

「これも何か・・・不思議なカンジがするな。」

何とは言えないが。

「どちらも年代物だからね。付加がかかっているかもね。」

「何か触ってもはつきりしないんだよ。」

明確な反応があるワケでもないんだが、それが余計に気になって何とも。

・・・うん。

「振っているうちに気づいた事があつたら教えてくれよ？調整するにも、付加が判明しても。」

「ああ、そうする。」

微調整された長剣を確かめ、相槌を打つ。

「いい仕事だ。そういえば姉さんの名前聞いてなかったな。」

こつちの店も常連になる事を決めた。

「アタシかい？ヒルダだよ。そつちの名前を聞いてなかったね。」

確かにオレも名乗らなかつたけど、ミリィは店内で名前呼んでいたんだが？

「・・・」アルム”だよ。”

オレはヒルダに本当の名前を告げた。

多分、彼女は口が堅いと思う。

そんな気がした。

それにこれから、オレの愛剣を調整してくれるんだからな。

「また大変だねえ、そんな格好までしてさ。」

アレ？

ヴァンハイト皇国生まれのアルムってだけで、正体完全にバレてたり・・・する？

まさか・・・。

「わざわざ、こんな所くんだりまで来て。」

しかも少し同情された？

「来なきやならなかつたんだ。絶対に諦められないモノを掴みに。挑戦を受けたからにはな。」

だって諦めたら、オレはオレでなくなる気がする。

「アハハ。アンタ面白いね。よっぼどなのかい？」

豪快に笑われる。

「よっぼどだから、何だってやるのさ。」

オレも笑った。

「何か困った事があつたら何時でもおいで。次は紹介状いらないよ。それと・・・。」

クスリと笑って、オレの目の高さにその視線を合わせる。

「そんなに想われる仲に入れさせる気になつても、来ておくれ。」

何だよ、ソレ。

確かに今まで出会った女性のは違った魅力があるのは認める。

「それはそれで楽しそうだ。」

この台詞をどちらが言ったのかは、秘密にしておこう。

Feee! 皇子の手が掴みたいモノ。(後書き)

ようやく名前が出てきたヒルダさん。

いや、なんとなく気に入っちゃって・・・(苦笑)

果たしてレギュラーになれるのか?!(ライ)

Gathering! 皇子が潜入した先は。【前】

鐘のついた尖塔を持つ建造物。

その右隣には長方形の建築群。

左隣には様々な様式の小建築群、これは多分各国の建築様式を用いた建物だと思う。

「お金のある貴族や王族はいいですねっつと。」

愚痴の一つも言いたくなるが、ヴァンハイトの建物が無くてほっとしたつてのが正直なトコロ。

もしあつたら、兄上に如何に費用の無駄遣いかを、一から滾々と説明してやるぐらいの気持ちにはなつただらう。

んで、その豪華な建物達の横にオマケ程度の大きさである長方形の建物が、恐らく一般の人間達の居住区だらう。

朝から脱力しながら、それらがある敷地の門をくぐり本堂へ。

そうそう、正装の服の件だが、あれから紋章の入った上着だけを着替えた。

国と近衛師団の象徴である青色の服さえ着ときゃいいだらう。

そんなヤケ気味に至り、今、本堂で入寮式(?)とやらに出ていくワケだ。

各国に一定水準以上の特色ある教育と交流を建前にしているくせに、お貴族様方と並ぶ場所が別とか呆れる。

「ミリイ、オリエ、何かあつたら必ず報告するんだよ?」

これは何やら思った以上に身分格差がありそうなので、一緒にいる二人に声をかけ微笑む。

二人共(半ばゴリ押しで)オレの二人の従者という事にして、門をくぐつた。

オレの身分さえしっかりしていれば、特に問題がなかったよつで良かったよ。

オリエに関しては、見事に最年少ではあつたけれど。

「さてさて……。」

とりあえずは観察だ。

誰がデキる奴で、誰を警戒するか。

ついでに平民出身の方々の、貴族の思想の影響がない良い人材は、引き抜いてみようとも思っている。

お貴族様はやつかないので、目を余り合わせないように観察だけという方向性。

「ん？」

真紅の正装服を着た女性が、手を振っているのが見えるんだが……。
思わず目を合わせると、にこやかに微笑む始末。

「だから、二人だけの時以外は自重しろと……。」

昨夜、一晩を共にした女性がそこにいたのを強制的に視線から外した。

「お集まりの皆様。ようこそ、この砂漠の学院に。」

本堂の壇上に、白い礼服の女性がいる。

金色の長い髪に薄紫の瞳。

肌は抜けるように白く見える。

遠いから、それ以上細かくはわからないが。

「あれが宗教国家の姫ってコトか……。」

この施設の発案者とやら。

「今回、ようやくヴァンハイト皇国にも主旨に賛同頂けました。」

ま、オレ一人だけだな。

「これで、五ヶ国の賛同を得られた事になります。」

女性がチラリと壇上の隅を見ると、四人の人間が座っている。

流石に国王はいないみたいだが、王族筋の方々だろう。

……だって、兄上がいるもん。

「なにやっつてんだか……。」

確かに他に来られる様な人間はいないけれどさ。

つまりは、あの服の赤いのが決闘女……アイシャ姫だっけ？の国

の人間か。

興味は、実は限り無く低い。

他の国の人間なんて使っている武器さえ見れば、すぐに何処の国かわかるし。

判明しないのは見習い級の従者とか……。

「オレか。」

着ている服は”青”だけれど、今は武器を携帯していない。

武器を持ったとしても、何が何やらはつきりしない状態。

苦笑するしかないな、自分の異端っぷりに。

「……であるからして、諸君には大いに各国の技術を取り入れ、故国で役立てて欲しい。」

あ、何時の間にやら各国の偉い人の話に……。

「オリエ、飽きてないか？」

横にいるオリエの頭を撫でると、キョトンとした表情でオレを見上げて首を傾げる。

可愛い。

最高に愛らしい。

ダメだ、完全に親バカだオレ。

「と、言う事で、各国の垣根を越えてというのがをまず率先して我が国が示そうと私は思うのである。」

ヤベ、話がどんどん進んでら。

「そこで、どうであろう。模範になるかわからぬが、各国の人間が少し故国の武を見せてみるというのは！」

は？

馬鹿なんじゃないのオイツ。

そこまでして、自国が優秀で如何に強いかを主張したいのか？
呆れる。

ああ……あんなに胸を張っちゃって、まあ。

「大変な事になりましたね、トウマ様。」

「大変というか呆れたよ、ミリイ。」

ああいつのが国にいるっただけで、貴族の幻滅度が増す。スクラトニーみたいなヤツを出したオレの国が偉そうな事は言えないけど。

「怪我しないで下さいね。」

「何が？」

「だって、トウマ様、戦うんでしょう？」

「は？」

何を唐突に言うのさ、この子は。

「ヴァンハイトからは、私達三人しか来てないはずだから……トウマ様が出るんですよね？」

あ。

「ははっ……はあ……。」

乾いた笑いと溜め息しか、もう出て来ないや……。

Gathering! 皇子が潜入した先は。【中】

「と、言うコトで不戦敗を選択する事した!」

式が終つて、例の長方形の建物の中から一室がオレ達にあてがわれ、部屋に入つての第一声。

「え?」

「オレは戦わない。国の威信なんて知ーらないつと。」
無駄な対抗意識は捨てましょう。

「いいんですか?」

ミリイはさも大事だと言わんばかりに瞳を大きく見開く。

「知らん。見栄を張りたいなら、兄上が戦えばいい。」

うん、それがいい。

神器を振り回して、相手をなぎ払う兄上は些かながら大人気ないつちや、大人気ないが。

「まあ、確かに各国の代表が誰が出て来るかは気になる・・・が。」

第一、宗教国家とか言うアレは、そんな争いには乗ってこないんじゃないだろうか。

「が、オリエと遊んでる方が楽しいもんなー。」

オリエを抱き上げてくるくと回る。

何か、コレ、定番になりつつある。

突然でも一切嫌がる様子がないというのもいい。

単純に面食らつているとか、呆れているという線も否めないが。

「可愛いぞ、オリエ。」

寧ろ、どう屁理屈を並べ立てて彼女を国に連れて帰るかを考えた方が、絶対に精神的に良い。

「なんて、上機嫌のまま生きていけないよなあ・・・。」

オリエを寝台に下ろして、溜め息をつく。

確かに一時、国からも地位からも離れて気分が高揚しているとはいえ、大半が空元気だ。

それはわかってる。

脳裏では『早く情報を集める!』とがながん言ってきて、それが渦巻いている。

結局ここに来て今現在で理解した事は、建前で塗り固めきれない各国の見栄と、国の政治の重要さだ。

オリエを助けたのだって、ミリーの頼みとオレの罪悪感を軽減する偽善と自己満足。

彼女が愛らしいと思うのは本心だけれど。

なんだろう・・・コレってアレか？

”躁鬱”ってヤツか？

「あ、トウマ様!この部屋、お湯を張れる部屋がありますよ!」
お？

まるで簡易の宿屋並だな。

寝台が大きいの一つに、一人用一つつてのが気に入らないが。

二人部屋じゃないのか?コレ。

「あ、まさか、オリエが小さいからの仕様?」

ちらりとオリエを見ると、またキョトンとしている。

喋れないから、細かな反応が取れないのだろうか。

「んじゃ、ミリー、オレが水を汲んで来るよ。」

「え?」

「水を汲まないとお湯をわかすどころか、入浴すら出来ないだろ?」

「あ。」

得心がいつて良かった。

「わ、私が汲んで来ますよ!」

「いいよ。今は身分とか関係ないんだし、力仕事は男がやるもんだろ?」

今のうちに普段体験しないような事を満喫しなくては。

水汲みを満喫というのも笑えるな。

軽い鍛錬だと思えば、なんて事は無い。

「普段出来ないコトねえ・・・。」

「ここは試しに。」

「オリエ、お風呂をオレと一緒に入ると、ミリイと一緒に入るとどっちがいい？」

「ちよっぴり考える仕草をして、おずおずとオレを指差すオリエ。恥ずかしいのか、顔がほんのり赤い。」

「ふむ。調子に乗り過ぎただろうか？」

「トウマ様……。」

「ミリイが呆れてら。」

「んじゃ、ミリイ。オレと一緒にお風呂に入ると、オリエと一緒に入るとどっちがいい？」

「更に調子に乗ってみようじゃないですか。」

「へ？変な事を聞かないで下さい！」

「オリエより、尚、盛大に顔を赤らめたミリイに睨まれた。」

「何というか……変に知識がある分……。」

「ミリイのスケベ。」

「トウマ様に言われたくないですっ……！」

「あはは。」

「いやいや、どうだね、楽しいね。」

「皇子という地位が無かったら、こういう風と同世代の女の子と接していたのかね、オレは。」

「……誰だ？」

「ふと、扉の外に人の気配を感じた。」

「扉が叩く音がする中、オレはすぐさま自分の剣を一振り手に取る。」

「アイシャ様の使いで参りました。」

「扉越しに聞こえるくぐもった声。」

「アイシャ？そんな人物は知りませんので、お引取り下さいな。」

「大人しく引き下がってくれないかなあ……なんて。」

「え?!でも、他にトウマという方がいらっしやなくて……姫様は、”トウマという人物”を連れて来いとしか言わなくて……。」

「

あれ？何故かすすり泣くような声が……。

何だ？これじゃあ、オレが悪者みたいじゃないか。

「……君、一つ質問していいか？」

「はい……なんでしょう？」

二百歩程譲ってやろうじゃないか。

「君の所の屋敷、浴場広い？」

「はい？」

Gathering! 皇子が潜入した先は。【後】

「いやあ、悪いね。彼女達に良い待遇を与えてやりたくてさあ。」
二百歩譲った結果、そのアイシャ姫の部屋のたたつ広くて無駄に豪華な浴場を使わせてもらうのと引き換えに招待されてやる事にした。

「流石は”クロアート帝国”の地位ある人間は凄いなあ。」

施設に入る時に見えた、あのでっかい建物群の一つの屋敷だ。

天井は高いし、中は白や金・銀しているし明るさは煌々としてるし・

「帝国と言っても、私の一族はその端の”アクヴィウム領”を治めているだけですから。」

クロアート帝国は、ヴァンハイトから北西に位置する隣国で、神器を祭っているのはウチと同じだ。

確か・・・”アクヴィウム”はその国の南西の端にある城塞都市だ。カーライルから借りた地図に載っていたので、何とか覚えた地名の一つ。

「まあ、お風呂を借りられて良かったよ。」

「それくらいでしたら、何時でもお貸ししますわ。」

にっこりと微笑む決闘女、アイシャ姫。

お貴族様は違うね、どうも。

「ありがとう。ところで、オレを呼びつけたのは、その格好と何か関係あるのかな？」

優雅に微笑む彼女は、以前のレイアも真つ青な全身鎧。しかも、盾なんざ取り付ける必要のないくらいの重装甲。

盾の代わりに肩の部分の鎧が、上と横に張り出ている。そして、何よりその色。

全身、真紅。

「そんな重装機甲兵師団みたいな物騒な格好で・・・。」

呆れつつも、その異様な圧迫感を前にどうやったら、的確に制圧出来るかを考えてしまうのは、きっとバルドの教育のせいだ。

「あら、例の各国の技術交流の一環ですわ。」

「乗ったのかよ……。」

決闘の時といい、困った姫さんだ。

「乗ったというより、言い出しつぺですの……。」

……全く困ったもんだ。

赤い服を着ていたから嫌な気はしていたが、あのオッサンやっぱりクロアート人だったのか。

「ま、頑張れ。と言っても、そんな重装甲相手に勝つなんて……。」

「

なんて？」

「いなくはないな。」

やりようはある。

バルドだったら、余裕だろうし……オレも攻め方によれば或いは「あら。やっぱり世の中は広いんですね。」

何故か感動したらしく、ぽんつと両手を合わせて叩く。

「トウマさ……トウマは参加なさらないの？」

今、言い直したな？

あれほど身分の差を考えると言ったのに。

この場所の今の時間は、オレと姫しかいないみたいだからいいけれど。

人払いしてあるようだし。

「なんで？しないよ。」

「残念……。」

何が残念なんだよ。

「オレ、負けるの嫌だもん。落ち込むし。」

それ以前にくだらないうのもあるんだが。

多分、相手が強ければ強い程、手加減とか余裕が無くなっていくのが嫌だ。

バルドに教えられた剣は、剣術というより死なない負けられない方法。そして効率の良い相手の制圧の仕方だから、相手を殺す事ばかり考えてしまう。

貴族のお綺麗な剣術では一切ない。

あとな、自分がどの程度の強さの位置にいるか、今ひとつピンと来ないってのも大きい。

「それに出るなら、双剣使わなきゃなんないし。」

好きな武器を使っていいと言われたとしても、お断りだがな。

「で、ヴァンハイトは不参加。宗教国家は……ええと。」

国名ド忘れした。

「当然、”セイブラム法皇国”は不参加ですね。元来、あの国の神器は王錫ですし。」

セイブラム法皇国ね……位置はウチの国の北辺りだったかな。

「じゃあ、お相手は？」

何処の国ですかね、こんなアホな事に乗ってしまった残念な国は。

「それが……。」

ん？

表情が曇る彼女を下から、思わず見上げる。

「これも縁と申しましようか……。」

どうした？急に齒切れ悪いな。

「あの時の決闘の相手です……。」

「さあて、帰ろうかなーっ。」

やってられん。

折角止めたオレが、バカみたいじゃないか。

いや、あの時は真剣使ってたから、止めなきゃどっちが死んでてもおかしくなかったから割り込んだんだだけだ。

「あつ、あの！お怒りなのはごもつともなのはわかりますが……。」

「別に怒ってないよ。単純に帰って寝たくなっただけ。」

関わりたくないとも言っただけ。

「・・・あの・・・。」

「何？」

しょんぼりしている金髪美女をジト目で睨むオレ。

「心細いので・・・付き添って下さいませんか？」

「はあっ?!」

オレじゃ到底重くて動けないだろう完全重装備で、長大な武器を
持てばあんな気性になるのに・・・心細い？

「大丈夫、大丈夫、姫なら一人でも。」

「ダメですか？」

「オレに何の特典もないしなあ。」

ここ最近、損得無しで動き過ぎだと思わないか？

反動とは言わないが、少し他人に意地悪になつてる気がするわ。

「見返りがあれば宜しいのですか?!」

・・・何て前向きな人なんですかね。

やりにくいと思ったら、ありやしない。

「・・・わかったよ、付いて行くよ。行けばいいんでしょ、全く。」

H u r r y ! 皇子は最中に躍り出る。【前】

まだ何処に何かあるのかすら把握しきっていないオレを案内してくれるのは、アイシヤ姫の従者の一人だった。

オレを部屋まで迎えに来てくれた、男の子だった。

「悪いね、オレの従者でも何でもないので世話かけて。」

「いいえ、コレもボクの勤めですから。」

につこりと微笑む低身長の彼の頭にある円形の耳がピコピコ揺れる。

彼・・・ああ、”マール”君と云うのだそうだが、亜人種だそうだが、亜人種というのは、獣人と人間の混血で時に獣人を超える力を持っていたり、人間やエルフ以上の知能と持っていたりする人種だ。

そんな優秀な種族を部下に持つてるなんて、貴族の姫は違うなあ・・・。

ウチにも”巨大熊”ならいるんだが・・・多分、純粋な人間だけだ。

「マール君は、武官なの？文官なの？」

その優秀さ故に、人種差別の対象では全く無く、寧ろ高待遇。

しかも、世界で一番出生率や人口が少ない。

「悩むところですよ。ボクはまだ”未分化”なので、得意分野がはっきりしなくて。」

”未分化”というのは、獣人の血と人間の血のどちらが濃く出ているか判明してない事をさす言葉だ。

どちらに寄るかによって、能力が違う。

「じゃあ、この施設はうってつけだねえ。」

そういう意味で彼は、至極真っ当なあるべき施設の役割の恩恵を受けられそうな対象だ。

「あ、この奥です。」

茶色の丸い瞳と丸い耳をくりくりと動かす様は、リスを彷彿させ

る。

「意外と広いね。見物人も少なくないし。」

練武場は円形で、その広さは四、五百人と同時に入れるくらいだ。更に観客席も同じくらいの人数は入るだろう。

野次馬半分、自国の応援半分と・・・まあ、百人はいない。

「それじゃあ、ボクはアイシヤ様の準備を手伝ってきます。」

「ん。頑張つて。」

「あはっ、ボクが頑張る事は特にないんですけどね。」

そりゃ、そうか。

トコトコトコつと駆けていくマール君の後ろ姿もリスだな、アレは。

「さてと・・・。」

向かって右側がアイシヤ姫の応援する側という事は、左側が対戦相手側か。

「ここで、オレが左側へ行つて応援したら、面白いかな？」

言つてみたただけだぞ？そこまで意地悪ではない。

中央に陣取っているのは、それこそ完全な野次馬達。

ミリイとオリエを連れて来なくて正解だったわ。

二人共、争いごとの全てが嫌いだしな。

「おかしいなあ・・・オレも嫌いなんだが・・・。」

誰も聞いてくれないんだよなあ。

「これより、クロアート帝国代表アイシヤ姫とセルブ王国代表ラスロ―王子の対決を行う！」

練武場に響く声。

へえ、あの優男、王子だったんだ・・・と、思ったより何の感慨も湧かないのは何故だろう？

同じ王子と皇子なのに。

「オレの自覚が薄いのか？」

セルブ王国はクロアートの北西にある国で、国境間にマール君のような獣人の血を引く種族の自治領がある。

「なあんか、国同士のいざこざが透けて見えるね、ヤダヤダ。」

代理戦争じゃねえんだぞ、アホか。

名を呼ばれた二人が、向かい合い同時に礼をする。

真紅の重装鎧に長い柄の戦斧を持つアイシヤ姫。

対するは、白い上半身鎧と細剣を掲げるラスロー王子。

得物を単純に比較したら、細剣のがひ弱いで不利に感じるが……

「構えっ！」

腰だめに槍斧を構えるアイシヤ姫。

ラスロー王子は体勢を低くし、こめかみ辺りに水平に剣を構える。

「かったいなあ。」

中央の野次馬席(?)で一人呟く。

相手の大振りをかいくぐって、間合いを殺し突きを多用して、間隙を縫うのが堅い。

鎧の更に隙間を縫うのは、至難の技だが彼には自信があるのだろう。

「始めっ！」

合図と共に圧倒的な速さで間合いを詰めに行くのは、当然ラスロー王子。

お約束通りの突きは、アイシヤ姫の槍斧で叩き落とされたが。

弾かれた反動を使って距離を取ると、その場所にすぐさま槍斧が叩きつけられる。

「鍵は速さと……体力か。」

「間合いの広さの問題もあるかと……。」

「ん？」

オレの胸辺り、顎の下からマール君の声が。

「速さがあれば間合いは削り取れるよ。あの程度なら。」

オレだっつかい潜れない事はない。

速さはオレの剣術の主体でもある。

ただそこからの攻撃手段は、一考しなければならぬ。

「マール君、ところでこんなに早く戻ってきていいのかい？」

主が戦っているのに何とも暢気な。

「始まってしまったら、終るまでボクには何も出来ませんよ。」

まあ、そんなんだが・・・意外と大雑把でもあるな彼。
こういうして会話している間にも当然戦いは進んでいる。
予想通り、二人が得物同士を打ち合う事はない。

柄で弾く光景は何度かあるが、軽量の細剣だから耐久度的な問題だ。
今回は真剣じゃなくて刃も潰してあるし、先も多少丸くなっている
分だけ耐久度が高い程度。

「ん？」

「どうしました？」

「・・・マール君。従者として、きちんと主の身の回りの物の確認
はしているかい？」

当然の仕事なんだが・・・。

「はい？そりゃ、一応は。」

うん。

やっぱり、彼は太雑把なんだな。

「マール君・・・一つ貸しね。」

オレはヤレヤレと大きな溜め息をついた。

H u r r y ! 皇子は最中に躍り出る。【後】(前書き)

おニューな壁紙で心機一転だっ。

・・・正直、今更会話文と文章文の行間空けるのもなあ・・・。

でも、某サイトの計算曰く、会話率は27%と3割切ってるからなあ。

Hurry! 皇子は最中に躍り出る。【後】

ああ、前も全く同じ事を同じ相手にやったよなあ……全く芸がない。

ついでに空気も読めてない気がする。

そんな事を考えながら、オレは野次馬の何人かを掻き分け激突する二人の間に踊り出た。

「ッ、痛ウ……。」

言っておくが、オレは痛みを黙殺する事に慣れているだけであつて、我慢強いというワケでも痛みを感じないワケでも全然ない。

「トウマ?」

呆れを含んだ驚きと共に、自分の槍斧の柄を片手で受け止めているオレを見てる。

くそう……右手打撲したかな、この馬鹿力めつ。

骨折一步手前のヒビかも知れん。

そして、問題はオレの前に押し出す様な状態で、掴んだ左手の細剣。掴んだオレの手から、ぼたぼた血が流れ出ている。

「と、この様に何やら互いの武器に手違いがあつたようなので、失礼ながら割り込まさせて頂きました。」

キツと、このアホな事態の引き金になつた例の偉そうな赤服オヤジを睨む。

あ、偉いのか。

「何度も無粋な真似をして申し訳ありませんでしたね。」

隣のラスロー王子にも一応、な。

「いや、止めに入ってくれて良かった。済まないが早く手を離してくれ。君の手当てをしなければならぬだろう?」

前回といい、意外と聞き分けがいいな、彼。

王子とか皇太子とか、一癖も二癖もあるのが当然だと思っているオレが変なのか?

いや、そんな事はない。きつとナイ。絶対ナイ。

「競う交流も大いに結構かと存じますが、どうせなら一生の付き合いになる交流の方が私は欲しいですね。」

本音を何の嫌味もない様にさらりと述べて、ラスロー王子とアイシャ姫の武器から手を離す。

「素晴らしい！それこそ、この施設の理想ですわっ。」

横合いからの声は、何処から現われたか謎な施設長だ。

さつき見た距離より近くで見ると、肌の白さは雪の如くというより氷の透明感。

「それでは、私はこれで。」

会話するのも億劫だが、何よりも”目立ってしまった”事実をこれ以上拡大したくない。

さらりと流して、マール君の居る方に歩く。

何時もながら、やってしまっただけから思うんだが、さてこの状態をミリイにどう説明しよう・・・困った。

バルドみみたいに筋肉と精神力で、傷とか血流とか抑えたりできたらいいのに・・・。

人間の範疇にいる方がいいか。

「マール君のせいで目立ってしまったじゃないかー。」

どうしてくれるんだつとばかりに睨んでみる事にする。

「えっ?!あう、うっ、うっ。」

瞳を潤ませて泣き出す一歩手前のマール君。

耳までしゅんと心なしか丸まってるのが楽しい。

いいな、亜人種。

「まあ、いいや。部屋で手当してもらえる?右手は固定しないとヤバいかも。」

何もしなくても、ズキンズキンと鈍痛がしてくるわ。

「あ、はい!します、します!」

コクコクと激しく縦に首を振りまくるマール君、首落ちるぞってそれはないか。

意外と可愛い。

オリエの次に。

そこは譲らないぞ、流石に。て、何をアホな事を……。

「おろっ?」

マール君を部屋に促しながら、今更左手の感覚がない事に気がついていた。

「どうしました?」

傷は深くない。

変な筋肉や腱を切ってもいない。

ただ感覚がなく動きも鈍い。

「と、なると……。」

冷や汗が出てきた。

感覚はもう肘辺り近くまでなくなってる。

「ご丁寧なコトですね。と思うわけだよ、マール君や。」

「?」

自分の意思に反して、指先はふるふると痙攣まで始めていてだな。

「ね、マール君。悪いけど傷薬以外にも用意して。剣にしひれくふりが……。」

呂律も回らなくなっただか。

舌を噛まないようにしないと。

歩けなくなったら、マール君一人じゃ運ぶのも大変だ。

完全に力が入らなくなる前に、大股歩きで出来る限り部屋へと進む。意外と即効性だけれど……後遺症の残るヤツじゃないだろうな? それだと大問題になるが、これを仕掛けた人間の目的がこの施設の廃止とかじゃない限り、有り得ないなあ。

でも、廃止になっても誰が得するワケではないし、夕チの悪い悪戯の類だろうか。

「お?」

膝がカクカクしてきた。

うっん、マール君には悪いが、あとは何とか運んで行ってもらう事

にしよう。

オレは顔面を打たない様にその場に崩れて倒れた。

Inability! 皇子は一日で二度遭遇する。【前】

「ああ・・・酷ひメにあつら。」

完全には痺れの取れない身体で呻く。

酷いメというのは、どちらかというとありったけの種類の薬を混乱するミリイに飲まされたという方だったりもする。

一応、痺れ薬に効くとされている物だけを口の中に放り込まれただけでも、良しとするべきなんだろうか？

左手には包帯が巻かれ、綺麗な蝶々結びで留めてある。

「流石、ミリイ。」

手当て慣れ過ぎだ。

右手は一応、手首から固定されてはいるが、骨は大丈夫のようだった。

「もー、いい加減自重して下さい。怪我をするなら、すると予め教えて下さい、トウマ様。」

涙目がようやく治まったミリイが、少し怒り出す。

「かなり・・・難易度の高ひコトを・・・。」

そうは言っても、好き好んで怪我をしているわけじゃなくて、ただ単にオレが弱っただけ。

泣けてくる現実だ。

「困ったもんだねえ、オレも。」

「自分で言わないで下さい!」

バンバンと寝台を叩くミリイ。

埃がたつじゃないか。

というか、オレ達のと違って大いにフカフカだな、ヲイ。

ここまで扱いに差が出ると、いつそ清々しくて反貴族派になりそうだぜ。

「と、馬鹿な考えはおいといて。」

ようやく痺れも引き、痛みだけが残った身体を起こすとオリエが

寄って来る。

「オリエ？」

一通り、オレとミリィのやりとりが終わってから、行動するのがオリエらしい。

オレの傍らに来たオリエは、おもむろにオレの頭を撫で撫でと……。

「あうう……オリエ、ありがとーっ！」

オレ、感激。

「意外というか、やっぱり元気じゃないか。」

「ん？」

部屋の扉に立つ人物。

……見なかつた事にしよう。

「オリエ、今日の夕飯は何にしようか？オリエの好きな物にしよう、そうしよう。」

「私は”建前上”の上司にあたる人間なのだが？」

だって、面倒なんだもん。

「上司というか、皇太子がたかが一兵卒の怪我如きで、しかもこれ見よがしに神器をブラ下げて。」

弟馬鹿にもほとほと呆れるよ。

オレは、完全には貴方の味方にはなれないというのに……。

「そうだな。何かと物騒だからな。模擬戦用の武器類が全て真剣にすり換えられるくらい。」

返す言葉も御座いませんよ、ええ。

「んで、何時、誰が、何の為に？」

そっちの方が大事。

「武器は備え付けだが定期的に確認しているから、何時かは直前だな。誰がはどちら側も有り得る。勿論、第三者も。」

ラスロー王子側はあからさま過ぎるなあ。

「ラスロー王子の武器をすり換えたのは、アイシャ姫側のがまだしつくり来ますね。」

それでも動機からすれば、犯人は広範囲に及ぶ。

「愉快犯、謀略、暗殺、選り取りみどりだな。」

「暗殺はどうかと思いますね。」

「だったら、痺れ薬なんか使わずに毒にすればいい。人を殺せるような。」

それに互いの実力は拮抗していた。

そんな他人任せ過ぎる手段は、温過ぎる。

「ところで。」

「はい？」

急に険しい表情になり、声音も真剣なモノになる。

「その子は見ない子だが？誰だい？」

兄上はオリエを見る。

確かに紹介すらしてないな。

「この子は、オリエと言います。」

あー、どう説明するかな・・・面倒。

「んー、オリエ、オレの娘になると妹になるとどっちがいい？」

小声でオリエに囁く。

「アル、聞こえてるぞ。」

耳が良い兄上だな、もう。

「ま、そんな感じの子です。少し障害はありますが、優しくて優秀な子ですよ。」

何せ、きちんと読み書きが出来て、それなりの歴史書を与えると次々と読破していったくらいだ。

ちゃんと後で筆記で聞いたが、本の内容もすっかり理解していた。

「そうか。そう言うならそうなんだろう。私の自己紹介は、国に帰った時にさせてもらうよ？」

・・・どうしてもオレの兄上の皇太子だと、自己紹介したらしいな。

余計に面倒だ。

「用が済んだら、さっさとお帰り下さい。オレももうすぐ出ますか

ら。理由は察して下さい。」

だって、ここは他国のお貴族様の屋敷の一室ですよ？

そこに他国の男がいるのも問題なのに、目の前の人間は皇太子ですからねえ。

変な噂が流れたりしたら、互いに大変だ。

「わかった。あと数日は施設にいるぞ。」

「はいはい。何かあったら連絡しますよ。」

基本的には絶対しませんが。

とにかく、さつさと兄上を部屋から追い出す事に成功はしたのだっ
た。

I n a b i l i t y ! 皇子は一日で二度遭遇する。**【後】**(前書き)

ハッピーバースデー自分(爆笑)

「帰ってしまわれるのですか？」

兄上を退散させた後に、自分達も部屋に戻ろうとしたオレ達にそうアイシヤ姫が声をかける。

どいつもこいつも自重しろよ。

あ、オレもか。

「元々、オレ達は別の部屋だし、ほら、用事も済んだしねえ？」

その結果が左手が使えず、右手は完全固定という有様なんだがね。

「でも、そのお怪我じゃ不自由ですし……。」

心配そうにうるとオレの両手を眺める。

何か、本当にコレ、さっきまであんな長くて重い武器を振り回してた人と同一人物？

「その為にミリイ達もいるし。」

ね？と語りかけたミリイが力強く頷く。

違う意味で心配だが。

ここにおいて怪我の治りが早くなるワケじゃないし。

「何か最近、怪我とか倒れるのに慣れ始めてるし。」

自分の現状の弱さも把握出来たし。

「それに夕飯を取りに行かないと。今日はオリエの好きなモノを食べる約束したし。ね？」

オリエに微笑みかけると、コツクリと無言で頷く。

沢山栄養のあるものを食べてもらって、少しでもその軽い身体を健康的なものにしてもらねば。

最早、それはオレの使命の一つだ。

「それでしたら、ここで……。」

「結構です。」

これは即答でお断りする。

何やら宮廷料理とか出てきそうで怖い。

オレ、意外と貧乏性。

「何度も言うけど、目立ちたくないんだ。夜分に貴族のお姫様の居る所から、男が出てきただけでも大変だ。」

首をすくめるオレに、不思議そうに首を傾げるアイシャ姫。

これだから、箱入りは……。

「ま、荷物の整理もあるし、今回は遠慮しておくよ。」

なんて社交辞令。

ミリイとオリエを大きなお風呂に入れてあげたいから、来てもいいんだろっけれどな。

「それでは次の機会に。」

ああ、やっぱりこの笑顔は、”社交辞令”という単語が脳に無いらしい。

困ったな。

次は何か別の理由を考えなくては。

会わない様に常に逃げ続けてやろうか……。

「ああっ！忘れてましたわ。」

今度はナニさ。

「どうかなさいましたかねえ……。」

どうせロクなコトじゃないだろうが、設定上はかなり身分が上なので無視するわけにもいかない。

思い出した様にその場を去ろうとしていたオレに近づくアイシャ姫は、その笑顔のままオレにくちづけした。

「な、何を?!」

呆気にとられるオレ以上に、驚いているミリイとオリエ。

何て子供の情操教育の宜しくない事を!

「お約束していた見返りですわ。」

「……はい?」

何時そんな見返りを頼んだ?

「古来より女性を助けた殿方には、祝福のくちづけと決まっておりますもの。」

何処のお伽噺の世界じゃあつ！！

「お伽噺の王子と姫じゃないんだから……。」

ああ、オレは皇子だったな、一応。

立場的には変ではないのか。

「お約束かと？」

全く以て悪気皆無のアイシャ姫。

「オリエの教育上よろしくないなので、自重して下さい。」

脱力しきった精神では、その一言を返すのがやっとだった。

どうせ意味なんて理解してくれないんだろうな、この姫は。

結局、初日から流血沙汰で怪我をして、夕飯を食べるという流れは

我ながら何とも言えない。

でも、三人で食べた夕食は楽しかったんだ。

例えオリエが喋れなかったとしても。

夕飯を終えて、ミリイが片付けの為に部屋を出たのを確認すると

オレはオリエを手招きした。

椅子代わりに寝台に座る（行儀悪い）オレの横にちよこんと座るオ

リエ。

「ごめんね、オリエ。」

ただ楽になりたいだけだと言われたとしたとしても。

「オリエの今までの境遇の何割かは、きっとオレのせいだ。」

ヴァンハイト、皇族、大人、男……このどれを取ったとしても。

「だから、オリエを可哀想だと思ふのと、自分が楽になりたいと思

ふのと半々だった。」

世界の一端にいる人間としても。

「きっとオレは善人のフリをしていただけなんだとも思う。」

だから、きちんと言わないとな。

「何時かきつと、オリエみたいな人間達をなくす様にするから……

努力するから……。」

誓わないとオレが耐えられない。

声に出して言わないと崩れていきそうだ……その困難さに。

それでも誓わなきゃなんない。

やらなければならぬから。

オレは必ず。

現実は何もしなくても待つてはくれないし、やって来るんだ。

「どうした？」

オレの横に座っていたオリエが、おもむろに寝台の上に立ち上がる。

彼女の小さくて可愛い唇が、オレの頬に触れる。

「ほへ？」

一体？

というか、どういう意味？

オリエはそんな混乱しているオレに伝えるように、手を取り指で字を書いていく。

「・・・お礼？」

オレの手の平に描かれたその文字を読んで、コクリと頷く。

・・・早速表れてしまったアイシャ姫の影響にオレはただただ頭を抱えた。

つまり、だ。

”オリエ（女性）を助けたオレ（殿方）には、祝福のくちづけを”

ただ・・・オリエはオリエで考えて、感謝の意を表したかったんだ。例え、オレのした事がオレの自己満足的な偽善的な行為だったとしても。

にこりと微笑むオリエに、オレは自然と微笑み返せていた。

なんだ、意外とオレはまだ頑張れるじゃないか。

オレの笑顔を確認すると、オリエの指は再び文字を描いていく。

一文字一文字をゆっくりと。

「ありがとう。」

綴られていく文字コトバにオレは心からそう述べた。

彼女の気持ち。

”妹でも娘でも。なれるなら、どっちでもいい。”

そんな想いに、オレは全力で応えようと再度心に誓った。

I n a b i l i t y ! 皇子は一日で二度遭遇する。【後】(後書き)

何に遭遇したのかは、そういう事で(苦笑)

Jackpot! 皇子は宝の山に狂喜する? 【前】

翌朝。

身体の重さに驚きつつ、瞳を開く。

「そうだった・・・。」

昨夜、半刻以上かけて口論、討論した結果、一つの大きな寝台で三人で寝たのだ。

何故かは聞くな。

ミリイはオレの胸辺りに頭を寄せたまま、未だにすうすうと寝息を立てている。

オリエは・・・。

「おはよう、オリエ。」

既に目を覚ましていた。

朝の挨拶をすると、もぞもぞと布団の中を移動してオレの顔の横までせり上がって来る。

「よく眠れた?」

じつとオレを見詰めたまま頷く。

「良かった。今日からは沢山、一緒に勉強とか頑張ろうな?」

ミリイが乗っている右腕と反対の腕で彼女の頭を撫でる。

「あれ?」

切り傷の怪我をした左腕でオリエを撫でて・・・痛みは何で?

「ちょっとオリエ。悪いけど、一回、こっちの腕の包帯解いてくれる?」

・・・前にも一度あったよなあ。

恐る恐るオレの包帯を解いていくオリエ。

果たして、そこには?!

「と、怪我が治ってるワケね。」

さて、この原因は何だろね。

近くにディーンの剣があるのか？

いや、でもアレはディーンの手につけられた傷を、剣自身が治したという理屈であって、今回とは違う。

ましてやオレ自身の能力なんかでもない。

その証拠に前にエルフの森で傷つけられた傷は、一晩で完治なんざしなかった。

「今回はどういう原理なんだろうね？」

思わずオリエに聞いてしまったが、わかるはずもなく。

無傷になり、包帯を解かれてさっぱりした腕で彼女の頬を撫でる。

とてもくすぐったそうに目を細めるオリエ。

「可愛いよ、オリエ。」

これからはこれを口癖にでもするか。

それもいいかも知れん。

「勿論、ミリイ、君もね。」

「あ、ありがとうございます。」

何時の間にやら起きていたミリイにも同様に告げる。

「さて、ミリイの涎を拭いて、今日の学習内容を決めないとね。」

「えっ?!」

さつと袖口で自分の口元を隠すミリイを横目に笑う。

「あ！騙しましたね!!」

とりあえず、剣術・体術の類はやめておかないとな。

昨日あんだだけ目立ってしまったし・・・他国の剣術とか見学したかったのに。

「はぁ・・・。」

昨日の出来事を思い出すと、朝からぐったりと疲れてしまいそうなので早々に思考から切り捨てる。

朝食を済ませてミリイとオリエを送り出すと、今日のオレは実は暇なんだよ。

よくよく考えたら、オレ、大衆環視の前で怪我をしたワケだろう？出血もしたし。

それが一晩で完治するとかって、どう考えてもおかしい、怪しいと気づいた。

ので、本日はお留守番。
部屋でじっとしているつもりは、全くないので一路”図書館”とやらに。

「先入観とかにとらわれなければ、知識はいくらあっても困らないからな。」

本を読んで、ついでに昨日の事やこれから何を学ぶとか、色々考える事は盛り沢山ある。

我がなら前向きになったなあ・・・という事にしておいて欲しい。

昨日の剣の毒の事は、恐らく第三者少なくとも戦った本人同士は関与していないと思っっている。

曰く、動機がない。

いや、確かに二人は面識も因縁もあるが、あるとしてもどう考えても二人が真つ先に疑われる以上、可能性は限りなく低い。

二人の因縁のようなモノは知っている人間はオレがいるし、今後の事を考えたら疑惑を持たれたまま行動するのは大変だ。

「お陰でオレが目立ったと。」

溜め息一つ。

さて、考えながら迷わず目的地に着いたのはいいが。

「広えな、こりゃ。」

本棚で迷路が造れそうだ。

「万単位は・・・あるか？」

何を調べるにしてもだ、さてどこをどう手をつければ良いのやら・・・。

「まいったな。」

管理している人間はいないのか？

吹き抜けの階層の壁という壁にびっしりと備え付けられている棚の前で途方に暮れる。

三階層くらいの高さはある。

「ううむ。」

恐らく、分類くらいはされているだろう。

「あたりをつけて、片端から背表紙の題字を見て回るか……。」「
どうかきちんと分類されてますよーに。」

「ふう。普通こういうのは知的な美人のお姉さんが、管理しているのが相場だろうに。」

もしくは、ひげもぢゃのおぢいさん。

ああ、偏見だ。

「美人かどうかは、自信ないですねえ。」

ん？あれですな、この展開は……。

「見なくてもわかります、きつと美人です、ええ。」

展開的に飽きてくるよな、うん。

「あら、まあ、大した自信なんですね。」

本棚の影から出てきた女性。

長い金髪に紫の瞳。

肌は白く、身長はオレより上でスラリとした知的な女性。

とがった顎にぶるるとした唇。

なだらかな身体の曲線。

太過ぎず、細過ぎず。

どこをどうとつても美人です。

「褒めても何も出ませんよ？」

今……。

「気のせいかな？」

オレ、今、美人で口に出てたか？

出てたか。

「どうしました？」

にっこりと微笑む知的美人。

何処かで見たような……。

いかな、もつと人に関心を持たねば。

何時、出会い頭にヤラれるかわからん。

それはもうラミア姫でもアイシヤ姫でも懲りてる。

「オレの独り言は、何処まで聞こえてました？ 幾つか読みたい本があるんですけど・・・管理人さんですよね？」

確信はない。

ただ、ここを出てきたんだから流れるにそうだといいなあという程度。

主にオレが楽でいい。

「ええ、そんなカンジですかねえ。」

万歳。

「あのこれから言うようなのが題材の本ってありますかね？」

早々に協力をお願いしてみた。

Jackpot! 皇子は宝の山に狂喜する? 【後】

どっさりとおれの横に塔のように積み重ねられた厚い本達。

枕にするにも、きつと硬過ぎて使い様もないだろう存在感の本。というか、絶対魔される。

その本達を片っ端から読み漁っているところ。

まず挑戦したのは戯曲集だ。

それも古いものばかりで、それでいて古典と言われている正統派ではないもの。

大衆演劇用に書かれたものや、それこそお伽話と呼ばれる範疇のもので。

戯曲集の横には、それに合わせた年代以前の歴史書。

これも国とかで編纂された由緒あるものでなく、民間伝承や偽典と呼ばれるものが主体だ。

「これにも特にそれらしきものはないか……。」

調べたかったものは、あの場に居た人間達の物語の結末ではなく、そこに至る前の彼等を見た者達等で綴られた物語。

そつだ、オレがあの時。

” 剣を初めて持った時に視た光景の ”

彼等の出身の手掛かりになるようなものだ。

少しでも、デイン達の話。

彼の事をどうしても知りたかった。

物語や歴史書は、残念ながら改竄されたり、載っていない事が沢山ある事をオレは既に知っている。

オレはあの光景が嘘や幻とは思っていない。

だから、それを裏付けるような何か欲しい。

「うう……流石に疲れた……。」

単語のみで斜め読みの検索状態とはいえ、本自体がデカかったり厚かったりと読むのですら四苦八苦だ。

しかも、読んだ物のほとんどが、何処の国の国民でも”最低一つは言える神器”の話ばかり。

”クロアートの天斧槍” ”セルブの流細剣”とか。

”ヴァンハイトの双星剣”・・・で、”セイブラムの王錫”か・・・。

他にもあるがな、”地樹槍”とか。

どの説が正しいのかわからないが、一般的に神器を持つ英雄と呼ばれる存在は六、七人はいたという事くらいか。

当の神器の名称も持ち主の名前部分以外は、通称とか後世につけられたものであるらしく、本によってまちまちだったりする。

その名の由来となる物語も色んな地で上演されていた様で、解釈も様々。

斧と槍の持ち主は姉弟だったとか、誰と誰が恋愛関係だとかの悲恋物語とか・・・中には同性同士の禁断の・・・多岐に渡る。

最後の辺りは突っ込むな。

「着眼点は悪くなかったと思っただけだなあ・・・。」

大体、神器はどうやって生まれたのかもわからん。

ただ、わかった事は、セイブラムの英雄が女性だったのは確定。

神器は結局は相性だし、人を選ぶというのは周知の事実だから全く驚きはしないけどな。

着眼点は本当に良かった。

「着地点が悪かったただけだ、うん。」

本を読んで拾えた単語の使える部分だけでも、脳みそに入れておこう。

「物凄い速度ねえ。」

あ、完全に忘れてた。

「流して読んでるだけですから。」

実際のところ速い方なのかも知れない。

城の外に出でから、自分の能力が世間の他の人間と比べて、どれくらい的位置になるのか少しずつ把握しようとは考えてはいる。

だって、今までの比較対象は兄上とバルドくらいしかいなかったから。

ここに来て、オレの戦い方は一般的な貴族階級と比べて、全然綺麗じゃないのは完全に理解した。

寧ろ、余りにも皇族としては激しいってコトも。

オレの人生の大半は机上の空論みたいに、実地というか基準というか・・・まあ、わかって欲しい。

「それでも速いと思うのだけれど？」

本を読む為に視線を落としているせいか、女性の口元辺りまでしか視界に入っていないので表情は全く読めない。

あ、下唇の辺りにホクロがあるのは見えるな。

こういうのって、妙に色っぽく見えるのはなんでだろうね。

「さあ？他人と比べた事がないんで。」

本当に。

「今まではどんな本を？」

何だ？質問時間か？質疑応答か？

他に話し相手になるようなヤツがないから、仕方がないと言えば仕方がないが。

「本と見れば何でも。興味のある内容なら更に深く。」

だって他には、バルド相手に剣の練習くらいしかやる事なかったし。

皇室長官くらいか？

他に話し相手と言えば。

ああ、長官か・・・ついでに嫁探しも此処でしてやるつか、こんなくしよう。

オリエの母親役つてもアリだなあ・・・って、シルビアやミランダに任せればいいじゃん。

置いてきた人間、探している人気の顔が次々と浮かんで来た。

意外と増えてきたじゃねえか、アルム。

「じゃあ、博識なのかしら？博識な貴方にちょっと質問。というか、

意見を聞いていいかしら？」

「面どつ・・・ああ、どうぞ。」

今迄、面倒とか思つてロクな事がなかったから、いつそ発想を逆転して進んで聞いてみよう、うん。

「貴方は、宗教国家をどう思う？」

「は？」

前言撤回。

前向きだろうが、後ろ向きだろうが、面倒なモノは面倒。

「それはセイブラム法皇国をつてコトで？」

思わず、本から顔を上げ、女性の顔を見る。

整つた顔立ちの余裕の笑み。

何か、何処かで見たような感じがする。

「むむう・・・素晴らしい法を持つ国としては良いと思う。」

国を治めて動かすにあつて良い法と、民という人間達を治める良い法は別な場合がある。

それが欠点だと思ふんだよ、オレ。

「宗教というか、思想？そういうのは人の心の安寧をもたらす為には良いと思ふし・・・。」

だから、この世界の人々は神器を受け継ぐ英雄を王に求める。

「ただ、政治は善だけでは行われず、人もまた善だけでは成り立っていないから。悲しい事だと思ふけれど。」

だから戦があり、英雄が必要で王がいる。

だから人が集まつて国ができ、法がある。

だからつて、貴族主義に諸手を上げて賛成だけはしないが。

「人がそういうのを超えた先に行く為には、何段階かの試練があつて、それには気の遠くなる時間が必要か、或いは・・・。」

或いは・・・。

「それを待たずして滅ぶかだと思ふ。」

ヴァンハイトを見ればわかるだろう？

「少なくとも滅ぶ時間を遅らせる、防止する要因としては宗教国家、

法皇国という存在は悪くないと思う。」

あくまでも延命だと・・・人の欲は限りないから。

だって、まさに今のオレがそうじゃないか？

こんな所まで来て、シルビアを探したり、オリエを保護したりさ。最初はミランダくらしか居なかつたんだぜ？

「未だ試行錯誤、模索が必要というコトね。」

つか、そういう思考を停止したら、それこそ人間自体が種としてお終いなんじゃないかな。

「かな。あ、次、この本を片付けたら、法に関する本と建築関係の本でありますか？」

「まだ読むの？よっぽど本好きなのね。でも・・・建築？」

あはは、やっぱりオレ、文官人間に見えないんですね。

武官向きに見えるぞ。

昨日の事を見た人間の前じゃ、たとえ文官だと強く主張したところで誰も信じちゃくれなйдらうから、今更どうでもいいっちゃいいけど。

「他国との法の比較をしてみても良い点を持ち帰って報告したいし、

建築は・・・。」

「建築は？」

「・・・実家の職業が大工なもんで。」

ちよつと苦しいか？苦しいよな？

法に関する勉強は元々ずっと学んでいた。

流石に国全体の法には組み込めないが、リッヒニドスの条例で良い制度があつたら、是非カーライルと相談したいところだ。

建築は、この施設に入ってから学ぼうと考え始めた。

きっかけは・・・アイシャ姫の所のお風呂。

アレがさ、もし州府にあつたら。

いや、城にはあるよ？

そうじゃなくて、皆で入浴。

民も気軽に入れるような公衆浴場。

そんなのがあつたら良くないか？

リツヒニドスには長旅をしてくる行商人もいるし、天領で働く労働者もいる。

そんな者達を癒す施設。

アリだろ？アリだと思つんだ。

ミリイとオリエの喜びを見て、そう思つた。

技術的に大変だつたら、蒸し風呂と水風呂だけでもいい。

その為には水に強い建築物の造りや水を川から効率的に引き込める方法など色々と思つたい。

我ながら安直だと思つが、折角こつという施設に来たんだ。

新しい事を始めたり、学んだりしてもいいんじゃないかと思つ。

「自分の出身地が辺境なもので、良い建築法を学びたいと。」

ああ、オレ、一応、リツヒニドス出身な。

またもや設定上だけど、ヴァンハイトの皇族は元々リツヒニドスから遷都したんだから、ある意味で嘘じゃない。

「す……。」

「す？」

「素晴らしいですわ！自らが学びたいモノを見つけ、学びたいだけ学び血肉にする！これぞ理想の学び舎です！」

はあ……て、この発言……て？

「あ、施設長？」

そりゃ、何処かで見た事あるよ！

オレ、自分に関係ない人間と一度思うとダメだな。

「……ちよつぴり、今の傷つきました……。」

ですよね！

自分でも酷いと思ひました。

「では、今の本を片付けて、次の本をご用意致しましょう。」

「あ、オレもやります。」

開いたままの本と閉じて、本の塔の最上階に積も……。

「ん？」

今、見慣れない単語が・・・飛び込んだ。

「従者に舞い降りた奇跡」？
新単語発見。

「ああ、それは我がセイブラムの北方辺りに伝わるお話ですねえ。」
「お話？」

「英雄譚の中のちょっとしたオマケ話ですね。」
オマケ。

・・・オマケは多い方がいいよな？今は。
「ちなみにどんなオマケで？」

K i n d n e s s ! 皇子は時に大人気なく。【前】

「従者に舞い降りた奇跡、それは”予言の力”・・・か。」
図書館で聞いた話を脳内で反芻しながら、部屋への岐路を取っていた。

「まあ、神器を創るという半端ない存在がいるくらいなんだから、予言者ぐらいいてもいいよな。」

第一、ラミア姫達の祖母も予言の力は持っていたみたいだし。

・・・精度は高くないみただけねど。

血が濃かった何代も前の世代なら、もっと強い力だったのかも知れない。

「かくて真実を視し者は、実像を見る必要はなく、映るモノ全てが世界也か・・・。」

代償があつても、そんな力が欲しかったのかね。

・・・それくらい切羽詰ってたのか。

額面通りに受け取れば、主の役に立ちたかったのだろうけれど。

視力を失うんじゃない・・・。

例えば、オレとの関係上、一番近いレイアが主であるオレの為に視力を失う。

つまりはそういう事で、そんな事がもしあったとしたら？

「ヤベ、耐えられんな、ゾットする。」

しかし、その従者とやらは、本当に存在していたのだろうか？

居ればデーンとヴァンハイトの結末も予言出来たんじゃないのだろうか？

そもそも誰の従者で、あの戦いの最中にどうなったのだろうか。

誰の従者だったのかという事に限れば、セイブラムという確率が一番高い。

でなければ、セイブラム方面でのみ伝わるといふ形で残らなかったはずだ。

もし、能力を持っていなかったとしてもだ。

従者がいたという事実だったり、従者すらいなくても何かそれを連想させる出来事があったのか知れない。

「しかし・・・世の中、広くて知らない事ばかりだな。」

当分は図書館通いでも良い気がしてきたよ。

ここに来る途中、馬車から外の風景を見たけれど・・・。

「本当、オレの存在なんてちっぽけだなあ。」
なんて。

自然や歴史って凄いやな。

だからこそ小さな人間同士、種族同士で差別とか、いがみ合ったりとか本当に馬鹿らしい。

断然、皆が笑い合える方がいいじゃないか。

少なくともオレは、オレの周りの者達の為に最低限の世界をつくらなければならぬ。

今はそう思える。

「デーンやトウマの事を棚に上げるワケじゃないよ・・・。」

出来る事があるなら、やっておきたいんだよ。

「どうせ、後で罰を受けるなら、最後には笑って受けたいじゃないか、なあ？」

思わず、オレは気配のした方にくるりと向いて同意を求めてしまった。

流れだ。

「何だ、君か。」

殺気とか無かったしな。

「こんな所にいらっしやいましたか。探したんですのよ？」

につこりと笑顔でオレを迎えたのは、アイシャ姫だった。

正直、彼女に会う度に戦いに巻き込まれているオレとしては、現在最もお会いしたくない相手だ。

「ええと、探しておられたという事は、何か用事が私めにあるという事ですよね？」

思わず敬語に・・・しかも慇懃無礼。

ちなみに当然、オレは彼女に用事などない。
ないのだよ。

それにしても、一応両手に包帯巻いたままで良かった。

じゃなきゃ、完全に変人扱いが待っていただろう。

いや、この姫だったら多分、そういう体質なんだとアテにされ、様々な厄介事を言い渡されそうだ。

「そんな他人行儀になさらなくても・・・。」

眉を八の字にさせてシヨンポリする姫に、オレは思わず『他人だろうが。』と言い放ちたくなるのをぐつと堪える。

貴族相手に事を荒立てると面倒だ。

今のオレはただの平民、ただの平民、ただの平民・・・。

「初めてくちづけをした仲ですのに。」

「ぶっふうつつっ!？」

だっ、誰かつっ、オレに空気を・・・窒息する!

初めてって・・・まあ、オレもキスは・・・いや、それは置いといて、だ。

「あ、あの、姫?まさか、それを誰かにおっしやったりとか・・・してませんよね?」

声が上がってしまった。

「どうだったかしら?」

記憶を確認しているのかっ!

首を捻るな!

答えを待つ間、冷や汗しか出ないじゃないか!

「・・・基本的に。」

例外はどのようなので、どうしてそうなるのですかね?

脱力。

最悪、この施設からの脱走の準備でも始めるかな、こりゃ。

「と、いうのは置いておきまして。」

置いておかれても困る問題なんだが。

「今回は一つお願いがございました。」

「・・・またですか？次はどなたと戦うんですか？」

クロアート人って、戦闘狂なんじゃないか？ぐらいの勢いで聞き返す。

「いえ、そうではなくて、今回は私の国の者・・・部下みたいなものに会って欲しいのです。」

・・・最初からオレが戦う展開か？こりゃ。

「なにゆえに？」

もしかして例外つてのはその部下達じゃないだろうか？

んでもって、我が主になんて事を許すまじ！とかいう・・・。

「この間の戦いの事を見聞きした者達の稽古を見て頂きたいと思いをまして。」

それはそれで、話が大きくなっているんじゃないだろうか？

「見るつて、この両手の通り、オレは戦えないし弱いんだけど？」

ふふふ、実は中身は完治しているとは思うまい。

大体、あんな大斧の槍を振るう怪力の奴等の武器なんざ、オレは受けたくもない。

「大丈夫ですわ、トウマさんに見て頂けるだけで。」

「本当でしょうか？」

正直、他国の武器を使った戦術を見るのは、オレの戦いの得になる。

どうせ断れないぐらいの身分差だしな。

外交問題とかに発展しても御免だ。

「ええ、ご迷惑はおかけしませんわ。」

はぁ・・・。

姫様、前回はそんな事言っただけでいいか？

K i n d n e s s ! 皇子は時に大人気なく。【中】

オレはここに来て、様々な事を学習しているし、新発見もしている。

自負もある。

そんなオレが今日、たった今学習した事と言えば”常に完全武装でいる”だろうか。

「帰りたい。」

オレを見つめる目と目と・・・あと視線？

「で、ワタクシめは何をすれば宜しいのでしょうかねえ？」

軽装の鎧に身をかためた集団が、オレを観察している。

観察だ。

檻の中にいる珍獣の気持ちも現在味わっている。

「というか、皆、女性なんですね。」

「私の近衛師団という程度なので。」

「はあ。」

とりあえず、身を守る得物か逃げ出す翼が欲しい。

ちなみに集団の規模は、十人前後。

「とりあえず訓練とやらは？見せて頂けたりするのでしょうか？」

どうにも訓練という空気が全く感じられないが・・・。

「そうですね。では、どういたしましょう？」

「いや、何故オレに聞く？」

思わず今までの丁寧語が飛んでしまった。ただろ。

”見る”ってやっぱり”指導”って意味だったみたい。

オレが人に教えられる人間かっつての。

「まあ、何時も通りで。オレも見たい事だし。」

もう一度脱いってしまった丁寧語は、放置だ。

今更取り繕ってもオレが間抜けに見えるだけ。

それに重武装や間合いの広い武器の動きって見てみたいし、興味が

ある。

だからついて来たワケだしな。

「はい。では、皆さん、何時も通りの組打ちを。トウマさんもお気づきになられた事がありましたら、おっしゃって下さい。」

「はぁ……。」

大体において、まず、この姫がオレに丁寧語を使っている時点で様々な矛盾が生じている事に気づいているんだるか？

兎に角だ、オレの足しになるといいなあ。

「それでは……始め！」

アイシヤ姫の号令とともに棒の先端に重りと布を巻いた物を振り回して打ち合いを始める。

冷静に考えて攻撃とは、まあ、得物を相手にブツけるまでの手段が色々あるが、それはばっさり切るが如く割愛。

割愛すると、最終的に点・線・面しか攻撃ってないんだよ。

武器っていうのも、この三つのどれが得意とか特化しているかしかない。

例えば、オレの国の双剣の場合、線の攻撃が得意だよな、当然。

でも、一応突きが出るから点もある。

で、斧槍ってのはある程度どの手段でも取れる武器だ。

柄を使えば点も線も一応あるし、振れば線、斧の幅広い部分だって武器自体の重量があるから面だってなる。

何より間合いの長さがある。

「……逆に”重い”ってのが弱点だが。」

「ところで、普段は基本全身鎧？姫様みたいな。」

軽装の鎧を着て動いている集団を指差す。

どうにもこうにも気になる性分みたいだ、オレ。

「え？ええ、そうですか。」

「ふむ。」

第一段階として、懐に入る。

間合いが長いしな。

んで、懐に入ると全身鎧の硬い防御。

そうなるとやっぱり攻撃側は点の攻撃が堅い。

鎧の隙間があつて、そこを瞬時に狙つて通せる技量があれば。

そういう意味で、例のラスロー王子の選択は正解だよなあ。

「効率の問題というか、消去法というか、寧ろ二択か？」

「どうかなさいました？」

一人ブツブツと呟いているオレにアイシャ姫が声をかけたところで、思考から復帰。

嫌だなあ・・・なんで、オレ、思考が戦つて勝つ方法とかなんだろ
う。

「ねえ、姫？」

「はい。」

「この人達をどうしたいの？強くしたいとかだったら、人選間違えて
ると思うんだけど？」

第一に他国の人間に頼んでどうするよ。

「私は思うのです。戦う勇敢さも大事ですが、戦わないのにこした
事ないと。」

「そりゃあな。」

思いつめたように瞳を閉ざすその表情が痛々しい。

確かに、戦わずに勝ち続けるってのが指導者として最優秀なんだと
オレも思う。

大賛成だ。

政治にはそれが出来る。

軍にだつて、やりようによってはそれが出来る。

「それでも戦わなければならぬ時があります。それならば、私
はどんな事があつても部下達に生き延びて欲しい。」

そんなに真剣な表情されてもな・・・。

そう言えば、姫の国はラスロー王子の国と緊張状態にあるんだっけ
か？

マール君の種族の自治領が国境線にあるからなあ。

弱った……。

「らしくないと思われるかも知れませんが、私、これでも一応”女”なのです。命を産む者として……。」「もういいよ。」

ああ……なんてオレは……。
くそう……。

姫の言葉を遮ったまま肩を落とす。

本当、自分のやる事を置いて、なんだかな。

「ねえ、姫様？オレってそんなにお人好しに見える？」

思わず聞いてしまう。

「ああ、やつぱ答えなくていい。」

そういう風に見えるから頼んでんだよな。

確かにオレの剣術は、死に物狂いで相手を倒して、何が何でも生き延びる事だけを重視している。

貴族とかの一对一とか誇りが云々とかいうお上品(?)なものからは、完全に逸脱している。

……オレ自身がそういう剣を望んだからなんだけれど。

「今、自分の性格を矯正してもいいんじゃないかとだけ思った。」

本気で。

仕方なくオレはとぼとぼと歩いて姫から離れ、訓練している者達のところへ向かう。

「あゝ、オレの言う通りにするのは癪かも知れないが、聞いてくれや。」

ピタリと止まる集団。

集中力が高いのは良いコトだ。

よく指示を聞いているってコトだしな。

「ええと、自己紹介は省略。このまま二人一組で、どちらか片方は得物をその辺に置いてくれ。」

何？誰？

この偉そうなのヤツ。

恥ずかし過ぎる。

「得物を持っていない方は、間合い外から相手に触れる。得物を持つている方は間合いに入れない様に捌く。」

昨日の速さ対力の疑似再現だ。

詳しい説明もダルい、身体でわかれ。

オレはそうやって、何度もバルドに叩きのめされた。

「相手に触れるか、一定時間過ぎても交代。交代時に負けた方は腕立て20回。」

うん、間合いが有利っていうのは、勝敗の分かれ目になる。

およそ七割くらい。

いや、これはオレの実感ね。

「あのオ？」

「ん？」

近くにいた女性が手を上げてオレに答える。

「そんな子供の遊びみたいな訓練、何の意味があるんですか？」

K i n d n e s s ! 皇子は時に大人気なく。【後】

うん。

特に驚かないぞ。

何処の世界にもいるもんだし。

正確には何処の国もか。

やってもいないのに決めつけたり、考えようとしなかったり。

その方が楽だし、簡単だもんな。

脳筋とか天然かも知れないけれど・・・目の前の女性は嫉妬か？

「はあ、別にいいよ、やりたくないなら。正直、君達はオレには関係ない人間だから。」

オレはそこまで傲慢でも優しくもない。

目に入るもの手に触れるもの、その全てを守れたりするなんてこれっぽっちも思っていない。

だから、必死になるしかない。

同じ事を考えた姫が、少しでも部下の生存率を高めたいと思った。

丁度良いお人好しのオレが、馬鹿面下げてのこのこ歩いて来た。

それだけの話だ。

だから、本人達が必要ないと言うならば別にそれでも良い。

選択肢はオレにあるわけじゃない。

多分、目の前にいる人間は、殺意を以って人を排した事なんてないんだろうから。

それはそれで幸せな事だろう。

「大切なモノを守れずに死んでもいいなら、それでいいんじゃない？」

それがどれだけ悔しい事か。

「オレだったら、その確率が減るかも知れないってだけで飛びつくけどね。」

オレは戦い方を充分観察出来たから、それなりに足しになった。

戦い方も色々と考えられたし。

シルビアの事で落ち込んでいるのは本当だし、今だって少しでも強くなりたいし、なるうと思っっている。

そっいう意味で、いい気分転換にはなった。

「ま、自覚がなければ、どうにもならんよな。」

ぶっっちゃけ強くなれるなら、師匠であるバルドくらいまでなりたいと思っっている。

特に今回のような状況では。

「トウマさん。」

完全に興が削がれたオレの前に姫が立つ。

「何さ？」

オレが近衛兵で彼女を守る立場だったとしたら、信用出来なからうが何だろうが、死に物狂いで訓練するんだろっうなあ。

ああ・・・オレが男だからというのも大いに関係しているが。

「はあ・・・もう、さ、あれだよ？」

自分から言う時点で、オレ、アホだよな。

「姫がオレに嘘をついたり、仲良くしてくれるからだよ？こんな事すんの。」

美人だし。

あ、これは全く関係ないか。

「・・・構えろ。」

オレは仕方なく、さっきの女性騎士の一団の中。

オレに反論したヤツを指さす。

「馬鹿にするんだったら、身体で意味を分かれ。」

少しずつ殺気を込めるオレ。

構えた女性に向かって有無を言わず、得意の最大加速。

直線的に突っ込んでくるオレを豪快に叩き伏せようとする斬撃を、加速の緩急をつけてかわす。

しっかし、この国の女性は馬鹿力だよな。

ブウンっと空気を切る大きな音と風が耳元で聞こえた。

「くっ。」

斬撃をかわされた女の呼気の直後、斧と反対側の柄が振られる。

「いよっ！」

点で攻撃出来るモノを線で振ったら、さっきの斧の攻撃と変わら
ないだろうに。

かわした柄の棒を掴んで、グルリと自分の身体ごと逆上がり
に半回
転。

勿論、彼女の振った力を利用して。

「どっせいっ！」

回転する体の勢いのまま、オレの足を彼女の首に絡める。

絡めた瞬間に柄から手を離すと、ついた勢いは上半身に伝わり彼女
ごと地面に倒れる。

「はい、ポキっと。」

腕を取り関節と首を絞める・・・真似。

真似だよ？

男だったり、オレの部下・・・うん、ザツシュとかなら折った力
も知れないけれど。

まあ、ザツシュがこんなへマをするわけがないが。

「このように間合いが長い分、懐が弱い。また例え強固な鎧で斬撃
が通らなくともだ。」

立ち上がり身体を払う。

「人間には投・打・極の徒手攻撃がある。特に極められたら確実に
人体は破壊される。」

だからあの練習。

「よって、懐に入らせない練習と懐に入られやすい展開を理解する
練習だ。」

バルドとかの上級というか達人級になると、自分が迎撃しやすい
位置だけをワザと空けておくんだよな。

だからやりにくい。

「頭の中で常に武器には点・線・面。人には投・打・極という攻撃

分類があるという事を叩き込む。」

明確に意識して動きを学ぶのと、そうではないのでは動きの組み立て方が違ってくる。

「常に意識しながら訓練する事が・・・ん？」

つらつらと言いたい事をタレ流していて気づかなかったが、皆の視線が・・・。

「何？どうしたの？」

全員の視線が痛い。

あれ？

オレは頼まれた事をして、聞かれた事に答えただけなんだけれど・・・？

「す、凄いです！トウマさん！」

「はひ？」

興奮したアイシャ姫が猛然と駆け寄って来る。

「流石に姫が連れてきた方だ。」「次は私とお願いします！」「あーん、私もー！」

アイシャ姫の声を皮切りに、一斉に皆が騒ぎ出す。

何故に？

「強いとは思っていましたが、これ程までとはステキですわっ！」

・・・強い？オレが？

「またまた、そんな風に調子づかせて、次は何をやらせようっていうんですか？」

オレは生まれてこの方、自分が強いなんて一度も思った事はない。特に最近はおもつともつと強くならねばと毎日思っているくらいだし、今のだって観察して練った戦い方を試しただけだ。

そりゃ、事前に見て情報を整理して、対策を立てれば誰だってあれくらい出来る。

出来なきゃ死ぬだけだ。

本当はこれを相手と打ち合う間、もしくは対峙した瞬間に出来なけ

ればいけないのが戦い。

・・・ぞつとするな。

まあ、それ以前に相手との力量差を測れるか否かっつてもある。

単純にオレはこれが得意なだけで、負ける相手とは戦わないだけなんだが。

「私が”惚れ込んだ”通りですわっ！」

「・・・それを言うなら”見込んだ”でしょう？」

結局、その後もすったもんだで、このキヤイキヤイ五月蠅い集団に囲まれる事になった。

Lack! 皇子は完璧じゃなくていい。【前】

「・・・砕けた。」

部屋に戻って、寝台に倒れるまでの台詞はそれだけ。

まさか、本当に全員の相手を順にするハメになるとは思わなかった。最後に”その気”になってしまった姫の相手は、丁重にお断りはしたが。

ぼむぼむとうつ伏せに倒れたオレの後頭部を叩くようにオリエが撫でている。

「ありがと・・・。」

大体だ、ずっと最大速度を維持したまま、迫りくる武器をかいぐり、重武装をした相手を徒手で制するとか・・・。

オレは確か、触れたら交代と言った気がするんだがな。むにゆう。

「あう？」

視線が一度上がって・・・また下がる・・・？

鼻先に温かめの仄かな弾力？

「・・・?!」

飛び起きた。

「いや！オリエ、それはダメだから。」

目の前で首を傾げるオリエ。

「膝枕は、うつ伏せ以外の体勢の時だけで！」

一瞬だけ少女の膝と膝の間、股間に顔を埋める、通称”ただの変態”になってしまったじゃないか！

勘弁してくれ・・・。

まあ、膝枕をして癒してくれようとしたのは感謝するけれど。

「ん？何を讀んでるんだい？」

彼女の開いている本を覗き込む。

「なにになに・・・自然界にはいくつかの相互作用があり、それが様

々な物質との密接な関係が……。」
んむう……。

「故に、この基本的な幾つかの相互作用の関係上、空気中にあるとされる粒子もこの法則に則って存在し……。」

斜め読みだが……。

これって……昔、オレも似た様なのを読んだ事があったような。

「オリエ、これってさ……。」

オレが質問しようとする、パターンと本を閉じ読むのを完全にやめてしまう。

なんだっけかなあ、この本。

いや、似たような本の題名……。

内容は覚えるけれど、題名は覚えなからなあ、オレ。

あと作者も。

「オリエは勉強家なんだねえ……オレより頭良いかなあ、きつと。」

オレは彼女の頭を撫でる。

どうやら、オリエの頭脳は専門的に限れば、相当のようだ。

……奴隷になった原因もそこにあるのかも知れない。

「オリエ、大好きだよ。」

オレは彼女の未だに痩せた身体を抱きしめた。

「トウマ様、オリエちゃん、ご飯ですよ。って何してるんですか？」

「間の悪いところで……ミリイ。」

いや、さっきの膝枕を目撃されなかった分だけマシか？

「何って、溢れ出る親馬鹿的な？妹馬鹿的な？そんな愛情表現中。

なー？」

すかさずオリエに振ると、コクリと頷く。

さて、ここで問題はだ、この賛同は今の台詞のどの部分だったかだな。

一、親馬鹿。

二、妹馬鹿。

三、愛情表現。

賢いオリエの事だから、四のその全てという選択肢の可能性が高い
気もするが。

「むう、トウマさまは本当にオリエちゃんに過保護なんですから。」
食事を乗せた盆を置いて、苦笑するミリイ。

「何を言う、ミリイも同じくらい大好きで過保護だぞ。」
皆には本当に感謝しきりだ。

でなければ、オレという人間性は途方もない方向にへと捻じれまく
ってるか、狂っていると思う。

そういう確信がある。
利用しているという感が否めなくはあるが。

「ま、また、そういう事を。」

「ミリイも抱きしめてやろうか?」

更に軽口を叩いてみる。

ミリイの反応はとても素直でいい。
じりじりと試しに近づいてみようか。

「も、もう、馬鹿な事を言っていないで、早くご飯食べてください。
冷めたら勿体無いですよ。」

盆に乗せた料理をオレに見せる。

「そうだな、ご飯にしよう。」

オリエにそう言って、再びミリイを見たオレはその一点で視線を
止めた。

「どうしました?」

「いや……。」

オレの視線に気づいたミリイに対して言葉を濁す。
でも、もうしかしたら、いい機会なのかも知れない。

「ミリイ、オレが買ってあげた耳飾をしうてくれているんだなって。」

「リッヒニドスで皆に買った装飾品。」

「え？あ、まあ、それは・・・記念の品ですから。」

えへへと何時もの口癖で照れるミリイ。

「そうだな、ある意味で絆の品だもんな。」

誰かに感謝したり、喜んでもらえるという感覚。

「オリエにも何か買ってあげないと。」

「またそういう過保護っぷりを・・・。」

「だって、不公平だろ？あ、でも、今は外出は当分出来ないしな。」

胸の鼓動が激しい。

緊張・・・というより、恐怖かな。

色んな事がどうにかなくなってしまいそうな・・・。

「とりあえず、今は仮って事でコレを貸してあげよう。」

オレはリツヒニドスの城を出てから、肌身離さず首にかけていた鎖をオリエの首にかける。

とても簡素な”銀の指輪”が通ったソレを。

L a c k ! 皇子は完璧じゃなくていい。【後】(ミリィ視点) (前書き)

久々の女性(別)視点。

・・・いや、忘れてたワケじゃないですよ、ホントだよっつ。

L a c k ! 皇子は完璧じゃなくていい。【後】(ミリイ視点)

夕食が終わり、後片付けをして就寝するまでに何回二人を見比べただろう。

でも、やっぱり変わらない。

慈しむようにオリエちゃんの頭を微笑みながら撫でて。

その首にかけられてるのは、確か・・・うっん、絶対そう。

「今日もお疲れ様、ミリイ。」

「あ、はい。」

会話が続かないよお。

「お、オリエちゃん、寝ちゃいましたね。」

つて、こんなコトが言いたいんじゃない！

ちゃんと聞かないと！

「ねえ、ミリイ？ついて来てくれて、ありがとう。」

こんな時に言わなくても・・・。

「今日だけじゃなくてさ、リッヒニドスにも・・・さ。」

それは私の台詞なのに。

片田舎から出てきて、城で大失敗ばかりして、周りからも孤立し始めてた私を連れ出してくれたアルム様。

今回だって、一人では絶対に来られないような遠出で、勉強だってさせてもらってる。

感謝してもしきれないのに・・・。

「オレはさ、本当に弱っちくてさ、周りが言うようにダメな皇子なんだよな。」

「そんな事・・・。」

そんな事はない。

長い間、皇子と一緒にいたワケじゃないけど、少なくともリッヒニドスにいた時の、あの時のアルム様の周りにいた人間で、そんな事を思った人なんかいない。

「本当にダメでどうしようもなかったオレの周りに人がいてくれる。それが今、結構気に入ってるんだ……。だから……。」

横で寝息を立てているオリエちゃんの髪を一撫でして、私を見る。その瞳は何処までも真っ直ぐで、リツヒニドスに居た時と変わらない。

弱さなんて、何処にも感じない。

「絶対にこの手に取り戻すから……。」

どうして……。

「どうして、アルム様は何時も……。」

「ん？」

わかってない。

「全っ然ダメですっ。」

私はオリエちゃんが起きない程度に声を張り上げる。

「ダメ？」

「そうです！本つつつ当にダメ皇子です！」

ぎゅっと力一杯に自分の拳を握る。

「いっつも誰にも言わない！しかも一番危ない事だけを自分で抱え込んで！」

私が小さい頃、お姉ちゃんが言ってた。

『人は独りで生きられないから歴史があるのよ』って。

その時は壮大過ぎて何も言えなかったけど、今はわかる。

”書く人間”と”書かれる人間”がいなきゃならない。

戦争だつて喧嘩だつて、相手がいなきゃ出来ない。

”人は独り”じゃダメなんだ。

「だから、私達がいるんじゃないんですか？」

「……ごめん。」「許さないです。」

だから、私は今のこの時にここに居られて良かったなっと思う。こんな私が、今誰かの役に立てそうなんだもん。

しかも、私を必要としてくれて、こんなにも優しく。大好きな人の役に。

「わかるまで許さないです。」

私はアルム様を思いつきり抱き締めた。

「わかるまで離さないんだから。」

私にしては、すごく大胆だと思うけど・・・かなり大胆かな。

顔も熱くなってるし。

アルム様が私達が笑顔でいられる為に危険な目に合うなら、私達はアルム様が笑顔でいられる様にしなきゃ。

「聞いてますか？」

「・・・うん。」

私はリツヒニドスの夜にしたように、アルム様の肩に近い背中辺りをぼんぼんって。

お姉ちゃんが昔、泣いていた私にすいてくれたみたいに。

アルム様にだって、効果靦面なのは証明済みだし。

そのまま寝台の中央、オリエちゃんの横に倒れこむ。

「何時か・・・一度、私の故郷にも行ってみませんか？私、今回の旅行で味しめちゃいました。」

他愛のない会話。

少しでも、現実逃避だろうとなんだだろうと、気が紛れるなら。

「何も無い所なんですケド、自然があって、湖とかで泳げて。あ、

果物も美味しいんです！」

「うん。」

「皆”で一度行きましょう？」

我ながらいい案。

「皆でね・・・いいかも知れない。」

「そう皆ですよ。」

皆がいる事に意味がある。

皆の中心にアルム様がいて・・・。

「・・・大好きですよ、皆。」私達の皇子様”が。」

目の前の皇子は、子供の頃に読んでもらった童話の完璧な王子様ではないけれど。

名前のわからない王子様なんて存在よりも、精一杯、私達の為に頑張っているってわかる。

そんな皇子様のが絶対ステキだと思うもん。だから……。

「アルム様は独りじゃないですよ。」

今はそれだけ言えれば充分だよね？

私、ここに居ない皆の分も頑張ってるよね？

Mean! 皇子と王子の考え方。

・・・情けない。

もう、その一言。

情けなさ過ぎるオレ。

ミリイにああまで言わせるなんて・・・。

元々、ミリイは皆の前でそこまで何かを主張する性格じゃないのに、常に罪悪感を持ち続けて生きているオレでも、くるものがある。

「うう・・・ミラの説教の時にあんだだけ反省したのに・・・。」
「がっくり。」

結局、心配をかけまくっているこの現状。

それでもミリイが深く突っ込んで聞いてくる事をしないでくれた事は嬉しくもあった。

「つまるところ、オレはもつと強くなんなきゃって事にすりかえよう。」

「オレみたいな人間は、後ろ向きになったらとことん暗くなる要因が、吐いて捨てる程あるんだからな。」

「ふう・・・。」

早朝、双剣一对を持ち出しての瞑想。

右手で剣を抜き、次に左。

基本しか学ぶ必要のなかった型を何度も何度も繰り返す。

一応、基本武器って設定だしな。

「しかし・・・筋肉つかないなあ・・・。」

オレは速度で戦う方が向いているから、筋肉がついて重くならなくて良いという考え方もあるんだが、それでは勝てない事もある。だってそうだろ？

オレより速い相手がいたら負けるんだぜ？

そういう意味では力のある斬撃を出せるように筋肉がもうちょいあってもいい。

オレの剣の重さの大半は、速度ある振りによつての重みと言っても過言じゃないしな。

「そういえば、アイシャ姫は……。」
彼女も細かつたな、そこそこに。

で、あの馬鹿力か……なんか、コツでもあるのか？
気になる。

どついう原理なんだ？

流星に直接聞くとアレだが。

「それとなく今度聞いてみるか。」

「誰にだ？」

肩口で切り揃えられた藍色のおかつぱ頭。

「えと、ラスロー王子。」

頷く男の動作の後にさらさらと流れていく髪。

なんだ？

良い血統の男は必ず髪はさらさらなのか？

黒くて直毛なオレの髪とは大違いだ。

「君とこうしてきちんと面と向かつて話すのは初めてだな。トウマ

殿。」

”殿”とききましたか……。

その呼び方に警戒心を持たざるを得ない。

何か、引つかかるんだよ、彼は。

二度も無礼を働いたオレを許す根拠は何だ？

それに街で剣を抜くとは思えない程の知的な雰囲気は彼にはある。

そこそこに腕があるのは、オレも見ただから解る。

「まあ、そうですね。水差してばかりの出会いですが。」

「ふふつ、それは私は一切気にしていないよ。イイモノが見られた。」

「

不敵に笑われたよ。

この余裕は、兄上に通じるモノがあるな。

というか、オレは見世物か？

「いや、他意はない。人を見るのが趣味だと思ってくれたかまえ。」
他意あるじゃねえか。

「随分と高尚なご趣味で。」

大体だ、今のオレにどの目線でこの人と話せというんだ？

「君だつて、随分とあのアイシヤ姫にご執心じゃないかい？」
ぐぬつ。

「どうにも女性の頼みに弱いだけです。男なら誰でも大なり小なりそうでしょう？」

悪いが嫌味に対しては、嫌味でしか返さないからな、オレは。

「それに興味があつたものでね。クロアートの槍斧使いというものに。」

「成る程。」

一瞬の沈黙。

オレには元々、この人に話してはないから仕方がない。

「君は遠回しに言おうとすると、さつさと逃げられてしまいそうだから、単刀直入に言おう。我が国に来ないか？」

・・・はい？

またまた変な展開に巻き込まれた・・・んだよな？

「はあ・・・で、それは互いに何か利益はあるのですかねえ？」

これつてアレだよな？

「そうだな。流石に”グランツ”の名は高いからね。」
グランツ？

ああ、そういう事か・・・オレは今、トウマ・グランツだったな。
ヴァンハイトでの”グランツ姓”には特別な意味がある。

この姓は基本、一代限りの特別な貴族姓といったところか。
我が国でのグランツは、剣一本のみで地位を昇つていった”バルド・
グランツ”の一門だ。

そう、今のオレはヴァンハイト唯一の例外、バルドの剣技の手ほどきを受けた人間として見られているワケだ。

しかも、バルドの弟子でグランツ姓は3人いるかいなかだ。

「あんな巨大熊と同列にするなナヨ。」

身近にいる人間で、一番使い勝手が良くて許可がいらないので拝借させていたただいたんだが・・・完全に裏目に・・・。

「私が王位を継いだら、相当な利があると思うが？」

・・・何、この人。

もしかして、もしかしなくても国王になるつもり？

あんな面倒で孤独で退屈極まりないモノに？

「成る程。で、何故わざわざオレを？」

引き抜きの理由をまだ聞いていない。

「君が世界の現実をきちんと把握しているからだよ。」

例の街での言動か？

だって、所詮、そんなもんだろ？

「結局。偽善だけで世界は回らない。民というモノも誰かに管理されねば、導かれねばならないと思われないか？」

まさか、それが自分だと？

「でなければ、王族や貴族など、とうに廃れているはずだろう？」

ん、なあ、な。

否定はしきれない。

「それは民が優れた者に支配されたいと望んでいる事と変わりはない。」

オレは相互契約だと思っているんだが・・・つか、ちょっと危険な思想に入っていないか？

「だとすれば、より優れた者を求め集めるのも、王族たる者の責務だ。」

ちょっと変則的な選民主義にも聞こえるな。

それは王族が常に優れ続けているのが前提だろ？

王族の質が低下したらどうするんだ？

禅譲でもしてくれるのか？

その資質はどうやって計る？

まさか神器が使えるか否かとか言わないよな。

悪いが、オレの国には例外がいるんだぜ？【文治の星皇エルリオット・デイス・ヴァンハイト】がな。

「それで引き抜きたいと？」

「言いたい事をぐつと堪えて、話を進める。」

「そうだ。」

「んじゃ、ま、お断りしますわ。」

「ほう。理由を聞いても良いかな？」

ピクリと眉を動かして理由を聞いてくるラスロー王子、未だオレへの興味は失われていないらしい。

「オレを高評価して頂けたのは光栄で、魅力的ですが・・・。」
方向性が違うんだよなあ。

「困った事にオレの部下、優秀じゃないんですよ、失敗ばかりで。」

でもな、とても温かい人間なんだよ。

それは昨日も沢山味わった。

「だから、王子の考え方だとその部下も見捨てなきゃなんないんでね。」

王子はどうしようもない現実というモノを受け入れた。

そして出来るならば、それを操る側にいたいと思った。

それは現実的で悪い事じゃない。

でも、オレは現実を受け入れて抵抗して、平らな世界を作りたい。これは幻想だ。

でも、幻想を現実に近づける努力は出来る。

” 良き方向に変える ” という点では共通だが、手段も結果も違う。だから従えない。

「更に困った事に可愛いんですよね、オレの周りにいる奴等は。」

王子はオレが優秀だと言うが、それはオレがそいつ等の誇れる存在になりたいからだ。

じゃないと、オレの存在意義は限りなく薄っぺらなもんになっていく。

「ますます君が欲しくなつたよ。」
ライライ。

勘弁してくれ。

「ラスロー様、朝食のお時間です。」

オレ達の間割り込んでくる声。

気づくとラスロー王子の後ろに一人の少女が立っている。

茶色の長い髪を後ろに流し、三つ編みに編みこんだ少女。

「そうか。では、トウマ殿、また後程。」

いや、本当に勘弁。

げんがりしていると、ラスロー王子の後ろにいた女性にがっつりと

睨まれる。

やべえ。

「では、また。」

完全に敵視されたな。

一礼してさっさと退散。

うひゃあ・・・変な汗かいた。

オレも部屋に戻って、朝食を摂って・・・。

「オリエを可愛がろう・・・。」

Neither! 皇子は愛惜に慟哭す。【前】

次から次へ……。

「何がいけなかつたんだ？」

街に着くまでは悪くはなかつたんだ、うん。

オリエを買った形にはなつたが、助けた事に関しては後悔は無い。
やはり手段がいけなかつたか？

「ズルズルとこうなってるしな。」

後頭部が痛い。

オレ、身の危険があるかも。

視線で人を殺せるのなら、既に身体中に穴が空いて絶命しているだろう。

ようは……オレは熱い視線で見られている。

見ているのは、例のラスロー王子を呼びに来た侍女だ。

さつきからすつごい見られている。

ああ、睨まれている。

「よりもよつて同じ講義を受けるとは……。」

いくつか興味のある講義のうち、二つ程選び抜いて受ける事にしてみたのだが、まさかの遭遇。

「第一、断るか受けるかしか選択肢がないんだから……はあ。」

何というか、恋する乙女つてのは凄いなあ。

いくらオレが女心が全く理解出来ないからといって、コレはオレでも理解できる。

主が侮辱されたとか思ったんだろうな。

「いいなあ……。」

オレの周りにいる者達も、これ程までとは言わないが怒ってくれるかなあ？

ダメかな。

オレ自身が認めちゃってるもんな、ダメ皇子って。

案外、怒ってくれないかも……。

これは、アレだ、何とというかさ。

「不徳の致すところですよ。」

「そう、ソレ。ん？」

声を投げかけられた方を見上げると、一人の女性が傍らに立っていた。

「あれ？」

きよろきよろと周りを見回してみる。

「私の講義がそこまでつまらないとは、私の教え方がいけないのでしょうか。」

「どうやら、この講義の講師の方のようで……。」

「真に申し訳ない……です。」

平謝りしかないだろう！

しかし、この人、あれだよな？

昨日、図書館で会った……。

「そうですね。では、貴方にじっけ……ご協力をお願い致しましたよ。」

今、実験って言いそうになったよな？

ここに来てから速攻で怪我するような事の連続だったからなあ。

死ぬような事意外で五体満足ならいいか。

いや、よくないだろ。

どんだけ慣れたんだよ、オレ。

「では、こちらにどうぞ。」

講師台にぐいぐいと押されながら……って転んだらどうすんだよ、本当に。

「では、先程説明した、共鳴による粒子の選定を行います。」

オレが今回選択した講義の一つは、考古学（旧戦史）だ。

エルフの森の炎術使い相手の時も、シルビアを連れて行った誰かの時も、オレは何も出来なかった。

そういう意味で、何か対策とまではいかなくても、見出せたならい

いなと。

「あの、先生。もう少し詳しくご説明願います。特に失敗した時の事などを。」

自分が術に向いているとは思わないから、聞いているだけでいいやと思っていたのが、気を抜く致命的な原因になったな。

「術の成否は、空間中の粒子を如何に効率良く操れるかにあります。」

大気中の粒子は、現在限りなく少ない。

と、いう事は、術者同士の戦いってのは燃料を奪い合っつてコトになるのか。

「ですが、例えば粒子を操れたとしても、自分に合った状態に変換しなければならぬのです。」

ああ、その辺りはもう既にリツヒニドスに居た時に学習した。

”指向性” ってヤツだったかな。

スクラトニーはあの筒状にする事で指向性を高めた。

それはオレが作った爆裂球も同じだ。

アレに指向性を持たせれば、カーライルが提案した岩盤破碎作業とかに使う事も”理論上は”可能だ。

理論上な、今は。

「で、変換というのは？」

ここまではオレの脳内の知識と経験で理解出来る。

「粒子の形の形質変換と考えて下さい。簡単に言えば、炎の球にするとか氷の刃にするとかという事ですな。」

粒子ってやつぱり万能なんだな。

だから、次元の穴なんざ開けるのに使えたワケだ。

奥が深いな。

「問題なのは粒子を操るにも、形質変換の資質によるところが大きいのです。戦前のように大気に粒子が豊富ならば別でしょうが。」

実用性には確かに乏しい。

軍隊に組み込むにしても大変だ。

だから、余計に人数が少なくて、人間はこの技術を手放したのか。うむ、一つ、すっかりと知識の補填が出来たな。

「その資質とは、一般的に魂によるとというのが定説で、特に形質変換は……。」

「ごそごそと大きな鞆を取り出しつつ説明してくれるのはいいんだが……腰を折った講師のお尻が目の前に……。」

ヒルダとどっちが大きいだろう……いかんいかん。

「魂にある……私達は”色”と呼んでいます、その色以外の形質変換は出来ません。」

初耳だ。

つまり、炎術使いは基本的には炎以外生み出せないのか？

「そこで、その魂の色を視るのが、この実験なのです！」

うおっ、実験と言いつつ切ったよ！

「で、失敗するとどうなるのでしょうかね？」

実験は……受けるしかないな、これは。

「特に何もありませんよ。この方法は、私の国で昔からやっている方法なので。」

なんだよ、なら実験じゃないじゃないか、驚かせやがって。

「ただ、今回の様な手段でやるのは初めてなもので。」

ヲイ。

そう言うと講師は自分の身長程もある大きな鞆を開き、中から一本の棒を取り出した。

Neither! 皇子は愛惜に慟哭す。【中】

取り出されたのは、金属で出来た杖。

錠前に差し込むような鍵状の形をしている。

長さは隣にいる講師と同じか少し長いくらいなので、杖としては長い部類に入る。

「む。」

思わず呻き声が漏れる。

変な感覚。

嫌ではないが、変な印象が杖からしてくる。

今まで感じた中で一番近いのは……。

「あ、あの、その杖を使うのはちょっと……。」
後ずさる。

この印象はヤバイ……アレだ……ディーンの剣を抜いている時の。

しかも、両刃から片刃に変わる直前の。

ま、まさか……神器級の杖とかじゃないよな？

そんなにぼこぼこあるワケないだろ、普通。

”セイブラムの王錫”なのか？アレが？

「大丈夫ですよ。痛くはありませんから。ちょっとくすぐったくはありますけれど。」

「違う、そういう意味ではなくて……。」

脳裏に浮かんだのは、神器からの拒絶反応。

起きるに決まってるだろ！

しかも、皆、あんなに痛そうにしているんだぞ?!

くすぐったいって、そんなワケあるかっ!

「だって、ソレ……。」

周りの人間達は、オレが何でこんなに焦っているのか不思議そうにしているのを見て、ちよっぴり大人しめに。

そりゃ、神器級の武器に触れた事がある人間なんて、そうはいないもんな。

間近に見る事ができる人間すら、ごく少数、
しかも、王族筋か近衛・親衛隊。

第一、年中腰からぶら下げてそこら辺を歩いている人間なんて兄上くらいだろ、きつと。

少なくともここにいる人間は、比較的若い年齢層だから階級もそんなに高くないだろう。

当然、神器なんて雲の上の存在だ。

「・・・あ、成る程。大丈夫ですよ、貴方が触れる事はないですから。」

にっこりと微笑むその姿は、オレの危惧している事を理解して頂けたようだ。

「な、ならいいですけど。」

しかし、て、コトはだ。

この女性の発言は、これが神器級だと裏付けているというワケで。しかも、図書館司書兼講師兼施設長なワケで。

オレより世を忍ぶ（？）仮の姿がどれだけあるんだ？

「では、トウマさんの魂の形を視てみましょう。」

杖をオレの眼前にトンつと置き、瞳を閉じる。

「同じ様に目を閉じて下さい。」

「あ、はい。」

ゴクリと息を飲み、オレも目を閉じる。

「では。」

そう聞こえて、しばらくした後。

オレの胸にそつと・・・多分、指先が置かれ、押し付けられるようにそのまま第一、第二関節と。

そのまま手の平まで押し付けられ・・・。

ゾクツと。

そうとしか言いようがない。

くすぐつたいとか絶対嘘だ！

ゾクリと身体に何かが這うような・・・気持ち悪い。

うわっ！ダメ！

ヤメて欲しい。

「くっ・・・。」

声が出そうになるのを必死に抑える。

「あら？」

身体をまさぐるようにしていた何かが突然止む。

「あらあら。」

だから何？！

声を出していいのかわからないから、余計にもどかしい。

「形で言々と球体？」

何故、疑問形？

オレに見えるワケじゃないんだから。

「二重球体。小さくて強い点の周りに、ぼんやりと弱い大きな球体・

・・・。」

「あっ・・・。」

黙っていようとしていたオレは、思わず声をあげた。

「これは・・・もしかしたら、二つの形質変換が出来るかも知れな

い。」

「も、もういいです！気分が悪いので、医務室に行っていていいですか

？」

声が震える・・・。

「え？あ、そうですか、それは大変ですね。どなたか、付き添って

くれる方を・・・。」

早く退室したい。

ここから逃げ出したい。

「じゃ、オレの後ろに座っている人に・・・。」

どうせ、元々顔見知りなんていない。

誰でも良くはあったが、この際はつきりしておこうじゃないか。

オレは”視殺の女王”と密かに命名していた、ラスロー王子の侍女を指名した。

大丈夫、彼女はきっとラスロー王子の不名誉に繋がるような事はない。

と、思う。思いたい。

まあ、殺されるような事はないだろう・・・多分。

「そう、それじゃ、ええと、オリガさんでしたか？付き添いお願い出来ますか？」

「・・・はい。」

たっぷりと間があつたな。

最終的に了承したという事は、やっぱり根が真面目なんだろう。

あ・・・なんか、本当に気持ち悪くなってきた気が・・・。
吐き気までとはいかないが。

無愛想にオレの傍らに來ると、オレをひと睨みして肩を貸してくれるオリガさん。

大丈夫だ。

女性に睨まれるのは、ラミア姫で充分耐性が出来てって、今オレすごく悲しい事に胸を張っている気がする。

とことん情けない皇子だな、オレ。

「はあ・・・。」

「大丈夫？」

溜め息を具合の悪さと勘違いしたオリガさんが一言呟く。

ほら、な？

根が真面目で純粹で一途なだけなんだよ。

たまらないね、全く。

オレは、そういうの何時なくしたんだろうね、ホント。

Neither! 皇子は愛惜に慟哭す。【後】

医務室で横になる頃には、本当に気持ち悪くなっていて寒気すらしていた。

驚いた事にオリガさんは、本当に真面目できちんとオレに掛け布まですてくれた。

そういえば彼女、オリエと一文字違いだな。

「ふふつ。」

不謹慎にも笑みがわく。

「何か？」

キツと睨みつけられる。

「いや、ウチのコと名前が一文字違いだと思ったら、急に親近感がわいてね。」

本当、口に出してみたが不謹慎だった。

「まあ、年齢はうちのコのが幼いが。」

「そう……。」

「ありがとつ。それと、ラスロー王子の誘いを断つたのは悪いと思っ
っているよ。」

どうせなら、仲良くなっておきたい。

仲が悪いよりは格段にいいだろう？

「だが、王子には王子の成すべき理想があるのと同じ様に、オレに
もオレの理想があるんだ。」

オレの魂の中に一欠片だけ残っている強い光の為にも。

「それは死んでも曲げられない。君が王子に仕える気持ちに負けな
いくらいに。」

じゃなきゃ、オレに生きる価値なんて無いに等しい。

「……わかつたわ。でも、私もそんなに器用じゃないの。」

簡単には割り切れないし、切り替えられないか。

「いいよ、それで。」

別に味方になつてくれとは言つてないし、思つてもいない。

国が違うんだから、敵になるかも知れない立場同士だ。

現状が敵にならなければそれでいい。

「じゃあ、講義に戻つて。ありがとう。講義後だつて王子の世話が
あるんだらう？」

「え、ええ。」

それでもオレを一人残して行つても良いのかと逡巡してくれるんだから、真面目で優しいよな、うん。

「大丈夫。オレもすぐにウチのが来てくれるさ。」
来なくてもそれはそれで。

「そう・・・じゃあ。」

彼女が去つていくのを見送つた後、オレは身体を布団の中で丸めた。

微かに身体が震えているのがわかる。

”二重球体”

きつとそれは、オレとトウマの魂の状態のコトだ。

彼の魂は確かにオレの中にあるんだ・・・。

それが嬉しくて・・・嬉しい反面、苦しい。

こうまでして生き延びたオレは一体・・・。

「足し引きするもんじゃないんぞ、クソッ。」

震えながらも悪態がつけるんだから、まだマシか。

冷静に考えて、魂の召喚・融合なんて途方もない術なんだ。

魂を見る術でどうこう出来るとは思わないが、変な反応を起こしても不思議じゃない。

「やっぱり一度しつかりと、術系統の講義は受けた方がいいな。」
生きている限り、オレは止まらない。

そんな脅迫観念に近いものだけが、今のオレを動かしている。
それだけが・・・。

「オレの存在意義か・・・。」

「トウマさん！お倒れになつたと聞きましたわ！大丈夫ですのっ？

！」

猪の如く突進してくる真紅の塊。

「アイシャ姫？」

驚いた。

何故、彼女が？

「私、居てもたつてもいらなくなってしまうて……。」

オレの姿を見てほっとしたのかシュンとしている。

「いや、大丈夫だよ。オレ、死んでも死ねないから。」

……何を言ってるんだオレは。

「ちよつと気持ち悪くなっただけだから……。」

「そうですの。」

オレの傍らの椅子に座つて、心配そうに見つめるアイシャ姫。

「あはは。」

唐突に笑みが漏れた。

吹き出してばかりだな、オレ。

「どうしました?!」

突然の笑いに驚いたアイシャ姫は、すかさずオレの手を握り締める。

「ごめん、ごめん。余りに自分の馬鹿さ加減に笑いが、ね。」

それだけじゃないよな、うん、オレの存在意義ってヤツは。

だから、ここにいるんだもんな。

それにトウマと一つになる前、ディーンの剣を手取るそれよりもずっと前から、彼女は居た。

居たじゃないか。

「昔から、オレ、身体が弱くてさ……。」

乳母は本当に大変だったろう。

「熱を出しては寝込んでいてね。その度にこうやって心配そうに手を握ってくれる人がいてさ。」

たった一人だけ。

オレが変わる前もその後も、そして今も傍にいる彼女。

「恋人・・・ですか？」

「ん？あはは、全然違うよ、彼女は。」

一度も女性だと言っていないのに恋人とは、女の勘ってヤツか？
いいなあ、女の勘。

もつとオレも鋭くなりたいもんだ。

直感とか。

「ただ、彼女はオレの一部なんだなって。」

オレという存在、魂はトウマによって支えられ確立していたとしても。

それ以外は別だ。

「一部？」

「そう。オレがオレでいられる理由の一部。」

名前があつて、顔があつて、感じられる生身があつて・・・それによつてオレ自身を認識出来る。

他者による自己認識とは、いささか幼稚かも知れないけれど。

「こうやって実感があるとき、余計にそう感じるんだよね。」

そう言つて、オレは握られている自分の手を持ち上げて彼女に見せる。

「あ。」

「こうやっていないと、オレは意外と自分が生きていって実感が出ないらしい。困つた事に。」

本当に困つた人間だ。

こんな所で震えて寝ている場合じゃないつてのにな。

「アイシャ姫が来てくれて助かったよ。ありがとう。」

中身が空っぽなアルム。

そんなだろうと生きてんだしな。

「いいえ、私は、その・・・。」

「ん？何？」

「何でもないですわっ！」「ぐえっ。」

そ、その馬鹿力やめて・・・手が、手が碎け・・・。

「トウマ様！大丈夫ですか！」

今度はミリイ達だ。

今じゃ、もうすっかり聞き慣れた声になったよな。

勿論、オリエも一緒だ。

何だかな、もう。

やっぱり倒れてなんかいられないじゃないか。

オレは一人、心の中で苦笑するしかなかった。

後ろ向きになるのは、一人でも出来るしな。

後悔は死ぬ時まで考えるのは、よした方がいいのかも知れない……

今、今なら。

O b l i g a t i o n ! 皇子は常に邁進する。

周りに危うく外出禁止令を出されそうになりながら、俺は今、図書館に来ている。

そりゃあ、ここに来て数日間で二回も倒れたってんだから、外出禁止にされそうにもなるよな。

ただ、前回の本の続きがどうしてもどうしても気になってな。他にもいくつか気になって。

「これか。」

それは建築の本。

これに気になった単語があったんだ。

”水車”ってヤツな。

もし、これの大型のモノを作れば、水を効率よくリツヒニドスに送れる。

うまくすれば”公衆浴場”を造る目標に一步近づける。

それどころか、天領の田畑にも水を供給し易くなる。

運河のあるリツヒニドスにうってつけた。

国内にはいくつか水車があるんだが、詳しい構造は知らなかったし、こついのを製作する専門職の人間なんて一握りだ。

ならば！

「オレが図面と構造だけでも覚えなとな。」

安価になつて費用が削減出来るに越した事はない。

本の中にある、大きな円のような図をじっくりと見る。

「意外と原理は単純なんだな。」

一度、人力で動かせばあとは水の力だけで動き続ける。

ある意味、永久駆動。

「ん？増水時はどうするんだ？」

洪水一歩手前の増水時に止められないんじゃ、大混乱というか被害が拡大するだけだ。

「その場合は、水車の軸を上げて川面に接しないようにすればいいのよ。」

「なるほど。そうすれば回転しないもんな。ありがとう、オリガさん。」

何で今日はこの人とこんなによく会うのかな。

ここは公共の施設であるから、誰が居ても変じゃないね。

というか、何でちょっと訝しげにオレを見るんだ、この人は。

大体、オレが何を讀んでたっていいじゃないか。

「あ、その目はアレか？オレが文官なんて有り得ないっていう視線ですか？」

オレの印象って……。

「い、いえ。」

慌てて否定するオリガさんだが、そう思ってるんですね？

「オレは少し特殊というか、オレの国から来たのはオレの従者を入れて三人しかいないから。」

ミリイは基礎教育の段階。

オリイは好きにさせているから、何の勉強をしているか知らない。

「優れたモノで使えるようなモノは、何でも覚えて持って帰らないとな。」

そういえば、ラスロー王子の剣術も速さ主体だから、オレの剣術の参考になるな。

特に突きは。

「まあ、君が思った通り、優秀な方じゃないから必死に勉強しているってワケ。」

だから君の王子の誘いを断ったのさと続けようと思ったが、少し不誠実過ぎるのでヤメた。

誠実に対応してくれたんだから、オレも誠実に対応すべきだ。

「それで水車を？」

「ん？これもそうだね。その一つ。この技術があれば、国民の負担が減る。豊かになる。」

彼女の薄茶の瞳が本当に意外そうにオレを見つめる。
悪かったな。

オレだつて真面目になる時はあるんだよ。

オリガさんの真面目さには敵わないかも知れないけどさ。

「為政者みたいな言い方をするのね。」

ギクリ。

近い。

近いよ、オリガさん。

少し掠った。

なんて惜しいんだ、恐るべし女の勘という事なのか？

「ほ、報告書を書かないといけないし、何よりオレの出身地は国の端っこで田舎なんだ。」

嘘はついていない。

リツヒニドスは国の南西端の田舎だ。

「・・・そう。」

どうやら、彼女の中で一定以上の整理がついて納得出来たらしい。

「それなら、水車を用いた粉引きも勉強するといいわ。じゃ、私はこれで。」

何？！

更なる技術があるのか？！

オレは去っていく彼女に目もくれず、本の項をめぐつての学習を再開する。

この知識が、何時・何処で役に立つかわからない。

危機的状況に回避できる知識があるとないとじゃってコト。

だからオレは学べそうなコトは何でも学ぶ方だ。

「ええいつ、何でここの本は貸し出し禁止なんだ！部屋に持って帰れませんかねってんだ、先生！」

平面の本に描かれた立体的な図面という理不尽さにイライラして、思わず声を荒げてしまった。

「流石にそれは・・・その本は国の持ち物なので・・・。」

本棚の影から現れた先程の講義の講師に八つ当たり。「

「ですよね、ですよね。言ってみただけです。」

「似たような本で宜しければ、私個人の物がありますから、お貸ししましょうか?」「本当ですか?!」

椅子から立ち上がり、猛然と彼女に詰め寄る。

「え、ええ。私物ですから、お部屋に持ち帰られても構いませんし、施設を出る時にお返し頂ければ宜しいですから。」

そもそも文学作品以外の実用的な本の貸し出しが一切禁止とかいうのが間違ってたんだよ。

太っ腹な理念の施設が、せせこましいいたらありゃしない。

「何時頃借りられますか?」

その為なら何でもしちゃうぜ、今のオレは。

「私の部屋にありますから、来てだされば何時でも。」「行きます!すぐに行き……。」

先生の部屋にだつて……え?

……一番の責任者、偉い人の部屋に?

「そうですか。では、今からでもどうぞ。」

「……あ……はい。」

P o s s i b i l i t y ! 皇子の思考は加速する。【前】(前書き)

ゴールデンウィークの更新は如何いたしましょうかねえ？

身体を支配する無駄な緊張感。

女性の住む部屋とか、家に入るのなんてアイシャ姫の時で慣れているだろうに。

ましてや彼女だって一応お貴族のお嬢様なんだし。

そんなオレの心の動揺を当然知らない目の前の女性は、つかつかと自分の部屋へ向かって廊下を歩いている。

勢いで実はとんでもない事になってしまったよ、本当に。

仕方ないといっちゃあ仕方ない。

「トウマじゃないか、何処へ行くんだ？」

ふいに名前を呼ばれ、そちらを振り向くと先程名前を思い浮かべたアイシャ姫がいた。

医務室で会った時に着ていた真紅の服は、同色の鎧に変わり、手には長い金属棒の先端に斧。

例の斧槍を持っている。

「武器を持つと本当に口調まで変わるんだ……。」

そういう傾向があるとは、今まで多少垣間見てはいたが、まさかこれほどはつきりと変わるとは。

知らない人間が見たら、同一人物かと疑うくらい凛々しい。

「あ、先生の部屋へ参考になる本を借りに……。」

オレの顔を見た後、チラリと一緒にいる女性を見る。

つか、睨む？

「……二人きりですか？」

言うな。

なるべく考えないようにここまで来たんだから。

「本、借りるだけですし。アイシャ姫はこれから訓練ですか？」

忘れる所だった。

今は二人きりではないのだ。

オレは平民、相手は大貴族。

「うむ。トウマに教えてもらった間合いの取り方に関しての訓練だ。無手になった時も想定してな。」

思い出したくもない事を・・・しかも、人前で。

というか、無手になったら姫は普段の姫に戻るのだろうか？

ちよつと興味を引かれる。

「皆もまたトウマに教えを乞いたいそうだ。また来てくれないか？」

「・・・考えておきます。」

何だろつか、オレが男だからかな？

どうもあの女性特有の集団心理？現象？というのが理解出来ないし、馴染めない、慣れない。

うん、無理。

「そ、それとだな・・・。」

またチラリと廊下の先を待っている先生を見る。

「うん？」

何をそんなに気にするんだ？

まあ、確かに美人ではあるが。

「こ、今夜は、そ、その空いているか？」

今夜？

「特に何かあるというわけではないですけどね？」

毎日、特にこれと言って何かがあるわけではない。

夜はここんどこ出来なかった鍛錬に使って、他は読書して書写するくらいだ。

この作業というべき名のものを予定と呼ぶなら別だが。

「ならば、今夜一緒に夕食はどうだ？」

夕食の誘いかあ。

イイモノ食べてるのかなあ、お貴族様。

ミリイとオリエ、喜ぶかな？

「ミリイとオリエが行きたいと申して、二人も一緒に宜しいのなら参ります。それで宜しいですか？」

言葉遣いが間違っている気もするが。

まさか、こんな風な展開で社交性（？）の低さを露呈する事になるとは……。

「ああ、わかった。”待っている”。」
ライライ。

待っているなどと言われたら、必ず行かなければならないじゃないか。

あれほど、身分の差を考えるとやっているのに。

「いや、あ、ちよっと……。」

ううむ……言うだけ言ったら行つちまいやがんの。

「なんだかな……すみません、先生、お待たせして。」

肩を竦めながら、待っていてくれた先生に礼を述べる。

「いえ、いいですよ。先程の方は、クロアートの方ですね？仲が
良いのですか？」

仲？

アイシャ姫との？

「うん……セルブ国のラスロー王子からすると、オレが彼女に
執着している様に見え……オレとしては……。」

「としては？」

「血統書付きのドデカイ犬が尻尾振っているようにしか……。」

しかも、大変な美犬で力持ち。

「あら、まあ。ラスロー王子とも。異文化交流、大いに結構ですよ。」

「あ、そういえばこの人は、こんな感じだった最初から。」

この施設の理念だったんだよな。

実際の中身は別としても。

「確かに得られるモノは多そうですね。」

クロアートの技も、セルブの技も少しだけ見られたし。

歴史の事も水車の事も。

水車と言えば、オリガさん詳しくあったな。

セルブ国は水車が多いのか？

後で聞ける機会があれば、聞いてみよう。

同じ授業なんだしな。

「あの、先生。セルブ王国の方は術使いが多いんですかね？」

そもそも彼女は何故あの講義を受けていたのだろう？

「どうでしょう？私も自分の出身国以外には余り詳しくないので・

・

ああ、そうだった。

この人はセイブラム法王国の出身だっけ。

「でも、隣国でしょう？」

「そう言われたらそうなのですけど、それだったら、貴方のお国もお隣よ？」

地理的には、ヴァンハイトの北、クロアートの東、セルブの南東だっただけか、セイブラムは。

「お隣の国なのに貴方のような、ヴァンハイト一押し of 若者なんて噂聞いた事ありませんよ？」

うわっ！

非常に際どい。

なんだ？

女の勘をオレに見せつけようと、誰かが画策しているのか？

そんなワケないか。

「一押しではないです。」

かろうじてコレだけは言えた。

「そうですね。先程の質問ですが、セルブ王国は各国から優秀な人間を探して引き抜く部隊があると聞きますから。」

うっんと唸る先生。

「術使いの人間がいてもおかしくはないとは思いますが。」

あの王子がオレに言ったような引き抜き作戦を各国にいる人間に展開しているってワケか。

本気で戦争でも始めなきゃいいがな。

「さあ、着きましたよ。」
クスリと笑って、先生はオレの部屋の中へと招き入れた。

「嘘だろ、オイ……。」

部屋に入ったオレを迎えたのは、一本の大きな杖。

講義の最中に見た例のアレだ。

こんな無雑作に置いてあるなんて、オレの兄上以上だぞ。

これが本当に本物の神器ならば、だけれども。

「近くの椅子にでもかけてください。」

かけていてと言われてもな。

この杖の近くにはいたいと一片も思えないんだが……。

「いやいや、立って待たせてもらいますよ。」

もう次からは絶対、少なくとも剣の一本は腰から下げてください。

お守り感覚だ。

「? ああ、持ってみますか?」

「はい?」

オレの視線を理解したのか、物凄い事を笑顔で提案された。

「何を馬鹿な事を……。」

どう考えてもわかりきったうえで言っている。

「拒絶されるのが怖いですか?」

ほらな?

しかも、楽しげに言ってくるし。

ここは正直に言っておくべきだな。

「拒絶された人間を見た事があるので、痛いのは嫌です。」

だいの大人ダイクエルフが悲鳴をあげるくらいなんだぞ?

と、言っても、これはディーンディーンの剣の場合だ。

「大体、持つまでも無く拒絶されるに決まってるじゃないですか?」

一応、使いこなせてはいないが、ディーンディーンの剣を使っている時点で。

それとも大丈夫なものか? 浮気可?

いやいや、世の中そんな甘くないだろう普通。

「あら、そうとは限りませんよ？この杖は意外と社交性ありますから。」

「嘘だ。」

絶対、嘘。

大体、杖の社交性ってどんなんだ？

「嘘じゃないですよ？直系でなくとも持てるんですから、他の比べたら格段に。」

・・・顔に出てたか？

確かにセイブラムは直系が治めているわけじゃないから、そうなのかも知れないが・・・本当はあるのか？

そういう性格みたいなもの。

「うふふ。そおれっ」

「うわっ?!」

「こともあろうに、杖をこっちに向かって投げてきやがった!!」

「とっ、とと・・・。」

流石に落とすわけにもいかず、投げられた杖を心の中で泣きながら受け止めるしかない。

「・・・。。。。嘘。」

掴んだ。

落としても壊れるようなモノではないが、しっかりと掴んだ・・・よ、オレ。

「なんで?」

「なんともない・・・?」

「て、あてて・・・。」

「じんじんと伝わってくる痛み。だよな。」

しかし、ディーンの剣とは違って、その痛みはほんの僅かだ。耐えられない程度じゃないし、悲鳴をあげる程でもなく。

「やっぱり思った通り。」

思った通り？

アレか？

ここまでの流れは、確信を持っていたと？

「何故に？」

本当に色んな意味で。

「講義の時に視た魂の質で。一般に知られていないけれど、こういつたモノには何というのかしら、意志というか性情の様なものがあるの。」

意志や性情。

ディーンの剣はどうだっただろう？

オレの想いや考えに反して、オレに痛みを与えたり治したり・・・勝手に発動したり。

それがあの剣の性情のようなものだと言われればそんなもかも知れない。

意外と我が侷？ディーンの剣ってば。

「ちょっと待って下さい。そういう傾向があるのと、オレがこの杖からの拒絶が軽いのと、どういう関係が？」

魂の質を視てと言ったよな？

「術使いの資質がある事が前提条件？魂に刻まれた資質・形質で全てが決まる・・・？」

関係性があるとしたら、そういう事になる。

「つまり、オレの二系統の資質のどちらかが適応しているという事か・・・いや、そうになると・・・。」

トウマの魂がディーンの剣に対応する資質で、オレがセイブラムのの？

おかしいだろ。

それは絶対におかしい。

”ヴァンハイト”の魂と血は何処にも出ていない事になるぞ？

神器を操るには魂が関係しているという仮説は、トウマとディーン
の剣の時には既にあったが。

「しかし、理論がここまで酷似していると、神器の製作や使用者は術使いという事なのか……。」

思い当たる節もある。

ディーンの剣は、術使いが生み出した炎も、その原理を応用したスクラトニーの炎も切り捨てる事が出来た。

……困った。

しっくりきてしまった。

ここまでしっくりきてしまうと、オレが本気でヴァンハイトから大きく外れてしまっているのも。

抜けど的な仮説と立てるとしたら、トオマとオレの魂が融合しかているという辺りか？

「意外と文官型なのね。」

……考え込むと集中力が増す反面、他が何も頭に入らなくなるのは悪いクセだよな、ホント。

しかも、オレの場合、口に出して確認しながら考えるからなあ。

「やっぱり、先生もオレが武官だと思っているですね？」

「だって、ヴァンハイトの近衛第一師団所属なんでしょう？」

……そうか、そうだよ、先生なんだからオレがどの国の誰の推薦で、何処に所属しているのか知っている。

設定上ので。

下手したら、本当の事を知っている、或いは気づきかけているのかも知れない。

「そうですね。ところで先生。術の形質変換が魂の質に基づいて決定されると言っていましたよね？」

「ええ、そうですね。」

オレとの会話というより、オレから発せられる言葉に興味があるかのように、にっこりと微笑んだまま次の句を待っている。

何やら笑顔がとても楽しそうに見えるのは、気のせいだろうか。

「形質が二つある場合、単一の形質二種類ではなく、こう掛け合わせるように第三的な形質を生み出す事は可能ですか？」

脳内の青写真はこうだ。

ヴァンハイトの魂の本来のオレが双剣。

トウマの魂が長剣。

この二つを掛け合わせた現在のオレの魂の在り方が、セイブラムの杖を持てる程度の資質に近い。

この理論なら、さっきの仮説の筋が通る。

三つの内、一番弱い瀕死のオレの魂が双剣を使えないだけ。

「面白い質問ね。」

オレに渡した杖を手元に引き寄せた彼女は、上機嫌だ。

「理論上は可能よ。ただ三つ目が必ず成立するかはわからないわ。だって、水と炎を掛け合わせるって想像できる？」

性質だけ見れば噛み合わない気もするが、密閉された状態で高温を浴びせれば爆発しそうだが、そういう事じゃないんだろう。

性質の話だからなら、言いたい事はわかる。

「難しいですね。」

オレは神器で考えていたからこの仮説に辿り着いたが、酷似した理論の術の場合で考えたら至難の技だ。

「それに……。」

「それに？」

「人間って、そんなに器用な生き物かしら。」

真理だな、まさに。

反論のしようもない。

「ううむ……では、もう一つ。」

「なあに？」

「魂の形質が合えば、操作したり、掛け合わせたり、人を操ったりも出来ますか？」

オレは自身の存在への核心の一つ、そして取り戻すべき相手にか
けられているかも知れない術への質問を挙げた。

「実際に可能かどうかはわからないけれど……。」
彼女はそう前置きをした。

「だが……。」
「絶対に無理というわけではないわ。ただ、後者は別としても前者は……。」

理由はわかっている。

そこに辿り着くまで、研究に研究を重ねたのだろう。

「同調可能な魂を見つけ出すのも難しい？」

オレは眉をしかめる彼女の二の句を繋げる。

女性のそういう表情は見たくないなあ……。

「そうね。それに倫理上、許されるものではないわ。」

”許されざる存在”という事だ、オレは。

別段、反論なんかしない。

自分でもそう思う。

「操作されかかっている意識を解き放つには？」

「さあ？」

さあつて……困ったなあ。

「だってかなり高度な術だもの。そう見られるものじゃないわ。」

やっぱり？

全く、ロクでもないな。

「でも、魂とか意識って、そう簡単に支配されたりはしないの。」

トウマの魂は死にかけていたり、肉体から離れていたのかも知れない。

シルビアも、つけこまれる何かがあったのかも。

「なるほど。先生には本当、沢山質問してすみません。」

「いえいえ。」

「じゃ、あと二つくらいかな。質問。」

「何でもどうぞ。答えられる範囲ならだけれど。」

意外・・・というか、思った通りに気さくな人だ。

「先生のお名前と・・・あと、本は？」

一瞬の沈黙。

済ませるべき用事存在を互いにすっかりと忘れていた。

ああ、オレが質問しまくったからだよな、うん。

「・・・そうでしたね。少し待って下さい。」

そう述べて、部屋の奥へと去って行く。

「しかし・・・。」

そうなると、オレ自身の弱った魂には、別段術使いの才能という
ものがあるというワケではないらしい。

トウマの魂の形質を使えば可能かも知れないが、使おうとも思わな
い。

それは確かにオレの魂の一部だが・・・何となくそれは侵してはい
けない領域な気がする。

普段のオレの思考回路だったら、使えるモノは何でも使ってヤル！
とかいう方向性なんだが・・・。

こればかりは別だ。

手段を選ばなさ過ぎて、自分を捨てたら人間お終いだ。

オマエに捨てるような自分があるのかとか、突っ込むなよ？

「はい、これよ。」

先生はお目当ての本をオレに差し出す。

・・・意外とブ厚い。

これを全部理解しつつ、必要な要点部分を模写するにはどれだけの
手間がかかるだろう。

やるしかないか、一度決めたんだしな。

「ありがとうございます、先生。」

両手で本を受け取り、頭を下げる。

礼儀は大事だぞ。

「リディアよ、私の名前。」

何故、貴族姓を言わないんだ？

オレに親しげに名前で呼べと？

「・・・ありがとうございます、リディア先生。」

渋々だが、感謝の言葉をやり直すと満足げな表情を浮かべるリディア先生をオレは意外と子供っぽいなと思った。悪い意味じゃなく。

オレの周りにいる人間を彷彿とさせる。

きつとオレが皇子という身分じゃなくて、先生が神器使いじゃなければ、しっかりとした尊敬と信頼を持った師弟関係になれたと思う。

「このあとは、早速お勉強？」

「え？ああ、それもいいんですが・・・。」

前言撤回。

子供っぽいのも考えものだ。

絶対にワザと聞いている。

そして半ば強制的にある方向へと促されている気がする。

先生相手に突っ込んでいいものだろうか？

「・・・アイシャ姫との夕食の約束がありますので・・・。」

ええいつ！オレの意志薄弱者めつ！

オレの苦悩をよそに、リディア先生は微笑みを崩さない。

この人は異文化交流（？）推奨派だからな。

皆、ちつとも今のオレとの身分の差を考慮してくれない。

大体にしてだ、生徒と先生という関係でなれば、今のこの序今日だって有り得ないような光景だ。

「・・・では、失礼致します。」

これ以上ここにいると溜め息どころか悪態をつきそうので、早々に退散した。

Quarrel! 皇子はそれを蔑視する。【前】

自分の部屋に帰り、借りた本の目次と照らし合わせながら軽く、本当に軽く斜め読みしてあたりをつける。

その作業をしながら、本を借りる経緯と夕食に誘われた経緯をミリイとオリエに説明した。

アイシャ姫自身は、嫌いというわけではないんだが・・・能力だつて今まで見てきた貴族の中では、大分マシな方。たまに箱入りのブツ飛びっぷりに絶句はするが。

「で、どうしようか?」

反対意見がどちらかの口から・・・まあ、オリエは発音できないが、あれば行くのはやめておこうかと思つて発した言葉だった。

だが、結局、そんな意見は出て来なかった。

さしたる反対も無く、遥かに身分が上の人間に”待っている”とまて言われたら、行くしかない。

結局、三人で行く事になり、例の無駄に豪華な屋敷へと向かい、夕食の席に着いたのだが・・・。

(何でこうなる?)

オレは様々な感情を込めて、アイシャ姫を睨・・・見つめる。八割近くが非難の意味で。

「アイシャ姫が親しくしている御仁がいると聞いたが、あの時の方とはな。」

機嫌良く飲み食いしている人物がオレとアイシャ姫の座っている上座にいる。

クロアートの国色でもある真紅の羽織り、薄茶色の髪を後にまとめた男。

ちなみにこの男が上座にいるせいで、従者扱いのミリイとオリエは、オレ達と別室で食事となった。

マイル君もいないところを見ると、恐らく彼も一緒に別室での食事

なのだろう。

「いやいや、聞くところによるとあの”グランツ”の一門だとか。」
オレを興味津々に観察しているこの男、あの頭の悪い発言をした
クロアートののお偉いさんだ。
名前？そんなの聞いていると思うか？

聞いていても、覚えるか馬鹿。

このオツサンのせいで、あんな模擬戦をアイシャ姫はするハメにな
って、オレが怪我する事になった、その原因なんだからな。

「グランツと言っても、私は末席の若輩者なんで。」

まさか、こんなにグランツ姓が国外で大人気だと思わなかった。
有名人だ。

もしかしたら、オレより有名人なんじゃないか？

まあ、一応あの熊はオレの師匠なワケだから、オレもグランツ一門
である事には変わりはない。

若輩者で末席なのも本当だ。

オレが産まれて、物心ついた時にはバルドは既に任官していなくて
名誉職だった。

その間、バルドは弟子をとっていない。

それにバルドの教えを受けた人間で、グランツ姓を名乗っていると
いうか、名乗れたのは三人といなかった気がする。

会った事はない。

(だから、余計に目立つのか？)

本当に誤算だった。

「はっはっ、何を言う。逆にその若さでグランツ姓を名乗るなど、
誰しもが出来る事ではない。」

ああ、やっぱり。

・・・人間離れしてるもんな、あの熊。

うん、熊。

小さく溜め息をついて、チラリとアイシャ姫を見ると、彼女は申し
訳なさそうに終始下を向いたまま微動だにしない。

多少は申し訳なく思っているのがわかるから、良しとするか。

「逆に人材不足なのかも知れませんか？」

あまり国内の武力が強いと印象づける事は避けないな。

外交上の火種は残さないに限る。

「成程。だが、しかし、セルブ王国の王子は君を高く評価していて引き抜きをかけているとか。」

誰だ、情報を流したのは。

というか、アレか？

オレ、誰かに監視とかされているのか？

そんな気配はなかったが……。

大半はアイシャ姫からの発信な気もするが、これは困った。

このオツサン、どうやらオレに興味を示してこの夕食会に割り込んで来たのかも知れない。

全く、人騒がせなのは血筋か？

「ラスロー王子も何か勘違いしたのでしょう。」

あれか？

本名と本来の身分で来た方が、実は良かったとかいうオチか？

裏目に出過ぎだ。

「これは儂も負けていられんな。そう思った部分もあって、姫に頼んで参加させてもらったのだ。」

やっぱり。

皇子だろつとなかろうと、別の国に属する気はないんだがな。

「そう言われましても……お断りするとしか……。」

「それは、ラスロー王子の誘いを受けたと？」

「いいえ、お断りしましたよ。丁重に。」

一瞬、険しくなったその視線をあっさりと流しながら、素早く否定する。

全く以って面倒くさいが、両者の睨み合いの話を知っているので誤解のないようにしなければ。

その構図は、天秤の皿に両国の名前が書いてあって、オレが乗せら

れているカンジ。

オレ一人如きで傾いたりはしないだろう、それでも要因は少ないに限る。

あー、神器つきなら良い宣伝という意味で価値はあるだろうなあ。

「何か、理由や条件に不満でも？こちらとしてもそれは充分に考慮するが？」

なんだろう、この考え方。

確かに、思想の違いという理由があったのだが、それにしただって・
・自分が待遇で動く人間だと思われたのが少しカチンと来る。

いや、かなり。

ああ、そうだった、貴族って大半がこんなのだったよな。

だから、余計に頭にクえるのか。

そういえば、会食が始まってから結構な時間が経ったな。

そろそろ、食の遅いオリエの食事も終わった頃だろう。

終わってないのは、オレだけかな。

ま、仕方ないか。

Quarrel! 皇子はそれを蔑視する。【後】

「お気遣いは無用です。私はどちらにも加担しませんから。」

こんな言い方をすると確実に余計な問題が起きそうだが、こころも言わんと一生自分達の都合のいいようにとられかねない。

「例え、クロアートとセルブの戦争が起きたとしても。」

恐らく、兄上も同じ意見だと思っている。

というか、国の総意だと思う。

誰もそんなのに首を突っ込みたくはない。

利点もないしな。

ヴァンハイトが行うとしたら、停戦調停くらいだろう。

「ああ、そうか。」

オレは今は個人なんだつたな。

オレがやりたい事をブチまけてもいいのか。

「私が必ず何処かに加担しなければならぬとしたら、獣人・亜人にしよう。」

北と南が激突したら、困るのは国境線の近く。

真っ先に戦地になる彼等だ。

そもそも国境線付近に集落があるのも原因の大半を占めている。

「戦いで泣くのは民。ならば、両国の戦火を逃れた者、全て。ヴァンハイト皇国で受け入れても構わない。」

馬鹿げてんだよ、皆。

こんなくだらないモノの為に世界を救った英雄達。

その英雄達の末裔が世界を戦で染める。

滑稽では済まされない。

例え、この平和が裏切りと欺瞞で出来ていたとしても。

どんなに危うい均衡で成立してたとしても、維持していく事が末裔たる者達の責務だ。

「お話は以上でしょうか？ご期待に添えずに申し訳ありません。」

啞然としている二人を尻目にオレは席を立つ。

オレ・・・本当に、食事をほとんど食べられていない。
が、そこは我慢だ。

これを見栄とか突っ込まれたら困るんだが、それは棚上げにするぞ、
うん。

「勿論、何事も無く、私の勘違いでしたら良いのですが。それでは
今宵はこれで失礼致します。」

「はぁ・・・これで悪い印象を与えたな。」

だが、失礼をしたという事を周りに話せたとしても、その内容まで
は言えないだろう。

言ったら引き抜きや戦の話をしなければならなくなるからな。

そろそろ、潮時だろうか？

この宴では無く、この施設からの。

他国の情勢もある程度把握したし、施設の状況もそこそこ理解した。
持ち帰りたいいくつかの資料の目途もついたし。

こりゃ、書写作業を急がないとな。

ミリイには、なるべく精一杯勉強してもらおう事にしよう。

しかし・・・マトモな貴族・王族っていないのか？

「はぁ・・・。」

溜め息を着いて、ミリイとオリエ達がいるであろう別室に向かっ
てから帰途に着く事にする。

退室する時のオッサンの顔は、少し憤慨したようにも見えたが、オ
レは元々ヴァンハイトの所属の人間なのだから、そこまでの遺恨は
残さないだろう。

少なくとも敵対するセルブには属さないと宣言したんだ。

「トウマさん！」

「ほへ？」

さっさと退散しようと思いを早めたオレのあとを必死にな表情で、
アイシャ姫が追いかけて来る。

「どっしたの？」

どうしたのじゃないか、台無しにしてしまったしな。

「今夜は申し訳ありませんでした。」

深々と頭を下げるアイシャ姫。

ここはマトモな貴族かも知れん。

「アイシャ姫が悪いわけじゃないだろう?」

アイシャ姫は末席の貴族みたいな事を言っていたし、上級の貴族には逆らえないだろう。

「でも、今夜は本当はこういったつもりではなくて……。」
「やっぱり逆らえなかつたんだな。」

「いいよ、気にしてないから。」

立場か……厄介だよな。

誰にだつてあるかも知れないが。

全く選択肢が産まれた時から無いっていうのもな。

オレですら、デーインの剣を持つまでは、結構自由奔放だったし。
ん? 持つてからもか?
ううむ。

「アイシャ姫も……アイシャ姫も嫌になったら来るといい。」

何を言ってるんだ、オレは……。

「ヴァンハイト皇国、リツヒニドス領。オレの出身地だ。」

彼女は貴族という立場と責任を理解している。

きつとそんな選択肢は取らない。

でもさ、それと何も誰も言わずに閉じ込める必要はないだろう?
選択肢を塗り潰す事もないだろう?

「私は……。」

「うん、わかつてる。わかつていても言っている。何なら、近衛兵
ごと来ちゃう? 何とかなると思うから。」

それでも国を捨てられないんだらうなあ。

オレみたいな衝撃的な出来事がない限り。

「と、言うのは簡単だよな。でも忘れないで、例えこの施設を出てもオレ達の事。」

出会いがオレを変えていく。

それは衝撃的だった出来事のような強制的なモノじゃないのに……。

切り捨ててしまう事だって出来たのに。

でも、出来なかった。

出来ない出会いだった。

そして、出会ってしまったら、後悔しないようにしたいと思ったから、ここまでノコノコ来たんだ。

「……………はい。どうもありがとう。」

彼女の微笑みも、オレは絶対に忘れない。

Ready! 皇子はついに動き出す。【前】(前書き)

チラシ裏を除いて、今回が通産100話目です。

皆様が読んでくださっているお陰で気づくと3桁になりました。本当にありがとうございます。

これからもよろしくお願いいたします。

Ready! 皇子はついに動き出す。【前】

全力で頭を抱えていた。

例のアイシャ姫に言った発言の事じゃないぞ？

いや、あれはあれで2、3日は頭を抱え、悶える事数十回。

アイシャ姫に合わせる顔も無く全力で遭遇を回避しようとしたくらいだ。

まあ、そんな努力も虚しく再開した瞬間、アイシャ姫の顔が赤面し始めてオレは更に激しく後悔したのは言うまでもない。

ではなくて、現状の問題はだ。

「いたか!？」

「いや。」

「早く探せ!」

只今、逃走中。

なのである。

何故こうなったか？

オレにもわからない。

あの夕食会の翌日、外出届けを申請して受理された数日後。

久し振りの外出が、見事に追いかけてこ。

「拙いよな、手際が。」

恐らくの例のオッサンの差し金だろう。

施設内なら問題になるだろうこの行為も、外出時なら好都合だ。

大体、本来の身分ならともかく、現状の身分でオレが狙われるような理由はそれ以外にない。

だってそうだろう？

今のオレ、トウマ・グランツには何の背景も過去もないんだがら。

「さて、どうしたものか……。」

武装はしている。

鎧も盾も身に着けていない状態ではあるが、双剣と長剣のを一振り

は身に着けて来た。

挟撃や包囲に気をつけながら、細い路地で徹底抗戦。

あるいは、衆人環視の広場で応戦。

この辺りが効率的だ。

命に支障がない程度に叩きのめせば、相手も諦めてはくれると……。

「……馬鹿らしい。」

何でオレがわざわざ疲れるような事をしなきゃなんないんだ？

いや、もう既に二、三人は叩きのめしてしまったんだが。

でも、それとこれとは別で……。

「いたぞ！」

「あ、ヤベ。」

オレに向かつて走ってくる集団。

さっきより人数増えていやがる。

ん〜。

「うっし。」

逃げると思せかけーの反転、双剣を抜いて突破！

そのまま、知っている道へと走り抜ける。

突破する走路にいた刺客に思った以上の傷を負わせてしまったが、

大丈夫だろう。

目的地は、すぐそこだったからそういう手段を取った。

この方が早いからな。

「待ちやがれっ！」

走り去る後方で、そういう声が聞こえた。

それで止まったら、俺はどこまで馬鹿なんだよ！

「あなた……。」

「ん？」

何処かで聞いた声が耳に入って思わず立ち止まる。

「オリガさん？」

買ひ物の包みを抱えて不思議そうにオレを見つめる女性。

「あそこだ！」

「だああーっ！」

立ち止まってんじゃん、オレ！

馬鹿決定。

「ごめん、オリガさん。後で怒られるからあつ！」

彼女と話しているところを見られてしまつては、彼女が何をされるかわからない。

かと言つて、彼女を守りながら大立ち回りというのもアレだ。少なくとも玉砕しないように必死にならないと。

「ちよつ、あなたつ！」

腹を括つてオリガさんの手を取り、強引に引つ張る。

一度怒られる覚悟をした後は、もう全力だ。

「ごめん！すぐそこだから走つて！」

路地を出たり入つたりを繰り返して、目的地へと急ぐ。

ミランダみたいな純粋な文官というか侍女のオリガさんがいるので、追つ手を攪乱しながらじゃないと、何処に逃げ込んだかバレる。

「ヒルダ！悪い！追われてる！」

オレは目的地であるヒルダの店に駆け込むと、すぐさま扉を閉める。

「相変わらずだねえ。」

苦笑しながら、何時もの（？）下着姿で奥から出て来るヒルダ。

その大胆な姿に開いた口が塞がらないオリガさんは、とりあえず置いておこう。

説明するのも面倒だ。

ちなみに今日のヒルダの下着は紫だ。

「この人を裏から逃がしておいてくれないか？途中で巻き込んだ。」

「アンタは？」

「適当に相手を蹴散らして逃げる。ある程度蹴散らさんと、向こうさんも失敗の言い訳を主に出来ないだろ？」

それに思うところがあつて。

「何なのあなた？」

ようやく現実に戻ってきたオリガさんがオレを睨む。

「元を正せば、君の愛しの王子様のせいだよ？アイツ等、クロアートの手の者だ。」

責めるつもりもないし、一応確たる証拠はないけれど。

逆に、それ以外の心当たりもないけれど。

唯一の心当たりは、ディーンの剣を奪ったヤツ等だが、あいつらの狙いは剣であってオレじゃない。

それに相当に用意周到だったから、こんなわかりやすい手を使うとは思えない。

「すっかりオレまでセルブの手先だと思込まれたじゃないか、全く。」

「クロアートの次はセルブかい。いやはや、アンタも大変だねえ。」

ヒルダは半ば呆れつつも楽しげだ。

「好きでこうなったワケじゃないが、話の通じないヤツは仕方ない。」

正直、殺すのを躊躇ってるオレも相当だ。

一人殺したら、後は何人殺めようと同じなんだからな。

「そうだねえ、そういう馬鹿は何処にだっているさね。」
その通り。

「どっから見ても、女誑しの博愛主義者なのにねえ。」

それもその通り。

反論の余地もない。

オレは殺されそうになった時にしか、今まで相手を殺めた事はない。さっき倒したヤツ等だって、峰打ちだ。

「ああ、ヒルダ。双剣は”負荷”だったよ。」

「ん？だから、ソイツは”付加”持ちだって……。」
峰打ちをした瞬間の手ごたえで気づいた。

「違う。その付加じゃなくて、負荷。瞬間的だけれど重量が変化する。」

使い慣れた武器の重量が変わると使い難いだけなんだが、切り下ろす瞬間と引き上げる瞬間のみ重量が変わると、剣撃が軽いという短所が解消される。

そして、速さを生かす長所が強調される。

これは双剣使いだったら、嬉しい特典だ。

「成る程。だから振った時にアンタが感じた違和感がソレだったんだね。」

「ああ、じゃ、彼女を頼んだよ？今度、酒でも奢るからさ。」

「それは、一晩中付き合ってくれるのかい？」

ニヤリと笑うヒルダ。

まだそういう事を言うのか……。

ああっ！オリガさんが軽蔑の目で見ている？！

でも、なあ……。

「考えとく。」

オレは苦笑しながら、そう言うと双剣を抜いて素早く外に出た。

Ready! 皇子はついに動き出す。【後】

・・・まとめに入ろうじゃないか。

外出した際に出くわした追撃者がある程度まで痛めつけてから数日が経った。

オレはつとめて何事も無かったかのように装った。

そんなオレの態度を察してかどうか知らないが、オリガさんは何もオレに聞いてはこず、彼女も普段通り。

原因の半分はセルブ側にもあるからだろうか？

ラスロー王子が何も言っただけでこなかった所をみるとそうなのだろう。彼女も相当に律儀だ。

王子に話したら、彼の性格上、更なる引き抜き工作をし始めるかも知れないしな。

そんな泥沼は御免こうむりたい。

オレが無傷なのを見れば、相手もそれなりに考えるだろうしな。諦めるなり、次の手を打つなり。

問題はミリイやオリエに被害が及ばないかどうかだが、それをしてしまえば外交問題にも発展しかねないしな。

無駄に労力を使う事にはなったが、それで見えてくる事もあったし、ちゃんと外出の目的も達成していたから、上々だ。

ム力つくのが、仕返しをしようにもそれもまた外交問題に発展してまうという事だろうか。

いっそ、邪魔するヤツを暗殺して逃亡すれば・・・とも思ったが、出身国と推薦人は本物なのでダメだ。

ちなみに外出の目的は、オリエの装飾品だ。

銀色の腕輪。

手首ではなく、二の腕につけるやつだ。

素材は、何となくシルビアと同じにした。

これも縁なのかなと思ったからだ。

一応、シルビアの指輪は彼女に預けたままだが。そのお礼かどうかはわからないが、翌日の夜には先生に借りた本の内容をまとめたものをオレに渡してきた。

「・・・完全に文官としての能力は負けたな。」
完敗だ。

そんな事もあって、ここに来た目的の大半は完了して、あとはシルビアの事だけとなった。

が、別の心残りが出来てしまったので、今回みたくまとめに入ったと。

「クロアートとセルブか・・・。」

もし、目的が両国の開戦だとしたら。

一番最初の事件はクロアート側の犯行の確率が高い。

「自国の貴族を殺すワケにはいかないもんな。」

施設の中庭で思考するのも定番になってきたな・・・とりあえず横になろう。

「どちらにしても開戦の文句にはなるか。」

塗ってあったのが毒でなく、痺れ薬だったのが余計に。

「それにあのオッサン・・・。」

力尽くで出てきたところをみても、そういう実力行使とか画策するのが好きそう。

その中でオレが出来るコトは・・・。

・・・ああ、やっぱり暗殺が一番簡単。

・・・。

はい、却下。

一瞬くらい考えたっていいだろう？

「と、すると・・・やっぱりアイシャ姫を亡命させてやりたいな。」

姫を半ば人質にとるというカタチになりそうだが、ヴァンハイトまで相手には出来ないだろう。

それこそ、あのオッサンが回避したい”挟撃”という方向性になる。必然的に交渉に入るだろう。

あとはゴネている間に亜人達の問題をどうにかする。
移住なりなんなりでだ。

「いや、何も亡命先はヴァンハイトではなく、セイブラムでもいいのか……。」

彼女を開戦の道具という位置から遠ざければ、少なくともこの施設が戦争の発端になるという可能性は減る。

何だかんだ言つて、この施設の主旨は素晴らしい。

「そうか、セイブラムか。」

地形を考えれば、両国ともヴァンハイトかセイブラムと同盟なし、不可侵条約を結んでおきたい。

セルブの場合は包囲網をしけるし、クロアートにしたって新たな補給路を作れる。

「これは断然、兄上の振る舞いが大事になるか。」

姫を道具に使うよりも利益が多いと見せかけられれば……んまあ、やれなくはないだろう。

オレは早速、悪だく……もとい作戦を練った。

まずは、うまくクロアート・セルブの両国が喰いつくような話題作りからだ。

Ready! 皇子はついに動き出す。【後】(後書き)

まとめです。(苦笑)

今回で、?章も終盤にさしかかります。

2時間ドラマで1時間20分経過後のまとめ兼次のヒントを見つける辺り(苦笑)

Scheme! 皇子の指差し火の元確認。【前】

「ふんふん」

目の前でミリイが鼻歌を唄いながら、荷物を整理している。

曲調に合わせて揺れるお尻が何とも可愛らしい。

・・・いや、オレが悪かった。

「元々荷物が少なかったから、整理も早いなあ。」

一番重い荷物がオレの荷物。

というか、武具な。

「夜逃げでもするつもりか？」

「夜逃げかあ。したら探さないでくれます？」

部屋の入口で、オレに声をかけたのは兄上だ。

ちなみに疑問に対して疑問を返したオレの発言は、肩を竦められる結果だけで返答は得られなかった。

「まあ、必要なモノは手に入れられた気もしますし、オレがこんな立場じゃなければ、何年か勉強しても良かったんですけどね。」

荷物の武具は具足と盾、長剣一本以外は片付けた。

そもそも、どうも胴体部を覆う鎧は着慣れなくて好きになれない。

速度重視の剣術なのと集団戦をしなからかな。

「そうか。ところで、この行動は最近流れている噂と関係あるのかい？」

やっぱり、ソレの件で来たのか。

「噂？はて、何でしょう？」

・・・ちよつと白々しかったか？

「今回のヴァンハイトの参加は、『第二皇子』の妃候補を探す為という話なんだが？」

「何ですか？ソレ。」

人の噂って本当に適当だな。

一瞬で広がって、しかもその過程で真実が薄まり尾ひれがついてい

く。

・・・今回は、薄まるような真実は皆無なんだが。

「その噂のせいで、今日は何かと弟はどっという人物なのか聞かれた

よ。」

ニヤリ。

笑みを兄上に見られないように、寝台に飛び乗る。

オレが乗った衝撃で、寝台で本を読んでいたオリエの身体がぼよんと跳ねる。

「何で迷惑な。で、兄上は何て答えたんです？まさか無視するわけにはいかないでしょう？」

第二皇子がどっという人物かは、国内ですらほとんど出回ってないからな。

理由は、この兄上が完璧過ぎて目立たないというだけなんだが。

オレもそう振る舞ってきたし。

そりゃあ、兄上に聞こうとする。

「弟の皇としての器は、私より上だと自慢しておいた。」

胸を張る兄上。

「……………兄上、何という不穏当な発言を。」

皇太子の台詞じゃない。

いや、自慢するだろうというのは、オレも予想はしてはいたよ？

予想の範囲内なのだが、その内容は予想の斜め上というか、想定外。

「？そうか？少なくとも私の目にはそう映るのだが。」

何が悪いのか一向に理解していない点が、弟馬鹿たる所以か。

「ちなみに、何処の国の方に聞かれたのですか？」

ここが最重要。

「うん？あれは確か、クロアートとセルブ。それとセイブラムだな。」

「

来た。

もう笑いが止まらない。

しかし・・・何故にセイブラム？

中立国だろ、アソコ。

「そうですね。じゃ、適当にのりくらりと答えていってくださいな。」

「やっぱり火の元はここか。」

肯定もしなかったが、否定もしなければそりゃバレるか。

「何のコトだか。」

そう返すしかないんだよな、でも。

ま、兄上の事だから、これも弟の面白い悪戯程度と思って見て見ぬ振りをするだろう。

あー、逆に乗ってくるかも知れないが。

「では、もう一つの噂もか。」

は？

「もう一つ？何です？」

何かオレ、目立ってたっけ？

ああ、目立ったといえれば目立ったが。

お陰で”グランツの武は未だ衰えず”という印象を各国に植え付けてしまった気がする。

ある意味で、あの熊が兵器なのは否定しないけれどね。

分類上、もうそれでいい気がしてきたよ。

これをチラつかせてやれば、ヴァンハイトの防衛は充分なんじゃないか？

何も言えん。

「セイブラムの姫が、ヴァンハイトの青年に入れ込んでいるという

噂だ。」

え？

何ソレ？

「何やら自分の部屋にも招きいれているそうだ。」

ぐはあつ。

何だその尾びれ！

噂怖イッ！！

兄上もわかって言うのやめて欲しい。

ヴァンハイトの青年なんて、オレか兄上しかないじゃないか、も！。

だが、火元があるというのは兄上の言だが、部屋に行ったのは事実とはいえ、一体誰が……。

部屋に行ったところは誰かに見られた記憶はない。

アイシャ姫に見られたが……。

「監視がついてたりするのか？オレ。」

困ったもんだ。

「こんな小者なんて放置してくれないかなあ、皆。」

兄上を筆頭に何かをオレに期待する人達は、おかしいと思う。

期待なんかより、まだ信頼が欲しい今日この頃。

「もしくは、オレの噂に乗って一枚噛みに来たのかな？」

どちらにしろ、悪くはない。

これで、クロアートとセルブの二国間に無理矢理ではあるが、ヴァンハイトとセイブラムを絡める下地にはなった。

地理的に挟撃出来る国が二国噛んできた以上、すぐに戦端開けまい。少なくとも、どちらかを味方ないし中立につけるか。

「あとはアイシャ姫とラスロー王子が無事に帰国すれば、今回に限ってはオレの勝ち。」

「面白い展開なのか？また一人で。」

あ、この人、こういうの混ぜてもらいたがるんだった。

「とりあえず、第二皇子はリツヒニドスにて内政の勉強をしているという方向性で……お願いします。」

兄上をちよつとでも混ぜれば満足するだろ。

「ふむ。では、三つ目の噂。クロアート出身の一部の女性内に根強い”トウマ・グランツ支持者”の集団が結成されたのも策だったか……。」

「はいいいいいいーっ?!」

やっぱり情報操作なんて、おいそれとするもんじゃない……。

女性と噂話は非常に怖い。

Scheme! 皇子の指差し火の元確認。【中】（オリガ視点）（前書き）

なんだが、この章は女性視点少ないですよねえ？

「わかった?」

私は言われた言葉を頭の中で反芻する。

不思議な程優しく穏やかな声。

その声に言われるがままに私は導かれる。

大丈夫。

機会は少ないけれど、きっとそれは巡って来る。

私は、頷き。

自分の心を奮い立たせる事だけに神経を注ぐ。

「あら?」

彼はこの時間、大抵ここにいる。

その印象は掴み所が無い。

時にはその存在さえ儂げで、薄く感じる。

でも、気弱に見えた彼が、王子の刺突を見切った時の事は記憶に新しい。

しかも、故国にも名が通っている”グランツの武門”の出という。

「やあ、オリガさん。」

締めりのない笑顔。

やはり、あの光景を見ないと信じられない。

「水車の件はすぐく参考になったよ、ありがとう。」

そして、彼は基本的に笑顔だ。

グランツの姓を持つ武官のはずなのに勤勉家でもある。

図書館で会った時の集中力も凄かった。

「聞きたい事があるのだけれど?」

この時間なら二人きりで話せる。

だから、私はここに来た。

幾つかの噂が流れ始めて、各国の動きが慌しい反面、決定的な手が打てなくなっている今に。

「珍しい。オリガさんからオレに話があるなんて。」

苦笑しつつ、いいよと了解する。

「あの噂はあなたが？」

「噂？」

他に考えられない。

私以外の人間は彼を武官と認識しているようだけれど、彼は文官にも匹敵するというのを私は知っている。

「オレに関する事なの？ 案外、他人の噂は別として本人に関する噂は入ってこないんだよねえ。」

腕を組んで首を捻る。

彼のこのわざとらしさは、正直好きになれない。

人を小馬鹿にしているとしか思えないからだ。

「ヴァンハイトとセルブ・クロアートに関する噂なんて、あなたしか関われないでしょう？」

「ああ、その噂ね。確かにラスロー王子にもアイシャ姫にも会ってるし、ヴァンハイト出身でもあるけど。」

クスリと笑って。

「それだけじゃあ、弱いなあ。」

本当に人を小馬鹿にしている。

でも、今は彼に賭けるしかない。

「第一、それ、ヴァンハイトにもオレにも利はないじゃん。」

「でも、時間稼ぎにはなるわ。」

彼は目先の利益のみでは動かない。

「それに利益だけで動く人間じゃないでしょう？」

だとしたら、王子の誘いを受けてもおかしくはないはずだ。

「あはは。随分と高評価だ。だとしたら、ハズレ。」

私を正面に見えるように姿勢を変え、声を出して笑いながら胡坐をかく。

「オレは利で動くよ。ただ、その基準は”オレだけの基準”なだけ。故にオレを本当に従わせるには殺す事だね。」

指で自らの首を刈る真似をしながら。

「ただ簡単に殺されるワケには、”今は”まだいかないし、そうだなあ。」

沈黙。

「どうせ死ぬなら、愛してくれる人の腕の中で死にたいな。無理そうだけれど。」

何処まで本気なのだろう？

「あなたはあなただけの味方なの？」

「どれだけ自分勝手だというのだろう。」

「自分が正義とは思ってないけど、少なくとも進んで戦を起こそうとという人間よりは、人間らしいと思うけど？」

「あ……。」

気づくと最初の質問の答えを想像出来る言葉が出ている。

全く、どこまで小馬鹿にしているのか……。

「世の中にさ、戦を望み利を得ようとする者がいるなら、戦を排する事で利を得ようとする人間が居ても構わないだろ？」

「なによ、それは。」

私はほとほと呆れた。

捻くれている。

「そういう世の中の回り方があってもいいだろう。」

この目だ。

背筋が少し凍りそうになる鋭い瞳。

王子と姫の戦いに乱入した時の。

「ま、人それぞれってコトで。」

ふっとその鋭さが消え、再び微笑む。

「なら……。」

これが本題。

「クロアートの誘いを受けたのなら、我が国との会食を。」

「……噂の信憑性を上げる為に？」

聡い。

こちらの意図をきちんと汲めている。

やはり、彼は武官というより文官なのだろうか？

「帯剣を許可願えるなら。」

・・・彼は一体何者なのだろう？

「ああ、それとオレからも一つ聞きたい事がある。」

Scheme! 皇子の指差し火の元確認。【後】

嫌な予感がした。

大体においてだ。

ラスロー王子第一主義の彼女が、単独でオレに会いに来るのが引つかる。

王子も王子だ。

オレに興味があつてオレを引き抜くのですから、本人が出向いて来るくらいなんだぞ？

使い一人寄越して、会食に誘うか？

しかも、一度きっぱりと断つたのに。

わざわざ、噂が広まり始めたこの機会を狙つて？

絶対に裏がある。

理論と直感、両方がそう言っている。

「ああ、それとオレからも一つ聞きたい事がある。」

噂に対する真相をオレから聞きたいのかも知れないという事も考えられる。

だが二国間の争いの場をこの施設から逸らし、時間稼ぎが出来た事でオレにも少し余裕が出来てきた。

やっぱり受け手より攻め手の方が、頭が回るなオレ。

「オリガさんは王子のお付きなんだよね？アイシャ姫との手合わせの時も？」

彼女も関係者ではないのか？

ふと、思ったんだ。

「準備のお手伝いはしたわ。」

やっぱり。

「その時、王子に武器を渡したのは君？」

訝しげにオレを見るオリガさん。

大事なんだよ、コレ。

「疑ってるの？」

「事実確認だ。武器を確認してみたかい？」

語調を強め、更に聞く。

「渡したのは私だけれど、確認はしてないわ。」

確認はしていない。

まあ、王子に渡す前に剣を抜いたりしたら、暗殺の問題もあるしな。

「つまりは抜くまであの剣がどんなものかは、わからなかったんだね？」

コクリと頷く仕草がオリエを思い出させて微笑ましい。

無口で鉄面皮だけれど、元来、美人というか可愛らしい人だ、この人は。

「相手の武器は？手合わせなら確認するだろう？」

「それは……。」

ん？

「どした？」

オリガさんの手が震えている。

何か問題あった？

「あなた失礼ね。」

「はい？」

何が？

「侍女の私が、あんなに大きくて重い物持てるわけじゃない！」
あー。

「そんなに怪力女に見えるとでも？！」

……そうですね。

武官でもない彼女。

アイシャ姫の怪力の異常さを見続けてたせいかな、変な方向で慣れが……。

「ふむ。オリガさんは美人で優秀で、お嫁さんにしたいという男性で引く手数多だもんな。」

「なっ?!」

急に赤面する。

オリガさんは自分が赤面しているのがわかっていているせいか、つとめて冷静なフリを装っている。

可愛いなあ。

ようやっと、オリガさんの愛で方がわかってきた気がする。

「と、いう事を言うと、後が怖いから置いてだ。」

とりあえず、オリエとミリィは念の為、一晩兄上の所へ行ってもらう事にしよう。

本気で嫌な予感するしな。

それに武器の事は・・・盲点だった。

もう済んだ事で、そこまで犯人を吊るし上げようと思ってなかった。「さて、何時頃に何処へ行けばいいのかな？」

脳内ではこれからの事への対応を考えているんだが、あの王子にも確認する事が出来たし、あとでアイシャ姫の所にも行かなければならなくなった。

「こちらからお部屋に迎えに行くわ。」

「お、オリガさんが？」

「ええ。・・・不満？」

「ううむ相変わらず刺々しいな。」

「・・・最低、一人武官をつけて来て欲しいんだけど・・・。」

二つ目の噂の事といい、監視されている可能性が捨て切れていない。

そろそろオレもただの一般人だと軽視されない雰囲気、周囲にも出てきてるし。

「あなたがそう言うなら、そうするわ。」

「賢い人だなあ。」

リツヒニドスにもこういう若くて優秀な文官が欲しいなあ。

「はあ・・・。」

「何？」

いや、別にオリガさんとか周りの人間達に文句があるわけじゃな

いんだけどさあ……。

「どうしてオレって、何時もこうなんだろ……たまには好き勝手したい……。」

「私から見れば、充分そう見えるけど？」

最後まで刺々しいまま、オレ達の日中の会話は幕を閉じた。

Tense! 皇子は臨戦態勢に。

いよいよ大詰めというか・・・これでセルブとクロアートに関わるのは、最後になるのかな？

オリエとミリーの二人を兄上に任せ、オレは身支度をして迎えに来た者について行った。

先頭は勿論オリガさんだ。

ひとまず、何事も問題はない・・・現状は。

今、一番問題なのは、寧ろオレの方で。

そのせいで先程から周りの視線が痛い。

『臆病なもので。』

その発言はその発言で、まるでセルブがオレを抹殺するという主張をしているようなもので・・・。

激しく問題発言だった。

今、オレはほぼ完全武装。

その言い訳を不自然にならないようにしようとしたまだったのだが。

両腕・両足にはリツヒニドスで見つけ、拝借した黒の具足と手甲。

その手甲には盾というには小さな円盾、ダークエルフのお婆様に頂いたアレ。

腰には剣が一振り。

これはオリエに選んで貰った銀色のヤツだ。

同じようにオリエに選んでもらった双剣が”あの性能”だった以上、こちらの剣も大いに信頼している。

オリエへの信頼度は抜群だしな、オレ。

いや、メロメロの間違いか？

ちなみに何故双剣じゃないかは、少しは警戒が薄れるかなという狙いだった。

バルドは長剣使いだが、基本双剣至上主義のヴァンハイト人（しか

も生粋軍人、近衛兵所属）のオレが双剣下げるのは、きつと警戒される。もつとも。

オレが”グランツ”姓を名乗っている以上、長剣だろうが双剣だろうが、誰も驚かないと思うけど。

「断られたのに何度も思うかも知れないが。」

「いえ。」

案内された屋敷の中で、王子は待っていた。

アイシャ姫の屋敷もそうだが、この屋敷も無駄に豪華だ。

邸内の華やかさはアイシャ姫の屋敷の方が上だが、それは彩りという意味で、恐らく男女の違いなのだと思う。

当然、オレにはそんなモノの凄さなんて理解しようとも思わないのだがね。

「こちらもおいくつかお話がありましたので。」

選択肢を誤った途端、抹殺・暗殺・即死亡とかだけはなりませんように。

「そうか。では、かけたまえ。食事にしよう。」

気づくと机の上には、湯気が立った料理が並べられてる。

オリガさんとここに案内してくれた人は、既に退出したようではないなかつた。

「では。」

出だしは大人しく食べるかな。

などと思うのは、オレらしくは無いらうが、なんというか、その、貧乏性なもので・・・。

節約・儉約などとは言わないさ。

ああ、オレは貧乏性。

目の前の料理を食べないのは、勿体ない気がするのですよ。

このオレの考えは悪いものでしょうか？
ふう。

「全く、何処が違うんだか・・・。」

目の前にいるのは、今は違うが同じ王子だよな？
育ってきた環境の違いって怖いな。

うん、怖い。

脳内に兄上が浮かんだのは、内緒の方向性で。

「何かな？」

「いえ。どころで王子？王子はその、あの時、アイシャ姫と戦った時、ご自分の武器の確認は？」

オレの一言で、王子は意外そうにオレを見る。

「調べているのか？自分の事でもないのに？ご苦労な事だな。身の周りの世話は大抵オリガに任せている。」

信頼度高えな。

優秀な人材が好きな王子にしてみれば普通か。

いや、何でもかんでも任せるのは良しとしないオレが堅物なのか？
どうも、この王子といると、自分と比較してしまうな。

今まで兄上以外に王子としての比較対象がいなかったもんなあ。

「成る程。彼女はとても優秀ですものね。」

無言で頷く王子に対して、オレは会話と会話の間で食事を進める。
だって、勿体ないもん。

「一つ答えたのだから、私も一つ聞かせてもらおう。例の噂は君が？」

来た。

わかりきったかのような質問。

つか、これは質問じゃないだろう。

どちらかという確認だ。

王子の視線が痛い。

机に両肘をつき、手を組むとオレの答えを待っている。

「だとしたら？」

「この後はどうするつもりだ？」

「質問に質問で返したのは失礼と謝ります。ですが、王子はどうしたいのですか？」

交互に質問という形にされたが、オレもそうそう引けない。

「二つの国を併呑して、大国の王君になるのも悪くはないな。」
不敵に笑うラスロー王子。

はて、彼はそこまで危険人物だったのだろうか？
選民主義的な所はあったけど。

「と、なつたら、動くかな？ヴァンハイトは？」
ふむ。

噂は着実に浸透しているようだな。

王子が気なるくらいには。

「だとしたら大混乱ですね。クロアートは滅びる。まあ、クロアートの盾になつてもらつて、その間にこちらは戦力を整えるというテはありますがね。」

通り一辺倒かも知れない。

凡庸と思われてもいい。

ここは無難な答えだけを並べておくのが堅い。

「・・・ヴァンハイトがやりそうな事だ。」

あれ？

苦々しい表情でオレを見る。

逆の立場だつたら、セルブも同じ事を実行してもおかしくはない、戦時中でありふれた策のはずだが？

滅びると言ったが、クロアートだつてそこまで弱国じゃない。

ヴァンハイトがセルブと手を組まない限りそう簡単には、滅びたりはしないだろう。

寧ろ、その逆。

だって、あの姫より凄い猛者達が守備を固める重装兵がいるからな。王子は開戦派ですか？

そう質問しようとするのをぐつと堪える。

ちよつと直球過ぎる。

「話を戻しますがオリガさんから剣を渡されるまでに誰か触れた人間は？」

「さあ、わからないな。オリガに聞いてくれ。」

わからない？

自分が使う武器だぞ？

視界にくらい入れておくだろう。

オリエに剣を選んでもらったオレが言うわけじゃないが、普通、自分が使う武器に対して関心がないっていうのは……。

「失礼します。食後の一品をお持ち致しました。」

目を伏せたまま、静々とオリガさんが入って来る。

その後には蓋をされた銀盆を持った男が二人。

「……今日は何だ？楽しみだな。」

Tense! 皇子は臨戦態勢に。(後書き)

色々と挫折してきました、足早展開です、ごめんなさい。

次回！単語は【U】で『皇子の』は奇跡を呼ぶ。【前】

果たして、何が奇跡を呼ぶのやら。

Urge! 皇子の 奇跡を呼ぶ。【前】(前書き)

最近、皆さんのリアクションが少なくて、色々と測りづらいです。
・(泣)

Urge! 皇子のは奇跡を呼ぶ。【前】

・・・明らかにおかしい。

同時にオレは今までの自分が、どれだけ鈍っていたのか理解する。今更になって、オレの脳内の警報が微かに聞こえる。

オレとの会話の最中に声をかけたオリガさんにラスロー王子が眉を微かに顰めさせたのが原因だ。

彼は、オレとの会話を邪魔されたと思ってる。

彼の事をよく知っているわけじゃないが、あれだけ全幅の信頼を置いてる。

それこそ、自分の身を守る武器ですら任せっきりにしてしまう彼が、こんなちよつとした事で不機嫌とまではいかないが、そのような反応をするだろうか？

切られた会話は、続行不可になるようなものでもない。

いや、決闘をするくらいだから、意外と短気なのかも知れない。けれども。

彼女。

オリガさんは、そんな初歩的、それこそミリイがブチカマす失敗よりも初歩的な失敗をするような女性だっただろうか？

「今までの料理も美味しかったですから、楽しみですね。」

小さな違和感。

いや、そうとすらも呼べるものじゃないだろう。

こういう事もたまにある。

誰しも完璧じゃないし、失敗はあるものだ。

ただ、少し冷静さを取り戻しているオレの脳ミソはこう言ってるんだ。

” 噛み合わない。”

そうだ。

この二人は、”何かか噛み合っていない”。

いいぞ、段々、オレの脳ミソは起きてきたみたいだ。

「今日はこちらです。」

オレと王子の視線をさして気にした様子もなく、そう述べたオリガさんは盆を持った二人の男を促し、それをオレ達の前に配膳させる。

そして、目配せした男達は、同時に蓋を上げる。

「これは……。」

ぼつりと呟かれた言葉は、どちらが先だったろう。

オレの目の前にぼつんと置かれているのは、一個の”林檎”

勿論、ラスロー王子の目の前にもオレと同じ物がある。

「トウマ様の出身のリツヒニドスは、林檎の名産地とお聞きしました。」

オレ達の疑問に答えが出す為に、男達を下がらせたオリガさんは淡々と説明を始める。

「我がセルブも林檎が収穫される地がございます。今回は味比べも兼ねまして、こういった趣向を用意致しました。」

「それは面白いな。」

王子はどうか知らないが、オレの疑問は”何一つ解消されてはいない。”

解消されない代わりに心臓がバクバクと鳴っている。

ゴクリと唾を飲む音が、大きく聞こえる。

林檎が美味そうだからではない。

目の前の林檎は、取れたてのまま。

そう、”皮も剥かれていない”のだ。

オレは、ゆつくりと呼吸を繰り返す。

「食器の類いが他にないという事は、このまま齧るのかな？」

「その方が素材そのままの味と新鮮さで比較し易いかと。」

チラリとオレを見るオリガさんの視線が痛い。

これはアレか？

一般下士官如きなんぞ、コレで充分じゃあつ！とかいう事か？

・・・そんなワケはない。

確かに、セルブ・ヴァンハイト両国から林檎を取り寄せるといのは、砂漠地帯であるこの地では贅沢な趣向ではある。

だが・・・オレは恐る恐る林檎を手に取る。

ここでも林檎か・・・幸と呼ぶのか、不幸と呼ぶのか・・・だな。

「あ、林檎は下から齧って下さい。」

・・・下から？

思わず、林檎を握る手に力が入る。

この展開。

忘れようつたつて忘れるものか。

「それは・・・そういう作法なのですか？セルブの。」

渴いて張り付いた喉から出せたのはそれだけ。

それだけだ。

だが、それで充分だ。

ラスロー王子は、無言でオリガさんを見ている。

「ええ、作法の一つですよ。」

にっこり微笑むオリガさん。

思えば、オレは彼女の微笑みを見る機会なんてあつただらうか？

睨まれる事はあつたとしても。

彼女の微笑みは常にラスロー王子の為にあつたはずだ。

そんなオリガさんを尻目に林檎を一齧りするラスロー王子。

「いやあ、ラスロー王子でもそんな食べ方するんですねえ。」

オレはつとめて自然に言った。

そのつもりだ。

「ああ。オリガも言ったが、作法だからな。」

噛み合わない二人、オリガさんの微笑み、林檎の食べ方。

もう沢山だ。

お腹いっぱいだ。

「で、オリガさん。その作法の歴史は、どの辺りの発祥で？」

何かに祈って、天啓を待つ気分ってのはこんななのだろうか？
やがて、彼女が口を開く。

「ヴァンハイトのアルム様”です。」

彼女の言葉が最後まで終わるか終わらないかの刹那、身体をラスロー王子とオリガさんの間にすべり込ませる。

彼女を背中に隠したまま、下げた剣を抜き放つ。

ありったけの殺意を籠めて剣先はラスロー王子へ。

「オマエ、誰だ？何時すり代わった？」

Urge! 皇子の 是奇跡を呼ぶ。【前】(後書き)

最初 は林檎だったのですけれど、タイトルネタバレはどうかと
というか、まさかの林檎がここまで引つ張るネタとは、カーライル
も思つめえw

Urge! 皇子のは奇跡を呼ぶ。【後】

「いや、この施設に入ってからか。本物のラスロー王子は何処だ？」
オレの正体を知る事は可能かも知れない。

自分でもそこまで捻った設定を付けたつもりもない。

だが、林檎の件は違う。

その林檎の食べ方は、リツヒニドスのとある一族の食べ方だ。

だが、オリガさんは言った。

”オレの編み出した食べ方”だと。

そんな会話をしたのは、ただ一人。

”シルビア”だけだ。

しかし、オリガさんがそう言う前にラスロー王子は、その作法が当然かのように従った。

きつと”セルブにありもしない作法”に。

「だが・・・林檎一個でな・・・。」

ラスロー王子は・・・いや、偽王子は何一つ焦る事なく溜め息を一つつく。

「オマエは知らないだろうがな、林檎一個で始まる絆だってあるんだぜ？」

何せ幸も不幸も呼ぶ奇跡の果実なんだからな。

睨み合うオレ達。

「・・・時間稼ぎか。シルビアは何処だ？」

少なくともシルビアがオリガさんに接触したのはわかっている。

彼女は、コイツの下にいるとはいえ、傀儡になっている状態じゃないのはオレだって理解しているつもりだ。

「オマエがここを動かずにいるのは、そっちが本命だからだな？」

「やっぱり喰えないヤツだな、君は。」

喰われても困るんだよ。

「本物は生きているんだろうな？ここで殺したら処理に困るもんな。」

人質は通常、さっさと殺してあたかも生きているかのように交渉するのが、常套手段だ。

しかし、ここは広大だが半ば閉鎖空間だから。

もし殺したとして、処分先に困る。

発見されたら、逃げ場もなく追い詰められやすい。

相手が王子なら、尚更だ。

「どうか？」

「いいや、オレがオマエの立場だったらそうする。そして実行部隊は少人数。」

コイツとは絶対に馬が合わないがな。

「そういう事だから……。」

オレはオリガさんの手を握る。

「じゃ、死ぬ。」

オレはオリガさんの手を強く握り締めたまま、ヤツに剣を突き立てる。

「あはは。そんな簡単に死ねないよ。」

「だろうナァ……。」

すぐさま飛び上がってオレから距離を取ったヤツの手の甲が妖しく光る。

マズイ。

デイーンの剣がないんじゃ、術は無効化出来ない。

後にはオリガさん。

「チッ。」

「なーんてねっ。」

次の瞬間、ヤツの姿が、存在が揺らいで薄れていく。

「しまった！」

移動系の術か！

一度シルビアで見た現象と同じだ。

攻撃のフリをしたのは、発動の時間を稼ぐ為か！

「オ리가さん。」

オレはすぐさま頭を切り替える。

「悪いけど、王子の件は後回しだ。」

ヤツの目的。

動いている人間にシルビアもいて、前はディーンの剣、夕食に招待されたのがオレ。

「すまないが、あに・・・じゃなくて、ヴァンハイトのシグルド皇子の所に行つて、クロアートのアイシャ姫の護衛を！ヤツの狙いはわかつてる。」

神器だ。

理由はわからないが。

「大丈夫だね？」

「馬鹿にしないで。」

うん、しっかりとした瞳だ。

強いんだな。

シルビアを失った時のオレとは大違いだ。

「て、コトで悪いが邪魔させてもらう。」

既にほとんど透明になっていたヤツはニヤリと微笑む。

ディーンの剣が手元がないのが悔やまれる。

アレがあれば、多分この術にだって介入出来たはずだ。

「だからか・・・。」

一々癪に障る。

「オ리가さん、頼んだよ？」

「あなたは？」

オレの行き先は決まっている。

今は神器を持つている兄上しかヤツに対応出来ない。

けれど、彼女を取り戻すはオレの役目だ。

それは譲れない。

「神器を持っている人間は、もう一人いる。」

思考がどんどん冴えてくるのがわかる。

でもさ、それってオレは常にそういう状態に居続けろって事なのかも知れない。

「オリガさん。それじゃあ、”さよなら”。」

オレはオリガさんの背中を軽く叩いて、目的地に向かって走り出した。

きつとこれで最後だ。

”トウマ・グランツ”でいるのは、これでお終い。

お人好しで美人に弱い一般下士官のオレはいなくなる。

誰からも期待されていない日陰者の第二皇子、アルム・デイス・ヴァンハイトだ。

走る足に力が籠る。

ぐんつと上がる速度。

目指すは……。

Voice！ 皇子は想いで生かされる。【前】

「リディア先生！」

中に人がいるのも確認せずに扉を強引に開く。

何か壊れる音も聞こえた気がするが、オレの予想が間違いなら間違いで謝ればいいだけだ。

身体ごと体当たりするくらいの勢いで、転がり込んだオレの視界に入る刃の光を見る限りそんな事はなかったが。

「シルビイ！ダメだッ！」

そのままの勢いで刃を掲げた人物に身体をブツける。

よろめいて転倒する人物の結末を確認する間もなく剣を抜き……。

「チイツ！」

響く金属音。

全く気配の無い所からの斬撃。

それでも何故か対応出来ているオレ。

「ヤルね。」

「邪魔させてもらって言っただろっ？」

ラスロー王子の顔をしたヤツの笑み。

再びぶつかり合う刃。

「ボクばかりに気を取られてたら、後ろから刺されるよ？」

真後ろなのにしっかりと気配を感じた。

ムクリと起き上がった人物の。

「オレのシルビイ」はそんな事はしない。」

信じている。

それもある。

だが、彼女から背後に襲われるのと、コイツから注意を逸らすとの危険度の差を考えればな。

打ち合った剣をそのままに利き手ではない方の円盾で、剣の柄部分ごと真上に弾くと、そのまま弧を描いて天井に突き刺さる。

「あ、アアアアアッ！」

背後で上がるシルビアの悲鳴。

オレがリディア先生のように魂を見る力があるのなら、今の彼女の魂がきつと震えているのがわかるだろう。

「シルビィ、頑張れ。あと少して帰れるからな。」

オレは後ろは見ない。

それがオレが彼女に出来るコト。

信頼のカタチだから。

「偽善だね。」

汚物を見るかのようにオレを見下す視線。

「ああ、だなッ！」

両手が空いた相手に、今度はオレから斬りかかる。

不用意な気もするが、致し方あるまい。

もし何もないなら、これが致命傷だ。

「それでも、オレはそうしたいんでなッ！」

甲高い音がして、両手が空いていたはずのヤツがオレの剣を受け止める。

驚きはしない。

その手に握られているのが、”両刃の黒剣”でも。

「ハズレ。」

フツと掻き消える姿。

剣越しの感触も消える。

早い。

移動には時間がかかるんじゃない？！

「クッ。」

頭に閃くものがある。

真っ白な紙に黒い点があるような感覚。

そこに剣を向けると、すぐさま黒い剣閃が走る。

「短距離移動は、時間がかからないみたいだな。」

必要粒子の量とか自重とかが関係しているのだろう。

それよりもこの感覚。

この部屋に入ってから初撃・背後にいたシルビアの動き
元々、気配を読むのは得意で、他より長けている感はあるが……。

瞬間移動まで。

小さくほんの微かだが、消える瞬間と現れる直前の気配がなんとなく把握出来る。

そこまで鋭い感覚なんて、人間が持てるのだろうか？

「剣の力が……。」

斬り合う相手の眩きが聞こえる。

ふと視界の端で剣を見ると、ほんのりと輝いているようにも見える。オリエがオレの為に選んでくれた剣。

これが今のオレの知覚を更に広げてくれている？

新しい出会いが、またオレを生かしてくれる。

「じゃあ、コレは？」

再び掻き消える姿。

瞬間、頭の片隅で鳴る警告音。

「クソッ！」

その警告が与える場所へとオレは身体を向ける。

倒れているリディア先生の真正面！

オレがダメなら狙いは、他へとか舐めるにも程がある！

「届けッ！」

歪な笑いと一緒に突き出される剣先に向かって手を伸ばす。

剣を押し返す皮膚の弾力は一瞬で、それを突き破って最初はプツリ、そんな音。

その後にズブリという音とともにオレの手に吸い込まれていく剣先。止まらない！

ディーンの剣の鋭さは、当然そんなモノ如きでは止まるなんて事はない。

そのままオレの手を貫いて……。

- ガキイイツ! -

部屋中に音が響いて、貫いた剣先が何かにぶつかって止まった。

「エ・・・エメトの盾だどっ?!」

盾?

手の甲から突き出た剣先が右腕部分を覆った円盾で止まっている。

円盾の周囲では、一周ぐるりと円盾に刻み込まれていた古代文字が淡く光っていて・・・。

「こんなモノを何処で・・・。」

今までずっと余裕の笑みを浮かべ続けていたヤツの表情が歪む。

また命が救えた。

出会いの中で手に入れたモノで・・・。

それだけがオレの中に広がっていく。

「アタシの”アルム”から離れるオツ!!」

甲高い声の中で、二人の間を引き裂くように巨大な炎の柱が通過する。

今までに見た事のない火力。

でも、不思議とオレの広がった知覚は、警告音を全く鳴らさなかった。

だから、この声は”敵”ではないのだと。

それをオレはすぐさま理解した。

Voice! 皇子は想いで生かされる。【前】（後書き）

ようやくエメトとマヴェットの盾が起動。

さて、乱入してきたのはどなたでしょうかねえ？

Voice! 皇子は想いで生かされる。【後】

「新手か……。」

チラリと視線を逸らす少年。

「フッ！」

そんな隙を見逃すわけにはいかない。

わざと作られた隙だとしても。

息を吐いて、全力で剣を振り下ろす。

「フンッ！」

力を籠め過ぎたせいか、反動で腕ごと後ろに跳ね返るのを無視して蹴りで相手の足元を薙ぐ。

足先はあっさりと跳躍によってかわされ、ヤツはオレの顔面に手を伸ばしてきた。

妖しく光る右手を。

ヤベえ。

あの手はヤバイ。

剣の力なくても元来ある生存本能が警告を鳴らす。

「ぐっ。」

上体を蹴り出した足の方向に捻りながら、転がるように逸らす。

触れらたらヤバイと感じた手だけに集中し、頭を庇って左手を咄嗟に突き出した。

「ぐああっ。」

悲鳴？

オレに触れようとしたヤツが、自分の手を抑えながらオレから離れる。

「あ……。」

右腕と同じように左腕の円盾の文字も淡く光を放っている。

「マヴェットの盾……？」

アイツが片方をエメトの盾と呼んだのなら、こっちの腕にある盾

の名はそういう事になる。

「・・・潮時か。」

また消えやがって！

「芸がねえんだよッ！」

次に現れる地点なんざ、わかっている。

床に転がった王錫の前！

「オマエにはコイツをくれてやる！」

懐から短剣が投げつけられる。

それがヤツの手から離れるか離れないかの刹那で、それが何処へと向かうのかオレは理解する。

今は叫び声を止め、頭を抱えたままの姿勢で蹲っているシルビアへとだ。

コイツは奇術師かつ。

オレはすぐさま足を止め、右手の剣と円盾で飛来する短剣を弾こうと試みる。

どう見ても、それだけじゃ防ぎ切れない数だな。

本当に何処に隠し持っていたのやら。

オレは諦めて、身体全体を使うしかない。

何本かを身体で受け止めヤツに斬りかかろうと歩を進める。

「目的達成。あばよっ！」

ゆっくり消え始める。

手には王錫。

「逃がすかッ！」

こういう時、知覚が広がるってのは悪い事だと思っ。

もうヤツには攻撃が通らない。

遅かった。

それすらも理解出来てしまうのだから。

「・・・剣に続いて、王錫か。」

兄上は無事だろうか。

・・・殺しても死なないか。

それに引き換え……。

「オレのなんと無様なコト。」

右手の平は剣で貫かれ、左の肩口、右の太腿は短剣が突き刺さっている。

……オレ、本当に弱え。

剣と円盾一对、両方とも付加持ちの一級品でコレ。

この有様。

情けないにも程がある。

流れる血を呆れながら眺めた後、多少フラつきながらもシルビアに歩み寄る。

「アルム様……。」

額に大粒の汗を浮かべながら、何かを言おうと呻くシルビア。

「おかえり……シルビィ。」

ずつと決めていた。

彼女の肩を抱き寄せて、絶対に言っただと……。

「約束通り、捕まえに来たよ。」

言おうとしていた言葉をちゃんと覚えて満足だ。

すぐさま彼女の嗚咽が胸の辺りで聞こえてくる。

「それと……ありがとう……オリィ。」

息を荒げながら立ち尽くす小さな姿。

付加持ちの剣を選べた事、彼女が読んでいた粒子に関する本、一晩で治った傷、オレの本当の名を言えた事。

そして、あの炎の柱。

全ての謎を共通で解けるモノは一つ。

彼女は賢く強大な”術使い”だ。

だから……。

オレの言葉にビクンと肩を震わせている弱々しい存在。

「そんな声してたんだ。」

何一つ持たずに、ぼろぼろになって世界を彷徨っていた姿を思い浮かべる。

オレはその声さえも永遠に失われたモノではない事を、今は喜ぶべきだ。

「オリエは声も可愛いんだね。」

オレは彼女を丸ごと受け入れると、とつくに覚悟を決めている。誰が何というと、彼女はオレの妹兼娘候補なんだからな。

「さ、シルビイもオリエも一緒にリツヒニドスへ帰ろう?」

二人に力一杯微笑む。

「大丈夫。どんな事をして、オレは二人の自由を取り戻すから。」
強大過ぎた力を恐れて自ら声を封じた少女と、魂を拘束された女。その鎖を完全に断ち切る。

「の、前に・・・アイシャ姫の方の確認もしないとな。」

声に出しても力が身体に入らない。

血が足りないかな?

そういえば、三箇所。

特に右手の傷は一向に出血がおさまる気配がない。

短剣には毒を塗っているようには感じられないが、右手の傷は神器につけられた傷だしなあ。

「ヤベ・・・。」

立ち上がるうとして、逆にペタリと尻餅をつく結果になったオレを心配そうに駆け寄ってくるオリエ。

「私が治療しましょう。」

につこりと微笑んで、近づいてきたのはリディア先生だ。

「命の恩人ですもの。」

そう言っただけでオレの身体を調べ始める。

オレはそれを確認すると、その言葉を信じて歯を食いしばりながら、身体に突き刺さった短剣を二本とも一気に引き抜いた。

何度も言うが、オレは決して無痛症とかじゃないからな?

すっごく痛いんだぜ?

それこそ涙が出る程に。

でもさ、流石に自分を心配してくれる女性三人の前で痛みで泣くの

は・・・できないだろうか？

Voice! 皇子は想いで生かされる。【後】(後書き)

乱入者はオリエちゃんでした。

これで、よくやくオリエちゃんが喋らなかつた理由が発覚。

ちよつと展開が駆け足過ぎですが、作者の限界です。

許して下さい。

Worse! 皇子はだから立ち上がる。

「王錫の事、すみません、先生。」

全員の命は無事だった。

怪我したのは、オレだけだったし。

だが、神器の二つ目が奪われた。

傷口の血が止まり、先生の術の力なのだろうか薄皮が形成されていく中で、オレはリディア先生に謝罪した。

「気にしていませんよ。寧ろ、私がお礼を言わないと。」

その言葉が逆に痛い。

そういえば・・・オレは先生と話している間中、ずっと気になっていた既視感を思い出していた。

金の美しい髪と瞳。

何処か寂しげな憂いがあつて、おっとりとした瞳。

「そつか・・・先生、シルビィに似ていたんだ。」

一人納得。

「ええ、遠い親戚みたいなものですから。」

「ええっ?!」

今回、一番驚いた。

そりゃ、こんな美人がわんさかいるような説明が、血だというのなら理解出来なくもない。

「それと奪われた杖は複製品です。」

「うえええっ?!」

一番驚いた事をあつさり更新。

そういえば、一言も先生はアレを神器だとは言っていない。

「何処から整理すれば・・・。」

傷口が塞がっても、流れ出た血は戻らない。

そんな頭で考えろと言われても。

「私が・・・説明を・・・。」

シルイビアが憔悴しきった表情で声を上げる。

「シルビイ、大丈夫か？」

「はい……。」

それよりも、話をする事に力を入れるのが手に取るようにわかるでも……。

「でも、まあ、そんなのどうでもいいや。」

かなり酷い言い草ではある。

が、実に単純だが目的は達した。

あとは誰も他に傷つかなければいい。

出血が止まってなんとか動けそうだし。

「ここにあつた王錫は神器の複製品で、アイツはそれを知っている
かないかわからないが、目的は神器という事。」

要点だけ掴めればいい。

「問題の使い手の為にシルビイを選んだのは、王錫を使えるリディア
先生が遠い親戚みたいなものという魂資質の為。」

神器を、しかも二つも使って何をするかが不明だが。

「先生、本物の王錫は？何処に？」

「法王様がお持ちですよ。」

オレの手当てを終え、一息ついたリディア先生の答え。

「つまり、ヤツの目的としては複製品でも構わなかったというコト
か……。」

法王とやらが本物を持っているのならば、嚴重過ぎる程に守られて
いるだろう。

対して、こちらは警備なんて無いに等しい。

この二択で後者を選ぶのだから、複製品でコトが足りるという事な
のだろう。

案外、使い手がいなくてもいいような別の使い方をするのかも知れ
ない。

「とりあえず、多少の整理が出来たから、事態の收拾をしますかね。」

「

装備の状態を確認して、緩んでいた防具をつけ直す。

次はアイシャ姫の所か。

行くまでに終わっていると楽でいいな。

兄上がちゃんと向かってくれてくれるなら、大丈夫だろうし、終わっているというある意味で楽観的な考えもしたくもなる。

ヤツが兄上を襲う可能性もあるが、オレの時や今回の時とはわけが違う。

兄上は、真正正銘の正当な神器の使い手なんだ。

まあ、シルビアがオレについてリツヒニドスに来たところを考えると、最初から双剣は対象外なのかも知れない。

「あ、アルム様……。」

黙りこむオレにシルビアが不安げな顔で覗き込む。

「大丈夫だよ、シルビィ。先生、オリエ、シルビィを頼みます。」

多分、もうヤツは来ないとは思うが、シルビアを取り返しに来る事も考えられる。

「先生、セルブのオリガさんは味方です。逆にそれ以外は信用しないで下さい。」

ああ、シルビアがアルムと呼んだから、もう意味がないんだっとな。

「……兄上が来たら、セルブのラスロー王子を探して下さい。何処かに本物が囚われているはずですよ。」

やっぱり血が足りない。

少しふらつく。

頷く先生を見ながら、自分の体調も再確認。

斬撃の重さもあるが、三、四回も打ち合ったら限界かな。

「あ、先生。”エメト”と”マヴェット”って古代語知ってます？」

ヤツは知っていた。

オレの両腕にある円盾。

両刃の状態ではあるが、ディーンの剣を止めた盾。

「言語の意味ですか？」

そう聞き返す彼女にオレは頷く。

「生」と「死」という意味です。」

エメトが前者、マヴェットが後者。

魂と生命に関する言葉が込められた盾か……。

ヤツの手を止められた理由もそういう事なのか？

「んじゃ、ちよつと行ってきます。」

オレは多少フラついた足取りで、アイシャ姫の住む屋敷へと向かった。

Xeno! 皇子のたからもの。(シルビア視点) (前書き)

さて、とうとうアルファベットタイトル【X】です。

残すは数話ですね。

皆さんのお陰です。

Xeno! 皇子のたからもの。(シルビア視点)

朦朧とした意識の中で、私に命令する言葉以外にはっきりと聞こえてくる声。

”運命の神器の皇子”

操られている私を信じ、約束を果たしに……。

『でも、まあ、そんなのどうでもいいか。』

何も聞かず、こんな私をもう一度受け入れてくれた。

「これ……。」

彼が部屋から去った後、ふと私の横にいた少女が”それ”を差し出す。

銀製の指輪。

「アナタの……でしょ？」

私の、私だけのモノ。

少女はオリエと呼ばれていたかしら。

「ありがとう……。」

震える手で指輪を取ると涙が溢れてくる。

「大丈夫。アルム、許してくれる。」

私の手を握る少女、オリエ。

「アルム、アタシに何も聞かない。娘か妹にしてくれる言った。」

左腕に嵌められた銀の腕輪を私に見せつける。

「アナタとお揃い。」

私に再び身につける資格があるのだろうか？

こんな私に……。

「何も聞かないのなら、そういう事なのよ、貴女も。」

私を遠い親戚のようなものと言った彼女。

「言わなくても、彼はわかっている。そういう人なのでしょう？」

手にある指輪をゆっくりと左手の薬指に……。

以前、アルム様がそうしてくれたように。

「アルムの心。ずっとごめんなさい言ってる。でも、ずっと大好き
言ってくれてる。」

私の未だ震える手を握るオリエという少女。
彼女”も”術使い。

「・・・わかつてる・・・わかつているの。」

私が出会った時もそうだった。

生きている事への辛さ、罪悪感。

それに負けない前向きさと愛情。

太陽と月が同居したような精神性。

だから、あの剣は彼を選んだ。

「でも・・・私・・・。」

それを、深い親愛を私は裏切った。

「ダメ。誰がいなくなっても、アルム悲しむ。」

握る手に力が籠もる。

真っ直ぐに私を見る瞳。

「貴女に進む力をアルム様はくれたのね？」

私がいた頃には彼女はいなかったから、きっと私と入れ違いに出

会ったのだろう。

彼女もきつと彼に照らされた人間の一人。

「アルム、アタシを大事にしてくれる。アタシも、アルム大事。」

「そうね。」

言われなくても私には。

”私達”にはそれがわかる。

そういう存在に生まれついてしまった私達なら。

「なら、笑顔で二人共、戻りましょうね。貴女にかけられた術は、

私達で処理しないと。」

にっこりと私達の様子を見て笑う女性。

「それにしても。つくづく”私達”は彼に魅かれてしまうのね。」

リディアと呼ばれた女性は私とオリエ、二人の肩に手を置く。

「それも、これも、魂と血のなせる業かしらね？」

「違う。力無くてもアルムは見つけてくれた。」
「そうね。」

全く違う生まれと立場にいても、同じ力を持ってしまった三人。本人達だけが、そうだと感じる事が出来る。

そして、出会ってしまったのだ”私達だけの皇子”に。

Xeno! 皇子のたからもの。(シルビア視点) (後書き)

ようやく、シルビア視点が書けました。

ずっと謎持ちキャラだったので、なかなか出せなかったので、ちょっとぴり嬉しいです。

あはは。

Y o u r s e l f ! 皇子が皇子である為に。【前】

「少し・・・いや、かなり認識が甘かったな。」

余りにも平和で楽しくて、腑抜けてしまっていた。

オレにそんな余裕や幸せばかりが持てるはずもないのに。

もうすぐ、アイシャ姫の屋敷の門をくぐる。

「もっと強く、もっと考えないと。」

そうでなければ、オレという存在は全てを失ってしまう。

もっとしつかり最初の事件について調べていたら。

もったときちんと二国間の問題に注目していれば。

その前の街での決闘だってそうだ。

・・・違うな。

もっと一番最初からだ。

神器が持てる事、神器とはそもそも何故存在し続けているのか。

シルビアの時折見せていた言動。

「少しどころじゃないじゃないか。」

悔しい。

今更になって、物凄く悔しい。

「アイシャ姫！」

屋敷に入り、人の気配の少なさに焦りながら、出来る限り走る。

「兄上！」

オレの声に反応して気配が動いているのがわかる。

逆に言えば、オレを認識した相手。

敵なのだろうか？

「ここだ、アル！」

兄上の声が奥から聞こえる。

人質にされるような失敗をする人じゃないとは思って、一応腰に下げた剣を抜く。

剣がさつきより重く感じるの、身体が疲弊してきているという事

に他ならない。

自業自得だけだな。

「兄上！アイシャ姫！」

視界に入る二人の無事を確認すると、少し安心した。

兄上は神器ではない方の剣だけを抜いて、アイシャ姫の横に立っている。

アイシャ姫は何時もの真紅の服を身にまとっていた。

「流石。」

「アルの頼みと聞いて、いささか張り切ってしまったよ。」

涼しげな笑みをたたえている我が兄は、何故だかこの現状と比べ場違いに感じる。

「アルの部下とラスロー王子の部下は、私の護衛に任せてある。」

弟の褒め言葉に上機嫌になっているところ悪いのだが、そんなに浮かれているのか、次期国皇。

「アイシャ姫の方は？」

「他の人間は奥にいます。戦闘が出来る者は大叔父様の方へ。」

大叔父様というのは、きつと一緒に夕飯を食べた人物だろう。

「姫様の従者は？」

本来彼女を守るべき人間の姿が見えない。

まさか……。

「彼女等も大叔父様の所へ。私と違って、大叔父様は中央の要人です。」

いくらなんでもそれは……。

確かに彼女は、自国の貴族では傍流だと言ってはいたが。

「姫様。」

と、緊張をブチ壊す間の抜けた声。

この声はオレも聞き覚えがある。

「マール、ここよ！」

そういえば、最近、彼を見かける事は少なかったよな。

見えない所での仕事か……。

オレは兄上に目配せをして、アイシャ姫の斜め前に立つ。

「ご無事でしたか。」

とてとてと歩いて来る亜人の少年。

これなら、そう思うよな。

「やあ、マール君。君も無事だった？」

「あ・・・トウマさん、お陰様で。」

互いにつこりと微笑む。

「で、マール君？誰を殺したんだい？」

「はい？」

ラスロー王子は、別の誰かとすり代わっていた。

オリガさんも武器の確認はしなかった。

ではマール君は？

あの決闘の時、武器を確認出来た人間は、何もセルブ側だけじゃない。

つまりはそういう事だ。

残るは彼だ。

彼とラスロー王子が共謀していれば、双方とも気づかなかったという構図には出来る。

「可哀想にマール君。偽王子は目的を達成して、さっさと退散したよ？知らなかったかな？」

剣の切っ先をマール君に向ける。

「君は見事に一人取り残されたワケだ。」

息を呑む音とマールと微妙に呻く声が後ろで聞こえる。

ごめんな、アイシャ姫。

本当は君にこんなのを見せたくなかったよ。

「これって、アレかな？」捨て駒”って言うんだっけ？」

ここまで揺さぶれば、本当に彼が共犯者かどうか分かるはずだ。

・・・オレの中では、彼の自白がなくても、関係ない話なんだが。

何故なら、剣が・・・オレの剣が微かな殺気に反応している。

そして、彼からは微かだが、本当に血の匂いがしていた・・・。

Y o u r s e l f ! 皇子が皇子である為に。【前】(後書き)

正直、兄上、万能過ぎじゃね？

Y o u r s e l f ! 皇子が皇子である為に。【後】

沈黙が場を支配している。

誰も動く気配はない。

それが余計に酷く滑稽さを感じさせる。

どんな目的があるかは知らないが、世界から見れば彼もオレも存在としては甚だ滑稽だ。

「何時も中途半端だった。」

ぼつりと呟くマール君。

「誰かに媚へつらつて。欲しい物も自由に手に入らない！」

キツとオレを睨む小さな少年。

「何をするにも、どちらかの国に属するしか選択肢がなくて！」

ああ、そうだな。

オレにも選択肢なんて用意はさしていなかったよ。

寧ろ、選ぼうと行動する事、それ自体が許されなかった。

でもさ、それは程度の差はあれ、皆、ある意味でそうなんじゃないか？

オリエだつてそうだった。

「都合よく使われて。だから、だから国が欲しかった！」

「一応、自治領だろ？」「違う！」

遮る声には悲痛さえ感じられる。

「あんな、誰かの容認の下にある国なんかじゃない！自分だけの国だ！」

可哀想に……。

彼は国というものを何か勘違いしている。

今の国は、決して自由という言葉と等しいわけじゃない。

そこには結局、支配する側と支配される側が存在していて。

「だから！」「だから殺しをするのか？力で排斥するなんて、大国のやり方と変わらない。」

今度はオレが彼の言葉を遮る。

国と民の意識を変えたい。

その想いはオレも同じだ。

今の国なんて滅んでしまえと思ってしまふのも。

「それで変革をして、目的を達して何になる？」

結果が良ければ、手段はどうあれ。

オレもそう思っている。

そう行動する時だっであつたし、それによって自身が死ぬ事になるかも知れないと覚悟もしている。

動機がどうあれ、正しいならば同様の志を持つ者が続くだろう。

けれど、彼は少し短絡過ぎた。

オレ以上に。

「全ての獣人・亜人はそれを望んでいるのか？例え、自らの手で血に塗れ、他者からどんな目で見られようとも。正しいと胸を張って生きていけるか？」

オレの存在はもう正しいとはいえない。

ある意味で今の生は、夢・幻のようなものだ。

かといって死を選ぶわけにもいかないし、今を生きているのは間違いない無く現実だ。

「それじゃあ、何も変わらないよ……。」

オレはゆっくりと剣を構える。

打ち合える回数も体力もほとんど残っていない。

でも、これはオレの責任でもある。

オレがもっと早く対応出来ていれば。

彼を説得する機会を見つけれられていれば……だから、オレがやる。

「今なら何とか治められる。」

横にいる兄上が頷いている気がした。

もう剣を納めているのも。

「他の獣人や亜人が移り住みたいと望むなら、ヴァンハイト皇国、リツヒニドス領にて引き受けよう。」

これならば、二国間の戦火にも巻き込まれないし、選択肢も増えるだろう。

兄上もアイシャ姫も、ここにいる誰もが国というものに縛られている。

他の対外的な事ならば、兄上達がどうにかするだろう。いや、してもらおう。

「今回の件は、君だけで考えて実行に移した単独犯行。そうだね？」
彼以外の獣人・亜人は一切関係ない。

それで戦争が起きる可能性は減る。

たとえ迫害が起きたとしても、リツヒニドスで引き取る。マール君にしてやれるのは、今のオレではこれが限界だ。

「・・・はい。」

「わかった。ヴァンハイト帝国第二皇子、アルム・デイス・ヴァンハイトの名において約束しよう。」

そしてオレ達は無言のまま、互いに一度だけその身を交錯させた。「アイシャ姫。残念ながら大叔父様は亡くなれています。」

彼女に背を向けたままで、オレは言葉を続ける。

もうオレは、アルムだ。

そして人殺しだ。

彼女の顔を見る事なんて出来ない。

「事件はマール君の単独犯行。彼の言葉を聞きましたね？」

「私は・・・。」「うるさい。黙っている。」

それ以上は言うな。

お願いだから・・・。

「彼はただ。自分と同族に光を・・・自由を与えたかっただけなんだ。」

「そうだ。」

何度も言う。

思う事は悪くない。

思想くらいは自由だっていいだろう。

「彼は単独で犯行に及び、駆けつけた人間に切り捨てられた。それ以外は不明。いいですね？」

吐き気がする。

こうでもしないと・・・。

”誰かを犯人にして”全ての責任をなすりつけて終わりにしないと
いけない。

そういう事態の收拾の仕方しか出来ない国という存在が。

「これで治めて下さい。」

オレはゆっくりと倒れたマール君の身体を抱き上げる。

それでも、アイシヤ姫がそれをするよりは、断然マシで・・・オレ
で良かったと思っっている。

穢れるのはオレだけでいい。

「彼はオレが連れて行きます。」

悪いな、マール君。

送るのがオレで。

でもさ、これ以上、君の嫌いな国のヤツ等に触れられたくないだろ
う？

Y o u r s e l f ! 皇子が皇子である為に。【後】(後書き)

とうとう、【Y】まで到達しましたね。

次回、アルファベットタイトルの最後【Z】です。

果たして、皇子はこれからどうするのか？

Z e a I ! 皇子は諦めの物語を紡がない。(前書き)

はい、ラストの【Z】をどっぴぞ。

Z e a l ! 皇子は諦めの物語を紡がない。

「釈然としないのは、しようがないよな。」

腑抜けながら、立ち昇る煙を眺める。

あの後、マール君を抱えたオレは塞がった傷口が少し開いてしまった。

それでもマール君を落とす事は出来ないので堪えたが。

「ここも何度も世話になったね。」

何時もの中庭で、マール君を送っている。

誰にも会おう気力が起きなくて、誰かに許可をもらったわけじゃないが、今、オレの邪魔をする奴は覚悟して欲しい。

もつとも、もう力が入らなくて座り込んだ状態なんだけれども。

煙を眺めながら、思う。

マール君を逃がす事は出来たのだろうかと言われたら、答えは否だ。この場から逃げるのは、難しい。

よしんば、逃げられたとしても犯人が逃亡したとあつては、彼の同族は滅ぼされてしまう。

犯人を不明としたとしても、不信感と疑心暗鬼を呼ぶ。

下手をしたら、オレが回避しようとしていた二国間の戦争にだってなりかねない。

逃亡したとして、彼が諦めてるとも思えないし。

かといって、これが正しいとも思えないし、思いたくない。

でも、涙が出てこないのは、オレが薄情だからだろうか？

それとも、心の何処かで諦めているからだろうか？

怒りとも言い切れない何か、胸の中にしこりのように残る。

「本物のラスロー王子が見つかった。ちゃんと生きてる。」

座っているオレの横に立つ人影。

声を聞いただけで誰だか理解したオレは目を向ける事さえしなかった。

そんな気力も無いと言ってもいい。

「アイシヤ姫の部下もほぼ無事だ。」

何の許可も無く、人影はオレの横に腰を下ろす。

「今回の事は、ある一人の亜人の起こした暗殺事件として処理される。」

クロアートの国とも、セルブの国とも関係ない事件。

ましてや複製神器の盗難やヤツの存在も関係ない。

「ラスロー王子にも約束してもらった。元々、国の面子に関わるしな。」

王子が拘束・監禁されて、その間、皆が偽王子の言う事を聞いていたとあつては、そりゃあ立つ瀬も無いだろう。

「それじゃあ・・・帰りますか・・・彼も連れて。」

あと数時間もすれば、彼も移動出来るだろう。

「そうだな。」

「こういう時、”兄弟”って凄いと思う。」

兄弟という存在を確かに感じられる。

でも、オレもそんなモノに甘えているばかりではいけない。

「兄上。」

「ん？」

兄上の表情は、わからない。

でも、きつと真剣にオレの言う事を聞こうとしてくれていただろう。

「オレ、騎士団を作ろうと思います。」

一人の人間の限界。

神器も無い、ダメ皇子一人。

それじゃあ、リツヒニドスに来るダークエルフも獣人も亜人も守れはしない。

「オレだけの騎士団。民の為に動く騎士団。」

皇族に忠誠なんて尽くさなくていい。

オレと一緒にの立ち位置で、オレと共に民の為に心を砕いてくれる者。

「人種も扱う武器も問わない。」

オレはリッヒニドスを起点に始める。

マル君とは違うやり方でそこに辿り着けるように。

「初めてだ。」

兄上が苦笑しながら答える。

「そりゃあそうでしょう。今、決心がついて初めて言ったんだから。」

「

「そうじゃない。」

声が心なしか嬉しそうに聞こえる。

「初めてやりたい事を言ってくれたな。兄の自分に。」

その言葉に思わず兄上を見る。

兄上の視線は、立ち昇る煙を眺めたままだ。

「昔から、兄という存在に遠慮してばかりだったなアルは。」

「兄上……。」

そういえば、昔はこんな風に二人つきりでいる事も、もっと多かった気がする。

オレが病にかかるまでだけれど。

「アル。親は先に逝くものだが、兄弟はそれより長く一緒にいられるんだぞ?」

それは……大抵はそうだろうけれど……。

兄上の優しさは嬉しい。

でも、オレがやる事は兄上が継ぐべき国を壊すかも知れない。

民がそれを求めるならば、オレはそれを実行するだろう。

大体において、オレには自国に対する愛国心なんて持ってはいない。きつともう持つ事は出来ないだろう。

「オレは……兄上の邪魔ばかりするかも知れないですよ?」

「アルのやる事が正しいと感じたら、参考にさせてもらおうさ。だから、アルの好きにすればいい。」

くそう、兄なのは伊達じゃないな。

流石、完璧超人。

兄としても完璧だ。

「じゃあ、オレはリツヒニドスで好き放題やらせてもらう事にしようかな。とつと帰る事にしますよ。」

アイシャ姫の前で、本当の名を名乗ってしまった以上、彼女には合わせる顔がない。

オリガさんだつて、オレの正体はわかっているはずだ。

二人を騙していた事には違いもないもんな。

元々、こうなる事がわかっていて偽名を使ったんだ。

「・・・でも、”トウマ”って名前も悪くはなかったな。」

「ん？」

これで庶民ごつこともおさらばつてコトか。

ま、リツヒニドスへの土産も用意出来たし。官吏にしたら、また皇子が変なモノを持ち込んだと頭をか抱えるだろう。

ふへへ・・・なんだ、意外と楽しみじゃないか、帰るのが。

うん、気持ちを切り替えるなら早い方がいい。

Z e a l ! 皇子は諦めの物語を紡がない。(後書き)

皇子として、何が出来るかを見つめ直したアルム。

さて、彼はこれから国に帰ってどうするのか？

奪われたままの神器、神器を集めている偽ラスロー王子(仮)との
因縁は？

次回！エピローグに突入です。

今回はエピローグ編が2話です。

勿論、リッヒニドス残留組も登場します。

お楽しみに。

A t o Z！ ～エピソード～【皇子の帰城】（前書き）

それではオマケ話的、エピソードです。
どうぞ、お楽しみ下さい。

A t o Z！ ～エピソード～【皇子の帰城。】

そんなに長く暮らしてなかったのに、いざその景色が見えてくると感慨深いのは何故なんだろうな。

「オリエ。これが今日から一緒に暮らす城だよ。そして、シルビイ、おかえり。」

オレに抱きかかえられて、目を見開くオリエに瞳をうるませるシルビイ。

悪くない。

オレは腰に下げられた小さな壺を撫でる。

「アルム様！どうして私を連れて行ってくれなかったのですか！」
城に帰還したオレは、予想通りレイアに怒鳴られ、吐く寸前までがしがしと揺らされた。

言えない。

年齢的に厳しかったなんて、死んでも言えない。

そして。

「アル……。」

半泣き……いや、ミランダにめそめそ泣かれるハメになったり。

「アルム様、お土産は？」

ホリンは……意外とあっさりだったな。

人間社会に自分が出る事の影響を嫌という程、自覚しているという事か。

ともかく、お土産用意しておいて良かった。

それだけは言える。

「お帰りなさいませ、アルム様。」

冷静にオレを出迎えたはずのカーライルが、一番普通のはずなの

に浮いている気がするのは何故だろう？

「カーライル、土産だ。特別製だぞ。」

そう言っつて、書類の束を投げてやると、すぐさまそれを掴み一瞥する。

「官吏を招集致しますので、私はこれで。」

不敵な笑みを残して、すぐ様帰って行った。

なんというか、無駄に仕事熱心というか・・・無駄は、失礼か。ま、喜んでもらえて何よりだ。

色んな意味で。

あれから公共事業案として、まとめ直した資料だ。

オレも寝不足だが、官吏もこれから当分寝不足になる事、請け合いだな。

「アルムお兄様ッ！」

メイド達の中で更に極端だったのはサアラ姫だった。

半狂乱と言えはいいのか・・・。

なんというか、本当にそういう種族的傾向なんじゃないかと思ってしまう程に。

「私、心配で心配で・・・。」

相変わらず小さいな・・・サアラ姫。

外見はオリエとそう変わらん。

流石にサアラ姫の方が、発育不全気味のオリエより大きいが。

「だ、大丈夫だから。ら、ラミア、姉として妹を・・・。」

皆の輪から少し外れた所で、様子を見続けていたラミアに助けを求めたのがトドメだった。

「フンツ、自業自得だ。私はそれより、さっきからオマエが抱いている女の方が気になる。」

ピタリと止まる女性陣。

皆、気になつても説明があるまで聞かないようにしていたのが、丸解りだ。

「あー。」

見詰め合うオレとオリエ。

「そういえば決めてなかったな。オリエ、妹と娘、どっちがいい？」
この一言が迂闊だった。

ああ、城に帰って来られて気が抜けてたさ！

「なっ?!」「妹?!」「娘エツ!」「ああ、私のアルが……」
順番に行こうか。

ラミア サアラ姫 レイア ミランダ
この順な。

ちなみにホリンはケラケラと笑いながら、事の成り行きを見ている。
実に楽しそうだ。

正直、ホリンが一番順応性があるよな。

後で殴っておくでしょう。

「いいえ、きつと変な女に騙されたに違いないわっ!」

あ、ミランダが壊れた。

久し振りだな、この展開。

妙に懐かしい。

「アタシ、どっちでもいいと言った。アルムと一緒になら。」

このオリエの答えに更なる嵐が吹き荒れる事になったのだった。

「皇子！これでは予算が!」

「予算だあ？そんな問題は解決しているだろ!」

翌日からは違う意味で嵐だった。

「シグルド皇太子から、一つの治水灌漑工事の試案として補助金の
言質は頂いている。それは資料にも記載してあるろう!」

例の水車を使った大規模な治水工事の話だ。

「しかし、それでも。」

「不足分は、州の名義で債券発行する。成功したら、何割か乗せて
買い取る方向で商人にでも買い取らせる。」

資金などというのっけから躓くような所に引つかかるオレではないのだ。

でなければ、カーライルもこんな会議を開いたりしない。

これは単なる形式的なものだとカーライル自身は認識しているのだらう。

だからと言って、論議をしないワケではないのだが。

「人手不足に関しては、ダークエルフだろうが獣人だろうが受け付ける。入植希望者もいる事だしな。」

オレはどんどんとまくし立てる。

しかも机をばんばんと叩いて。

「材木の大半は、ダークエルフかの森から分けてもらえるように手配は済ませてある。設計図もある。さあ、可能かどうかだけを言え！」

「か・・・可能です。」

「よし。次、官吏登用の件はどうなった？」

本音としては、内政など参加したくなかった。

いや、外交とかも参加したくないけど。

だから帰城した時も、資料をカーライルに丸投げしたのだが・・・。オレのいない間に官吏登用の件も含めて、オレの参画が決まっていた。

ここにいる人間達は、あの事件でのオレを見ている。

そのせいか、少しずつ待望論が増していったらしい。

・・・というのが、カーライルの談だが、絶対に嘘だ。

いや、全部が全部嘘だとは流石に思わないが、カーライルの推しがあつたのは確実だ。

「その案につきましては、資料をまとめておきました。」

「そうか。では、今夜にでも確認する。それと、この州府において騎士団を結成し、駐在させる事にした。」

最後のオレの発言にその場にいた全ての官吏に驚きが広がった。

A t o z！ ～エピソード～ 【皇子の時間】

結局、オレの案はいくつかの条件のもとで可決された。

可決というのは、オレの強い要望だ。

皇政の国だとはいえ、オレは多数決等の合意を基本的に求める事にした。

そりゃあ、無駄に時間がかかって迅速さが減るだろうが、独断専横なんてもはや古い。

それにオレの理想に合わない。

「これでいいんだろ？」

オレは腰から下げたそれを撫でる。

ちなみに幾つかの条件とは、武官はある程度の知識を問う試験を通過する事。

ダークエルフは、ラミア・サアラ両姫の面接試験を受ける事。

これは彼女達が、何故か未だに城に居続けている現状を最大限に活用させていただく事にした。

不穏分子が紛れ込んで困るしな。

獣人・亜人に関しては、同じく同族の巨大熊・・・じゃなかった、

バルドの試技試験を受ける事になる。

相手が出る人間自体が少ないしな。

他は、カーライル同席のもと、オレの面接を全員受ける。

基本的にはリツヒニドスの武官扱いとし、オレの非常召集のみ騎士団扱いとなる。

団長には当然、レイアを選任。

オレの”筆頭騎士殿”だからね。

バルドは顧問辺りにしておいた。

ややこしい事にもなるだろうし、何より世間体が悪過ぎる。

バルド・グランツの名は国内外に対して、影響が大き過ぎるというのは体験者だからな、オレ。

「さて、これで君とも本当にお別れだ……。」

今、オレは一人でダークエルフの森の近くの湖に来ていた。

「君の故郷の森でなくてすまないけれど、ここの森も悪くないだろ？」

まあ、ここでオレの無様さを見てもらおう事にしよう。

「じゃ、おやすみ。」

腰に下げている壺から、白い粉がゆっくりと舞って湖に消えてゆく……。

それを見届けながら、オレはようやく涙が流せた。

帰城してまた会議に出て議論して、解放されたらオリエと談笑し、そうしたらサアラ姫が現れて何か話しかかしくなってる。

困って姉のラミアに救いを求めたら怒鳴られて、その様子をホリンに見られて笑われて……。

何時もの生活？

オレの生活ってこんなだったっけ？

何時からだ？

夕暮れにレイアと稽古で手合わせして、散々動いて夕食を食べる。

昨夜と同じように誰か背中を流すかでモメているうちに、さっさと

一人で入浴を済ませ寝室に入る。

「困ったもんだ。」

賑やかさに一人苦笑する。

少し余計に疲れるが、悪くない。

一つ問題を挙げれば、昨夜は寝ていない。

理由は明白で、簡単だった。

”副作用”だ。

手に入れた銀の剣。

コイツはオレの知覚を広げ、常に気配の感知を可能にする。

ちょっとした全能感を味わえるわけだが、その力が強過ぎたらしい。

多分、もともとオレの気配を察知する能力は、バルドに嫌という程鍛えられたからというのもあると思う。

剣を納めて数日経った今でも、時間帯によってだが知覚が突然広がっているような錯覚がする。

一日中そうなるならまだしも、突然にそうなるから余計に不快になる。

「ま、仕方ないか。」

そのお陰で、今回を乗り切れたんだしな。

眠れないのなら、仕事でもするしかない。

会議で貰った資料と報告書を読みふける。

「アルム様、よろしいですか？」

「ああ、ミラなんだい？」

「お茶を持ちました。」

流石はミラ、気が利く。

この辺りは他のメイドも見習って欲しい。

「入って。」

扉を開け、ミラが盆を片手に器用に茶を注ぐ。

「昨夜もお眠りになられていないようですので、特別にご用意致しました。」

どの点で、ソレがわかるんだろう？

アレか？姉としての勘か？

施設でも散々、女の勘というものを思い知らされたからな。

既に体験学習済みだ。

「ねえ、ミラ？」

「何でしょう？」

オレは資料を机に置く。

ミランダも持っていた盆を机に置き、オレに向き直る。

「オレは今回、行って良かったと思った。」

見た事、聞いた事、得られた事、その全てが貴重でオレだけのものだ。

その悔しさや無力ささえも。

「それはとても良かったですね。」

にっこりと微笑むミランダ。

あれだけ黙って出た事で心配をかけたというのに……全く、この姉は。

「うん。だから、ありがとう。」「?」「?」

ミランダは理由をすぐに問う事はせず、オレを見つめ次の言葉を待つ。

この辺の呼吸というのも、姉として一緒にすごした事のあるミランダならではだ。

「ここに来て、ダークエルフとの出会いがあったから助けられた。」

たった一对の円盾のお陰。

「オリエに出会った時は苦しかったけれど、同じ様に助けられた。」

どうしようもない現実がそこにはあったけれど。

剣を選んでくれて、声まで封印して拒絶していた力まで使って助けくれた。

「アイシャ姫やオリガさん……。」

戦い方や人の上に立つ人間の在り方、心構え。

部下としての想いや様々な知識。

「先生の時も悔しかったけどね。」

必要な知識、特に魂と術に関する……。

「それと……それと……マール君。」

本当に色々な事があった。

「出会いがあつて、オレは今を生きている。生かされた。」

そこにはトウマの魂があったから。

「でも、その原点はミラ、君が居てくれたからだと思う。」

オレがマール君のようにならなかつた、決定的な境界線のように思えて……。

亡くなつたアイシャ姫の大叔父様のようにならなかつたのも。

「だから、オレ……。」

「アル、泣いてもいいのよ？ 私達の前では”痛い”って言っていないの。」

ああ・・・だからオレは生きられるんだよな。

「ありがとう、ミラ。」

「どういたしまして。」

「それじゃあ、今日はさつさと”ベッド”に入って休むとするよ。」

そうじゃないとメイド達にも心配かけるしな・・・ん？

「ベッド？」

ミランダがオレと同じ様に怪訝な表情をする。

・・・ベッド？

そういえば、オレ、帰ってからずっとメイドって・・・。

「それって・・・何だ？」

思わず、その意味のわからない言葉が出た口を押さえる。

「・・・まさか。」

魂の融合が乱れてい・・・る？

これは・・・トウマの記憶なのか・・・？

だとしたら・・・オレの・・・オレの魂は・・・。

”残された時間”

そんな言葉がオレの脳裏を過っていた。

A t o Z！ ～エピソード～【皇子の時間。】（後書き）

これが、この作品で英単語等が使われなかった本当の理由です。

自分の在り方。

それを手探りで考える皇子の脳裏に表れた知らない言葉。

これは、本当にトウマの記憶なのか？

残された時間。

絶望的な言葉がチラつく中。

皇子の取る行動とは？！

以上、？章でした。

前章と同じく、これからどうするかは皆様の反応次第にさせて頂き
ます。

と、いう事で全56話

ご愛読ありがとうございました。

？章のチラシ裏。(前書き)

再びのお茶濁しです。

一応、？・？章でもやったので、お約束というところまで。

続編は・・・書くかどうかまだ悩んでいます。

？章のチラシ裏。

（？章の主要な登場人物）

・オリエ

約10歳前後で、限りなく銀シルバーに近い灰色アッシュの髪と瞳。

本編？章のヒロイン。

ちなみに身長は本編で一番小さい。

奴隷制度が姿形を変えて行われてきた”役売り”の犠牲者。

その為、同年代と比べても一回り小さい体で、発育不全気味。

奴隷制度を厳罰化せず、野放しにしていた責任の一端は自分達王侯貴族にあると考えたアルム。

罪悪感からか偽善と理解しつつも、彼女を正規の手続きで身請けし傍に置く事に。

喋る事が出来ないという障害を持っていた。

アルムは彼女がロクな食事を与えられなく発育不全の原因はそこにあると考えていたが、実際はそうではなかった。

強力な術使いである彼女は、言葉を喋る事を封じる事で自分の能力を制限・封印していたのだ。

強い術使いであるところの、相手の思考能力を看破する力を持ちアルムが他の人間達とは違うと感じた彼女は、アルムに次第に心を開く。

本編終盤では、アルムを助ける為に忌み嫌っていた力を解放する。

アルムの妹になるか娘になるかの選択を与えられていたが、さて果たして彼女はどちらを取るのだろうか。

名前の由来は、某精霊・某水晶の姫から。

・アイシャ姫

約20〜22歳前後。 金髪・金眼。

アルムより年上の設定で、身長も彼女の方が高い。

ヴァンハイト皇国の北西に位置するクロアート帝国の姫様。

姫といっても、下級貴族・傍流と本人は言っている。

常に国色である真紅の服をその身にまとい、喋り方はお嬢様そのもので物腰丁寧。

当然、お嬢様のご多分に漏れず(?)世間知らずなせいか、時折ズレた発想や物事を理解をしている事がある。

本編では、武道の嗜みもあるようで、真紅の鎧と長大な斧槍を振るっていた。

武器を手にすると、それまでの丁寧語から大会系の如き尊大な言葉遣いになる。

ちよつとした精神分裂状態である。

本編ではアルムに興味を覚え、身分を度外視して彼に教えを乞う場面がある事から、貴族の割には謙虚なのかも知れない。

?章の物語の渦中の中心にいたにも関わらず、アルム以上に何も出来なかつた彼女。

果たして、彼女は今後どのような道を歩むのだろうか。

また傍流と言えども、自分の近衛師団のようなものを持っており、そのメンバーはほぼ全員女性。

そのノリについていけなかつたアルムは、ちよつぴり・・・いや、大分引いていたが。

アイシャ姫の名前の由来は、金髪に馬鹿力の騎士という流れから、某漫画の王女騎士から。

・マール

亜人類リス科リス目。

・・・嘘です。

茶色の毛並みと丸い耳。

そして茶色の眼を持つ、亜人。

この世界の亜人とは、獣人と人との相の子を指す。

外見的には獣人と変わらない為、それを区別するための呼称である。亜人が他の獣人と違うのは、一定以上の年齢や成長に到達すると分化という現象が起き、どちらか一方の種族の血が濃く出る。

これによって、人より強い力を有したり、獣人より高い知能を発揮したりする。

総じて、人間よりも高い能力の場合が多く、各国が重用したがる種族の一つ。

これだけを挙げると、人間よりも上位の存在で社会の頂点に立ちそうなものだが、そうはならないのには理由がある。

出生率が異常に低いのである。

もともと能力の異なる種族との混血である為、妊娠する率が極端に低いのだ。

これにより、この血統はますます各国にとって非常に貴重な存在となり、本編ではそれが争いの種にすらなっていた。

マール君自身は、誰かの庇護のもとに生きていくしかない閉ざされた社会・未来を嫌っていた。

それが本編での悲劇を呼ぶ事に・・・。

果たして、その意志はアルムに引き継がれたワケであるが。

ちなみに可愛く見えても、マール君はれっきとしたオトコノコです。名前の由来は、昔、人形劇でちみの弱虫のマールってヤツがいたから(ヲイ)

・ラスロー・フォン・セルブ

藍色の髪に同色の瞳。

別名おかつぱ王子。

きつとちょうちんブルマのようなかぼちゃぱんつ(白)が似合うの

だろう（ライ）

セルブ王国の王子。

王侯貴族の義務をしつかりと理解したうえで、”民は良き王に導かれてこそ”という信念の下、各地から優秀な人材を引き抜いていた。ある意味で選民主義者、ある意味で貴族の義務を完遂しようとしているとも言える。

本編では、ラスロー王子は途中から偽者と入れ替わっていたのだが、当然偽者も本人の真似をしていたワケで、この考えは本物のラスロー王子の考えでもある。

同じ王子でも国王を目指す青年と、誰からも省みられない第二皇子との差がここまであるのかと、アルムの考え方を見直させるのに一役は買っていたと思う。

ちなみに本物は、もうちょい短気で厚顔不遜である。

当初は、もつとどうでもいいキャラだったので、ちよろつと出るくらの予定だったが、まさかこんな風に絡んでくるとは思わなかった、ダークホース。

ぶっちゃけ、オリガさんの方に力を入れてあげたかった。（ライライ）

ちなみにセルブ王国の国色は白。

祭っている神器・使用する武器は、細剣・刺剣である。

・オリガさん

茶髪に同色の瞳。

頭の斜め後ろ辺りの両端を三つ編みにそれを更に後ろで一つを束ねるといふ、本編で一番複雑な髪型をしている。

これはやはり侍女は、オシヤレをする範囲が少ないからであろうか。ラスロー王子付きの侍女で、クールビューティー！。

きつと眼鏡が似合う事だろう。

侍女と言っても、王子付きの時点で彼女も貴族の系譜に名を連ねる

一員。

普通、王族の侍女・近衛兵は貴族や熟練の兵士がなるもので、アルムの場合は例外中の例外である。

彼女は幼い頃から王子付きの侍女になるべく教育を受けており、侍女だけでなく貴族一般の礼儀・作法もマスターしている。

それくらい優秀でないと、王位継承権のある人間の傍にはいられない。

本編では名乗っていないかったが、恐らく貴族姓も持っている事だろう。

ちなみに年齢は、ラスロー王子・アルムより年上。

本編では、セルブ側で唯一、真実を知っていた人間。

もともと彼女が周りに心を開いて、アルムを味方だと認識していれば結末は変わっていたのかも知れない。

だが、裏で必死で立ち回り、アルムに絶妙なタイミングで放つ一言で事態を動かしたのは賞賛に値する。

名前の由来は、某銀髪ファンタジックなチルドレンが登場するアニメから。

・リディア・シ・セイブラム

金髪・紫の瞳。

セイブラム法皇国の枢機卿。

前回のチラシ裏で紹介したが、法皇国は宗教国家といっても思想国家であって確固たる神を崇拝しているわけではない。

また神器としての王錫を継承し続けているが、直系というより国中に広がった一族の血が濃く出ている者が神器を継承する。

主に神器のレプリカを扱える者や一定以上の修練を修めた者が枢機卿として国に仕えるのだ。

セイブラムの名は枢機卿全員が名乗る称号のようなものと理解する
といい。

その中から合議によって国の代表である法皇が選出される。

神器が使えるか否かは、この場合特に問題ではない。

とてもおっとりとした口調と性格で、？章の施設創設を実行している責任者。

ちよつとした妄想癖の持ち主で、一度うつとりしてしまうと滔々と語りだしてしまう。

術使いとしての資質に恵まれていて、魂の性質を観測するなどの術を披露している。

魂の資質を観測できる強い術使いである代償として、対象者の強く思考している事を読む力を持つ。

尚、思考を読む力は本人の意思とは関係なく常時発動するもので、強い術者は誰でも少なからずその力を持っている。

シルビアやオリエが、本編でアルムの思考を読んでいるかのように先回りした行動に出ていたのも、この力である。

また美しい金の髪と口調がシルビアを彷彿させるが、彼女曰くシルビアは”遠い親戚のようなもの”であるらしい。

アルムの心を読んだ事で、早くから彼の正体に気づいていたであろう彼女。

果たして、これからの出番は如何に。

ちなみに名前の由来は、決して緑髪のロリからアダルトタッチに大変身な召喚士ではない。

姓は、某完結記念、愛と平和のガンマンが出てくる漫画のある意味ヒロインの名から。

？章のチラシ裏。(後書き)

感想・リクエスト・続編希望など随時お待ちしております。

序。(前書き)

以前のようにガツツリと更新出来るかわかりませんが、頑張っ
て能
の無さを手数で埋め続けたいと思います。(泣)

序。

次々と運ばれて来る材木。

全てがダークエルフの森からだ。

ここにこぎつける迄に、一度川に面した集落で小さな水車を建造した。

非協力的だった派閥に、水車の便利さを説く為だ。

実際に作って見せた方が手っ取り早い。

・・・まあ、これにはラミアやサアラ姫の協力のお陰だ。

きっかけはどうにも情けないが、理解を得られ材木を入手する事が出来た。

この際、オレの情けない気持ちは放置。

水車の建設に伴って、穀物を挽く水車小屋の建設も始まっている。

一応、州営となっているが、州民の誰でも使える施設だ。

人手は水車建設の技術が学べるとあって、職人はすぐに集まった。

職人以外の人手は、ダークエルフから州の農民（休耕期間中）等と様々。

勿論、公共事業であるわけだから給金も出る。

そういう働き手の為に物を売る行商人も何時もより頻繁に州には入って来ていて・・・。

リツヒニドス、何やら小さなお祭り状態というか・・・。

「何というか、好景気？」

窓の外に見える活気ある光景に思わず驚く。

「発案者が何を今更。」

その後ろで、カーライルが呆れたように呟く。

「確かに不況・不景気には公共事業も時には効果的だとは知っていたが。」

「ううむ・・・。」

「実際は借金まみれなのに・・・。」

苦笑しながら、カーライルに向かって肩を竦めてみせる。

「この規模の公共事業としましてが、破格値の借入金額です。しかも2期後の収穫高、作付け面積の増加率を試算すれば……。」

一瞬の間。

「お釣りどころか、黒字転化しますね。」

意外と楽しそうだな、コイツ。

「3年目くらいには、か……でも黒字になるってわかってるならさあ、もうちよいやりたいコト、やってもいいよね？」

子供の悪巧みのようにオレはニヤリと笑う。

「まだ何かやり足りないのですか？」

カーライルこそ、口調は呆れているが目が笑っていない。

「うん、今度は追加で、鑄造・錬鉄の職人が必要かなあ。」

オレはカーライルを手招きすると、彼の耳元に悪巧みを吹き込んだ。

「次はそれですか？」

「仕事に関する施設事業をやったんだがら、娯楽も必要だろう？」

オレはな、諦めが悪いんだ。

「と、言ってもこちらの設計や企画は青写真の段階なんだ。だから、職人達と相談しながらだな……て、なんだよ？」

カーライルの無言の反応と視線にオレは問いかける。

「いえ。こんなに内政に辣腕を揮えるとはと、感心していません。」

「……それは嫌味？」

オレは溜め息をつきながらカーライルを睨む。

「嫌味？滅相もない。嫌味を言うとするならば、何故その腕をもっと早く揮わなかったのか？というくらいですね。」

ぐっ……。

「オレにその場所も機会も無かったからさ。誰もそんなの望まなかったし、必要に迫られる事もなかった。」

いやはや、これは言い訳だな。

それを踏まえた上で、カーライルもオレにそう言っているんだろう。

「それと、オレは目立つのが嫌いなんだ。照れ屋だから。」

第二皇子がでしゃばった所で、良い事があるとは思えない。

「でしたら、今回の”自分達の要望”は、皇子を困らせてしまいましたね。」

自分達じゃなくて、自分の間違いだろうが。

カーライルってこういう性格だったんだな。

「求められる事、それ自体が悪いとは一言も言っていないだろう？ただ・・・慣れてはいないな。」

たまたまオレは皇族に生まれただけだし。

「騎士団だって、本当は結成なんざしたかない。」

「それも必要だから。ですか？」

「明確な敵がいる訳じゃない。本当はあってもいい事なんかないのかも知れない。」

それはわかっているのだけれど・・・。

「オレ自身に守りたいモノが増えてきたって事さ。」

だから、オレは少しの間だけでもいい。

オレは表に立つ。

「それは何よりで。」

カーライルは微笑みながら一礼すると、部屋を出て行った。

オレの発言を完全に肯定するわけでも、否定するでもなく。

イッショにいとらいつコト。【前】

「アルム……。」

「ん？どうした？」

部屋で書き物をしていたオレをオリエが訪ねてきた。

「何してる？」

仕事の邪魔をしたのかと、少し遠慮がちにオレを見る小さな少女。「ちよつとしたお手紙と書類だよ。おいで。」

オレは筆を置くと、オリエを手招きして自分の膝の上に座られる。あれからオリエは城の大きさに驚いて、そしてあちこち探検を始めるようになった。

見る物全てが初めてで、新鮮だったのだろう。

ああ、それから意外や意外、オリエが一番懐いたのがミランダとホリンだった。

一体、あの二人にどんな共通点を見出したのか不思議でならない。

「これはね、リツヒニドスでオリエみたいな子供を作らないようにする為のモノだよ。」

一つは法改正。

と、いつでも現行法の厳罰化だ。

人身売買と人足の働き口斡旋の禁止。

斡旋機関は、州府のものと厳しい審査を通しての認可制にする案。

そして、こういう現状を引き起こしているのが、貧富の差や教育の問題だとオレは考えた。

州の税率は、所得による変動制にする案と子供の教育機関の設立案の提議する為の書類。

主に文官・武官・職人を養成する教育機関とそれに伴う根回しの手紙。

提議しても可決されるとは限らないし、可決されてからの事をしっかり決めておかねばならない。

「これでもつと皆の生活が良くなるといいな。」
良い案を施行して成功したら、兄上が中央でも採用してくれるだろう。

「アルム……。」

書類をじつと見つめていたオリエが、身体を捻ってオレの頬に手を伸ばす。

「なんだい？」

「ムリするの、ダメ。」

頬に触れた小さな手がオレを撫でる。

無理を……しているのだろうか？

オレは自分のやれる事をしているだけで……。

「ありがとうオリエ、心配してくれて。」

だが、本当にオレに心配される資格があるのだろうか？

本当に政治の表舞台に出ていいのだろうか？

「ふあん？」

オリエは的確に。

そして簡潔に問う。

不安……そうなんだろうな、きっと。

それは存在に対して。

魂の領域までの。

最近ではアルムという人間は、一体何なのだろうとまで思う。
実に哲学的だ。

「というより、楽になりたいのかもね。」

オレは出来る限り優しくオリエの髪を撫でる。

オリエを買い取ってから今まで、きちんとした食事等の環境を整えたせい、彼女の髪は指が引っかかるような事もなくなった。

身体もいくらかふつくらしてきている。

だが、相変わらず背というか、身体全体が小さいままだ。

本人曰く、約10歳程度だという事なので、同年齢の子供に比べれば二回りは小さい。

「ダメ。」

オレの手をくすぐったそうに目を細めていたオリエが再び呟く。

「ダメ。アルムもいつしよに幸せ、なる。」

そういえばオリエの喋り方は、片言のままだ。

長い間、声を出す事を封じてた彼女に長く声を出すのは困難といつか面倒らしい。

一向に直る気配も直そうとする気配もない。

そう考えるとどうやら元来無口な性格なのかも知れない。

いや、それで彼女の可愛らしさが損なわれるわけでもないが。

「一緒に？」

「いつしよ。」

もう一度、力を込めて繰り返すオリエ。

「そうだね。折角オリエがオレの所へ来てくれたんだものね。」

本当に、それは感謝すべき出来事だ。

「みんな、いつしよ。いつしよに幸せ。でも・・・。」

「でも？」

なんだろう？

「アレはいらぬ。」「アルムお兄様！ここにオリエさんが！ああっ?!」

オリエが扉を指差すのと、扉が勢い良く開け放たれるのは、ほぼ同時だった。

勢い良く部屋に突撃を敢行して来たのはサアラ姫。

今はオレとオリエの光景を見て固まっているところ。

「な、な、なんて、うらやま・・・はしたないコトをっ!」

わなわなと肩を震わせる少女。

外見は、ほとんど年の差があるようには見えないんだがな。

「カンケイない。アタシ、アルムの妹兼娘。」

「またそういう事を！そういう問題ではないんです!」

いいから降りなさい！と手をブンブンと振るサアラ姫を平然と見ているオリエ。

なんとも言えない温度差だ……。

「うらやましい？でも……アゲナイ。」

オリエはオレの胸に顔を埋めてすり寄る。

はて、こんな性格だったのか？オリエって。

「ああっ?!いいから離れなさあーいッ!」

ちなみにこの二人、出会った初日からずっとこんな調子だった
りするのだった。

イツシヨにいますというコト。【後】

「不安ね……。」

そりゃあ、あるさ。

夜着に着替えたオレは一人眩く。

城に帰って来た後、オレの魂が不安定な状況にあるとしたら？

もし、残された時間が少ないとしたら？

いてもたってもいられない。

残された時間で精一杯出来る事をしなければ……。

ただ……不思議と死ぬのは怖くない。

「失礼しますう。アルム様……あらあ？」

寢室に入って来たシルビアは、オレの夜着姿を見て少し不満そうな表情をする。

「もう着替えられてしまいましたかあ。お手伝いしようとしたのにい。」

「いや、普段から一人で着替えてただろ？」

着替えも入浴も手伝いなんていらぬ。

というか、この間延びした喋り方を聞くのは久し振りだ。

「そうでしたか？」

「そうでしたよ。」

もう絶対ワザと。

確信犯。

「確信犯じゃないですよ。」

また心を読むし……。

きつとこれも術使いとしての能力の一端なんだろう。

オリエもトウマと名乗っていた時に、オレをアルムと呼んだ。

リディア先生も時折、心を読んでいるんじゃないかと思う発言があったし。

「お手伝いしたい年頃なんですう。」

どんな年頃だよ、ソレ。

「女性に年齢聞くのはダメですよ。」

いや、そんな可愛く指先で×印出されてメットか言われても聞いた
りしないから。

「随分と楽しそうだね、シルビィ。」

何時も以上に元気だ。

やはりシルビアはこうじゃないとな。

出逢った時から、オレにとってのシルビアってこうなんだし。

「はい」。張り切ってお手伝いしたいんです。もっと必要と思って
もらえる為に。」

急に真面目だなあ、もう。

「はあ・・・シルビィ?」

オレはシルビアの手を取ると、その手を自分自身の胸に。

丁度、リディア先生が以前、オレの魂の質を見る為に手を置いた位
置。

「心が読めるならわかるだろう?オレがどう思っているか。」

オレは自分で思っている以上に他人に、周りの人間に支えてもら
っている。

生きる意志も、魂の強さも、誰かに支えられる事を糧にしているん
だ。

ちよっと情けない話だけれど。

だから、シルビアもとてもとても大切なオレを構成する一欠片。

「ね?」

「・・・わからないです。」

顔を少し赤らめ呟くシルビアは、きゅっと手を置いたオレの服を
掴む。

「ちゃんと口で・・・言葉で言って欲しいです。」

随分と大きな甘えん坊。

視界に銀の指輪が入る。

「大事だよ。オレにとっては目に映っているシルビィが全て大切だ。

かけがえのないものだよ。」

だから、立ち止まれないんだよな。

「嬉しい……。」

瞳に涙を溜め微笑むシルビアは、少女のように可憐で綺麗な。

「アルム様、就寝前にお茶でうおっ?!」
魚?

つか、何でオレの周りの女性は、こういう時に限って許可も無しに部屋に入ってくる……。

きちんと扉を叩いてから入ってくるのが、ミリイとホリンというつかり二人組だけとはどういう事なんだ?

「あらあ、お邪魔してましたかあ?」

瞳に浮かべた涙を指で拭い、何時もの微笑みを浮かべて、ミランダを招き入れるシルビア。

「最近、アルム様はミランダさんを構ってくれないですものねえ。

お姉さん組は寂しいですよ〜。」

お、お姉さん組って……この城に来た時にそんなの言ってたよなあ、自分で。

「えっ、あ、う〜。」

シルビアの言に思わず唸り声を出すミランダ。

昔はこんなだったなあ、聞き分けが良過ぎて言いたい事を言えずに唸るこの姉は。

再びこの城に戻ってから、誰とも一緒に寝台に入ってた。

トウマの記憶では、ベッドだったか?

当初はダメ皇子説を流布する為にレイアやホリンと一緒に寝てはいたが。

施設でもミリイとオリエと一緒に寝ていたし、帰城した初日はオリエが不安だろっから一緒に寝た。

そう考えたら、確かに(シルイビア曰く)お姉さん組との時間は取れていない。

「ですよ〜。」

以前にも増して反応早いな。

でも、オレが深く強く考えている事しか読めないみたいだ。口に出さなくていいから、ある意味便利か。

便利の一言で片付けていいものかは知らんけど。

「確かに一理あるね。」

頷きながら、シルビアを見ると・・・。

「うふふつ。」

満面の笑みだ。

「よし、じゃ、三人でお茶を飲んで、一緒に寝るか。」

「はい。つて、ええっ?!」

「あらあら、では、追加のお茶の用意をしてお着替えして来ましょ。」

これは耐性云々じゃなくて、心を読めてるか否かの差か？

違う気もする。

赤面して硬直するミランダと、楽しそうに鼻歌を歌っているシルビア。ア。

実に対照的だ。

何だか、少しからかいたくもなる。なるよな？

と、オレは強く思ってみる事にする。

当然、シルビアを見ながら。

「では、アルム様あゝ。どの様な夜着を私共にご所望ですかあ？」

流石。

「透っけ透っけの欲情するヤツ。」

「へっ?!」

ビクリと反応するミランダ。

「かしこまりましたあゝ。」

「うええっ?!」

うゝん、やっぱり実に便利だ。

ロクでもない展開ってコト。

まさか自分がこんな状況になるとは思ってもみなかった。
ただ……。

「でえりやあつ！」

「フンヌツ！」

火花が散るぐらいの剣撃。

朝食を摂ってからブツ続けでバルドと剣を打ち合わせている。
既にもう日も高い。

「フツ！」

「はあつ！」

バルドは微動だにせず、オレの渾身の一撃も声だけで相殺されそ
うだ。

それでもオレは激しく斬りつけている。
斬り続ける。

一瞬でも手を休めれば、バルドの渾身の一撃が待っている。
例え、それによつての傷が無かつたとしても、その衝撃は相殺し切
れるものではない。

以前だつたら、こんなに長い時間手を出し続けてなんていられな
かつた。

でも、今は。

「かなりマシになりましたな。」

平然としているバルドの声すらも一切無視して、身体を動かす
ける。

これにもコツがある。

呼吸だ。

早く激しい動きは、無呼吸運動になる。

これは人として生物として普通。

だが、この場合それじゃあダメだ。

達人級のバルド相手では、息を吐ききった瞬間、息を吸う瞬間に強烈な一撃に見舞われる。
格好の標的。

誰もその刹那は動きが止まるから・・・だそうだ。

伝聞形なのは、オレにはその瞬間がわかったとしても刹那の斬撃なんて繰り出せん。

悔しいが。

斬撃を単調にせず、様々な角度から呼吸と斬撃の間をつくらない様に。

「そろそろワシも動きながら受けないと無理になってきましたなっ。」

「

罅迫り合い状態になった時に剣をその馬鹿力で押されて、互いに間合いが開く。

「しかし、成程、アリですな。」

バルドはオレの姿に感心する。

「長剣二本流。確かにワシも長剣の使い方と双剣の型をお教えしましたが・・・。」

今、オレは両腕に円盾、両具足。

そして、長剣を左右の手に。

「まさか間を取るとは何とも・・・。」

「オレらしいだろ？」

この前考えた戦い方を早速、実行に移してみた。

アイシャ姫の強い一撃、ラスロー王子の早い一撃。

どちらもオレには無かった。

ので、手数と防御で差を埋める事を試みてみた。

これが、意外にしっくり。

双剣を使うという事は両利きでなければならぬ。

バルドの教えも片腕一本になるのが、腕を両方失おうが戦って生き延びるといふもの。

これが功を奏した事になる。

「ワシの弟子とヴァンハイトの皇子とこのを見事に体現してますな。」

ガハハと豪快に笑い出すバルド。

「と、ますます熊じみてきたな。」

これで生肉にでも齧り付けば、まんま熊だ。

「だろ？まあ、自分でも意外にしつくりきて驚いてる。」

「ワシの教えのタマモノですナ。」

バルドの訓練は、訓練とは言えない。

半殺しのメに合う事が何度あった事か……。

オレ自身が望んだ事ではあるが。

明確な目標。

その達成の為に。

今は、もつと明確になっている。

オレに残された時間が、もし僅かだというのなら。

「しかし、随分と長い時間訓練に使ってしまったなあ。」

「公務は大丈夫なんで？」

「バルド、公務なんてもん、本当はオレには無いんだぞ？」

第二皇子は中央の政治から遠ざけられ、隠棲という流れでリツヒ

ニドスに来たんだから。

「ま、能ある者も武ある者も人に望まれる運命なんですな。」

能？武？

オレは思わず微妙な表情をする。

「おおつ、他にも他者に望まれる者がいましたなあ。」

日の光を受けて、キラリと光る頭を叩く。

何かロクでも無い事を言い出しそうだなあ。

「徳のある者ですな。コレが一番難しい。多くいるワケでも後から

獲得出来るものでもない。」

徳ねえ……しかし、こうして聞いていると、兄上って全部当て

嵌まるワケで……。

流石、無駄に完璧超人。

「ここにいらしゃいましたか。」

「ん？」

珍しく完全武装の鎧姿のレイアだ。

「何故、レイア鎧姿？まさか・・・バルドの指南？」

悪い事は言わない。

亡くなった先祖に会いたいか、自殺志願者じゃなければ、やめた方がいい。

「アルム様のように打ち合ったりはしませんが。」

なら、まあ、いいだろう。

この熊の脳みそに手加減の文字はない。

いや、あるかも知れんが、力加減という言葉も時たま抜けたりするから。

「ではなくて、アルム様にご面会の方がいらしております。」

面会？

オレ、この地に部下以外の知り合いなんて、いないに等しいんだが。

「・・・女性？」

「いえ、男性の、ご老人の方です。」

男性老人？

ますます誰かわからん。

首を傾げながらオレは、レイアと共に執務室にしている部屋へと戻った。

ハイイも時によりけりってコト。

「おおっ！アルム様！お久しい。」

訝し気に執務室の扉を開くオレを迎えた老人。

「はぁ……。」

その姿を見て、オレは一気に脱力した。

緊張した自分が馬鹿みたいだ。

「何で、こんな辺境の田舎くんたりまで……。」

オレは溜め息をつく気すらなく老人に向かって言葉をついた。

「辺境の田舎とは、おこは由緒正しき皇政発祥の地。若い時分、何度と訪れた事か。」

物好きというか、流石”皇室長官”

ある意味、その熱意には感動する。

だが、問題は彼が何しに来たかだ。

どう考えても今回は物見遊山ではあるまい。

「皇子のご健勝ぶりをこの目で拝見出来てよろしゅうございました。」

表立つて。とは言えないが、彼はオレに無関心ではない数少ない人間だと認識している。

認識しているからこそ、オレも邪険にする事は出来ないんだが……。

「自由にさせてもらっているからね。前の城にいるよりは楽だよ。」

聞きたくない事も耳に入ってきて来ないしな。

もつとも、それが良い事なのかどうかはわからないが。

「そのようで御座いますな。城下の街も以前とは見違える程に活気に満ちています。」

コホンと咳払いする。

「なにやら街と田畑の整備計画をアルム様が立案したとか？」

ほらな。

聞こえないのも良し悪しだろ？

全く、誰がそんな事を・・・。

一瞬、何処かの州太守代理様を思い出したんだが？

本当にやらかしそうなので、考えたくない。

放棄。

「オレはただのお飾りだよ。オレに威光なんて無いが、それでも”無能な第二皇子”がやったと言えば、失敗しても諦めや責任のなすりつけもし易いだろう？」

今度から民の意見や要望をオレや太守が直に受け取れる案を練らないとな。

少なくとも、オレが居なくなつた時にそれが良い案ならば、カーライルが継続して行ってくれるだろう。

「そんな事はありません！アルム様は良く民草に心を砕いて下さいます！」

・・・レイア。

どうにも我慢出来なくなつたのだろうか？

横に控えているレイアが声を荒げる。

とんだ不作法なのだが・・・まあ、レイアは首都にいた頃のオレなんてほとんど知らないからなあ。

「ありがとう、レイア。こうやって甘やかしてくれる者達に対して、真摯に向き合っていたらこうなつただけさ。」

そもそも、オレの血筋に影響力があつても、オレ自身には何の力もないんだ。

それを理解しているからこそ、皆を落胆させるわけにはいかなくない。

ある意味、それが”アルム”という人間の矜持なんだからね。

「いやはや、民の戦闘に立ち続けるという責務を持つという事が大事なのですな。」

不作法なレイアを咎める事をせず、寧ろ良しとする所が人が出来ている。

「彼女はレイア。アルム・デイス・ヴァンハイトが、このリツヒニドスで起こす新たな騎士団の騎士団長だ。」

遅かれ早かれ、この事は中央に伝わるんだ。どうせなら、自分の敵ではない人間。

少なくとも目の前の中立と思っっている人間に言っつて、広まった方がまだいい。

と、言っつても、まだ結成どころか募集開始もしてないんだけども。・・・あ、あの、アルム様？今・・・なんと？」

目の前の老体の反応を待つ前にレイアから意外そうな反応が出る。何をそんなに驚く事が・・・。

「あ。まだ言っつてなかったっけ？今、言っつたからいいか、うん。」
熱に事後承諾っつて程でもない。

「良くありません！」
あ、ダメか、やっぱり。

意外とオレの部下の中で真面目な方に入るからなレイアは。
「その内、そういう事になるからね。君以外オレには考えられないし、君でなければダメだ。」

んで、ここで兄上ばりに微笑んでみたり。
「あ・・・うう・・・。」

と、こうなるワケか、学習。

いや、そう思っつているのは本当だよ？
だっつて、彼女はオレだけの騎士なんだから。

「期待しているよ？オレだけの騎士さん。」
その言葉にしっかりと頷くレイアは、オレに騎士の誓いをした時と同じ表情だっつた。

「アルム様も皇子としての心構えがようやく出来たという事ですか
な。」

オレ達のやり取りを聞いていた彼は、素直にオレの成長と受け取っつてくれたらしい。

「ならば、私もめもここに来た甲斐があります。皇子、これも皇子

としての使命ですぞ。」

。。折角、うまく用件を言わせないように引き延ばしたというのだから。。

ニドメは回避出来ない時もあるってコト。

「いやあ、今日もリッツヒドスは平和だなあ。」

城下に見える景色を眺めながら、一息。

「アルム様。余りにも露骨過ぎる現実逃避はどうかと……。」
「ぐっ。」

冷静にミランダに突っ込まれた。

「他人事だと思って……。」

オレは思わず恨みがましく彼女を見る。

例の皇室長官の御用のせいだ。

彼の本来の仕事は、天領地の総管理。

これは各州がまとめて一年分の報告を提出するので、矛盾が無いか目を通すくらいだ。

それと皇族に関する祭事。

あとは……オレがこの城へ移動するきっかけとなった出来事。

「まさか、ここまで来て婚姻話とは。」

田舎にわざわざ来た理由はソレ。

所謂、お見合い話。

「仕事熱心ですね。私も見習わなければ。」

これ以上、仕事熱心になられてもなあ。

「今の論点は、そこではなくてだねえ……全く、本当に他人事だと……ちよつと！ミラ何やってんの?!」

窓の外に向けていた視線を戻したオレの目に入ってきた光景。

ミランダの手から流れ落ちる紅茶が溢れ出し、台車から滝のように流れている。

「は?!あ。」

現状に気づいたミランダは、慌てて紅茶を注ぐ入れ物から手を離す。

当然、落下。

ブツかり合う陶器は見事に割れて砕けた。

「ミラ、怪我は？」

やれやれ全然、他人事じゃないんだねえ……。

そうだよな、少なくともオレとミランダの絆はそれくらい強い。血よりも。

本当、悪いね兄上。

とりあえず、この破片を二人で片付けるか。

「ね、ミラはオレに結婚して欲しくない？」

何か聞き方が悪かったな。

「オレとしても今回の事は厄介だと思つてね。」

一度断つたくらいだしな。

そうそう長い時間逃げ切られないモノでは無いかなあ〜とは思つてはいたよ。

そりゃあね。

「第二皇子が結婚て……兄上もまだだつてのに、ロクな事にならないと思わない？」

折角、やりたい事が出来始めてたのに再び”代替品”の役目に逆戻りか……。

「その……アルム様はどうなのですか？」

そんな恐る恐る聞かなくても……。

「そうだなあ……。」

この血筋を残す事は、もうオレには無理だし、余計な争いを生みたくない。

でも、それは子を成した場合の話で、結婚自体が悪いというわけじゃない。

「オレと結婚するっていうのはさあ……。」

オレは半ば国家転覆くらいしていいと思つている危険人物だしなあ……。

何より残された時間が少ないのかも知れないという事もある。

「すつごく貧乏くじじゃないのかなあ？」

「滅相もない！」

そんなに大声出さなくても……。

「た、確かにアルム様は、第二皇子という事で国内では微妙な立ち位置かも知れない。」

何か……ちょぴり懐かしいカンジ。

「でも！一通りは優しく素敵なの！それはアルをずっと見ていた私にはわかる！」

ああ、姉の立ち位置が変わってるし。

「そんなアルと結婚なんて貧乏くじだと思っわけはないわ！」

鼻息も荒くオレの姉としてのミランダは大声で主張する。

ヤレヤレだ……。

言い切ってもらうのは嬉しくもあるけどね。

「結婚だとオツ！アルム、それはどういう事だ！」

……ヤレヤレ。

ミランダの大事が部屋の外まで聞こえたらしい。

扉を壊さんばかりの勢いで開け放つラミアの姿。

「どつというと言われてもだなあ。今日、皇室長官というのが来てな、そういう事になったんだよ。」

無論、全力で回避してやろうとは思っているが。

「オ、オマエは、この私以外に誰と結婚するっていうのだ！」

……興奮しているせいか、物凄い問題発言をしているような気もするが。

これって、興奮しているからって事でいいんだよな？

うん、そういう事にしておこう。

本人は全く気づいてないみたいだし。

「誰って、そりゃあ……。」

「それは？」

「誰だ？」

そりゃあ……アレだ……ホラ……。」

「あれ？オレ、肝心の誰が相手だったの聞いてなかった。」

静まる空間。

ああ・・・視線が冷たいつ。

「いや、結婚なんてまだ早いしさん。ミラにも言ったけど、兄上ですらまだ・・・まだ？」

じゃあ、何でオレが先なんだ？

どう考えても第一皇子で皇太子が結婚して、子を成す方が国としては遥かに大事で優先だ。

兄上は、しっかりと神器継承出来ているんだし・・・。

皇族なんざ、恋愛結婚出来るわけないし。

「・・・あんのクソジジイ・・・オレは政略結婚はしないって、あれだけ言ったのに！」

つまりは、そういう事なわけで・・・そうになると、そうなわけで・・・。

「とりあえず、まず候補とやらを聞いて来るか・・・。」

ホガラカに日々を過ごすというト。

「っざけんなっ！」

- カコオンツ！ -

叫び声を上げながら斧を振るうと、材木に吸い込まれていき、その代わりに乾いた音が返ってくる。

材木を切るうえでは無駄な力の入れ具合いだ。

何故こうなったかというのだ、一応、相手が誰なのかを聞きに行つたオレを待っていたのは、蛻の殻の部屋。

どこに外出したかもわからない相手を探すのも骨が折れる。

折れるのだが、かといってこのまま城に居続けても女性陣問い詰められるのは目に見えている。

ちなみにラミアは憤然としたまま部屋を出て行ってしまった。

突拍子も無い事をしてかさなければいいが。

と、まあ、つまり、このイキドオリってヤツを材木にブツけていると。

「よいさあっ！」

- カコオンツ！ -

この音が意外と心地良くて好きだったり。

例の水車建設予定地で材木加工の手伝い。

うーん、皇子の仕事としては素晴らしく目に見えて、実務的だ。

「しかし、皇子まで肉体労働とは驚きつス。」

「こつちこそ、ザツシュがいるとは思わなかったよ。」

現場に行ったら、既にザツシュが手伝っていた。

ザツシュは鋸を引いて、材木の端を綺麗に削ぎ落としている。

「非番の日の数時間と訓練日は皆ここで働いてますよ？」

相変わらずの腰の低そうな態度と笑顔。

「えーと、あのサ・・・給金低い？」

官吏の給金ってスクラトニーが居た時と変わってないのではなか

ろうかという疑問が・・・。

だとしたら、かなり低給金だったりするのでは？

そんな低給金で、オレは官吏達を連日徹夜の嵐に叩き込んだとかだつたら、何とも申し訳ない。

「あはは、これは無償っスよ？ご飯分は取ってるっスケド。」
無償？

「これでも皆、リツヒニドスが良くなるならっていう程度の愛着はあるっスよ？」

ぐぬぬ。

「それは失礼だったな。」

皆、自ら買って出してくれた苦労なのか。

「ま、意外と皆、田舎ですから休みと言っても暇人で、訓練代わりにもなるってのが大半っス。」

ザツシュがそんな身も蓋も無い事を言うものだから、そこかしこから苦笑する声が聞こえる。

確かに働く人々の中に何人か見知った顔がある。

間違いない。

「悪いな。」

「いえいえ。結局は自分達の為になるっス。それに皇子も手伝ってるじゃないっスか。」

それはそうなんだが・・・。

「オレのは気まぐれだよ。言い出した人間として心配ってのもあるが。」

「普通は言い出しっぺだからって、ノコノコ皇族が出てこんな事しないっスよ。」

呆れながら笑い出すザツシュにつられて周りの皆も笑い出す。

「そういうコト言つと、不敬罪でザツシュを減俸にしちゃおうかな？」

「ええ？！そんな事したら、それこそここに就職しないとなんなくなるっス。」

苦笑、失笑ときて大爆笑だ。

中には拍手喝采している者もいる。

仲間に愛されてるな、ザツシユよ。

思わず拍手している彼等の給金を上げたくなるじゃないか。

不公平だからしないけど。

「いいか、皆。これが成功すれば用水路が整備出来て楽になる。田

畑も広げられる。」

皆が一斉にオレを見て息を呑む。

未来が見えると人は生きていく力が湧く。

湧かない奴は時が流れる時間というものの概念に生きてない者だけだ。

「更に粉挽き小屋も作るし、太守代理と相談して他にも施設を作る。全部リッツヒニドスの民の財産だ。」

共有財産・公共物。

そういう考えは、皇族が治めている地ではほとんどない。

全部、皇侯貴族のモノだしな。

「税収次第では皆の為の施設も増やせるし、給金も上げられる。減俸のザツシユ君の給金もな。」

「減俸確定っすか?!」

素っ頓狂な奇声を上げるザツシユの慌てぶりを見た現場は、更なる笑いの渦に。

うん、なんか、こういうの生きてるってカンジがするな。

・・・ザツシユには悪いけれど。

逆に言えばアレか？

ザツシユ一人の犠牲でこれだけ場が和むんだから、これはかなりお得で凄い事ではないのか？

「いやいや、ザツシユ君。誰にでも出来る事じゃないぞ、うんうん。」

「何がっすかつ!」

オレではなくて、ザツシユの憤りが爆発したな、うん。

ヘンソクテキでも出逢いは出逢いってコト。【前】

「……何をしているのかな、キミたちわ。」

土木工事で一汗流し、周囲の人間と思わぬ親睦を深めて帰城したオレ。

着替えを用意してもらって入浴でもしようかなあと歩いていたところ、目の前に集団が。

扉に齧りつくようにホリン、ミリィ、シルビア、ミランダ。

「ア、アルム様。」

「はは、ちょーっと気になる”者”がねえ？」

「ええ。」

一体、何だ？

「ミラ、どうしたの？」

一応、侍女筆頭のミランダに聞いてみたのだが……。

「あれが、アルの……。」

全く聞こえていない。

というか、終始ぶつぶつと呟いているのだ。

「これは……アレ？」

「ええ、何時もの病気ですねえ。」

美しい笑顔で、さらっと辛辣な事を言いますね、シルビアさん。

「それほどでも。」

「褒めてないから。」

しかも、また心読んでるし。

「それはそうとアルム様は、一体こんな時に何処行ってたんですか？」

「うん、ちょっと土木工事に。」

「ど、土木工事ですかっ?!」

ホリンの質問に答えたオレに驚くミリィだが、いい加減普通の皇子と違っってコトに慣れて欲しい気もする。

慣れるというのも悲しくはあるけれども。

「アルム様らしいねー。」

「そうですね。」

ほら、慣れた二人はこんな感じだ。

うう・・・泣いちゃうかも。

さつきは減俸話で虐めてごめんよ、ザツシュ。

「で、結局、皆で仕事もせず何をしてたのかな？」

「仕事もせずにつて、この時間までの仕事は終わってます！」

ミリイがピシッと直立不動で答える。

君は軍人か何かかね・・・。

「それに仕えるべきアルム様がないですものねえ。」

あ。

確かにその通りではある。

「ねー。いたら何でもしたげるのに。」

響きがアヤしいから止めなさい、全く。

「最近、皆と寝屋を共にしてくれませんかねえ。」

「嘘はやめなさい、昨日一緒だったでしょ。」

「えーっ、シルビアさんずっーい。」

・・・思わず突っ込んでしまった。

頬を膨らませてご立腹のホリン。

「ミリイちゃんも旅先では一緒に寝てたんでしょ？私だけノケもの
」。

ミリイよ、何故、そんな余計な事を。

しかも、ホリンなんかに話した。

「あはは・・・すみません。」

睨むオレにしょんぼりと小さくなって謝るミリイ・・・そんなに
可愛いと怒れないじゃないか。

「全く。大体、オレと一緒に寝るのの何がいいんだが。」

以前だって、夜伽とかそういった事を実際にしたワケじゃない。
特に何があるわけでもない。

「何だろ、よく寝られるんですよねー。」

ホリンの弁に一樣に頷く三人。

「ああ、寝台大きいし、無駄に高級だもんな。」

本当、無駄。

この場合の貧乏症はいいんだよな？

悪くないよな？

貧乏症も良し悪しだといのは、しっかりわかっているつもりなんだが、如何せん自信がない。

「ああ、それもあるけど、それだけじゃないんだなあ。」

「他に何が？」

偉そうに指を振るホリンにオレは首を傾げる。

なんだが、オリエみたいな反応をしてみた。

いや、親子は似るといいうし、案外オレも無意識にしているのかも知れないな。

「んー。何というか、アルム様が横にいる安心感？匂いとか。」

「に、匂い？」

非常に変態さんな感じがしてくるのですけれど……。

「あ、そうかも。」

ええ?!ミリイまで匂い?!

「匂いは人が直感的に判断するモノと聞いた事があります。」

誰から聞いたんだよ、そんな話。

「”居る・在る”って大事ですよ、アルム様。」

何故、そこでホリンが勝ち誇る。

「ああ、もう、わかった。」

「何がわかったんですか？うりうりっ。」

……何処の世に仕えるべき主人の皇子を肘で小突く侍女がいる。

「そうだな。皆、オレの侍女なんだから公平じゃないとな。」

「やい。じゃ、今晚は私の番ね。」

番って……。

もしかして……もしかしなくても持ち周りでオレと一緒に寝るつ

もりか？

「お仕事が増えましたね。」

「ミリィも楽しそうにしているし……これはこれで……いいのか？」

「良いのではないでしょうか？」
ぐっ。

シルビア、何も心を読んでまで追い討ちかけなくても……。

「の、前にあちらを何とかしないとですね。」

「あちら？」

部屋の扉を指差すシルビア。

そうだ。

まだ何故こんな所で皆が扉に齧りついてたのか聞いていなかった。

「ええ。お客様です。」

「客？また？」

「はい。」
”きっちり”してあげて下さいね。」

ヘンソクテキでも出逢いは出逢いってコト。【中】

シルビアの言い回しに引っかかるモノを覚えつつも、自分に客という事なので行かないという選択肢は無い。仕方なく風呂は後回しにして、部屋に入る。

ちよつと相手に失礼だが。

というかミランダ邪魔。

「お久し振りです。」

オレの視界一杯に入ってくる真紅の色。

クロアートの国色を身にまとった一人の女性。

嘘をついたまま別れてしまった彼女。

「初めまして。」

胸に感じる痛みの中で、オレは次の嘘をついた。

一度、人を殺したら何人殺そうが人殺し。

同じように嘘だって、一度だろうが二度だろうが変わらない。

それに・・・もうトウマ・グランツはいないのだから。

「ヴァンハイト皇国、第二皇子アルム・デイス・ヴァンハイトです。」

自分の名を名乗るのにこんなに苦痛を感じたのは初めてじゃないだろうか。

オレの名前を聞いて瞳を閉じる目の前の女性は・・・。

「この度、クロアート帝国の貴族位に新たに列せられる事になりました、アイシャ・エル・クロアートで御座います。」

新たな貴族位というのは、大叔父様が亡くなったからという事だろうが・・・貴族性ではなく、よりによって王姓かよ。

「王姓を持つ大貴族（王族）が何故こんな田舎へ？」

薄々はわかつてはいるが、違う答えを彼女に期待してしまう。

「この度は、私の様な粗忽者で若輩者を妃候補に選んで頂き、真に光栄です。」

目を覆いたくなる。

よりによって彼女とは……。

「そうというのは光栄と言いませんよ。オレは辺境に追いやられた第二皇子ですから。」

どちらの位が上とははつきりしないが、まだ向ここの国にいる方がメがあるんじゃないだろうか。

「そうは仰られても、この街の様子を見ればご謙遜にしか感じませんわ。」

本当、間が悪い。

まさか、こついつのを計算に入れた兄上の仕業じゃないだろうか？最近のオレ、黒幕を兄上に設定するの好きな？

ゲンナリするオレと微笑む彼女との対比が何とも言えん。

「で、貴女ご自身は、今回の事はどう思ってるんです？本音のところは。」

この姫は、そこまで嘘がつける性格だと思わないしな。ついても、すぐに見破れる気がする。

「……そうですね。」

気まずい雰囲気なのは、この際仕方ないよな。

全く。

半分以上、自業自得とはいえ……。

「でも……一度ちゃぁんとお会いしたいと思いましたの。」

「たはは……。」

嘘をつかれて逃げるようにいなくなつた人間に会いたいとは……。

以前も思つた事だけれど、興味を持つとそれに関して意外に許容量が大きいというか、自由人なんだなよ。

それが可愛いというか、無防備というか、世間知らず？

「久し振り”なら私の知ってるトウマさん。”初めまして”ならアルム皇子。そのどちらもよく知ってみたいと思ひまして。」

「ぐぬぬ。」

根に持っているのかな、コレは。
いや、そりゃあ、怒っていても仕方ないとは思う。
実際、”初めましてのアルム皇子”の方をオレは選択したんだしな
あ。

「で、知ってどうするの？」

知ったところで、何が変わるワケでもないとは思っただけど。

まあ、オレには女心は一切理解出来ないし、証明済み。

「さあ、どう致しましょう？」

そう言つと彼女は、その手をオレの頬にそえる。

「何ら違いがないような気がしますわ。」

同一人物だしな。

ただ、彼女と出会った時のオレは自己責任のもとで好きな事が出来た。

今は、違う意味で出来ているけれどな。

「いや、結構違うと思うよ。」

「あら、そんな事を仰るのですしたら、私も以前とは違いますわ。」

そこは似ていると思う。

彼女も王姓を得たのだし、以前と立場が更に違う。

「案外……。」 「似た者同士ですわね。」

続きの言葉を先に言われた。

当然、心を読んでいるわけなんかじゃない。

「それじゃあ、姫に我が城と部下。そして城下街でも案内致しまし
ようかね。」

ずっと頬にそえられたままの彼女の手を取る。

「光栄ですわ。」

考えようによっては、彼女とはまたここから始められる。

立場はあの時と変わってしまったけれど。

「以前でしたら、外出も大変でしたから。」

「ああ、そう言えばそうですね。」

彼女にとっては、今の方が自由なのかも知れない。

少なくともここにいる間だけは。

「んじゃ、とりあえず……。」

皆を紹介するかな。

オリエやミリイとは久し振りだろうし、特にオリエが喋る事が出来るって彼女は知らないはず。

驚くだろうな。

それを想像すると笑いが止まらない。

「まずは、オレの周りにいる人間の紹介を。」

「アルム！」私の許可無く”女を連れ込んだのは本当かつ！！”

怒声を上げながら部屋に飛び込んで来る人影。

何時から、許可が必要になったんだよ。

というか、何故、オマエに許可を取らなきゃならん。

「……彼女は近くのエルフの森の姫で、ラミア姫です。」

一番最初に紹介する事になったのはいいとして、第一印象が最悪なのだけはオレでもわかった。

ヘンソクテキでも出逢いは出逢いってコト。【後】

「一体、何故こうなった？」

ラミアが乱入した事により、その場にあつた雰囲気グブチ壊しになつた。

そのせいだろうか、部屋の外で待機していた皆が雪崩れ込んで来る。それだけ気になつたという事だろうか？

「楽しそーだからいいんじゃないですか？」

ホリンは相変わらず楽しそうだ。

約束通り、城の周りや城下街を案内しているのだが。

「レイアは護衛だからわかるとして・・・皆がついて来る必要はあつたのだろうか？」

「さあ？」

このホリンの発言ははつきりしていいと常日頃から思っているのだが・・・たまには優しさが欲しい。

「まあ、ミリイはわかる。」

元々ミリイはアイシャ姫と面識があり、久し振りに会つたものだから非常に楽しそうだ。

が、今回はそれだけでなく、シルビアもミランダもラミアもいる。

「なあ、ホリン？」

「はい？」

「思うんだが・・・えらく派手に目立っている気がするんだが？」

ダークエルフを良く見かけようになつたとはいえ、未だ少数。それが二人もいる。

しかも、二人とも美人。

レイアは軽装でも鎧姿だし、ミリイとミランダは侍女服、同じくシルビアも侍女服。

そして、その真ん中に真紅の服のアイシャ姫。

髪も服装も色とりどりの女性達七人。

男はオレ一人。

「・・・気のせいじゃないよな？」

周りの人間の視線が、注目が痛い。

皇子なのに民衆と視線が痛いとか、どれほどマヌケな事か。

「あはは、ですね。」

軽いな、ホリン。

「なあ？この現状をオレはどう收拾すればいいんだ？」

「さあ？」

原因の一端が自分にもあるという自覚は皆無かよ。

「ま、でもこういうの久し振りだな。ここのとこ忙しかったし。」

この城に来てから、一番だらけた時間かも知れない。

色々あつたからな。

その色々に比べれば、今回は非常に些細な事で・・・笑い話だ。

「オレは・・・ちゃんとやれてるのかな・・・。」

今、周りにいる君達の為に。

この視界に入る光景、人々の為に・・・。

「さあ？そういうのは、アルム様が亡くなる直前か、亡くなったず

うつと後にわかるもんじゃないかなあ。」

一理あるな。

そして、その言い方は非常に軽いが深い言葉だ。

「つまり、それはホリンが見届けてくれるのか？」

彼女達ダークエルフの寿命は、オレ達より長い。

とりわけ純血の王族であるラミアやサアラ姫は、比べモノにならない

くらい。

混血だが、王族の血を引いているホリンだって、きっとオレ達より

は長いだろう。

「どうですかねえ。ほら、それこそ私が先に死ぬかも知れないし、

それに・・・。」

胸元で指を組んで、言いよどむ彼女の姿は珍しい。

いつも明け透けに話すからな。

「アルム様が死んだら、私も一緒に死ぬかも知れないでしょ？」
「あー。」

思わず、無意識に頭をかく。
前にそんな話をされたのを思い出したからだ。
彼女の祖母の話。

曰く、”好きな男の為なら、死んでやるくらい構わない。”
そんなような言葉。

今考えてもブツ飛んではいるが、そういうモノなのかも知れない。
何しろ、オレは全くわからないからな、女心。

「なーんて。」

てへつと舌を出して笑うホリン。

彼女の言葉は飾らなくて………優しさはあるな。

「ホリンは可愛いな。」

彼女がいてくれて良かった。

彼女だけではないけれど、改めて思う。
思わされてばかり。

「ん〜、ズルいなあ、アルム様は。」

オレの何がズルいのだろうか？

ああ、でも”誰か特定の者を選ばない”という事ならズルいかもな。
正しくは選ばないんじゃないかと、選べないんだがな。

「アルム様〜！遅いですよ〜！」

オレが遅いのではなく、ミリイ達が早いんだが……。

先に行くミリイ達が口々にオレの名を呼んで手を振っている。

「ああ、もう大声で呼びやがって、目立つだろうが。」

オレは頭を抱える。

「大声で呼ばなくても、もう目立ってますって。」

前言撤回したくなるぞ、ホリンよ。

「それを言われると、余計に滅入るんだが？」

「あははっ。」

笑って誤魔化すなよ。

ああっ?!道端のお婆さんに拝まれてるっ?!

勘弁してくれ。

「全力で皇子という身分を隠して歩きたかったんだけれど。」

「ミリイだけならともかく、ミランダまでとは・・・相当、浮かれてる。」

それだけ、皆で外出とかしたかったんだらう。

「・・・つまり、自業自得・・・か。」

「今度から仮面でもつけて外出しようかな・・・いや、余計に目立つか。」

トツゼン二者択一も困りモノというコト。

「しかし、どうにも困ったな。」

なにか、今日一日ずっと同じ事を言っているような気がする。

・・・気じゃないな。

目立ちまくって城下を一回りさせられた後、ようやく解放されたオレは現在、自室で着替えの用意している。

よくよく考えてみたら、稽古とか土木工事とか汗だくになる事ばかりして、すぐにアイシヤ姫と面会、外出。

別に綺麗好きというわけじゃないが、流石に入浴ぐらいはしたくない。

普通なるよな？

周りに女性陣が多いから、こういふところは気を遣わないと。

「さて、今回はどうするかな。」

オレの脳ミソは、基本的に生命の危機に片足を突っ込まないと目覚めてくれない傾向があるもので・・・。

「そこは私も聞きたいところだな。」

かけられた言葉に溜め息を一つ。

「さしあたっての問題は、どうして皆、許可を取らずに突然入ってくるか、かな。」

せめて一声。

そう毎度毎度思っているし、口にも出しているんだが・・・。

「そういう人間が好みなのか？」

「あ??」

皆の集団から一歩離れた位置で無言で何時も様子を見ているラミア。

彼女は街に出た時も、やはりそうだった。

「ああいう、お淑やかな姫君が好みなのかと聞いたんだ。」

「ラミア・・・。」

部屋の片隅の壁にもたれかかったままで、声を荒げる事もなく、何時もより静かに口に出す。

それにしてもアイシャ姫がお淑やかねえ・・・彼女が武器を手にした途端に豹変するという事を皆は知らないからなあ。

一人、苦笑してしまう。

「何がおかしい？」

おっと、今はそれどころじゃなかったな。

「いや、別に。ラミアこそどうしたんだ？」

彼女がオレに刺々しいのは今に始まった事じゃないけれど、今日はそれとはまた違う。

「先に質問したのは、私だぞ？全く・・・。」

呆れたように壁と背を離し、俺に近づく。

「オマエは一体、何がしたいんだ？」

彼女の言葉にオレは答えない。

答えられない。

「我が森からずっと、オマエを見てきた。」

ああ、出会いは最悪だったな。

「それからオマエは、本当に色々と変えてきた。」

「すぐには全部変わらないと思うけどな。」

人の偏見や先入観はそう簡単に変わらない。

オレも以前と変わらずダメ皇子、もしくは皇太子の劣化代替品のままだ。

「それでも、その・・・なんだ、努力はしている。それは認めよう。」

「もっと言い方はないのか？」

ホリンといい、ラミアといい。

まあ、でも誰とも知らない他人に評価されるよりはいいな。

「ただ少し、急ぎ過ぎとは思う。」

残り時間がどれだけなのか判ればいいんだがな。

まあ、人間なんて何時かは死ぬんだ。

ただそれまでに多少なりとも残しておきたいものだった。

「ラミア達と違って、オレ達は意外と寿命が短いんでな。」

冗談にしてはどうかと思うが事実だ。

「だからか？」

ん？

「だから、人間の姫君でお淑やかで・・・あ、あんな胸だけデカい女を選ぶのか?!」

・・・はい？

今の会話の流れで何故そうなる？

というか、胸は関係あるのか？

確かに大きいけど、胸だけなら正直シルビアの方が大きくて美しい。

あれは魔王だから。

ではなくて・・・。

「あの、ラミア？」

「何だ！」

キツとオレを睨む、このラミアの鋭い視線も慣れてきた。

「寿命が近い人間だからじゃないよ。」

そもそもオレが選んだわけじゃない。

「彼女はオレの国の役人が候補にただけだし、別に、その、胸で選んだわけでもない。」

そこはそこで、色々と大事な点ではあるが。

「そうなのか？」

未だにオレを睨んだままのラミアにオレは溜め息をつく。

「人間だから、エルフだからで、オレは区別なんかしたりしない。

それはラミアだって知っているだろう？」

オレは彼女の頬に手を添える。

「それにラミアだって負けないくらい綺麗だよ。」「なっ?!」

彼女達の肌はとても美しい。

肌を除いても、彫が深く目鼻立ちがはっきりしていて、瞳も髪も素敵だ。

「大体、彼女は確かに姫君かも知れないけれど、ラミアだって姫君じゃないか。」

彼女だって、ダークエルフという一族の姫だ。

規模はこの際、関係ない。

「そ、そうだな！」

突然に大声を出されて、オレは思わず手を引っ込める。

ちよっぴり残念そうな顔をするラミアの態度は良くわからんが、人を驚かすのは勘弁して欲しい。

「相手も姫、それは私も同じだったな！」

規模は別としてな。

「ああ……。」

賛同はしておこう。

間違っではない。

「そ、そうだな！うむ！」

何か一人で納得していらっしやる。

ちよっと大丈夫かと心配。

「つまり、まだという事だな！」

「い？いや、何が？」

始まったよ、極端から極端に走るダークエルフの特性（？）

「よくわかった！」

だから、何が？

「とこでアルムはこれから入浴か？」

「ん？ああ。」

そうだった入浴する為に、一度この部屋に戻ったのを忘れていた。

「ふむ。どうだ？たまには、わ、わ、私が背中を流してやるうか？」

「たまにはも何も、今まで一緒に入った事なんてないだろう。」

それだけは全力で回避してきたからね。

あと着替え。

「そうか……ふむ。なら、どうだ一緒に？」「却下じゃ。」

「何故だ？」「却下じゃ。」

この押し問答にすらならないやり取りは、数十分程繰り広げられたのだった。

チよりも濃く温かいつてト。【前】

コンコンと部屋の扉を叩く音で、オレは意識を取り戻した。

・・・どうやら、少し眠っていたようだ。

あんだけ騒いだから入浴すれば、そうなるよな。

夕食もとって満腹だったし。

「どうぞ。」

ダルい身体をなんとか起こし、許可を出す。

このやりとりをする人間自体が少ないのが悲しいとろだが、大体の人物が想像出来るのも確かだ。

「アルム様・・・。」

「どうしたミリイ？あれ？オリエも。」

部屋に来た二人は夜着姿。

・・・夜着姿つてアレだよなあ。

「・・・オリエ、おいで。」

どうしてなんだろうな・・・。

どうしてオレだったのだろう？

そう思っていると、無邪気にオリエが布団に入ってくる。

何故と考えてたら、オリエも同じか。

「アルム？」

心配そうに見つめてくるオリエの頭を撫でる。

「ねえ、オリエ。オリエにお願いがあるんだ。」

今、オレは罪悪感よりも、彼女のこれからの未来が楽しみで仕方がない。

彼女が一体、どんな女性に成長するのか。

「オリエ、自分の力を嫌いにならないで欲しい。」

何故、自分がこんな力を持ったのか。

望んで手に入れたわけじゃないのは、オレもオリエも同じ。

「その力があつたから、オレは助かった。それを含めてオリエなん

だよ？」

否定し続けるだけでは、何も生まれない。何も変わらない。

痛い程、それは理解させられた。

「だから、嫌わないであげて。何時か、その力が大切な人を守る為に必要になるかも知れない。」

無言のまま、オレを見続ける灰銀色の瞳。

「オレを助けた時みたいに。」

どう足掻いても、逃げて、付き纏うというのなら受け入れるしかない。

「・・・わかった。アルムが言うなら、ガンバル。」

受け入れられたのなら、絶対見える景色は変わってくる。

「ありがとう。」

オレはオリエを抱きしめる。

「愛しているよ、オリエ。」

惜しむらくは、成長を見守る時間がオレに残されているかどうかだけれど・・・。

「ん？勿論、ミリイも好きだよ？」

「なにか・・・ついでに言われただけな気がします。」

ぶーっと頬を膨らますミリイ。

やっぱり、オレ、何処かの国の王族みたいの後宮作って云々とか絶対出来ない。

円滑な運営とかどうやってんだか、謎だらけ。

「そんな事ないよ、ミリイも可愛いよ。」

嘘はついていない。

「ん、じゃあ、アイシャ様と比べてどっちがです？」

そう来ますか。

「比べる基準にもよるが・・・。」

胸とか美人度、生まれだったら、今の社会じゃどう見てもアイシヤ姫の方が評価されるだろう。

「断然、ミリイだな。」

別に機嫌を取っているワケじゃないぞ。

「・・・それは・・・どういう基準なんですか？」

前置きとして述べた言葉が引っかかっているのか、頬を膨らますのを止めたものの、機嫌は直っていない。

「相手がオレの事をよく知らないっていうのもあるけど、ミリイはオレの全部を認めて受け入れてくれそうだからかな。」

外見は一切関係ない。

いや、ミリイも充分可愛いし、ちまっとぼちゃっとまとまった身体つきも嫌いじゃない。

「それに・・・。」

「それに？」

「ミリイとなら、一緒に故郷を見に行きたいと思えるから。」

些細な約束・・・というか、誘い。

「あ・・・。」

本当に些細な事かも知れないけれど、今はその約束を果たせるように精一杯生きていられる。

生きていこうと思える。

そう思わせてくれたミリイは、やっぱりオレを構成する一欠片ってコトなんだよな。

「うん、ありがとうミリイ。大好きだよ。」

オレは傍で既に寝息をたてはじめたオリエに布団をかけ直し、ミリイを招き寄せる。

「何時か、オレのやりたい事、成したい事が終わったら、行けるといいな。」

約束しきれない事が辛い。

「はい、楽しみにしてます。」

ミリイの笑顔が痛い。

「オレも楽しみだよ。」

彼女のように素朴で自然があふれた故郷。

うん、いい所だろうな・・・。

「それまでずっとお傍に、それからだってお傍にいますから。」
ぎゅっとオレの夜着を掴む。

彼女は彼女なりに、オレの変調に気づいているようだ。

全く、ダメ皇子だな、本当。

変わり映えというか、学習能力低いんじゃないか？オレ。

「ああ。おやすみ、ミリィ。」

抱き寄せた彼女は、オリエと同じくらい温かかった。

「おやすみなさいませ、アルム様。」

オレは自分の両脇にある温もりと一緒に眠りにつき・・・。

・そして”夢”を視た。・

チよりも濃く温かいつて」ト。【後】

波。

蒼い波。

蒼と蒼がぶつかり合つて、白く泡立つ。

泡立つ波と同じ白の砂浜。

ふと、顔を上げると誰かが手を振っていて……。

「あ……。」

振り返そうとした所で、見慣れた天井とご対面。

「……夢か？」

それにしては、酷く鮮明で生々しい。

「つて……オレ……。」

思わず、目の下の頬の辺りを指で拭う。

「泣いていたのか……？」

何故？

自問自答したくなるが……わかっている。

「アレが、君の故郷なのか……」トウマ。」

そして手を振る人間が、きつと大切な人。

「悪いな……まだ時間が欲しいんだ。」

どうなるかわからないという不確定事象は不安を生んで当然だ。

でも……。

「まだ残しておきたいモノがあるんだ。」

それがある以上、やりきらないとな。

さしあつては……。

「やっぱりアイシャ姫の件か。」

うまく断るには如何したものかね。

とにかく、さつさと着替えて朝食を摂ったら会いに行くか……。

「全く……困ったもんだ。」

オレは横で、捲くれ上がって下着とお腹を丸出しにしているミリ

イの夜着の裾を直して寝台を出た。

「ふふつ。」

無邪気に眠るミリィとオリィを見て、思わず笑みがこぼれる。

大丈夫。

オレはまだ笑えている。

そう自分に言い聞かせて・・・。

広間に行くと朝食は既に用意されていた。

「アルム様と一緒に寝ると、なんかすっごい眠りが深いんだよねえ。」

「

一人で広間に来たオレを見つけたホリンは、事情を察したのか苦笑する。

「確かにそうですねえ。」

賛同するシルビアを横目にオレは、無言で席についた。

「またその話？前にもそんなような事を言っただけだったか？」

何だっけ？

匂いかどうか。

オレ、危ない薬じゃないけれど、そういう成分発生させているのかと思われるじゃないか。

「み、皆さんは・・・アルムお兄様と寝所を共にしているのですか？」

何故、そこで赤面してどもるよ、サアラ姫。

「うん・・・。」

ぐるりと周りの面々を見るホリン。

視線が合った者は皆、目線を逸らしていく。

「うん、皆、一回は。」

あからさま過ぎるゾ、皆。

「つ、つまりは、私・・・だけ？」

「うん、ラミアさまは違いますよ・・・ね？」

で、何故、オレに聞く？

いや、オレと一緒に寝台に入ったかどうかだから、オレに聞くのが

一番手っ取り早いんだがね。

「あ、うん、そうだな。」

ある意味では唯一、裸体を見た事があるのでアレだが。

「あれえ〜？何でそこで赤くなるんですかあ？まさか……。」

「まさか、何だよ？」

腕を組んで考え込むホリン。

「城でないとする……森で致しちやいました？」

はひ？

「そ、そうなのですか？！」 「なわきやないだろ！」

それどころか、今まで侍女である彼女達と抱いた事はない。

「本当ですかあ？」

ホリンがニヤニヤと笑いながら、にじり寄って来る。

「ない。少なくともオレからは絶対にしない。」

「絶対に？」

きょとんと不思議そうな顔をして、ホリンは首を傾げる。

「侍女である皆にオレからって、身分を考えたら拒否出来ないだろ

？そんな無理矢理なのか愛情なのかわからないなんて嫌じゃないか。

「

これも一つの本音だ。

もう一つは世継ぎというか、オレにこの血を残す気がないというコト。

兄上の子と争いになるのも嫌だし、入れみたいな地位で惨めな思いをされるのも嫌だ。

いや、オレの場合は惨めじゃないぞ？

第一、兄上がああ完璧超人だから、惨めも何も爽快な程に負けを受け入れている。

何よりさ、やつぱり”裏切り者の血”は残したくない。

「も〜、アルム様ったら誠実なんだからっ。」

指でつつんとオレの頬をホリンがつつく。

一体、何をしたいんだが。

「では、アルム様は身分の差を気にしないと？」
珍しくレイアが口を挟む。

「オレが一度でも、自分の為だけに身分を振りかざした事、アル？」
「……………ないです。」
「だろ？」

「あらあゝ？」 「今度は何?!」
いい加減、この話題から離れたい。
というか、引つ張り過ぎだ。

「ご自分からというのが問題なら、私達側からお誘いすれば問題ないという事ですね？」

「あ？」
「なーんだ、そうなんだ。」
納得するなよ!

「いや、そういう意味で言ったのではなくて……………」
「私みたいな粗忽者そこつものでも構わないのでしょうか？」
期待に満ちた眼差しをレイアから向けられている気がするのデスガ……………」

「これはあゝ、お姉さん組としては今夜に備えて大忙しですねえ」
「ミランダさん？」

「て、お姉さん組って……………」
二人同時に相手をしると？
「じゃなくて！」

「私とアルが…………アルと……………」
ああゝ、もうミランダは手遅れだな、アレ。

「…………今日は絶対一人で寝よう…………って、サアラ!鼻血!鼻血
出てるっ!!」

「え?あ……………」
呆けたまま自分の鼻をこすって、口の周りまで血まみれになるサアラ姫。

「ホリン!何か拭くモノ!」

「あはは、了解。」

笑い転げるように布巾を取りに行くホリンだが、君が原因の一端だと自覚して欲しい。

「全く、困ったものです。」

「て、レイア？君も顔真っ赤だよ？」

呆れた表情をしたレイアも頭の中では何を想像したのやら。

「楽しみですわ。」

「シルビィ、いい加減にしないで。」

朝から騒々しいっいたら、ありやしなかった。

リンジンは秘密を知っているという口ト。

「どなた？」

扉の向こうから聞こえてくる声に多少緊張する。

「アルムだ。」

心なしか声が上がってないか？まあいい。

「どうぞ。」

許可が出て・・・自分の城なのに許可とか不思議なカンジだが、部屋に入るともはや見慣れたと言っても過言じゃない真紅が目飛び込んでくる。

「今日はどのような所へ案内させて下さるのですか？」

にっこりと微笑む長身の女性。

そういえば、彼女の方が年上だったんだよな。

「今日はちよつと話そうと思ってね。」

しっかりと向き合ってな。

「そうですね・・・。」

アイシャ姫はそう答えると、人払いをした。

二人つきりというのも何か、変に緊張する。

「お話というのは？」

「ここに来て真剣な話と言えば、一つしかないだろ？」

天然なんだか、計算なんだが。

「はい。ですから、理由を伺おうかと。」

「はあ・・・聡いと言えはいいのか？これは？」

「断るのはわかってるんだ。」

「政略結婚だから。というのは嫌ですよ？何しろ、くちづけまでした仲ですもの。」

「ぐっ。」

「忘れたい記憶を・・・。」

忘れられる程、軽い印象じゃないけどさ。

「あれは”トウマとした事だから”と、仰られたら、私、泣いてしまいますわ。」

「流石にそこまでは言わないよ。確かに政略結婚は嫌さ。皇族のクセにと思われるかも知れないが……。」

だから余計になんだよ。

「第二皇子との婚姻なんて、貧乏クジの何物でもないだろう?」

将来性なんて言葉皆無に等しいし、兄上を害そうなんて考えも微塵もない。

寧ろ、その方が国全体にとっての損失だ。

「立場や権力的なものでしたら、そうかも知れませんが……お忘れですか?」

「?何を?」

「私、元は貴族の末席出身ですから。」

言ってたな。

「だから、別に興味はないと?」

オレの呆れたような口調の質問に、頷くアイシャ姫。

政略結婚なんて、婚姻が成立すれば目的は達しているようなもんだし。

第二皇子のオレ相手じゃ、世継ぎがどうっていう事もない問題なのだろう。

「じゃあ、君の真意は?」

それを無視してしまつたら、結局同じだ。

「最初は戸惑いましたけど……知らない仲ではないので……。」

くちづけをした仲は知らない仲とは言わない……よな、うん。

そこは間違つてない。

「それだけで割り切れる?」

女性は結構、そういうところが現実的ではあるとは聞いた事があるもの……。」

「少なくとも、退屈しないで済みそうですもの。」

ああ……彼女の笑顔に軽い目眩いが……。」

思わず身体を近くの壁に預けて一息つく。

彼女自身、結構軽めに言っているように感じられるが、実際、現実的にはそんな軽い事では済まない事柄だ。

自分の人生を左右するどころか、先々まで決定してしまう事なんだし。

「そうだな・・・。」

そういう事柄なら、尚更。

オレも断るなら断るで、誠心誠意対応しなければならぬ人として当然の礼儀だろう。

「オレは・・・確かに政略結婚は想いが伴ってないから嫌だし、世継ぎも望んじやいない。」

きちんと話そう。

彼女の目を見て。

オレは一度、彼女に大きな嘘をついた。

だから、どう取り繕おうが、何度嘘をつこうがもう変わらないのかも知れないけれど。

でも、もうこれ以上はゴメンだ。

「でも、それだけじゃない。オレは自分の国に愛着なんて持つてなくて、寧ろ猜疑心を持っている。」

核心になる事全てを言う事は出来ない。

恐らく信じてもらえないだろう。

第一、立証しようにも見せるべき証拠がない。

物証の一つになるだろう剣もないし。

「街を見る限り、そんな風には思えませんでしたわ。」

「民に罪は無いし、愛着がないとは言っていない。皇室にとって意味さ。」

兄上は確かに例外だが、もし邪魔をするなら・・・そういう覚悟はある。

「そして・・・恐らくけど・・・。」

口に出すととなると、やっぱり怖いな・・・。

「多分、オレに残された時間は・・・そんなに多くないから。」
前例があるわけじゃないから、果たしてそれがどいう結末になるのかはわからない。

反発して、消し飛んである日突然に絶命するのか。。。

トウマの魂の方が強いから、オレだけ消えてトウマに身体を残せるという結末が一番いいとさえ思える。

「・・・ご病気なのですか？」

曇った表情を見るのが辛い。

「そういう顔をされるのが嫌だから、二人だけの秘密だよ？」

シルビアとオリエは気づいているかも知れない。

心が読めるみたいだしな。

何も言わないところを見ると、気を遣わせているのかも。

「だから、婚姻はしない。残された時間は全て、民とオレの周りに居る人間の為に使う。残せるモノを一つでも多く残す為に。」

証。

そんな大層なもんじゃない。

誰からも期待されずに鬱屈した日々を送ってきたオレの悪足掻き。
勿論、それは盛大なモノに・・・。

又ける皇子は可愛らしいって」ト。

言うだけ言って、一人で勝手に・・・本当、勝手だがスッキリしたオレは、自分の現状も再確認。

そのせいか、一日の仕事も思った以上に捗った。

もつとも、今のところは何も問題なく順調に運んでいて、オレはその報告を聞くのと、今後の騎士団員選抜会（仮）についての打ち合わせの仕事くらいしかなかったが。

「しかし、カーライルの部下達は仕込みがいいよなあ。」
「思わず感心。」

「それは、自分を含めて褒められているのでしょうか？」
書類に目を通しながら、何処か訝しげに反応する。

「オレのような異分子が入っても乱れる事なく公務を行ってるしな。」

「それが仕事ですから。」

「いや、うん、まあ、そうなんだが・・・。」

ちよつと論点がズレてる気が・・・。

「何か？」

「いや、うん・・・。」

はつきりしないオレにカーライルは、読んでいた書類から目を離して俺をまじまじと見る。

「いきなり太守が更迭されて、オレみたいな若造がしゃしゃり出て、こんな事になってさ。」

「本当ですね、大忙しです。でも、ただの若造ではなかったんで、部下達も色々と刺激されたのですよ。」

「まあ、一応は皇子だしなあ。ん？」

カーライルが口を抑えて震えて・・・る？

何、アレ？

「くくくつ。いやはや、アルム様は過小評価がお好きなのですな。」

目尻に透明な液体を滲ませてカーライルが微笑む。

「そんなに笑うコトか？」

「どうやら、今の何かがドツボに嵌ったらしい。」

「うん、カーライル、読めんヤツ。」

「いや、失礼。アルム様が余りにも可愛らしいので。」

「何だ、ソレ。」

真顔で冗談言われても面白くもなんともない。

「どちらかというと気味が悪い。」

「・・・言い過ぎか？」

「しかし、能力のある者があまり謙遜し過ぎると、それは嫌味に
かなりませんよ。」

目尻の涙をようやく拭うカーライル。

「本当、一体、何がそんなに面白かったのか。」

「謙遜も何も、オレは今まで、自分が誰かと比べて優秀だと思っ
た事はないぞ？」

「皆、何処かしら長所があつて、短所があるのは当然で、オレ自身
も例外ではないと思つている。」

「それが他より抜きん出てるかはまた別の話だと思つし。」

「でしたら、自分の部下達は皆、クビになつてしまつても知れませ
ん。」

「それこそ過大評価だ。」

「大げさ過ぎる。」

「いいえ、それくらいアルム様の行く政事は皆に持たせるのです。」

「持たせる？」

「ええ、それが夢だったり、期待だったり、希望だったり。人それ
ぞれです。」

「重圧だな。」

「いや、それが先頭に立つて政事をする、皇族の本当の責務なのか。」

「それすらも謙遜なさるなら、証拠もありますよ？」

「そう言つと、カーライルは先程まで自分が目を通していた書類の

束を投げて寄越す。

カーライルにしては扱いがぞんざいだ。

「……………何だコレ？」

人名と所属が書かれた表がズラリと……………

「復職願の一覧です。」

「復職願？」

つまり、これは州府に以前勤めていた人間達か？

「スクラトニーに罷免された者、悪政に耐え切れず辞した者、更に一度引退したご老体までも。」

苦笑するカーライルに対して、どう反応したら良いのかオレには全くわからない。

「時の流れは誰しにも平等だからこそ、人は未来に不安を持ちます。」

「困惑。」

恐らく困惑の表情を浮かべていたのだろう、カーライルは更に補足していく。

朗々と演説するかのよう。

「しかし、未来のある一点に小さな希望があったのならばどうでしょう？」

「人は、そこに邁進してゆく。」

無言の頷き。

結局、遅かれ早かれ、人は死ぬ。

本当のオレの生は子供の頃には終わっている。

人より少し早かっただけ。

でも、皆にはまだ先がある。

「結局、何が残せるかは、如何に日々をより良く生きていくかって事か……………」

皆がそう思うようになってきた結果が、オレの手の中にある。

大切な想いの結晶。

「解に至る道は常に自分の周りに見え隠れしていて、私達を嘲り通

り過ぎようとしている。」

「何だ？」

「自分の師の教えの一つです。」

「どうやらカーライルにも内政の師がいるらしい。」

それはそうだ、彼にだって先輩官吏はいただろうし、新任時代だつてあつてもおかしくはない。

あ、カーライルの新任時代つて、想像すると笑えるかも。

いきなりこの無愛想さでも扱いに困るよな。

「カーライルの師つて人も会つてみたくはあるな。」

「自分はもう二度と会いたくはないですが・・・ああ、今なら腕力で勝てそうだから、アリですね。」

・・・なんとというか・・・きつと、オレとバルドみたいな関係なんだろうと容易に推測出来る。

悲しい。

「ともかく・・・だとしたら、これはオレの新しい宝物だな。」

その新たにオレを支えてくれる存在に心から感謝した。

ルイショウは想いを焦がすというコト。【前】

カーライルが持て余していた復職願の名簿は、本当にオレにとっての宝だった。

来るべき官吏の試験。

それに合格した者達への教育係に熟達した文官は最適だった。カーライルが自分の師の話題を出したお陰だ。

武官も同じようにレイアやバルドの補佐についてもらう事に。更にリツヒニドスに置く学舎の教鞭を取る人材にもなる。

この事をカーライルに提案すると、ニヤリと笑って颯爽と部屋を去って行った。

恐らく打ち合わせに行っただろう。

何という身軽さだ。

「民は国の宝也つてな。」

皇族なんざいなくとも、一定以上の教育水準があれば国は成り立つであろう、いい証拠だよ、全く。

その後は上がって来た報告書に確認の署名をし続けた。

自分の名をあんな回数書いたのは初めてだ。

早々にその認印を製作・登録しないと大変だというのは理解した。「じゃないと、そのうち剣すら持てなくなりそう……。」

利き手を揉みながら、寝台に倒れ込む。

そういえば、あれからオレの知らない言語が浮かんでこない。

まだ大丈夫という事だろうか？

「ああ……。」

また落ち込みそうになって、寝台の上でもぞもぞしながら瞼を閉じた。

部屋の明かりは既に落としてある。

身体がゆっくりと沈み込むカンジ。

……落ちそう……。

「うぁ……。」

次に呻いた時には、外も室内も完全に真っ暗で、明かりといえば窓から微かに入る光。

何時間経ったんだろう？

完璧に寝てしまったらしい。

誰も起こしに来なかったのだろうか？

また気を遣わせてしまった……？

「……誰？」

気配がする。

そのせいで意識が覚醒した……のか？

ピクリと動いた気配は、ゆっくりと横になっているオレに近づいて来る。

外からの光にうつすらと身体を照らされて……。

「ホリン？」

月光で照らされても尚、黒い肌。

あれ？

でも、ホリンはあれでも扉を叩いてから部屋に入ってくる派……。オレの声に僅かに反応したソレは、突然寝台に飛び込んで来て、素早くオレの上に馬乗りになり肩口を押さえつける。

「コラ、冗談にも程があるぞ。」

仮にも、だ。

主従関係というものを多少は持つて欲しい。

「冗談のつもりはない。」

ホリンよりも低い声……？

「て、オマエ、ラミア……？」

そういえば体格もホリンより一回り大きい。

薄布のような合わせ一枚を纏い、腰の辺りを帯で留めたラミア。心なしか表情は暗く悲しそうにも見える。

「なにやっつてんだよ、オマエ。」

半ば呆れたオレは、相手の正体も判ったせいとかぐつたりとする。

「そんな顔をしないでくれ。」

薄暗さの中で、オレはラミアの表情を判別しにくいというのに・
・ダークエウルフは夜目が利くんだっけな。

少し不公平だな、オイ。

「アルム……。」

「何だよ？」

大方、誰かに何かを吹き込まれて……。

「いいから、私を見る。」

片手でぐいつと顔をラミアに強制的に向かせられると、彼女は自分の身体をまさぐりながら、ごぞごそと。

衣擦れの音と帯が解かれていく音。

「ちよつと待て！何を考えてんだ、ヲイ！」 「いいから黙っていろ！」

暴れようとする俺の身体に膝をつき、力を力で押さえ込まれる。

全力で跳ね除けてもいいんだが、暗くて周りに何かあるのかわからん。

うっかり怪我でもさせたら大変だ。

「アルム……私を見てくれ……。」

もう一度、衣擦れの音がして、柔らかな光に照らされたラミアの肌が露わになる。

艶かしく光っているようにも見える黒い肌・胸に、花の蕾のような頂。

「お願いだ……ちゃんと、私を見てくれ……。」

自分を見るという二度目の声、懇願。

視線を外そうにも、身体全体で主張された美しさに吸い込まれてしまふ。

「一体……どうしたんだよ。」

酷く渴いて張り付いたように上ずった声が漏れる。

オレは正直……かなり混乱している。

そうに違いない。

「・・・わからない。」

返ってくる声も頼りなく、空間に彷徨って消える。

「は？」

「・・・わからないんだ。」

次の声は更に頼りなく、迷子の子供のようだった。

ルイシヨウは想いを焦がすというコト。【中】

「ラミア……。」

「どうしたらいい？アルム、私はどうすれば……。」
泣いているのか？

「最初はいけ好かないヤツだと思っていた。」

「ん？」

突然に。

話すというより、思いついた事を言っているだけ。
そんな風を感じる。

「オマエが言い出す事は全て心地よい理想だと思っていた。」

否定はしない。

理想は理想。

しかし、理想を実現する努力をしなくなった者の進歩はそこで止まるのをオレは知っている。

「でも、オマエはどんな色んな事をしていって……オマエの周りにはどんな人が集まって……。」

その正体が何なのか、それはオレにとっても不思議現象だった。

オレの事を良く知っているミランダならまだしも。

何故、オレの周りに人が集まるのか。

答えの一つが、今日のカーライルの一言だった。

「何時しか私もそれを見ているのが楽しくなった。」

” 未来への希望 ”

例えそれがどんなにちっばけなモノだとしても生きていると実感出来る何か。

オレの今の生はそれ求めていたのかも知れないと、今は思う。

「でも……私の居場所がどんどん無くなっていく気がして……。」

「

「そんなコトは……。」

「そうこうするうちに、オマエの婚姻相手とかいうのが来て・・・。」

「あのなあ、彼女は・・・。」 「そうしたら！」

「一際、大きな声上がる。」

「胸が痛くなつて、どうしたらいいかわからなくなつて、こんな・・・初めてだ・・・。」

「オレは・・・この状況を・・・彼女にどんな態度を示せばいいのだろうか？」

「子供のように泣きじゃくる彼女に。」

「私とあのオンナと何処が違う？この黒い肌がいけないのか？どうすれば私はオマエの傍にいられる？見続けられる？」

「ホリンとラミアの違い。」

「オレはそれを今、目の前に突きつけられたような気がした。」

「そして、オレとラミアの違いも。」

「それは、他者に必要とされず、省みてもらふ事のない疎外感や空虚感。」

「そんなモノに一度も浸された事がないという・・・。」

「ラミア、それは違うよ。」

「オレは子供・・・オリエに言い聞かせるよりも優しく語りかける。」

「目の前の彼女が壊れてしまわないように。」

「オレは肌の色、種族の色で区別はしない。」 「でも！」

「オレが一度でもそんな素振りを見せたか？そりゃ、確かに種族の壁はある。」

「現に一度出来てしまった先入観を拭い去るには時間が必要だ。」

「実際、肌の色や耳の形など目に見える差異がなくなるワケでもない。」

「オレは、黒い肌は美しいと思つてる。」

「大体、美的感覚は人それぞれだし、美の概念なんて、時代や風土文化で千差万別に変化するものだ。」

「それと・・・アイシャ姫の事だが、そもそも最初から断るつもりだからな？向こうにもそう言つてある。」

「え？じゃ、じゃあ……。」

急にうろたえ出したな、少しは冷静になつてきたか？

「オマエの早とちりじゃ。」

コツンと彼女の額を叩くと、はうつと声を上げて押さえる。

「ちなみに今のところ、次の候補とかはいないからナ。」

ここまでくると、不謹慎だが笑えるな。

実に不謹慎だ。

「……でも、嬉しいよ。」

オレはラミアを引き寄せ、その裸体に一番薄い掛け布を被せてやる。

「あ、あの、アルム？」

「今度は何だ？」

オレに覆い被さるような格好で抱き寄せられた形のラミア……何だか照れる。

「私はオマエの傍にいていいのだろうか？」

「何を今更。」

それは逆だ。

オレが皆にいてもらっているんだから。

こんな何も持たなかった、持とうとしなかったオレの傍に。

「好きなだけいたらいい。決めるのはラミアだよ。」

傍にいたいと思われような存在でいたい。

居続けたい。

「うう……む。」

歯切れ悪くオレの胸の上で唸るラミア。

「あのなあ、もう今更あんだがら、言いたい事は全部言っておいてくれ。」

またこんな風に突拍子もない行動に出られても対処に困るし、心臓に悪い。

いいか？

今のオレ、かなり余裕なんてないぞ？

「言いたい事というか……。」

黙り込んだ数呼吸後……。

「はっんむうっ……。」

ラミアの唇がオレの唇を塞ぐ。

本当に……唐突だ。

「私は、オマエが欲しい……のかも……知れない。」

最後はかなりの尻すぼみだ。

「断言できないのに、こんな事するなよ……。」

「う……すまない。」

謝るのかよ……。

「全く……。」

呆れて物も言えないが、が、可愛いとも言える。

きつと恥ずかしいやら、何やらで互いに顔が真っ赤になっているだろう、ああ、だろうさ。

というか、この状況で相手の顔がはっきり見えるラミアってズルくないか？

「アルム……その、なんなら……最後までしてもいい……ぞ。」

激しく矛盾していないか？

人に見ると言っておきながら、オレから顔を逸らし耳元で囁くなんて。

「オマエなあ……。」

断言出来ないクセに……。

断言出来ない状態なのは、オレも同じか。

「む……すまん。」

だから謝るなっつての。

オレの方が悪者みたいで恥ずかしいじゃないか。

「……その、今日は、ここで寝ていいか？」

……断ったら、オレ、完全に悪者だよな？

「お好きにどうぞ。」

色々と反応してしまいそうだったが、身体は思ったより疲労していたようだ。

これなら、変な事を考える事なく眠りにつけそう。

「・・・ホリンの母君もこんな気分だったのだろうか・・・。」

ラミアのその呟きにオレはあえて答えない事にした。

ルイシヨウは想いを焦がすというコト。【後】(ラミア視点)

うつすらとした明かりが差し込む。

少し霧がこめるこの地方特有の朝。

目覚めて何時もと違う感触の為に、はたと思考が止まる。

珍しくうつ伏せに寝た胸が苦しい。

少し弾力のある固さ。

「あ……。」

私の右半身の下に重なった人影。

そうだった、昨夜はアルムの部屋で寝たのだった。

「改めては思い出したくないな。」

我ながら直情型だとは思っていたが……今回は酷い。

自分でも落ち込む。

「だが。」

安らかな表情で眠っているアルムを見ると、悪くはないな。

そついう想いが浮かんでくる。

これは一晩を共にした者だけの特権というヤツか。

「悪くない……ところで、重くないのか？」

私は背が高い方だから、それなりの重さがあるはずだが……。

そつうだな、あれだけの速さで動けるのだから、この程度重くはないのだろう。

自分の武を主張したがる我が一族の男達と違って、アルムはそついう自分を見せない。

見せたがらない。

だからこそ、普段のあのマヌケ面がアルムそのものと思いがちになる。

だが、アルムは相当強い。

実戦に即した強さだ。

それは私を集落で助けたあの時に目の前で見ている。

「・・・見られたな。」

思えば、あの時に私の裸は見られているのだが、今回の事は今更ではないか？

とは言え・・・。

「やはり恥ずかしい。」

男の寝所に深夜忍び込んで、全裸で、しかも馬乗りで迫るなんて。

「オマエも悪いのだぞ？」

アルムの黒髪を撫でる。

アルムは私の、私達の肌を美しいと言うが、アルムの黒髪だって綺麗だ。

漆黒の髪と瞳は、時折吸い込まれそうな夜の闇を彷彿とさせる。

「ふふつ。」

撫でているうちに笑みがこぼれる。

妹のサアラ以外に、頭を撫でるのが楽しいと思ったのは初めてだ。

ん？

アルムの黒髪の中に数本。

左前髪に色の違う髪がある。

白髪か？

我が一族にはない現象だが、人間は老化の過程で頭髪が変色する者がいると聞く。

「白くはなくても白髪というのだろうか？」

白髪というくらいだから、色が抜けた白だとばかり思っていた。

これは・・・金か？

確かアルムの一族は、金の髪に蒼の瞳の者が多いと聞く。

これは・・・もしや、ちよっとした”私だけの”新発見かも知れんぞ。

何やら、楽しいではないかつ！

一緒に寝て、寝顔を見て、触れて・・・そして、ちよっとした新発見。

それがこんなにも顔が、頬が緩むような事だったなんて！

「ん……。」

突然アルムが私にすり寄りるように寝返りを打つ。

「大丈夫だ、私は逃げたりしないぞ？」

思わず口から出た。

相手が寝ているから言える言葉。

アルムは余りにも無防備だから……。

私も彼を抱き寄せてみたくなる。

つと、私は裸だったか。

寝台の近くに投げ捨ててあった夜着を起きて身にまとう。

アルムはまだ眠ったままだ。

ふと昨夜、私にかけられていた掛け布が視界に入る。

「……これは借りて行くぞ。」

夜着の上から、その絹の掛け布を巻き、なんとなく鼻を近づける。

「アルム、オマエの匂いがするな。」

眠っているアルムの頬にくちづけをして、部屋を後にした。

「あら？」「ん？」

早朝から目がチカチカする真紅の色。

「む。」

確かアルムの妃候補だったな。

「アルムならまだ寝ているぞ。」

肌は白く、髪は輝く金色。

私とは正反対だ。

背の 높さは負けているし、胸の大きさも少し負けている。

少しだぞ！

同じ姫といっても規模が違う。

だか！

今の私には昨夜のアルムの言葉がある！

「あら、そうでしたの。では、出直す事に致します。ええと……

？」

「ラミアだ。」

シルビアに近い間延びしそうな喋り方に軽くイラつく。

「貴女と同じ、アルムの妃候補だ。」

もうこうなったら、勢いしかない。

「まあ?! そうなのですか? お揃いですね!」

・・・何だ? この生き物は?

「ところで、こんな朝早くアルムに何の用だ?」

まさか、私と同じ夜這いか?!

いや、朝だから朝這いか?!

「いえ、アルム様の朝の鍛錬の見字をお願いしてみようかと思いついて。」

「鍛錬の?」

物好きだな。

それよりアルムは、早朝に鍛錬をしていたのか?

どつりで訓練をしているのを余り見かけないと思った。

というより、何故、この女がソレを知っている?

「私も少しは武の心得があるもので。」

にこりと微笑む姿は、外見より幼く可憐に見える。

私とは全く違う・・・。

「そうか。私も多少の心得はある。どうだ? 手合わせでも。」

私には絶対に作れない花のような笑顔。

「それは光栄ですわ。是非。」

ほんつと手を合わせて鳴らし、彼女はまた笑顔を咲かせた。

ラキタら劇的に変わっている時もあるってコト。

ムクリと起き上がった。

ただそれだけ。

昨夜あんな事があつたから寝つきも悪かつたし、色々とヤバかつた。オレだって、健全な男なんだしな。

「ん？ラミア？」

姿が見えない、呼んでも反応がない。

と、なると、この部屋から出て何処かに行った事になる。

まあ・・・流石に恥ずかしいよな、うん。

された側のオレがこうなのだから、する側のラミアはもっと恥ずかしいというコトで。

いや、そう思っていて欲しいと、オレが願っているだけなんだが。そうじゃないと、もう彼女の何処に突っ込めばいいのかわからなくなる。

「・・・ああ、運動の時間が減つたな。」

なかなか寝付けなかつた事が起床時間の遅れを招いた。

お陰で身体を動かす時間が減る。

ただでさえ、最近は議論に次ぐ議論の連続。

署名に次ぐ署名の嵐。

身体を動かせる時間は減少の一途を辿っているというのに。

ともかく身体を完全に起こすべく、寝台から降りる。

「あだっ、あだただだっ！」

身体の骨、特に鎖骨から肩骨の辺りがボキベキと鳴って痛い。

そういえば、ラミアが横？上？にいたままで寝たんだった。

意外に負担がかかってたんだ。

「しかし・・・それもこれもだ。」

オレと長官のせいだ。

女性を責める気にはなれないが、普段と全く異なつた雰囲気になつ

たことは確かだ。

憤りのブツけ所がないのがね、目下の問題。

少しぼんやりとする頭のまま着替える。

「アルム様！」

・・・だから、部屋にいきなり入ってくるなつてのをだな・・・。

「レイア、今日は何？」

息を切らせて入って来るレイア。

そういえば、レイアは騎士団の団長になるんだよな。

オレが、一方的に決めたワケだが。

するとだ、団章が必要か？

兄上の近衛師団の双剣を掲げし獅子みたいな、アレ。

騎士団の形を取っているだけで、余り姿・形に拘っていないんだけど、最低限、所属や身分を証明出来る物を作っておかなければという事は、やっぱり団章は必要になるな。

今更ながら、面倒な事を宣言したものだ。

「大変なんです！」

「大変な時、緊急時は前置きはいらさない。すぐに内容を言うコト。」

情報は早さが命。

特に重要度の高いモノなら、尚更だ。

今と違って、騎士団が出来たら命令系統を使って末端にまで回る時間も考えなければならぬ。

オレが単身でひよいひよい動くのとはワケが違う。

こういうのは、今のうちに徹底しなければ。

「申し訳ありません。」

「いいよ。用件は？」

これ以上やると、本題になかなか入れなくなってしまつ。

別にレイアを虐めたいわけでもないし。

「はい。そ、その、アイシャ姫とラミアさんが、その、お手合わせをする・・・。」

「手合わせ？手合わせつて・・・。」

「ですから、戦闘と言いますか・・・決闘と言いますか・・・。」
「気まずそうなレイア。」

「決闘？アイシャ姫とラミアが？また何で？」

「そこまでは私には。」

「当事者じゃないもんね。しかし、アイシャ姫とラミアがねえ・・・。」

ラミアはあれでも剣と弓というエルフの戦士の基礎は習得しているしな。

アイシャ姫だって、重装歩兵としての修練を積んでいた。

・・・。

「って、ラミアとアイシャが?!」

完全に目が覚めた。

よりによってアイシャとだと?!

皆は知らないだろ、アイシャが武器を握るとどうなるか。

いかん！いかんぞ！

多少なりともラミアが鍛えてるからって。

いや、鍛えているからこそ、アイシャも手加減がしにくい。

もし、あの馬鹿力が炸裂したら・・・。

「何故止めなかった!」

オレの強い口調に思わずレイアは目を閉じる。

「その、正当なる決闘と言われ・・・申し訳・・・ありません。」

何が正当だ!

あのアホども!

「いや、大声を出してすまん。」

今のは人の上に立つ者としてよろしくない。

だったら、自分で何とかしろってオレでも思う。

「場所は？何処でやっている?」

「中庭です。」

なんでそんな目立つ所で始めようとすんだよ。

ああっ、もう!

喋っている間にもさっさと着替えを済ませる。

レイアに見られるのは、この際仕方ない諦める。
後ろは向くけど。

「クソッ！」

オレは傍にあった銀剣一本を握り締める。

腰に下げている暇すら勿体無い。

「止めに行くぞ。ついて来い！」 「はい！アルム様！」

ワカゲの至りにも色々あるというコト。【前】

「間に合ったか……。」

巫人の儒者と一緒にいる真紅の全身鎧のアイシヤ姫。

そして、細剣を腰にさし、軽装の鎧姿のラミア。

「全く二人とも何やってんだか……。」

やれやれと溜め息をついてしまう。

「あ、アルムお兄様……。」

オレの姿を見て、駆け寄って来るサアラ姫の表情も不安げで沈んでいる。

ああ、可愛い顔が台無しじゃないか。

オレは彼女を片腕で抱き寄せ、耳元で囁く。

「大丈夫だよ。」

全く、妹にまで迷惑をかけやがって。

「二人とも、何をしている？」

出来る限りの凄みを効かせて二人を睥睨する。

「見ての通りの手合わせですわ。」

「止めるなよ？」

「止めるわ、馬鹿者。人の城の敷地で何やっとなんじゃ。」

迷惑この上ないです、ええ。

二人とも少しは冷静にオレの身になって、考えてみろってんだ。

「いくら、オマエの頼みでも私は止めんぞ。」

「止めると言ってるだろうが。」

コイツ、何言ってるんだ？

頭に血が上ってるのか？

いや、それはオレも同じか。

「全く、アイシヤ姫もこんなのに付き合わなくても……。」

「こんなのは何だ！」

あー、もうこの際、コイツは無視。

「あら？」

従者に自分の得物を持たせたまま、首を傾げるアイシヤ姫。

何か、この首を傾げる癖を持つ人間って、オレの周り多くないか？

「私がこういう手合わせ、決闘の類いに乗る人間だというのは、アルム様もご存知では？」

ん？

ああ。

初めて彼女に会った時も、二回目に会った時も、手合わせ・決闘の類いだつたな。

て、本当に馬鹿なの？この娘。」

前回の事で、少しは変わったのかと思つたら。

というか、前日も前々回もオレが介入して止めたんじゃないかよ。

・・・オレが、か。

「じゃあ、オレがそういうのに介入しても止めに入る人間だつて知ってるよな？」

朝から何度も溜め息つかせんよ、本当。

「ええ、勿論。」

極上の笑顔を見せられたつて、癒されたりしないから。

・・・ううむ・・・これも縁か。

「ラミアもラミアだ。何時も何時も直情的で後先考えないで。昨夜のことで反省したんじゃないのか？」

じいーつとオレがラミアを見ると、思い出したのか、途端に表情が赤くなる。

肌が黒いから判り辛いけど、最近はおれにも多少判断出来るようになった。

「あ、あれはだな！」

多少は反省しているか。

「あれと、これとは意味が違う！」

「ほう、どう違うんだ？説明してもらおうか？」

「そ、それはだな、その、何というか、”ケジメ”だ。」

「何の？」

この二人で戦う事に、どんな意味があるのか本当、心の底から理解出来るん。

大体、意味とか理由があってもきつとロクなもんじゃないだろう。

「オマエの婚約者としての座だ！」 「そんなもの賭けるな！！」

今の大声、オレは悪くない、悪くないぞ。

絶対に悪くない。

「全く相変わらずなんだから。」

” ケジメ ” ね・・・。

オレはふとアイシヤ姫を見る。

彼女はあれから・・・。

オレが” 彼 ” を手につけて、何も言わずに去ってから、何を考えたのだろう・・・。

自分が何も出来なかった事を恥じただろうか？後悔しただろうか？いや、それ以前に泣いたのだろうか？

きつとそうなのだろう。

彼女は、” オレの知っているアイシヤ ” はそういう人だ。

「はあ・・・そういう事なら、オレにも考えがある。」

オレだつて” ケジメ ” とやらがどういつ時に使うものかくらい、理解しているつもりだ。

まあ、皇族のオレのつけるケジメなんてのは、自害くらいしか本当はないのだろうが。

「何だというのだ？」

はあ・・・オレって実は我が侭かも知れない。
今更、自覚。

いつその事、自分で自分の事を” オレ様 ” って言おうかねえ。

・・・ヤメとこ、マヌケ過ぎるから。

「アイシヤ姫。いや、アイシヤ・エル・クロアート。」

既に二回やったんだ。

三回やってもどうつてことないだろう、アルム。

三回だって同じだ。

「この”トウマ・グランツ”と勝負しろ。」

彼女の戦いに介入するには、彼女と戦うにはこの名前じゃないと。

”トウマ”さんがそう仰るのなら、喜んで。友達ですものね。」

全く、何が友達だ。

友達同士が喜んで決闘なんぞするかっての。

それ以前に友達同士じゃなくて、婚姻相手候補だろう。

「オイ、オマエ！」

「悪いな、ケジメをつけるなら、戦うのはラミアじゃないオレだ。」

ヤレヤレ。

元々、勝負自体が変だという事に気づけよ。

「アイシャ、オレが勝ったら結婚してもらおうぞ。」 「アルム！」

「だってさ、ラミア。君は婚約者の座を賭けてたんだろ？オレも結婚くらい賭けないとな。」

オレの言葉に更に反論しようとする彼女の唇を指で押さえ、アイシャ姫に向き直る。

「で？返事は？」

「よろしいですわ。」

「レイア、オレの残りの武具を取ってきてくれ。」

「かしこまりました。」

レイアはこのやり取りに一言も口を挟まなかった。信頼だろうか・・・心地よくもある。

「悪いね。」

「いえ、どんな時もアルム様に従うだけですから。」

ワカゲの至りにも色々あるというコト。【中】

両具足、両籠手、両円盾。

何時も通りの防具。

そして、両腰に二振りの長剣。

帰ってきてからずっと試し続けているカタチ。

完全に本気だ。

相手に失礼だし、何より手加減したらあの馬鹿力だ。

こっちが痛い目を見る。

特に受けに回った時なんか最悪だ。

ま、骨の一、二本はもう覚悟済み。

「用意はいいか？」

既に得物を携え、口調が変わったアイシャ姫がオレを待ち受けている。

「ああ。」

短く答えたオレは、殺意を込めて視線を送る。

「始めようか。」

まずは一振り、銀剣を抜く。

全力を出して、戦う為に剣の能力も使う。

また明日から寝付けない日々が続く事になるだろうが、仕方ない。

「参る！」

重量武器を軽々持ったまま直線的に突進してくる相手きちんと確認する。

宣言してから攻撃を始めるアイシャ姫に呆れながら……。

「うっぐうっ……。」

恐らく全力であろう一撃をオレは覚悟して剣で受けた。

今回だけは避ける事はしない。

そう決めた。

全部受けたうえで、オレは勝つ。

それが今は必要だ。

「む。」

視界の右隅に気配。

オレはすぐさまその気配に対応して円盾を向ける。

真紅の塊は彼女の左足だった。

受けると同時に身体ごと引いて衝撃をなるべく殺す。

「全く馬鹿力めっ。」

だが、以前と違い武器だけに頼るような事はしなくなった証拠だ。

「はあああッ！」

来た、二発目。

斬り返しの早いことで。

「っだああッ！」

もう一度真上から落ちてくる一撃を下から受け止める。

あまりの衝撃の重さに膝から崩れ落ちてしまいそうだ。

でも、この一撃一撃が彼女の心。

あれから、何も出来なかったあの時から研鑽を積んできた彼女の。

オレはそれをしっかりと見届けなければな。

と、そう思っていたんだけど・・・だが、二撃目で限界とは。

身体、骨が軋む。

いい加減反撃しないと・・・ヤバめ。

堪え性が無いとか言うなよ？

バルド相手に修行を重ねてきたから、何とか耐えられる程度。

何時もだったら、全力回避を選択してる攻撃の類いだ。

「アイシャ・・・いくぞ。」

宣言をしてからとか、オレも人の事を言えない。

オレは二本目の剣を抜き彼女の顔を目掛けて払う。

人は顔に飛んでくるものは、避ける傾向が高い。

その瞬間をしっかりと読んで、立て続けに反対の剣を振るう。

攻守逆転。

バルドの訓練で掴みつつある、隙を限りなく減らした連撃。

「くっ。」

一撃一撃の衝撃はそう大きくないとはいえ、よく捌いている。だが！

連撃の隙間に無理なく組み込んだオレの左足の蹴りが、彼女をなぎ倒す。

慌てて身体を起こしながら、自分の武器を突き出すアイシャ姫の胸に左足の前蹴り。

頬骨の辺りに鋭い痛みが走るが、この際無視。

そのまま仰向けに倒れる彼女の鎧の胸板部分に足を乗せたまま、剣を彼女に突き下ろす。

「あっ！」

誰の声だったろう、今は。

「まだ・・・続けるか？」

突き下ろした剣は彼女のこめかみ部分をかすめ、地に突き刺さり二本目を彼女の眼前に突きつける。

「オマエはこの程度だ。」

これを言うのもオレだけの役目。

「あの時、例えオマエが戦っても命を落としていただけだ。」

ほほを掠めて一筋の血が垂れている自分の頬を拭いながら、出来る限り冷たい声で言葉を続ける。

「彼を止めるのは、オレだけしか出来なかった。だからオレがやった。」

自分の無力さを嘆いた事ならば、オレにだって何度もあった。

「皆、すべき事をしただけ。だから、君が気に病む事は無い。でもな、今、ここにいる事が君のすべき事なのか？それが亡くなった者達への王族が歩む道か？」

還ってこないからこそ、それを胸に秘めて歩むべきなんだ。

「やっぱり、貴方は私の知っているトウマだ。」

「そうかもな。」

武器を手から離し、アイシャ姫は微笑む。

「貴方が勝つたら、結婚するというお話でしたけれど。」
「ん？」

「謹んでお断り致しますわ。」

あはは、綺麗だな。

「そうしろ。さっさと国へ帰れ。」

自分が成すべき事を成す為に。

何時か死んでいった者達の前で笑う為に。

だから、マール君、もうちょい待っていてくれ。

多分、すぐにオレは逝く事になってるハズだから。

「結局、甘えてばかりでしたわね。」

「仕方ないかな。出会いからして振り回されてばかりいたし。」

オレは突きつけていた剣を納めると、彼女に手を差し伸べて引き起さず。

「でも、アイシャと出会えて良かったよ。」

そのまま彼女を抱きしめた。

「私ものですわ。」

耳元で聞こえた彼女の涙声。

「あ、でも。」 「ん？」

ぱつと顔を離すアイシャ姫。

瞳は涙でうつすらと潤んでいる。

「結婚はお断り致しましたけど、婚約はお受け致しますわよ？」

そう言つと、オレの唇に自分の唇を一瞬だけ重ねる。

「これで二回目ですわ。」

「あのなあ……。」

コレ、実はとんでもない事に事態が落ち着いたんじゃ……。

これもケジメとやらの範疇に入るのか？

くちづけ込みで？

んな、馬鹿な……何の冗談なんだか……ん？

ずっと向こうのラミアが睨んでいる。

ああ、絶対、なんか言われんだろうな、オレ。

全くヤレヤレだ。

ワカゲの至りにも色々あるというコト。【後】(前書き)

七夕ですね。

貴方にも、会いたい人はイマスカ？

ワカゲの至りにも色々あるというコト。【後】

予想通り、その場にいたラミアに噛み付かれたのは言うまでもなく。

ふと、思ったんだが。

「何も現状が変わってない気がしないか？」

アイシャ姫は帰国する事にはなったが、婚約状態希望って……。破棄したり、結婚まで確定しないでいいだけマシか。

問題だらけだけれど。

しかし……。

『今後のお話もありますから、一度私のお部屋にいらして下さい。』
すごく含みのある言い方だったのは、気のせいだろうか？

気のせいという事にしたい。

ま、この際、言いたい事があるなら、言った方がいい。

帰国したら、そうそう思った事全部口に出せないだろうから。

「アイシャ姫、言われた通りに来たよ。」

ちよつぴり来たくなかったケド。

「どうぞ。」 「はいよ。」

返事を待って、中に入る。

……こんな簡単な事なのに、何故ウチの侍女達は出来ないんだ？
謎。

「理解に苦しむ。」

「何がです。」

「いや、ウチの侍女達のはな……。し。」

へソ。

うん、へソ。

胸周りを押さえつける革の服に、腰周りだけを覆っている革の服。それ以外は全部肌色。

押さえつけられた胸は、見方によっては凄いヒワイ。

「なんて格好してんだよ。というか、その格好で入室の許可なんか出すな。」

「ちようど鎧を脱いだところで。」

「そういえば、関節にも革当てがついている。」

「どうやら、鎧の下に着る特製の服装のようだ。」

「全身鎧だもんな。」

「ん？てコトは、レイアもああいうのを身に着けてるのか？」

「じゃなくて、はしたないぞ。」

「アイシャ姫だけは、そういう慎みを持っていると思っただが、天然である分そうでもなかったらしい。」

「？」

首を傾げ、自分の今の格好を見直すのは構わないが、絶対首を傾げる事ではないと思うぞ。

「そんな婚約者は願ひ下げです。」

「節度は持ちましょう。」

「だから言ったでしょう？ちゃんと着替えてからにきなさいって。」

呆れているオレの様子をよそに声をかける一人の女性。

先程、アイシャ姫と戦った時に彼女の武器を持っていた従者だ。

赤毛がかった茶色の毛並みに小さく尖った耳。

そして金色の猫目の女性。

特徴の通りの亜人だ。

口調も大人びていて、背も高い。

「オレより年上だろうか？」

「亜人の寿命とか年齢換算で人間と同じでいいのか疑問だけれど。」

「だって、早く二人をきちんと会わせたかったんですもの。」

「その気遣いは嬉しいけれど、着替えの時間くらい待てるわ。」

溜め息をつく女性。

「良かった、この人はマトモな感覚の持ち主だ。」

「で、用件は、この方を紹介したかったでいいのかい？」

「逆にオレがさっさと用件を済ませ撤収した方がいいんじゃないだ。」

るうか？

「はい。どうしますか？自分で自己紹介、するかしら？」

「そうしておくわ。」

横にいた巫人の女性は、オレに向き直り居ずまいを正す。

「初めまして皇子。私はロザリアと申します。どうぞ、リアとお呼び下さい。」

ペコリと頭を下げる彼女は彼女は非常に礼儀正しく誠実そうに見える。

見えるのだが、ピコピコと動く耳と合わせて見ると可愛くて仕方ない。

オレより背が随分と高いのにも関わらずだ。

ある意味で、巫人好きになりそう、オレ。

「彼女は・・・マールの姉上です。」

・・・マール君の。

思わず、彼女の顔をマジマジと見る。

似ている所が見当たらない。

マール君が未分化だったからかな。

オレは震える手で、腰に下げた剣。

銀の剣ではない方に手をかけ剣帯ごと外して、前になんとか投げ落とす。

こういう事もあるもんだな、しかし。

「貴女には、マール君の仇を討つ権利がある。」

オレは人を殺した。

だから、いずれ誰かに殺される。

非常に単純な理屈だ。

結局、憎しみや争いを止めるのは、人の心なんだと思う。

決して”力”なんかじゃない。

「けれど、今はまだ死ぬわけにはいかない。」

”与えられた生”で出来る限りの事を。

「それでも貴女が待てないというのなら、死なない程度にその剣で

突き刺してもらって構わない。」

それで晴れるとは到底思わないけれど。

でも、オレが彼女の弟を殺めた事には変わりない。

「やっぱり皇子に会おうと思ってる良かった。」

彼女はオレの剣を拾うと、その柄をオレに向ける。

「姫様に無理を言ってるここまで来たの。」

決意の眼差しを力に変えて、ぎゅっとオレの手を握るロザリアさん。

「貴方は無闇に人を傷つけたりする人ではないというのは、姫様から聞いて知っている。」

手に剣を握らせ……。

「それにここで私が貴方を傷つけたら、哀しむ人、怒りに震える人、大勢出てくるわ。」

「私も哀しいですもの。」

アイシャ姫が割って答える。

「だから、貴方は今の生で精一杯生きて、ね？」

温かい人だ。

オレの今の生が何処まであるかわからないけれど、彼女の言葉は絶対に忘れてはいけない。

「ありがとう、ロザリアさん。」

「リアで結構です、皇子。」

「じゃあ、オレもアルムで……て、呼びづらいか。」

流石に皇子を呼び捨ては無理だな。

「わかりました。アルム様。」

しかし、こうも心で憎しみを断ち切る様を見せられるとな……。

「アルム様、一つ頼み事があるのですが？」

「なんででしょう？」

「マールの眠っている場所へ案内して頂けますか？」

「……喜んで。」

彼女にも美しい湖を見てもらおう。

オレはきつと今日といつ日を忘れないだろう。

カヨウにして今日も日は暮れるってコト。

「この騒動は何だったんだろう・・・。」

大広間で席に着き独りごちる。

あれから二、三日してアイシヤ姫一行は帰国した。

自分がやる事をしに。

結局、結婚の件は婚約者候補という所で妥協する事に。

破談になって両国の関係が悪化しても困るし、かといって完全に決めるわけにもいかないから、こういう曖昧な辺りで時間を稼ぐ事にしたんだ。

我ながら、なんんという体たらく。

だがこれで、互いが互いの国に気兼ねせず、かつ婚姻相手問題というものに煩わされる事なく国に留まっていられる事になった。

「その点では良いと思ったんだけどなあ。」

「何が良かったというのだ？ 婚約出来る事がか？」

さつきから、ずーっとラミアに睨まれてるんだよね・・・。

「違うよ。」

「では、何だというのだ？」

何でコイツはこういう聞き方しか出来ないかね？

「私はアルが今まで通りここにいるのが嬉しい。」

ミランダはにっこりと飲み物を注いでくれるのはいいけど、これ、器の中でゴポゴポと沸騰しているんだが・・・。

「私はアル様もアイシヤ様も知ってるし、好きだから嬉しいです。」

ミリイが意外とマトモな事を言うから、オレは逆に心配だっ。

「大体、そんなにあのオンナを手放したくなかったのか？」

更にキツとオレを睨むラミア。

「別にそういうわけじゃ・・・。」

どうして、こうオレの周りは落ち着きがないのかな？

「じゃあどういわけなんです？」

「ミリイは余計な相の手を入れんでよろしい。」

「そうだ！第一、オマエはあの夜の事を忘れたのか！」

”あの夜”？と、皆が一斉にオレを見る。

「あ、あの、お姉様、あの夜って……。」

「サアラ姫が恐る恐る問いかけると……。」

「肌を合わせた一晩は何だったと言っただい！」

「脱いだのはオマエだけだろ！」

あ……。

「肌……一晩……。」

……もう嫌だ。

「サアラさん、鼻血！」

「ミリイがとたばたと拭く物を取りに行く。」

「アル、どういう事なの？」

ああ、姉さん……。

「そ、そうだとしてもだ。あの時の言葉は偽りだったのか?!」

「あか、そっか、ラミア様は知らないんだっけ。」

ぽんつと手の平を叩くホリン。

嫌な予感しかない。

「ライ、ホリン……。」

「ここにいるラミア様とサアラ様以外、皆、”アルム様と一緒に寝た”コトあるよ？」

危険！言い方危険！

「なっ?!それは本当かつ！」

絶対、”寝た”の意味を勘違いしている。

「て、ミリイ！早く！サアラの鼻血がヤバイ！」
量が増している気がする。

「所謂、お添い寝ですう〜。」

シルビア、訂正感謝。

「いえいえ〜。」

いや、わざわざ読まなくていいから。

「何という事だ！そんな所から出遅れていたとは！」

コイツ、何言ってるんだ？

「アルム、今夜は！」

「今日、アルム、アタシと寝ル。」

ラミアの言葉を遮って、オリエがオレの膝上に座る。

一度許したら、気に入ったのか最近やたらに膝の上に乗りたいがるようになってしまった。

「ダメ？」

膝の上がか？

まあ、嫌じゃないけど。

そう頭の中で答えただけで、オリエは答えの催促も更なる質問も止める。

「ぐぬう。」

オレの胸に頭を預けて、まったりとしているオリエを前に黙り込むラミア。

流石に子供に食って掛かるのは、大人気ないという頭はあるらしい。「ところで、さっきからシルビアは静かだし、ホリンもあんまり喋ってなかったけれど、珍しいね。」

こういう時は必ず余計に騒動を大きくしたり、中心になるのに。いや、嫉妬して欲しいとか、そういう事を思っているわけじゃなくてだね、うん。

こう、普段というか、何時もあるものがないと寂しいというか拍子抜けするというか・・・。

「あ、私達、アルム様が誰と結婚してもいいし。ね？シルビアさん？」

「ええ。」

「誰と結婚してもいいだと？！ホリン、オマエも嫁候補だろう！」
嫁候補？

・・・あ、ずっとその話を引っ張っていたの？

「うん。誰とでも。私は”側室”でもいいもん」

「私も、第三辺りくらいで、いいでしょうか？」

「側室?!」

「あ。」

すつつつかり忘れてた。

清々しい程にさっぱりと。

「ウチ、一夫多妻いいんだった……。」

父上も祖父も妃は一人だったから、忘れていたよ、完全に。

「あれ？シルビアさん、三番目でいいの？」

「はい。可能性があつて且つ、問題のない位置で。」

「じゃ、私、二番目でもいい？」

「構いませんよ。」

何勝手に話を進めてんだよ。

「アル、私は……何番目？」

姉さんまで乗らない!

「オマエらあゝっ!」

流石に怒りで肩が震える。

「アルム、アタシもガンバれば……できる？」

娘や妹とは婚姻出来ません。

じゃなくて!

「だああああーッ!オマエ等、いい加減にしろオッ!」

オレは絶叫した。

「サアラちゃん、拭巾持ってきましたよ。て、皆さん、どうした

んですか？」

拭巾を持ったままキョトンとする。

「あ、いい……ミリイ、サアラの面倒見てあげて。」

脱力。

これで本当にこの騒動は終結したんだろうか？

したんだよな？

誰か、そう言ってくれ……。

ヨコ一列で歩いて行く為に必要なコト。

屋上庭園。

城のかつてはそう呼ばれていた一画。

そこから、一人夜空を見上げていた。

ただでさえ考え込むタチだから、一人の時間というのは本当は願いたいけれど。

でも、今は一人になりたかった。

なんとなくそういう気分。

「つくづく運というか、周りに恵まれてるよな……。」

自分の行動の結果という考え方もあるけれど、人の出会いなんてもんは運だ。

どうやら、オレは意外とこの運だけには恵まれているらしい。

それくらいは思ってもいいだろう？

「その割には、何でもかんでもやり過ぎな気がするっすよ。」

両手を胸元で振りながら、オレの顔を覗き込む男。

「……仕事はどうした？」

「たまには男同士の会話もいいかなあと思ったっす。」

全然答えになってない。

何処までおどけたら気が済むんだ？

オマエは喜劇に出てくる道化か。

「あ、今、確実に呆れたっすね？」

非難じみた視線を向け、ザツシュはオレの傍らに許可も取らず座り込む。

「男同士の会話なら、カーライルとしているぞ？」

「アノ人にマトモな会話が出来ると思わないし、信じないっす。」

ザツシュよ、何があつた……。

主にそう思うに至るまでの過程を。

「アノ人もある意味、皇子とソツクリっす。」

「オマエも大概失礼だな。」

オレはあんな冷血そうに見えるのか？
つて、オレも大概だな。

「今はそんなでもないっすけど、昔は皇子みたいだったっす。」
余計に想像がつかん。

ある意味、兄上に次ぐ完璧人間に近い気がするし。

オレはとりあえず、ザツシユの横に同じように座り込む。

「なんでもかんでも、一人でやつちゃうんすよね、アノ人は。しかも、無駄に優秀だからデキちゃうんすよ、大抵のコトは。」

あはは、と渴いた笑い声を上げるザツシユだが、心なしか顔が引きつっている。

これは、アレだな、深く突っ込まない事にした方が良さそうだ。

「オレはそんなに優秀じゃないぞ？」

「本気で言ってるっすか？・・・あー、本気みたいっすねえ・・・
これだから全く。」

ナニか悪い事をしたか？

それともアレか？

この前の仕返しか？

「皇子？一人で出来るってコトと、一人でするってコトは物凄い違いがあるっすよ？」

どてんつと、床に大の字になるザツシユはそのまま瞼を閉じる。

まさか、ただ仕事したくなかっただけじゃないだろうな？

オレをそういうのに利用するなよ？

「一人で出来るからって、一人だけでやっていいとか、何がなんでも一人でしなければいけないってコトと違ってないっすよ？」

「オレは別にそんな・・・。」

「そうっすねえ、皇子はちゃんと周りを大切にしてるっす。でも、それは端から見れば支えられる事によって、皇子が自身に踏み込まれるのを拒否しているようにも見えるっす。」

そんな事はない。

オレは皆に感謝しているし、支えられていると思っっている……でも。

「でも……そういう事はない……とは言い切れないかも知れない。」

皆を信頼しているけれど、オレという人間の内面を全て見せる事はしていない。

話せる内容でもない。

「恐いつスか？」

恐くないかと問われれば、怖い。

眞実は当人のオレですら、残酷だと思う。

「ま、それは誰も同じだからある程度は仕方ないっス。問題は皇子が一人でひよこひよこ出歩いて何でも一人でやってしまうコトっス。」

瞼を閉じたまま、腕だけを上げひらひらと振るザツシユの気だるげな態度を見ていると、何処までが真面目な話なのかわからなくなる。

あえて重くならないようにしている気もするし。

「そりゃあ、何処までいっても人は独りかも知れないっスけど、皆皇子の力になりたいんスよ。少しは誰かを使うってコトを覚えないとダメっス。」

ひらひらと振られていた手は、何時の間にか止まっている。

今度はぴんと伸ばされた人差し指がくるくと宙を回っている。

「誰も皇子にコキ使われてるなんて思わないっス。皇子、信頼って人間関係は綱引きなんスよ。引つ張ったり、引つ張られたり。それで成立するんス。」

「単純そうに言っているようだが……？」

「難しいっスか？ 仕方ないっスねえ、皇子は。」

何か、久々にダメ皇子的な扱いに直面。

いや、実際、ダメ皇子か否かと問われたら、ダメ皇子という認定を否定し切れないんだが。

「じゃ、一つ、練習といくつスかね。」

「練習？」

「受けるっス。」

「何を？」

「皇子の騎士団員選抜試験。」

「ザツシュが？」

「試験を？」

「と、いうか、オマエ、仕事は？」

「思わず横たわっているザツシュの顔を覗き込んだ。

依然として、瞼は閉じられたままで表情からでは感情が読み取れない。

「だから、男同士の会話もいかなあって、さっき言ったっス。」

「コイツは……。」

「皇子には剣が必要なんスよね？ 剣はレイアさんや他の騎士団員がいるっスけど、盾も必要っスよ。」

「オマエは……ザツシュの人生はそれでいいのか？」

「さあ？ それは終わってみないコトにはわかんないっスね。」

「……似たような会話を最近したな。」

「まあ、このまま何処ぞの”州太守代理様”に仕えるよりはマシっスかねえ。」

「本気度合いが量りかねるぞ、その発言。」

「ザツシュ……。」

「なんスか？」

「試験、落ちるなよ？」

「ありやあゝ、それは流石に格好悪いっスねえ。」

「あはは、と苦笑するザツシュに嘆息してから、オレは彼の隣に自分の身体を横たえる。」

「かつて庭園だったそこから見る星空は、やっぱり何時もと同じ星空だった。」

ヨコ一列で歩いて行く為に必要なコト。(後書き)

ザツシユが再び皇子一行に復歸を決意。

足早な展開ですが、次回！騎士団員選抜試験編です。

果たして新キャラはどんなヤツが出てくるのやら。

タが為の試験ってコト。

イライラ。

うん、イライラだ。

オレは今、イラついている。

ザツシユの突然の宣言があった夜から、一ヶ月半近くが経った。

その間の仕事は、特に問題もなくすこぶる順調。

まあ、天候が悪くて工事の工程は、そこそこの進捗具合い。

じゃあ、何故こんなにイラついているかと言うとだ。

「アルム様。」 「遅い！」

執務室に入ってくるカーライル。

コイツを待っていた。

オレはずかずかと歩み寄り、彼が手にしていた資料の束をぶんどくつた。

「守備は？」

「は。受験者総数は約五百名強。一次試験突破者は百四名になります。」

オレの態度に何ら表情を変える事もなく、カーライルは報告を始める。

この報告、例の騎士団員選抜の試験結果だ。

「それよりも約五百名とは聞いていたが、何処からわいてきたんだ？」

獣人・亜人、ダークエルフに人間と実に多種多様の受験者だった。

「中には記念や話の種に。という者も居たようです。」

「官吏の登用試験の時は、一時金取るか？合格したら、即返却とか？」

「合格する自信のある者は、州の方から貸し付けるような制度がないと、低所得の人間は大変ですね。」

思いつきで言った案に、直ちに修正案が出てくるこの優秀さと真

面目さ。

冗談って通じるのかな？

選抜試験の第一次試験は筆記試験だ。

官吏としての初歩的な問題で、なるべくこれだという唯一回答のない、自分の考えを述べる形の記述式。

これを用意させた。

させたというのは、問題の作成にはオレは何も関わっていないからだ。

「ところで、カーライル？」

「何でしょう？」

オレは合格者一覧の名前が載った表を次々とめくっていく。

「これは得点順に記載されてたりするのかな？」

名前と種族・出身以外は何も書かれていない表は、何かの規則性があるようには見えない。

「はい、一応そのようにした方が良いかと思ひまして。」

「そうか・・・あのさ、カーライル？」

「面目ない。」

一言。

何の説明もなく、言い訳すらなく。

仕方なくオレは合格者名簿を見続ける。

「あ・・・。」

合格者名、下から四番目。

そこによくやく探していた名前が・・・。

「勘弁してくれよ・・・ザッシュ。」

「誠に遺憾です。」

いやさ、別に一番の成績で合格するとか言われてないからいいさ。

「でもさ、コレ、本気？」

カーライルも掴めないけれど、十分ザッシュも掴みづらいからなあ。

この辺、やっぱりちよっと似てる。

「アレの突拍子の無さと、世の中を舐めた態度は筋金入りですから。」
「バツサリだな、仲良いのか？」

「よくそんなのでやってこれたな。」

「自分もそう思います。」

「いや、”オマエ達二人が”。」

「ピクリと眉が動いたな。」

「ともかく、アレの思考をあえて読むとしたら、一番の成績だろうと最下位の成績だろうと、合格は合格で大局的に大差ない。とかそんなところでしょうか。」

「オレもちよっぴりそうかなとは思うが、本気でやって実はコレという説でも否定はしない。」

「それよりも。」

「コホンと咳払いをして、オレの手元の書類に視線を向けるカーライル。」

「ううーん、何かこの間の作り方が恐いんだよなあ。」

「自分としましては・・・その上から二番目辺りにある御仁が気になるのですが？」

「チッ。」

「やっぱりそこに気づきやがったか。」

「”トウマ・グランツ”という方なのですが。グランツ家の人間を招聘なさったのですか？」

「・・・だつて、他に思いつかなかつたんだもん。」

「「グランツ姓を”名乗れる”方は、バルド殿の他に三、四名しかいないと記憶しています。」

「このほぼ確信を持っているのに遠回しに言う嫌味な感じ、どうにかならないのか？」

「いずれの方も、国内の様々な場所で任にしているはずですが？」

「ああ。」

「対するオレの歯切れの悪いコト悪いコト。」

「その割には、バルド殿が何も仰ってこないですね。」
ちくちく来るカーライルの口撃にオレはいつその事、口笛を吹いて目線を逸らしてとかやってみようかと思った。
だって普通、こういうのってやるからには本気でやるだろ！
手を抜いたら、他の人間に失礼だろ！
というか、まさかこんな順位の結果になるとは思わないだろオオ。

レイメイが無くても前に進めるといふコト。(バルド視点)

「これはこれは皇子、何用ですか？」

黒髪に黒い瞳。

ヴァンハイト皇家の幼い第二皇子。

誰からも望まれず、期待されずにいると”思い込んでいる。”

皇国の歴史の中で黒髪の持ち主は三人。

更に黒い瞳を合わせて持つ者は皇子を入れてたったの二人。

およそ皇家にはありえない容貌。

「バルド・グランツ卿。オマエはこの国で一番強いと誰もが認めているそうだな？」

だからこそ、待ちわびた。

この皇子は必ず剣を取ると。

「自分ではそうは思いませんが、皆の評価ではそうなりますな。」

たとえ色は違えど先代と同じ瞳。

こういふ人間は大抵モノになる。

例え極める事が出来ずとも、人としては十二分に完熟する可能性があるのだ。

「ならば、頼む。オレに剣を教えてくれ。」

シングル皇太子より二年は早い。

「何故ですか？」

「オマエが一番強いからだ。それに……。」

「それに？」

「オマエが”長剣使い”だから。」

この皇子との共通点があるとすればコレだ。

共に自分が”異端”であるという事。

「確かに長剣使いではありませんが、この国は双剣の……。」

「言つな。オレは長剣を使えるようにならなければいけないんだ。」

堅い意志。

どうにも曲げるつもりはないらしい。

(長剣を使わねばならぬか……)

脳裏に一人の男の顔が浮かぶ。

その顔に生き写しのようにそっくりな幼子。

決意は揺るがぬものなのだろう。

だが、それだけでは何も出来ぬ。

出来ぬ事の方が多いのだ。

だから、自分はこの国に来た。

「しかし、皇子。強くなつて、それからどうするおつもりなのですか？」

さて、どう答える？

「わからん。」

「は？」

「わからない。けれど、何時か、その時が来たら……何も出来ずに後悔するのは、泣くだけでいるのは嫌だ。」

いやはや、自分が皇子と同じ年頃の時はどうだったか……ここまでしつかりとしていただろうか？

そんなはずはないな。

鼻タレのクソガキじゃったわい。

人は持つべき器に見合うように成長すると言つが、これはちと出来過ぎですな、先代。

惜しむらくは、この器を以つてしても第二皇子という事実はどうにもならんという事か……。

「皇子が長剣を極めたいという強い気持ちは理解しましたが、ここはヴァンハイト、そして貴方は皇子。最低でも、双剣の型は身につけませんと。」

「双剣も扱えるのか?!」

ううむ……素直に驚かれると照れますな。

全く今までの弟子共の可愛くないコトが浮き彫りではないか。

「では、それを含め是非頼む!」

皇子の皇子である為の戦いは、あの時から始まったワケですな？
とはいえ、双剣を教えたのは”こちらの都合”なんじゃが。

「皇子、覚悟は宜しいですか？」

「ああ、望むところだ。」

あの時と同じ言葉をかけると、あの時と同じ強い瞳で頷く。
今度は絶対最後まで見届けますぞ。

ようやくこの城、リツヒニドスに帰ってきた。

長い時を経て、”黒の皇子”がこの地に……。

恐らく皇子があの時言った”何時か”はもうすぐなのだろう。

だから、皇子は新たな強さを、より強い力を求める。

(しかし、不思議と心配にならないのじゃが……。)

きつと皇子が”力の本質”をきちんと理解しているに他ならない
からなのだろう。

「それでは後程、”トウマ・グランツ”。」

そう言って、”最後の”グランツ姓を名乗る少年を苦笑しながら
見送った。

ソウジャは常に全力勝負ってコト。【前】

城から少し離れた広場が次の試験の会場だった。

「見物料とか取って後悔すれば良かったな。」

小さな規模のものを想定していたから、非公開にしたのだけれど・
。

意外と民達の噂話の主流になっていた。

やっぱり田舎だから娯楽が少ないんだよ、娯楽。

ちゃんとそういうのも考えないとなあ。

「確かにその手がありました。収入は多ければ多い程良いですからね。」

フフフ。と微笑むカーライルが少し恐い。

一次試験の合格者は約百名だったが、今、この会場にはその七割程度しかない。

二割は別会場だ。

人間以外の種族、獣人・亜人・ダークエルフは今、バルドとラミア・サアラ姫が見ている。

ああ、残る一割は棄権者な。

「バルドの方、死者とか出ないだろうな。」

いくら身体能力が人より圧倒的に高い獣人・亜人といえども”手加減なし”のバルドじゃな・・・ちよつと可哀想。

「大丈夫。という事にしておきましょう。」

安心させたいのか、心配させたいのかどっちだ、レイア。

全く、これから”オレも二次試験がある”というのに。

折角、一次に合格したのだから。とは言わないが、オレ自身で自分の騎士団員になるかも知れない人間の力を感じてみたい。

そう思つて試験参加を続行する事にした。

ちなみにカーライルもレイアも呆れたのは言うまでもない。

現在、この会場には七十人弱の人間がいて、これを五つの組に分け

て剣の腕を見せる。

模擬戦形式だが、特に勝つ必要などもなくあくまで剣の腕を見るだけなので、負けても不採用という事はないと事前に通達してある。

「ところで、カーライル？」

「何でしょう？」

「この組み割りに、作為をオレは感じるんだが？」

他の組は基本双剣使い同士で組まれているのに対して、オレの組はというと双剣以外の使い手が多い。

「ある程度の考慮はあります。扱う武器の組み合わせの相性もありますからね。」

「それって試験になるのか？」

「動きを見るのがこの試験の本来の目的ですし、ちゃんと経歴も参考にして組んでありますよ。」

ほう……。

「経歴を踏まえると双剣使いのザッシュも同じ組になるのか？」

「なるみたいですな。」

このヤロオ……。

もう決まっちゃってしまっている事だから反論はないし、今更変えられるわけもないからいいけれど。

今まで自分の実力がどれ程のものなのか、試すにはちょうどいい……か。

「それよりも、アルム様、本当にその格好でやるのですか？」

「オレだってやりたかないさ。」

正体が判明すると色々と面倒なので、せめて顔を隠そうと以前の外出時に学んだ事を生かして仮面を使用！

とか、やろうとしたら、皆から全力で却下された。

逆に怪しいと。

一理というか、オレもそうは思っていたから反論できず、仕方なく持ち出したのは仮面は仮面でも鉄仮面。

全身鎧にはつきものの兜で、頭全体を覆い顔部分が丸ごと上に開閉

するヤツ。

「重いわ、視界は狭いわでやってられないよ、全く。」

しかも、いつもの装備に鉄仮面じゃ変だからって、出来る限りの部分に全身鎧を身に着けている。

「アルム様は速さで戦う方ですから、余計でしょう。どうぞ、無理をなさらずに。」

泣きそうなレイアの心配顔は堪えるな。

これじゃ、慰めのくちづけも出来ん。

・・・しないけど。

確かに周りを見ると強いそうな奴がチラホラと・・・。

「大丈夫。別に今回は絶対勝たなきゃいけないっていうわけじゃないからさ。・・・カーライル？」

「はい。」

まだ何か？とでも言いたげな視線。

その視線も痛いんだが・・・それ以外にも・・・感じる。

「向こうの二人、気になる。」

「と、言いますと？」

目にかかる程の前髪を額の真ん中で二つに分け、伸びた後髪を二つに束ねた男。

鎧を一切身に纏わずにこげ茶色の外套だけを羽織っているのだが、その居ずまいは熟達した武術家のそれがある。

ぱつと見は文官のようにしか見えないが、それが異常に思える程の違和感。

整合性が取れない程の違和感が滲み出ている。

そして、その横にいる男。

短髪のツンツン頭で鋭い目つき。

何よりその服装が奇抜だ。

頭からすっぽり被るような貫頭衣。

形はセイブラムの国に近い服・・・宗教服なのか、アレ。

背中には異様に長い包みを背負っている。

「長髪の方の監視を頼む。念の為、城内の警備を増やしておけ。」
「かしこまりました。」

オレの言葉にこれ以上の疑問や否定を挟む事なく了承する。
カーライルは何も完全理論武装の男じゃない。
時に直感やを重視、少なくとも蔑ろにはしない。

意外と思考は柔軟なんだ。

冗談は通じないみたいだけれど。

「それよりももう一方の短髪男の方が危険度は上だが・・・レイア
？」

「わかりました。」

「やれやれ、二次試験はどうなるのかねえ、全く。」

困るところなのか、カーライルの作為を褒めるところなのか・・・

オレは同じ組である、短髪男がいる集団に歩を進めた。

ソウジャは常に全力勝負ってコト。【中】

一次試験の筆記を先にやったせい、周囲にはそれほど抜きん出た武芸者は見られない気がした。

まあ、武が突出している人間は、大抵何処かの国に所属しているからという事もある。

だが、知識に比重を置いた騎士団は少ない。

大体、騎士団の高い地位にいる人間なんざ、貴族、貴族、貴族！うんざりする。

オレは時に自分で考えて行動する騎士団員が欲しいんだ。

「参りました。」

「ありがとうございました。」

目の前の相手との対戦を終え、一息。

全身鎧のせい、疲労の度合いが高い。

というか、身体が重い。

・・・そりゃそうか。

今の対戦相手は、筆記の試験もそこそこ良かった人間だ。剣術も双剣だったが、動きも悪くない。

充分、合格圏内に入っているだろう。

(しかし・・・全身鎧って意外と暑いな。)

レイアはよくこんなのを着て動き回れると思う。

ああ、でも長時間の戦闘は厳しそうだな。

アイシャ姫は当然別格。

「さてと、次は・・・。」

次の対戦相手をチラリと見る。

鉄仮面の利点は防御力と視線がわかりづらい事だな。

そう思っている間にザッシュが呼ばれる。

ザッシュは手数と速さと熟達した双剣さばきで危うげなく勝ちを重ねていた。

目下のところ、負けナシ。
ちなみにザツシユは同組なので、オレとも戦った。
まあ、開始直後に参った宣言をしたが。
不正と言われ兼ねなかったが、ザツシユとなんか何時でも戦えるし。
やる気満々のザツシユは、一人でズッコケていたが・・・いやま、
傑作。

そんなザツシユに対するは、例の気になっている男。
短髪の方だ。

扱う武器は・・・双剣？

にしては小さいな、短剣くらいの長さだ。

しかも直剣ではなく、左右に張り出すように副剣がついている。
あれで、相手の剣を引っ掛けて受けるのだろうか？

互いに構えても、随分と前傾姿勢。

半身でかなり足を後に引いている。

見たこともない武器に、不思議な構え。

少し胸がざわつく。

「始めッ！」

合図と共にザツシユが距離をつめる。

互いの剣は空を切り、それでも出を出し続ける両者。

相変わらず早いのだが、受け止めるといふ考えも暇もないように思えるくらい、それをかわし続ける。

「ん？」

両者が一瞬間を取って構え直す瞬間、短髪の男の構えが一瞬だけさつきと変化したような気が・・・。

「参った。」

次に唐突の男がその言葉を発して、去って行く。

「なんだっ たんだ？」

一旦退いて、両手を身体の左側に重心ごとズラしていた。
オレは気になって、戦いを終えたザツシユに近づく。

「・・・全く、こんなとこで何やってるんスカ？皇子。」

あはは、動きを見られているんだから、やっぱりバレるか。

「オレはトウマ・グランツだ。」

「そうグランツ姓がぼこぼこいて堪るかっていうんす。」
「ごもつとも。」

反論の余地ナシ。

「ところでザツシユ？」

「そんな暑苦しい鎧まで着ちゃって・・・て、何スか？」

いや、好きで着ているワケじゃないんだよ、オレだって。

これには深い・・・そんな深くはないワケがあるんだ。

「あの相手、最後までうしたんだ？」

あの動きはどう見ても不自然だろ。

「ああ、舐められたもんす。」

オレの問いにぶんすかと怒り出すザツシユ。

珍しいな、こういうザツシユも。

「途中から手を抜いてきたんすよ。んで、距離を取った後、攻撃に出ようとして気づいて降参。」

あゝ、腹立つっす。と一人ぷりぷりしているザツシユは面白いが、それは置いといて。

「気づいたって何をだ？全く言っている意味がわからんぞ？」

「自分が持っている得物っすよ。」

「得物？」

「多分、普段使ってる得物が別なんす。だから一瞬、何時もの動きをしようとして遅れるっす。気づかなかったスか？」

面目ない。

端から見ている分には、最後の動き以外は何となくしか判らなかつた。

これが経験の差というヤツだろうか・・・。

「最後の以外は・・・構えた瞬間は嫌な予感というか、胸がザワついて離れたいとしか。」

「・・・皇子って、意外と野生味あるっすね。」

「どついつ意味だよ？」

「良くも悪くもグランツ一門ってコトっス。」
「うぐっ?!」

何という言い様・・・というか、言うてはならん事を!

「オマエこそ、そういう所、カーライルにそっくりダヨ!」

「ぐっ?!」

お互いに何か刺さるような音の後・・・。

「フッフ・・・。」

「ははは・・・。」

「フッフッフ。」

「あーはっはっは。」

どう見ても危ない二人間違いなかった。

ソウジャは常に全力勝負ってコト。【後】

順当に試験が進むと当然、同じ組だからアイツと当たるわけだ。正直に言おう、勝てる気せず。

うん、絶対無理。

まずあの速度に勝てない。

全身鎧だし、この鉄仮面視界狭いし。

あっという間に死角を突かれて、敗北。

ザッシュ相手にさっさと降参したのも、これが大半の原因。

一応、自分の基本装備一式はレイアに預けてあるけれど、正体バレてまで戦うのもどうかと思う。

「トウマ・グランツ、トムス、前へ！」

ほら、呼ばれちゃったよ・・・どうしようかな。

開始直後に降参とかするか？

それが堅いのか？

つか、トムスってどうせ偽名だろ。

「はじ・・・。「まいっ・・・。「言つなポケエ！」

怒声と額からカツンという音がして、軽い衝撃。

何かを投げられた？！

というか、今、始めの合図より早くなかったかっ？！

「どらあッ！」

次の瞬間、目の前の男、トムス（恐らく偽名）がオレに向かって飛び込んで来る。

「ぬをつ！」

その勢いを殺せず、二人とももんどりうって地に倒れる。

「オイ、茶番はヤメろや。」

額と額を付き合わせた距離で、奴は囁く。

「互いに本気と違うってんのは、わかっとなるやろ？」

「何を・・・。」

「本気を出せ。いいな？本気で戦えや。」

そう言うとオレの身体は軽くなる。

男がどいたからだ。

そのまま男はてくてくと歩いて行き、戦っていた場所の外れにじやがみ込む。

「でないと死ぬかもな。」

ゆっくりと立ち上がった男の手には長い棒。

最初にアイツが背負っていたヤツだ。

「レイア！オレの剣と盾を！」

冗談じゃない！アイツはヤバい！

あれがアイツの本当の得物。

レイアに叫びながら、オレは余計な防具を脱ぎさっていく。

「戦えば、他には手は出さないな？」

アイツの口ぶりからして、要求はオレと戦う事なのだろうか？

もしかしたら、殺す事かも知れないが。

だが、あの装備を先程の速さで振られたら、ザツシュ以外の他の人間はどうなるかわからない。

多分、今のアイツはこの場にいる誰よりも実力が上だ。

「アルム様……。」

「レイア、バルドを呼んで来い。それまでオレがなんとかする。」

レイアから装備一式を渡され身に着ける間、ヤツは動かない。

それがオレと戦うという目的を証明している。

……マズいな……。

「用意はええか？」

最後の鉄仮面を外すと、オレは最初から長剣を二本とも抜く。

銀剣の力で世界が広がる感覚。

そして、オレがヤバいと感じた直感の警告音も大きくなる。

「来いッ！」

退くわけにはいかず、オレの一言でヤツはオレに突進する。

構えた瞬間、繰り出される突きを何とか紙一重で。

得物の正体は”槍”だ。

両刃の直剣の槍。

その付け根に蛇のように二本の鳶の様なものが絡まっている。

「もういつちよっ!」

ぐんと引き寄せられる槍の速度に、身体を持っていかれそうな錯覚を覚えた瞬間、すぐさま突き出される。

それが二回、三回と・・・どんどん早くなっていく。

埒があかない!

反撃の隙をどう作るかだ。

オレが隙を作るか?

いや、この早さだとそんな事をしたら、オレが串刺しだ。

拡大した感覚で何とか捌いてはいるが・・・。

と、オレの感覚がある存在を知らせる。

「ぐらあーッ!」

乾いた金属音が辺りに響き渡る。

槍の軌道を盾で逸らした音だ。

盾には前に一度だけ見た紋様が浮き出ている。

盾が発動して・・・で、コトはあれは最低でも付与された武器。

しかし、この隙を逃すワケにもいかない。

オレはそのまま盾を滑らせるようにして、ヤツに肉薄しようとして試みる。

「チッ!」

突進しながら、慌ててもう一方の盾を前に出す。

ザッシユの戦いの時の動作を思い出したからだ。

一拍遅れて盾に来る衝撃。

渾身の蹴りだ。

コイツ、徒手と槍が主体だ。

さつき短剣使ってたもんな。

「ヤルな。だが、オレは本気を出せと言ったんだ。」

何を言ってたんだ?コイツ。

「オマエのチカラ」を見せる！」

「ワケわかんないコト、ぬかすな！」

無理矢理オレはぐるりと身体を回し、ヤツの肩口に蹴りを浴びせる。

「ぐっ……やるやんけ。これだけやってもまだ隠すんなら、俺様も本気を出してやらあ！」 「ヤメンかバカタレ。」

「あだッ！」

鈍い音がヤツの後ろからして、蹲る。

ナニ？

「全く年下の格下相手にムキになって、馬鹿なんですか？脳ミソ空っぽですか？死にますか？」

一言、一言区切る度に蹲ったヤツの身体にげしげしと蹴りが入る。蹴っているのはヤツと一緒にいた長髪の男だ。

「大体、アンタは行動も考えも人間としての造りもザルなんですよ、ザル！」

整った美形の部類に入る顔にしては、出て来る言葉の全てが酷い。「もう、なんでこうダメダメなんですか？ああ、私もどうせなら、

こちらの皇子に仕えたいくらいですよ、本当に。」

汚物でも見るような蔑む目で見下す様は、ここまで来ると逆に清々しいというか……。

「で、結局、アンタ達は何処の誰で、目的は？」

「はぁ……これですよ、この冷静さと状況判断。どっちもアンタには無いモノですよ？少しは見習いなさい。聞いてるんですか？」

「……あの、彼、多分、気絶してる……。」

「………軟弱な。」

ええ〜?!

ツカ又事では済まされないというコト。【前】

結局、騒動のせいでオレの二次試験はアレで終了。

「人の出入りが激しい今日の日を選んで、一次試験に合格する自身があれば、オレに会える可能性が高いというのは理解した。」

無理にでも話を進めようとしなければ、現状どうにもならない気もするので、仕方なく口に出しながらの思考の整理。

「オレの暗殺が目的なら、確率的にお粗末で笑えるが。そうではないという事は単純に会って話をしてみたいってトコか？」

オレは短髪の方ではなく、長髪の方に聞いてみる。
どう考えても、こっちの方が話しは通じそうだ。

武装は解除させてあるが、まだバルドが到着していない。
暴れられても対処に困る。

「話が早いと互いに楽でいいです。まあ、なんとか正式にお会いしても良かったのですが・・・その・・・この馬鹿が。」

「参加したがつた。んで、会いたい理由は？」

「少し確認したい事がありました。あ、私は単純に皇子に興味があっただけです。」

あっさりと興味本位と言われても困るが。

一体、オレのナニが問題を起こされる原因なのだろう。

「オマエントコの神器についてだ。」

ムクリと起き上がる短髪の男。

ようやっと意識を取り戻したらしい。

「神器？神器を継承しているのは、兄上の方だぞ？」

まさかの人違い？

たつたら、オレは本気で怒るぞ。

「それは本物か？」

「は？」

本物？

本物って何だ？

いや、そもそも何を以って本物で、何が偽者かなんていう定義自体が何処にあるんだ？

直感としか、オレには言いようがないぞ。

「兄上と最後にあつたのは数ヶ月前だけれど、一応は持っていた。発動させたところは見た事ないが。」

「成る程。盗まれたり、それに類似したような事はなかったと。盗まれる？

真偽でなく盗難。

「そもそも、継承者以外は一部の例外を除いて神器は持てないだろ？それに何か？他国ではそういう騒動が起きているという事か？」

「オイ。」

「全ての国で、かどろかはわからないのですが。」

「オイ。」

「アンタ達の国の辺りでは起きていると？」

「オイ。」

「それはって、ウルサイですね、アナタは！今、人が話しているところでしょう！」

横に座ったままの体勢になっている男の頭を小突こうとした腕を短髪の男が掴む。

短髪の男の実力はオレより上のはずだから、掴もうと思えば余裕のはず。

「オマエ、発動させたところを見た事ないって言ったな？見た事がないのに神器が何故発動していない状態だと言える？そもそもなんで神器が”発動するモノ”だと思っている？」

迂闊だったなあ・・・。

でも、誤魔化せない範囲でもないか。

逆に聞きたい事がオレも増えた。

「ふむ。つまり、そう聞き返せるってコトはアンタも神器に詳しいか、持ち主を知っているって事だよなあ？」

「あ。」 「この馬鹿。」

「というか、立ち位置考えてんのかね。レイア、彼が持っていた槍絶対に他の誰も触れるな。それと、カーライルがきつちりかっちり尋問してくれる？」

「色々知っていらっしやりそうですからね。」

「につこりと微笑むカーライルってやつぱり怖いよな、うん。」

「丁度いいカンジだ。」

「あ、今、逃げられるか考えてるだろ？大丈夫、おっきな熊さんもつけてあげるから。」

「誰を指しているかは、詳しく言わなくても理解してくれ。」

「熊とカーライルとツンツン。」

「変な組み合わせ。」

「ああ、そっちの長髪の彼は連れて行かなくていいよ。言葉通じそうだし。」

「長髪の方は変な武器持ってなさそうだし・・・ああ、体術も出来そうだな。」

「でもま、二人一緒に連れて行くより、短髪のみの方が勝手にボ口を出してくれそうだ。」

「ま、そうなるでしょうね。」

「折込済みだと言わんばかりに溜め息をつく。」

「ツンツン頭はいいとして、アンタ名前は？長髪って呼ぶのも些か間抜け過ぎるし。オマエとかアンタって呼ぶのも個人的に嫌なんだよね。」

「これは失礼致しました皇子。私、クラムと申します。」

「貴族姓は無し、と。」

「本当の事を言っているのかわからないが、とりあえずの呼び名がある方がマシ。」

「ま、こんな事で嘘をつく必要性は特にないんだけどね。」

「そう。クラムさん、お茶好きですか？」

「え？はあ、まあ。」

「なら、お茶でも飲みながら。ところで、あの槍は”神器”かなんかですよね？」

全く関係ない会話の中にズバリ本題を混ぜて相手の反応を観察してみる事にした。

ツカ又事では済まされないというコト。【後】

「運動した後のお茶はいいなあ。程よく力が抜ける。」

長髪のお兄さんこと、クラム氏と椅子に座って優雅(?)にお茶。特に話題もない。

質問とか聞きたい事は細々あったが、急務なモノは無いと判断。

ただ、あの槍がどの程度の威力を持った武器なのかという、さっきの質問にさえ答えてくれればオレはいい。

「ああ、質問はさっきのあれだけで終わりだから。」

「はあ……。」

どう答えていいのかという表情だな。

「大体の話は向こうの尋問でわかるだろうし、君達が確認したかった事も半分は今、残り半分は数日中に答えられると思うよ。」

「あの皇子？皇子はどこまで予想や把握しておられるのです？」

「それは自分がボロを出して、オレの知らない情報を言わないようにする為？」

だとしたら、拙いなあ。

カーライルなら、一つの質問で聞きたい事の大半を満たせる方法を考えるぞ、きつと。

「君達は恐らくこの周辺の国の人間じゃない。そして神器級の武器の盗難騒ぎを追っている。何故ならそれをされると困る理由があるから。その理由はオレは知らない。ただ、神器級の武器を持つ人間が動いているのだから、事態は深刻なのかも知れない。」

強い武器を持つ者は有名になる。

でも、オレはそんな人物を聞いた事がない。

クロアートのアイシャ姫からも、セルブのラスロー王子からも、セイブラムのリディア先生からも。

更に各国の優秀な人間が集まる、見栄の博覧会の学舎でも見なかった。

オレが知らないだけだという事もあるが、だったらそんな秘蔵つ子を派遣する時点で事は重大という事だ。よって、先程の推測と。

ただ神器が盗まれるという意味がわからない。

神器級の武器は使い手を選ぶから。

ただ例外があつて、オレはそれを知っているという・・・ね。

この偶然は、何の因果でしょうかね？

「おおよそ合っています。・・・ああ、やっぱり仕える人間、間違えたかな。」

いや、そこで後悔に落ち込まれても困るんだけれども。

「もう面倒なので、ばつさりと行きましよう。先程、私の質問に答えられると言ったのは？」

諦めと、転換早いなあ。

「先日、クロアートの姫君と会った。彼女は神器の盗難の事なんか一言も言わなかった。」

あつたら絶対、彼女はその事をオレに述べるだろう。

「そんな国家の一大事を他国の、それも皇子に話しますか？」

「彼女はオレの婚約者（候補）だ。」

うわあああゝッ！

背中がムズ痒いー！！

言つてて色んな所が痛いよ、オレ。

「しかし・・・。」

「それに一度オレ達は、神器級の武器の盗難を目撃している。勿論、犯人もね。」

「それは！」

椅子から勢い良く立ち上がったクラムは思わず茶器を落としそうになつて、慌てて座り直す。

「はいはい。落ち着いてな。今、このリッヒニドスは改革の真っ最中なんだ。そしてこの州の民の生活水準の底上げを画策しててね。」

ガンガン仕事して、生産力を上げ、その分の税を減らし民を豊か

にする。

豊かになった分は、娯楽や教育に使う。
生きるという事を精一杯やってもらう為に。

「それと、何の関係がというような顔をしてるね。手始めに治水、次に教育機関。その為に知り合いに協力をお願いしたんだ。セイブラム法皇国の枢機卿に。」

あの人、教育熱心だからなあ。

この話に乗ってこないわけがない。

書いた手紙の返事はもう届いていて、内容的にはこの返事がオレの所に来る頃にはこちらに向けて出発しているだろう旨が書かれていた。

「あの国の神器、正確にはその複製だが、盗難にあっている。詳しい事情が聞けるだろうし、何より追っているモノが共通なら、手も貸せなくはない。」

犯人の居場所がわかるなら、そろそろ”預けたモノ”を返してもらわなくてはならない。

「はあ・・・何というか・・・。」

「何？」

「酷く遠回りな事をした気が・・・最初からこちらに来ていれば良かったです。」

あらあら、ぐったりしちゃったよ。

別にオレが悪いわけでもないけれど、ちょっと気の毒にはなるな。

「仕方ない。オレは国の神器を継承しているわけじゃないし、およそ神器とは全く無縁の第二皇子だからね。まず注目自体が集まらない。」

なんだかんだで、今現在は注目が集まっているようなカンジではあるが、それも一過性のもの。

中央では、第二皇子のお遊び。

政治ごっこしか取られないようになって、忘れられるだろう。

リツヒニドスの州内では、常に注目されまくっているけど。

これはこれで、州限定という事で目を瞑る事にしよう。
でない、と、やつぱり居た堪れない。

「何でこう、神器というのは奇人・変人ばかりを選ぶんですかね。」
ヤケ酒ならぬヤケ茶(?)を呷るクラム。

味も香りもあつたもんじゃない。

「あ、やつぱり、アレ神器なんだ。」

「ええ、今は亡き国の忘れられし名の神器です。元来ここからずう
つと北東の国にありました。」

神器が他にまだ存在しているのは、書物の類いから知ってはいた
が・・・随分と辺境にあつたもんだ。

この国から北東。

位置的にはセイブラム東の方が？

確か未開の地だった・・・はず。

「樹海だよな？あの辺りつて。」

「そして、俺様が樹海の傭兵王八ディラム・ジューザ様だ！」

「・・・本当、クラムさんの言葉、一理あるわ。」

ネドイも時にはしなければってコト。【前】

ハディラムの持っていた槍は樹海を切り拓き、傭兵として戦っていた者達の集落で継承されていたものらしい。

やがて庇護を求める者達や、他国の圧政・差別等から逃れてきた者達が増え、国としての形になったそうだ。

今は国としての形を取れる程の人はいなくなり、只の傭兵集団と化しているらしい。

とは言っても、現在特に大きな戦争が起きているわけではないし、もっぱら自給自足の生活を満喫しているらしい。

「というか、オレとしては理想的な国家体系だ……。」

だって、種族もバラバラな人々が寄り集まって、王を頂く差別の限りなく無い国だってんだから。

原始国家ってそんなもんなんだろうな……大きくなって権力が集中するとロクな事がないってコトだ。

「国土のほとんどが野生動物の徘徊する地でなければですが。」

だから、余計に侵略される事もなかったんだろう。

クラムが次の紅茶を、今度はゆつくりと飲む。

部屋の中には、クラムとハディラムの二人。

そして、ミランダとレイア。

一応、扉の外に試験を終えたザツシュが控えている。

「共通の外敵があるからこそ、人がまとまるというのもあるだろう？」

「成る程。しかし、肝心の人の上に立つべき王がコレでは……。」
隣に座るハディラムを睨むクラム。

「何だよ、俺様だって頑張ってるんでしょ？」

「戦うだけが王の仕事だと思ってるんですか、この脳ミソ筋肉バカ。」
なんとという語彙。

そして、何というキツさ。

この口調に慣れないと樹海で暮らしていけないのだろうか？
樹海的环境、恐るべし。
なワケないか。

「ああ、もういつその事、アルム皇子に治めてもらいましょうか。
クラムが一人、天を仰ぐ。」

大丈夫か？

「あのねえ……。」

「皇子は第二皇子なのでしょう？内政の腕もそこそこあるようですし。」

「え？何気に本気？」

「このバカよりは、それはもう断然。」

「うう……あ、そうだ。樹海の木って建築物に使えたりするかい？」

「え、ええ、まあ。」

「じゃあ、輸送方法を考えればいいだけか。輸送費が高くなりそうだけれど、物の代金さえ安く調整できるなら、どうだい？貿易。」

ほむつと手を叩くクラム。

「流石、皇子、抜け目ないしたたかさ。確かにそれならばある程度安定した収入が得られます。」

傭兵集団といっても、戦いが無いんじゃないかな。

これ以上、衰退しない為にも何か安定した収入がないと。
逆に安定した収入さえあれば、どうとでもやっていける。

「樹海は他の森に比べ、草木の成長速度が数倍の速さですから、充分に産業として確立できるかも知れません。」

「ううむ……なら、リディア先生にも聞いてみよう。輸送費の折り合いがつかなさそうな此処よりも、隣国ならもつと交易しやすいかも知れない。」

此処から樹海は遠いし、こっちにも一応森があるから、下手すると既存産業を阻害する恐れもある。
ある程度の競合はいいんだがな。

セイブラムは森林部が少ないから、いい取り引き相手になりそうだ。そう考えると、オレは彼の隣でやりとりを見ているハディラムに向き直る。

「で、いいかな？」

オレは彼の評価は別に低いというわけではない。

直情的な部類には確かに入るだろうし、馬鹿？と思う事もあるが、さっきのオレの話の違和感をついた時といい、頭の回転も悪くない。それに戦闘能力は、完全にオレより上だ。

「何で俺様に聞く？」

「アンタが治めてんだろ？」

形式上だろうが、なんだろうが、代表者はハディラムだ。

今まではクラムが処理してばかりだったかも知れないが、責任云々はハディラムも負うべきだ。

オレはそう思っている。

オレ自身、そのつもりで内政はやっているしな。

何時までもハディラムが参加しないというのもどうかと。

「一連の流れは悪くねえが、それをオマエがやって何の得がある？

仲介料でも取るのか？」

「仲介料かあ。オレの所で交易するのに支障が出たら、それもいいかなと思うけど。」

どちらかというと、物事の見極めが早いのか。

なんだろう、やっぱりこれが野生の勘ってヤツなのか？

「面白くないだろ？」

「面白くない？」

「生まれた種族、生まれた環境。そりゃあ誰だって多少の差はあるけどさ、全く未来がないとか選択肢がないっていうのは面白くない。」

「生まれながらの皇子が言う台詞じゃないなあ。」

でも、皇子だからこそ言える台詞でもあるか。

だってさ、交易で財を得る事が出来れば、選択肢が増えるかも知れ

ないじゃないか。

「オマエ、皇子らしくないな。」

「何だ？人生、面白くないのが希望か？一生誰かに決められ続ける
つてのが楽でいいとか？」

そんなんだつたら、野生が泣くぞ？

「そこまでは言つてねえよ。なあ、皇子。一つ、俺様の質問に答え
るや。それ次第で決める。」

オレを睨みつける瞳に微かに殺意が感じられる。

わざとそれを乗せているのかも知れないが。

つて、人を指さすなつての。

「答えられる事ならな。オレ、あんまり頭良くないからな。」

「なあに、そんな難しい問題じゃねえ。皇子、アンタ、”神器のこ
ト、どう思っている？”」

ネドイも時にはしなければってコト。【後】

「神器をどう思っているか？なんだ、随分と漠然とした質問だな。」
オレは手元にあった紅茶の残りを飲み干す。

大分、温くなった紅茶。

「人には必要ないな。あつてロクな試しはない。」

神器があつたから、世界は守られたかも知れない。

でも、神器があつたから、ヴァンハイトは仲間を裏切った。

神器があつたから、シルビアは辛い想いをした。

「あつてロクな試しがないか……。俺様も神器使いだぜ？」

「別に神器を使う人間がとは言つてない。神器そのものの話をした
だけだ。」

ハディラムが引き続きオレを睨む。

オレは彼の視線から目を逸らさない。

「皇子よお、アンタの国だって神器があるんだろ？代々継いで国を
維持してきたんだろ？」

その通りだ。

なんだ、正論も言えるんじゃないか。

「生憎、オレは自国に対する愛国心があるわけじゃない。それにな、
国を維持してきたのは神器なんかじゃない。民達だ。」

そう貴族は理解していない。

いや、認めようとしな。

この紅茶が飲めるのは？

上等な服が着られるのは？

そんなもの民が汗して働くからだ。

「ふうん。の、割には神器に詳しいな。」

「詳しくなる必要があつたんだよ。でなきゃ、知ろうとも思わん。」
というか、このリツヒニドスにすら居ないかもな。

など思っていると、ハディラムは椅子から立ち上がって、オレに大

股で歩み寄る。

「よしつ、気に入った！オマエ、俺様の家来になれ！」

「なるわけないでしょう。おバカ！寧ろ、家来になるならアンタがなりなさい！」

オレの肩に手を置いて、宣言したハディラムの頭をすかさずクラムが叩き倒す。

「何というか、本当に仲良いな、二人は。」

「手のかかり過ぎる弟みたいなものですよ。」

全く。と、息を荒げながらブツブツと小言を述べるクラムをオレは苦笑しながら見る。

「聞き分けが良過ぎて、一步も二歩も兄から退く弟よりはいいんじゃないかな。」

兄上はそう思っているんだろうな。

きつと不出来でも、弟として可愛がつてくれただろう。

今じゃ、こんなに好き勝手して困らせてばかりだろうが。

それとも、余裕で笑っているかな？

「オマエだって、最初コイツに治めて欲しいって言ってただろ。なら、もういつそ家来にして連れ帰ったら、いーかなっと思っただけだ！」

「大問題になるわっつ！」

あ、また殴られた。

「ハディラムもそうやって言われるのも今のうちだ。治める側になったら、一気に誰も面倒なんか見てくれなくなる。期待されなくなくてもだけれど。」

「そういうもんなのか？ああ、俺様の事はハディでいいぞ。知り合いは皆、こう呼ぶ。」

ニカリと笑うと白い歯が眩しいな。

なんというか、ザツシュと気が合いそう？

主に悪巧み方面で。

「なら、オレもアルムで構わないよ。」

そもそも皇子と呼ばれるのは、そこまで好きじゃない。

「一応は”知り合い” くらいの間柄にはしてくれらしいしな。」

「全く、何処まで図々しいんですか、アナタは。いえ、今に始まった事じゃないですね、何せ真正バカですからね。」

「・・・教育という意味合いがあるんじゃないかと、口が悪いだけの気がしてきました。」

それでも、常にこうやって傍にいてくれる人間がいるというのが、なんとも羨ましい。

「失礼します」。紅茶のおかわりをお持ち致しました。」

あはは、オレにもいたつけな。

望みさえすれば、常に傍にいてくれる者達が。

「ね、姉ちゃんっ?!」 「はい?」 「あらあ?」

誰が? 誰の?

「姉さんだつて?」

シルビアの登場に素っ頓狂な声を上げたのはハディラムだ。

「なの?」

シルビアに事実確認をしてしまうマヌケなオレ。

結局、事件依頼オレはシルビア個人のコト、特に過去の事は何一つ聞いていない。

彼女にもそう告げたしな。

「ん〜、人違いですわあ〜。」

「た、確かに姉ちゃんは、そんな喋り方せんわ。」

・・・ライ。

ハディラム、彼女は普通に喋ろうと思えば、喋る事が出来るぞ? どっちが素の口調か知らないけれど。

「でしよう?」

「だな。いや、スマン。」

そんなんでいいのか?

本当にそんな確認の仕方?

「私はシルビアと申します」。アルム様の侍女兼お添い寝隊で、お

嫁さん候補ですう。」

まあああてええーッ！！

何さらつと嘘を平然と言つてのけるか、アナタはあつ！

「なんだつて?! アルム、オマエ後宮を持つてるのか?!」

「流石、皇子。いや、優秀な方は、優秀な世継ぎを残す義務がありますからね。」

二人とも素直に信じているし！

ハデイラムもあんだだけ野生の勘があるのに、こういう時は発動しないのか、オイ！

「うふふふ。」

「笑つて誤魔化さない、その元凶。」

「あらあ？私の中では、嘘ではないのですけれど。」

いや、シルビアと結婚出来る男は幸せだし、羨ましいと思うけれどね。

「アルム様。いやんっ ですわ。」

・・・こういうのさえ無ければね。

「ちよっぴりラミアさんに対抗してみました。」

「対抗せんで宜しい。」

なんか、一気に脱力。

「ちなみに、私は三人目のお嫁さん候補です。」

「しかも側室だ！」

「やはり優秀な血を・・・。」

更に盛り上がっちゃったじゃないか、もう。

これ、どういう風に事態を收拾するんだよ・・・とりあえず、だ。

「シルビィ。」

「はい。」

「退場。」

ナイジツを思案するというコト。(ハディラム視点)

「どうですか？ご対面の感想は？」

俺様達二人に部屋が割りあてられて移動すいてすぐにクラムはそう聞いてきた。

感想……。

「……感想ねえ。」

「どうしました？」

「いや、印象は悪くないぞ。多少暗そうだけど、そこそこの武もあって、頭も回って、家来になれって言ったのも、あながち嘘じゃねえ。」

「やっぱり、本気だったんですか……。」

出身だの、生まれだの、種族だのを差別しない性格だったのも、騎士団員選抜試験の受験資格を見ればわかる。

「ただなあ……。」

「ただ？」

「最後んトコだけが引つかかんだよなあ。」

俺様の最後の質問。

その答え、態度、雰囲気、その全てが気になる。

「なんだって、あんなにも神器を危険視つーの？敵視すんだ？」

「そんな風に感じましたか？」

クラムにはそう感じなかったんだろか？

俺様は頭を掻きながら寝台に横たわる。

「自分が第二皇子で神器が継承出来ないという事もあるかと思っただけですわね。」

「アイツがそんなタマか？」

それで腑に落ちるかって言われたら、落ちねえんだよ。

だから、余計に気になる。

「そういう意味で神器が嫌い、もしくはそういうものを振りかざし

て偉そうにする輩が嫌い。とか。」
「そうなんだよ。」

どっちかつつーと、神器を使う人間の中身が嫌いというか、何と
いうか……。

「どちらにしる、胡散臭い気がする。現状は敵じゃないし、人間的
にも悪いヤツじゃねえ。でも、どこか根本で信じ切れねえ何かを抱
え込んでやがる。」

「何かって?」

「んなモンわかったら、俺様はもっと偉そうにふんぞり返ってるわ。」

「はあ、と溜め息をついて目頭を押さえるクラムのこの仕草は見慣
れた光景だ。」

「今でも十二分に偉そうで、態度デカいですよ、アンタは。」

「そうか?どちらにしる、俺様の邪魔をするなら選択肢はねえけど
よ。」

「ちよっぴり勿体ねえ気もするんだけどな、どうしても。」

「ごろんごろんと寝台に転がってみる。」

「高級だな、コリヤ。」

「今夜はよく眠れそうだ。」

「あまり早合点で行動起こさないで下さいよ?」

「俺様が何時そんなコトした?」

「アンタ、いきなり神器発動しようとしたでしょ! 忘れたんですか
?! ドアホ! 大バカ!」

「ん? ああ、そういえば……。」

「回収してきた俺様の神器。」

これを俺様に預けたりしている時点で、アルムは俺様をある程度は
信用してるって事だよな、多分。

この槍は、クロアート帝国に伝わる天を衝く斧槍と対なす唯一無二
の神器。

アルムには話さなかったけど、まあ、アイツも俺様に話してない事

もあんし、お互い様だろ。

コイツは、恐らく現存する神器の中では、一、二を争う力を持つてる。

「なあ？」

「何ですトリアタマ鶏頭。」

睨まれちまったよ。

「コイツが後世に伝わらず、歴史から消えたのって、やっぱりそういう事なんだよな？」

神器を屠るには神器。

「またその話ですか？今のところ、クロアートの神器が動いたという情報はありませんよ。第一、今現在本当に使い手がいるかだって怪しい。」

全く以って正論だ。

正論過ぎて反論する気さえなくす。

「決めたのでしょうか？それをやり遂げると。迷っているのですか？」
「いや、皇族・王族の中にもアルムみたいな考え方をするヤツがいたのがな……。」

あつてロクな試しがない。

そう考える者が多ければ、神器が世界の表に出る事はない。

「あ。」

「今度は何ですか？」

「もし、アルムが同じ考えだったら？」

「それこそ簡単です。ここを新たな地にすればいいだけです。」

「だと、楽でいいよなあ。」

「楽する方向で考えをまとめないで下さい。」
「だよな。」

楽な道のりじゃねえってのは理解してる。

とりあえずは、神器の盗難の現状を把握しねえと……。

「よし、クラム。情報収集任せた。」

「アンタもヤレ、トリアタマ鶏頭。」

「ほら、トリアタマ鶏頭だから、収集しても忘れちゃ、ぎゃふんつ。」
クラムの踵が見事に脳天に突き刺さって、そのまま俺様は意識を失った。

ライライぬこ耳皇国ってコト？

「とりあえず、ハデイ達の監視はバルドに頼む。欲しい情報を渡すまでだ。」

「御意。」

他に良い人選がないというか、選択肢がない。

神器には神器で対抗するしかないからな。

受け止めるだけなら、オレの円盾で可能かも知れないけれど。

でも、この円盾の発動条件をオレは知らない。

そもそも任意発動って出来るんだろうか？

命を預けている割には認識が甘いと思うかも知れないが、発動しなくても円盾の強度は良い。

それに神器と戦う事を想定しているって、どれだけなんだよとも思う。

「レイア、選抜試験の結果は？」

結局、最後まで参加出来なかったからな。

「合格者人数は五十三名です。」

「意外に残ったな。」

「アルム様の望む文武両道は三十名程度ですが、どちらかの成績だけが良かった者もある程度採用しました。」

確かに三十名前後は少ないか・・・急造のクセに高水準を望み過ぎてもな。

「鍛錬の内容を個々に変えれば問題ないか。じゃ、レイア、その中の高成績者二名を副団長として選出してくれ。」

オレの騎士団だが、団長はレイアだ。

人選は彼女に任せたい。

ザッシュが言ったように、少しは周りに頼ったり完全に一任する事をしなきゃな。

これからも少しずつ責任の量や質が増えていくからってのもあるが、

オレがいなくなったら特に……。

「そう仰ると思いましたが、私の方で既に二名選出しておきました。」

あはは、早速信頼に応えられたね。

嬉しいよ。

「どうかしましたか？」

「いや、なんというか、もう名実共にオレの騎士なんだなあと。」

「ど、どうもです。あの、部屋の外に待機させてありますがお会いになりますか？」

「うん。」

顔が真っ赤になって照れているのは、突っ込まない方がいいよな？

「二人とも、お許しが出た。入れ。」

レイアの掛け声と共に二人が入ってくる。

「ちわーっす。」

「し、し、し、失礼します。」

「何だ、ザツシュじゃん。代わり映えのない。」

「酷ッ！」

「て、コトはアレか。武官派代表はザツシュか、文官試験適当だったもんな。」

下から数えた方が確実に早かったし。

「一応、実技試験は全戦全勝っす。」
だらうな。

じゃないと合格出来ないだろう順位にいたし。

さて、という事はもう一人は文官派代表なのかな？

オレはザツシュの隣、もとい斜め下に視線を移す。

「る、る、ルチルと申すまひゅっ?!」

はうっと呻きながら口を押さえる人物。

今、ガチッて音がしたな。

盛大に舌を嚙んだ音だ。

「こ、これから、副団長として頑張りまひゅぐうっ。」

また舌を噛んだな。

しかも、またもや盛大に。

「あ、あの皇子？」

「アルム様？どうかしましたか？」

全く反応を返す事をしないオレにルチルとレイアが心配そうな表情を浮かべる。

別に機嫌が悪いわけじゃないんだ。

呆れているとかそんなんでもないし、レイアの選択が間違っているとも思わない。

ただな・・・あんまりにも・・・あんまりで・・・。

「・・・カワイイ。」

「は？」 「へ？」

オレは思わず全力でルチルを抱きしめた。

「レイア！何？この可愛い生き物！」

赤毛の短くてもふんわりした髪に、赤茶のくりつとした瞳。

そして何より、頭頂部より少し横にある二つの物体。
耳。

そう耳！

「はううう。」

「はううううだつて！可愛い！ついに、ついに！」

心の中で大絶叫。

オレに！亜人の部下が出来たーッ！

「アルム様？」

「ああ・・・もうザツシュいなくてもいい・・・副団長はルチルだけ。」

「酷い言われようっすけど、皇子は獣人・亜人が大好きって事だけは理解したっす。」

「悪いか？こんなに愛らしく、かつ力強い種族はいないぞ？両立しているのが凄じじゃないか。」

「否定はしないっす。」

肩を竦め全力で呆れるザツシユを尻目にオレはルチルの耳の付け根辺りを撫でさする。

「うむ、耳だ。」

「そりゃそうっすよ。」

一々突っ込むな、ザツシユ。

オレ自身もおかしいと思ってるから。

「よし、堪能した。ルチル、よろしく頼むぞ。」

「はいっ！」

「騎士団が結成となれば、次は団章だが……。」

「切り替え早いつスねえ。皇子、それなら自分に案があるっす。き

つと皇子も気に入るっすよ？」

「任せた。でも作成に関しては……。」

「ちゃんと州内で作るっすよ。」

こういう小さな事でも商売になるからな。

なるべく州内の民に公共事業として回せば、その分金が回る。

「よし、次は団員の為の防具類だが。」

得物は自分達の使い慣れた方がいいから、防具だけでいいだろう。

これもなるべく州内で作製させたいんだが、上質の物を安価で作製出来る職人はいるだろうか？

「アルム様、カーライルです。」

「入れ。」

試験の残務処理をしていたカーライルが室内に入ってくる。

「アルム様、新騎士団員の宿舎等の手配が終わりました。当分、公共事業と周辺の街道の警備の仕事をさせるつもりです。宜しいですか？」

「任せる。」

「それとアルム様に面会を求める者が来ております。」

「面会？誰だ、こんな時に。」

一連の流れと経験からして、疲れる展開しか待ってないんだ。

完全に学習したぞ。

「カーライル。」

「なんでしよう?」

「前置き無く突然会つと、かなり疲労するだろうから、先にどんな人物が言ってくれる?」

「北の商人でヒルダという者ですが。」

「・・・ヒルダ?」

オレの脳裏にすぐさま浮かんだのは、視界一杯のお尻。

うん、あの美尻。

「まさか・・・あの格好じゃないよな?」

「何か?」

「い、いや、何でもなし。ん、まあ、丁度いい。」

防具の相談が出来る。

なんてたつて、特殊な武具商人だしな・・・色んな意味で。

「知り合いだ。通してやってくれ。」

ライライぬこ耳皇国ってコト？（後書き）

ちよっぴり皇子が壊れたのは罪悪感の反動とでも取ってあげて下さい。

生暖かい目が大事です。（苦笑）

ムタイでも走り出さなきゃいけないというコト。

「よお、”皇子さま”。」
ほっとした。

常時下着姿でしか遭遇していないから、どうしようかと思っていた。
きちんと軽装の革鎧を着ている。

例え、上は小さい面積の胸あてだけだったとしてもだ。

・・・ヘソ、丸見え。

「ん？あ、何時もの姿の方がいいかい？あっちの方が好みってんなら・・・。」

「いえ、結構です。」

ただでさえ、この城には前触れなく入室する輩が多いというのに。

「ちゃあんと合わせるよ？オトコの好みには従順な方なんだ。」
不必要な情報をありがとう。

「しかし、何でまたヒルダが？」

「行商だよ、行商。ここは税が他国より安いから。」

今は税率を下げて、色々と通りを良くしている政策の最中だった。
「んで、”裏向き”は？」

それだけの用事でわざわざ出張してくるとは思わない。

「あゝ、一応商隊を作る時にね、学舎の先生方ついでに連れて来たのさ。なんだっけ？リディア先生だっけ？頼まれて。」

「リディア先生が？で、本人は？」

「本国で拘束されたよ。色々と責任問題とやらがあつて、査問にかけられるとかなんとか。」

マズい。

査問の内容はどう考えても、複製神器の盗難と暗殺事件についてだ。

「それと皇子のトコの騎士団の世話。要りようなんだろう？」

「流石、商人。頼むよ。後で騎士団長を紹介する。」

それはそれで、間が良くて助かる。

助かるんだが、間が良過ぎる。

「ヒルダ……。」

「それくらい、皇子の騎士団とリツヒニドスの内政は注目され始めている。皇子、アンター一度中央に戻った方がいいね。」

つまり、下手をすれば、オレを煙たがり始めた貴族達に難癖つけられるという事らしい。

まあ、そうだよな。

なんたつて、今までオレの事は眼中になく、完全無視だったんだからな。

「悪い、ヒルダ。」

如何に商売という目的もあつたとはいえ、砂漠を越えて遙々オレに色々と知らせに来てくれたんだ。

感謝しないわけにはいかない。

「気にしないよ、アタシは。商売だつて出来るしね。それに言うたろ？」 好みのオトコには従順”なんだよ。」

さつきと随分意味合いが変わつた気がするが？

おかしいな、使っている単語は同じのはずなのに……。

「そんな殊勝な事を言われると、独占したくなるな。」

「商品をかい？それともアタシをかい？」

クスリと笑うヒルダ。

「お好みで。」

「皇子は面白いね。」

「よく言われる。あのさ、その皇子つての止めてくれないか？オレはそんな自己紹介した覚えはないんだが？」

「悪かつたよ、からかつて。」

絶対悪いとは思っていないだろうヒルダは、終始面白そうに笑っている。

しかしだ……この状況だと、首都に戻って更にセイブラムまで行かないとならないな。

手紙より、当事者である本人が出向いて証言した方が説得力あるだ

ろう。

となると、人選か。

人選、毎回悩むんだよなあ。

悩まない為の騎士団結成でもあったのに・・・ちよっぴりがっかり。レイアは騎士団の仕事があるし・・・バルドはもうちよっぴといてくれないと困るし。

セイブラムに行く時に向こうで兄上の兵を借り受けるってのもなあ。

「今度は何を企んでんだい？」

「企んでない、人選を・・・あ。」

いるじゃん。

リディア先生に会わなきゃいけないヤツ等が。

よし、それとこちら側から何人かなら大丈夫か。

「ヒルダ。早速だが、まず最初に優先的に防具を譲って欲しい者がいる。頼む。」

「いいよ。アルムはお得意様だしね。ついでにアタシごと買っていてくかい？」

ゆっくりとオレの首から顎先までを指の腹でなぞる。

なんでそついう事をするかなあ。

思わずのけぞってしまった。

「冗談。金如きでヒルダが買えるだなんて思わないよ。」

「ははっ、いい返事だ。」

面白くない。

からかわれるだけからかわれて、損した気分だ。

「嘘でも高く評価してもらって嬉しいよ。」

実際、評価は高い方なんだが、それを言ったらまたからかわれるのは目に見えている。

「何でこういう人間がオレの周りに集まるかなあ。」

「なんだい、そんな事も解ってなかったのかい？」

「自分の事なんて、存外わからないものさ。」

今現在のオレの存在自体が、一体どういう方法で確立しているか

もわからないんだし。

「アルムがわかってくれるからだよ。そんで埋めてくれそうだからさ。」

「なんのことだ？」

「ココの隙間をさ。だから皆、アルムに認めてもらいたいんだよ。一緒に進むコトを。」

ヒルダはぐりぐりと力を込めて、オレの胸を指で押す。

「なんだよ、ソレ。だったら、ヒルダもそうだったのか？」

「ん？ああ、アタシが”埋めてもらいたい穴”は……。」「いや、答えなくてイイデス。」

「あはははっ。」

ウヨキヨクセツでも前を向いてってコト。

「なんで俺様がこんなこと……。」

「情報が欲しいんだろ？来ないなら、こつちから行くしかないよ？」

城の中庭で旅支度の最後の確認をしながら、ハデイラムが文句を言っている。

オレに文句を言われても困るんだけど、言いたくなる気持ちもわかる。

「第一、ヴァンハイトの首都経由って……なあ、クラム？」

「考え方の問題です。タダで情報が出に入るわけがないと考えればいいでしょう？」

「それにアルム様がいれば、手続きが簡略化出来ますよ？」

クラムの言葉を継いだのはカーライルだ。

この二人、文官同士で通じ合うものがあるらしい。それはいいのだが……。

「まさか、カーライルがついて来るとはなあ……。」

オレの人選に待ったをかけたのがカーライルだ。

勿論、彼はオレの選択肢にはいなかった。

だって、このリツヒニドスの太守代理だぞ？

オレがいなくなれば、完全に太守と同等なんだぞ？いや、今も太守とさほど変わりはないけれど。

「州の政策のせいで、アルム様に負担がかかるというのであれば、自分が直接乗り込んだ方が手っ取り早いのです。」

効率重視かつ、合理的な思考ではあるんだが……内政の方は……部下が優秀だから大丈夫なのか……？

「アルム様こそ、この人選には自分も驚きです。」

「そうか？」

オレは他に連れて行く三人を見た。

三人の中で目が合った一人が手を振ってくる。

「アルム様、こっちは準備出来ましたよー。」

うん、ハデイの暴走を抑える係は別として、オレは今回の旅にま
ずホリンを選んだ。

ダークエルフを差別する今の国はどう考えても、もう古い。

それを周囲に認識させる第一歩だ。

貴族にとっては、それこそ皇子がダークエルフに誑かされたとも
思うだろうか？

それはそれで今から反応が楽しみだ。

事前にこの事は、ホリンに了承を得ている。

また珍獣扱いさせてしまいかも知れないから。

了承の返事は至極あっさりとしたものだったけれど。

「あ、あ、あの、私がお供でよろしいのでしょうか？」

もう一人は新鋭のルチル。

「ルチルは外の世界を沢山見る必要があるよ？色んなモノがあるから
ね。経験だよ。」

マール君だって言っていた。

自分達には選択の権利がない、自由がないと。

外の世界を見せるくらいしたっていいよな？

「それと、ダークエルフと亜人と人間を従えて首都に参上とか・・・」

顔が緩んでくる。

「くつくつくつ、他種族すらも受け入れられない狭量の引きこもり
貴族の驚く顔が目につかぶ。」

「アルム様。失礼ですが、本音がダダ漏れです。」

あ？

「うおつと。」

「気をつけないと、いけませんよお。首都の引きこもりだけしか
能の無い貴族様に足下掬われてしますよ。」

「・・・君も大概だね、シルビィ。」

「いえいえ。」

三人目はシルビアだ。

彼女を連れて行く事は最後まで迷ったが、リディア先生の所へ行くのに、彼女は居た方がいい気がした。

先生とシルビアには共通点も多いようだし、顔見知りというのもある。

「アルム！」

「ん？ラミアか、どうした！」

息せき切ってオレに駆け寄るラミア。

少し遅れてサアラ姫もいる。

まさか、連れて行けとか言うんじゃないだろうか？

ラミア一人ならまだしも、複数人数のダークエルフを連れて行くこと変な誤解を生みそうだ。

特にサアラ姫。

「首都に行くそうだな？」

「ああ、首都の貴族共にお小言を言われにね。」

お小言で果たして済むのやら。

「何を言う！オマエがやってきた事に間違いはない！間違っているとしたら、それは貴族共の方だ！」

そこまで言い切れるラミアは凄いと思う。

それだけで、まるでオレ自身が赦されたような気分になる。

これは錯覚なんだと思うけれども。

「私はそんなオマエに恥じる事がないよう、一度森の集落へ帰る事にした。」

「森に？」

てつきり一緒に連れて行けと言うとばかり……。

「これからのリツヒニドス。ひいては人間との共存方法を、今一度皆と話し合おうと思う。」

「………ラミア。」

「何だ？」

「オマエ、イイオンナだな。」

「フンツ！何を今更。」

勝ち誇った様に胸を張る彼女の姿は、初めて会った時を思い出す。中身はあの頃と全く別だが、世界が広がれば、人は変わる。悪い方向もあるかも知れないが、良い方向のが絶対多いはずだ。オレはそう信じてる。

「ラミア、負けるなよ。」

「オマエこそ。」

ラミアをこうやって抱きしめるのは何回目だろうか？

漠然とそんな事を思うと、時の流れを感じる。

彼女の身体を離すと、次にサアラ姫に向き直る。

「サアラ、君もお姉さんをしっかり支えてな？」

サアラ姫に手を伸ばし、彼女の頬を撫でる。

未だにオレと大して変わらない年齢なのは信じられない。

どうやっても子供のような扱いをしそうになってしまふ。

「大丈夫です。私の方が姉様よりしっかりしているんですから。」

「そうか、それはそれは頼りになるな。」

「はい！アルムお兄様もお気をつけて。」

そう言つと彼女は頬にあつたオレの手を取つてくちづけする。

彼女の真っ赤になつた笑顔を確認すると、オレは馬に跨った。

「んじゃ、行つてくるか！」

この先、どうなるかと、どうしようと、オレの道。

やるべき事はなんら変わらない。

ただ、ただ前を向いて・・・いざ、首都へ。

ウヨキヨクセツでも前を向いてってコト。(後書き)

ここから、皇子以外の視点が多めになりますが、一応 視点
と表記しますので、宜しくお願い致します。

ぬとする兄は弟想いというコト。(シゲルド視点)

「これは由々しき事態だとも取れます！」

「されど、意有りとも言えません。現にリツヒニドスは近年稀に見ぬ好景気とか。」

議論は開始からこんな調子で遅々として進んでいない。

私は別にこれに関して、全く何とも思わずただ眺める事に徹している。

貴族達が、自分の既得権益を守る為に様々な事を並べ立てるのは何時もの事だ。

今回のそれは、些か趣きが違うが。

「何を以ってそれを証明するのだ！」

「殿下はどう思われますか？」

「ん？」

自分達で答えが出せない問題の答えを私に求める・・・と。

いや、しかしだな・・・。

「多少は気分がいいな。」

「は？」

「今までこのような場で一切話題に上る事のなかった弟が、今や話題の中心。皆を見ると如何に我が弟に興味がないのか良くわかる。」

・・・ふむ。

この程度で黙り込まれても困るのだがな。

「正直に言おう。私は”皆、何を今更。”と思っているよ。」

我が弟程、人の言葉に、人の心に敏感な者はいない。

「我が弟、アルムはずっと変わらなかった、何一つな。昔から強くて聡い子だった。だから、いずれこのようなになるとも。」

それに気づかなかった者、期待せずに無視し続けた者が、今更何を言っただころで手遅れだ。

「つまり、こうなったのは当然の事。アルムはずっと諸君等を見続

けていたという事だ。諸君等と違ってな。」

恐らく、今のアルムにとって誰が敵で、誰が味方かというのは、手に取るようにわかる事だろう。

「と、言っても、これ以上議論しても詮無き事。いずれ結論は出る。」

「と、申しされますと?」

「まだ説明しろと? ああ、皆はアルムの事を知らなかったのだな。優秀な我が弟の事だ、早々にこちらに来るだろうさ。」

並み居る貴族達が啞然としているのを必死に隠しているのがわかる。

それ程、この国でのアルムの存在は薄いという事実の証明。

だが、今日からそれも変わるだろう。

少しいい気味だと思ふ私は意地が悪いだろうか?

いや、兄として可愛い弟を見守り、味方になるのは当然の事だ。

逆に何が悪い。

アルが初めて兄の私に宣言し、決意を持って成し遂げようとしている事なのだから。

第一、兄としての鼻肩目を除いたとしても、アルの努力は十分に評価されるべきものだ。

「それはそれで、実に楽しみですねえ、殿下。」

「?・・・シユドニア卿か。」

一人だけ場違いに明るい声が聞こえたと思ったら、彼か。

「こつちが面白そうな事になってしていると聞いて、戻ってみれば。いや、実に面白いですねえ。」

緊張感の欠片もない声と、独特の口調は何時になっても変わらない。

彼は昔から、面白い事、自分に興味のある事以外は、全く視界に入れないタチだからな。

「本当に何時も楽しそうだな、君は。」

「殿下。皆さんも気づいていらっしやらないかも知れませんが、ア

ルム皇子が殿下の弟であると同時に、”ウチの弟”でもあるんですねえ、コレが。」

そうだった。

彼は、シュドニア卿と貴族姓ではなく名前で皆に呼ばれているが、それはとある人物と明確に区別する為だ。

「そうだったな、失念していた。君は”グランツ”だったな。」

「はい、ですねえ。」

シュドニア・グランツ。

我が国最強のバルド・グランツ。

その数少ない直弟子であり、”グランツ姓”を名乗る事を許された男。

つまり、彼は”アルの兄弟子”になるわけだ。

「まず、ウチのアノ師匠に師事して弟子になり、且つ今までそれに耐えられてる時点で非凡ですねえ。あ、別に自分が天才とかって言ってるワケではないですからねえ。」

国内で見向きもされなかったアルを唯一評価しているのが、国内で一、二を争う注目を受ける”グランツ一門”というのが、何とも皮肉で滑稽だな。

「会つのが楽しみですな。何せ最後に見かけたのは、師匠のトコに弟子入りした直後のこーんな小さい時なんですねえ。」

シュドニアが自分の腰下を手で示す。

しかし、この黒の長髪に銀の瞳の瘦身の優男が、国内随一の双剣の使い手とは、誰が思うだろう。

「姉上も喜ぶ事でしょう・・・。」

あはは、と軽い笑い。

ちよつと待て。

「姉上というとエスリーン卿か？」

苦笑を浮かべ頷くシュドニア。

なんという事だ！

それはマズい、非常にマズい。

「というか、何故、この男はそんな重大な事を平然と言つてのけるのだ？」

「いや、元々そういう男だったか。」

「なんとか姉上の行動を阻止出来ぬか？」

「無駄だと思ひながらも、そうシユドニア卿に聞いてみる。」

「できたら、とつくに一門の誰かが殺つてるでしょうねえ。」

追悼 漫画家・和田 慎二先生。(本編とはちょっとぴりしか関係ありません。)

? 章から初登場のアルムの義娘兼義妹のオリエちゃん。

チラシ裏にも書きましたが、名前の由来は、某精霊・某水晶の姫から。

その由来ともなった作品『ピグマリオ』の作者である和田 慎二さんがお亡くなりになっていた事を知りました。

ピグマリオを知らない方でも『スケバン刑事』^{デカ}なら知っている方も多いと思います。

私は完結してから借りて読んだクチですが、その後キチンと購入して全巻揃えたくらいです。

ギリシヤ神話のピグマリオン伝説がモチーフとしていて、神話・精霊・皇子・神器的アイテムと様々なファンタジー要素を取り入れた漫画でした。

この点は、今の花束と通じるモノがあるかな、と。

30年以上前に少女漫画で男の子の主人公が旅をするファンタジーは他に類を見ないものだと思います。

漫画の中では、特に。

少年漫画では【アリオン】とかが当時あったはずですが。

そういう意味では、これが私の中の原点の一つではなかったかと思えます。

現在連載している本は、完結を見ない遺作になってしまいました。が、手塚 治先生を基礎とする昭和の漫画家の中では、間違いなくトップクラスだと思っています。

勿論、現在でも通じる素晴らしい漫画家さんでした。

ある意味、萌えメイドとかいうものの原点の漫画もこの人カモ・・・。

皆様もご興味があるのならば、どうぞご覧になって下さい。

【花束と笑顔を皇子達に。】を読んで下さる方なら、きつと気に入

るだろうと思います。

とまあ、それぐらい好きでこんな駄文をいきなり書くくらいです。

(苦笑)

ご冥福をお祈り致します。

ノコサレタ姉もいたってコト。(エスリーン視点)

「うん……。」

弟に言われるがままに何年振りかに首都に帰ってきたのはいいけれど。

しょくじき、ここに用はないのよね。

何があるのか問い詰めても弟ははつきりと言わないし。というか、ああいう性格だし。

「何で、自分の周りには変な男しかいないのかしら。」

その筆頭は弟だけねど。

第一、特にこの首都に思い入れがあるわけでもない。

「でも、まあ、この風は好きだけれど。」

城壁のとある場所。

ここからは城下と城門を斜めの角度から一望出来るお気に入りの場所だった。

しかも、城下からはこちらは見られないという絶好の場所。

何年経っても、この景色が変わらずに好きで、というコトは私の想いも変わってないというコトになる。

ただ一つ、ここに足りないモノはあったけれど……ど？

「……あれは。」

私は、その場から跳ねるようにして駆け出す。

城壁の正面、門のある位置の真上。

一々ぐるりと回って階段を使う手間も時間も勿体無い。でないと、”彼”を見失ってしまう。

跳ねるように移動していたけれど、次は本当に跳ねる！

「てええええーいつ！」

城壁を蹴り、宙に舞い踊る。

今の自分は鎧を身に着けていない、登城用の礼服だ。

「ふんぬっ。」

全身の筋肉が軋んで、着地の衝撃を出来る限り相殺しようとする。
「あ、あの、何か？」

着地の衝撃・・・大半は痺れだけけど、それに耐え切った後、ぱつと顔を上げる。

驚いた顔の男の子。

黒い髪とまんまるの黒い瞳。

まんまるなのは、驚いているからか。

でも、今はそんな事はどうでもいい。

今、目の前に彼がいる。

あの時のままの彼が！

「あ・・・あ・・・。」

「あ？」

歡喜に震える声よりも先に手が出る。

でも、ぱんつと乾いた音がして、差し伸べられた手が払いのけられる。

なんで？

私は何としても、彼に触れたくて、反対の手を素早く伸ばすと、その手もまた払いのけられる。

どうして？

疑問の答えを得られないまま私は次々に手を出し、そして次々と払い落とされるを繰り返す。

「何でっ?!」

「いや、見知らぬ人に高速で貫き手をされれば、誰でも必死に捌くかと・・・。」

・・・貫き手？

「あ、思わず力を込め過ぎちゃった。でも、見知らぬ人って、アル君酷い！」

「アル君で・・・オレは”トウマ・グランツ”って名前だけど？人違いじゃない？」

人違い？

私が？

アル君を？

ナイナイ。

「私がアル君を間違えるわけじゃないじゃない。それより”グランツ”になっただ、私とお揃いだね！」

「王姓から貴族姓になるわけじゃないでしょう？」
ん？

「あれ？でも、今、名前”トウマ”って、アル君は名前も変えたの？」

「わざと無視してますね？」

なんか聞いた事あるような声でしたが、気のせい気のせい。きつと、久し振りにアル君出会えたから、舞い上がってるんだ。もう運命だもんね、コレ。

「私とお揃いって、グランツが？お姉さんがグランツ？」

おねっ・・・お姉さん？

今、私をお姉さんって・・・アル君が・・・あれだけそう呼ぶのを拒否してたアル君が？！

「そうそうそうそう！お揃い！」

「全く人の話を聞いてませんね、この”アバズレ”は。」

「だあくれが、アバズレじゃいつ！って、カーライルじゃない。」

何処かで聞いた事ある声だと思ったら。

「何でアンタがここに？」

「カーライル、知り合いか？」

「例の師匠ですよ、アルム様。数年だけ師事してりました。」

私より先にアル君の質問に答えるなんていい度胸じゃない。

でも、アル君が可愛いから許す。

ギリギリ。

「でも、グランツって・・・。」

「エスリーン・グランツ。数少ないグランツ一門の中でも唯一の女性です。」

「へえ。」

「師匠、私は今、アルム様と一緒にリツヒニドスを治めています。まあ、忠臣の一人とでも思ってた下さい。」

忠臣・・・だと・・・？

なんて羨ましい！

「・・・やつぱり、あの時、アノ熊を首の骨へし折ってでも、私がアル君を教えてれば・・・。」

悔やんでも悔やみ切れない。

私の人生最大の汚点はきつと、それだわ。

「ところで、先程からアル君アル君と、盛りのついた犬の様に連呼していますが、お知り合いですか？」

「・・・実は他のグランツ一門に会った記憶がないんだが・・・。」

私の目の前で首を傾げるアル君、何年経ってもその姿は可愛い。

そう、私と会った記憶がなくて・・・も？

「と、皇子はおっしゃっていますが？」

記憶がないって・・・いや、きつと小さい頃の事はあまり覚えてない人間なのね、そういう人もいるもの。

うんうん、ちゃんと話せば思い出してくれるに違いないわ。

「あ、一人だけいたな。ニヤケ面の・・・ニア・・・ニア・・・えと、”シユドニア”だったかな？」

「なんでえっ！なんであの馬鹿弟のニヤケ面だけ覚えていて、私は覚えてないの?!」

「え？シユドニアの姉さんで・・・熊も素手で倒す大女じゃ・・・。」

「な、なんですって・・・？」

誰がそんな事を・・・。

「踵落とし一発で猪を捕まえたり、声だけで飛ぶ鳥を落として捕まえたりして、生肉をそのまま食すとかいう・・・”アノお姉さん”？」

「まあ、確かに師匠なら、一番最後の以外出来そうで恐いですね。」

「出来るかつ！」

そんな話を一体誰が。

「よく昔、兄上とニアに聞かされて、夜の尿意を必死に我慢したっけな。」

「体のいい怖い話代わりですね。しかし、小さい頃のアルム様は可愛らしいですね。」

それは大いに認める。

しかも、それは今も変わらず。

けれど……。

「あのクソガキ共、アトで殴^ヤル。」

根も葉もない事を。

確かにグランツの時点で、か弱いとは言わないけれど、心はこれでも乙女なのに！

「さて、師匠はほつといて、さっさと用事を済ませてしまいましょう。」

「用事？」

「ええ、ちよつと貴族達のド肝を抜きに。」

こう微笑むカーライルはロクな事をしでかさない。
でも……。

「私も一緒に行くわ。」

この怒りをあの馬鹿共にブツけに。

オオシバイ前は大変というコト。

道中で空から人間が降ってきて、一緒に行く事になった。

こう言つと酷く意味不明で、自分の頭がおかしく思われそうであれ
だが。

でも、そこは流石、ヴァンハイトの歩く治外法権と言つてもいいグ
ランツ姓。

案外、第二皇子としてのオレより謁見の間への手続き簡単で早いん
じゃないか？

あつという間に控えの間の一室に通されて、謁見の準備をしている。
「ん？でも、カーライルは貴族姓ないよな？」

グランツの一門、或いは又弟子全員が”グランツ姓”を名乗るわ
けじゃないから、なくても不思議じゃないんだが。

一門の誰かから教えを受けたのなら、それ相応の貴族の部下とか養
子になつてもおかしくない。

それと今なら、腕力で云々というのは、別の師匠の事なのか？
意外とカーライル強いとか？

「ええ、直弟子ではありませんし、主に他国の文化と流通の勉強中
心ですから。それに……。」

「それに？」
「下手に貴族姓を持つたら、身動きしづらいですし、家内と結婚出
来ませんから。」

「そお、奥さんとね……ええっ?!」

カーライル既婚者だったの?!
そりゃ、独身とも言われてなかつたが。

「家内は平民の出なもので。」
つまり、貴族姓を持つと、身分差が生じて婚姻が難しくなると。

……貴族の結婚、特に貴族同士の婚姻には許可がある時が大半だ
しな。

「オレ個人は自由恋愛推奨派だからな。」

「そう仰ると思いました。」

「しかし、カーライルの奥さんかぁ……。」

どう考えても慈愛に満ちた超美人か、完全武闘派の筋肉女しか想像出来ない。

「自分には出来過ぎた人です。」

だろうね。

凄い人なんだろう、どう考えても。

でもいいなぁ……。

「アルム様、準備できましたかつ……。」

部屋に入ってきたホリンがオレを見て止まる。

口をぽかんと開けたままのホリン。

口に蜘蛛の巣張るゾ？

「どうした？」

「い、いえ、その格好に驚いたというか……。」

「貴族達もホリンくらい驚いてくれるといいな。なあ？カーライル？」

「そうですね、驚いて頂いて、有無を言わせぬうちに言いたい事をまくし立てて退散してしましましょう。」

悪どいな。

完璧悪者の立ち位置だぞ。

「どうしてグランツの弟子は皆、こうなのかしら。」

ホリンの後から入ってきたのは、エスリーンさんだ。

昔、兄上と一緒によくいたシュドニアの姉……らしい。

全くオレには覚えがないが、向こうはオレを知っているようだった。

薄桃色の髪と瞳に白い肌。

およそ武人とは思えない細身。

体格だつてレイアよりがっしりしていなく、普通の女性と変わらな
い。

いや、それよりも痩せている。

どう見ても、熊と素手で戦えるとは思えない。

「グランツの弟子って、まず師匠が弟子でしょう?」

ちなみにオレもです。

末弟になります、はい。

「アンタのそういうところ、可愛くないわ。アル君、格好イイ。」

「あ、ども。」

どうにもこの人との距離感が掴めないんだよな。

いや、向こうはほとんど防御も距離も皆無なんだが・・・オレの立ち位置が不明。

寧ろ、迷子。

「さてと、許可が出次第、乗り込むかな。」

なるべく当たり障りのない反応をエスリンさんにはする事にしただ。

さつさと済ませないと城下街の宿に置いてきたハディラム達を苛立たせる事になる。

流石に人数が多いし、説明する時間が勿体無いという事で彼等を置いておく事に納得してもらうしかなかった。

ちなみに、シルビアはセイブラムまでの旅程に必要な食料などを、城下街で買出ししてもらっている。

「ルチル、裾踏んでるぞ?調整してやろう、後向いてごらん。」

「あ、す、すみませんっつ。」

「気にするな。いいか、君はオレの自慢の部下だ。なんら臆する事はないよ。いざとなったら、ルチルを担いで逃げるから。」

オレは彼女の耳のつけ根を撫でる。

実際、オレの騎士団という名目の彼女が、オレに抱え上げられて逃げるというのは、どうかと思うのだが、それはこの際どうでもいい。

「はっうう〜。」

「師匠、ヨダレ、垂れますよ?どんな変態さんですか?」

「はっ?!!う、うるさい。」

何か騒がしいな、あっちの方。

「ホリンはオレの右手後方、ルチルは左手後方な？」
「りょーかい。」 「わかりました。」

相変わらずホリンは緊張感ないな。
反対にルチルはガチガチだ。
足して等分出来ないかな、この辺。

「カーライルは、オレの左手前側で先導なー？ 聞こえてるかー？」
なにやら向こうは向こうでモメているみたいだし。

「聞こえてます。」

あ、返事があった。

なら、大丈夫か。

なんせ、カーライルだしな。

「アルム様、アルム様。」

「うん？」

ニヤニヤしながらオレの腕を引くホリン。

いや、本当、城内にいる時くらい大人しくして欲しいんだが……。
「元気が出るヤツ。」

ホリンは微笑んだ後、オレに顔を突き出すような姿勢のまま……

あゝ、コレって、アレか？

アレだよなあ？

「……次からこういうのナシな。」

女性の無言の要求や抵抗って、男には拒否権がないような気がする。
る。

根本的というか、本能的というか、そういう意味で。

オレはホリンの頬にくちづけをする。

「ルチル、手！」 「はひいつ。」

次にルチルの手の甲に。

「頼むぞ、堂々とな。オレの自慢の部下達。」

深々と頭を垂れる二人。

「……師匠、ヨダレ。」

「はっ?!」

クウゲンに黙る皇子ではないってコト。(シゲルド視点)

さて、予想より数日早かったが、予想を上回る分には問題はない。だが、問題はどうかやって、この状況を乗り切るか。

「アルム皇子、参られました。」

一斉に広間の大扉に向けられる視線。

あらかじめ、私があそこまで言ったからには、注目せざるを得ないだろう。

さあ、アル。

舞台はこの兄が整えたぞ。

「フ。」

正装の男に先導される弟の姿を見て、周りにいた誰もが息を呑むか、或いは目を見張る。

黒と蒼を貴重にした鎧を上から下まで纏い、背には蒼の外套が靡く。その後ろに静々と控える二人は、黒い肌と丸い耳。

ダークエルフと獣人・・・亜人か？

二人とも礼服の正装ではなく、鎧姿だ。

「兄上、お久し振りです。」

周りの視線が目に入っていないかの如く振舞う弟に、兄としては笑みがこぼれそうになるのを耐えるのに必死だ。

「ああ、元気そうだな。皆になにやら説明したい事があるとか？」

少々わざとらしいか？

「ええ、カーライル。」 「はつ。」

カーライルと呼ばれた先導の男は、私に一礼すると朗々と説明を始めた。

「リツヒニドス太守代理兼副太守のカーライルと申します。以後、お見知りおきを。」

そう前口上の後の説明はとどまる事なく、よどみなく進む。

現在の政策に始まり、それにより発生する利益、その利益を更に運

用した改革計画の内容。

素晴らしいのは黒字ではなく、赤字も説明する点。

そして、それをすぐに黒字転化する政策の説明という突っ込みの入れにくい点だ。

「以上、次にリツヒニドスにて結成された騎士団についてです。」

一気に言い切ったな。

皆に動揺が広がっている間に、有無を言わず事実だけを淡々と。

「それについては皇子から。」

「うむ。今回の騎士団設立についてだが、規模はごく小さなもので団員数は五十名前後。兄上が采配を振るう近衛第一師団の半数以下。」

規模の問題から入ったか。

「目的は私の命令だけでなく、個々の判断で必要な時に民の為に動く集団。基本的にそれ以外で動く事はないと思っ頂きたい。」

あからさまに翻意ありとは誰も言わないが、目的・規模共に特段問題は無い。

貴族の中には、私設の兵団を持っている者も多い。

彼等の規模とそう大差ない。

「ちなみに。今、私の後方に控えている二人は、その一員。」

ここできたか。

辺りがざわつく。

それはそうだ。

ダークエルフに亜人、そんな人種を入れている者は貴族達の中でも皆無だろう。

私としてはアルらしいとしか、言いようがないが。

この話に反対の考えの者が多数いるせいか、貴族達の中からは様々はざわめき声が聞こえてくる。

中には、『ダークエルフ如きが騎士などと……』という声も聞こえる。

「あ。」

「殿下。」

シユドニアも気づいているようだ。

皆はよく平気だな。

アルが”殺気を放っている”というのに。

完全に怒ったな、アレは。

アルは我慢強いし、常に温厚だ。

だが、怒らせるとその怒りはなかなか治まらないんだ。

「今、なにやら如きと聞こえたが。さて、では諸君等に一人一人聞いてみるとしようか。諸君等がどれ程ダークエルフや亜人という種族の事を知っているのか。」

む、止まらないな、コレは。

まあ、良いか。

私に向けられているわけではないし。

「まさか、森に住んでいる肌の黒い耳の尖っている或いは、獣の如き耳がある種族というだけでは終わらないはずだ。それ程彼女達の種族に関して博識だから、そう述べたのだろう？」

ここで皆、ようやく自分達の首を自分達で絞めている事に気づき始めたか？

「まさか、皆、ダークエルフや亜人がどういふ種族か知らずに反論しようというわけではあるまい？その根拠を提示してもらいたい。」

狼狽するような表情、或いは困惑する表情で、皆一様に視線をアルから逸らし始める。

『しかし、人と違う種族に皇族の命を護らせるなど・・・なあ？』

・・・終わったな。

”殺気”にすら気づかない危機意識の低い貴族など、ヴァンハイトには不要だとは思うが、そういう輩は何より自滅していくものだ。

「信用がならんと？たかが外見の違いで？外見なぞ、同じ人間同士でも違うというのに。ならば。」

アルが自分の腰に下げた剣を剣帯から外し、床にほおり投げる。

「それを確かめてみればいい。誰かその剣で私を刺せ。何、罪にも

問わんし、私は第二皇子だ。皇政にはなんら影響は無い。そうすれば彼等の種族が如何に忠義に厚いかわかるぞ？まさしく身を以つてな。」

ニヤリと不敵に微笑むアルの怒りが完全に頂点に達したのが、誰の目にも明らかになったというところか。

「さあ、どうした？」

こうなると、逆に皆が哀れに思えてくる。

「それとも、この者達が女性だからダメなのか？女性の騎士の武は男と比べて劣るとでも？」

話題を変えた瞬間の皆のほっとした表情・・・甘いな、こんなのでアルの怒りが解けたら何の苦労もない。

一番簡単な方法は怒らせない。

次は、治まるまで延々顔を合わさないように逃げ続ける。

その証拠に・・・。

「女だから武に問題があるのかなら、試しに私と今から戦ってみたり、する？」

アル達の後ろからひよこりと顔を覗かせる影。

「姉さん・・・。」

天を仰いだシュドニアの顔が引き攣っているのが、手に取るようにわかる。

止める前に出会ってしまったか・・・投了だな。

国内最強のバルド・グランツに師事し、直弟子のエスリーン・グランツ、シュドニア・グランツの支持。

そして第一皇子の私の支持がある時点で、もはや正攻法・・・いや、力尽くても邪魔は出来ないだろう。

武や知は後天的にある程度の取得が可能だが、”人を得る力”だけは全くどうにも出来ない、運というべき才能。

これだけは私はアルに一生かかっても勝てないだろう。

そういう意味では、先天的にアルは皇王としての器を持っている。

「さて、もはや誰も異論はないな？アルム、そのままの姿勢で日々

励むがいい。」

私に今出来るのは、このアルの為に用意された舞台の幕を下ろすだけだった。

ヤサシサは伝染するというコト。(シユドニア視点)

「そこそこ面白かったというか、アル君らしいですねえ。」

相変わらず、彼は予想以上に面白く、予想以上に素晴らしい。

「自慢の弟だからな。」

もうすでに広間には誰もいない。

と、いうか、ああいう輩はいなくても大して問題ないと思うのですけれどねえ。

「どうした？」

「いえ、皇王になるのまで大変ですねえと。」

ああいうのを相手にしていかなければいけないところなど特に、ねえ。

あんなのがいても、この国は何も面白い事になったりしないのに。

「政務の補佐は大変だとは思いますが、私が皇王になるとは限らんぞ？」

そうそう、最低このくらいは面白くないと。

全く、最近の貴族と言ったらダメダメですねえ。

「流石は殿下。」

本当に飽きさせない。

何時も以上にニヤけてしまいそうですよ。

「君くらいだよ。こんな事を言っても褒めるのは。」

「そうですか？まあ、個人的には国がどうなるうと知った事ではないというのが本音なものでねえ。あ、不敬罪とかやめて下さいねえ。」

そんな事をするような人ではないと知っていますが。

「不敬も何も、仕える価値がないというのなら仕方ないだろう？皇位だって、アルに足りなかったのは、政治への関心と経験だけだ。味方も少なかったが。」

「そういう意味では、リツヒニドスへ行った事で改善されたと？」

「元々、皇王の器を持っていた。」

だから、どちらが皇王になろうと構わない・・・か。

「酷く、自己中心的で個人的な事を言わせて頂きますとねえ、先程国はどうなるうと言いましたが、ご兄弟のどちらかが皇王である限り、忠誠はお誓い致しますねえ、殿下。」

この二人のどちらかが皇王でも、この国は面白くなる。

「しかし、随分とグランツ一門は、アルを買うな？」

「あゝ、グランツ一門全員がというわけではないですねえ。」

「そうなのか？」

「少なくとも、私と姉は個人的にですからねえ。」

しっかりと覚えてますよ、アル君を初めて見た時の事をねえ。

「アルの才能はそこなのだろうな、人を引きつける。」

「才能も磨かなければ同じですよ。」

幼い頃、初めて彼を見た時、呆れていた自分がいた。

「殿下。ご存知ですか？グランツ一門は、誰一人としてこの国の出身の者がいないんですねえ。」

彼以外は。

「何が言いたい？」

他の選択肢もなく、このヴァンハイトに連れて来られて、この国の騎士となる事を勝手に決められて・・・。

訓練自体は嫌いではなかった。

ただすぐに飽きた。

教えられる事の全ては、あつという間に出来てしまって、全てがつまらなかつた。

更にどんなに強くなるうとも、既に選択肢はないと告げられていたし。

ただ惰性のように生きる日々の中で。

「アル君だけがね、私達の特別だったんですねえ。」

全ての意味を見失った自分の目に映った彼。

どんなに傷だらけになろうとも、倒されようとも諦めない。

立ち上がり、立ち向かう。

誰にも期待などされていないはずなのに、それでも彼は毎日のように訓練し続けた。

何の為に？

「アル君はですねえ、ただただ、その時の為に、必要な時の為に振るう剣が欲しかったそうですよ？」

「アルらしい。アルにとって自分も大事なのだろうが、それは誰が為にある自分なんだろう。」

まだ見もしない誰かの為に振るう剣が欲しい。

それだけの為に剣を覚える姿は衝撃的だった。

「自分を信じてくれる者の為に振るう剣。とても眩しかった・・・。」

「それがアルの根幹で、全てなんだろうな。自分が誰にも必要とされてないと思うからこそ、誰かを大切にしたい。自分を必要としてくれる者なら尚更。」

あの頃の私は、自分の剣の振るう後先に誰かがいるなんて思いもしなかった。

しかし、彼は、今のアルム皇子は己の剣を持って命を賭す相手に意外と見境が無いですねえ。

それがダークエルフであろうと、獣人であろうと。

何と面白い事なんでしょうねえ。

つまりは、私達のような”ヴァンハイト出身ではない何者にもなれない者達”でも構わないと。

まるで”世界の皇”。

そうですねえ、もしもそういう存在がいるとしたら、きっとそんな御心を持つ者なのでしょうねえ。

「少なくとも、私達、姉弟はずっとアル君の味方だという事なんですねえ・・・。」

ヤサシサは伝染するというコト。(シユドニア視点)(後書き)

プロットを詰めた為に、いろは順を消化し切れませんでした。(泣)
というコトで、?章は以上になります。

次回はお約束のエピローグ!

2本ありますので、宜しくお願い致します。

「ぶはあつ、重い・・・やってられん。」

オレは自分から身につけていた鎧をさつさと脱いでいた。

「この重さはオレには無理だな。カーライル、これ、ヒルダに返しておいてくれ。」

やっぱり、急に思いついて借りた物はダメだな。

他の装備に合わせて借りただけだし、仕方が無いか。

実はホリンの装備も、ルチルの装備も見栄え重視の借り物だ。

「さて、ここにずっと居ても、貴族様方に囲まれそうだし、さつさと撤収するか。」

あれだけ高圧的に出ても空気の読めない貴族はいるだろうからなあ。

もう意外と末期なんじゃないだろうか、この国。

「ああ、エスリーンさん、先程はありがとうございました。」

流石、グランツ姓。

向かうトコ、敵無しだ。

「どうぞ致しまして。」

「何かお礼したいトコなんだけど・・・。」

生憎、そんな時間的余裕も気力もない。

「先を急ぐもので。あ、ホリンもルチルも何時もの服装に戻っていないぞ。カーライル荷物の整理を。」

「急ぐつてリツヒニドスに？」

「ああ、城下の宿に部下と知り合いを待たせているんで。」

なんか、やりにくいんだよな、この人の雰囲気。

何が原因なんだろう？

「その後は？」

「ホリンとカーライルはリツヒニドスに帰します。」

別にホリンは、本当はオレの騎士でもなんでもないしな。

「アル君は？」

「オレは……。」

「姉さん！全く、貴女って人は……シグルド殿下が困ってましたよ？」

唐突に乱入してくるニヤケ面の男……で、エスリーンさんを姉と呼ぶってコトは……？

「シユドニア？」

「いやあ、坊ちゃん、覚えていてくれましたか。先程は格好良かったですねえ。」

「……この……バカニアあつ……！」

これまた更に唐突にエスリーンさんの正拳がシユドニアの腹に……めり込んだな。

「おぶうつ。」

「全く、アンタのせいで、私に対するアル君の印象が悪くなったじゃないの！」

今の一撃を見た限りでは、あながち間違いじゃない印象を持ちますが……。

しかし、本当にオレ、昔にエスリーンさんに会った事あるのかなあ？シユドニアはすぐにわかったんだけど……思い出せない。

全く。

「い、意外と間違いじゃない印象だと思うん……ですけどねえ。」

「とりあえず、姉弟で盛り上がっているみたいだし、さっさと片づけを始めるか。」

次はセイブラムだしな。

また砂漠地帯を越えなければならない。

騎士のルチルは別として、シルビアは侍女だから、旅の道程もそんなに強行なものには出来ないだろうし、出だしから躓くわけにはいかない。

「よしっ、準備が出来次第、カーライルとホリンは急いでリツヒニ

ドスへ。残りの工事頼むぞ。」

「かしこまりました。」

「早く帰ってきて下さいよー。アト、お土産。」

「へいへい。」

ホリンは相変わらずだ。

前も同じ事言ってたよな？

これって、これからオレが何処かへ行く度に毎回ってコトなのかな？

「カーライル、最悪の場合は……。」

「亡命者一名という事で宜しいでしょうか？」

流石。

最後の手段だけだな。

「なにやら、物騒な話をしてますねえ？」

「ん？そうでもないよ。秘密だけど。」

横合いからニヤニヤと割り込んで来るシュドニアは、意外と平然としている。

「アル君は昔から、人の思考の一步上を行くのが好きな人でしたからねえ。もう何か起きてから楽しむ事にしましたねえ。」

ああ、なんか、こんな反応の薄い事無かれ主義な感じの人だった気がする。

「亡命って、アル君、何処かに行っちゃうの？」

エスリーンさんが、瞳をウルウルさせながら、オレを見上げる。

ああ、このやりにくさとか距離感って、アレだよ。

ミランダに近いんだ。

どつりで……納得。

「別にオレが亡命するとかじゃなくて……まあ、これからの訪問先からというか……。」

「秘密じゃなかったんですか？へぶらあつ。」

素早い蹴りで吹き飛ばされるシュドニア。

誰が蹴ったかはもうわかるだろう？

「ちよっくら北のお隣にね。」

セイブラムはここから北の国だ。

隣国という意味では、お隣。

「あー、だったらついでに私も行くー。」

「え？」

「だってー、私、北東部の樹海の境界線の警備隊の教導だし。北ならついで。」

「全然ついでになっでびゃっ。」

綺麗だな、踵落とし。

つか、それは死んだんじゃないか？

腐ってもグランツ一門だから大丈夫か。

クマも殺しても死にそうにないしな。

「ね？いいよね？アルくうん 私、昔よりずっとずっと強くなったんだからね！」

昔、何があっただらろう？

バルドに剣を教えてもらいに行つてた時だよな。

大体シュドニアに会った時だっつて……ん？

シュドニアに初めて会った時……。

デイーンの剣を手に入れて、バルドに弟子入りして……それで。

「……勘弁してくれ。」

もしかしなくても、オレ……記憶が欠落し始めて……る？

「はぁ……よし！さっさと北へ行くぞ。エスリーンさん、ついて来るなら急いで支度して！」

「いやあつたあつ！」

何を失くしたとしても、オレはオレ。

最後の最後まで、その刻が来るまで。

マシロがそこにはあるんじゃない。〜エビローグ〜【皇子の旅立ちと

キリが良いので、土日更新致します。

「ねえ、アルム様？」

宿に待機している皆と合流する為の移動中。

私はこっそりとアルム様に声をかけた。

「どうした？」

「ちゃんと帰ってきますよね？」

アルム皇子は、何時もの心配そつな表情で私を見る。

何時だつて、この人は一生懸命だ。

「何を言ってるんだ？ちゃんと土産は買ってくるぞ？」

「そつじゃなくて……。」

だから凄い心配。

必死だから、自分を顧みない。

この皇子は本当に鈍感で、全力で愛を注がないと、自分が愛されているとは思ってくれない。

ずっとずっと周りでうんざりする程騒がしくしないと、どんどん考え込んで、底無し沼に沈んじゃうんだ。

「むう。愛情がないなア。」

「は？何を言ってるんだか。」

なんかつままない。

つままないよ。

「本当は皆、アルム様について行きたいんだからね！」

そう何処までだつて。

「ホリン……。」

「でも、そりゃあ、アルム様が大変だつてわかってる。だから、自分出来る事やってアルム様を待ってるの。」

だから、ラミア様だつて、サアラ様だつて、エルフの森に戻ったんだ。

レイアさんもザツシユさんも今頃騎士団の仕事を頑張ってると思う。

「愛情はあるよ。だから、オレは前だけ見ていられる。」

「わかつてなあーいつ。」

私はずかずかとアルム様に近づく。

「アルム様、コレ、何かわかります?」

私は自分の首をアルム様に見せつける。

「これは……。」

私の首にはずっと紅玉のついた黒の首輪がついている。

出会って、リツヒニドスに着いてから買ってもらった物。

「私だけじゃなくて、私達はもうアルム様がいないと生きていけないですよ?迷子と同じになっちゃうんだから。」

もうアルム様は私達だけの皇子様じゃなくなっちゃったかも知れないけれど……。

だからって、無理されるのも嫌なんだよね。

「迷子か……。」

アルム様の寂しそうな目、時折するこの目が大嫌い。

「だって、もう私達、アルム様に出会っちゃったもん。もう無かった事になって出来ないんだから。」

「そっだよな……。」

「うひゃあつ。」

黙り込んだアルム様が突然、私の腰を持って抱え上げる。

「沢山、お土産買って帰らないとな。今度は皆の分。」

そうそう、皇子様は何時も余裕を持ってこうじゃないと。

「あはは。視点高い。」

「ホリン、悪かったな。」

「いえいえ。」

私はアルム様の首に手を回す。

……うくん、やっぱりアルム様のコト、大好きなんだなあ、私。

今まで、自分がダークエルフ良かったと思えた事すら一度もない私に色んなモノをくれた。

そのまま、このままの自分で傍にいていいと教えてくれた人。

「アルム様、言ったじゃないですか。」私達から離れていけない限り”は一緒にいるって。”

目をじーっと見つめる。

まだ後ろ向きな感じがするなあ。

「ちゃんと私を飼ってくれるんでしょう？」

ペロリとアルム様の唇を舐める。

唇が意外とぷにぷににしてて柔らかいんだよねえ。

「あーっ！アル君達、何やってんの！」

もう、折角久し振りにイチヤイチャしてたのに。

「エスリン様、気にしないで下さい。私とアルム様の儀式みたいなもんですから。」

「ぎ、儀式？！そんな儀式聞いた事ない！」

この人もアルム様に手を差し伸べられたクチなんだろうなあ。

「だって、ダークエルフの儀式とかじゃないもの、ねー？アルム様」

「儀式だったのか・・・。」

呆れたように、でも、少し微笑んで。

何時もの良く見る表情。

「私とアルム様だけの・・・愛の儀式？」

首を傾げて、とりあえず聞いてみる。

「あ、あ、あいの儀式って・・・。」

「正しくはないが、間違いでもないか。」

完全に否定しないアルム様。

なんか、可愛いなあ。

あ、そういえば年下なんだっけ。

そう考えるとますます凄いなあ。

「だって、私はアルム様のモノだもん。」

勢いをつけて、アルム様の唇に自分の唇を重ねる。
んふふ、役得、役得。

最近、ずっとお留守番だったからね。

これくらい、いいよね？

「あ、あ、あ……。」

横で硬直しているエスリーン様には悪いけれど。

「アルム様のお傍にいる女性だけの特権なんですよん」

「……あのなあ、ホリン。」

ちよつと自慢しちゃった。

てへっ

私はそのまま、アルム様の耳元に口を近づけて……。

「皆、大好きですよ。」 私達の皇子様”の事が。」

そう呟いた。

彼の無事を心から祈って……。

ケツシテ変わらぬ想いがあるというコト。　　くエピソードくく【昏の歩みと。】

北を目指す皇子一行。

リディアを救う為に、神器の盗難の真相を確かめる為に。

一方、皇子の記憶の混濁が始まり、ついに・・・。

果たして皇子は帰りを待つ愛すべき者達の所へ帰れるのか?!

以上、?章全44話、ご愛読ありがとうございました。

以降の連載は、何時も通り皆様の反応次第というコトで。

？章のチラシ裏。(前書き)

需要があるとは思えないとはわかっていますが、一応チラシ裏です。
ああ、何時ものお茶濁しか。とでも思ってお下さい。

？章のチラシ裏。

・ロザリア

赤毛がかつた茶の毛並みに尖った耳。金色の猫目。

亜人の一人で前章で亡くなったマールの姉。

亜人の中では大柄で獣人寄りに分化している。

アイシャ姫のお供としてヴァンハイトに來国した。

その目的は弟を殺害したアルムに会う為である。

もともと復讐や仇討ちなどは考えていなかったが、

”どうあつても殺した事には変わりない”とするアルムの潔い態度に彼を赦すと述べた大人。

彼がこれから成すであろう事を先見の明を以って気づいているのかも知れない。

ブツ飛んだ姫であるアイシャ姫を冷静にたしなめるくらいの意味でも大人な人である。

愛称はリア。

名前の由来は、十字架から拝借した。

・ルチル

赤毛の短めの毛に赤茶の丸目。丸い耳を持つ人寄りの亜人。

アルム待望の獣耳の部下である。

武はそこそこだが、知能は非常に高い。

アルムがリツヒニドスで創設した騎士団の第一期メンバー。

引っ込み思案で上がり症な為、初登場から激しいまでのドジっ子属性を噴出させた。

そういう意味では、ミリイといい勝負かも知れない。

耳のつけ根を撫でられるのが弱いのか、アルムに撫でられる度にはううゝ。「と小さい身体を更に小さくしている。」

本編では未だ活躍はないが、副団長に推されるくらいなので、文武両道ではあるのだろう。

ちなみに彼女が使用する武器は、いずれ本編で華々しくデビューする事だろう・・・多分。

名前は、某海溝に沈むNTから取った。

わけではないが、獣人・亜人の女性はラ行にしようかなと思ったからである。

・ハディラム・ジューザ

短いツンツン頭、別名芝生頭に細めの鋭い目つき。

見るからに堅気じゃない仕様の男。

ヴァンハイト皇国から北東に広がる今は無名の傭兵国家の末裔。

どういう経緯かはわからないが槍型の神器を継承している。

本編では、現存する神器の中で最強クラスであり、クロアート帝国に奉られている神器と対になると述べていた。

本人は竹を割った性格で、ざつくばらん。

北東の訛りある言葉を話す。(一部関西弁に酷似。)

神器の盗難事件について、何やら知っているかのようにだったが・・・

中華服のような貫頭衣を着用している。

名前の由来は、他の登場人物の名前がドイツ・北欧圏なので、出身が地方のハディラムは、違う圏の名前にしたかった。

ハーディーンという名前の響きを詰めて。

・クラム

中分け黒ロン毛の文官タイプ。

冷静沈着でハディラムをサポートしているのが、ハディラム相手には突っ込み役にしかなくていい。

全体的に口が悪いというか、慇懃無礼。

本編では戦闘シーンは書かれていなかったが、拳闘を得意としている。

全体的にゆったりとして、ヒラヒラな服を好むのは相手の距離感や注意力を散らす為。

神器については、かなり詳しい。

クラムという名前の由来は王をサポートするというか、王である人間を証明する。

クラウン（冠）から取った。

・シユドニア・グランツ

黒髪に銀の瞳。

国内最強のグランツ姓。

一代限りの貴族姓を持つ、グランツ一門の一人。

一門の人数自体は両手の指にも満たないが、グランツを名乗れるのは更に少ない。

正統な双剣の使い手で、双剣使いという意味では国内最強クラス。

（バルドが長剣使いに分類される為。）

シグルドと同世代で、何故か馬が合うらしい。

常に締りのない表情でニコニコ笑っており、「くねえ。」というのが口癖。

人をからかうのが好きで、幼い頃のアルムをからかって遊んでいた。その一端が、姉であるエスリーンという人間のある事ない事話である。

バルドに弟子入りをして修行していたアルムの根性とその誠意ある心を買っており、

ミランダとシグルド以外に味方がいないと考えていたアルムを認めている人間の一人。

姉にだけは突っ込みとイタズラが出来ても、最終的には頭が上がり

ない。

意外と、事なかれ主義で、そのクセに面白い物好き。

・エスリーン・グランツ

薄桃色の髪に同色の瞳。

細身で白い肌からはその強さが想像がつかないグランツ一門の一人シユドニアの実姉である。

彼女も幼い頃のアルムを知っており、出会った事がある。

その時の影響か、異常ともいえる程アルムに執心している。

アルム曰く、姉モードのミランダに近いらしい。

彼女とアルムの間になんか経緯があったのかはわからないが、それを励みに今日までやってきた割と一途さん。

その強さは、シグルドとシユドニアに怖い話として夜な夜な幼いアルムが聞かされていた。

ある程度は誇張だが、その大半が出来たとしても別に驚かないというカーライルの弁からもわかるだろう。

エスリーンの名の由来は、某勝気なおてんば王女様から。

・カーライルの奥さん

実は既婚者だったカーライルの奥さん。

本編には名前すら出ていないが、アルムの想像は慈愛に満ち溢れた人格者or完全武闘派の筋肉女。

果たして、本編の登場はあるのか?! (ヲイ)

？章のチラシ裏。(後書き)

さて・・・続きですか、続き・・・続き・・・うん・・・。

序。

ホリンとカーライルと別れ、一路北を目指していたオレ達。今はその道中。

実は国境地帯にもまだ辿り着いてなかった。

その内に日は傾き、完全に夜になる前に野宿の準備をする事に。女性陣もいる事だし、本当は街道の宿場に泊めてやりたいのだが、なにしろ先を急ぐ旅。

日が出ている内に出来るだけ進みたい。

結果として野宿するハメになるわけだが。

「大丈夫かシルビィ。」

樹海出身の戦士二人に亜人、そしてグランツ姓の騎士。

言い方が悪いが、コイツ等よりは圧倒的に体力が少ないだろうシルビアに声をかけ、横に座る。

「はい。アルム様こそ、お疲れのようですよ。」

「そうかな？」

心の読めるシルビア相手の会話は、楽な反面、不便さを感じる時が正直ある。

読んだ事の全てを口に出すような人間では決してないからいいものの……。

オレは別に疲れてはいない。

ただ銀剣の使い過ぎと長時間馬上で揺られたせいか、感覚がおかしい。

それとたまに唐突に睡魔に襲われる。

前者は初めての事じゃないからまだしも、後者は初めてだ。多分、肉体にまで魂の影響が始めているのだろう。

ここまですると意外と冷静に分析出来ている気がする。やるべき事も山積みになっっているせいだろうか？

「ちよっぴり顔色悪いかな？アル君、昔大病を患ったし。」

心配そうに覗き込むエスリンさん。

常時姉の顔している状態のミランダがいるみたいだ。オレの病の事を知っている時点で、彼女がオレの幼い頃を一応知っている事にはなるんだろうが、対面した記憶がないんだよな。シユドニアとの初対面の時の記憶も無い。

「アル君？」 「アルム様？」

はっと気づくと、二人が両脇から覗き込んでいた。

て、近いデスヨ、二人共。

「大丈夫。ちよつと考え事。ほら、旅程とか。個人的には二日以内には国境付近に行ければいいんだけど・・・。」

「そりゃ大丈夫だろ。この調子なら。まさか野宿が大丈夫なタチだとは俺様も思つてなかつたわ。」

水袋から飲み物を口に流し込みながら、ハディラムが近づいて来る。

「ハデイ、それ、酒？」

「水や！明日も馬で移動なのに呑んでられっか！」

「酒なんて、この状態で呑んでいたら、私が張り倒しますから大丈夫ですよ、皇子。」

何が大丈夫なんだろう。

もうこの人の口の悪さとか、突っ込みに慣れ始めている自分も、かなりの順応性だと思う。

「だから、酒じゃねえっつーの！」

「アルム様ー。お夕飯の支度が出来ましたっ。」

そうそう、ルチルは料理が得意だそうで、オレ達の胃袋を満たしてくれる係を買って出てくれた。

今もすごくいい匂いがしている。

「近くに食べられる野草が自生してて助かったな。」

「そうですねー。一品増えました。」

にこやかにルチルと談笑出来ているのは、悪くない。

「野宿も野草も構わないって、どんな皇子だよ・・・。」

「そうか？皇子だから毎日高級なモノとか、贅沢三昧という考え方がどうかと思うぞ。」

「そんなもんかねえ……。」

呆れているハディラムには悪いが、なんと言うか、無駄としか思えないんだよなあ、ああいうの。

どちらかという郷土料理とかを皆で囲んで。というのが、オレは楽しくて好きだ。

「いくら直轄地の天領だからって、その分を民に回した方が楽しくて有意義な気がするんだよなあ。大体、ルチルの手料理っていうのもオレにとっては価値が高い。」

オレの止めの一言にハディラムは方を竦めた。

「アンタは馬鹿だから、経済の仕組みを理解出来てないだけです。」

私はよっぽど皇子の価値観の方が素晴らしいと思います。ともかくお夕餉と致しましょう。」

序。
(後書き)

正直・・・もうダメぽ。

フグリな弟ではないってコト？【前】

ルチルの作った料理は素材を生かしたというか、素朴な味で実にオレ好みだった。

それに関してルチルを素直に褒めると、実に恥ずかしそうに照れている様が可愛かった。

やっぱり亜人の部下、いいな。

いや、ルチル自身も試験を通っているのだから、充分に中身も優秀なんだ。

食事を終え、明日の旅程の打ち合わせをしたら、外は真っ暗。

特にやる事もなく……。

「うん……。」

食事中から気にしないようにしていたけれど、じっとオレを見つめるエスリーンさんの視線。

いくら最近、女性の視線に耐性がつきつつあるといってもだ、こども見られていると……捕食されそう。

しかし、考えても考えても、彼女との出会いを思い出せない。

「あの、エスリーンさん？」

「なにになにから？」

接近するの早ッ！

考え方によっては、ミランダより始末が悪いよな、強いだけに。

「首都を出てからずっと考えてただけけど……。」

「うんうん、何々？」

「近いつて……。」

「どうやっても出会った時の事が思い出せないデス。」

これが身体の崩壊に直結する記憶の欠落なのか、忘れただけなのか判別出来ないが、思い出せないのは事実。

素直に聞く方が早い。

……教えてくれればだけけど。

「全然？」 「全然。」

即答するしかない。

「ニアのコトは覚えてたのに？」

「正直、あの人との出会いも覚えてないです。」

逃げられない、この感じはなんだろう・・・捕食？！

「小さい頃は、あんなにお姉ちゃん、お姉ちゃんって、あんなに懐いてくれたのに・・・。」

ぐすんと泣く寸前の表情で、しょんぼりするエスリンさんには悪いけれど、それでも思い出せない。

思い出せないんだが、一つ気になる単語が・・・。

「オレが・・・エスリンさんを”お姉ちゃん”て？」

オレが出会った他人の女性を”姉”と呼ぶなんて確率的にはかなり低いぞ？

だってそうだろう？

「オレがミラ以外を”姉”と呼ぶなんて・・・。」

有り得ないとまでは言わないが、当時のオレは既に自分の置かれた地位や振る舞いを理解していて、それこそ人間不信に近くくらいだった。

だからこそ、唯一の味方が姉である立場に近いミランダだったわけ。

例外がそんなポコポコあつてたまるかというのが、オレの本音で・・・
ううむ・・・。

「そう・・・。」

急にずうーんつと神妙な面持ちで俯くエスリンさん。
ちよつと言い過ぎたか？

「・・・アレは手強かった。」

「はい？」

なんか、拳がぶるぶると震えているよう・・・な？

「アノオンナが居たから、当時の私は必死だったわ。”真の姉の座”を勝ち取る為に、来る日も来る日も”お姉ちゃん修行”に明け暮

れた！」

いやいやいや、突っ込み所満載過ぎだろう。

ナンデスカ？

ソノ”真の姉の座”トイウノワ？

トイウカ、”お姉ちゃん修行”ツテ？

「ええと・・・姉の座と修行と、一体どういう・・・？」

関係が。と、続けようとすると、ガバアツと急に顔を上げるエスリンさん。

心なしか瞳が輝いているような気が・・・。

「何時か、アル君に手取り足取り腰取り、姉として教える事よ！アル君、言っただじゃない？」オレは一番強いヤツからしか教えを受けるつもりはないから。』って。」

・・・・・・ヲイ、昔のオレよ。

何やら、今のオレが大変な事態に追い込まれてるぞ？

というか、腰取りって何の修行だ？

「あー、いや、まあ、確かにバルドに師事したのは、国内で一番強かったからだけれど・・・。」

他にも長剣使いだっただとか、役職を辞して弟子も少数だし暇そっだったからってのもある。

「そうしたら、何時の間にか、アル君はアノオンナとばかりイチヤイチヤして！」

イチヤイチヤした記憶など、一切御座いません。

というか、最初からミランダは姉としていますが、何処からも湧いてきたワケではないです。

大体、最近、そんな微妙にくすぐったい事をしたのは、ダークエルフの二人組みだけで。

うゝ あゝ、思い出すと背中がむず痒い。

「ミランダは幼馴染で、乳母姉弟だしなあ。イチヤイチヤと言われても・・・ねえ、シルビィ？」

思わず、視界に入ったシルビアに助けを求めてしまった。

よりによってシルビアに！

「ミランダさんだけじゃないですよ。私だって、残った皆さんとだって仲良いですよ。」

うん、そう。

こうなるよね、普通に考えてさ。

「皆・・・と？」

「ええ、アルム様。そろそろお休みになつては如何ですか？明日もありますしい。」

助け舟のつもりだろうか？

今更？

でも確かに、オレが寝ないとオレの世話をする人間も休めないよな。一番休まないといけないのは、シルビアだ。

「そうだね、早めに寝ておくとしよう。」

「はい、では。」

立ち上がつて、自分の幕屋に向かうオレの後につき従うシルビア。「ちよつと待つて！」 「はい。」

そんなオレ達を呼び止めるエスリーンさんに、オレより早く反応するシルビアは、何時もの間延びした口調じゃなかった。

「二人・・・一緒？」

ん？どういう意味だ？

「私はアルム様の侍女です。一時もお傍を離れません。お添い寝も仕事のうちです。」

ズバつと切り込んだシルビアの口調に、固まるエスリーンさん。

そんな彼女を尻目に、シルビアは言いたい事を言い終わったからか、オレの背中をぐいぐい押し促す。

「し、シルビイ？」

「それではエスリーン様、おやすみなさいませ。ルチルさん、立ち番お願い致します。」

転がる様にして、オレはなすがまま幕屋に押し込まれてしまった。勿論、エスリーンさんを外に残したまま。

フギリな弟ではないって「ト」？【中】

「アルム様は、ミランダさんを本当に信頼しているんですね。」
「寝る用意をテキパキとこなしながら。」

「ミラだけじゃなくて、シルビイだって、皆だって信頼しているよ。」
「オレに背を向けたまま作業中の彼女の背に答える。」

「昔から姉弟のように育ったんですねえ。」

「ああ、オレが病を患ってから、激しくべつたりの時期はあったけど……。」
「ずっと……？」

「アルム様、本当に私達を信頼していますか？」

「あ……うん。」

「じゃあ、何時からです？」
振り返ったシルビアの口調は抑揚もなく、何時もの微笑みも無かった。

「ミランダさんとの昔の記憶、曖昧になってきていますね？」
本当にその通りだ。

「アルム様の不安定さは、理解していました……。」
そうだろう、心だつて読めるんだしな。

オレの動揺は手に取るようにシルビアには伝わっているはずだ。

「第一、ヴァンハイトに伝わる神器に選ばれないうえに、眠っていた別の神器が使えるんですもの。」

シルビアはずっとずっと黙っていてくれたわけだ。
オレが何時か自分から言い出す時まで。

でも、罪悪感しかないオレは言えなかった。
こうなるまで。

「元々、オレの魂は不安定なんだ。」

一つの身体に近い波長（？）だが、別の魂が同居しているのと同

じなんだ。

「シルビイ？」

「はい。」

「この身体を……アルムという人間を維持出来る期間がどれくらいかわかるか？」

今のオレの素直な疑問。

漠然とした不安が常につきまとうよりは、いつその事、きつちりと期間がわかった方がいい。

「私にはわかりかねます……けれど。」

「けれど？」

「今から行くセイブラム法皇国でなら、わかるかも知れません。」
につこりと微笑むシルビアが布団の中へオレを誘う。

「とりあえず、今から私が出る限りの応急処置を試みます。」
そんな事が出来るのだろうか？

「気休めにすらならないかも知れませんが……。」
心を読まれるのも慣れたな。

気休め程度でも停滞……いや、進行が遅くなるだけでも上等だ。

「頼むよ。」

オレは言われた通りに横になる。

「では……。」

以前、魂を視られた時のようなゾクゾクする感覚。

胃液が逆流するような気持ち悪さがこみ上げて来た瞬間、次には胸を圧迫されて呼吸が苦しくなる。

呻き声を上げようにも、苦しくて声が出ない。

手足の感覚も全くなく、少し寒気がした後、オレは意識を失った。
次に目を開けると、すぐ近くにシルビアの顔が。

「お加減は如何ですか？」

「……最悪。でも……頭の感触は心地よいかな。」

「まあ。」

クスリと微笑むシルビア。

彼女の表情の全部は見えないが。

何故なら、今のオレは彼女に膝枕をされていて、下から見上げる格好だからだ。

つまりだ。

視界の大半が”魔王”で占められている。

「シルビイ・・・ごめんね。その、心配かけて。」

きちんと表情が見えないで言う謝罪の言葉というのも卑怯な気がするけれど。

「いえいえ、アルム様の為になれば嬉しいです。それに、お姉さんの座は譲れませんから。」

お姉さんの座って・・・あ、もしか、エスリーンさんに対抗してる？

「アルム様？」

「うん？」

「私達はアルム様程、心が広いわけでも、我慢強いわけでもないんですよ？」

オレから言わせてもらおうとしたら、オレもそんなに心が広いわけでも、我慢強いわけでもないんだけれどな。

「アルム様の言葉、表情、動き、その全部を見て少しでも解ろうと必死なんですから。時折不安になったりしてしまいます。」

そうだよな。

相手の心が読めるわけじゃないし。

「読めても不安は全て消えないものなんですよ？」

そうかも知れない。

「エスリーンさんの事を覚えていたら、違ったのかな？」

オレは彼女をまた姉と呼んだのだろうか？

て、それを言ったらキリが無いか。

神器を手にしなれば。

あのまま死んでいれば。

病にかからなければ。

そういう事になってしまふ。

「姉ね・・・あれ？　そういえば、前に側室の座を狙ってるとか言っ
てなかったか？」

無駄にホリンと順位付けまでしていたような・・・。

「それはあく、アルム様次第です。」

あ、何？

オレが選べるの？

その割には、何一つオレに意見を求められなかったような・・・。

「どちらにしても、私達はアルム様のお傍にいらればいいんで
すから。」

「今だつて傍にいるじゃない。」

シルビアが左手を翳してオレに見せる。

彼女の左手の薬指に光る銀の指輪。

出発する時に同じ様にホリンに突きつけられたな。

「確約だつて、絶対ではないですよ。でも、不安は先延ばしに出
来ますから。」

姉のミランダ、妹兼娘のオリエ、筆頭騎士のレイア、ミリィとは
彼女の故郷へ行く約束。

確かに四人はこういう件には他の者達より大人しい。

でも、だからといって・・・そういう事なのかな？

「・・・シルビィ、オレは君に傍に居て欲しいよ？」

「はい、アルム様のお望み通りに。」

膝枕をした状態のまま、上体を折って覆いかぶさってくる彼女を
オレは素直に受け入れた。

今しばらく、ほんの少しの間でいい。

先延ばしされた未来に身を委ねて・・・。

フギリな弟ではないってコト？【後】（エスリーン視点）

悔しい。

勝ち誇ったように余裕の笑みをたたえた美人に促されて、幕屋に消えて行くアル君達。

それを見送るだけの自分。

あの侍女、絶対わかってやっているに違いない。

ミランダとかい、あの姉気取りの女の他にあんな奴がいたなんて。

そりゃあ、美人度（？）も身体つきも負けるけど・・・どうせ筋肉質だし・・・生傷だらけだけれども。

これでも頑張つて白い肌を維持してるんだから。

こんな事を考えてるうちに辺りは私と火の番をしているクラム、そしてアル君の幕屋の入口に立っているルチルだけになっていた。

私はふと、ルチルという少女に近づく。

アル君の作った騎士団の一員という亜人の少女。

騎士団の構成員の種族も問わないってトコが非常にアル君らしい素直さだ。

昔からアル君は、物事を見たまんまで評価するコだったから。

「ルチルさん？」

「何でしょう？」

亜人の中では小さい部類に入る彼女が丸い瞳で私を見る。

「ルチルさんは、何で騎士団に志願したのかな？」

そもそも亜人・獣人という人種は北西の国にしかない。

ヴァンハイト国内では、行商人として入ってくる事もあるが、やはり少数には違いない。

「あゝ、暇だったから・・・かな？」

「暇？」

「なんというか、私達の種族って酷く内向的というか、一生自分達の森から出ない人が大半なんです。」

見かける事が少ないのは、どういうのもあるのかな？

「森から出てモクロアートぐらいしか働き場がないし、大半が下働き。例外は分化後の能力が高い人だけ。」

苦笑しながら、ルチルは溜め息をつく。

「私もそうやって、一生終わっていくのかなあって。生まれて、何も選べないまま。」

「そんなところにアル君の騎士団の募集？」

「アルム皇子はすごいんですよ？リツヒニドス領はどんな種族も受け入れて、それはもう優秀な人だけでなく、今度は訓練学舎まで作るんだそうです。」

ニアが言っていた面白い事ってのは、こういうものも含まれてたのね。

なんというか、目立つ事が嫌いなアル君にしては盛大。

「私がちょうど分化が終わって成体になってたから、これはいいって飛びついちゃったんです！ここで私はどう変わるんだろうと思ったら、楽しくなちゃって！」

拳を握りながら力説するのはいいけれど、アル君起こしちゃうんじゃないかしら？

そう思った瞬間、彼女も同じ事を考えたのか、慌てて自分の口を塞ぐ。

「今回の旅のお供に私を選んで下さったのも、私は外に出て色々な体験をした方がいいって。」

「なるほどね。」

「あと、アルム皇子は亜人に何か特別な想い入れがあるみたいで・・・。」

「想い入れ。」

「そんなの聞いた事ない。」

私が離れている間にそういう事があったのかしら。

「でも、アルム皇子の周りには変わった方や、凄い方が沢山いらっしゃいますから。」

”変わった”という言葉で真つ先にカーライルの顔が浮かぶ。

相変わらず、無愛想で捻くれていて・・・どう考えても変わったヤツ代表だ。

「ダークエルフのお姫様とか、試験前にはクロアートのお姫様もいらしてたそうですよ？」

「クロアートの姫君が？またなんで？」

「詳しくは知らないですけど、お国から婚姻を勧められたとかないんとか。」

「婚いつ?!」

思わず出そうになつた大声を慌てて口ごと塞ぐ。

さっきのルチルの事をとやかく言えたものじゃないわ。

「国からの命令だったの？」

「そういう噂ですよ。」

ピクリと耳が動く。

絶対、シグルドの余波というか、アイツになすりつけられたに違いない。

大体、城に残つて偉そうに貴族達の前でふんぞり返ってるだけなのが気に喰わないのよ！

アル君は味方がただでさえいないんだから、アル君だけに仕事ばかりさせんな。

あ、もしかしたら、今回の旅もアイツの仕事を押し付けられたんじゃない・・・。

ありうる。

アル君は昔から、どんな面倒でも手間がかかっても、やると決めたら、最後まで手を抜かないコだったしなあ。

アノ熊の修行だってそうだったし。

「エスリーン様？」

「あ？うん、なんでもない。少し考え事。あ、”様”はいらないからね？特にアル君の部下には。」

「あ、はい・・・わかりました。」

照れる顔が可愛い。

これから、アル君を宜しくね。

「ロエイに寄り添うといじり」。

一眠りして、シルビアの応急処置（？）のお陰で頭がスッキリした気がする。

日はまだ出ていない。

もうそろそろだろう。

服装を整えて、シルビアに掛け布をして外に出る。

「ルチル？」

幕屋の外にある丸い物体。

色合いがでつかい岩にも見えなくもないが、どう考えてもルチル。

「おい。ルチル？」

寝てるのか？

反応がない。

まあ、いいか。

どのみち見張りを代わろうと思って早く起きたんだし。

「あふっ。」

欠伸を噛み殺し、涙目になりながらルチルの横に腰掛ける。

勿論、なるべくすぐ立ち上がれる態勢で。

「・・・これから・・・か。」

セイブラムに乗り込んで、出来れば穩便にリディア先生を解放してもらおう。

リツヒニドスの施設の事もあるから、こっちに來てもらおうのがオレとしては一番なんだが・・・果たしてそううまくいくか。

暗殺事件もあったが、神器盜難の件もあるし・・・。

もし、あれが各地で騒動を起こしているのなら、発端はオレかも知れない。

「ハデイもなんか隠しているカンジだしな。」

そもそも神器の使い道もわからないしな。

きつとそこら辺の事を知っているのだろう。

と、あたりをつけているのだが。
ついでにオレの身体を診てもらえたりすると・・・いいなあ・・・
なんて。

まあ、世の中、そんなうまくいくわけないか。
最悪の場合も想定しないと。

「・・・結局、無茶するしかないのか。」

オレの人生、無茶しなかった事なんてほとんど無かったもんな。
そう考えると、よくオレ今まで生きてられてんな。
生きられている事に感謝だ。

相変わらず、どこまでもつかわからないけどな。

「うにゃーっ！」 「ぬおっ?!」

びっくりした!

横にいたルチルが叫び声をあげて寄りかかってきた。

つか、『うにゃーって!』ってオマエは猫か?!

猫型獣人との混血か?!

あれかな、やっぱり好物は魚なんだろうか?

亜人の食生活とかもよく知らない事に今更ながら気づいたぞ。

うわっ、オレ、意外と大雑把?

待望の亜人の部下の可愛さに完全に心を奪われていた。

いや、能力とかそういうのは厳しく審査されているから、そういう
方面の問題は全く無いんだけど。

「ひたらきまふう。」

「へ?」

横を見るとルチルがオレに向かって大口を開けている。

・・・嘘・・・猫って肉食だっけ?

人肉喰うのか?

「じゃないっ、落ち着け!」

オレは必死に彼女のこめかみ辺りを両手でがっしりと掴む。

流石、亜人、力強い。

何だ?この光景。

仕方がないなッ！

「ぎゃんっ。」

「っ……起きたか？全く無駄な労力使わせやがって。ルチルは額を押さえたまま硬直している。」

オレが頭突きを炸裂させたからだ。」

「あう〜、星が飛びました。」 「まだ夜だからな、星も見ると、そりゃ。」

オレだって痛いんだからな、コレ。」

「はれえ？皇子のそっくりさんが……。」 「違う。」

「じゃ、分身？」 「増殖した覚えも、分裂した覚えもない。」

一瞬の静止。」

しかる後の再起動。」

「……はう……は？！すみません！私！」

ルチルは寝起きが悪いと覚えておこっ。」

「全く……折角、人が交代してやろうと思っただけで早起きしたってのに。」

まさか頭から丸齧りされるとは思わなかったさ。」

「ほれ。」 「あつ。」

無理矢理、彼女の頭を膝の上に乗せる。」

「さっさと寝直せ、交代だ。」

「えっ？えっ？！」

「交代。但し、寝ぼけて齧ったり、爪立てたりするなよ。」

「でも……。」

面倒だな。」

ルチルはオレの部下のなりたてだしな。」

「ああ、もう面倒。オレの部下になるってコトはこっぴどい事なの。」

はい、説明終了。はい、寝る。」

「うう……。」

それでも抵抗があるのだろうか？」

「いいから、少し横になっただけ。多少は休んだ方がいい。幕屋の中」

に入れてやりけど、その物音でシルビイが起きても困るしな。」
少し大人しくなったかな。

オレはそのまま、彼女の瞼に軽く手を置く。
昔よくこういう風にミランダに膝枕されて寝た事があったな。
オレが倒れる前か。

やっぱり倒れる以前の記憶はしつかりとある。
それにミランダとの思い出は忘れてはいない。

オレという存在の起点というか、自己を認識する為の他者はミランダなんだな、きつと。

「ルチル。オレは君達が胸を張れるような”人間”にならないとな。」

目を隠してしまつたが、耳がピクツと細かく動いている。
寝てはいないのかな？

「皇子・・・私も、自慢できるよな、部下になりまひゅ・・・。」
最後が締まらないカンジだけでも、そう言ってもらえると嬉しい。
い。

共に高みというか、そういう風に競っていけるような気がする。

「ありがとう、おやすみ。」

言つた後に、ルチルの身体が弛緩していく。

心なしか、耳もしゅんと力なくなつて・・・うん、やっぱり可愛いな亜人。

でも、あれか、寝起きは悪いんだよな？

で、コレは後で当然、起こす、ないし起きるわけだ。

次はどんな事になるのやら。

・・・もう一回頭突き・・・かな？

起こす時の労力を考えながら、オレは空が白んで日が木々の隙間から射し込んでくる様をぼんやりと眺める事にした。

コエイに寄り添うというコト。(後書き)

ビバ！猫耳。

ちなみに厳密には、ルチルは猫型亜人じゃないという設定。
アルムの勝手な思い込みというか妄想萌えです。(ヲイ)

エテして皇子らしくないってコト。【前】（ハディラム視点）

旅の初日から驚きだった。

出会った時から思つたとたが、アルムは全つ然皇子らしくない！

俺様の中の皇子像は完全崩壊。

ありやただの庶民だね、ちよつと金持ち程度の。

あんなの皇子だとか誰かに言われても信じねえ。

いや、時折なんつーの？

気風っつーの？

そついうのは出てる気がするんだが・・・。

どちらかと言うと、違和感の方が強えな。

何を隠してんだか知んねえケド。

ま、こついう小難しい事は、クラムが考えるだろ。

初日の明け方や二日目辺りはなんだっけ？

エスリーンとかいう姉ちゃんがるさかつたぐらいで、それ以降は順調過ぎるくらいだ。

「しまった・・・。」

「どしたアルム？」

「砂漠に入る前に、皆を水浴びさせてやれば良かった。」

「あ？そんなもん二日目に浴びたやる？」

全く変な事で大騒ぎするやつちやな。

「アンタは構わないでしょうが、女性というのはそつもいかないのですよ。少しは気遣いの”き”くらいまでは学習したらどうです？」

どうして、こつ、クラムは俺様相手にこんななんだか。

「ああ、女性つて面倒な生きモンだな。」

「アンタが単純構造過ぎるんですよ。」

どちらにしる、もう砂漠地帯に入って二日経つてんだ、今更だろ
うが。

「ん？何だよ、アルム。まだ何かあんのか？」

「チツ！」

「ライライ、こんくらいで舌打ちなんかすなよ。」

「エスリーンさん、ルチル！シルビイとクラムさんを！」

唐突に叫び声を上げて、馬を猛然と走らせるアルム。

「アルム！」 「誰かの悲鳴だ！」

悲鳴？

そんなの聞こえなかったぞ？

「て、ライ！一人で行くなや！待て！」

護衛を置いて単騎で突っ込むなんて、全くどんな皇子や！

絶対アイツは皇子なんかじゃねえ。

「仕方ない！」

俺様がついて行ってやらあ！

クラムに目配せをするとすぐさま追いかける。

大体、悲鳴なんてアルムしか聞いて・・・?!

「聞こえた！」

嘘だろう？

砂山を二つ越えてた辺りで、その声が聞こえて、更にその先。

小規模な砂漠とはいえ、砂山があるせいで音が遠くまで響いてこない。

なんつー、聴力。

「アルム！」 「ハデイ！杖を持っている老人の方を助ける！」

一つ先の砂山を越えている最中のアルムから、その声が発せられて降りて行くのはいいんやけど・・・。

「あのバカ！」

単騎で突っ込むなんての！

全速力で後を追ってアルムに追いつくと、もうヤツは降馬して剣を抜いているところだった。

もう仕方ねえなあ！

俺様は槍だから、馬から降りねえぞ。

面倒だし。

人数の上では、十人以上の差はある。

ま、数の問題じゃねえケド。

格下相手つつーのは、性に合わん。

一突きであっさり倒せるってのがな、何か、こう、作業みたいなカ
ンジで。

だからと言って、強い相手と戦って労力を使うのも嫌やけどな。

一人につき一撃という俺様の速さよりも早いのが、アルムの体捌き。
俺様の突きをかわし続けただけあって、その速さは本物だ。
斬る。

返す剣でもう一回。

次に蹴り。

その反動を生かして、もう一撃。

ここまでの流れが一つの行動に組み込まれているようなカンジ。
とても皇族や貴族の嗜みの剣技じゃねえ。

・・・トドメを刺さないのも、なんつーか、な。

「やっぱ部下に欲しい・・・。」

「あゝ？」

「いや、何でもねえ。それより、そのじいさん大丈夫か？」

あつという間に相手を蹴散らしたのはいいが、助けた相手も相当
の重症に見える。

「周りがこの砂漠じゃ・・・。」

やっぱりダメか。

「セイブラムの枢機卿でいらっしやいますね？私はセイブラムに向
かう途中の者で、ヴァンハイト第二皇子アルムと申します。」

大声でじじいに話かけるってコトは、意識もヤバそうってコトか
・・・。

「つ・・・っえ・・・。」

杖？

アルムも言ってたな、そんなん。

「無事です。リディア枢機卿の時と違って。」

「リディアさ……ま……を？」

「ええ、学舎で一緒でした。」

リディアってのは、これから会いに行くヤツだったよな？学舎つてなんだ？

「つえを……あの御方”……に……。」

会話はそれだけ。

アルムは次の言葉を発しない。

つまりはそういうコトだ。

あーあ、何の得にもなりやしねえ。

「杖つーと、アレか？」

馬から降りて、じじいの言っていた杖らしき物……本当に”らしき”物だな。

奇妙な形をした杖。

片端は杖のご多分に漏れず、やたらデツカイ薄緑の石が嵌ってるが、もう一端は山・谷型の複雑な形状。

どちらかと言えば、杖つーより錠前の鍵みたいな。

「全く、ケツタイな。」 「あ、ハデイ！待て！」

杖に手を伸ばした俺様を止めようとした声より先に杖に……。

「あだツ！なんだコレ？！ビリッてキタぞ？！ビリッて！」

冗談じゃねえ、ケツタイどころか、露骨に怪しい杖じゃねえかよ。

「だから止めたのに……。」

「あんなあ、そういうのは警告としての意味を成さへんて！」

「ハデイが無用心なんだろ？」

何で俺様が呆れられなきゃなんねんだよ。

しかも、クラムみたいな目で見やがって。

「つて、オマエ！」

溜め息をつきながら、徐に杖に手を伸ばしそのまま掴み上げるアルム。

「何でや……。」

「オレは目に一度、同じヤツに触れた事があるから。多少、耐性が

ついでる。」

いや、そうじゃない。

「おかしいやろ!」

本当にコイツはヴァンハイトの皇子か？

”有り得なさ過ぎる”

江戸時代書子かひくなくって下。【前】(ハデイルム視点) (後書き)

エてして皇子らしくないってコト。【後】

「あ、ハデイ！待て！」

オレの警告も空しく、ハデイは杖に触れてしまって、案の定拒絶反応の一撃を食らった。

「だから止めたのに……。」

人の話を最後まで聞いてからでも、遅くはないと思うんだけどなあ。

「あんなあ、そういうのは警告としての意味を成さへんて！」

「ハデイが無用心なんだろ？」

全く。

亡くなった方はリディア先生の件を知っているようだった。

だから、オレに杖を託したという事だろう。

とはいえ、やつぱり緊張するのはどうにもならない。

でもまあ、埒があかないし、この杖をここに放っておくわけにはいかない。

「つて、オマエ！」

溜め息をついた後、意を決して杖に触れる。

……この杖も大丈夫みたいだ。

多少、手に平がじんわりと温かいというか、熱い感覚はあるが、以前程痛みを感じない。

「何でや……。」

「オレは前に一度、同じヤツに触れた事があるから。多少、耐性がついてる。」

ハデイラムの疑問にオレなりに答えたつもりだったが、自分でもきちんとした説明になっていない事に気づく。

「おかしいやろ！」

あ、やつぱり？

「触れる者を選ぶんやったら、最低付与持ち、拒絶反応まで起こす

んは神器とそう大して変わらん。でも、そのじじいはセイブラムの人間なんやろ？なのは何でそんなモンをヴァンハイト人のオマエが触れられるんや?!」

まあ、そうだよな。

オレが触れられる可能性が一番高いのは、ヴァンハイトの双星剣になるわけで……。

実際、オレの中では触れられる可能性が一番低いと思ってる神器なんだけどさ。

さて、なんと説明したらよいのやら。

「正確に言うと、これは神器を模した複製品ってヤツらしい。セイブラムは血統による継承をしていない国だからな。そういう意味で、ある一定以上の位の人間が有する物だそうだ。」

……さっきの説明よりマシか？

「だからって、なんでオマエまで持てるんだ？」
全く以ってその通りだ。

「これはオレの調べた結果だが、神器は血統ではなく魂の質で使うものらしい。」

「魂の質？」

「血統による継承は、その方が初代の持ち主に似た魂の質を持った人間が生まれ易いって事だ。」

「……根拠は？」

食い下がるなあ。

意外に冷静なんだよな、こういう時のハディラムは。

常にこうだったら、クラムさんもあんなに怒らないのに。

「ヴァンハイトの歴代の皇王の中で神器を継承出来なかった者がいる。オレみたいなのと違って兄弟がいるとかじゃなく。そしてハディみたいに血統によらない継承者までいる。」

「……血のみとは一概に言えねえな、確かに。」

ここで納得してくれると助かる。

これ以上は詳しく説明出来ないしな。

まさか、”オレの中に魂が二つあるから”というのが原因なんて言えないし、信じてもらえなさそうだ。

例え信じたとして、どうやってそうなったかは更に説明するわけにいかない。

「つまり、微妙に魂の質とやらが近かった・・・と。」

「そういうコト。」

「今一つすつきりせえへん・・・特にオマエ腹黒そうやし。」

「腹黒いって・・・あのなあ。」

否定は仕切れないけれど、オレの周りにいる人間の方がもっと上だぞ、黒いぞ。

兄上とかカーライルとか。

「人間、ある程度生きる為には腹黒くなるさ。ハディだってそうだろう?」

「俺様が?」

「互いに相手に言えない秘密くらいあるって事さ。」
別に問いただそうとは思わない。

・・・今のところ。

あくまで今のところはだ。

「まあ、な。」

「アルム様!ご無事ですか?!」

馬を降りて猛然と駆けて来るルチルの速度が尋常じゃない。瞬間最高速度は、馬より速いんじゃないだろうか?

獣人の血が入っているのも頷ける。

つて、あの勢いで突っ込んでこられたら、オレ死ぬぞ!

「大丈夫だ!だから、ちよっとゆっくり!」

危なかった・・・。

「アル君、怪我ない?!」「あらあら。」

次にエスリーンさん、でシルビア。

シルビアなんてもう慣れたもので、オレを一瞥して確認しただけ。

「なんかなあ、俺様と格差あり過ぎじゃねえ?俺様はアレやもんな

あ。」

「アレとは何ですか、アレとは。アンタ、皇子の足引っ張らなかつたでしょうね？」

「クラム、戦いの後くらい小言無しにしてくれ、ホント。」

「だったら、普段から頭を使いなさい。蜘蛛の巣張りますよ？」

ミランダだって、あんな沢山の小言を次から次へと言わない。

まあ、どちらかというと言より、拗ねるけどな。

そっちの方が多い。

それかしくしく泣かれる。

・・・ちよつとだけハディラムの気持ち解つたような。

「あ、シルビイ。」

「はい。」

オレは一瞬悩んだ末、”ソレ”を彼女に向かって放り投げた。

「預かつといて。」 「オイッ！」

放物線を描く杖を器用に馬上で受け止める。

「かしこまりました。」

「へ？姉ちゃん、大丈夫なんか？」

「はい。」

ハディラムは拒絶反応を心配したんだが、やっぱり思った通り心配は無かつた。

リディア先生がシルビアを”遠い親戚”と言っていたのを思い出したからだ。

シルビアが狙われる確率が高くなるが、今回は人手の中に騎士・戦士の割合が多いし大丈夫だろう。

何より、拒絶反応が一番少ないであろう人物が持つのが、害が無くていい。

「セイブラムに着くまでの間だけだから。それと何かあったら、すぐに言うんだよ？」

「承知致しました。」

微笑んだ彼女に微笑み、オレは皆に向き直る。

「さて、セイブラムに更なる用事が出来たわけだが・・・これはもうおつちさんと目的地に向かうしかないな。」

エでして皇子がしなくなっています。【後】(後書き)

土曜日ですが、明日も更新します。

アップクに屈するワケがないというコト。【前】(リディア視点)

寝台と小さな文机、椅子。

それと肩口が出るか出ないか程度の小窓。
部屋の中はこれだけ。

食事時以外の訪問者は皆無。

「流石に飽きてしまっわ。」

杖を奪われた責任を取らされるのは覚悟のうえだったけれど、学舎がある程度安定してからだったのが幸い。

あれからヴァンハイトのシグルド殿下が自分の部下を入学させて来
てから、更に各国の信頼度が上がったようだし。

私としては、ここまで出来た事も満足。

「リツヒニドスは行ってみたかったかしら。」

それも、人を派遣できたから良しとしたいけれど……。

「あ〜ん、やっぱり行ってみたかった〜。」

それが本音なのだから仕方ないわ。

「何をわめいておるのかね？」

あら？

気づくと私の横に初老の男性が……。

「法皇様？」

深い皺が刻まれた顔は穏やかに微笑んでいる。

銀髪・銀眼の老人。

「君は何時でも楽しそうだね。楽しい事を発見する才能は健在のよ
うだ。」

私の肩に手を置く法皇様の瞳に映る私は、小さい頃に出会った時
のままなのかも知れない。

「それが幸せになる近道ですもの。」

学舎だって、その一つ。

「そうかも知れんな。では、今回も大いに楽しみたまえ。」

今回の事はある意味、国の一大事だから。

きつと地位の剥奪どころか、国から追放でも驚かない。

下手をしたら、一生牢獄暮らし……そこでも何か楽しい事を見つ
けられるかしら？

「余は、より良い思想を持ち、より良く日々を生きられれば。そう
思っていたのだ……今もそれは変わらん。」

同じような事を彼も言っていたような気がする。

「気を落とさないで下さい。」

「君に言われるとは……いやはや。とは言え、今回は大いに楽し
めると思っているよ。さあ、これが恐らく最後の査問になるだろう。」

最後の査問……とうとうこれで今後の身の振り方が決まってし
まうのね。

「より良く生きれば、より良い人生が送れる……か……。」

そうぽつりと呟くと法皇様は先に部屋を出て行かれた。

査問する側とされる側が一緒にいること自体、本当はいけない事な
のだから。

今の時間を作るのだって、大変だったのだとわかる。

「リディア様、こちらへ。」

少し遅れて案内の衛士がやってくる。

”様”とつけられるのは、昔から慣れなかったけれど、”先生”と
呼ばれた方が恥ずかしかつたなど、ふと思いつく。

これから”様”づけで呼ばれる事もなくなってしまうのね。

薄暗い螺旋階段を降りて、査問会が開かれる広間へ。

「これより査問会を始める。最後に一人だけ証言する者がいる旨を
皆様にお伝えする。」

中央の席をぐるりと取り囲む、他の枢機卿達。

正面には当然、法皇様が座っていらつしやる。

私が行くべき中央の席に人が立っているのがわかる。

”最後の証言者”という事なのかしら？

この人達が喋り終われば……。

「あれ？」

「あ、先生お久し振り。」

何で……？

「こんな所に……？」

「こんな所って酷いなあ、ご自分の国でしょう？大体、何で先生だつてこんな所で査問なんか受けてるんですか？」

査問”なんか”って、貴方だつて随分さらつと凄いい事言ってますよ？

学舎で別れてから、会う事がなかった顔。

手紙のやりとりはしたけれど、実際に会うと酷く懐かしい気がしてしまうのは、何故かしら……。

もう一人の方は、見た事が無い顔だけれど。

「こんな時に、こんな所で会えるなんて……。」

最後の最後でとても嬉しいわ。

「会いに来たんですよ、全く。人の招待を受けておいて、本人だけが来ないとか、どれだけ非常識なんですか？」

だからといって、自分からわざわざ出向いて査問会にまで出るなんて、そっちは非常識ではないのかしら？

……愚問ね。

彼は非常識なのではなくて、”常識にとられない”だけ。

「わざわざ迎えに来たんですから、査問とかいうのをさっさと終わらせて行きますよ？」

につこりと微笑んだ彼は、事も無げに言うけれど、不思議と信じてみようと思ってしまうのだから……。

私は法皇様が仰っていた、これから起こる”楽しいコト”を想像して不謹慎にも胸を高鳴らせてしまふのだった。

アップクに屈するワケがないというコト。【前】(リディア視点) (後書き)

明日の日曜も更新いたします。

黒髪と黒い瞳を持つ少年の微笑みに目を細める。

遠い昔の事を思い出したからだ。

ヴァンハイトの先代・先々代もこの黒髪だった。

顔は似ていないが、あの日に見た皇子が目の前にいる。

そんな錯覚さえ感じてしまう。

若かりし事の日々、それを回想している最中に査問会が始まり、彼がしきりに彼女に非はないと訴えている。

しかし、それに耳を貸そうとする者は、ほばいないだろう。

何時からこの国は体裁だけを取り繕うだけになってしまったのだろうか。

「ですから、今回の事は人命を優先した結果なのです！」

少年は至極真つ当な主張をしている。

だが、そういう真つ当さ、誠実さだけで国が動く時代は、とうの昔に終わってしまったのかも知れん。

周りの枢機卿達も口々に異を述べているのがその証拠だ。

「と、まあ、前置きはこんなところで。」

ん？

「前置きで済んだら、楽だなあと思ってたけれど。どうでしょう？
リディア枢機卿の地位剥奪とか、国外追放辺りで手を打ちませんか？」

？

「ううむ・・・余りに正論かつ妥当な要求だ。」

「国の象徴たる杖を盗難されたのだ！」 「全く国外事業など下
らぬモノにうつつを抜かすから・・・。」

正論過ぎると反感を持つのが大人の汚いところなのかも知れんなあ。

「うーん、宗教国家とかいうのに幻想持ち過ぎたかな？所詮、この程度か・・・まあ、人の命より物の方が大事ってんなら、それはそ

れ。」

少年がニヤリと笑う。

「オレもやりやすくいいや。」

遠い昔、同じような笑みを見た事がある。

色味以外の外見は全然似てないというのに……この笑みを見て、ロクなメに合った試しが無かった。

”あの笑み”だ！

「んじゃ、物と人の命の交換でもするのでしょうか？」

少年が隣にいる男が背負っていた棒状の布を取る。

「ここにもう一本杖がある。ちよつと前に砂漠で退治した砂賊から取り返した物だ。ああ、襲われた枢機卿の人相書きを取ってあるから後で見せよう。」

人の命より物の方が大事ならば、物をくれてやるから、命を寄越せと……。

しかし、その杖は元々、我が国の物なのだがなあ。

「オレにとっては物より命が大事。いいハナシだと思うけど、どうする？」

沈黙の後、何人かの衛士が武器を構える。

「がっかりやな、色んな意味で。」

「ハデイ、そう言うなって。」

この緊迫した状況でも二人は動じない。

はったりや強がりの類いか、或いは余裕の表れか……。

「思い通りにならんと、こういう方法を取るわけや。だから言ったやろ？」

「だな。いいよ、やれば？但し、死ぬ気で。まあ、やっても何も得られないから。この杖もブツ壊すし。」

杖を壊……す？

「はったりだ！惑わされるな！」

「あ、そ。そう思うんならいいよ。オレは困らないもん。物より命の方が大事って言ったから。な？ハデイ？」

そう言つて、隣の青年に目配せをすると、青年は包みを広げ杖と一緒にあつた槍を手に取る。

「所詮は神器の複製でしょう？なら、”神器”には敵わないよね？」少年は無雑作に杖を掴む。

どうやら、上から目線で相手を見下し、面子に拘るばかりで落とし所すら見失つてしまつたようだ。

「それが神器だと言う証拠は?!」
半狂乱の叫び声上がる。

「あゝ？んなもん、俺様がこの杖をブツ壊しやわかるだろ？」

「体裁の為、たかが杖一本の為に、アンタ達は命を蔑ろにしてもいいんだろ？」自分達の命”だつてそうなんだろっ?”

もう一度ニヤリと少年は笑う。

やはり、ロクな事にならん。

”人の命を助ける為には手段を問わない”

それが彼の行動基準の一つという事か。

危うい純粹さで済ませられないな。

「ああ、そうそう。オレ達を殺しても、アンタ達の体裁は取り繕えないからね?」

「下手すりゃ、この国も亡びるやろな。」

若いというのは、何事にも勢いがあつていい。

自分自身、こんな事を言われる側だつたら混乱するのは否めないがある一点気づけば何の問題もない。

少年が”杖を持てている”という事実さえ気づけば。

いくら複製とは言え、神器は人を選ぶ。

特に我が国の神器は、”争いを好まない矛盾”を持っている。

例え、枢機卿の様な器は大丈夫でも、あんな事を本気で言うような少年に従うわけがない。

「我が名はアルム・デイス・ヴァンハイト。グランツ一門の末弟にして、ヴァンハイト皇国第二皇子。」

「ああ、ついでにコイツ、クロアートのお姫さんと婚約してるらし

いで？アルムを殺したら、クロアートもヴァンハイトもグランツも敵に回すってコトやな。あ、俺様はハディラムな。」

手に持った槍を高々と天に掲げる。

間違いなく神器だ。

「神器を携えし、東の樹海の王。ウチの部下もなかなかヤルで？」

神器を持つ近隣三方を敵に回し、杖を更に失い、最悪、国も命も失う危険性を犯して我等が得るのは、面子とリディアの命。

第一、確実に”グランツの坊や”は落とし前をつけにくるだろう。損得勘定をする以前の問題だ。

彼等は最初から証言も、交渉さえもする気は無かったのではないだろうか？

有り得る。

あの笑みが出来る皇子だ、そんな事を考えついてもおかしくはない。

「リディア枢機卿の地位剥奪と国外追放辺りで、杖は無事に返して頂けるのかね？」

少年・・・アルム皇子に問う。

「先生が無事なら問題ない。あとオレ達も。」

「ふむ。わかった。好きにするがいい。嫁にでも妾にでもしてやってくれ。」

「は？」

積年の恨みを込めて、返してもいいだろう少年？

「まさか、君がそんなにリディア枢機卿に執心だとは。想い人を救う為に自分の身さえ投げ打つ。その献身ぶりに感動しての裁きだ。」

今度はこちらがニヤリと皇子に笑う番だ。

サクソウするのは誰の想いつてコト？【前】

「まさか、貴方が私をそんな風に想っていてくれたなんて、感激ッ。

」
「 査問会の正式な判決が出た後にオレを待っていたのは、熱烈な抱擁だった。」

「 こういう実にわざとらしい事は、面倒なだけなので、本当に遠慮願いたい。」

「 はいはい。オレだって借りばかり作るのは嫌だし、こんな事で貴女が理不尽なメに合うのは嫌なんですよ。」

「 借り・・・ですか？」

「 首を傾げるリディア先生。」

「 貴重な資料をお借りしましたから。とても役立ちました。」

「 現在、リッヒニドスにて鋭意推進中。」

「 俺様への借りは別かよ。」

「 それは別口で返す。」

「 その為にここまでついて来てもらったってのも、あるんだしな。」

「 リディア先生、ハデイは神器の盗難事件を追っているそうです。すみませんが事の次第を彼に。」

「 既に一件。」

「 ハデイラムは盗難事件に遭遇している。」

「 例の砂賊も盗難事件の一部だろう。」

「 私でよければ。」

「 ほれ、ハデイ。お待ちかねの情報だぞ。」

「 それでは、アルム皇子のお相手は余がする事にしよう。」

「 余””？

「 この世で一番短い一人称・・・いや、そうじゃなくて、こういいう言い方をするって事は、国で一番偉い人。」

「 ええと・・・法皇様？」

。 そついえば、さっきの査問の席でも一番高い所にいたような・・・

「余では不満かね？」

「不満というか、国の偉い人と一緒にいるとロクなメに合わない確率が高いというか・・・。」

考えてもみる？

今まで王子とか姫とか、大貴族とか、そういう人間（一部他種族）と出会って、騒動とかそういう類いに巻き込まれなかった事なんてあつたか？

いや、ナイ。

「成る程。それは一理ある。余も若かりし頃、同じ事を思った事があつたものだ。」

一国の代表になるつてのは、面倒なんだろうな、やっぱり。

あゝ、ヤダヤだ。

なんで、皆権力を欲しがるのかね。

「同じ事を考えた者同士、見せたい物なんかもある。」

「それもロクなモノじゃない気が・・・。」

疑心暗鬼にだつてなるさ。

「そう言わず、二人が話している間だけでもな。」

「はあ、まあ、確かに暇だし・・・あ、部下が外の宿にいますので、呼んで頂けますか？」

どうか、変な事になりませんように。

渋々、法皇様について部屋を出る。

ここに来て、オレの目的は達せられたわけだから、あとはリディア先生をリツヒニドスに連れて行くだけだ。
なるべく早く。

ここに残っていては、それこそロクな事にならない。

「あの、法皇様？」

「なにかね？」

「数年したら、追放処分を解いて頂けますかね？」

数年、そうだなあと三から五年もあれば、こっちの施設は安定してくるだろう。

「出来れば、余もそうしたいと考えておる。」

「なら良かった。」

一生追放というのも穏やかじゃないからな。

別に用が済んだら必要ないというわけじゃない。

それでも、先生はセイブラムの人で、そこで過ごしていた時間があるから……。

「またあんな手段で脅されても困るのでね。」

「あはは……。」

やり過ぎだったかな？

「でも、神器とあってありがたがっても所詮は物でしょう？命には代えられないし、比べる事自体が間違いだ。神器はオレ達に何もしてはくれない。」

これに関しては、オレの中できっちり結論が出ている。

シルビアの時の事をオレは後悔してはない。

神器は決して”万能ではない”から。

どうしてヴァンハイトはそれをわからなかったのだろう……。

「それがアルム皇子の神器に対する考え方が……。」

ぼつりと呟いた横顔は、ただの老人にしか見えなかった。

法皇であっても、人は人……か。

「ところで。」

「はい。」

「皇子は常にその格好なのかな？余から見ると非常に不自然に感じるんじゃないか……。」

ん？オレの格好？

何時もの戦闘用の格好なだけね。

確かに騎士とか、一国の皇子とかの装備としては変なのかも知れない。

具足と籠手だけとか身体の先端になると強固で、身体の中になる

と防備が弱くなるってんだから、不自然かも。

個人的には、身体を中心は無意識に注意はいくけれど、末端は打ち合ったり、攻防せわしく使うから、一番傷つき易いとい認識と経験則に基づいた理に適った装備だと思ってる。

「たまに身につけたりするんですけどね。どうにも重く感じてしまつて。なんと言うか、自分の戦いの型に合わないというか……。」

謁見の時にも着たけれど、動きを阻害するだけの邪魔な物としか思えないんだよ。

「……逆に言えば、現状が一番馴染むという事かの。」

「まあ、そんな感じなのかな……。」

「皇子は……自分にはあるべき場所や物があると感じる事は、なかったかね？」

「は？」

話が掴めない。

「さて、着いた。この部屋だ。」

ほとんど会話が成立していないような気もしながら、案内された部屋の扉はドデカかった。

しかも、豪勢かつ、きめ細やかな彫刻が全面に施されている。

……ダメだ。

こういう豪華な趣にはついていけない。

寧ろ、拒否反応が……。

ああ、オレの貧乏性もここまできたら病気なんじゃないだろうか？
コンコン。

目の前でその豪華な扉を法皇のじいさんが杖で叩く。

あの杖って……複製じゃないんだよな？

ここ最近、立て続けに神器を見てるから、感覚麻痺してきそうだ。

「さあ、びつぞ。」

サクソウするのは誰の想いつてコト？【中】（ハディラム視点）

「成程な。」

欲しかった情報つちゅーのも、内容的にはそう驚く事はない。

相手の能力が知れた分、やり易くはなつたな。

手の内が一つわかっていただけでも大分マシ。

ま、どの神器が相手だろうと、神器である限り俺様にとっては大した問題じゃねえけど。

「逆に一つお聞きしていいですか？」

「あ？ああ、答えられる事ならな。」

どうにも女の扱いの勝手がわかんねえ。

故郷には一緒に育った姉ちゃんもいるが、同じように未だに扱いが慣れない。

アルムは逆に慣れてる感じすつけどな。

「アルム皇子をどう思いますか？」

「どうってなあ……。」

前にも同じ事を聞かれたんだが、胡散臭さが抜けないんだよなあ。部下に欲しいくらいだから、能力的な事は信頼出来んだけど。

「悪いヤツではない……とは思うな。」

「そうではなくて、神器使いとして。」

……神器使い？

ああ、ヴァンハイトの皇子だもんな。

「いいんじゃない？ああいうのが神器使いでも面白い。」

何より神器に対する考え方がいい。

「さつきも言つてやがったが、神器なんて所詮はモノだけ？人が使わなきゃ、何の意味もねえ。」

人がいるから神器がある。

それを履き違えちゃオシマイだ。

「人が神器を使って何かをするんであって、神器が人をどうこうす

るもんじゃねえ。」

「アイツなら神器という力に酔わない、神器に溺れない。どちらかというと、嫌悪している節がある。」

「ヴァンハイトに生まれ神器を持たず、セイブラムの複製神器を持てるという事に関しては何？」

「・・・困ってるのは、まさにソコ。」

「ソコなんやけど・・・でもなあ・・・アルムを見てみると・・・。」

「ま、長い世の中、そんな事があっても・・・。」 「いいわけありませんよね？」

「人があつさり流して終わらせようと思ってるのに。」

「この姉ちゃんは、俺様に何を言わせようとしてんだ？」

「俺様の神器は、血族で継承はしとらん。」

「俺様の神器は、新生児が生まれる度に適正があるかどうか試されるからな。」

「そうですね。ですが、複数の神器を継承出来る可能性はないですよっ？」

「ニコニコと笑顔のまますげえコトを言うな、この姉さん。」

「そりゃそうだ。」

「大体において、どの国でも神器は至宝だ。」

「そんな簡単に触れられん。」

「触って試す方法が出来るわけじゃない。」

「あんな、姉ちゃん。何を言いたいのか知らんがな、俺様はそういうもって回った言い方が嫌いだ。」

「彼ね、以前色んな事を調べてたわ。国の歴史、民話、神器、そして予言者に関する事。」

「また面倒な。」

「そこに彼の秘密があるのかも。」

「秘密ねえ・・・。」

「予言者、そんなのに興味あつたんか。」

「俺様の故郷じゃ、誰でも知っている話なんだが。」

「それと、件の盗難事件くたんの犯人。彼と知り合いのようでしたよ？」
「初耳やな。」

俺様が聞かなかつただけかも知れんが。
アイツ、ある意味ひねくれてるしなあ。

「それはそれで、俺様にも考えがある。」
・・・が。

「ああ、面倒！神器使いとか、人の上に立つとか、どんだけ面倒なんだよ！」
「やっつてられん。」

大半をクラムに押し付けてもコレだぜ？

アルムってどんだけ普段から面倒な仕事してんだ？

「突然、大声上げんなよ、ハディ。」

「お？アルム。」

ようやく戻って来たか・・・ふむ。

「ほれ、アルムっ。」

試しに俺様の持つている神器をアルムに向かって投げしてみる。

顔近くに投げられた槍を、反射的にアルムが手に取って・・・

「痛ッ！何すんだ、この馬鹿ッ！」

案の定、拒絶反応の痛みで顔をしかめて槍を落とす。

「オマエ、神器を何だと思っとんだ？」

「それはオレの台詞だ馬鹿！そんな物を人に向かって投げるな！ただの槍でも危ないわっ！」

「だよな。」

「だよなっつて、わかっててやるな、この馬鹿ハディ！」

とりあえず、俺様の神器には拒絶反応が出たという事は、少なくとも対なす神器にも拒絶反応が出るだろう。

それを確認する為に三回も馬鹿と言われたのは微妙やけど。

「て、アルム。どうしたんだ？ソレ。」

アルムに叩き落された神器を拾いながら、さっき別れる前の違いを指摘した。

「あ？ああ、コレな・・・。」

露骨に目線を逸らすって事は言えない程ではないけど、聞かれたくないって事なワケだ。

「あの法皇様から貰ったって事か。似合ってるぞ。」

アルムの黒髪と黒い瞳に似合う”漆黒の鎧”

今まで手足はしっかりと防具を身につけてて、他は身につけてなかったから間の抜けた感じだった。

だが今はなんつか、ぴったり部品がおさまったカンジ。

「褒められても、ちっとも嬉しくないんだよな・・・。」

遠い目をするアルムは、一体何があつたんだ？

流れによっては、この後の事を考えなきゃならん。

ああ、頭なんざ使いたくねえ。

そついうのは、使いたいヤツが使えはいいんだ。

サクソウするのは誰の想いつて「ト？【後】

「・・・法皇様？」

何かおかしくないか？

「何かね？」

オレだからか？

ハディラムは何とも思ってたみたいだし。

「法皇様の杖、本当に”セイブラムの神器”ですか？」

以前、リディア先生が言っていた。

複製された神器の原型は、法皇様が持っている。

じゃあ、オレが今見ているアレが、本物の神器？

「どうしてそう思ったのかね？」

「理由・・・直感ですかね。オレにはどうもそれがそうだと思えなくて。」

どう見ても・・・今まで見た神器と違う。

相対する時の存在感というか・・・。

神器それぞれに受ける印象も違うんだ。

圧迫感だったり、存在感だったり。

でも、これは。

「ただの他の複製された杖と同じ物にしか。」

「多くの神器と触れてきた皇子の勘か・・・。」

触れてはいないけれど。

だって痛いのだし。

「いえ。」

「先程の査問会、皇子は平然と杖を持っておったしの。」

マズいかなとは思ってたんだけどな。

ハディラムは槍を持たなきゃいけなかったし、拒絶反応もあるから、

あの役割分担は仕方ない。

「そんな皇子にちょっとした贈り物をしたくての。」

そう言つて部屋の中へ歩みを進める。

オレの質問に答えはない、か。

「余も少し老いたかの・・・皇子、君の言った通り、これも複製神器だ。この国には”神器など存在せん”。」

嫌な予感が、汗となつてオレの背を流れる。

「盗難という事ですか？」

まさか、アイツは既にここまで・・・。

「元来、ここにはないのだよ。だからの複製神器だ。そして、これを君に贈りたい。」

神器の話はここで終わりという事らしい。

彼はオレを促す。

部屋の中央を囲むように立つ四本の燭台。

「さあ、奥に入って”アレ”を見てみるといい。」

確かに明かりが暗くて、奥に入らないとしつかりと見られない。

仕方なく部屋の奥へ行つて、目を凝らすと・・・。

「鎧？」

ぼつんと置かれている物体の正体は鎧。

漆黒の鎧の胴体部分だけがそこにある。

「これって・・・。」

相当の年代物であろう事は、オレにも理解出来る。

けれど・・・これは・・・。

思わず自分の足元を見る。

色といい、形状といい・・・オレの具足と意匠がそっくりだ。

どちらがどちらを真似たのか。

或いは、どちらも同じ者が作ったのか。

「何故、これだけがこんな所に・・・。」

普通、鎧なんて部位ごとに分解しておくなんてないだろう？

売るにしたつて部位より一式の方が高く売れる。

この状態で保管されるなんて・・・。

「皇子には・・・今の世界はどう見えるかね？」

驚いていたオレの背後から問いかけられる。

いきなり世界と問われてもな……。

「どうでしょうね。オレだって世界の全てを見て回ったわけじゃないから。」

世界は広いという事だけは理解しているけれど。

「結局、世界を面白くするのも、腐った世界にするのも自分次第でしよう？オレはその為の努力だけは惜しまない事にしたんで。」

奴隷、人種差別。

オレにはそんなのは通用しないし、認めない。

そうする事が出来るかも知れないと、今はそう思えさえする。

「皇子には……アルムという人間、それ自身に力を貸して、支えてくれる者達がいるという事なのだろうな。皇子という地位には関係なく。」

優しい気な瞳をしてオレに笑いかける姿は、ただの老人にしか見えない。

生憎オレの記憶に祖父という存在はないが、いたとしたらこんな感じだったのだろうか？

「誰かに支えられ、必要とされ、そしてそれに応えるべく前に進む。『皇王』としては十分じゃな。」

は？

「法皇様、失礼ですが、オレは第二皇子です。神器の双剣も継承出来ませんでした。」

そんな人間が皇王になれるものか。

兄上は全ての要件を満たしているというのに。

それにただでさえ、オレは……。

「試してみたのかな？例え、後の世にどのように言われようとも、己のやるべき事を成す。それがヴァンハイトの血というものだ。」

「まるで会った事がありのようですね。」

あるんだろうな、コレはきっと。

そういえば、具足はリッツヒニドスで手に入れたんだっけ。

スクラトニーの私物だったのかも知れないけれど、リツヒニドスの城は元々、皇族の居城だった。

もしかしたら、そこに関係があるのかも知れない。

「少しでも皇子のこれからの旅、その前途が良きモノであるよう、降りかかる災厄から自身の安全を願って・・・使ってやってくれ。」

性能は保証すると法皇様は言葉を続ける。

そりゃあ、この具足と同等の物なら、良い物に違いないだろう。

「・・・ありがたく使わせて頂きます。」

裏にどういった事情があるとしても。

「うむ。では・・・。」

法皇様は自分のゆったりとした服の袖を捲くる。

「さて・・・”治療”をしようかの。」

何もかも視透す微笑みに対して、オレはゆっくりと頷いた。

キドアイラクも愛情のウチというコト【前】

「アル君、大丈夫?!」

全ての話を終えて、城内の一室で皆と合流した時、真つ先にエスリンさんが駆け寄って……。

「良かったですわあ〜。」

に、割り込んで、シルビアが抱きついて来た。あれ?

シルビアってそんなに素早く動けたんだ。

そっちに驚き。

「……なあ、シルビィ。」

「はい〜。」

……やっぱ聞かなきゃダメだよな。

「この具足をシルビィが薦めたのは、必要だったと思ったから?」
見つめ合うオレとシルビア。

「……全てはアルム様の御為に。」

ふむ。

「そっか、ありがとう。じゃあ、これも?」

オレは先程、貰った鎧を指さす。

「はい。」

「シルビィが言うのなら、そうなんだろうね。」

法皇様の折り紙つきなだけあって、この鎧は薄くて軽い。

その重量と薄さに対して強固だ。

これならあまり邪魔とを感じる事もないだろう。

「で、アルム、これからどうする?そっちの姉ちゃん含めて。」

そっちの姉ちゃんというのは、リディア先生の事だ。

「先生にはリッヒニドスへ来てもらって、そっちの政策を手伝ってもらう。」

そこまでが当初からの目的だ。

「うん……。」

「なんだよ？」

どっかりと椅子に座ったまま、腕を組んで考え込むハディラム。すまないが、どう見ても真面目に考えているようには見えない。

いや、もう全然。

「なあ、それって急がんといけないもんか？」

「は？あ、まあ、急に越した事はないが、どうしたんだ？」

歯切れ悪いなあ。

ハディラムらしくない。

「何かあるのか？」

「アルム、樹海に興味ないか？」

「樹海？ハディ達の住んでいる所へか？」

興味ないわけじゃない。

寧ろ、興味がある。

あるんだが……。

行くとなると人員を分ける必要がある。

リディア先生とリツヒニドスに帰る人間と、オレと樹海に行く人間で、戦闘要員はエスリンさんとルチルしかいないというね……。

オレ一人で樹海に行ってもいいんだけど……？

「アルム様、めっ、ですよ。」

こつも優しくシルビアに窘められてしまうと……。

かと言ってセイブラムの人員を出してもらわなければいけないうえに、信用出来ない。

問題としてはエスリンさんがどうするかだ。

彼女はオレの部下でも何でもないので、命令権がオレにはないんだよなあ、実は。

「ハディ、樹海からセイブラムまで往復だとどれくらいかかる？」

「あ？あ、クラム、どんなもんだと思う？」

何故、クラムに聞く。

「”常人”の足なら四日あれば。」

・・・クラムの中では、既に常人の範囲外なのは計算内らしい。
「四日か・・・。」

流石に四日もこの国に留め置く事なんて出来ない。

一応、先生は罪人扱いだからなあ。

「エスリンさん。」

ええいつ、聞くだけはタダだ。

「お願いがあるんですけれど・・・？」 「ナニナニ？アル君の
お願いって。」

早い！近い！

「リディア先生をヴァンハイト・・・最悪、リツヒニドスまで護衛
してもらえないですか？首都までの場合、兄上にリツヒニドスまで
の護衛を手配してもらおうので・・・。」

「ルチルでもいいんだが、女性二人旅なら、グランツであるエスリ
ンさんの方が安全だ。」

「ん〜、いいよっ。」

「本当ですか?!」

「私のお願ひも聞いてくれるなら。」

えーと・・・。

「・・・内容を聞いてみてからで。」

「そっだ、彼女は”グランツ”なんだった・・・およそ、常識とい
うか、基本、常人じゃないんだ。」

「オレ、迂闊過ぎないか？」

「今日は、もう遅いから出発は明日でしょう?」

「確かに、査問会と法皇様との話で、治療ときて大分時間を使った。
ついでにオレの体調も、今のところ良好。」

「チラリと視線をクラムに向けると軽く頷かれる。」

「そうなりますね。」

「んじゃ、今晚はずっと一緒にいよ」

「え・・・ずっと?」 「ずっと。」

即答。

「二人で？」 「二人つきりで！」

「またもや即答。」

ええと・・・オレ、今、色んなイミで危険？

ああ、何か変な汗が吹き出てきそう。

そうまでして樹海に行く必要性あるのかな？

「ハデイ、オレを樹海に連れて行って何ががあるんだ？」

ハデイラムの利は何かがあるんだろう？

「ちよつとな、色々見せたいもんがあつて。」

その展開は、もうさつきやつた。

「見せたいモノ？」

「きつとアルムの為になると思うので。」

うん・・・あ。

エスリンさんが涙目になつてる。

「じゃあ、その条件で。その代わりきちんと送り届けて下さいよ？」

「うん！勿論！」

「ルチルとシルビイはそのまま同行してくれ。」

シルビアは、どちらに振り分けても同じだが、一人で二人をエス

リンさんに守らせるよりはいいだろう。

「リディア先生、そういう事なんで。」

「わかりました。ただ・・・。」

「ただ？」

「私はもう先生じゃないんですよ？」

「はい？」

何が言いたいのでしょうかねえ？

「先生はいりません。」

「ああ・・・えと、リディアさん。」

「さんもです。」

なんだろう・・・なんか、セイブラムに来てからオレ、理不尽な
メばかり会つてないか？

よくよく考えたら、理不尽だったり、落胆や侮蔑・嘲笑の視線だつ

たりって、オレの日常の出来事じゃないか……。

何を今更、この程度。

そう考えてみると、リツヒニドスに行ってから、本当に恵まれてるよなあ。

「それでは、リディア、行きましょう。」

一応、年上なので丁寧に話しかけてみると、リディア先生はにっこりと微笑んだ。

キドアイラクも愛情のウチというコト【後】

セイブラムの城下の宿で夜を越す事になったのだが・・・例の約束の手前、オレとエスリンさんが同室。

リディア先生とシルビアとルチルが同室。

クラムとハディラムという部屋割り。

ルチルはリディア先生の護衛とオレの貞操の為に部屋に待機している。

その為、部屋は全て隣室にした。

「で、何の為の部屋割りなんだろう、コレ。」

部屋の中は寝台が二つ。

簡易の水浴び場がある。

宿としては、中級以上だ。

水浴び場といっても大きな水甕のみが、でーんと置かれているだけなんだがな。

「さっぱりしたねー。」

一般的な麻の夜着を身にまとったエスリンさんが、髪を拭きながら水浴び場から出て来る。

久々に普通の夜着を着た女性を見た気がする。

「砂漠越えをしたから、余計に気持ちいいですよね。」

ちなみにオレは先にさっさと全身を拭き終わっている。

途中、何度か手伝おうかと聞かれたが、その度に丁重にお断りさせていただいた。

「ねえ、アル君、何でそんなによそよそしいの？昔はもっと偉そうだったのに。」

「そうでした？」

「うーん、尖ってた？」

確かに少し荒んではいたか。

「それはそれで失礼というか、無礼というか。」

礼節って大事だよな。

例え、こっちの方が位が上でも。

「でも、今より昔の方がいいかなあ。他人行儀に感じるし。」
他人ではあると思うのだが。

「そういうものかな……。」

「うんっ、そういうモノよん。」

にっこりと笑いながら、俺が座る寝台に腰掛ける。

「んっ。じゃ、話して。」

両手をオレに向かって広げるエスリーンさん。

「何を？」

「なんでも！私が外に出て、アル君の傍にいらなくなってからのコト、全部！」

全部……か……。

全部話せと言われて、全部話せない人生で……暗い人生だな、オシ。

「全部かぁ……首都の城にいた時は、多分エスリーンさんがいた時と変わらないよ。」

なるべく丁寧な言葉遣い、彼女で言うところの他人行儀な喋り方をしないように。

「毎日、一定以上の自信がつくまで稽古してた。」

デイーンの剣を手に入れた後に出会ったはずだから、これで間違いはないはずだ。

「ある日、城から抜け出られそうな口実を見つけて、リツヒンドスに向かう事になったんだ。」

そこで色んな人に出会った事。

初めてダークエルフを見て、結局外見以外は何も自分達と変わらな
いってわかって、歩み寄れた事。

リツヒンドスを悪政から解放して、改革をして、兄上の命で学舎に
行って、亜人や他国の人と触れて……。

そして初めて、殺意も敵意もなく誰かの命を奪った事……。

そう話した時のエスリンさんは、酷く哀しそうな表情をしていた。それで民の為の騎士団や施設を作ろうと思って奮闘した事、それによつて首都やセイブラムに来る事になった流れ。

中身だけは濃いオレの日々の全部。

「・・・そう。アル君は頑張ったのね。」

優しく頭を撫でられる。

誰かに上からの目線でそう言われる事に抵抗がないわけじゃないけれど、その撫で方は酷く安心する。

「ごめんね・・・。」

何故、今、オレは彼女に謝られたのだろうか？

「アル君が大変な時に傍にいられなくて・・・。」

「別に・・・確かに大変だったり、辛かった時もあったけれど・・・。」

冷静に省みると、だ。

「そこで手に入れられたモノは、全部アルムという人間のモノだから。」

出会った人の全てが、オレを皇子と見ていたわけじゃないし、ましてや第二皇子という肩書きというわけでもない。

「うっん、そうじゃないの。私ね、修行を何時も頑張っているアル君に、何時か認めてもらおうって思ってたの。」

「認める?。」

「そ。強くなつて、アル君を力で助けられる”お姉ちゃん”になるうって。」

「どうして?。」

彼女は どうして そう思つてくれたんだろう?

「だって、それ以外の事はミランダがいるでしょう?だから、アノ女には出来ない事でお姉ちゃんになつてやるうって。」

そういう意味で聞いたつもりじゃなかったんだけど・・・でも、素直に嬉しい。

「どうしてそんなにお姉ちゃんに拘るのかよく解らないけど、でも。」

「・・・ありがとう。」

自分の事を少しでも考えてくれる、想ってくれる。オレにはそれが何よりも大事。

「でも、これじゃ、お姉ちゃん失格だね・・・折角強くなったのに・・・。」

強くなる程度が激しいと思うのだが、逆に考えればそこまで強くなれば、誰も文句は言うまい。

「大丈夫。本当にありがとう。」 エスリーンお姉ちゃん”。

記憶には無いけれど、きっと今の彼女は、オレが胸を張って姉と呼べる存在に違いない。

「アル君・・・。」

ゆっくりとオレを抱きしめ・・・めっ・・・めえ。

「ぐるっ・・・ぐ、じい・・・息・・・息・・・が・・・い・・・。」

「

やっぱりグランツだ、この人・・・。

「あ・・・ごめん・・・。」

危うくそのまま肋骨を、いや命そのものをヤられるところだった。

「ねえ、お姉ちゃん？」

「な、なあに？」

いざ、言ってみると、照れるな・・・ミランダを姉と呼ぶのも年々少なくなっていたし。

「今日は、一緒に寝台で寝ようか？お姉ちゃん、寝相悪くないよね？」

「それだけでなくとも寝呆けて一発。

て、だけでさっきの攻撃(?)からして致命傷になりそうだ。

「うんうんうんうんうんっ！」

首が今にも転げ落ちそうな勢いの彼女を見てみると、吹き出しそうなる。

意外とミランダとも似たところがあるみたい。

「良かった。」

色んな意味で。

そして、オレはもう一人の姉に秘密にしている事を一つだけ、寝台に入って横になっている姉に打ち明けた。

キドアイラクも愛情のウチというコト【後】（後書き）

・・・何、この環姉えみたいなキャラ（トオイメ）

パブロフの犬という単語を思い出したよ。

土曜更新あります。

ユウクを覚悟に変えてつてコト。【前】

「アルム？オイ、アルム！」

「え？あ、悪い、何？」

一晩明けて、早朝オレ達は樹海に向けてひたすら馬を進め、樹海に入ると馬を引きながら徒歩で進んだ。

樹海の好き放題伸びきった木々に、馬が足を取られて転倒しかねないからだ。

それくらい樹海に自生している木々は凄かった。

大抵の草はオレの膝近くまで背丈があり、常に薄暗い。

樹木のうっそうたるや。

これなら、成長速度が通常の数倍というのも頷ける。

「大丈夫か？今朝からぼーっとしてからに。何だ？昨日の晩、あの姉ちゃんと男女のつ、ぐほおっ。」

「それ以上、馬鹿な事を言っと蹴りますよ。」

顔面からハデイラムが草むらに突っ込んだのは、クラムの蹴りのせいではなかったのか。

腰の辺りに見事に足の裏が突き刺さった気がした……のは、気のせいと。

「あにすんだ！」

「もう少しで中継地点の小屋に着くので、今日はそこで一泊致します。」

「無視すんな！」

ギロリとハデイラムを睥睨するクラム。

「アンタに構ってたら、時間が無駄になるのはわかりきってますから。」

「ぐぬぬう〜。」

そこで言い返さないというか、言い返せないのが全てを物語ってるな。

「悪いな、ハデイ。ちよつと考え事しててな。」

「アルムは気苦労が多過ぎだ。」

「アンタは物事、考えなさ過ぎです。」
「考えていたのは、昨晚の事だ。」

弟から姉への告白の後、姉の反応はただ一言。

『どうしてアル君が……。』だった。

同じ布団の中で泣き出す姉に更に言えた事は、諦めず精一杯生きるという宣言だけだった。

こんな事なら、姉と呼ばなければ、打ち明けたりしなければ良かっただろうか？

そう素直に述べたら、笑って否定された。

そして逆に元気づけられてしまった。

女は強いな。

「ちくしょお……。アルム、小屋に着いたら狩りに行こうぜ。夕食用の。」

「狩り？」

そういえば、そんな事をした事なんてなかったな。

「……はあ、皇子っぽくないとは思ってたが、狩もしたコトないつて……。貴族の嗜みやる？」

「あはは……。」

貴族自体に否定的だったせいにか、貴族の嗜みってヤツは一切興味なかったりして……。

「人を殺したら事はあつても、狩りはした事なしか……。どんだけだよ。」

「関係あんのか、ソレ？」

ハデイラムの呆れ方は別としても。

「狩りの方がどうやってもマトモやる？殺すには変わらないがな。」

ああ、確かに生きる為に殺すつちゅーのは同じか。」

だが、両者には明確な違いがある。

「きつちり食うてやらんな、狩りの場合は。」

「そうだな・・・ルチル！」

「誰だつて好き好んで殺すワケちゃうもんな。」

オレが呼ぶと、素早い身のこなしでルチルが近寄つて来る。

森育ちの亜人である彼女にとっては、この程度は特に苦ではないの
だろう。

「オレは確かに修行の時、誰かの為の剣を習つた。それは裏を返せば誰かを傷つける剣だ。」

ゆっくりとルチルの頭に手を置く。

きよとんとしているルチルに伝える事なく。

「だから、躊躇いはないつもりだ。今までだつて必要ならば人を傷つけてきた。そして・・・最後に殺したのは亜人だよ。」

昨晚に続いての告白。

「・・・そうやな。好き好んで殺し始めたら、ソイツはもう人”じゃなくなつちまうしな。」

ハデイラムが呆れた視線でオレを見ながら肩を竦める。

「アルム・・・さま・・・。」

固まるルチルの耳のつけ根をオレは撫でて、手を離す。

あとはルチル自身が判断する事だ。

具体的には、これから先どうするかを。

「全く、馬鹿正直なやつぢやな。皇子の粹からは盛大にはみ出してるな。でも、どう見ても人の粹からはみ出しているように見えて、アルムは。」

「ハデイ・・・。オレは覚悟はしている。」

同じように誰かに殺される可能性を、オレは否定しない。

小さな亜人をぼんやりと見つめる。

例え、それが彼女だったとしてもだ。

「アホ。そんな覚悟すんな。あゝあ、んじゃ嬢ちゃん、夕食の狩りを手伝えや。」

ルチルをびしっと指さすハデイラム。

逆にオマエはもうちょっと人としての礼儀を覚えた方がいいぞ。

樹海の王なんだろ？

「私っ?!」

「しゃーないやる？アルムが狩り出来んのやから。」

「悪かったな。」

そこは本当、申し開きしようもない。

出来ないものは出来ないからな。

まあ、やり始めれば多少は出来ると思うが、そんな時間の余裕もお腹の余裕もない。

今回は諦めて、二人に頼む方がいい。

「ほら、行くで！あとで小屋で合流な！っ！」

「あつ、待って下さい！」

早々に二人は樹海の奥へと姿を消す。

早いな・・・夕飯、期待出来そうだ。

「重ね重ね、すみませんね、皇子。アレは脳で考えずに発言する傾向がありますから。」

微笑みながら謝罪をするクラム。

なんだかんだ文句・罵倒するけれど、きちんとハディラムを補佐しているし、支持している。

「ハディは優秀な補佐官がいて幸せ者だね。」

優秀な人間が自分を助けてくれるのは、ありがたい事だ。

特に自分にはないモノを持っていたり、自分より優秀なら尚。

「皇子の周りの方々には負けますよ。」

ユウクを覚悟に変えてつてコト。【前】(後書き)

勿論、日曜も更新あります。

ユウクを覚悟に変えてつてコト。【後】（ルチル視点）

狩りの為に移動の最中、私の頭にはさっきの皇子の言葉が離れなかつた。

どうして皇子は、あんな事を言ったんだらう？

「気にすんな。」

「え？」

前触れなく一緒にいたハディラムさんが声をかけてくる。

「いや、あー、気にすんあつちゅーのは無理か。でもな、多分アルムは嬢ちゃんだから言ったんだと俺様は思うで。」

チラツと彼を見ると視線は前に向いたまま。

何て返したらいいのか、私にはわからなかつた。

「アルムは本当に馬鹿正直で律儀やる？だから自分のした事の全部に責任を取ろうとする。そうしないとやっていけないのやる。」

巫人を殺してしまった事への償いの為に、あんな事を私に言ったのだろうか？

だとしたら私は……。

「どうしたらいいんだらう……。」

「どうしたら？」

ぴたりと歩みを止めて、ハディラムさんは私を見る。

「そんなん、アンタの勝手やる？好きにしたらいい。」

そう言い切つた後、頭を搔いてから。

「あー、ただな。アルムの言葉・行動見てて何も思わへんか？」

下を向き、つま先で草を蹴り、私をじーっと見つめてくる。

「俺様は会ってからそんな日が経っているわけやないから、アレやけどな。あの皇子らしくないアルムが、何の理由もなく誰かを傷つけるような奴に見えるか？少なくとも俺様には見えんし、思えん。」

皇子との時間は、私もハディラムさんも大して変わらない。

ううん、ほとんど同じと言っても構わない。

「私にも・・・見えません。」

初めて挨拶した時の抱擁、喜び。

ことあるごとに私を撫でる手。

「それにな、アルムに出会ったヤツ、アルムの事を知ってたり理解しようとする皆、笑うんや。皆、笑顔やった。」

そう言われてみると、皇子と会う人、皆笑顔だ。

私も含めて。

「誰かて・・・秘密の一つや二つあるもんや。人に言えない事がな。それでも嬢ちゃん顔を真正面から見たかつたんやる。ちゃあんと向き合いたいから、アルムはそうしたんだと思うで。」

皇子は常に分け隔てなく優しい。

ダークエルフも、亜人も関係なく。

「皇子は・・・。」

「ん？」

「一体、何を目指しているのでしょうか？」

皇子の求める理想は？

「ん、俺様はアルムじゃないからわからん。でもきつと、何かを皆で目指したとしてな、痛みを誰かが受けなきゃならんしたら、それは先頭に立つ自分ってコトなんじゃねえの？そついうトコは皇子やな。」

「私はそれをお手伝い出来るのでしょうか？」

膝枕された時、とても驚いたけど嬉しかった。

「は？嬢ちゃん、頭、大丈夫か？もうとつくに手伝つとるぞ？アルムの騎士団なんやし。」

「あ・・・。」

「そのままで居りや、嫌でもアルムの為になる。」

そうだった。

私が出る事は、皇子の騎士団の一員でいる事。

「あ、あとな、出来るだけアルムに笑いかけてやるこつたな。」

「笑う・・・。」

皇子は周りの笑顔を見るのが好き……。

「ハディラムさんは意外と優しいんですね？」

「い……意外って……まあ、外見がキツそうに見えるっつーのは否定できん。」

言い方が悪かったかな？

「俺様だって、アルムの秘密は気になるし、信じられん部分もある。でも、アルムが悪い奴じゃないってのもわかるからな。」

結局、そこなのかも知れない。

皇子の優しさは色んなモノの裏返しなのかも。

でも皇子の考えが、政策が、私達亜人の選択肢を増やした事には変わりないし、私が今こんな所まで旅をして、色んなモノを見られるのもそのお陰。

「さてと、さつさと狩りをすませんと。二人で五人分は大変やし。」
屈伸運動をし始めながら、ハディラムさんは私に片目をつぶってみせる。

「ですね！あ、でも、大物だったら一匹で済む力モ。」

私の発言に一瞬首を傾げ、おおっと小さな声上がる。

「そのテがあつたな。労力の問題はあるが……その方向で、いちよ行こか！」

そう言つとハディラムさんが突然走り出したので、私も慌てて後を追つた。

メイワクセンパンというコト？

徒歩行軍二日目。

さつきからずつとハデイラムは、『あと少しで着くわ！』を繰り返して、クラム以外の皆の鬢鬢を買っている。

昨夜の狩りから帰ってきた後、ルチルは何事もなかったかのようにオレに接して・・・むしろ、前より自分から声をかけてくるようになった。

一体、狩りの間にどんな心境の変化・整理をしたのだろうか、それとなく聞いてみても、彼女は微笑むばかりだった。

仕方なくハデイラムに・・・本当に仕方なく聞いてみたのだが。

『日頃の行いや。』と、まあ、こんな調子で・・・。

オレには何が何やら。

いや、結果的には良い方向なんだけど、釈然としないわけで。

「アルム様、女の子は複雑なんですよ。」

シルビアからはそんな一言を満面の笑みで頂いたのだが・・・。

「何ら問題が解決していないんだけど？」

「大丈夫ですわ。」

ナニが？

恐らくこれ以上突っ込んでも何も変わらないだろう。

「アルム、あと少しで着くでー。」

「それ、さつきから聞いている。」

なんだっけ、人の声を真似する鳥。

オウムだっけ？

「いや、今度は本当に本当。ホレ。」

そうハデイラムが言った途端、目の前の視界が開けてゆく。

「うわあ。」

ルチルの感嘆の声。

更に進むと、その全貌がわかる。

少し濁った色の岩が高く積み上げられた壁。

きつと街をぐるりと囲んで要塞の役目をしているのだろう。

そして大きな門が。

「あん？おかしいな。」

ハディラムが呟く。

「確かに大門が開きつぱなしというのは、気になりますね。」

開かれた門。

その奥には遺跡のような円球形の屋根をした白い……。あれが王城だろうか？

距離が遠くて微かだが、それが見える。

「それは何かあったって事か？」

大型の野生動物が群れで……。って、大型は基本的には群れないか。

「わからん。」

距離もあるしな。

その距離も詰めていいものだろうか。

「しかし、門が開いていても中の皆の姿は見えますから……。」

確かに、門の向こう側の建物の前には人々が行き交っているのが見えるが……。

「あれ？なあ、ルチル？」

オレはルチルを手招きする。

「なんでしよう？」

「ルチル、目がいいよね？」

ダークエルフが夜目が利くように、獣人・亜人は様々な感覚器官が発達している。

「あそこ、門の上辺りに人影があるように見えるんだけど……。」

「ええと……。」

人だよなあ、どう見ても。

銀剣の力がまだ身体に残っているせいか、感覚が少し鋭敏だ。

「みたいですよ。えっと……女の人が一人と……あつ、こっちに

手を振ってます。」

手を振ってるって事は、敵ではないという事だろうか？

いや、危険を知らせているのかも。

安易な判断は良くない。

「すごい笑顔です。」

そこまで見えるのか、凄いな。

「薄紫色ですかね、そんな服の銀髪の……。」「銀髪の女やて？！」

突然叫び出すと、ハディラムが猛然と門に向かって走り出す。

「あ、オイ！ハディ！」

よく理解出来ないまま、俺もハディラムの後を追って走り出す。

ハディラムの方が先に走り出したのだが、どうやらオレの方が足が速いようだ。

少しずつ距離を詰めていける。

「なさーいつ。」
声？

「なにやってんだあ・・・ッ！」

走っている最中に叫ぶハディラム。

叫んだ分だけ更に開いていた距離が縮まり、ようやく横に並ぶ。

一体なんなんだ？

「ハディーツ！」 「いいから降りろー！」
ん？

さつきから聞こえるのは、例の女性の声か。

オレにもはつきりと見える。

ルチルが言った通り、薄紫のヒラヒラした服を着た銀髪の女性が手を・・・あ、両手になった。

ぶんぶんとこちらに手を振りながら、ぴよんぴよんと跳ねている。

「だああーッ！」

ハディラムが一際大きな声を上げた瞬間、女性の身体がグラリと傾く。

「くッ！」

すぐさま大きく呼吸を吸い、止めて完全無呼吸状態でオレは更に加速する。

そのまま女性の身体を投げ出されたのを視認すると、あとは目標の落下地点へ。

強い衝撃で骨などを折らないように落下の力を、オレが飛びつく方向に転換する。

そのまま落ちてくる女性を抱え込み……ごろごろと。そりゃもう盛大に。

その女性をなるべく傷つけない事だけを考えて……オレが痛いのは……人間、優先順位をつけると、こういう事もあると思いを放棄。

ひたすらぐるぐる。

呼吸を止めていた息苦しさ、回転する身体に伝わる痛みと、もうなになんだか……。

気を失わなかったただけ褒めてくれ……あと吐かなかった事も……いや、本当に。

「ぶはっ……。」

たっぷり転がった勢いが止まると、すぐさま呼吸を再開。

「あはは、びつくり、落ちちゃった。」

もそもそとオレの腕から這い出た女性の笑い声。

「ハデイがいて助かつちゃわね、ありがとうハデイ。」

「うぷ……そのハデイ君なら、後ろにいますよ。」

もうダメ、これで精一杯。

力尽きて大の字で倒れたオレに馬乗りになった女性。

ふと、彼女の瞳に光がない事に気づく。

……盲目なのか？

「いや、本当、何と言うか……すまん。」

肩で息しながら、ハデイラムがげんなりとして頭を下げる。

「全く女性が空から落ちてくるなんて馬鹿な事は人生ではじ……

二度目か。」

エスリーンさんという前例がアリマシタ。

「あら、皇子様に助けられちゃった。」

その女性は虚ろな気な瞳でそう言つと、可憐に破顔した。

メイワクセンパンというコト？（後書き）

またまたブツ飛んだ女性の登場・・・いや、多分、新キャラはこれで最後かと・・・多分・・・（トオイメ）

ミケンと未聞の関係ってコト。

オレ達を通されたのは街を囲む壁、その門の真正面に見えた遺跡のような宮殿(?)だった。

この白い岩つて、特別強固なのか?どんな特徴があるんだろう?案内される途中でずけずけ聞ける程、神経はズ太くないつもり。鼻歌をるんると唄いながら、空から降ってきた女性に大きな広間まで連れてこられたのはいいが、この人、なんとも不思議なカンジのする人だ。

不思議っぷりでは、シルビアといい勝負なのは間違いないと思う。空から降ってくる時点で、少なくともエスリンさん並なのは言うまでもないだろう。

「いや、さつきは本当にすまんつ。」

さつきからハデイラムの謝罪はゆうに十回はこえている。

その間も例の女性は気にもとめてないようだった。

「それはわかったから、さっさと紹介してくれ。」

正直、飽きたし。

別に怒つてもいないし、落ちて来た方も、オレも大した怪我をしなかったのだから。

でも、二度と同じ事は勘弁願いたい。

ああ・・・三度とは、か。

しる言われても出来ない気がする。

「ああ、前に言ってた俺様の姉ちゃんで・・・。」

「アシユリーヌ・トライトンと申します、皇子。」

ほんわりとした笑顔で挨拶するアシユリーヌさん。

彼女が、ハデイラムの言っていたシルビアと似ているという姉か。

「ハデイ、似てるか?シルビィに。」

オレには似ているように見えない。

まず髪の色からして違うし、身長も全然違う。

頭二つ分はシルビアの方が高い。

雰囲気は確かに近いモノがあるが、何より大きさがもうぱっと見で違う。

何処とか言うまでもないだろう？

流石にシルビアの魔王に敵う者はそうそういない。

「どうぞ、アシュリーとお呼び下さい皇子。」

そして何より、彼女の”焦点を結ぶ事のない瞳”だ。

盲目のお姫様ねえ・・・盲目、盲目。

「ええと、アシュリーさん？」

何かもう聞くのも嫌になってくるなあ。

「なんでしよう？」

「オレはまだ自分の名前どころか、身分すら言っていないのですが？というより、何でオレ達がここに来るとわかったんですか？」

オレとハディラムの区別すらわからない女性が何故、ハディラムが帰って来ると知ったのか？

何故、オレを皇子だと知っているのか？

「それは・・・。」

「それは？」

「貴女が”私の皇子様”だから。」

「はあ？」

簡潔な回答は、オレの望むところではあるんだが・・・。

オレは彼女に向けていた視線をゆっくりとハディラムへ。

「・・・いや、本当、重ね重ねすまん。」

どうやら元々からしてこういう人物らしい。

とういか、謝られてもなあ。

アシュリー又さんに対しても、ハディラムに対してもどっという反応を返したらいいのか、皆目検討もつかない。

疑問として浮かぶ事は、他にも幾つもあるけれど、憶測がついているものもある。

「とりあえず、皆さんにお部屋を用意してあるから、一度荷物を置

いてきなさいな。」

能天気にもるい声でそう促される。

「また後でお話できますか？」

第一、まだオレは自己紹介すらしていない。

「勿論、皇子様。」

「あの、オレの名前はアルムと言っているのですが？」

話していて調子の狂う度合いが、半端じゃない。

「わかりました。ヴァンハイトの皇子様。」

ふむ。

更に公開していない情報が上乘せされたな。

これは試されたりとかしているのかな？

要点をまとめると、アシユリーヌさんは盲目で、ハデイラムの姉。

別姓なのと容姿からして、血が繋がっていない可能性は高い。

疑問点は、帰還する時期をどうやって知ったか。

何故オレが皇子で、しかもヴァンハイトのだと知っているのか。

で、これに関する憶測だが……。

「ハデイ。」

「ん？」

完全に疲れ果てたハデイラムが無気力に返事をする。

もう謝り疲れたようだ。

「ハデイ、旅に出ている間、国に連絡とかした？オレさ、リツヒニドスとかに便り出そうと思って。」

「あゝ、律儀やなあ、俺様なんて手紙一つ書くのだって面倒だ。生憎、ここじゃ手紙なんぞ出さないし、届かんし。」

届かないね。

「そうか、じゃあ、また今度にするかな。」

これでとりあえず、ハデイラムから情報が流れたという線は消えた。

樹海自体に便りを出す方法がないんじゃ、クラムも同様だろう。

人を使っても、そう都合よくセイブラムに樹海出身の者がいるだろ

うか？

となると、オレの推測がさっきよりは真実味を帯びる。

「はあ、なんかオレ疲れた……。」

彼女は術使いに類する、そういう能力を持っている。

「俺様だって同じだ。」

「じゃあ、何で案内したんだよ……。」

「では、皆さん。一旦お部屋へ。」

クラムに案内されて、とりあえず席を外す事にした。

シバられる必要なんてないというコト。【前】(アシユリーヌ視点)

「ハデイ？」

顔が熱い。

胸がドキドキする。

「あん？」

当初、ハデイが言っていた目的と違うけれど、これはどちらかというの良い流れ。

”私にとって”は。

「皇子様の容姿は？どんな人？」

興味は尽きない。

「黒髪に黒い瞳で・・・あー、背は低い方かな。トシは俺様より下っぱい。」

黒髪に黒い瞳？

「ヴァンハイトの皇子なのよね？」

「第二皇子やけどな。」

彼は第二皇子なのかあ。

「じゃあ、第一皇子の容姿は？」

「知らん。まあ、ヴァンハイトのご多分に漏れず、金髪・蒼眼だと思っ。」

皇太子の方は、”普通”の皇子様かあ。

「ま、第二皇子、第二皇子つつても、アルムは皇子っぽくねえけど。」

溜め息と同時にドサリと音がする。

「ハデイ？」 「座っただけー。」

ハデイは気配を無意識に消す事があるから、たまにびっくりする。

「で、どう皇子っぽくないの？」

ハデイの中の皇子様像というのが、どんなのが問題だけど。

「まず全然偉そうじゃねえ。」

「偉そうにふんぞり返っているよりいいんじゃない？」

別に皇子とか貴族が、絶対偉そうにしてなきゃいけないわけじゃないし。

「なんつーか、貧乏性で庶民的？ダークエルフだろーが、亜人だろーが、分け隔てなくイチャついてんなー。」

「庶民的感觉はいいけれど、そのイチャなんとかつてのは、なあに？」

「うまく説明できんけど、アルムは誰に対しても真っ白なんや。外見には拘らんし、種族がどうとかも言わん。相手を信じようと思えば、とことん信じるし、常に愛情を持って接しとるといっか……」

「何がいけないのかしら？」

「博愛精神の持ち主なのね？」

「さしずめ、慈愛の皇子つてトコかしら？」

「益々ステキな皇子様じゃない。」

「ああ、確かに誰かも好かれるな。誠実やし……でもなあ……」

「ハデイが言葉を濁す。」

「何か問題？」

「いやな、誠実すぎるといっか、我が身を削つてもつてとこがあったり。なんやるな、そういう意味で行き過ぎなトコがあるといっか……真っ白つてのも悪く言えば、自分の目で捉えたモノしか信じないといっか……」

「うーんと唸り声を上げる。」

無責任な人間よりは、断然好感が持てると思うのだけれども……
「見ていて痛々しい。あ、いや、俺様としてはアルムみたいな人間が国を治めるつちゅーのは、すげえ良い事やと思う。ああいう人間が皇王になるなら、世界中の王がそうやったら、世の中もうちよい住み易くなるんちゃうかな。」

人を褒めないハデイにしては、絶賛といっかベタ褒め。

「ふーん。珍しいね、ハデイがそこまで言うの。」

「そうか？ クラムとかも認めてはいるぞ？」
クラムか……。

「型にはまらないっちゅーカンジがいいな、アルムは。何すっかわからんが面白い。型といえば、長剣使いだし。」

あれ？

「……長剣？ 双剣ではなくて？」

おかしい。

ヴァンハイトの皇子なら、双剣でないと……。
そうじゃないと、”愛しの皇子様”ではなくなってしまう。

「んー、まあ、二本つちや二本やな。長剣二本を同時に使った。本当、器用や。」

「双剣は双剣でも、長剣を二振り……。」

一体全体、私の皇子様はどうしてしまったのだろうか？

お兄様の方ではないハズなんだけれど……。
「面白いやろ？ 全部が全部そうなんや。俺様の槍だつて付加持ちの円盾で防いでみたり。」

「ハデイの槍を?!」

「未解放やけどな。」

未解放も何もハデイの槍は神器。

しかも英雄の使っていた最古、最上級の神器なのに！

「全身黒づくめにも驚いたけどな。」

「黒づくめ？ どんな物を？」

もしかしたら……。

「古臭い黒い防具で……あ、セイブラムで鎧を貰ってたっけな。銀縁の黒い防具、今は上から下までそれやな。」

「……ねえ、ハデイ？ 皇子つて剣も黒かったりするの？」

「剣？ うんにゃ、利き腕の武器は銀やった。あれも付加されてんな。あとは普通の剣。」

ますますわかんなくなってきたわ……。

「とにかく興味がそそられるというのは変わらないから、ハデイ、あとで皇子のトコへ連れて行って。二人きりで話がしたいわ。」

「変なコト言うなよ？俺様と同じようにアルムは繊細なんやから。」

「あら、それは相当なのね？」

私は傍らにいるだろうハデイに向かって微笑む。

「頼むで。」

「頼まれちゃった。」

直接話せばわかるかも知れないものね？

この際、今のハデイの溜め息は聞かなかつた事にしちやあ。

シバラれる必要なんてないというコト。 【前】(アシユリー又視点) (後書き)

結局、夏休みなんて知るかスペシャルで、連続更新しまくってしまいましたね。(苦笑)

シバられる必要なんてないというコト。【中】(前書き)

夏休みなんて知るかスペシャル終了ですかね？(苦笑)

シバられる必要なんてないというコト。【中】

「どうなさいましたかあ？」

相変わらず、オレを癒す為だけのふんわりとした喋り方をしてくるシルビア。

「いや・・・ちょっと思考を整理してたんだが・・・。」

整理も何も仮説だらけ。

「整理できました？」

通されたのは簡素な部屋で、床に真紅の敷物と木で作った寝台と机と椅子二脚のみ。

「盲目の彼女が、知り得ないだろう情報を知っていた理由なんだけど・・・。」

オレの壊れかけた（？）記憶の中で、”盲目”という単語と、この地域。

そして、それが可能な能力ということで検索をかけると・・・。
困った事に一つだけ該当するモノがある。

かくして予言の力を得し者は、目で見える必要はなく・・・。
学舎で聞いた”盲目の予言者”の話だ。

神器のように得た力を継げるというのなら、話は早いんだが。
もしかしたら、予言の力というのも術使いの一つのカタチなのかも
知れない。

そうならば何の事はなく、オレ達の帰還を予言したただけだ。

一番安直で簡単に辻褃が合う分、それだけで片付けるのはかなりの
抵抗がある。

予言の力というのが存在するというのは、リッヒニドスのダークエ
ルフで知ってはいる。

が、アレも凄く抽象的だったしなあ。

そんなんで、的確な情報を得られるのだろうか？

「アルム様？」

ダメだな。

相変わらず考え込むと、他が疎かになる。

本当、この癖直さないとなあ。

「どうしたシルビイ。」

「ここにいる間、決して誰にも心を許さないで下さい。」

・・・冗談・・・ではないな。

口調が変わってる。

「シルビイ？」

「今からです。難しいと仰るなら、”私ごと”で構いません。」

それ程、ここから先は危険・・・か。

「ありがとう、シルビイ。」

「いえいえ。」

「でも、”嫁候補”を信じられない程、心は狭くないつもりなんだけどな。」

オレの言葉にっこりとシルビイが微笑んだところで、扉が叩かれる音が。

「早速か？」

思わずシルビアにそう呟く。

彼女はオレの反応を伺うと、扉を開ける。

「よお、荷物置き終わったか？悪いな、姉ちゃんが話しがあんだつてよ。」

一気にまくしたてるハディラムの後から、アシュリーヌさんが顔をのぞかす。

恐らく気配だけでこっちを向いているだけだろう。

「ああ、構わないよ。」

「そか、んじゃ、帰りの誘導があるし、俺様は部屋の外におるわ。」
そう言つとアシュリーヌさんを部屋の中に促し、さっさと外へ行ってしまふ。

・・・オマエの姉は荷物か、全く。

「あの、二人だけでお話したいんだけど・・・？」

「あらあゝ、私は何時でもアルム様のお傍にいるのが務めですう。」
相手の目が見えないせいか、シルビアに何時もの微笑みはない。
早速か・・・早速なんだな。

でも、オレは何時もそこそこに警戒出来てると思うんだけどなあ。

「あら、貴女、”北の民”かしら？珍しいわね、そんな人間がヴァンハイトにいるなんて。」

北の民？

新たな単語だ。

シルビアの”過去”に関する事が・・・。

「シルビイ、大丈夫だ。外で待っていてくれ。」

本当はオレは知っていないきやいけないんだけどな。

でもさ・・・なあ？

「わかりました。」

シルビアもハディラムと同じように部屋の外へ出て行く。

「他人に自分の大切な部下の事をどうこう言われたくないんだが？」

丁寧語なんて、もう面倒だ。

ただオレの中で一本線引きをする。

「それは失礼しました。でも、北の民がヴァンハイトと一緒にいるなんて、皇子様は変わった方。」

何かイラつくな。

「オレは出自や外見は気にしない方でね。大体、人間ですら外見が色々なのに、やれダークエルフだからどうか、獣人・亜人だからどうかとか、そんな話をするなんて馬鹿らしい、無駄。」

そんなのナンセンスだ。

ナンセンス？

何だソレ？

まあ、いい、きつとこういう論外的な時に遣うに違いない。

「北の民がどういふモノか知っても？」

「あのさ、北の民だから全員がこうだとか、ヴァンハイトだからこ

うじゃないとかいっつてのは確かに楽だけどさ、される側はどうなのかね。」

閉鎖的過ぎる。

まあ、周囲の環境や土地柄もあるだろうけれどさ。

「はぁ……。」

目の前で盛大に溜め息をつかれた。

相手をしていて溜め息をつきたいのはオレの方なんだが。

「やっぱりお兄様の方がヴァンハイトの皇子らしいのかしら。」

「ああ、兄上はきつと歴史に残るヴァンハイトの皇王になると思うよ。」

弟より兄という言葉や反応には慣れている。というか、逆に安心してしまふ卑屈な弟のオレ。

いやさ、弟から見てもそうなんだから仕方ない。

「お兄様はどんな方？」

「兄上か……これぞヴァンハイトという典型。金髪・蒼眼、今は片方だけけど、きちんと神器も継承している。勿論、文武共に優秀。」

おお、今更ながら凄いなだ兄上。

再認識してしまった。

それに対して、目の前の彼女は首を傾げる。

「では……。」

そいて虚ろな瞳をこちらに向けて。

「弟のアナタは一体、”何者”なの？」

シバられる必要なんてないというコト。【中】（後書き）

ようやく予言の力の話を入れられました。
次回、急展開？！

シバられる必要なんてないというコト。【後】

何者・・・その問いは難しい。

オレの中にトウマがいる事とは別に。

「自分が自分であると証を立てるって非常に難しいと思うのだけれど？」

どう述べたらいいものか。

「アルム・デイス・ヴァンハイト。ヴァンハイトの第二皇子。ここまではいいかな？」

「ええ。」

さて・・・ああ、外見も説明しなきゃいけないのか・・・。

「ヴァンハイトに稀に生まれる黒髪。んで、黒い瞳。」

他は・・・。

「身長はアシュリー又さんと同じくらい。第二皇子のせいかな、誰も関わろうとしないせいで、小さい頃に国内の長剣使いに師事して、まあ、双剣も使うけど紆余曲折あって現在は長剣二振り。」

何処まで話せばいいんだ？

いい加減、面倒になってきたんだが・・・。

アシュリー又さんは、オレの話を守る気配はない。

つまりまだ話せという事なのだろうか？

「現在、リツヒニドスを形式的とはいえ、統治中。」

「リツヒニドス？」

あれ？何か予想だにしないところで、意外な反応。

「今はリツヒニドスに住んでる。ハディともそこで出会ったから。」

「そう・・・。」

「他に聞きたい事は？」

とりあえず答えられる範囲なら、いくらでも答えるつもりではある。

「皇子様は何故、長剣を使おうと思ったの？」

核心を・・・掠ったくらいか？

今の質問は。

「国内で一番強かった人間が、長剣使いだったから。」
嘘じゃない。

しかし、今になって振り返ってみると、都合よくいたもんだバルド
みたいな奴が。

「そう。じゃ、次で最後の質問。」
意外と質問少ないな。

だが、さっきの質問があれだけ掠ってたんだ、次は核心をつくモノ
が来るんだろう。

「皇子様は”黒い剣”をお持ちなのかしら？」
「は？」

良かった構えておいて。

とりあえず、理解出来ないという主張をすぐさまする事が出来た。

「何ですかソレ？」
嘘はついていないぞ。

今は持つてないしな、うん。

「だから、”黒い魔剣”。」
拘るなあ。

シルビアが言っていた事は、こういう事なんだろうか？

「魔剣？」
神器を魔剣扱いかよ。

いま、あの能力は魔剣といえなくはないけれど。
それよりだ。

きちんと演技出来てるよな？
「悪しき魔人の野望を打ち砕いた六英雄が神器の一つ。」

・・・子供の頃、乳母であるミランダの母に何度も聞いた話なん
だが。

今、六英雄って言ったよな？

子供の頃から聞かされていた四英雄ではなく。

「皇子様はご存知でしたか？神器を創りし賢者と悪しき魔人は、同じ一族の出であるという事を。」

勿論、初めて聞く。

つまりこの地域に伝わる英雄譚は、現在一般的に伝わっているものとは違うという事が。

そうだよな、誰かが創らないとこの世には存在しないもんな。

「水の流れをも断つ細剣を白き若者に。天を衝く斧と地を砕く槍を双子の姉弟に。黎明の如き慈愛の光剣を金色の姫に。星を分かつ双ツ剣を蒼き若者に。そして・・・宵闇の如き無慈悲な黒剣を漆黒の若者に。」

神器に関する細かな部分もあるのか。

「見事魔人を討ち果たした英雄の内、二人が今もある国の祖王となりました。」

「二人だけ？」

そんなハズはない・・・。

現に英雄国家は、ヴァンハイト・クロアート・セルブ・セイブラム少なくとも四力国は今も確かにある。

「ヴァンハイトとセルブ以外の国は違いますよ。どちらも英雄の一族が興した国です。」

成る程。

直系でなくとも一族なら、神器が使える可能性はある。

「さて、皇子、アナタは一体何処まで知っていて、何処のどなたかしら？」

「質問はさっきので最後では？」

この人は敵になるだろうか？

少なくともシルビアは気を許すなど言っではいだが。

ここは乗っておくか・・・。

「アシユリー又さんの”能力”でわからない？」

彼女がそうであって欲しいのか、欲しくないのか。

オレはどっちなんだろうな。

「・・・世界の全てが解つたら、私はこの世の全てと一切関わりを絶たなければならぬもの・・・。」

「理屈は理解出来るかな・・・。」

「アシユリー又さんは何を視て、一体オレに何を期待してんだ？」

「私は・・・ただ・・・彼女が愛した皇子に会ってみたかった・・・。」

「やっぱり・・・予言の力を？」

「コクリと頷く。」

困ったな。

「オレは真正正銘のヴァンハイト皇子だよ。」

オレがどう彼女に微笑みかけようが、彼女には見えない、届かない。

「私は生まれた時、既に盲目でした。」

真つ暗闇の世界。

最初から見る事が出来ないというのは、どういう気分なんだろう？

「だから、私が唯一視られたのはその姿だけ、その記憶だけ。」

「記憶？」

「皇子様、アナタはヴァンハイト様の記憶を視る事はありますか？」

ヴァンハイトの記憶？

・・・オレがディーンの神器を持った時のようなものだろうか？

それが出来たら、オレも是非視てみたいものだ。

視て、罵倒の一つでも言つてやりたい。

ん？そうしたら、双剣を持った兄上や父上・・・ヴァンハイトの皇

王は皆、ヴァンハイトの記憶を視たのだろうか？

視て・・・何もしてこなかったというのか？

「・・・アシユリー又さんは、自分の先祖か何かの記憶があると？」

あるとしたら、例の従者の記憶だろう。

「断片的ならば。」

本気でどういう選択肢を取つたらいいのかわからなくなってきた。大体、敵か味方とかいう線引きが極端過ぎるんだよ、二つしかない

じゃないか。

頭だつて痛くなるさ、そりゃ。

「・・・アナタの質問に一つ答える代わりに、オレの質問に一つ答えて欲しい。」

「私が嘘をつくかも知れないわよ？」

ああ、本当に面倒くさい。

オレって策士型でも、頭が良いわけでもないのに。

「逆にオレが嘘をつくって可能性もある。でも、それを考え始めたら、キリがない。でしょ？」

こつ、があーつと叫んだり、暴れなくなったりする時だつてあるんだ。

神経だつてそんなズ太くないつて事だ。

「予言の力を得て、誰にどんな予言を告げた？」

アシユリー又さんじゃない誰かの事をアシユリー又さん自身に問うというのは、多少複雑な気もするけれど。

きつと、そこが歴史の分岐点。

オレはその確信が直感的にあつた。

【誰に】というのは、彼女の今までの発言から薄々見当がついている。

だからそこ、どうしても彼女の口からはつきりと知りたい。

「”双つ剣携えし者、世界を統べる王とならん”。」

ちよっぴり予想外だな。

てつきりそこにヴァンハイトの凶行の理由があるんだと思つていたんだが・・・。

「それをヴァンハイトに？」

肯定の意で頷くアシユリー又さん。

「では、皇子。私の質問です。皇子はヴァンハイト様のご記憶は？」

「悪いが無い。オレは国を継承する気はないから、神器にすら触れた事もないし、そんなモノを夢で視た事すらない。」

「そう・・・ですか・・・。」

寂しそくに顔を伏せる彼女を見てみると、何故かイライラする。自分だって同じようなもんなのに。

他者の記憶で歩みを変えた者としては・・・ああ、同じようなもんだから、イライラするのか。

「オレはね、アシュリーヌさんが、オレの長年の疑問に答えをくれる人だと思ってる。」

「皇子様？」

「オレはアナタの皇子様になれない。祖皇ヴァンハイトじゃないしな。同じようにアナタだって、その最初の予言者でもなんでもない。」

それでも自分で選んで、望んでこの道を決めた。

正直、それでも振り回され過ぎだよな、オレ達は。

「本当はシルビイにも、アナタを安易に信じるなと言われてるんだけれど・・・やっぱり、オレはどうせなら信じる側にいたいんだよね。」

解っていても、それでもどちらの側にいたいかと聞かれたら、さ。「アシュリーヌさん、ヴァンハイトは何故、親友を、仲間を裏切った？」

思わず目の見えない彼女を睨む。

これに答えが出たとしても、何が変わるワケでもないのはわかってる。

ああ、本気で地位と国を捨てる決心がつくくらいかな。

ある意味、すつきりするだろう。

「・・・。」

「どうした？」

彼女は答えるだろうか？

それとも嘘をつくだろうか？

たとえ嘘をつかれたとしても確認のしようがないしな。

だが、歴史に記載されていない事を、オレも彼女と同じように述べたんだ。

出来れば答えて欲しい。

「全ては愚かで哀れな女のせいです。」

女？

「予言の力を手に入れようと思ったのも、その為。」

「それがどう……。」

整理しきれぬだろうか？

「愛しきヴァンハイトの為に力を得、そしてその力を使った。」

「愛しき……？」

「でも、”私の想い”は決して届く事は無かった。彼はディアナを愛していたから。」

ディアナ？

新しい登場人物だ。

「でも！私はどうしても愛しい彼に自分を見て欲しかった！だから！」

記憶が混濁している……のか？

アシュリーヌさんの顔には狂気と悲痛さが漂っている。

彼女もオレと同じでのめり込んでいるのかも知れない。

変えようもない歴史という名の過去の記憶に。

「考えてみて、双つ剣が何なのかを。」

そりゃ、それをオレに聞いたら答えは一つしかない。

「ヴァンハイトの双剣……。」

真つ先に浮かぶよな？普通。

「そうよ。でもね、ディアナ・セイブラムは、デーン！”アナタを愛していたんだもの！”」

その言葉を聞いた瞬間、オレは自分の剣の切っ先を彼女に向けていた。

そして、すぐさま冷静になって、握った剣を投げ捨てる。

「下らない……下らな過ぎるよ……。」

悔しくて涙が出てきた。

混濁しているのは、彼女ではなくオレの方なのかも知れない。

「下らない?!愛する者の為に生きるのが?!」

「そうじゃない!どうして皆、そうなるんだよ!・・・どうしてそんなに傷つけあってまで・・・。」

ディアナとディーン。

神器を持つ二人の間に、もし子供が生まれたら・・・その子は、
”双つ剣”を持つ事が出来るかも知れない・・・。

「結局、同じか・・・オレもヴァンハイトだしな・・・この血は呪われている。」

何が世界の王だ!

予言なんて不確かなモノに踊らされやがって・・・。

「アシユリー又さん。」

オレは彼女に何を言えばいいのだろうか?

彼女の名を呼ぶだけで精一杯だった。

扉が開き、オレ達の叫び声を聞いて部屋に入ってくるシルビアが、オレに駆け寄って来てから後は、何も覚えていない。

シバられる必要なんてないというコト。【後】(後書き)

今回も土日更新アリマス。

エイユウと呼ばれるってト。

オレの知るただ一人の英雄……。
なあ、デイン？

貴方はそれでも自分を裏切った親友とものいる世界を護りたかつたのですか？

たとえ、愛する人が残された世界で孤独に生きる事になっても？

何故、オレを……どうしてヴァンハイトであるオレを選んだのですか？トウマがいたから？

罪を償わせたかったから？

一体、オレはどうすれば……。

「あ……。」

目を覚ますと、オレはシルビアに膝枕されていた。

何でシルビアだとすぐに気づいたかと言えば、そこに山があるからだ。

「大丈夫ですか？」

「ああ……。」

一度口にして出した言葉を翻すのは、本当に信条に反するのだが。

「シルビイは知っていたの？その、ヴァンハイトの事。」

それでも怖くてデインの事は聞けなかった。

「アルム様。北の民とは大戦を起こした一族の末裔です。戦争終結

後、ディアナ様に守られて過ごしてきました。」

「そうか……彼女は生涯独り身だった？」

「ええ、そう伝わっています。」

デインの恋人だったというディアナ。

彼女は何を想って逝ったのだろう……。

「オレの一族は、人から奪う事しかしてないのに……。」

たかが神器一つで、何をそんなに。

「アルム様……その……。」

言葉を濁すシルビア。

オレは彼女の意を汲み取る。

「いいよ、言つて。寧ろ、知らないでいるって事の方がもう嫌だ。」
たとえ、どんなに絶望する事があってもだ。

「神器はそもそも、力の強い北の民の命で、一族の賢者によって創られました。」

ああ・・・人って醜いんだな。

そして、オレも。

また視界が涙で歪む。

「お話ししなかったのは、アルム様が傷つく姿を”私が”見たくなかったからです・・・アルム様にずっと優しいままでいて欲しかったから。ただの私の我が侷。」

そこにあるのは、シルビアなりの優しさ、温もり。

「オレは優しくなんかないよ。オレはただ、この血から逃げ出したいだけなんだから。」

生まれてきて良かったかすらさえ、時折思っていたくらいだから。

「アルム様はお優しいですよ。」

そう言つと彼女は泣いているオレの臉に軽く手をあてる。

「そんなのはただの偽善だよ。」

「偽善だったとしても、皆さん、その優しさで幸せを感じています。それにそんな人は、こんな風に泣いたりなんかしませんよ。」

オレは。

オレはどうすればいい？

どうしたらデーインは認めてくれる？

赦してもらおうなんて最初から思っていない。

だから・・・。

「アルム様、罪という意味でしたら、魔人と行動を共にし世界を滅ぼしかけた北の民である私も大罪人です。」

彼女の口調は穏やかだ。

「アルム様は、私を断罪しますか？」

・・・オレは誰かに罰して欲しかったのだろうか？
それだけの為に今まで生きてきた？

「違う。オレは民が望む自由な世界を作りたかったんだ。その為に
ヴァンハイトという偽りの国を崩したとしても。」

新たな世界、国。

そこには種族の差別も偏見もない。

勿論、神器だつて、王侯貴族のような出自もいらぬ。

「シルビイ、ありがとう。」

「いえいえ。」

馬鹿だな、オレは。

残された時間も少ないというのに。

「シルビイ、アイツの狙いは何だ？神器を集めてどうする？」

その前に必ずやらなければいけない事がある。

「いや、ヤツは何処にいる？神器を取り戻す。」

「わかりません・・・ですが、恐らくディアナ様の神器を解放する
事が一つの狙いかと。」

ディアナはセイブラムの出身。

法皇様もセイブラムには神器はないと言っていた。

つまり、国外の何処かにあるという事で、その為には複製神器が必
要という事なのか？

「一族の中には世界をやり直す事を望む者達もいます。」

世界をやり直す？

「ああ、確かに腐った世界だもんな。」

ディアナの想いを踏みにじり、ディーンを裏切り、犠牲と偽りだ
けで成り立った腐った世界。

「居所は・・・。」

「きつと、ハディラムさんなら大体の場所を知っているかと・・・。」

「こんな所で寝ている場合じゃないな。」

身体を起こして、立ち上がると再び目眩いが・・・。

「アルム様?!」

心配そうに近寄るシルビアと手で制す。

その手の指先が微かに震えている。

「まいったな、もうちょい頼むよ。」

再び足に力を込めて。

「なあ、シルビィ?」

「はい。」

「そんなに恋とか愛って人を狂わせるモノなのかな?」

今一つピンと来なかったりして。

「ですね。アルム様が好きな人は、みんなアルム様が好きですか

ら、わかりませんよねえ?」

何か馬鹿にされた?

言葉の端に棘が。

絶対、鼻で笑われたカンジがしたゾ?

「そうですねえ。ミランダさんが、誰かに襲われたとしたら。」

「相手をブツ飛ばす。」

「つまり、そういうコトです。」

「・・・具体例つきで、どうも。」

何をしでかすかわからんってコトだな。

それだけは解った。

「あのお?」

「今度は何?」

「もし、私が襲われても・・・。」 「全力で護ル。というか、冗

談でもそんな事を言うな。」

本当、馬鹿くさい。

皇子だろうが、ヴァンハイトの血が流れようが、助きたい護りたい。

偽善だろうが、自己満足だろうが、いいじゃないか、それで。

「よし、どんどん行くぞ。」

オレは扉を開いて部屋を出ると、案内された順路を逆に辿り、最初の大広間へ向かった。

当然、シルビアも一緒に。

エイユウと呼ばれるってコト。(後書き)

どうやら、私、シリアスを書き続ける力はないみたいです。(汗)
さてさて、ここからはベタ展開です。

皆さんの予想通りでも、最後までお付き合い下さいね。
日曜更新あります。

イトシサは狂気にも狂喜にもなるというコト。(セイブラム法皇視点)

「・・・来たか。」

ふと顔を上げると、目の前の景色が微かに歪んでいる。久しく感じる事のなかった経験だ。

「まずは初めまして。」

見た事がない金髪・金眼の少年。

同じ懐かしい感触でも、あの皇子とは全然違うな。

「仲良しになる為に来たんではあるまい？ 挨拶などいらんよ。」

用件は解っている。

それにしても、こつも簡単に踊らされると、一言、二言は言っさりしたい気分にもなる。

「話が早くで助かるね。」

何だかの。

自分が持っていた杖を、少年に向かって投げる。

「しかし、そっくりだな。」

投げられた杖を取る少年。

そっくりだと自分で発言しておいてんなんだが、どちらかということ彼よりアルム皇子と一緒にいた侍女の方が似ているか。

「持つて行くがいい。もう一人の余よ。」

不敵な笑み。

「同族でもさしずめ、余がディアナの良心だとしたら、君はディアナの悪心だな。」

少々複雑な善と悪だが。

「ボクがディアナの悪心だと？」

少年の不敵な笑みが、鋭いものへと変わる。

「なに、人など誰しも善と悪の心を持っているものだ。」

それは別におかしな事でもなんでもない。

「何を勝手な・・・。」

「勝手か、そうだな。この世界の人々は勝手だ。でも、それは余も君もそしてディアナも同じだよ。」

人は所詮、理解しあえぬのかも知れん。だからこそ、理解しあおうとせねばならん・・・そう一族は教わったはずだ。

「君がそれを使って何をやるうとも、たとえ君が何もしなかったとしても、最後には解る事だ。」

どうしてだろうか？

自分でも信じてみようと思っってしまったからだろうか？

「フンツ！オマエ達は最後までそこで好き勝手言っていればいい。

ボクは世界を変えてヤル！」

杖を手にした少年の姿が虚ろになる。

やがて、杖ごとその少年は消えていった。

結局は余を殺そうとはしなかったか・・・世界を変えてしまえば、どうせ用済みの老人には変わりないからか、或いは・・・しかしだ。・・・世界を変える手段は、本当にそれしかないのかね？」

かつて同じ事を想った人間が、昔の自分と対峙した気分だ。

その陰鬱さに溜め息が出る。

「法皇様！」

「何だ騒がしい。」

突然入ってきた衛士の様子を一瞥する。

これ以上の悪い事はもう起こらんと解っていても辟易とするのは仕方が無い。

「セルブが！」

「そうか。戦える者は時間稼ぎの用意を。他の者は民を何時でもここから避難させる事が出来るよう準備を。」

周到な事だな。

どちらかという臆病か。

予想の範囲内だ。

「ですが・・・。」

「宗教などというモノはな、民の心の安寧の為だけにあれば良い。国という体系など持たなくとも構わないのだよ。従って、万が一の事があれば、この首都を放棄する。わかったかね？」

「はっ！」

「やれやれ……。」

確かに現状に満足するのみだけならば、人は進化の道すらないのかも知れぬが……。

「何もそこまで欲張らんでもなあ……。」

「それが人間の性ってヤツなんだろ。」

ん？

最近、懐かしい声や姿ばかりだな。

「何しに来た？」

熊のように大柄な男が戸口に立っていた。

全く、どうやってたらこんな誰からの目にも付く大男が、気づかれずにこんな所まで入り込めるのやら。

「笑いに来たのか？」

更に問いかける。

「冗談。オマエを笑うんだったら、こつちも同じさ。いい笑い者同士だ。」

遠路はるばる、このセイブラムまで来た友人は笑う。

「そうか？皇子は素晴らしい若者と感じたが？」

目の前の椅子をとりあえず彼に促すと、どっかりと座る。

「アルム様が素晴らしい人間なんて事はな、最初っからわかってい
る。」

座った男は、近くにある机に大きな壺のような物体を置くと、ニヤリと笑う。

コイツも意外と変わらんなあ。

「直感したよ、ああ、この子なんだとな。オイ、何か杯になるような物はないか？久々に呑もうと持ってきたんだ。」

「……不謹慎だな、オマエ。」

これから何が起こるのか知っているクセに。

「そう言われてもだナア、まだ時間はある。暇だし、丁度いいじゃないか、な？」

ガハハと豪快に笑う。

「バルド」、本当にオマエ何しに来たんじゃ？」

頭痛がしてきそうになるわ。

「決まっている。ここでその時を待つんだよ。友と一緒にな。」

本当、ヤレヤレだ。

「その酒、」二人分”あるんだろうな？」

「勿論。」

モウジンなんてしないってコト。

「お？大丈夫か、アルム。」

大広間に行くと、ハディラムとアシュリー又さんがいた。

「ああ、大丈夫だ。ちよつと話があつてな。」

「そうか。」

ハディラムが席を外そうとするのをオレは止める。

「アシュリー又さん？さつきも言ったけれど、オレは貴女の皇子様じゃない。オレはヴァンハイトなんていらぬ。オレはオレを信じ
てくれる者達の”アルム”でいたいから。」

ヴァンハイトである前にオレはアルムだ。

国を捨てる決意も、滅ぼす決意もずつと前からある。

「貴女もそんな記憶に振り回されず、アシュリー又さんでいて欲しい。」

「私自身・・・でも、私が視られるのはそれだけで・・・。」

”ソレ”はついて回る。

ただ、そういう気持ちをオレも多少なりとも理解出来る所が、普通の想いと違つ。

オレはゆつくりとアシュリー又さんに近づいて、彼女の頬に触れる。彼女の頬はオレの手よりも少し冷たく、そして柔らかかった。

「目が見えなくても、目に映るモノが他の誰かの記憶だけだとしてもね、それだけじゃないでしょう？」

現にこうして、オレは彼女に触れられる。

「そんなモノ以外に感じる事が出来るはずだよ？貴女を想う者達は、貴女の周りに沢山いるから。」

少し身体がダルい。

彼女の頬が冷たいんじゃないのかも知れない。
オレに微熱があるのかも。

「それとハディ。」

「ん？」

オレは彼女の頬から手を離し、ハディラムに向き直る。

「アシユリー又さんに会わせてくれてありがとう。」

きつとこの為には彼はオレをここに連れて来たのだろう。

今なら解る気がする。

「すつきりしたか？」

「ああ。次はオレの番だ。」

「アルムの番？」

「神器の盗難犯の所へ行く。犯人は北の民出身だ。狙いは恐らくデ

イアナ姫の神器の解放。」

と、革命かな？

「やっぱりか。」

それを聞いてもハディラムは顔色一つ変えない。

情報があるのだから、ある程度の予想はついていたのだろう。

「アルム。オレも一つ教えてやるよ。コイツな。」

槍を見せるハディラム。

「コイツは神器を破壊する為にある。」

「神器の破壊？」

セイブラムに入国する前、複製神器を破壊出来ると言っていたの

を思い出す。

アシユリー又さんの話からすると、あの神器を使っていた英雄は、

色々な点で他の英雄と異なっている。

国を興さなかつた点、名前も記録も後世に残らなかつた点。

そこはデインに似ている。

「英雄として奉り上げられる事になったある日、姉弟は誓った。後

世、もし神器が世界の均衡を崩す事があれば、容赦なくそれを葬る

つてな。」

弟が後世、名すら記されずに消えていったのは、そういう事だっ

たのか。

その方が都合が良かったのだろう。

それとも、人に絶望したのかもな。

際限無き人の欲望に。

「なあ、ハデイ？」

「んー？」

こんな事はハデイラムに聞く事じゃないのだから。もし記憶の断片を視たのならば。

「姉弟は・・・幸せだったのかな・・・？」

再び出会う事がなくとも、出会う時は血で血を争う結末が待っているかも知れないとわかっていても。

「さあな。」

ハデイラムはチラリとアシュリー又さんを見る。

オレではなくて彼女に向かって。

「ただ、ソイツはソイツで精一杯生きたんぢやうかな？でなきゃ、今、俺様の手にコレがあるわけがない。最初に手にした想い人間の強い想いがなきゃな。」

もし、何処かで彼の意志が継がれなかったら・・・。

「そうか。」

「そうやる？国が無くなっても、この想いは無くならんかった。コレが・・・いや、俺様がその証だ。」

だとしたら、オレがここに存在している事も何かの証になっているのだろうか・・・。

「一つだけ断つとくけどな。」

ハデイラムの瞳は、依然アシュリー又さんを見つめたままだ。

「これは確実に俺様の意志だ。俺様がそれを望んだ。俺様にしか出来ない事だと思つとる。」

「自分は、自分にしかなれないもんな。」

たった一人の弟からの、姉への言葉。

ずっとハデイラムはこの言葉を彼女へ言いたかったんだろうとオレは思う。

それを何時か、今でなくてもいいから、アシュリー又さんにも解つ

てもらえるといいな。

歴史の亡霊になんか望んでなるもんじゃない。

「アシユリー又さん。」

オレも。

オレも何時か解ってもらえる事を願って。

「また今度、ゆっくり話しましょう？今度はオレ自身がどうやって生きて、どんな人と出会ったか。それでもオレ、色んなトコで色んな国の人や種族と会ってるんですよ？」

彼女の目を治す事は不可能だ。

再び彼女の瞳が何かを映す事はないだろう。

「そやな。俺様達が姉ちゃん目の目になって色んなもんを見てくりゃいい話だ。名案だアルム。」

人間なんて一人で生きるもんじゃない。

今だって、オレの傍らには誰かがいる。

「ありがとう・・・やっぱりアナタは私の皇子様ね。」

何時かオレ達の国へも来て欲しいな。

リツヒニドスなら森も川もある。

匂いと音、目以外で感じられるものは沢山あるだろう。

「さてと。出る用意でもするか。」

オレは荷物を取りに行こうとして・・・視界が歪む。

「アルム様！」

素早い反応で、ルチルがオレを支えようとするが、彼女の身長の方がオレより低い。

支えきれずにゆっくり身体が傾く。

「おっと。」

「クラ・・・ム。」

丁度よく大広間に来たクラムがオレを支えて、ようやく倒れ込む速度が止まった。

「アルム！オマエ熱あるやんけ！」

倒れそうになったオレの額をぱちつと押さえたハディラムが声を上げる。

「大丈夫。」 「ダメですっつ！」

オレの声を遮って大声を上げたのは、意外にもルチルだ。彼女は両の拳を強く握り込んで、息も荒く叫ぶ。

「絶対ダメです！今日はここで一晩ゆっくり休んで下さい！」
何時になく強い彼女の口調に、オレは従うしかなかった。

モウジンなんてしないってコト。(後書き)

神器を持つ者はアルムだけじゃない。

過去の記憶に苦しむのもアルムだけじゃない。

そして、アルムは一人じゃない。

いろは順編(?)のエピローグです。

「弱つたな・・・。」

オレ、ここに来てこんな事ばかりだな。

ほとほと呆れる。

ルチルはオレの身体の事を知らないから、仕方がないか。

残された時間がないからこそ、急ぎたいのだが・・・。

「すみませんっつ。」

横になっていた身体のうち首だけを声のした方向に回すと、ルチルが木桶を持つて立っていた。

「何故、謝るんだい？」

何でこんなに亜人は可愛いのかな・・・。

あーあ、耳までシユンと垂れちゃって。

「オレの身体を気遣つてだろぅ？謝る必要はないよ。」

だから、オレは頑張れるんだしな。

「どうした？」

黙り込むルチル。

「あ、あの、お身体を拭きに来ました。」

「ルチルが？」

身の回りの事は自分でするのが、オレの基本方針なんだが。

実際は、最近そうも言えなくなってきたんだよな。

だって、侍女の仕事がなくなってしまうから。

でも、こういう仕事は本来なら、侍女のシルビアとかがやるわけで。

「あ、私がお願ひしたんで・・・。」

「そうなのか。」

オレはゆっくりと身体を起こす。

幸い、今は体調はなんともない。

熱も下がったみたいだし。

と、いつても病気とは違うから、いつ身体に影響が来るかわからな

い。

これが難点か？

出来れば予告とか予兆があったりすると、楽でいいなあと思うが・
それは楽し過ぎか。

「そうか、悪いね。」

「いえ。」

オレは着せられた夜着の上だけを脱ぎ、背をルチルに向ける。

「背中だけでいいから。」

「はっ、はいつ。」

背中にペタリと心地の良い冷たさ。

「なあ、ルチル？」

「はい。」

「世界は広いよね。」

広くて人生ほとんどを使っても全部は見る事が出来ないだろう。

「はい。」

「まだ見ぬ地、まだ会わぬ人々が沢山だ。」

オレの知らない人達の日々の生活が存在する。

「私もあのまま亜人の故郷にいたら、見る事は出来なかつたです。
だから、とても感謝しています。」

腐った世界だろうと、それとは関係なく生きている人達。

「・・・もつともつと沢山見て欲しい、体験して欲しい。本当は全
て獣人・亜人達に・・・そして、自分の意思で選んで欲しいと願っ
ている。」

ハデイラムがそうしたように。

マール君が願ったように。

自分の意思で選ぶ事は責任が伴うけれど、それから逃げるわけにい
かないし、逃げた者には何も得られはしないのだろう。

「獣人や亜人に自由を。そう願った亜人がいたという事を忘れない
であげて。」

少しは君の望んだ世界に近づいているかな？

「それだったら、アルム様もそうですね？少なくとも私にとっては、」
丁寧なひたすら丁寧にオレの背を拭うルチル。

「だから、アルム様の事が心配で・・・私、アルム様を作りたい、作る世界を見てみたいです。」

少し力が入る。

「そして、それをお手伝いしたいです。」

・・・弱ったな。

最近、涙腺脆くなっただんじやないか？

いや、泣いてはいないけど・・・かろうじて。

「あのねえ・・・ルチル？」

「今度、私が自分の意思で選ぶのはソレです！」

言い切られてしまった。

「そんな意味でルチルに世界を見てもらおうと思ったわけじゃないんだけどなあ・・・。」

これは良い事なのだろうか？

それとも悪い事なのだろうか？

考えて、そう思ってもらえる事は、オレにとっては嬉しい、うん、そうだな。

でも、彼女達にとってはどうなのだろうか？

残されてゆく事になるだろう者達は・・・。

「ごめんね・・・。」

「迷惑ですか？」

泣きそうなるルチルの声に、オレは振り返る。

「いや、嬉しいよ。ルチルが自分で考えて出した結論だからね。尊重するよ。」

オレの身体がもつ限り。

「でもね、オレはルチル、君を何も籠の鳥にしたいわけじゃないから・・・だから何時でも行きたい所へ行って、見たいモノを見ていいんだからね？」

「はい！大丈夫です。それまではアルム様のお傍にいます！」
張り切っちゃって、まあ。

なあ、トウマ・・・みんな、オマエがオレにくれたモノだよ。
だから、もうちょっとだけ、な？

一区切りがつくまで・・・。

「あ。」

「どうしました？」

「籠の鳥というより、ルチルには檻の中の猫の方がわかりやすかったか？」

そうだよな、ルチルは猫っぽい亜人だし。

耳の形といい、毛並みといい・・・。

「いや、その、別に、そこまでして頂かなくても、ちゃんと通じます・・・から。」

「あ、そう？ならいいけど。」

通じてればいいんだ、うん、噛み合っていればな。

「ぷっ、あは、あははははっ。」

オレの表情を見て、唐突に笑い出すルチル。

「酷いなあ、解り易くしようとしたオレの心遣いなのに。」

「すみません、だって、あははは。」

そんなに笑わなくても・・・。

「まあ・・・いつか。」

目の前の彼女を笑顔には出来たのだから。

スイザンしてよづともって「ト。　　くエピソードくく【皇子はソレを為す。】

銀縁の簡素な飾りだけの黒い鎧。

付加持ちの円盾を籠手にしっかりと固定。

そして、同じく付加持ちの銀の長剣と、頑丈な長剣の二振り。

踏んだ場数のせいとか、装備に慣れるのが早い気がする。

「やるだけやるのは、変わらない。オレはオレ。」

ちよつとした暗示・・・にもならないか。

「行くよ、シルビィ。」

「はい。」

傍らに控えているシルビィを連れて部屋の扉を開くと、すぐそこにルチル。

彼女はニコリと微笑むとオレの後につく。

「さつさと片付けて帰ろう。」

「だな。」

細長い廊下の壁に寄りかかって腕を組んでいるハディラム。

「お待ちになつて！」

気持ち悪くニヤニヤと笑い合うオレとハディラムの間に、クラムに連れられたアシュリーヌさんが割って入る。

「？」

「そんなに急いでどうした、姉ちゃん？」

目が見えないと表情が乏しいせいか、読めないんだよな。

「もう少し待つて、大門の前でいいから・・・。」

「待つ？門で？」

「”世界からの文”が来るの！」

”世界からの文”？

随分と抽象的かつ、大仰な。

「予言やな？アルム、大門にとにかく行くで。」

ハディラムはそう言うと言つて走り出した。

予言ね。

せめて、おおまかでいいから、時間を指定欲しいものだ。
オレも大門に向かって走り出す。

「シルビイとルシルはゆつくりでいいから！」

薄暗い廊下を一気に走り抜けて、宮殿の外へ。

そのまま、立ち止まらずに大門へと向かう。

「ハデイ！」 「静かに！」

耳をすませているハデイラムに習って、オレも彼の隣で耳をすま
す。

「来るで、馬は三頭。」

ハデイラムが槍を構える。

悠然と構えるハデイラムと待つと、しばらくして馬を引いた人影が
現れる。

「人間には見えるな。」

獣人や亜人には見えない。

世界の文っていうくらいだから、迷い人でもなさそうだ。

鎧姿の人間が二人と軽装の人間が一人。

「アル！」

軽装姿の人間の方が、オレに向かって駆けて来る。

その”女性”はオレを抱きしめて……。

「良かった無事で……。」

「なんや人騒がせな。アルムんトコの間か。」

「え……あ……。」

自分に抱きついていている人の顔を見る為に、オレは首を回す。

オレよりちよつとだけ背が高く、赤の短めの髪に金の瞳……。

彼女の顔を見ながら、オレはその場にずるずると崩れる。

「アル?!」 「アルム！」

そんなオレの様子に二人が驚きの声を上げ……オレは胸の息苦
しさに慌てて呼吸を深める。

「アルム様！」

背後からルチルの声と複数人の足音が聞こえる。

「大丈夫。ちよつと・・・驚いただけ。」

もしくは笑いがこみ上げそうになっただけ。

「で、何があつたんだ？こんな所まで来るなんて。」

これが”世界からの文”なのだろうか？

クラムヤルチル、シルビア、アシュリー又さん全員が合流したのを確認して、オレは問う。

「セルブが・・・セイブラムに侵攻しました。」 「セルブが？！

クロアートではなくセイブラムに？」

何故だ？

クロアートに侵攻なら理解出来るが・・・。

「オレがクロアートと親交を持ったから・・・か？」

現状、クロアートに侵攻したら、ヴァンハイト・・・少なくともオレは確かにセルブの不利にはなる。

オレは第二皇子だから、ヴァンハイト全体が動くかどうかは別かも知れない。

ラスロー王子やオリガさんはオレを高評価していた。

国外でのオレの評価は、また別なのかも。

セルブがクロアートに侵攻するには、不確定要素が多過ぎるといってもわかる。

でも、だからって、何故セイブラム？

そんな事したら、クロアートにつけ入る隙を与える事になりかねない。

「表向きは例の学舎での件でしょう。セイブラムの思想を他国に植えつける事を脅威と感じている。」

「だが、そんなのは事前に合意していただろう？」

今更、それを掘り返して何になる？

「ラスロー王子を危険に晒したのもセイブラムの計画だと。」

恥も外聞も無くなつたか？

なんていうこじ付けだ。

「成る程な。」

一人、ハディラムが納得の声を上げる。

「アルム、何故、今まで戦は起こらなかつたんや？」

何故？

それは地理的にも戦力的にも均衡が取れて……。

「セイブラムには神器が無い……？」

「ご名答や。それなのに複製の神器を作る技術がある。とか広まったら、どうする？」

「あ……。」

たとえそれが嘘でも関係ない。

その技術を手に入れば、戦力の均衡は更に崩れる。

無かったとしても、神器のないセイブラムの領地を手に入れる事が出来る。

「クロアートは動かんかも知れんな。」

密約を交わしたか、或いはクロアートも既にセイブラムの情報を掴んでいるのか。

「クソツ！まず一度、そっちに介入するべきか？」

幸い、ここにも神器は一つある。

それは最悪の展開だが、少なくとも犠牲や被害は確実に減る。

「それがな、アルム……。」

ハディラムが困ったように槍の先を地面に突き刺して、手を離す。
「きやつ。」 「うぐつ。」

前者はアシュリー又さんの悲鳴、後者はオレの呻きだ。

「姉ちゃんとアルム……あとそっちの姉ちゃんもわかるやろ？ 槍がさつきから鳴ってる……もうこっちも時間がヤバいみたいや。」

この機会を狙って。

つまり、それはアイツの仕業……。

「クラム！俺様が戻るまでセルブを抑えろ。」

「心得ました。」

時間を稼ぎ出すしかないか。

「リツヒニドスやヴァンハイトの対応は？」

ヴァンハイトは恐らく、動かないだろうな。

「現在、セイブラムにバルド様がいらっしやいます。」

「上々。」

少なくとも三個師団までは余裕でイける。

「ヴァンハイトは動きませんが、シュドニア卿が一門を率いてセイブラムに向かうそうです。」

「シュドニアが？」

兄上の采配か？

バルドが動いたからか？

あとはリツヒニドスとクロアート次第か。

「よし、ルチル！君はクラム達をセイブラムの軍へ。」

「はい！」

最善を尽くすだけしか、オレ達には選択肢はない。

「アルム、俺様達は北へ行くぞ？」

「当然！」

スイザンしてよつともつてコト。　くエピソードくく【皇子はソレを為す。】

ついに恐れていた事態が発生した。

しかし、皇子は独りじゃない。

これまで彼に関わってきた人々、これから関わるかも知れない人々。動き出した世界の中で、皇子はどう決断を下すのか？！

次回！最終章突入！

ちよつと流れの関係上で話数が少ない章でした。

以上、？章、全26話読了ありがとうございます。

果たして、本当に最終章完結までたどり着けるのか・・・ちよつぴり自信がないです。

？章のチラシ裏。

・アシュリーヌ・トライトン

銀髪・銀眼の女性。

盲目の女性。

各国の王族が神器を継承しているように、一部地域に伝承される予言者の力を持つ女性。

アルムのように過去の歴史に関する記憶の欠片を有している。

盲目のせいか、自分が見る映像というのが過去の記憶の欠片しかない彼女は、何時しかそれに傾倒していく。

それは、弟であるハディラムにも簡単に止められるモノでは無かった。

本編でも、精神不安定な状態で過去の記憶と現在の記憶との混濁が見られたが、

同じように過去の記憶の欠片を垣間見たアルムとは、どこか共感出来るモノあったようで、一応の落ち着きを現在は見せている。

初恋がヴァンハイトであると一緒なのかも知れない。

現在はその血を引き、共感や共通する部分もあるアルムに惹かれていたりとかいないとか。

基本的にはオチャメなお姉さんで、どちらかというシルビアに近いモノがあるとアルムは感じているらしい。

名前はどうしても、愛称：アシュリーという女性を出したかったのと、予言の力を持つ人間は基本【ア】から始まる名にしようと思ったから。

トライトンは、混血児というイメージでトライアングルを振っただけの実はあまり捻りのない名前だったりする。

・セイブラム法皇

金髪・金眼の初老の男性。

本編で唯一、マトモに出て来る王様（アレ？）
本当にマトモかどうかは怪しいが、一応良識のある大人である。
幼いリディアを拾い育て、修行をさせた人。
そういう意味ではリディアの師匠でもある。
過去に黒髪の人間との出会いがあるらしく、その経緯はどういうモ
ノか未だ語られていない。
どうやら、バルドと知り合いのようだが。
また今回の騒動の主犯格であるガキンちよがどういう人間なのかを
知っている節もあり、
いずれにせよ本編の重要人物である事には変わらない。
ちなみに本名は「バトウヌス・D・セイブラム」という設定がある
のだが、きつと本編には出てこないだろう。

↳その他の人物↳

・ディアナ・セイブラム
故人。

神器を使った英雄の一人。

本編では、アシュリーヌに【黎明の如き慈愛の光剣を金色の姫に】
と表現されている。

女性で、ディーンと恋仲であつたらしい。

大戦の後、大戦を起こす引き鉄となった術使いの一族と共に、北方
の地に籠もり余生を送った。

尚、生涯独身を貫いて息を引き取ったとされている。

現在のセイブラムは、彼女の血族が彼女の意思や理想を継ぎ興した
国が前身である。

・セルブ

故人。

神器を使った英雄の一人。
本編では、アシュリーヌに【水の流れをも断つ細剣を白き若者】と
言われている。

この事から、彼の使用した神器を【流細（刺）剣】と呼ぶ事がある。
彼が興した国が現在のセルブであり、王族はこの直系にあたる。
ちなみに現在の神器の継承者は現国王である。

・クロアート

故人。

神器を使った英雄の一人。
本編では、アシュリーヌに【天を衝く斧と地を砕く槍を双子の姉弟
に】と言われている。

クロアートは前者の双子の姉の方にあたる。
セルブと同じように彼女の使用した神器は【天斧槍】と呼ばれ、
現在の国は彼女の親戚筋イトコによって継承されている国である。

現在の神器は、一説には継承者はいないのでないのかと実しやかに
噂されている。

双子の弟の方は名前が残されておらず、彼女に双子やましてや兄弟
がいた事さえ記されていない。

ちなみに弟の方の神器は【地樹槍】と呼ばれる。

・ヴァンハイト

故人。

神器を使った英雄の一人にして、現在の全ての元凶。
本編では、アシュリーヌに【星を分かち双ツ剣を蒼き若者に】と言
われている。

いわずと知れたアルムとシグルドのご先祖様。

この人の暴拳によって、アルムは現在の道を選ぶ事にもなり、また
世界の平和を一応成立させた立役者でもある。

本編においては、一つの予言によって凶行に及んだとアルムは推測していたが、もしかしたらそれはディーンへの嫉妬だったのではないだろうか？

何を考えているかわからず、突然変な行動に出るのは何というかゆとり世代な匂いのする英雄もいたものである。

彼の興した国ヴァンハイトは、説明する必要も無く彼の直系によって今に続いている。

結局、予言者の女性ともディアナともくっつかなかったのだろうか？神器は別名【双星剣】とも言う。

尚、基本的にアシュリーヌが述べていた色は、国色になっている場合が多い。

・ディーン

故人。

神器を使った英雄の一人にして後世、名前が残らなかった人物。

本編では、アシュリーヌに【宵闇の如き無慈悲な黒剣を漆黒の若者に】と言われている。

この”無慈悲な”という部分にディーンの剣の能力が象徴されている。

他にもこの伝承は、それぞれの神器の特徴を暗示してる可能性が高い。

果たしてディーンの意志が、アルムを彼の神器の継承者としたのか、はたまた完全に使いこなせていないアルムはただの仮の宿主なのか。未だに不明である。

またディアナと恋仲になるなど、実は意外にモテたりするタイプなのかも知れない。

其は皇子の剣。

(シユドニア

バルド視点)

(前書き)

ガリガリ減っていくお気に入りの数に、ガリガリ気力が削られてい
っている日々です。

其は皇子の剣 (シユドニア バルド視点)

「面倒……。」

思わず口から出るくらいは勘弁して欲しいですねえ。

「殿下。」

目の前にいるシグルド様には、一応申し訳ないと思っておりますが、この度、一身上の都合を以って、私事ですが拝命していた任・所属をお返し致します。」

「どういう事だ？」

「あーっと、説明すると長くなるので、師匠に聞いて頂きたいのですけどねえ。」

と、言っても無理な話……か。

「これから、私はセイブラムへ参ります。」

「セイブラムへ？戦場に行くのか？」

思案されても無駄なんですからねえ、殿下。

「国として動かないなら、尚のコト。」

個人で動くしかないんですねえ。

「恐らく、グランツ一門、全員が。ですねえ。」

「グランツ一門単位で動くような事なのか？この戦は。」

しかし、説明の一切を私に任せるというのもどうかと思うのですけれどねえ。

「殿下。以前、私はグランツ一門は一人の例外を除き、全員この国の出身ではないと申しましたねえ？」

「オマエ達はセイブラムの出身なのか？」

実に惜しいですねえ。

もつとも、今のは殿下が……殿下だからなのでしょう。

「いずれ殿下がこの国の皇王となった時に解りますよ。」

嫌でも”視る”はずなんですなえ。

「一つ申し上げるとすれば、私達はヴァンハイトではなく”世界に

「仕えている」という方がじっくりくるのかも知れませんねえ。」

「・・・そうか。」

「ん、たった一言ですか。」

流石、殿下。

器が大きいですねえ。

「それがオマエ達の使命だというのなら行くといい。ただ、この国もオマエ達が帰るべき故郷だからな。」

「ありがとうございます。殿下。」

この国は本当に先が楽しみですねえ・・・。

「ああ、そうだ。先程、一人、例外と申しましたが・・・。」

ヴァンハイトの良心、誇りは、この二方なのだろう。

「その例外も或いは、”世界に仕えている”というのかも知れませんねえ。」

「シユドニア、ならば・・・弟を・・・頼む。」

最初からそう言えばいいのに。

殿下も殿下で不器用ですねえ。

「いいのか？こんな所でくつろいでて。」

「いいんだよ。どうせ”子供達”が頑張ってくれる。それより、アスタこそいいのか？」

コイツと会うのも何十年振りだろうか。

「老いぼれが今更しやしやり出て何をやる？」

「確かに。まだおっ死んでないのに驚いたぞ。」

目の前の人間の皺一つ一つに過ぎた年月を感じる。

ワシもこの皺の分、年を取ったという事か。

「なあに、直におっ死ぬわ。”預かった物”も渡したしな。」

机にある杯を呑み干す。

二人だけで差し向かいで座って酒を呑むのは・・・初めてか？

「しかし、あのコには驚いた。」

「ワシだって驚いた。」

味わう事もせず酒を胃へと一気に流し込む。

「幼いあの子がワシに剣を教わりに来た時、あの大馬鹿共めと墓まで説教をしに行つたくらいだ。」

初めて面と向かつて話した時の事は、一生忘れん。

「何故、あの皇子は・・・ああも世界に優しく出来るのだろうか？」

次の酒を杯に満たす。

「そんなモノ、ワシが指導したからじゃわい！」

「・・・オマエ、みえみえの嘘つくトコ、変わらんな。」

「だが、あの子は音を上げずについてきおつたよ。」
強い意志を持ったまま。

「だから、どんな事になつても生き残る事だけを教えた。あの子は先代や先々代の道具オモチャじゃないからな。必ず生き残つて欲しかった。」

「彼には生きて世界を、国を変えて欲しいと・・・そう思うよ。」
次の杯も空に。

「なあ、信じられるか？また六つかそこいらだぞ？そんな子供に“世界の真実”を突きつけて丸投げするんだぞ？」

「よつぽどの外道だな。」

酒はどんどん減り続ける。

「だが・・・それでも彼は今を生きてる。覚悟してな。いや、とっくの昔にそうしたのかもな。彼は誰にも止められないさ。」

「ああ・・・ワシなんかを”選ばず”にアルム様を選んで当然だ。」

ワシの長剣と強さだけに気を取られて、気づいておらんのは非常に心配じゃが。

「バルド、もし剣がオマエを選んでいたら、どうしてた？」

「決まつとるだろ？ヴァンハイトなんぞ滅ぼしてたよ。」

腐りきつた国なんぞ、何の希望もない。

蔓延しきる前に叩き潰す。

「だが、そんな考えも皇子と出会うまでか？」

「お偉いセイブルム法皇様にはわからんだろうが、アルム様はあの頃のワシ等と違う、新しい時代の人間だ。」

「そんなのオマエに言われんでもわかるよ。逆に彼が”世界を見捨てる”というのなら、喜んで従うさ。」

とうとう酒が無くなった・・・か。

「オマエ、酔ってるだろ？」

「オマエより酔ってないさ。」

「何じゃと、このオイボレ！」

「うるさい、タコ頭！」

「これはワザとだ！」黒髪・黒い瞳”じゃ、聡いアルム様にすぐバシるだろう！」

「知つとるわ馬鹿者！とうとう冗談もわからんようになったか？ 糞碌したのお。」

カチン。

「いいだろう、表へ出る死に損ない。」

「おおおお、やってやろうじゃないか！」

本当に・・・こんな事を出来るのは、何十年振りだろうか？

デイン様の剣を求めて・・・世界を彷徨い出してから・・・。

其は皇子の友。 (ハディラム視点)

「アルム！」

森を抜けて馬で進んでいる最中、突然アルムが落馬した。違う、突然じゃない。

日に日には言わないが、時折アルムの体調が悪くなるのをよく見る。

「大丈夫だ。」

「オマエは馬鹿か?! それしか言わへんやんか!」

アルムに肩を貸して、何とか楽な体勢をとらせる。

「すぐに治まる。」

「これから戦いに行くつーのに。」

全く、なんでこう強情なんやろね。

「オマエさあ、そんなになつてまで戦つてどないすんの?」

思わず口から出る。

聞くまでもなく想像はつくんだが、だからって……なあ。

「選んでもらえたから……。」

アルムが俺様に向かって微笑む。

「選ぶ?」

「生まれた時からオレは何も期待されなかった……けれど……

子供の頃、大病を患って死にかけて時……。」

俺様は空を見上げる。

どんよりと曇った嫌な空だ。

「乳母とその娘だけが心配してくれた……兄上もいたけれど。オレに会いに来た女性がそうだ。」

ぐつと俺様の腕を掴む。

「それなに……オレは彼女の、ずっと一緒に過ごしてきた大事な姉の名前がすぐに出て来なかった……。どうやらオレは確実に壊れ始めているらしい。」

そんなにアルムの身体は……。

「ハデイだつてそうだろう?」

「あん?」

「好きで槍を持っているわけじゃない。でも槍に選ばれたから、それが出来るのが自分だけだったからだろう?」

「あー、まあ、な。」

でも、たとえ槍に選ばなくても、それに近い事はしてたかもな。彼女達はオレを選んでくれた。オレの傍にいる人間達、一緒に笑つて泣いて愛してくれる者達……生まれてきたからには、皆の為にオレも何かを残したい。オレの全てを使つてでも。」

「馬鹿か!」

俺様はアルムを引き起こし、馬の背に乗せる。

「オマエは本つつつ当に馬鹿で不器用やな。」

そのまま、俺様も同じ馬に乗る。

アルムを背に背負うようにして、腕を自分の腰に回し、服の紐と一緒にくくりつけて。

鎧が背中に当たつて痛い、しゃーない。

「身体をおつつけて、下を噛まないようにして寝とれ。着いたら起こしたる。」

場所はわからなくても、俺様の神器が今なら教えてくれる。

「悪い……な……。」

「そう思うならシャンとせえ!」

アルムはアルムなりに自分の責務を全うしたいだけなんやな。

己の全てを賭けて。

「ハデイ……もし、オレが……。」 「あー、聞こえん、聞こ

えん、なーんも聞こえん。あーあー。」

本当にコイツは皇子っぽくない!

「いいか?オマエがどんなになつてもや、俺様の知つたこつちやない!」

もしかしたら、俺様は悔しいのかも知れん。

「どんなになつても俺様は、オマエを”連れて帰る”かなつ！」
こんなに馬鹿で、不器用で、イヤツが・・・こんなにボロボロ
になつているのを、見届けるだけなんていうんは・・・。

悔しい以外の何モノでもない。

「無茶苦茶だなあ・・・。」

呆れたような、苦笑の音が背から漏れる。

あれか？

弟がいるっつーのは、こんなカンジなんか？

よお、わからん。

つか、こんなブツ飛んだ弟は勘弁や。

「アルムだけには言われたかない。格好悪い姿で帰りたくねえなら、
根性出すんだな。」

俺様は馬を走らせた。

なるべく衝撃を小さくと気遣いたいんだが、そうも言つてられん。

ここでタラタラやっていたら、後ろのアルムに何を言われるかわか
つたもんじゃない。

「アルム！いいか！こつからは手加減なんかすんじゃねえぞ！」

俺様も出し惜しみはしない。

邪魔する奴は容赦も、勿論手加減もしねえ・・・。
アルムにも俺様はそれを強要しなきゃならん。

「俺様は・・・アルムに死んで欲しくねえ。」

どんなに血だらけになつて地べたを這い蹲ろつが、ボロボロにな
ろつが、アルムは生き延びなきゃいけないんだ。

「・・・オマエが死んだら、負けな氣イ、するわ。」

最後の一言はアルムに聞こえない声で・・・。

もつとも今、アルムが意識があるかどうかはわからん。

聞こえてなくてもいい。

これは俺様が”選んだ”事なんやから。

悔しくて、涙が出そうでも・・・たとえ死に瀕していても。

生まれたからには、やらねばならぬ事がある。

其は皇子の盾 (ラミア カーライル視点)

「お婆様！」

私自身、お婆様の治める集落に来るのは何時以来だろう？

「騒々しいな。」

昔からこの人は、何を考えているのか解らない。

私達の会話を微笑んで聞いているかと思えば、次の瞬間はもう遠い何処かを眺めていたり。

「騒々しいのは何時もの事。」

子供の頃から妹のサアラと違って、私は我が強かったから。

「……まあ、そうかの。」

優雅に微笑むお婆様の姿は、子供の頃から全く変わらない。

「で、何の用じゃ？」

「私はセイブラムへ参ります。」

「……皇子のもとへか？」

第一は確かにそう。

「お婆様。私達ダークエルフは何時までこうしていれば良いのですしょうか？」

長命なダークエルフ。

人間の何倍も……。

だが、ただ長く生きれば良いものではない。

「森を守りながら生きるのには不服か？」

澄んだ声に対して、視線はかなり鋭い。

「いいえ。」

「なら何故？」

「伝統を守る、誇りを守るのは大事です。それは意味がある。生き永らえる為、安らかに暮らし、繁栄する為。」

そして、”何も変わらぬ”為。

長大な寿命を変わらぬ事に費やす。

「しかし・・・他の選択肢がある事も決して悪くない。」

別に全員がソレを選ぶ必要はない。

変わらぬ事も大切だろう。

「選ぶ選ばないに関わらず、そういう選択肢が存在する事、そう思える事も大切なのです！」

「それが、オマエが皇子の下で学んできた事か？」

・・・学べたのだろうか？

アルムの周りは、ハチャメチャで・・・ただ楽しくて・・・温かかった。

「わかりません。ただアルムは馬鹿正直に受け入れてました。まず目の前の事を受け入れるだけ。」

「今、この時か？今、この時でなければならぬか？」

「私が後悔します。」

きつとそうなのだろう。

私は彼から種族として何かを学び、ラミアとして彼を好きになった。「皇子はこれからのダークエルフと人間の為になくってはならぬ存在です。そして、”アルム”は私に必要な存在です。」

小さな溜め息。

呆れてるな、これは。

だが、仕方ない。

これが私の偽らざる想いなのだから。

「昔も・・・昔もそう思ったんじゃないが・・・あの時は少し早かった。」

「

お婆様？」

何時の時の話だろう？

無駄に寿命が長いと察しにくくて困るな。

「だから妾は待った。円盾を預かり、あの皇子が再び来るまで。」

全く話が見えない。

だが、盾の話をしているという事は、あの皇子とはアルムの事だ。では・・・”再び”というのは・・・？

「……妾わらわの集落にもオマエのようにアルム皇子の力になりたいと言っている者がある。連れて行け。」

「お婆様！」

意外だ。

もつと頭ごなしに否定されて、長々と説教されるとばかり思っていた。

「どうも、我が一族は思い込んだら一途な面があるからの。ラミア、ちゃんと帰って来るじゃぞ？妾わらわの可愛い孫娘。」

そして、またお婆様は優雅に微笑んだ。

「まあ、そうでしょうね。」

目の前の一枚の紙切れ。

それを机に投げ出す。

「やはり、ヴァンハイトは動かずっスか？」

扉にもたれている男。

「声くらいかけてから入ったらどうなんですか？」

「親戚を訪ねるのにつスか？面倒っス。」

そう言つとザツシユは机に投げ出されたままの紙を拾い上げ、目を通す。

「あゝ、ヤダヤダ。自分達に被害が及ばないなら、皇子くらいは見殺しっスか。」

大袈裟に首を振る。

「国の方が圧倒的に大事ですからね。」

本当、吐き気がしますね。

「これが皇太子殿下なら、目の色変えるクセに。こんなのぽいつス。」

クシャクシャに丸めた紙が放物線を描いた後、乾いた音を立てて床に転がる。

「自分、ほんつつとうに皇子の騎士団に入って良かったつス。管轄違うつスからね。さあゝて、皇子の所へ行くつスかね。」

それはそれで大事なのだが・・・少し羨ましくもある。

「たとえば、本国が皇子を見捨てても自分達が皇子を見捨てない。」

「というか、アソコにいる貴族共は、本当に皇子の価値を解つてないつスねえ。自国より他国の方が圧倒的に評価の高い皇子つて聞いた事ないつス。」

呆れたように苦笑する。

したくもなるな。

「皇子が他国に亡命でもしたら、この国も大変ですなえ。」

「他人事ヒトコトつスか?! 太守代理のクセに?!」

「皇子がこのリツヒニドスで行つている政策を見れば、議論すら差し挟む余地しないと解る事なの?」

あらかじめ用意しておいた紙の束をザッシュ前に投げる。

「おつと。何スか? コレ。」

「困つた事に、現在城の警備隊を皇子の騎士団に出向させる辞令が出てましてね。皇子が帰ってくるまで撤回の処理も完了の処理も出来ないのですよ。」

・・・三流役者だな、コレは。

いや、役者に失礼か。

「相変わらず、抜け目ないというか・・・悪ドイツね。」

「何とでも言いなさい。」

政治なんてやった者勝ちなのですよ。

最速かつ最上の一手が一番最初に出せればいい。

「それに家内から、皇子をお食事イシに誘いたいと、こう言われましてね。」

「私事混在?!・・・まあ、自分もあの人には逆らえないつスけどね。んじゃ、騎士団長様の所へ行つて再編するつスかね。規模も規模つスから。」

「そこまでの数にはならないのでは?」

精々、百人を多少超える程度のはず……。

「ん？だつて騎馬隊にー、ダークエルフの軽装歩兵・弓兵隊に、獣人重装歩兵、亜人槍兵隊……三百……超えるっすかね。」

「他国どころか他種族の評価も高いのでしたね、我等の皇子は。」

「そうっすねえ。」

何処に呆れて、何処に感心したら良いのやら……。

「早速出来たばかりの団章・団旗のお披露目っす。」

「セイブラムと皇子の意志を守る為に。」

「リツヒニドス統皇騎士団出陣っす！」

……その名前、なんとかならないものですかね……。

其は皇子の盾。 (ラミア カーライル視点) (後書き)

なんだろ、意外とザツシユとカーライル好きなんだよねえ……。
何気にいいオトコじゃないですか？

ただ、名前も姿も出てきていない奥さんが最強説(苦笑)

止まるな、振り向くな、突き進め！

「まー、一気にブチ抜くしかないわな、時間の無い事やし。」
アシュリー又さん達が住んでいた遺跡のような宮殿。

同じような建造物が目の前にある。

入口には、見張りらしい見張りはいないが……。

「時間が無いのが圧倒的に不利だな。」

正直、二人だけで突入というのも、どうかと思う。

普通なら、こちら側には神器があつて、余裕があるところなんだが、今回は相手も神器を持っている。

「本音としたら、俺様が単独で突っ込むべきなんだが、アルムを残して行くっつー選択肢は無いしな。それにアルム自身、行きたいやる？」

決着をつけに。

ハディラムはそう言って笑う。

彼は本当にちっぽけなオレの誇りをも尊重してくれている。

「ああ。」

「どのみち俺様の神器は、対多数、対神器用やしな。」

槍を自分の眼前で揺らしてみせる、それは一つの合図だ。

「……ふう。」

ゆっくりと呼吸しながら、腰に下げた銀剣をオレは抜く。

一瞬で拡大するオレの感覚・認識力。

当然、身体の状態も以前よりはつきりと判る。

大丈夫。

まだ動ける。

もう一本の剣を抜いて。

「行くか。」

オレはハディラムにそう言うって笑うと、ハディラムも笑う。
そして走り出した。

ぐんぐんと加速して、入口に近づき中に入る。

拡大された感覚が、遺跡内の違和感に気づき一瞬オレは速度を緩めて、止まりそうに……。

「止まるな、アルム！走り抜ける！」

ハディラムの叫び声がした瞬間、耳元で風斬り音が。

「ぐあつ。」

目の前に突如現れた人間と槍。

オレはすぐに自分の左側に剣を振るうと、何も無い空間に手ごたえだけが返ってくる。

気配と実体のズレ。

空間を歪めているのか？！

「次々跳んで来るで！」

オレの横に走り寄って来たハディラムが、もう動かなくなった敵から槍を抜く。

どうやらハディラムが咄嗟に槍を投げて助けてくれたみたいだ。

神器を投げつけるって……まあ、緊急時だしな。

そのまま互いに頷き合うとオレ達は再び奥へと入り出す。

中は一本道で、明るさもそこそこあり進むのは楽だ。

ただ、何処からともなく現れる敵には一本道という事で逆につんざりするが。

「これ、皆、北のっ、民か！」

少し息が上がってきた。

走りながら戦うのは、体力の消耗度合いが高い。

「にしてはっ！数が少ないなあーッ！」

槍を力任せに振りぬぎ、相手を壁へ打ちつけるハディラム。

周りの敵を掃討しつつ、緩急をつけながら走り抜ける。

時には手にした武器ではなく蹴りや盾で……。

「残りは、セルブ軍に紛れ込みましたな、こりゃ。」

成る程。

用意周到な事で。

「アルム後ろ！」

ハディラムが腕を伸ばす。

オレはハディラムのその動作を見て、後ろを見ずに自分の右手の剣を彼に向ける。

「人の事言えんのか！」

互いが互いの後ろにいる敵を斬りつけて、そのまま半回転して二撃目を自分の後ろへ。

相殺しきれなかった勢いは互いの背中がぶつかり合う事で止まる。

「何や、もう走れんのか？」 「うるさい！」

辺りから敵の気配が消えたからこそ叩ける軽口だ。

実際は、結構苦しい。

軽口は一言ずつだけ。

その後、一度深く呼吸をして再び駆け出す。

倒した相手の惨状や数なんて考えたくもない。

「うるうわああああーッ！」

そのうち二、三人を貫いたまま体当たりをして、槍を引き抜くハディラムの瞬間の隙をオレが埋めるように、彼に向かう敵を斬る。

そんな形が多く見られるようになってきた。

これはヤバイ。

一見、合理的に見えるが、逆に言えば一人で対処出来なくなっているという事だ。

遺跡を外観から見た規模から走った距離を計算すると、いくら曲がり角があっても、もうそろそろ扉か階段、ないし広間があってもいいハズなんだが……。

半刻はゆうに走ってるよな？

「チイツ！」 「ハディ！」

ハディラムの肩口に短剣が刺さる。

持っていた剣を一振り、攻撃してきた相手に投げてハディラムに近づく。

幸い傷は深そうに見えない。

だが、毒が塗ってあったりするれば……。

「アルム階段や！」

突き刺さった短剣を素早く投げ捨てると、ハディラムはオレの手を取って加速する。

「はよ昇れ！」

どんつとハディラムはオレの肩を叩いて、そのまま走って来た方向に向き直る。

「なんや？俺様が殿^{ケツ}じゃ心配か？」

階段での挟撃なんて、確かに危険度も疲労度も跳ね上がる……でも……。

「オマエだつて、自分を省みずに戦って来たんやろ？こういう時くらいは俺様も背負ってやつから……な？大丈夫、見せてやるよ。」
そう言つとハディラムは、自分の槍を地面に突き立てる。

「【起きろ、今がその時や。】」

呟いた小さな声が槍に沁み込むと、みるみるうちにソレはその形態を変化させていった。

前門の神器、後門の神器。

槍の刃に絡まっていた蔦のような部分から、四つの光が漏れる。紅い二つの眼、それが槍の左右に二対。

刃の根元にソレ、”蛇”が咬みつく。

尻尾にあたる部分はぐんぐんと伸び、今や槍の全長より長い。

「な？まだまだイケるやろ？」

何よりその威圧感だ。

今まで付加持ちに始まって、いくつか神器を見てきて、神器にはそれぞれちよつとした差異という個性があるのがわかってきた。

目の前の槍には威圧感がある。

それこそ息が詰まるくらい。

「行けよ、アルム。オマエは”今も”独りじゃないで。」

「ああ。」

オレはくるりとハディラムに背を向ける。

彼の呼気が本当は乱れたままなのを無理に取り繕っているのがわかっていても。

「それじゃ、後でな。」

「オウ。」

それだけを言うと、オレは階段を駆け上がった。

背後ではもう剣戟が聞こえる。

「オラア！絞め殺されるか、刺し殺されるか選ばせてやらアッ！」

何時か・・・彼の口から、そんな言葉すら出てこないような退屈な日々を。

そんな事を考えながら階段を上り、眼前に現れた石扉を蹴り飛ばして中に入る。

「やあ。」

金髪、金眼の見た事もない子供。

だが、気配は知っている。

知っているぞ。

「それがディアナ姫の神器か？」

その手に握られた剣は懐かしいディーンの剣と、ほんのりと金色がかっている剣。

片刃で剣の中央には鏡のように輝く円、そしてその両端に囲むようにして枝みたいな角みたいなヤツがついている。

「へえ、よく知ってるね。」

「アレから勉強したんでな。」

少年の少し後ろに気配。

二人の人間が立っている。

いや、すっぽりと全身を目元まで覆える外套を着ているから、性別どころか種族すらわからんが。

「勉強した割には”邪魔”するんだ。これだからヴァンハイトは……」

何とでも言え。

「セルブに戦いくをけしかけさせたヤツの言う台詞か？」

確証はないが、オレは強い口調でそう言い放つ。

「いいじゃない、どうせ……」

チラリと自分を後ろを見て、オレにもそこを見る事を促す。

十二分に警戒をして……立っている人物の更に後ろを見ると……

「成る程な。」

そこに小さな黒い球が浮かんでいる。

紫電が時折走る、オレの拳より小さな……”穴”。

「大変だったよ。いくら次元の歪みが起こし易い地でも、神器と更にそれを複製神器を大量に使って二重で封印されちゃあね。」

北の民は、例の術使いの子孫だったな。

「全く、同じ事を馬鹿みたく繰り返しやがって。」

「同じじゃないよ、全然。」

ニヤリと歪こぼに笑う少年。

「今回は、大それた野望なんてないもの。歴史を歪め、誰かの勝手

な都合で理不尽に造られた世界をやり直すだけさ。」

どう返したらいいものやら。

「充分に大それてるよ。特に手段が。」

「ヴァンハイトのアンタに言われたくないね。」

だろうな。

少年の瞳には殺意だけが宿る。

「でも、ま、それももうすぐ終わるけどね。前回と違って、”英雄

なんてもういない。”この世界の何処にも。」

「ああ、そうだな。」

でもさ、知っているか？

世界が平和になったら、英雄なんて元からいらないんだぜ？

「英雄がいる世界のが歪こわな気がするな、オレは……。」

さて、息も整った事だし、多分これ以上の時間もかけていられないしな。

「んで、どうやってたら、アレ、止められるんだ？」

”次元の穴”であろう黒い球をオレは指さす。

「教えると思う？」

「いいや。特にオレには教えたくないだろうな。」

ヴァンハイトだし。

そもそも話し合いの席に着く理由が向こうにないしな。

しかし……三対一か。

しかも、神器が相手側に二つ。

自分の側近（？）のようにいるんだから、相当の手練れなんだろうな。

「このまま、時間稼ぎを互いにしててもいいんだけど……アンタ、ヴァンハイトなんだよね。」

好きで生まれついたワケじゃないけれどね。

「ヴァンハイトはやり直した世界でも要らないんだ。だから、死んで。」

「と、言って。はい、そーですかと言うわけにはいかないな。」

もう既に死に体状態なのだけれども。

それはそれ、これはこれ。

死に体でも、やるだけやってからじゃないと死んでも死に切れない。「だよね。ま、自分がヴァンハイトになんか生まれたっていう不遇を嘆いてよ。」

「弱つたな……。」

確かにヴァンハイトに生まれた事を呪った時期はあった。

今だって、ヴァンハイトを許せないと思うし、怒りを感じる。でもなあ……悪い事だけじゃなくて……最近の出来事は良い事もあったりするんだ。

オレがヴァンハイトだから出会えたっていうの？

そういうのとかさ。

そう思っちゃったりなんかすると……。

「よしっ。」

三対一でもやってやるうじゃないかと思うんだよな、コレが。

「ちゃんと斬り刻んであげるね！」

神器にさえ気をつけていれば何とかなる！

動き出す三人。

オレは受けて返す構えで動かない。

向かって来る三人の中で、特に神器を持った少年にだけは気をつけて……。

「?!」

そう思った瞬間、こちらに向かって来る三人の姿が掻き消える。

そんな能力チカラがあるのは、少年だけだと思っていた。

まさか、三人共なんて！

自分の銀剣を強く握り締め、拡大した感覚を最大限に使い気配を探る。

もう姿を現した瞬間、瞬間で対応するしかない。

オレがそう腹を括った時、視界の右端に揺らぎが。

「くッ！」

少年じゃない！

外套の人影。

神器じゃない一撃。

しかし、食らったら確実にオレの命が無くなるであろうその一撃が、オレに振り下ろされる。

前門の神器、後門の神器。(後書き)

お約束でしょう？

『俺の屍を越えてゆけえッ！』

・・・いや、死んでいませんけどね(苦笑)

其は皇子の誇りと愛。 (オリガ ロザリア視点)

カツンカツンと広い回廊に靴音が響く。

「行くぞ。」

「はい。」

具足の金属音と私の靴音が重なり、一つの音楽のように奏でられる。

「オリガ、兄上達は出たか？」

「はい。」

音楽を奏で続けながら私達は歩く。

「・・・彼は・・・許すだろうか？」

「？」

誰の事を述べているのかと、私は一瞬逡巡する。

「私は確かに、国を強くする事は大事だと考えているし、優秀な者を集め、正しく人々を導くのが王としての責務だという姿勢は今も変わらない。」

視線を合わさないまま、私の主は歩き続ける。

そんな彼の表情を横目で見ながら。

「だが、彼はこの状況を善しとするだろうか？」

「ラスロー様はラスロー様です。他の何者にもなれません。」

「当然だ。オリガ、オマエの冷静な分析・判断力は買っが、全てが正論だけで通ると思わない事だな。」

口角を上げ、ほんのり笑みをこぼす。

王子は最近、ほんの少しだけ以前より笑うようになった。

さっき、王子は王子だと私は言ったけれど、これも彼の影響だろうか？

「だが、そう言うオマエも少し変わったな。」

「・・・王子。」

「人を統べる方法は、何も良き政策のみではないという例だな。果

たしてそんな優しき彼が、こんな世界を認めるかだが……。」「
靴音が止まり、王子が向きを変える。

「我が第五近衛騎士団の精鋭達よ！」

ザツという音と共に、王子の目の前にいる兵達が一糸乱れぬ整然
さで敬礼をする。

「今から、二つの事を諸君等に命ずる。心して聞け！」

とうとう……戦が始まる……。

誰が望んでいるというのだろうか？

戦いに価値など無いと思うのは、そう感じるのは、私が女だからだ
ろうか？

「一つ！本日、これより私直属のこの近衛騎士団は解散する！」

「えっ……。」

私の驚きと同じような反応・声が辺りからも聞こえる。

「諸君等はこの戦いに”義”があると感じるか？いや、国の為に戦
うのが騎士の本分であり、戦に義などは存在しないだろう。」

人の事を正論しか吐けない女と言っていた口が、あんな事を今言
っている。

男は不思議だ。

「だが、人が生きるうえで、どうしても許せない事が誰しもあるだ
ろう。私にとつては今がそうだ。こんな下らぬ侵略戦争で……民
に！将来を背負う子等に！諸君等は胸を張って語れるのか！私は否
だ！よつては私はこれからセイブラムへ向かう。」

そして大きく息を吸う。

「戦を止める為に！ついて来たい者だけついて来い！これは反乱と
同じだ。国を憂い私は一人でも行く！」

本当……男って馬鹿みたいだ。

「王子、間違っております。一人でなく二人です。」

私が王子から離れるなんて、有り得ない事なのに。

「……そうか。では行こう。一番乗りをしなければ、彼に笑われ
てしまう。」

「王子に馬を！全員騎乗せよ！」

騎士団の誰か、恐らく団長の号令。

騎士団全員が、その号令で動く。

本当、皆、馬鹿ばかり・・・筆頭は王子だけれど。

でも、それは誰がなんと言おうと、愛しい私の王子様。

「本当にいいのね？」

「いいも何も、私はこれでも王姓持ちなの。」

このやりとりも、何度したかしら？

目の前には真紅の全身鎧を身にまとった美しい姫がいる。

「そうね。それに今、セイブラムに恩を売っておけば、セルブに対して強く出られるものね。」

ヴァンハイトと同盟を結ぶ可能性が出てきたとなれば、当面警戒をしなければいけないのは、セイブラムとセルブ。

でも、セイブラムは争いを仕掛けてくるような国ではない。

「だから許可が出たのでしょうか？」

にっこりと微笑む姫。

「恩を売るだけなら簡単よね。」

姫のような王姓の末席の者が出陣するだけで、外交上の体裁は繕える。

「あら？それでもいいじゃない？寧ろ、私が行く事になって良かったと思いますわ。」

「そうなの？」

この姫は力比べ好きでも、誰かを進んで害する娘ではないと思っていたのだけれど。

「はい。これならアルム皇子に胸を張って報告しに会いに行けますわ。」

「あの皇子ね・・・。」

確かに彼なら、その身を挺してでも争いを止めようとするだろう。「ええ、これでも私は婚約者ですから。黙って見ていたなんて、きつと軽蔑されてしまいますわ。貴女もそうでしょうか？」

「私が？」

「こんな事、マールに言えますか？」

「・・・痛いトコ突くわね。」

その通りだ。

自由を求めていたあの子が、こんな馬鹿げた侵略戦争に怒らないはずがない。

「そうね。」理不尽”って言葉が大嫌いなコだったから。」

「それは誰でも同じですわ。でも・・・一体何時から声を上げず、慣れてしまったのでしょうかね。その”理不尽”という存在に。」

「何時から・・・大人になってからかしら。」

それが良い事なのか、悪い事なのかわからないけれど。

「皇子はそれでも”理不尽”だと叫ぶのでしょうかね。いいえ、叫ぶのでなく立ち向かうのでしょうか。」

あの皇子なら、やりかねない。

まるで弟の・・・マールのようだ。

「彼が私の部下に稽古をつけた時も・・・。」

「ん？」

「人を傷つける為でなく、人を護る為に。それを常に頭に浮かべながら私達は鍛錬してきたのですもの。」

”我等は人という国の盾”

それがこの国の騎士団の信条だ。

「結局、世界は二種類ってコトね。」

「二種類？」

「理不尽に苦しみなながら、何もかも諦めて生きるのか。理不尽と立ち向かいながら、傷ついても胸を張って生きるのか。」

私は盛大に溜め息をつく。

どちらの選択肢も世界が腐っているという証明にしかない。

「うふふつ。」

「何？」

「姫が笑っている？」

「今、少しだけアルム皇子の事が解ったような気がしましたの。」

「それって笑うトコ？」

「余程、酷いというか馬鹿にしてるとしか思えないのだけれど。」

「貴女の言った言葉に対する皇子の答えがね、手に取るようにわかって、それがおかしくって。」

「へえ。で、皇子だったら何て？」

「”一人が一人ずつ片方の手を隣に差し延べればいい。”」

「あら・・・ソレ、大正解ね、きつと。」

「でしよう？」

「こうして私達はひとしきり声を上げて笑い合った後、戦地へ。」

其は皇子の誇りと愛。 (オリガ ロザリア視点) (後書き)

あれ・・・本物のラスロー王子、意外とイイヤツ？ (汗)

対峙する運命は、皇子の影。

鈍い金属音。

なんとか相手の一撃を盾で受け止める事が出来た。

円盾は作用している気配はない。

つまりは、この盾で神器は受け止められないかも知れない。

受けた一撃のせいで、右腕が痺れてる・・・相手の力は意外に強い。でも、バルド程じゃあない、大丈夫だ。

瞬間でそれだけの事を考えて、男に剣を振るおうと試みる。

「チツ。」

反対側、視界の左端にもう一人の外套姿が入っている。

勿論、その手にも剣が。

動作途中で攻撃されると人は誰でもその他の対処が困難になってしまう。

三対一。

相手に傷をつけられるこの状況を逃したくない！

「らあッ！」

最初に攻撃してきた奴に剣を突き立てて、具足をつけた左足の裏で次に来る人間の手元に全力で蹴りを放つ。

コイツの速さもザツシュやハディラム以下だ。

まず一人に致命傷。

一息つきたい気分だけれど、三人目。

神器がオレの目に映る。

オレの真正面。

神器での一撃を受け止められると言い切れる武具なんて、オレは所持していない。

何より右手は剣を突き立て、左足は蹴りを放っているという身体が伸び切った状態。

「ええいッ！」

もう回避だけに切り替える。

残っていた軸足で地を蹴って、相手に突き刺した剣の柄を両手でしっかりと握ったまま、そこを軸に身体ごと横回転。

「惜しいなあ……。」

剣を突き立てた相手の身体を剣で抉り、血飛沫が飛んでいるというのに。

あのクソガキの発した言葉はそれだけだった。

一緒に回転している剣を引き抜きながら、床をごろごろと転がるオレの無様な姿は確かに楽しいだろうよ。

でも、命には代えられん。

と、言っても……。

「いや……充分じゃないか？」

完全には回避出来なかった。

斬りつけられた辺りが熱い。

血の温度ってヤツだな。

……左眼をヤラれた。

「左眼一つと一人分の命か……。」

割に合っているのか？

相手がまだ二人いるってのに。

呼吸よりも、心臓が圧迫されるように苦しい。

「まだ……まだ待ってくれ……。」

オレは悩んだ末に、残ったほぼ無傷の外套の奴に向かって走る。

本音としては、さつさと親玉を倒すのがいいし、そうしたいのだが、神器相手には万全を期したい。

オレに向かって振られる剣の先を、しっかりと見て身体を懐へと掻い潜らせる。

速度は全く緩めないまま、半身になって左の肩口から相手にぶつか

る。半減した視界、その左側に体当たりした身体をかぶせるように少年に向かう。

死角をつかれないように・・・と、いつても瞬間移動出来るなら徒
労か・・・。

「はぁッ!」「フッ!」

振り下ろされる相手の剣を刃側ではなく、なるべく剣の腹を叩く
ように打ちつけ合う。

付加付きの剣だから、出来る芸当だ。

並みの剣なら、あっさりへし折られているだろう。

いや、斬られている刃が。

擬似的な一対一。

たとえ神器を二振りも持っても・・・オレにだって、剣と盾と
鎧。

そして、経験がある。

纏わせるようにしていた外套姿の奴を突き飛ばし、息を吸う、そし
て再動、最も効率良く隙の少ない呼吸法をずっと研究してきた。

目の前の奴が復讐を考えた年月と同じくらい、オレは自分の在
り方について考えてきたんだ!

「消える、暇は与えない!」

絶対、無理矢理にでも隙を作らせてもらおうと考えていた矢先、
奴の胸元に小さな隙間が。

今なら最低刺し違いられる!

オレは奴の胸元へと剣を。

そして、奴もオレに向かつて剣を。

「ッ?！」

刃が届く寸前、オレと奴の間に割り入る影。

外套がはだけ、覗いた顔は・・・オレの良く知った・・・。

「シルビィ・・・。」

ピクリと彼女の表情が動く。

その瞬間、”知った顔に酷似している”という、ちよつとした人間の情で剣に込めた力や速度が弱まる。致命的な失敗だ。

「あが……。」

目の前の女性の吐いた血がオレの胸元から首筋にかかる。

彼女の胸から突き出た黒い刃は、そのままオレの胸の鎧を砕き、速度をまるで緩めず胸に埋まってゆく。

「このクサレ外道オツ！」

オレの突き出した剣は空を切る。

そして、そのままオレ達から剣が引き抜かれ、ズルリと彼女の身体が傾いた刹那、再び黒い刃がオレの胸に突き刺さる。

タダで……ヤラれて……たまるかつ！

もう一度、肺に残った最後の息を吐きながら、剣を奴の左足に突き刺してオレはその場に崩れ落ちた。

予想したとおり、さっきの呼吸で最後まで……肺に血が入ったか……。

悪イ、ハディラム……二人とちよいしか無理だった。

アト、頼むわ……。

しかし、意外と……悔しいけれど、冷静だな……。

身体感覚が、流れる血と引き換えに抜けていくのがわかる。

視界は完全に無くて、胸に刺さったままのディーンの剣を必死に掴んでいるつもりでも……ゆっくりと何処かへ落ちていく……。

ごめん、トウマ……オレはここまでみたいだ……折角……繋いでもらった生命いのちなのに……本当、ごめん。

でも、さ……でも、沢山、沢山……色んな事があつたんだ。

本当に沢山。

落ちてゆく感覚の中で、誰かがオレに触れてくれたような気がする……。

……うん……ほんとうに……たのしくて……さ……。

対峙する運命は、皇子の影。(後書き)

戦闘描写・・・下手ですみません。
勉強してきます。

ゆっくりと意識を手放し、虚無の闇へと落ちて逝く皇子。
それでも、彼は自分の人生が楽しいものだったと・・・。

其は皇子が創り上げた世界。

(アイシヤ視点)

「怯むな！我等の身体は盾なり！堅牢なる城壁也！」
などと叱咤激励したとしても、気力や根性で埋められる差の限界はとうに超えている。

超えているが、諦めるわけにはいかんだ。
私を信じてついて来てくれる皆の前で、私が諦めるわけにはいかない。

「状況は?!」

「は！現在、敵の第一波は引きました。」

「そんなのは見ればわかる、損害はどうだ?」

「幸いこちらは軽微です。何人かは馬に蹴られましたが、脳震盪程度です。姫のご指導の賜物です。」

「世辞はいい。」

アルムとの訓練の成果だ。

しかし、守備に一長があっても攻撃に移れないのでは……。
現状はどんどんこちらが疲弊してゆくだけ。

「敵の様子はどうだ?」

「再編成中です。どうやら、兵をいくつかに分けて波状攻撃を仕掛けてくる模様。」

重装兵は長時間戦闘に秀でていないからな。

その弱点を解消すべく日夜の体力作りは欠かさない。
でも、それでも限界はある。

「……アルム。」

どうしても今はここにいないあの人を思い出す、呼んでしまう。
アルムならどうする?

攻めに出るか?それとも……。

水に落とした油のようにアルムは、私という水を全部包み込んでしまった。

大丈夫。

私は、アルムの言っている事が、アルムの生き方が間違っていると思えないから。

「敵の波が引いたと同時に前進して少しずつ戦線を上げるぞ！」

私もアルムに恥じない生き方をするの！

だから、この戦いは負けない。

他国だろうと何だろうと、こんな侵略戦争は認めない。
アルムだってそう言う。

彼は国家間の争いを最後まで回避しようとしていた。

奪いたくもない命すら、自らの手で奪ってまで。

「敵！来ます！」

「大盾構えーッ！」 「構えーッ！」

私の号令の復唱があちらこちらで聞こえる。

「斧槍起こせえーッ！」 「起こせーッ！」

土煙を上げて迫る敵の一陣の影を見ると私も戦列に加わり、鉄仮面の面部分を下ろす。

段々と近づいてくる影と馬の蹄の音……が、二方向？

後ろ？！挟撃された？！

「手槍放て！」

その声と共に我が軍の頭上を槍が飛び越えて、前面の敵軍の進路上に降っていく。

後ろからきた馬群は、槍を携えて私達の集団の迂回して、そのままセルブ軍に突撃していく。

「アイシヤ様！アイシヤ様！」

聞いた事のある声だ。

「ここだ！」

面を上げ、声のする方向に叫ぶ。

「アルム様の侍女のミランダです！援軍に参りました！」

「ミランダさん？！援軍で……でも、この軍は？」

使っているのは双剣じゃなくて槍だし、旗印も緑地に槍に絡み合

う双頭の蛇。

「クロアート帝国のアイシャ・エル・クロアートさまですね。私、今は亡き国の樹海王の補佐役、クラムと申します。古の姉弟の盟約いにしえに従い、我等”姉であるクロアート姫”を助けに参りました。」
「どういう事だ？」

「国は無くとも、名を失おうとも、神器に籠められた誓いは永遠に消える事はないのです。」

それって……英雄の……？

「と、ともかく次の陣が来る前に態勢を……。」

「あッ！」

視界にはためく軍旗。

「白地に勝利の杯と五つ星に剣……。」

敵の第二陣に横合いから突撃する騎馬隊。

「あの旗印は……ラスロー王子の……どうして……。」

これは反乱では？

「わかつているのですよ、アイシャ様。誰の目にも、この戦は間違ちがつています。」

「そうか……。」

もつと増えればいいのに……戦力の事じゃない。

戦争なんて間違っているという人間が、アルムのように他者の痛みが解る人間が、もつともつと増えればいいのに……。

アルムの考えが、彼の存在が世界に認められていく気がして、私は涙が出そうになる。

「ははっ！アレは何処の軍か私にも解るぞ！」

ラスロー王子の軍と反対の横合いから流れ込む軍の旗。

それを見たのも初めてだし、情報の欠片すら持っていないが、一目でそれが誰の軍か私達には解る。

蒼地に黒と白の二本の長剣を背景に、黒い鳥が口に銜くわえるのは小さな赤い林檎の実がついた木の枝。

蒼はヴァンハイトの国色。

彼の腰にある二本の長剣と特徴的な黒という色。

そして、林檎はリッヒニドスの特産品だ。

何処をどう見ても、あれは間違いなくアルムの軍。

それ以外に考えられない！

「ザッシュさんたら、面白い凶案ね。」

「でも、アレがアルムらしくていいだろう？」

「ええ。」

戦場には全く似つかわしくない笑顔が咲き誇る。

全くアルムの優しさは凄いな。

軍の中には人間も亜人も獣人もいて、ダークエルフもいる。

国の垣根を超えれば、種族も超える。

アルムの生き方は、全てを考え直させる。

流石は、私の・・・”私達の皇子様”だ！

「全軍前へ！我等は他の同盟軍の盾となる！」

高らかな私の声が戦場にこだまする。

この戦いは・・・きつとすぐに終わるだろう。

其は皇子が創り上げた世界。 (アイシヤ視点) (後書き)

皇子の存在は確実に、皆の心に・・・。

旗のデザインはコレしかないでしょう？

林檎、最後まで引っ張りますぜえ (苦笑)

ザツシユ君もいいセンスで。

・アルム。・

「これで・・・これで・・・お終いだ。あは、あはは・・・世界はこれであるべき姿になるんだ！」

広間に響き渡る声。

全く・・・。

「・・・ガキがギヤアギヤアとうるせえんだよ・・・。」
完全に闇の中に沈む前に掴んだ。

魂を、”オレ達”の魂を・・・。

「どうして?! 神器で完全に急所を突いたのに！」

「ばあか、テメエに・・・何が、コイツの・・・」アルム”の何が解んだよ。」

アルムがどれだけ苦しんだか・・・。

足に力を込めて、立ち上がる。

久し振りだが、大丈夫だ。

「オマエがギヤアギヤア騒いでる間、どれだけアルムが必死だったか・・・。テメエの絶望? 復讐? なんだそりゃ。それでもアルムは前へ向いてんだよ。歯ア食いしばってなあッ！」

だから、オレはここに居る。

ずっとアルムが心の中で語りかけてくれたから。

だから、”オレは消えずにここにいる。”

ずっとずっとアルムの声は聞こえていた。

憎しみと絶望の嗚咽も。諦めない力強さも。他者への愛情も。

それに比べ、目の前のヤツは・・・。

「ちっせえんだよ、テメエの器はよオッ！」

身体から生えるように出ている剣に手をかける。

大丈夫だ。

”コイツ”はオレ達を害さない。

オレの魂がそう教える。

「ぐぬう・・・あ・・・があーッ！」

渾身の力籠めて身体から剣を引き抜く。

恐らく、心臓は止まったままだろう。

ドバドバと血が流れ出ているのもわかる。

ヤベエ、ヤベエが・・・。

オレはまだ存在している。

アルムが不安定なオレの名を呼び、存在させ続けてくれたから。

人の本当の死は忘れられた時つてのは、ホントみてえだ。

「なんなんだ?! なんなんだよ、オマエ！」

「あ?」

自分の思い通りにならねえ、理解の範疇を越えると、すぐコレだ。

全くガキだな。

「オマエが、一生手に入んねえもんだよ、オレは・・・。」

視界が霞む。

ん?

目も片方ヤラしてんのか・・・このままだと・・・。

「オイ、アルム、起きろや。得物は取り戻してやったぜ?あとはあ

そこのクソガキをブチのめすだけだ。」

この偶然が重なりまくって出来た奇跡とやらは、そう長くはもた

ねえだろう。

でも、逃すわけにはいかない。

どういう仕組みかはわからねえ、神っていうヤツの仕業ってんなら

粹な事をしてくれんじゃねえかと、今だけなら信じてやってもいい

とさえ思う。

「何時まで寝てんだよ、コイツはオマエの物語じんせいだろ?」

オレにとつてはオマエの物語じんせいだ。

ただの延長戦。

ロスタイムでもいい。

それなりに楽しくはあったけどよ・・・。

知ってたか?

アルムの声どころか、見ているものまで解ってたんだけ？

辛い事も嬉しい事も全部、オマエと一緒にだったんだ。

「だから、これからもずっと一緒だ・・・もう立てねえってんなら、アルム！オレの魂丸ソウザイごと、全部オマエにくれてやらあ！護るんだろ！大事なモンを！」

なあに、悲しむ事はねえよ。

オレはコレでアルム、本当にオマエと完全に一つになるんだからな。変な罪悪感とか感じる必要もねえ、そうすればきつともう二度と身体に変調ガタなんて起きねえからよ。

手にした剣が一層輝きを増す。

アルムを、剣の主人を守護するように。

ああ、そうか・・・アルム、オレは何なのか解ったぜ、オレ達の魂がなんなのかをさ。

「なあ、アルム・・・オレの、”トウマ”ってヤツの人生は、きつと満更じゃなかったぜ。またな、”相棒”。」

次に、オレ達が会う時はアルム、オマエが”寿命”で死んだ時な？絶対だぞ？

じゃねえとまた怒鳴ってやっからな？

・・・頼むぜ。

オマエも・・・オレ・・・の生きた・・・証・・・。

「・・・ああ。絶対だ・・・。」

誰よりずっと一緒にいたんだ。

これからも……。

「オレは……同じようにこの世界は間違っていると思う……思ってた。」

何も、何も、もう感じない。

ずっと一緒にいてくれた存在がオレの中に還って逝って。

悲しみも何もかもが麻痺してしまって……。

ただ、これだけは言える。

もう充分だ。

これで完璧。

「でも、無かった」コトなんて出来ないよ。」

皆、生きているから。

無かった事で終わらせるなんて出来ない。

……この罪でさえも。

それを否定してしまつたら、オレはもう二度とトウマには逢えないから。

「だから……オレはオマエを止める。殺してでも。」

それがオレの”アルム・デイス・ヴァンハイト”の贖罪^{みち}。

この間違つた世界の皆に胸を張れるように、大好きな人達へ笑いかけられるように。

「だから……今だけでいい。」

手の中の黒剣が鳴っている……いや、告げている。

「そんなのはただの偽善だ！詭弁だ！」

「ああ、そうだよ？だから何だ？嘘つきでも悪でもいいさ、そんなのとつくに解ってる。それでも、オレはオマエを止める。」

信じる、前を向け！

そんな言葉が何処からか聞こえたような気がした。

身体の傷は塞がっている。

何時の間にか目まで見える。

苦しさも全然ない。

心臓から伝わる脈動が、剣先にまで届いている感覚。
オレはまだ戦える、大丈夫。

腰を落とし、目の前の敵に向かって全力で突進した。

・アルム。 - (後書き)

ようやく会えた。

そして永遠に別れた。

いや、還っていった。

大切な相棒の物語を完結させる為に。

さあ、アルムよ、再び立ち向かえ！

・・・ダグ通りの真価を発揮した回でした。

というか、この回の為にこの話は始まったんだよね、きっと。

魂の色は……。

高速で相手に肉薄してからの刺突という得意の型。

手加減なんて、もうコイツには当然ない。

確実に命を奪う。

「馬鹿の一つ覚えなんだよ！」

オレの突き出した剣が空を切る。

剣先が突き刺さる寸前に姿が消えたからだ。

「オマエがな！」

左手後方に盾を突き出すのと、そこに剣が振り下ろされる瞬間は
ぴったりだった。

剣はまるで最初からそこに行く事が当然だったかの如く、盾に吸い
込まれてく。

「オマエ！なんなんだよ、その目はあッ！」

目？

確かにまた見えるようにはなっているけれど……。

互いの距離が開いた瞬間に盾に映った自分の姿を素早く確認する。

斬られたはずのオレの瞳は、黒でなく金色だった。

それどころか、金色になった瞳の側の前髪も一房、黒ではなく金色
になっている。

「……そういう事か……くっだらねえ事しやがって！」

ヴァンハイトには三人しかいない黒髪の皇子。

でも、黒い瞳まで持っていたのは、オレと皇王エルリオットだけだ
った。

「この目は、正真正銘、オレの目だ。」

今まで先代、先々代が黒髪だったから、オレもそういう事がある
のかわくらくらいにしか思わなかったが、先々代より前はどうなんだ？
突然現れる黒髪の皇子。

そして共通しているのは、”双剣の神器を継承出来ない”事。

そりゃそうだ、”黒髪”なんだから。
だから、彼等は頼んだんだ。
周りの皆に。

けれど、”トウマの魂は例外”だった。
だって、神器を使うのは魂だから。

「それならば！」

浮かんだ仮説の実証ならば可能だ。

オレは再び馬鹿の一つ覚えの突進をする。
再び奴の姿が消えても大丈夫。

”神器”が教えてくれる。

「もうそれは通用しないみたいだな？」

完全に捉えていた。

今度は盾じゃなく、しっかりと剣で受け止める。

反応して、見切っている証拠だ。

蹴りを放つと消え、現れた場所からの攻撃を剣と盾で止め、再び消えていく。

そんな事を幾度か繰り返すと、相手も次第に疲労の表情を浮かべる。
オレを倒せない焦りもあるだろう。

だが、こうしている間にも事態は相手の有利に進行しているのは変わらず、その分オレよりは少ない。

だが、オレも手をこまねく理由は無い。

こんな事で、皆が頑張った事が、オレとトウマの生きた証が無くなるなんて嫌だ。

「こんな事で・・・オマエの復讐の為に・・・ディーンの決意が、
ディアナの悲しみが、ヴァンハイトの罪までもが壊されてたまるか
あっ！」

常に片刃の状態で鳴りつぱなしのディーンの剣が更に輝く。

柄部分の満月のような円が半月状に光っている。

本来の状態には程遠い力かも知れない。

でも、”オレ達の中のディーン”よ、もう少し力を貸してくれ。

「うおおおーッ！」

何度目かの突撃。

どうしても確認したい仮説があるんだ。

しかし本当、色んな種族、武器と戦ったなあ、オレ。

負けてないよな、オレの人生は。

刺突を瞬間移動でかわされ、死角に現れる地点に振り向きざまに身体を捻って剣を振る。

瞬間移動時は基本的に死角から攻撃しからないなんて、小心者の証だ。

だが、オレのその攻撃さえも回避され、相手の剣先が肩口に刺さる。

「フフツ。」

ようやく与えられた傷を見て、不敵に笑みがこぼれる。

だが、傷は全然浅い。

止めを刺したわけでもないのに笑う。

そんなのは三流以下、素人のやる事だ。

これはバルドの教え。

じゃないと……。

「ハッ！」

手痛いメに会う！

肩口に刺さった剣の柄元部分、一番切れ味が鈍いとされる所をぐつと掴み、反対側に持っていた剣を振る。

「ぐわあッ！」

肘の先を切り離し、剣ごと自分側に引き寄せて相手が悶絶している間に距離を空けた。

流石、神器。

もう少し強く握っていたら、籠手部分とはいえ冗談では済まない傷になっていたところだ。

「そうだ……オレの経験全てに無駄なんかない。」

「くっ……。」

肘の先を押さえて、奴は後ずさる。

あの傷に比べれば、オレの方が断然軽症か。

すぐさま肩口に刺さった剣を抜き、オレにとって余分な部分を振り落として、その剣を握りこむ。

「・・・ディアナ。」

祈り。

その後、気合いを籠めてその刃を振り下ろすと、剣の柄部分中央の円石に沿って左右に開き、そこに微かな光が燈る。

「なっ?!なんで、オマエなんかそれを!どうして使えんだよ!」

薄々、そうじゃないかなとは思って、仮説の証明を試みてみたんだが・・・。

セイブラムの杖を然程問題なく持てたし。

杖の大元はこの剣だしな。

瞳と髪の一部が金になった時に、確信の度合いは更に上がった。

だってそうだろ、”ヴァンハイトの皇族は蒼い瞳”なんだから。

けれど、トウマは黒い瞳のハズ。

だとしたら、この瞳は”オレ本来の色”って事になる。

オレとトウマの魂が闘ぎ合い、それによって覆い被された瞳と髪。

それがこの黒の正体。

そうだ。

きつとオレ達は”ディーン一族”の魂の形質を持ち、オレは更に

”ディアナの一族”の魂の形質も持ち合わせている。

途方も無く長い年月を費やして・・・だから・・・。

曾祖父のじいちゃんの馬鹿野郎!

オレは心の中で叫んだ。

黒の皇子と黒の姫。 (ダークエルフの女王視点)

もう・・・もう何十年前だったのやら・・・長く生きていると、時間の感覚があやふやで困る。

そのくせ、昔の事はやたらと鮮明に美化されて思い出せる。全く、年を取るのとは考え物だ・・・。

静か集落。

一族の者達は、ほとんどがアルムの騎士団と一緒に行ってしまったか。

「本当に罪作りな一族だよ。ヴァンハイトの黒の皇子は。」

あの時だって・・・。

『やあ。』

思えば痩せ我慢ばかりしておったな、あやつは。

そういう変な所ばかり似る。

最初に出会った時は、”生まれ変わり”とかいう人間の言葉を信じそうになったわ。

皇王としてのオマエでなく、一緒におった時のオマエとそっくりで・・・。

流石に笑顔と性格まで似るとは、血とは恐ろしいの。

『困ったもんだね、もうほとんど起きていられないんだ。』

「全く、自業自得じゃ。公務公務、今日はやれこつち、明日はそつちと。オマエは根無し草か。」

横たわる人間という短命種族。

それに比べ、ダークエルフという種族の寿命のなんと無駄に長い事か。

「第一、嫁さんと息子はどうする。」

『あはは、そうだね。それと君も。』

何処までもお人よしの奴じゃった。

「妻はわかってくれている。息子は私を恨むかも知れないが、あれは私よりも賢いからな。一つ・・・君にお願いがある。」

「オマエの願いなんぞ、ロクな事がない。」

「酷いなあ・・・。」

全く馬鹿者が・・・。

「ほら！さつさと言わんか！」

「これを・・・この”盾”を預かって欲しい。そして、何時か私と同じ黒髪・黒眼か、金髪・金眼でもいい。そして黒い剣を携えた者が来たら、私の代わりに渡して欲しい。」

黒い剣は、二人で一緒に見つけた剣だ。

自分には持つ事が出来ず、こののほほんとした間抜け面だけが持つ事が出来た。

最初はただただ癩だったが、それが神器、しかもこの男にとっては”呪われた剣”以外の何物でもないというのは、程なく判明する。

結局、それから狂ったように公務に打ち込み、今は寢床の上・・・。

「剣はどうした？」

「困ったコトに息子と私は”持つだけ”で精一杯でね。新しく造る城の地下に安置した。聞いて驚かないでくれよ？何と我が国の神器の台座にこっそり隠してみたんだ！」

馬鹿過ぎる。

何を子供のようにはしゃいでいるのやら。

「息子に頼めばよかろう？」

「少しでも危険や負担を減らしたい。幸い、秘密は息子と君しか知らない・・・から。」

「難儀だな。そのまま見て見ぬフリをするという手段もあつたらうに。」

総じて不器用だ、この一族は。

「自分が生まれたのは偶然だったのかも知れない。それでも沢山の人の人生を捻じ曲げてしまった。妻も息子も、息子の妻になるであろう人も・・・そして、まだ見ぬ”選ばれし皇子”にも。でも、捻

じ曲がつてしまったモノは何処かで正さないといけないんだ・・・
ごめんね。』

すまなさそうな微笑み。

こんな顔を何度もされたら、引き受けぬわけにはいかぬであろう？

『きつと怨まれるだろうね。』

「じゃな。」

『何度も辛い目に会い、絶望するかも知れない。』

「かもな。」

『蔑まれても、罵られてもいい。国を滅ぼす事になっても。でもね、信じてる。きつと私が、私達が残したモノで・・・それ以上の自分で手に入れたモノで、未来を切り開いてくれるって。』

「だろうな。オマエの子孫だからな。頑固で強くて不器用で・・・きつと優しいヤツじゃ・・・。」

『ありがとう・・・ごめんね。』

何故、礼と謝罪が同居するんじゃ、馬鹿者めっ！

『きつと幸せになってね、”アリアンジェ”』。

「ああ！言われなくてもオマエの何倍も生きて、何十倍も幸せになつてヤル！」

唐突に名前を呼ぶでない！

「ふんっ、根暗なオマエに一つ予言をくれてやるっ。」

『予言か、当たるものね。』

「ああ、いいか？よく聞けよ？”太陽は再び昇り、月は欠けてもまた満ちる”じゃ。」

『そっか・・・良かった、少しは安心したよ。』

「全く、心配性じゃ。」

『ごめんね。大好きだよ、”アリア”』

「また随分と昔の呼び方を・・・そんなに気に入ったか？」

初めて会った時、彼の黒い髪の新しさに見惚れた・・・ダークエルフの黒い肌と同じ、いやそれよりも美しかった。

『ああ・・・一緒に・・・ずっと一緒にいたかった。』

「オマエとずっと一緒にいたら、こっちが疲れる。そんなに気に入ったのなら、この名前、オマエにくれてヤル。他の者には違う呼び方をさせる!」

隣の・・・妃の席に座らせてもらっただけで満足だよ・・・。

『やった。呼び続けた甲斐があつたかな・・・ん・・・少し眠い・・・ちよつと休むよ。』

「ああああ、ゆつくり休め。」

『おやすみ・・・。』

「おやすみ、”エルリオット”いや・・・”エル”。」

それが最後の会話、最後のくちづけ。

でも、本当は予言には続きがあつた。

”太陽と月が重なりし時、終末は照らし出されん”

さて、全てを背負う事にした皇子よ。

妾は汝の選択に従おうぞ。

なんたつて、オマエは”愛しいエル”が全てを託す為に選んだ皇子だからな。

黒の皇子と黒の姫。

(ダークエルフの女王視点)

(後書き)

お婆様こと、アリアンジェが誰にも自分の名前を名乗らなかった理由はこれです。

彼女の名は、常にエルリオットと共に。

やっぱり、なんだかんだいって、ラミア達のお婆様ですよね(苦笑)

このロクでもない世界で。

「予言か……。」

元々、オレはそんなのは半信半疑というか、信じない方だ。以前にホリン達のお婆様にもそれは言った。

だが結果として、予言は完全には外れなかった。解釈によって、取り方も対応の仕方もまちまちだったけれど、でも、ヴァンハイトは皇王にはなれたけれど、世界を統べる事は出来なかった。

ただ、確かにヴァンハイトの皇子は今、双つ剣を持っている。今は皇太子の方の皇子ではなくて、第二皇子の方だが。祖皇だつて、こんな事態、予想だにできなかっただろう。

オレが聞いた予言の”太陽”と”月”だつて、この二つの剣の事かも知れないし、”オレ”と”トウマ”の事かも知れない。今なら、”デイン”と”ディアナ”の魂の事だったのかも知れないとも思う。

そんなの受け取った側の持っている情報によつてだつて、変わっていく。

たださ……。

「ドイツもコイツもそんな不確定なもんには踊らされやがって……。」

それよりも、自分の傍にいてくれる人達、目の前の現実の方を見るべきじゃないのか？

目の前の息巻いている相手を見る。

「オマエもオレも、何も知らなければ、何も持たなければ、もっと楽になれたのにな。」

事実を知つても、見て見ぬフリが出来ていれば、こんな事を背負おうと思わなければ、違ったかも……そう思うけれど、それ以上は意味がない。

考えたところで、今更変わるわけでもないから。

結局、”この世界はロクな世界じゃなかった”って事だ。

ロクでもないけれど、オレには大切な世界だ。

「さあ……。」

オレは誰ともなく呟き、そして先程と同じように突進する。

オレが選んだ道は結局、コレで。

アイツの選んだ道は、ソレだった。

オレの動きに痛み堪えて投げられた無数の短剣を見て、更に速度を上げる。

円盾を前面に構え剣で弾き落とす事はしない。

次に振るう左右の一撃ずつが最後だろうから。

甲高い金属音がして弾かれていく短剣、その内何本かが、身体に突き刺さる。

だが、痛みは一瞬で出血もしない。

【黎明の如き慈愛の光剣】

”ディアナの剣はその慈愛で傷すらも黎明の中に消し去る。”

「ヤアツ！」

左足の蹴りを相手の膝めがけて蹴り出す。

一瞬にして姿が掻き消え見失うも、それは”見る”という事においてだけだ。

気配はしっかりと追えている。

その気配の方向に身体を向けると、ヤツは剣を一振り握っていた。

武器を手取るのが目的だったらしい。

「死ネツ！」

怨嗟の声を上げ、姿を小刻み消しながら距離を詰めて来られると、距離感を見失いそうになる。

だが相手の剣は、今度はただの剣だ。

オレの真正面からの刺突。

・・・と、見えたのは一瞬だけで、その姿のまま姿を消して、左側から突っ込んで来る。

きつと、相手の真正面からブツかるということをした事がないんだろうな。

身体も心も。

突き出された剣の下から盾を滑り込ませ、身体を沈ませる。

そのまま下から相手の腕ごと上へと弾く。

上がった左腕。

ディアナの剣を上段から、さしたる力を籠めず振り下ろす。

オレに突きを繰り出していた剣と一緒に宙を舞う腕。

これで、もう相手は武器を持ってない。

詰んだ。

「バアーカ、燃えちゃえっ！」

チリツという音がした後、剣を振り下ろしたオレの脇の辺りで、

熱く光る球体が！

「チイツ！」

その火球は、一瞬でオレの頭部より大きく膨張する。

術使いであるヤツには、これくらいの芸当は造作も無いという事か。

そうだよな・・・空間に干渉出来るんだもんな。

肉薄したこの状況じゃ、回避しても間に合わない。

互いにただでは済まないだろう。

ただ大事な事を忘れてる。

【宵闇の如き無慈悲な黒剣】

” デイーンの剣はソレすらも宵闇の彼方に消し去る ”

「アアアアアーツ！」

今までに出した事のない咆哮を発しながら、渾身の力を籠めて火

球ごと奴の胴を逆袈裟に薙ぎ払った。

盛大に飛び散る鮮血。

そして、その後にとちゃりという音。

オレの足元に赤い池が広がってゆく。

即座に命を絶つ一撃ではなかったが、間違いなく致命傷だ。

そう確信してオレは息を整える。

身体は剣の能力もあってか、大した傷を負っていないから、体力的には何ともない。

だが気力・精神力はかなり消耗している。

・・・神器二本の同時発動とか前代未聞だもんな。

そういう意味で、もうそんなに動きたくないというか、動けない。

ふと、オレの足元でうつ伏せになっている人間を見る。

「結局、オレもオマエも器用には生きられなかったってコトだな。」

我ながら呆れ果てるしかない。

だって、オレは殺し合いをしている相手の名前すら知らないんだから。

知ったら、決心が鈍りそうだったからというのも、お粗末な話だけれど。

「さて・・・。」

オレはずっと気にしないように、視界に入れないように努めていた、”ソコ”を見る。

拳大くらいから成長を始めた穴。

それが今や、一人が入れるくらいの大きさになっていて、そして”更に成長を続けて”いた。

さりとて愛すべきこの世界に。(前書き)

本編のみの通算話数が200話に到達しました。
これもひとえに、読んでくださる皆様のお陰です。

さりとて愛すべきこの世界に。

「穴が塞がらない・・・か。」

収束する気配すらない。

まあ・・・そうだろうな。

だったら、魔人を殺した時点で、穴は塞がったハズだ。

”あの時も”

「ボクの勝ちだよ。こんな間違いだらけの世界なんて、滅んじゃえ・・・。」

きつとこのままコイツの命が尽きても、穴が広がっていく事態に変化はないだろう。

「オイ、クソガキ。こんなのはな、想定内なんだよ。」

オレは得意げに微笑んでいる子供に笑いかける。

そう、こんなのは子供の我が侷な悪戯だ。

「いつかな、オマエみたいなクソガキが、こういう悪戯をすることを思ってたんだよ。」

「なにを・・・。」

「全く、予言なんてクソくらえだ。運命？復讐？くだらねえの。」

そんなモノの為に、人が振り回されて、泣いて、死んで、それで何が生まれるっていうんだ？

誰か今すぐ答えを出して、導いてみるっていうんだ。

「世界はそう簡単には壊れれない、壊させない。戦たたかだつて、きつと誰かが止めようとしている。きつとおかしいって気づいてる。」

オレが出会った人達はそうだった。

「ああ、オマエに感謝したい事があるな。」

オレは憎々しげにオレを睨んでいるヤツに向かって、更に笑い続ける。

「”平和の大切さ”に気づかせてくれて、ありがとうよ。それと”あの時のやり直し”をさせてくれる事もな。」

右手のディーンの剣は、今や完全に発動している。
今のオレにはそれが解る。

満月型をした銀色の光が柄の中央に満ちて、そこから溢れ出るように刃の真ん中に流れるように一本走っている。

左手にある剣もだ。

こっちは太陽の如き、金の光だが。

もうオレに予言なんて必要ない。

でも……。

オレは今迄の事を思い出す。

オレの命を繋ぎとめてくれたトウマ。

オレの空っぽになりかけていた心に詰まってくれた皆。

オレの真実を、やり直す機会をくれた剣。

「あはは……。」

なんだろう、笑いが自然とこみ上げてくる。

そうだな、楽しいし、幸せだし、何よりオレが皆を護れるんだ。
自己満足だっといういさ。

確かにオレは、この世界に存在していたんだ！

「先に逝って待ってな。オレがこの穴をどうやって塞いだか、アトで教えてやる。」

「いいだろう。」 双つ剣携えし者、世界を統べる王とならん。

「……みんな、またね。」

オレは何の躊躇いも無く、次元の穴に飛び込んだ。

オレがオレだけが知っている、ディーンに教えて貰った方法。上も下も右も左も判らない空間の中。

いや、空間として定義できるかわからない黒。

黒一色の世界で。

オレは一瞬で自分を見失うところだった。

三次元の縦と横だけだった時間軸が、三本、四本と増えていつてるせい。

そんなよくわからない、全く知らない知識がオレの脳裏に浮上する。だが、たとえオレが自分を見失うような事があっても、トウマがオレの中にはいる。

手には、ディーンが、ディアナがいる。

それだけじゃない。

オレの中には、オレが自分の意思で歩んで、出逢った人達がいる。だから、オレはオレでいられる。

「ッ！ ざけんなアッ！！！」

必死に叫ぶ。

そうじゃないと、世界は護れない。

「世界は・・・オレが統べてやらあッ！だからッ！！」

あとの事は何一つ、覚えていない・・・。

皆の世界を・・・タダ、タダ、マモリタイ。

黒一色の世界　と　白一色の世界。

それだけがオレの世界の全て・・・。

たりとて愛すへきこの世界に。(後書き)

ここまで長い間の「愛読ありがとうございます」でした。
さあ！ 次が最終話です！

ブローグ 〈Happy Birthday〉

身体中の感覚がない。

剣を……。

あれだけ力強く握り締めていた剣の感触もない。

瞼も開かない。

声は……。

「……………あ。」

喉もひりついて、言葉を出すのが辛い。

オレはどうなったんだろう？

人の……気配？

「気がついた？」

オレの声じゃない。

誰もいないハズの空間に？

「……………」

なんとか、うっすらだけど片方の瞼だけを開く。

天井？

見た事もない、見知らぬ天井。

「気づいたのね、漂流者さん。」

長い藍色の髪的女性。

というか、漂流者？

「浜辺に倒れてたのよ？名前も判らなかつたから、漂流者さんて呼んでたの。今、お水持つてくるから。」

そう言つと、”白いワンピース”の裾を翻す。

白い・・・ワンピース？

波音が聞こえる。

海が近いのか？

白く泡立つ波の・・・。

ふと、開いた片方の瞼から、涙が一筋流れ落ちていく。

感覚の抜けている重い身体の中で、ようやく首だけを横に向けた才
レの視界に、一枚の写真が。

少し幼い先程の女性と・・・。

「・・・あ・・・ただいま、姉・・・さん。」

オレは。

オレの中の魂がそう呟いて、また深い眠りについた。

T o t h e n e x t P r i n c e

ブログ ～Happy Birthday.～ (後書き)

To the next Prince

ここまでのご愛読ありがとうございました。

この後も楽しみに。

後書きという名の反省会。

お疲れ様でした。

本当、最後までお読み下さってありがとうございます。

(そういう前提で書いてます。)

タイトルの皇子”達”の意味を解っていただけたでしょうか？(苦笑)

まず、一番最初に謝らなきゃいけないコト、それはタグのハッピーエンドに関してですね。

確かに主要キャラは死んでませんが、どうでしょうねえ……。

ハッピーエンドとは少し言いづらいですね。

ある意味では、アルムは皇子でもなく、ヴァンハイトや神器も無い、それこそ自由な場所へ行けたワケですが……。

ともかく、アルム皇子の物語は、ここで”一旦”終わります。一旦です。

だって、アルムくんの人生は、これで終わりではないですから。トウマとの約束もありますしね。

その証拠に本編では何処にも「Fin」とか「完」だの「END」だのの類いは書いてません。

To the next Prince です。

ちよつとしたシリーズ化みたいなクサさと文句ですねえ。(本気が?)

今回の作品は、私自身初投稿で、勝手がわからず当初全30話程度。

(:アルムがリッヒニドスを解放する辺り迄。)

お気に入り目標50、総合評価も100ptで万々歳のつもりで、いつでも打ち切り覚悟で始めました。

結果はこの通りです。

設定上、トウマに語りかけているので一人称強制。

英語・和製英語は使えない、慣用句や故事成語はこの世界にはなく、トウマの世界の言語。

だから、本編ではトウマの記憶との混濁まで使えないというジレンマの中、悶絶しながら書きました。（洋服の描写とか死ねた。）

下書きもルーズリーフ300枚を越えてしまいました。

・・・まあ、300枚越えても、あの程度なんです。

後半、全然書き込みが足りないなど、自分の技量に何度ノックダウンされたことか。

気づけばPVも75万辺り、総合評価も四桁に届く勢いになってました。

本当に驚きと感謝で一杯です。

さて、皇子の物語は彼の人生ですから、まだ続きますと述べましたが、

彼の物語は、皇子一人称、自身だけの視点で成り立ってはいないし、完結できるものでもありません。

そう考えていくうちに、皆様に飽きられずに、かつ新規の方でも読めるカタチとして、

ちよつとしたオマケ話というか、別視点とかも考えているところで

す。
相変わらずベタでご都合主義のお話を書き殴るつもりですが・・・いや色々と能力の限界が低い私ですが、

一人でもお気に入り登録してくださる方がいらして下さる限りは、書いていきたいと思えます。

勿論、完結させるまでという意味も含めて。

ですから、見捨てず引き続きのご愛読の程、宜しくお願い致します。それと・・・出来ればお気に入りはそのままで・・・いてくださる

と嬉しいなあ」と（苦笑）

【花束と笑顔を皇子達へ。】 作者 はついで 拝。

新シリーズ予告！（仮）

『双子座の神話を知っているかい？』

運命という名のイタズラに分かたれた、哀れで愚かな兄弟の話。

兄の名をカストル 弟の名をポルックス

片や神、至高の肉体、永久とわの生命
この世の全てを手に入れた存在

片や人、凡なる肉体、限りある生命
初めから何も手にする事は出来なかった存在

「結局、探し続けたんだと思うなあ・・・。」
二人がただ兄弟としてだけ生きられる場所を
樂園なんてあるワケないと知っていたのに。
そんなモノはまやかしに過ぎないっていうのに・・・。
だから、俺はソレを探しに行く
この世界を捨てて、大切な弟の為に。

「結局、解っていたんだと思う・・・。」
二人がただ兄弟としてなんて生きられないと

世界には受け入れられない事なんて沢山あるのに
違う存在であるという事は絶対の真実なのに・・・。
だから、ボクはソコで在り続ける
この世界を生きる、大切な兄の為に。

世界は美しくもないけれど、捨てたものでもない。
そんな双子きょうだいのお話

- 私の皇子様シリーズ -

【皇子様に祝福の鐘を！（仮題）】 【皇子様の課題をア
ンストール（仮題）】

今度の皇子様は誰だ？！

新シリーズ予告！（仮）（後書き）

と、まあ・・・花束の反響次第なんですけれどね・・・。（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1218q/>

花束と笑顔を皇子達に。

2011年9月30日06時50分発行